

ファイアーエムブレムif ～Darkside～ 【本編完結】

コッコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗夜王国。その国は謀略を巡らし他国を侵略する侵略国家であり名前通り国は常に暗い闇に包まれている。

そんな暗夜王国には国を治める暗夜王ガロンの懐刀として一人の経歴や顔も分からない騎士がいた。

兜で隠れた素顔はガロン以外に誰も知らずただ、知っているのはその騎士は誰よりも冷酷かつ残忍な人物であると言う事である。

だが、周りの者はその冷酷過ぎる騎士としか見ない為に騎士の優しさを知らずに騎士を孤独にさせ続ける。

目次

予告

予告（嘘）番外編：F E i f × ゲート自衛隊 | 1

次回作（予定）予告編：ファイアーエムブレム覚醒〜イーリスの鉄

血宰相 | 3

番外編

特別番外編 100話突破記念パーティー | 6

コラボ企画番外編：懐刀と鴉頭 | 12

ハロウィン企画：ハロウィンの祭 | 17

大晦日番外編：夫婦喧嘩 | 19

i f 番外編：もしも、ラクスが白夜に向かったら……前編 | 24

i f 番外編：もしも、ラクスが白夜に向かったら……中編 | 29

i f 番外編：もしも、ラクスが白夜に向かったら……後編 | 36

i f 番外編：もしも、カムイとラクスが政略結婚をさせられたら | 45

バレンタインデー企画番外編：夫婦の馴れ初め | 54

i f 番外編：もしも、親世代で戦争が終結しなかったら……前 | 57

i f 番外編：もしも、親世代で戦争が終結しなかったら……中 | 65

i f 番外編：もしも、親世代で戦争が終結しなかったら……後 | 75

編 |

コラボ企画番外編2：二人の狂人	83
一周年記念番外編：因果	87
if 番外編：もしも、ラクスがベルカ以外の別の仲間と結婚していたら・・・【ピエリ編 カムイ・白夜ルート】	89
if 番外編：もしも、ラクスが女性だったら・・・前編	94
if 番外編：もしも、ラクスが女性だったら・・・後編	101
過去番外編：暗夜の懐刀～前編	111
過去番外編：暗夜の懐刀～中編	115
過去番外編：暗夜の懐刀～後編	120
コラボ企画番外編3：ヤンデレは好き？	124
if 番外編：もしも、ラクスが騎士ではなく現役の暗殺者だったら・・・序章	132
if 番外編：もしも、ラクスが騎士ではなく現役の暗殺者だったら・・・カムイ・白夜ルート	137
プロローグ	
暗夜王の懐刀	144
安らぎ	146
カムイ	148
カムイの実力	151
幼馴染み	154
相談	157
偵察任務と陰謀～前編	160
偵察任務と陰謀～中編	164

偵察任務と陰謀〜後編〜

悲しみと戦争

運命の決断へ

決断の時

白夜ルート編

光から遠ざかる者

修羅の道

略奪者

風の部族

イズモ公国

楽園の戦い〜前編〜

楽園の戦い〜後編〜

里帰り

壊される平穏

シュヴァリエ市場

狂気を纏いし騎士

敗北

悪化する戦況

暗夜王の懐刀ラクス

希望の光

暗夜ルート編

光を闇に求める者

カムイの試練

暗躍

盗賊襲来

249 245 240 236 232 228 225 222 218 214 212 208 206 202 198 193 189 186 181 179 175 171 169

氷の部族	252
手合わせ	256
再びの試練	260
カムイと共に	263
黒竜砦の戦い	265
望まぬ再開〜前編〜	269
望まぬ再開〜後編〜	273
ノートルディア公国、到着	275
七重の搭〜前編〜	277
七重の搭〜中編〜	279
七重の搭〜後編〜	282
虹の賢者	284
嘆き	288
交流	290
過去	293
殺し屋の弟子	297
暗夜王との出会い	301
昏き企み	305
安静	310
秘めた想い	312
反乱鎮圧〜前編〜	314
反乱鎮圧〜後編〜	318
父と子	322
ミューズ公国	326
楽園の歌声	331

夜刀神・長夜	335
友達	339
白夜進攻	342
処遇	348
裏切りの魔窟〜前編〜	352
裏切りの魔窟〜後編〜	357
描く未来	361
イズモ公国	363
黒白の王子	369
宴	374
妖狐の山	379
密猟者狩り	383
番外編 肝試し	387
風の部族	398
風の村の覇者〜前編〜	401
風の村の覇者〜後編〜	405
白夜王スメラギ暗殺	408
王女カムイ	412
黄泉の階段	416
テンジン砦の戦い〜前編〜	419
テンジン砦の戦い〜後編〜	423
狂気の騎士	426
奇襲戦	432
死神の行軍	437
白夜王女ヒノカ	439

七重の塔の試練〜後編〜	516
七重の塔の試練〜前編〜	513
求める物の道程	510
懐刀	508
温泉	505
捕虜	502
裏切り〜後編〜	499
裏切り〜前編〜	496
刺客	493
頼み	490
イズモ公国	486
遭遇戦	484
騎士と第二王女	481
一時帰還	479
進攻	476
決別	474
道を探る者	471
透魔ルート編	
時代の流れと歴史	467
タクミの異変	463
真実	458
悪逆の果てに	454
反乱	450
密約	447
企て	444

虹の賢者	519
意外な一面	523
ラクスの一日	525
無限渓谷の戦い〜前編〜	529
無限渓谷の戦い〜中編〜	532
無限渓谷の戦い〜後編〜	535
更なる驚異	538
暗夜王ガロン	540
絆	543
番外編：BadEND 敗北と狂愛	546
深淵の罟	549
突破戦	552
悪夢と懺悔	555
番外編：Badend その罪と共に	557
密かな悩み	565
取り合い	567
溺れた告白	570
正反対の親子	576
師と弟子	584
師弟対決	588
対決の決着	592
伝わる真実・・・	594
腹黒の軍師の子	596
狂気の影	606
真を求めて・・・	609

透魔の遺跡	613
闇の司祭	616
守護者	621
過去	624
謎は繋がる	628
狂気の中へ……	633
狂気の屋敷	636
ラクスの血道	640
影を断つ	643
日常番外編：レーラの想い人	649
星竜の神殿	654
最初の戦い	658
激闘	661
償い	664
暗黒司祭の双竜	668
透魔竜ハイドラ&暗黒司祭マフー	671
↳前編	
透魔竜ハイドラ&暗黒司祭マフー	674
↳後編	
受け継がれし血	677
外伝 白夜ifルート編	
光に導かれ	680

予告

予告（嘘） 番外編：F E i f X ゲート自衛隊

暗夜王国。

その国は常に夜の世界であり、暗闇しか存在しない為に作物が育たず荒れ地が広がっている・・・が。

今は戦争が終わり、本当の敵を倒した暗夜と元敵国である白夜と結び共に歩む道を進んでいた。

ラクスは平和な時代になろうと忙しきは変わらずに政務に没頭する毎日を送っていた時、一つの事件がラクスの元に届く。

「行方不明者が数名・・・この王都誘拐の類いであつたら舐められた物だ・・・」

ラクスは調査に乗り出す様に命令書を作成し始めた時、王都の外で異変が起こった。

「ラクス様！敵襲でございます！」

「何だど!?敵?もしや、白夜か!」

「正体は不明!見た事もない武装である事から白夜ではななく、別の勢力かと!」

「・・・迎撃だ!マークス様にも知らせろ!軍を速やかに集め、敵を追い返す!」

王都の城壁では謎の勢力による攻撃的が始まっていた。

城壁に立つ暗夜軍は元々は戦争の為にかき集められていた者達だが、ある程度落ち着いて故郷に帰る前にこの事態に遭遇した。

彼らは戦い慣れた動きでラクスの指揮の下、巧みに城壁を攻める謎の勢力を潰し続ける。

「敵を蹴散らせ!ドラゴンナイトの部隊には弓で対処しろ!決して王都の街に入れるな!」

ラクスはノスフェラトウの残党討伐に向かっていたカミラやレオンの帰還と同時に反撃、見事撃退に成功する。

そして、この事態は白夜やカムイの治める透魔にすら進攻を仕掛け

ていたのだ。

三国は再び集まり謎の勢力に対しての対処について話し合う。

「・・・開戦です。もはや、避けたくとも避けられる案件ではありません」

ラクスは開戦論を唱えカムイを筆頭とした王族達を説得し、謎の勢力・・・帝国との戦争に突入する事になった。

幾度もの戦闘の末、ラクスは周辺地理を知る為に偵察隊を編成し、周辺に送り込んだ。

その中には自身の娘のレーラもいる。

「頼むから無茶をするな？危険だと判断したら逃げるんだぞ？」

「父さん。そんなに心配しなくても・・・」

ラクスが偵察隊を送り込んで三日、野営地に奇妙な乗り物が来るのを聞いたラクスはその場に出て対応する。

その奇妙な乗り物の持ち主達は日本と呼ばれる国の自衛隊と呼ばれる軍の様な組織に属する者達で、レーラも送って来たのだ。

「すまない、娘達が世話になった」

「いえいえ、それが仕事ですから」

「(日本、か・・・白夜と同じ言葉と言う事は似たような文化か)」

異世界で出会う異世界の国家。

何とも言えない奇妙な出会いにラクスは少し笑ってしまった。

後にそれが暗夜、白夜、透魔と日本の出会いであった。

次回作（予定） 予告編：ファイアーエムブレム覚醒く イーリスの鉄血宰相く

暗夜王国、白夜王国そして透魔王国による三国時代。

三国によつて大陸は栄え、平和を謳歌していたが突如として三国が滅び、英雄の血を受け継いだ子孫達は逃走を余儀なくされた。

その子孫の中に、二振りの神器の剣を腰に差して走っていた者がおり、必死に走る中、後ろを見るとそこには巨大な竜がまるで嘲笑うかの様に雄叫びを挙げていた。

三国時代から時は流れ、イーリス大陸にあるイーリス聖王国では現聖王エメリナとその軍師メリラが政策の方針を決める会議の場で論争状態にあった。

「エメリナ様。貴方は隣国ペレジアがただでさえ怪しい動きを見せていると言うのに軍縮とは正気ですか？」

「私は正気です。確かにペレジアの動きは怪しいです……ですが、争う事を選ばず話し合えば」

「ペレジアのイーリスに対する恨みは根強いのですよ？話し合うとしても奴等が真面目に聞くとお思えませんし、何より軍縮によつて国の治安すら危なくなります」

「ですが平和を壊してまで戦う姿勢を見せても治安は悪化します。争つて国を疲弊させるよりも話し合い、互いに争う道を選ばない様にと私は考えています」

「……馬鹿げてる」

メリラはそう言つて席を立ち上がつて会議の場から早足で立ち去った。

メリラは機嫌悪く城内を歩いていると、イーリス自警団を束ね治安維持を行っているイーリスの第一王子クロムと第二王女リスそして

騎士でクロム達のお目付け役のフレデリクがやって来た。

「クロム様、リズ様」

「メリラか。さつき、盗賊の討伐から帰還して来たんだが姉さんは何処にいる?」

「エメリナ様は会議の最中です。会議が終わるまでは報告は遠慮してください。では・・・」

メリラはそう言って立ち去ると、後ろから来る視線は冷たかった。

メリラは軍師としたは優秀だが、クロムを筆頭としたエメリナを慕う者達には主戦派と取られ良く思われてはおらず、常に冷たい視線や不遇な扱いを受けてきた。

それでも君主であるエメリナへの忠誠心は消えず、イーリスが滅ぶような道避けて通ろうとする心はあつたが、それでもエメリナに仕える事に限界が間近に迫っており、いつそ、軍師を止めてしまおうかと思う程に追い詰められていた。

そこで、メリラの運命を大きく変える切っ掛けが突如、現れた。

数日後、メリラが執務室で政策に関する書類をテキパキと片付けていた時、上から大きな影が二つ落ちてきたのだ。

メリラは啞然としていると、その影の一人である全身鎧兜で武装した騎士がメリラを見る。

「此処は、何処だ・・・?」

「イーリス王城の・・・私の執務室ですが・・・?」

メリラはまだ啞然としていると、騎士は考え込み始めたと思いきや何かを思い出したかの様に辺りを見渡すと、もう一人の影である鎧を着て頭に黒いバンダナを巻いた女性が横たわっていた。

「ベルカ!」

騎士はそう言って女性ベルカを抱き上げ、一人状況の飲み込めていないメリラはベルカと言う名前に反応した。

「ベルカ?ベルカ・・・まさか・・・!」

メリラはそう言って執務室の本棚から名前が書かれた古い書物を取り出すと一気に捲ってあるページで止まった。

「間違いない・・・でも、まさか・・・」

「おい、お前……一体、我々に何をした？ 場合によっては命は無いぞ……！」

騎士はまだ気を失っているベルカを床に寝かせて剣を抜いていた。

その剣は今、メリラが腰に差してある剣の一つに似ていたが故にいい、剣の名前を口にした。

「神剣……ディアブロス……！」

その剣の名を言ったメリラに騎士は驚いたのか鎧の独特の音を少し出して反応した。

「何故、その名を？」

「……質問に答える前に、一つだけ聞いても良いですか？」

「何だ？」

「貴方の、名前は？」

メリラの質問に騎士は不思議そうにしつつもメリラの質問に答えた。

「私の名はラクス。暗夜王国に仕えし騎士だ」

メリラは確信した、その名前は先祖の名簿の最初の辺りにラクスとベルカの名前が書かれていた。

メリラの二振りの神剣を受け継ぐ騎士一族の元祖となるラクスとベルカの最初の出会いとなり、運命を大きく覆すきっかけになるとは、メリラにはまだ分からなかった。

番外編

特別番外編 100話突破記念パーティー

マイキャツスルでカムイがいつも通り見回りをしていると、空から一枚の手紙が落ちてきた。

カムイは不思議に思いながら手紙を取って宛先を見ると。

くカムイ一向様へく

と、書かれていた。

「私宛・・・では、ありませんね。一向と言う事はこれは全員にと言う事でしょうか？」

「どうしましたカムイ様？」

「あ！ラクスさん！これが空から落ちてきて」

ラクスはカムイから手紙を受け取ると、ラクスは手紙を調べて見る。

何の変哲も無い手紙で、危険な仕掛けは無かった。

「・・・念の為に開けても？」

「は、はい・・・」

ラクスは手紙を開けると、何も無く手紙を取り出した。

ラクスはそれも確認すると内容を確認し、声に出して読む。

本日、小説100話突破記念パーティーを開催致します。

カムイ様一向だけでなく、小説に登場する主要人物達もご招待しております。

是非、御来場ください。

尚、会場は星界にあるのでリリスに頼んで来てくださいます。

くコッコよりく

「ラクス！パーティーですよ！」

「まさか、あの誤文字作者が開催するとはな・・・」

ラクスはそう言いながらも満更でもない様子である。

カムイは満面の笑みでラクスに言う。

「行きましょー！皆さんを連れてパーティーへ行きましょー！」

「やれやれ・・・まあ、たまには息抜きも良いか」

ラクスは微笑みながらカムイに言うと、カムイも笑う。

「じゃあ、皆さんにも伝えて来ますね！」

ラクスは手を振りながらカムイを見送ると、ラクスも自分の家族に知らせに行く。

リリースによって会場となる場所にやって来ると、そこは暗夜も白夜も他国も関係なく酒盛りしていた。

カムイは賑やかなパーティー会場に目を輝かせて見ていた。

「すごく賑やかですね！」

「ええ。本当に賑やかね」

「カムイ一向方。待ってたよ」

「え？」

カムイは声の掛けられた方を見ると、そこには鶏頭の男が立っている。

異様なその姿にカムイも啞然とする。

「あ、あの・・・作者さんですか？」

「はい。そうですよ？」

「何で鶏何ですか・・・？」

「ああ、頭の事ですね。これは被り物ですよ。作者名がコッコ・・・鶏が鳴くような声を名前にしてるのでこうなんですよコケー！」

この作品の作者であり主催者のコッコが奇妙なポーズをとって言う。

カムイ達は愕然とすると、コッコは体勢を戻し咳払いすると、案内する。

「・・・どうぞ御上がりください（すべったー！！）」

「ははは・・・では、失礼します」

カムイ達は席を案内されると、コッコが豊富なお酒を持ってきた。プルケ、テキーラ、いいちこ、キンキンに冷えたビールと持ってきた。

「さあ、飲んで飲んで！これは読者のエーブリス様が送ってくださいっ
たお酒だよ！あ、サクラとエリーゼはジュースね」

「えー！私も飲めるもん！」

「ふふ、エリーゼ。貴方には少し早いわ」

エリーゼがジュースと言われ拗ねると、カミラが微笑みながらなだめる。

「ほお、色々もあるな・・・」

「ふむ、白夜の酒もあるが暗夜の酒も捨てがたいな」

マークスとリヨウマがそう言うのと、マークスはいいちこ、リヨウマはビールを一口飲む。

「旨いな」

「このビール・・・これは喉が乾いている時は本当に美味しいぞ」

「全く飲みすぎないでよ兄さん達・・・」

「お酒美味しいです」

「カムイ姉さん!？」

レオンがマークスとリヨウマに注意したと同時にカムイが軽く酔っている。

カムイは顔を赤くしながらテキーラを飲む。

「はあ、全く・・・お酒に弱いなら無理しなければ良いのに・・・」

ラクスがそう言つてプルケを飲んでしまった。

もう一度言います、飲んでしまった。

この小説を読んでくださる皆様方なら既にご存じの通り、ラクスは酒にかなり弱い。

「ん？ラクス！まさか酒を飲んだのか!？」

「・・・」

「まずい！全員ラクスから離れろ！」

マークスとリヨウマがそう叫ぶと同時に、ラクスは酒瓶を片手に一気飲みをし始めた。

「ぷはあ！おい！もつと酒をもつて来いやあ!!」

「しまった・・・酔ってしまった・・・」

「はははは！良いですよもつと飲んでみてくださーい!」

「カムイ姉さん!？」

ラクスだけでも手一杯な所でカムイが煽り始め、ラクスがまた一気飲みを始めた。

「不味いわね・・・誰かベルカを呼んで頂戴!」

「あの、カミラ様・・・ベルカは今あつちに・・・」

ルーナが指差す方向にはガロン、スメラギ、ミコト、シエンメイが酔って何故かベルカに纏まり着いている。

カミラはこれには啞然すると同時に、切り札がまさかの伏兵に押さえられていると頭を抱えた。

「まさかお父様が・・・」

「父上・・・母上・・・」

「・・・」

これには白夜、暗夜の兄妹とアクアは呆れ果てていると、何かの酒がアクアの顔にかかった。

「大丈夫かアクア!？」

「・・・アクア?」

「もつと、お酒に持つてきなさい!!!」

「!!!」「ええええええええええ!!!」「!!!」

予想外の増援に一同は叫び声を一斉に出した。

アクアは酔うと、松ノ木を何処から取り出したのか振り回し始めたが、アクアは誤って松ノ木を投げてしまった。

「よせえ！ラクスより酷いぞ!!」

「ん？何なのですか？騒々しい・・・」

「どっかで騒いでぐほおッ!」

偶然に着地点にいたガンズが松ノ木に直撃し、気を失い。

それを見たマクベスは黙って酒を飲み直す。

会場は大混乱となり、ラクス、アクア、カムイを中心とした酒乱組に一掃されまくる。

「不味いぞ・・・まさかここまで酷くなるとは！」

「こちらも全力を挙げて止めるしかないのか・・・」

リヨウマとマークスが全力を出しかけた時、酒乱組がいきなり気を失う様に倒れた。

一同は何が起こったのか分からず、唾然としているとコッコが本と羽ペンを持って現れた。

「いやあく。書いてたらやり過ぎたよ」

「作者・・・！」

「まあ、一樣気絶しているだけだから大丈夫だよ。トラブルは自分が作ったけど皆、良い笑顔だね！」

コッコはそう言うのと、気絶した皆の顔を見て笑う。

気絶している者達は笑顔で楽しそうだった。

「どうしますか？第二ラウンド行っちゃう？（・・・）」

「いや、良い・・・俺達も飲みすぎたしな」

「いやあくそうか・・・まあ、一回だけの記念パーティーじゃないしまった開かれるよ。その時にまた会おう！」

コッコはそう言うのと、煙を挙げて消えた。

「作者か・・・何とも不思議な人物だな」

「ああ・・・さて、気を失った者を担いで俺達の子供を迎えに行くか」
子世代組は別室で楽しんでおり、一同は気を失った者達を担いで行くのと、子世代が見事に酔っていた。

子世代組はジュースである筈なのにだ。

中でも、レーラがジークベルトに抱きついて離れず、シノノメがジークベルトに恐ろしい形相で睨んでいるのは後々分かるとして、一同は唾然としていると、一枚の紙が落ちてきた。

ごめん！

間違って子世代にお酒飲ませちゃった（＾＾；）ゞ

くコッコよりく

「「「「「やくしやああああ!!」「」」」」」

た。一同は作者であるコッコを叫ぶが、既にコッコは逃走済みであつた。

コラボ企画番外編：懐刀と鴉頭

くある場所く

ラクスは仲間達と旅をしていた時、急に霧が深くなり視界が全く見えず道も見失って完全に迷ってしまった。

「ふむ……ここまで霧が深くなる場所だったのか此所は？」

「分かりません……ですが、道に迷ってしまったのはたのは困りましたね……」

ラクスは霧の先を何とか見ようとするが、無駄に終わった。

暫く歩き続けていると、霧が徐々に晴れていき道が見えて来る。

「ラクスさん。道が見えますよー！」

「よし、これなら何とかなるだろう」

カムイ達は晴れた霧の道を進んで行くと、霧が途端に晴れて回りの全容が分かった。

そこは広い平原で所々に川や丘や木があるだけの場所だった。

「何だ此所は？目的地とだいぶかけ離れた所だな？」

「何処かで道を間違えたのでしょうか？」

ラクスはこの状況を考えていると、向こうから誰かがやって来る気配を感じ、警戒しつつも人ならば道を聞こうと考えていた。

「参ったな……まさか道に迷うなんてな」

「まあ、あの霧だったからね。迷うのも無理はないよ」

どうやら人の様で、同じく霧で迷ってしまったらしかった。

カムイは協力しあおうと考え近づいた時、カムイは困惑する事になる。

「え……私？」

「え……僕？」

そこにはカムイと同じ服装で髪型以外は顔がそっくりな青年がおり、その隣には体格に似合わない黒鉄の大剣を持った変わった服装をした青年がいる。

「何だ……貴様達は？」

「それは此方の台詞だろ……何で異界のマイキャツスルでもないの

にカム子がいるんだ？」

ラクス達には最後の言葉は聞こえなかったが大剣を持つ青年がそう言うと、ラクスはあからさまに警戒する。

大剣を持つ青年の異様な雰囲気を感じ、ラクスは何時でもディアブロスを抜ける様にしておく、

一方、青年ことマーシレスは困惑していた。

カムイの女版のカム子が目の前におり、原作には存在しなかった人物がいた。

その人物は上級騎士の様な黒い兜を身に付けパラディンの鎧を着けている姿は異様であり、明らかに強い力を持っているのをマーシレスは感じた。

互いに警戒している時、二人のカムイは呑気に互いを見て感想を言っている。

「貴方も名前がカムイなのですね？」

「君もなのかい？・・・僕がもしも女だったらこんな風なのかな・・・？」

「何やってんだ。この二人は・・・」

マーシレスとラクスは互いにそう呟くと、取り合えず警戒を解いた。

互いのカムイが敵対しないなら互いに争う必要はない。

そう二人は判断する事にした・・・だが、ここで予想外の事が起こる。

「カムイ。どうし・・・た・・・？」

「此所にいたかカム・・・イ・・・これはどんな状況だ？」

互いのリヨウマがやって来て、この状況に困惑し次々と他の仲間もやって来て互いに自分を見る。

「すごいの！ピエリが二人いるの！」

「これは写し身と言う訳ではないようですね・・・」

「その様ですね・・・」

「ふむ・・・私が目の前にいるとは奇妙な物だ」

「そうだな・・・」

互いに感想を言い合っている両者だが、予想外なのは此所ではない。

マーシレスとラクス。

この二人が愛してやまない人物がやって来たのだ。

「ラクス。この状況はなに？」

「マーシレス。何なのこれ？」

二人の妻であるベルカがやって来たのだ。

互いにベルカを見て、自分の妻のベルカを見ると再び睨み合いになった。

「おい、異世界の住民かもしれないがよ……俺の妻に何、手を出してやがんだ！」

「それは此方の台詞だ……私の妻と同じ姿をした女性だとしても。ベルカだけは似るのは許さん！」

「(面倒な事になったわ……)」

二人の溺愛夫の行動に呆れながら面倒な事になったと二人のベルカは思うと、次に娘までやって来た。

「父さん？……何してるの？何で母さんが二人もいるの？情報が入りきらないんだけど……？」

「何してるのよ父さん。え、何なのよこれ……」

互いに母親の髪色を受け継いぎ、互いに容姿や服装は違えど一目でベルカの娘と分かる。

二人の娘は互いに見てからベルカを見ると、自分の父親の方へ向いた。

「ねえ、この子は父さんの隠し子？」

「違うわ(ぞ)！」

二人の娘の発言で喧嘩は更にヒートアップしていき、今にも掴み合いになりそうになっている。

「どうしようか、私？」

「……放っておきましょう。その内、やめるわ」

二人のベルカは放っておくことにして、近くの木に座り込む。

端から見ると二人のベルカはまるで双子のようで、見分けがつかない。

い。

それでも、二人のベルカの娘は見分けて自分の母親の隣に座って父親達の喧嘩を眺める。

そして暫く断つた後、遂に二人は息を切らしてバテた。

「はあ．．．はあ．．．やるな、お前．．．」

「はあ．．．はあ．．．そっちこそな．．．」

マーシレスとラクスは互いに何かを感じたのか互いに握手する。

その光景を見たベルカ達は自分の夫の元へ行った。

「全く．．．あんなに言わなくても私を一番愛してくれてるのは知ってるわよ」

「マーシレス。私も同じよ」

「．．．そうだな。結局、一番どちらがベルカを愛してるかになっていたしな」

「何か色々と言い合ってる内になってたよな」

ラクスとマーシレスはいつの間にか笑いながらそう言うのと、呆れた様にスマカとレーラは互いの妻を溺愛する父親達に一言言う。

「この溺愛親父が」

「父親に向かってそれはないだろスマカ？」

「レーラ．．．いつの間そんな言葉を．．．!？」

マーシレスは娘からの罵倒を軽く流すが、ラクスは初めてレーラに親父と言われた事にショックを受けた。

レーラは至って真面目で喧嘩しても特にそんな事を言われた事はなかったからだ。

「え？スマカに教えて貰いましたが？」

「マーシレス．．．!」

「おいおい．．．いつか言われる事なんだから良いだろ？．．．たぶん」
「たぶんかよ！」

ラクスはマーシレスの最後の言葉にツツコミを入れると、霧が再び掛かり始めた。

「おいおい．．．今度は何だ？」

「もしかしたら、お前ら帰れるかもな．．．元の世界に」

「・・・また会えるか？」

「分からねえよ・・・だけどよ。また会えたら今度はゆつくりベルカと娘の話をしようぜ。酒を飲みながらな」

「酒は遠慮する。酒のせいで仲間に色々と迷惑を掛けたりしてまうらしい・・・だが、話は付き合うぞ？」

互いに別れの言葉と取れる話を終えた時、霧は人が全く見えない程になり、声しか聞こえなくなった。

「あばよ！・・・えーと、何か異名はあるか？」

「・・・懐刀だ。お前は？」

「嫌だが、取り合えずこう名乗る。鴉頭だ」

「そうか・・・なら、タイミングを合わせて別れの挨拶をするか」

ラクスはそう言うと、マーシレスとラクスは互いに合わせると、大きな声で別れの言葉を言った。

「あばよ！鴉頭（懐刀）！」

マーシレスとラクスの別れの言葉に続いていき、カムイ達も別れの言葉をそれぞれ言っていく。

そして、霧が完全に晴れると元いた道にいた。

「・・・さあ、行きましょう！また会える日まで！」

「・・・ふ、そうですね。約束を破ったら示しがつかないですからね」
カムイ達は旅を続けた。

不思議なこの出会いにラクスはまた、マーシレスとの再開を夢見て歩く。

ハロウィン企画：ハロウィンの祭

ハロウィン。

この日は子供が仮装し、その子供だけが使える呪文を唱えて大人からお菓子を貰ったりする日である。

その日はカムイ達にも訪れ、カンナを含めた子世代達は仮想をしただりして回っていた。

「ラクスきーん！」

「ん？」

「トリックオアトリート！」

ハロウィンの日での子世代達の回る中には当然、ラクスも入っており、吸血鬼の服装をしてやって来たカンナが元気よく呪文を言う。

「おお、怖いな。ほら、お菓子をやるから退散しな」

「ありがとう！」

ラクスは予め持っておいたお菓子を渡すと元気よく走って行くカンナの姿を見て、ラクスは微笑んでいると今度はシグレとミドリコとゾフィーがやって来た。

「あ、ラクスさん！トリックオアトリート！」

ミドリコがそう元気よく言うと、ラクスはシグレとゾフィーの二人を見た。

「お前達もか？」

「ええ、皆で回った方が面白いからと誘われまして」

「そうか。ほら、菓子だ」

ラクスはそう三人にお菓子を渡して見送った。

暫く、ラクスは次は誰が来るかを考えていると、向こうからレーラが歩いていてラクスの左右でジークベルトとシノノメが睨みあつて来た。

「……何だこの状況は？」

「……何だか私の取り合いみたいで、自然と喧嘩してるの」

ラクスは瞬時に、その言葉を理解するとジークベルトとシノノメの頭を掴んだ。

「まだ諦めていなかったのか？いくら頑張ろうと・・・家の娘はやらん！」

「ま、待ってくださいとお義父さん！」

「馬鹿！それは禁句だ！」

ジークベルトはシノノメの指摘を聞いて咄嗟に口を塞ぐが、ラクスはふるふると体を震わせながら叫んだ。

「誰がお義父さんだ！」

「ひい！」

ラクスの怒りの声に震え上がった二人にラクスは説教をし始めると、呆れながら見るレーラの元にベルカがやって来た。

「お待たせ・・・」

「遅いよ母さん。・・・その格好は何？」

「こ、これは・・・その・・・」

今のベルカの服装は何時もの鎧姿ではなく、ラフな服装で頭に猫の耳と尻尾を付けていた。

所謂、猫のコスプレだった。

「・・・あ。まさか父さんに見せる為に？」

「ち、違うから！これはカミラ様に薦められて！」

「へえ・・・薦められたて、事はカミラ様も分かっていたのね」

「違うから！」

ベルカは赤面になりながら否定するも、レーラはニヤニヤ顔で見てくる。

その時、騒ぎを聞いたのかラクスは振り向くと、そこには猫ベルカがいて、ラクスは一瞬で顔を赤くした。

「べ、ベルカ！何て格好をしているんだ！」

「いや、これは・・・」

「実は父さんに見せようと態々、この服装をしてきたのよ」

「レーラ！」

ラクス家のこの騒動は暫く続くが、落ち着きを取り戻して家族三人で回ったのは別の話。

大晦日番外編：夫婦喧嘩

大晦日。

それは一年の終わりの日であり、一番忙しい日でもある。そんな年末の日にマイキャツスルの食堂で機嫌の悪いラクスが料理を黙々としていた。

食堂の調理場から流れる殺気は尋常ではなく、食堂で料理を食べている者はどうしてこんなに機嫌が悪いのかと疑問に思っていた。

「あの・・・どうしてラクスさんは怒っているのですか・・・？」

カムイが恐る々とマークスに利くと、マークスは冷や汗をかきながら答える。

「分からん・・・だが、奴が此処まで怒っているんだ。余程の訳があると思うのだが・・・」

マークスは眉間にシワを寄せながらそう言うと、向こうから御盆に乗せて料理を運ぶレーラがやって来た。

「そこまで重要ではありませんよマークス様」

「そうなのか？」

「はい。実は・・・父さんと母さんが喧嘩したのです」

「・・・はい？」

レーラはラクスの機嫌の悪さは夫婦喧嘩が元だと言うと、カムイとマークスは信じられないとばかりの表情を見せる。

「信じられないのは分かります。確かに父さんと母さんの仲の睦まじさはバカがつく程ですから・・・はあ・・・」

レーラは溜め息をつきながら食事を始める。

「な、何で喧嘩なんか・・・？」

「そうだぞ。何の理由も無いのに喧嘩をする筈がない」

「それは・・・」

「それは？」

レーラの言葉を固唾を飲んで待つカムイとマークスは待っている。

静かな空間が広がる中、遂にレーラの口が開いた。

「・・・私にも分かりません」

「え!?!」

レーラの理由が分からないと言う言葉に二人は声をつい挙げてしまった。

「驚くのも無理はありませんね・・・あ、母さんが来ました」

カムイとマークスが見てみると、そこにはかなり不機嫌なベルカと冷や汗だらけのルーナがやって来た。

「・・・ねえ、ベルカ。いつまで不機嫌そうな顔をしてるのよ・・・」

「・・・別に不機嫌じゃない」

ベルカはそう言いながらカウンターの方へ行き、料理を受け取ろうとした。

そして、料理を渡そうとやって来たラクスがやって来た。

お分かり頂けただろうか？

今、機嫌が悪く尚且つ喧嘩中の二人が遭遇した・・・。

その結果。

「・・・ベルカ」

「・・・ラクス」

二人の間に火花がちらつかせてながら睨み合いが始まってしまったのだ。

二人の殺気は食堂の空気を一変させる程で、食堂内にいる者達は堪った物ではなかった。

「・・・料理は此処に置いておく。早く持っていけ」

「・・・言われなくても持っていくわよ。馬鹿」

二人は冷たい空気の中でそれだけで会話すると、ベルカは料理持つてレーラの隣に座り、ラクスは調理場へと戻って行った。

「・・・ねえ、母さん」

「なに?」

「・・・どうして喧嘩してるの?」

「・・・貴方には関係の無い話よ」

ベルカはそう言って食事を始めた。

何とも言えない空気にレーラも流石に居心地が悪くなり始めた瞬間、ラクスが何かを持ってきて黙ってベルカの料理の位置に置いた。

「・・・これは」

ベルカは置かれた物を見て唾然としている。

カムイ達も置かれた物を見て、唾然としている。

その置かれた物は・・・トウモロコシだった。

「トウモロコシ？」

「・・・ふっ」

ベルカはそう微笑むとまた食事を始め、カムイ達は訳が分からないとばかりにベルカを見た。

ベルカはいつの間にか食べ終わっていると、トレイを持ってカウンターに行く。

カウンターでは、黙々と作業をするラクスがおり、ベルカはトレイを置いて静かに言った。

「ごめんね・・・」

ベルカはそれだけを言うと、トウモロコシを手にその場を立ち去った。

「・・・何だったんだ？」

「数年前」

暗夜王都の地下街にて、少年ラクスと少女ベルカが傷だらけの状態
で暗殺の師である男の前にいた。

「はあ・・・それで？何で喧嘩したんだ？」

「こいつが悪いんだよ。少しからかったら棍棒で殴りやがったんだ
！」

「貴方が悪い。よくも私を笑い者にしてしかも、投げ飛ばすなんて」

二人はいがみ合いながらそう主張すると、男は溜め息をつきながら
手を思いつき叩いた。

びくっ、となった二人は男を見た。

「もう良い。今回は二人が悪い・・・よって、二人とも飯抜きだ！」

「そんなのないぞ・・・！」

「はあ・・・」

二人はそう言いながら落胆すると、男は何処かへ行ってしまった。
「だああちくしょう！やってられるか！」

ラクスはそう言うと、何処かへ消えてしまい残されたのはベルカひとりとなつてしまった。

ベルカは近くの瓦礫に座ると、呆然と前を見ていた。

何れくらしいの時間が流れたか分からなくなった時、ベルカの腹の虫が鳴り出した。

「・・・お腹空いた」

「何だお前もか?」

ベルカはその声を聞いて振り替えると、そこにはラクスがいた。

ラクスはベルカの隣に座ると、ある物を差し出した。

「・・・トウモロコシ?」

「・・・やるよ。いらぬなら良いけどな」

ベルカはトウモロコシを受け取ると、ラクスは美味しそうにトウモロコシを頬張る。

ベルカもトウモロコシを頬張ると、ラクスは徐にベルカに言った。

「今日はごめんな。からかったり、投げ飛ばしたりして・・・」

「・・・私もごめんなさい」

二人はそう謝ると、笑いながらトウモロコシを頬張った。

〜現在〜

「まさかまた、トウモロコシなんてね・・・ふふ」

ベルカはそう微笑みながら歩いて行った。

その頃、食堂の調理場では。

「年越しそばを作るの忘れた・・・」

〜おまけ〜

「私の方がずっと思っている」

「いいえ、私の方が思っている」

ラクスとベルカの喧嘩の真相・・・それは。

「私の方がずっと誰よりもお前（貴方）を愛してる」

ただの痴話喧嘩だった。

こうして大晦日は終わっていった。

if番外編：もしも、ラクスが白夜に向かったら・・・
〈前編〉

暗夜王国の属国シユヴァリエの広場で、一人の騎士とがいた。

その騎士の名はラクス。

暗夜王ガロンの新米ではあるが直属の騎士である。

その騎士ラクスはある決断を迫られていた。

それは、白夜の姫カムイをガロンの命の通りに北の城塞に運ぶか、命に逆らい白夜へと運ぶかと二つの道が示されラクスは迷っていた。

「北の城塞へ運べはカムイは幽閉の身・・・本当の家族とも切り離される。そうしたくはない・・・だが、白夜へ運ぶにも私はガロン様を裏切りたくない・・・どうすれば・・・」

ラクスは迷った。

どちらの道もラクスにとっては最悪の物、ガロンと共に進めば白夜において俗悪の対象になり、白夜側へ行けば裏切り者になる。

ラクスは迷いに迷った挙げ句、遂に決断した。

「・・・白夜へ行こう。カムイを・・・本当の家族の元へ・・・殺されても良い・・・白夜ならばさぞ良い死に場所になるだろうしな・・・」

ラクスはそう呟くと、馬に跨がり走らせた。

馬で速く駆けながら進み続け、暗い森の中だろうと道が悪かろうと走り続けた。

そして、白夜の国境前へ着いた。

「もうすぐだな・・・」

ラクスは最後の力を馬に振り絞らせて走らせようとした瞬間、馬の足元に手裏剣が刺さった。

そして、ラクスの回りを白夜の手の者と分かる忍び達が現れた。

「・・・貴様、おめおめと何しにきた？」

「我らの主を殺した暗夜の騎士が・・・今度はミコト様達までも襲おうとするきか・・・！」

「・・・勘違いするな。私はこの子を届けに来ただけだ」

ラクスはそう言って抱き抱えていたカムイの姿を見せると、忍び達は動揺を露にした。

「どうした？ 私はこの子を返すつもりで来たんだ。早くうけとつてくれないか。．．．処遇はそれからでも良いだろ？」

ラクスの言葉に忍び達は警戒しながら近づき、カムイを受け取ると忍び達はすぐにラクスを取り押さえたのだった。

ミコトside

白夜王国は今、深い悲しみに包まれています。

白夜の王であり、私の夫であつたスメラギ様が暗夜の騎士に討たれたと報告が挙がつたのです。

幸い着いて行っていたリヨウマとスメラギ様の刀である雷神刀は無事でしたが、最悪の知らせがあつたのです。

それは．．．私の娘カムイの捕縛。

私は知らせが届いた日から愛する二人を失つた悲しみのあまりカムイの部屋で泣いていました。

私は静かに泣いていた時、部屋の戸の向こうから人影が見えました。

恐らくサイゾウさんでしょう。

「ミコト様．．．お知らせが御座います．．．」

「．．．何ですか？」

「．．．カムイ様が、戻られました」

私は驚きの余り立ち上がって戸を開けました。

開けた戸の側には驚いて固まっているサイゾウさんがいましたが、それよりもカムイの安否が気になりました。

「カムイは．．．カムイは無事なのですか!？」

「はい。〴〵無事に御座います」

「．．．良かった」

私は安堵してその場にへたれ込んだ時、更に驚きの知らせがサイゾウさんから聞かされました。

「さらに、スメラギ様の殺害の実行者も捕縛しました」

side終了

ラクスは忍び達に捕まり武装を解かれ、牢に入れられていた。冷たい風が走り、僅かな光しか入らない窓。

ラクスはその風景の中で静かに自分の死の宣告を待っていた。

ラクスは処遇が下される時を待っていた時、向こうから数人の足音が聞こえてくるのを感じ、見てみると数人の侍がいた。

「ラクス。今からお前の処遇をミコト様が決める。出ろ」

侍がそう言つて牢を開けると、ラクスは素直に出た。

ラクスは外に出ると、腕を後ろで縛られて歩かされ始めた。

暫く歩くと、白夜の玉座の間に通された。

ラクスは玉座の付近を見てみると、白夜の王族と重臣、臣下に兵士とごつた返しており、厳重な警備体制だ。

「・・・此処までするのか」

ラクスはその咄いた瞬間、無理矢理座らされると玉座の前に黒髪の女性が立った。

ラクスは一瞬だけ見たが無理矢理屈まされた。

「・・・その人がスメラギ様を殺したラクスですか？」

「はい・・・間違いありません」

「・・・ラクス、さん。表を上げなさい」

ラクスは言われた通りに表を上げると、カムイに似た優しそうな女性が無表情でラクスを見ている。

「ラクスさん・・・貴方がスメラギ様を殺したのですね？」

「・・・影武者でないなら間違いない」

「何故、殺したのですか？何故、カムイを白夜へ？」

「簡単な事だろ？手柄が欲しかったんだ。だが、あの暗夜王の親父野郎は手柄を何も出さなかった。だからカムイを駄賃代わりに此処へ持ってきた。・・・カムイを渡して恩を売りたいくてな」

ラクスはそう言うと、案の定回りにいる白夜の者達は一斉に罵声を浴びせてくる。

ラクスは早く処遇を下してくれとばかりに胡座をかいて欠伸をしている。

「・・・静まりなさい」

ミコトがそう言うのと回りは静かになり、ミコトは静かになった事を確認するとラクスに問う。

「貴方・・・嘘をついてますね?」

「・・・何の話だ?」

「ラクス。貴方は誤魔化しきついていると思つていますが、明らかに目が動いています。貴方は嘘が苦手な人ですね」

「戯れ言は沢山だ。早く処刑するなり、直接殺すなりしろ。・・・うんざりだ。白夜に恩を売つてとんずらしようと思つたのにな」

ラクスは回りからの鋭い視線を気にせずそう言うのと、ミコトは考える様に目を閉じた。

暫く目を閉じていたミコトは目を開けると、ミコトは近くにいた白夜兵に命じた。

「・・・ラクスの拘束を解きなさい」

ミコトの決定にラクスを含めた一同は驚きを隠せなかった。

スメラギを殺した大罪人の拘束を解けと言うのだ・・・無理もなかった。

「ミコト様!」

「ユキムラさん。・・・分かつてます。ですが、ラクスさんは好き好んでスメラギ様を殺した訳ではないと信じたいのです。それに・・・さつきから奥でカムイが見てますし」

白夜の一同はそれを聞くと、一斉に視線を向けた。

そこには白夜の着物を着たカムイが一斉に向けられた視線に驚いて顔を引つ込めている所だった。

「カムイ。大丈夫・・・此方にいらつしやい」

ミコトはそう優しく言うと、カムイは小さくも早い足取りでミコトの元へ行くと、ミコトに抱かれた。

「・・・ねえ、お母様」

「どうしたの?」

「そこにいるお兄ちゃんは何か悪いことをしたの?」

「・・・ええ」

カムイの質問にミコトはそう短く言うと、カムイは泣き顔になりな

がらミコトに言う。

「お願いお母様。このお兄ちゃんを許してあげて！もう反省してるよ……だから許してあげて！」

「……分かってます。拘束を……解いてください」

ミコトは再度命じると、白夜兵は仕方なく腕を縛っていた縄を切った。

ラクスは信じられないとばかりにミコトを見る。

「……何故だ。お前の……貴様達の王の仇が目の前にいるんだぞ……何故、殺そうとしない……！」

「……殺した所でスメラギ様は帰りません。貴方を殺せば貴方を慕う者が私や白夜を恨む……そういう憎しみの連鎖があるから争いは終わらない……だから、私は貴方を生かし許します」

「後悔するぞ……！」

ラクスはそう言いながら勢いよく立ち上がると、一斉に武器を向けられた。

今のミコトとの距離は目と鼻の先……暗殺者としてのラクスならすぐにでも殺せる距離だ。

「後悔するならやってから後悔します。貴方や皆さんがどう言おうと、私の決意は変えません……」

ミコトがそう言うのと、眼鏡を挙げながらユキムラが前に立った。

「……分かりました。ですが、良いですか？」

「何ですか？」

「生かす事は分かりました。ですが、このまま放置する訳にも参りません。そこで、彼を幽閉の身にするのはどうでしょうか？」

「幽閉……ですか？」

「はい。幽閉のとは言え、離れを使わせて暮らせませます。彼にはそこで余生を過ごす形で命ある限り生きて貰います」

ユキムラの提案にミコトは頷く。

「そうしましょう。では、ユキムラさん。後はお願いします」

ミコトがそう言うのと、ユキムラは白夜兵二人にラクスを取り押さえさせると、引きずる様に連れて行った。

if 番外編：もしも、ラクスが白夜に向かったら・・・
～中編～

ラクスの処分は白夜の王城にある離れへの幽閉と決まった。

ラクスはその中で何重にも張られた見張りに監視されながらの生活となるも、別に気にも止めていなかった。

一つ気掛かりなのは・・・。

「ラクスお兄ちゃん！」

「またか・・・」

何故かカムイになつかれてしまったのだ。

カムイは毎日の様にラクスの幽閉されている離れに忍び込んで連れ戻されるの繰り返しなのだ。

ラクスは溜め息をつきながらカムイの方へ向いた。

「また来たのか？。全く・・・また連れ戻されるぞ」

「別に構いません。その時はまた会いに行きます」

カムイはそう無邪気な笑顔で答えると、ラクスは溜め息をついた。

「ほら、迎えが来たぞ」

ラクスがそう言った瞬間、向こうからドタドタと音を立てて長い長髪の少年がやって来る。

「カムイ！此処には行くなと何時も言っているだろ」

「だって・・・」

「早く連れて行ってくれないかリヨウマ王子」

ラクスがそう言うと、不機嫌そうな顔でカムイの手を握って連れて行くリヨウマ。

ラクスはそれを見送ると庭をただ見つめ始め、覇気の無い姿を見せた。

～ベルカside～

私が仕えている王女カミラ様がいる暗夜王国では混乱の極みに陥っていた。

ガロンの腹心候補であり私の幼馴染みであるラクスが裏切り、王女

カムイを連れ去って白夜へ離反したのだと言うのだ。

私は彼の事を強い責任感を知っているが、まさか裏切りを起こして離反するとはとても考えていなかった。

「どうして……」

私はラクスの行動の理由が分からないまま歩いていると、後ろから声を掛けられた。

「ベルカ」

「……カミラ様」

そこにいたのは私の主であるカミラ様がいた。

カミラ様は珍しく無表情で立っている。

「ベルカ……貴方に任務を与えるわ……」

「任務ですか……?」

「ええ……今、国を騒がせているラクスを知ってるわね? 任務は……ラクスの殺害及びラクスの御首を取ってくる事よ」

「ッ!」

カミラ様から発せられた任務の内容はラクスの殺害、つまり本業である暗殺だった。

私は咄嗟に断ろうとしたが、カミラ様は溜め息をつきながら言う。

「……本意ではない任務だと分かっているわ。でも、これはお父様からの王命なのよ」

「王命……」

「……暗夜王国の総力を挙げてラクスの首を挙げよ。奴の裏切りは全ての支配地域に対して反乱の火種となる……と、言ってたわ。珍しく悲しげな表情でね。……確かにお父様の言う通り、腹心候補が白夜へ離反したと言う噂が国全土に流れたら……」

「大規模な反乱が予想される……」

私がそう言うと、カミラ様は頷くと私を抱き寄せた。

「ごめんなさいね……こんな汚れ仕事をさせるなんて……」

「いえ……私はそれが本業なので……」

私はラクスへの情を捨てて……。

”殺し屋ベルカとして彼の首を取る……!”

side終了)

ラクスは今日も何もする事なく離れの庭を見ていた。ただ、何もする事なく庭を見ていた時の事だった。

「・・・誰だ」

ラクスは小さくも威圧的な言葉で話すと、離れの部屋の中から暗夜の暗殺者の服装でフードを深く被った男が現れたのだ。

ラクスは見張りに悟られない様に庭を見続けながら話す。

「・・・久し振りですね。ラクス殿」

「以前何処かで会ったのか・・・？」

「昔、貴方に依頼先で助けられました者でね・・・貴方にその借りを返しに来ました・・・」

「脱走ならしないぞ・・・」

「いえ・・・それよりも重大です・・・貴方へ対して暗夜王国が総力を挙げて抹殺しようとしている・・・」

ラクスはそれを聞いてピクリ、と体を動かしした。

「・・・どう言う事だ？」

「暗夜王国の反乱の火種を消す為だとガロン王が命じたんだ・・・それで国中の選りすぐりの暗殺者や殺し屋、傭兵が雇われて貴方を狙っている・・・」

「・・・それで？私にどうしろと？」

「・・・逃げろ、と言っても動きませんよね・・・？」

「当たり前だ・・・」

ラクスはそう言うのと、不機嫌そうな顔で庭を見る。

「・・・それだと、白夜の者達を巻き込みかねませんよ？」

「・・・死に場所は、もう決めている。白夜平原だ。私・・・いや、俺の首を狙う奴等に伝える。俺は逃げはしない・・・白夜平原で、誰が俺の首を得るか決めて待っているとな・・・」

ラクスはそう言って振り返った時にはだれもいなかった。

夕方、カムイは何時もの様にラクスのいる離れへやって来た。何時もの様に戸の前に立って、開けて、ラク스에飛び付く筈だったのだ。

「・・・ラクスお兄ちゃん？。・・・おじちゃん達、お昼寝してるの？」
カムイは来た時にはそこには見張りの忍び達が延びていたのだ。
離れに唯一残されたのは・・・置き手紙だけで、他は何も無かった。

夕日が照らされた白夜平原。

そこは、とても魅力的で誰もが絶景だと褒める場所だ・・・血生臭くなければの話でだ。

そこに、白夜王城から抜け出てきたラクスがやって来ると、無数の死体が転がっており、何れも暗夜風の服装だ。

「・・・こいつらはお前がやったのか・・・ベルカ？」

ラクスがそう言うと、返り血をたつぷりと浴びて赤く染まったベルカが現れた。

「・・・何故、暗夜を裏切ったの？腹心候補の地位なら裏切るなんてしないと思ってたけど？」

「・・・嫌気がさした。殺しも、暗殺も、何もかも・・・ベルカ。お前に殺されるなら本意だ。さあ、殺れ」

ラクスはそう言って無防備に立った。

だが、ベルカはそこらにあつた剣を取ると、ラクスの前に投げた。
剣はラクスの前で刺さり、ラクスはその光景に啞然とした。

「・・・無抵抗な貴方を殺さない。迷いが出るわ」

「・・・そうか。後悔するなよ・・・」

ラクスは剣を掴み引き抜くと、剣先をゆつくりとベルカに向けて対峙した。

ベルカは血で塗られた様な姿になった斧を持って構えると、斬り掛かる。
ラクスはベルカの攻撃を返すと切り返し、ベルカは切り返しを防ぎ

また攻撃する。

激しい金属音が白夜平原で響く中、二人は全力の殺し合いをする。

「はあー！」

「ちっ……腕を上げたなベルカ」

「貴方もね」

互いの武器で迫り合いになる中、ラクスが押し勝ちベルカの腹に横に一閃する。

ベルカは痛みを声に出さず、自身の腹の辺りを見ると、少し斬れただけの傷だった。

「……痛いわね」

「そう見えないが……くそ、俺もやられていたか……」

ラクスはそう言いながら自身の右足を見て言った。

ラクスの右足は血が流れており、明らかに斬られた後だった。

足を斬られた以上はまともに動く事は出来ない。

ラクスの額に冷たい汗が流れる。

「……ラクス。貴方とは長い付き合いだったけど……これで最後よラクス……」

「ふん……（やっと死ぬるか……何だろうな。まだ、死にたくないと思える……）」

ラクスはそう思いながら微笑むと、ベルカは容赦なく斧を振り上げてラクスに斬り掛かる。

ラクスは自身の死を受け入れながら、次に来る痛みに備えていた……。

「そうはさせん！」

その声と共にベルカの斧が何かに当たって降りおらされる方向がズレた。

ラクスは間一髪の所で命が助かったのだ。

「……サイゾウ？」

そこにはサイゾウが手裏剣を持って身構えており、サイゾウの回りには忍び達がいる。

「ラクス。不本意だが、ミコト様の命だ……助けてやる」

「何故だ？本当に・・・お前達は・・・」

ラクスは呆れながらへたれ込むと、ベルカはまた斧を振り下ろそうとした。

だが、サイゾウの攻撃に合いベルカは攻撃を断念した。

「・・・引くしかないわね」

ベルカはそう言うて素早い動きで逃げていき、サイゾウは他の忍び達に追撃を命じてからラクスの肩を担いだ。

「全く・・・勝手にいなくなつたと思つたら死に場所探しに此処へ来るとはな・・・」

「・・・結局、読んだのか」

「・・・長い間、世話になつた。勝手にいなくなる事を許せとは言わない。だが、私の命を狙う者がいると知り、世話になつた恩人達を巻き込む訳にはいかないと考え立ち去らせて貰う。安心しろ、私は死に行くつもりだからな・・・。ふん、ふざけた内容だな」

「内容を全部覚えていいのかよ・・・」

ラクスは忍びの恐ろしさを感じとりながら白夜の王城へと連れ戻された。

王城へと連れ戻されたラクスはすぐにミコトの元へ連れて来られていた。

ミコトは怒りとも言える無表情な顔でラクスを見ている。

「ラクスさん。この置き手紙はどう言うつもりですか？」

「・・・書いた通りだが？」

「死に行く・・・つまり、貴方は死ぬ為に危険を犯したのですか？死ぬ為にカムイを連れて来たのですか？」

ミコトの質問にラクスは観念した様に頷いた。

「・・・何故、死のうとしているのですか？」

「・・・スメラギ王を殺した時・・・いや、もつと前から殺しが嫌になつた。罪も無い民を殺す事、政敵を抹消する事・・・全て嫌になつた。そ

の時まだ死ぬ気は無かった……だが、スメラギ王を殺した時、カムイを見たんだ」

「カムイを……ですか？」

「……カムイの目の前で親を奪った。俺も親が奪われる事の辛さを知っている筈なのにそれをやったんだ。だから、せめてもの罪滅ぼしに……」

「死のうと、したのですね」

ミコトの言葉にラクスは頷くと、暫く動きのない雰囲気にも包まれたが、ミコトは何を思ったのかラクスを抱き寄せた。

「なッ!？」

ラクスは慌てて引き剥がそうと動こうとしたが、ミコトの言葉でそれをやめてしまう。

「……もう、悩まなくて良いです。死のうとしないでください。貴方には大切な人がいる筈です。もし、貴方が死んだらきつと、その人達が悲しみます。カムイもきつと……」

「……だが」

「生きてください。これは、私の下す離れを抜け出した罰の沙汰です。大切な人の為に生き続けて下さい」

ミコトの言葉にラクスは涙を流して泣いた。

ラクスはミコトの人柄に負けた事を意味した物である。

if 番外編：もしも、ラクスが白夜に向かったら・・・
後編

ラクスが白夜にやって来てから時は流れ・・・。

ラクスは何時もの様に離れの庭を眺めていると、向こうから歩いてくる気配を感じ、ラクスは溜め息をつきながら振り向く。

「此処に来る事は何時までも変わらないな・・・カムイ」

「ふふ、貴方こそ無愛想なのは変わりませんね」

そこには、白夜の王女として成長したカムイがそこにいた。

昔の幼さは無く、今は女性として異性の注目を集める程に美しく、温厚で優しい性格に育った。

たまに人を信じすぎる事は玉に傷だが。

「そういうえば・・・あの三人は？」

「ルーナさん達の事ですか？今は任務に出ています。最近また暗夜王国の動きが活発になりつつあると言う事なので警戒に行ってもらっています」

「そうか・・・また暗夜が・・・お前の臣下は大忙しだな」

カムイの臣下ルーナ、ラズワルド、オーデインの三人は傭兵として最初は白夜に雇われて入った。

白夜にはミコトの張った結界のおかげで侵攻こそされてはいないが、暗夜との国境付近の小競り合いは幾らでも起こったのだ。

そこで、時より戦力として傭兵であった三人を雇いカムイに指揮権を委ねると大きな戦果を挙げたのだ。

カムイは戦いの中で三人を信頼して臣下にし、今も白夜に誇れる将として活躍している。

白夜の将兵達には暗夜者としてあまり歓迎はされていないが、実力は信頼はされている。

「・・・ラクスさん。貴方は暗夜へ帰ろうとは思わないのですか？」
「急にどうした？」

カムイの衝突な質問にラクスは困惑しながら聞くと、カムイはうつ

向きながら話す。

「暗夜は貴方の故郷なのですよ？。．．．白夜と争いあっていると言うのに此処にいても良いのですか．．．？」

「．．．俺は暗夜を裏切ったんだ。今さら帰れはしない．．．それに、その故郷から命を狙われてもいる。俺はもうずっと此処で余生を過ごすさ」

ラクスはそう言ってカムイに微笑むと、カムイは顔を挙げてラクスを微笑みを見ると、何かを決意したかの様に庭の方を見た。

「．．．ラクスさん」

「何だ？」

「私の．．．臣下になりませんか？」

カムイからの臣下の誘いにラクスは目を見開いた。

幽閉されている身のラクスが臣下の誘いを受けたのだ。

だがそれは、白夜王スメラギを殺したラクスを白夜に引き入れると言う事で一歩間違えればカムイは回りから批難されかねないのだ。

「．．．嬉しい誘いだが、無理な誘いだ。俺はお前の父親を殺した男だ。そんな奴が白夜の臣になれる訳がない」

「でもー」

「カムイ。．．．諦めてくれ。俺は今の生活で満足だ。それ以上は求めない」

ラクスはそう言うと、離れの奥へと行ってしまふ。

「．．．諦めませんか。貴方を臣下にするまで」

カムイはそう言って離れから遠ざかっていき、最終的には縁側には誰もいなくなつた。

くりヨウマ side

俺は白夜の第一王子として多くの政務を任されている中で、一つ問題を抱えていた。

それはカムイがラクスによく会いに行ってしまうのだ。

ラクスは我が父スメラギの仇．．．とても心の許せる相手ではない。

だが、ラクスは父上を殺したとは思えない程の覇気の無さと一度死のうとした行動が俺に疑問を抱かせる。

「・・・はあ」

俺は溜め息をついてしまう。

此所最近になって、カムイのラクスへの訪問は皆から諦められている。

その為、誰も止める者も連れ戻すものもない・・・カムイは好きにラクスと会える様になってしまった。

実際、俺も諦めているがな。

「リョウマ様」

「サイゾウか・・・どうした?」

「はい・・・実は、カムイ様がラクスを臣下に勧誘しようとしたらしく・・・」

「何だと・・・!?!」

俺は驚きのあまり筆を落としそうになった。

間一髪、筆を落とさずに済んだがまさかカムイがラクス勧誘するとは・・・。

「・・・カムイを呼べ」

「はっ」

サイゾウは俺の命を聞いてカムイを探しに行った。

暫く待っていると、カムイがやって来た。

「どうしましたリョウマ兄さん?」

「カムイ・・・ラクスを臣下に勧誘しようとしたのは本当か?」

俺は真剣な面持ちでそう問うと、カムイは頷いた。

「分かっているのか?。下手をすればお前が咎められる事になるし、ラクスに更に形見の狭い思いをさせるだけだぞ?」

「分かっています・・・でも、私はただ情だけで動いた訳ではありませんせん」

「ほお・・・」

「ラクスさんを此方に引き込むと言う事は大きな不安と不満をを白夜の皆に与える行為になります・・・ですが、ラクスさんは元は暗夜王の腹心候補。内部に最も近しく、最も暗夜の人達の人脈に触れている人です。もし、彼を引き入れられたら」

「・・・暗夜の民を味方に着けられる可能性があるか?」

「はい」

俺はカムイからの予想外の考えに唖るしかなかった。

確かに暗夜の圧政は目に余る・・・だが、そこで白夜が介入してもすぐに民を味方に着けられる訳でもない。

そこで、ラクスが白夜に着いたとなると・・・挙って味方になる者が現れる者もいるかもしれないと言う事だ。

「その為にラクスを味方に着けた後、成果を挙げられなかったら?」

「・・・残念ですが、また離れでの幽閉にさせるしか」

カムイは辛そうな表情でそう言うのと、俺は溜め息をついた。

「・・・ラクスは、何と言っていた?」

「・・・断ると言われました」

「お前の考えを読んだのか・・・単に暗夜に刃を向けたくなかったのか・・・あるいは・・・ただ単に迷惑を掛けたくなかったのか・・・」

俺はラクスの臣下の勧誘を断った理由を考える。

だが、考えてもラクスの本音は見えない。

「リヨウマ兄さん。私に任せてください。必ず、ラクスさんを仲間にします」

「・・・やるからには責任は持てよ?」

「ツ!?・・・はい!」

カムイはそう返事をする、早速勧誘に行くのか走って行ってしまった。

カムイが居なくなつた時、サイゾウが天井から現れた。

「よろしいのですか?」

「カムイの考えは利になつている。暗夜との紛争は日を過ぎる事に増していき、民への負担が増えている・・・終わらせないとならない。母上と白夜の民の為に」

俺はそう言つて手元にある書状を読んでいく。

〈side終了〉

ラクスは離れの部屋の中で白夜の本を読んでいた時、向こうなら騒がしい音を立ててやって来る足音が聞こえていた。

「ラクスさん！」

「ど、どうした・・・カムイ？」

ラクスはカムイの衝突な来訪に驚いていると、カムイは座って用件を言う。

「ラクスさん。やっぱり私の臣下になつてください」

「・・・急に何なんだ？。その話は断つた筈だ」

「私はどうしてもラクスさんに力を貸して欲しいのです。白夜と暗夜の争いを終わらせる・・・その為に」

「・・・争いを終わらせる、か」

ラクスはそう言いながら本を閉じ、カムイの目を見た。

ラクスはカムイの目を見て、まっすぐに見つめるその瞳を見て決断した。

「・・・条件がある。俺がお前の臣下になつた事を内密にする事。例えば一部を除くとしても白夜の者達でもだ」

「何故ですか？」

「俺の命を狙う奴等から避ける為だ。俺がお前の臣下になれば白夜の外に出て戦う事も多くなる筈だ。そうなればお前の身柄を確保して人質にしても、俺を誘きだそうとしてくるだろう・・・そうなれば厄介だからな」

ラクスはそう言うと、カムイは頷く。

「その条件を飲むなら・・・臣下になろう」

「・・・分かりました。その条件を飲みます・・・どうかよろしくお願いします。ラクスさん」

カムイはそう言うと、ラクスは臣下の礼を取りながら諦めた様な顔だが何処か嬉しそうな微笑みを見せる。

この話は後に白夜と暗夜の分けねを越えた主従の誓いとして、後に歴史家達の注目を的となる。

数日後、白夜の王都はいつもの賑わいを見せていた時、街の奥から

凱旋する一団が現れた。

白夜の民はその一団を見て、すぐに笑顔になった。

「カムイ様だ！」

「カムイ様がお帰りになられたぞ」

「おお、カムイ様……」

民はカムイの名前を呼びながら出迎えると、カムイは民の期待に応える様に手を振る。

そのカムイの傍らには顔を覆面で覆い隠した男がいた。

「相変わらずの人気だな……」

「そうですね？」

「これだけの民の声援だ……中々、此所までの人望は集められまい」

「そう言うラク」

「ヨシツグだ。……まあ、悪くないが……」

ヨシツグはそう言うと、横目で民を見る。

そこには……。

「カムイ様の軍師、ヨシツグ様もいるぞ！」

「ヨシツグ様！」

名前を呼ばれたヨシツグは少しぎこちない雰囲気です手を振る。

白夜王城に入ると、リヨウマが出迎えた。

「リヨウマ兄さん！」

「カムイ。よく戻ったな……今回の戦闘、ご苦労だった」

カムイとリヨウマが楽しく会話する中、ヨシツグはカムイの元に来る。

「カムイ様。私はミコト様に報告に行つて参ります。後の後の事は任せてお休みください」

「ありがとうございます。でも……」

「カムイ。此所はヨシツグに甘えろ。すまないが頼むぞ？」

「はっ」

ヨシツグの返事を聞いたリヨウマはカムイを奥に連れていく。

一人になったヨシツグは溜め息をつく、姿勢を乱した。

「……別人になるのも疲れる物だ」

「ヨシツグさん？」

「ツッ!?。ミコト様・・・丁度良かった。今からご報告へ行こうと思つていた所です」

「まあ、そうだったの?。それなら私も貴方に用事があつたので部屋で話しましょう」

ミコトとヨシツグは城内を移動して、ミコト部屋に来るとヨシツグは報告を始めた。

「今回の紛争は暗夜軍を退ける事で勝利しました。しかし、暗夜軍は少数だったとはいえ、中には手練れの兵士もおり・・・徐々に手強くなりつつあります」

「そうですね・・・今後の戦力の編成を考えておかなければ民に被害が及ぶかもしれませんね・・・」

真剣な雰囲気の中、ミコトとヨシツグは今後の紛争での話し合いをする。

ミコトは話し合う中で、不意にヨシツグに問う。

「・・・もう、馴れましたか?。ラクスさん」

「別人になる事が此所まで大変だとは思いませんでしたよ。ミコト殿」

ヨシツグことラクスはそう言うと、置かれていたお茶を覆面越しから飲む。

ラクスがカムイの内密で臣下になった為、顔を隠してヨシツグと言う偽名のようにカムイの軍師として仕えていた。

ラクスがカムイの軍師になってからと言うものの瞬く間に戦果を挙げていたのだ。

「・・・いつもカムイを支えて頂き、ありがとうございます」

「・・・ええ」

真剣な雰囲気から和やかな雰囲気になった時、戸の向こうから声が聞こえた。

「お母様?」

「その声は・・・サクラね」

ミコトがそう言うと、戸が開いて入ってきたのは白夜の第二王女サ

クラと第一王女のヒノカだった。

二人は戸を開けるなり、ラクスを見ると場が悪るかったと言うような顔をした。

因みに二人はラクスの正体を知らない。

「よ、ヨシツグさん……！。も、もしかして、大事なお話の最中だったのでしょか……？」

「いえ、私は報告に來ただけです。ですが、長い事話し込んでしまっています……お気になさらず」

ラクスはそう温厚な雰囲気で言うと、サクラは少し不安そうだったがミコトに話始める。

「お母様。私は今回の紛争に巻き込まれた民の治療に行ってきます」

「はい。民達の事を任せたわね。サクラ……ヒノカ……気をつけて行ってらっしゃい」

「はい」

二人は声を揃えて言うと、その場を去っていた。

「貴方に似てお優しくなりましたね」

「……そうですね」

ラクスの言葉にミコトは少し寂しげな表情を見せ、ラクスはその表情に首を傾げる。

「……あら、長い事此所に止めてしまいましたね。もう、政務に戻っても大丈夫です」

「そうですか。では……」

ラクスはミコトの部屋から出ていくと、ミコトは縁側から空を見つめる。

ラクスは報告を終えてヨシツグとしての部屋へ戻ろうと歩いていた時、城内が慌ただしかった。

「どうしたんだ……？」

ラクスはそう呟くと、一人の兵士がヨシツグの元に来た。

「ヨシツグ様！」

「何だ？そんなに慌てて」

「無限溪谷の砦より伝令。暗夜軍が不可侵の掟を破り無限溪谷の砦に進攻！援軍を求めております」

ラクスはそれを聞いて目を見開いた。

暗夜軍による本格的な進攻が始まった事をラクスは悟り、兵士に言う。

「それで？私は何をすれば？」

「緊急の軍議を開く為、玉座の間へ集まって欲しいとの事」

「・・・分かった。すぐに行く」と伝えてくれ」

ラクスがそう言うと、兵士は走って行きラクスも玉座の間へと急いで向かった。

白夜の将として、暗夜軍と対峙する・・・ラクスの中で胸が張り裂ける思いだった。

【続く？】

if 番外編：もしも、カムイとラクスが政略結婚をさせられたら

〈暗夜王城〉

暗夜と白夜による戦争が激しさを増していた時、ラクスは各戦線で大きな活躍を見せ暗夜軍に多くの勝利をもたらした。

そのラクスは戦況報告の為に王城へ戻り、暗夜王ガロンの元にやって来ていた。

「――以上が此度の成果でございます」

「うむ。流石だな・・・我が騎士として誇りに思うぞ」

「・・・ありがたき幸せ」

ラクスの今回の戦闘。

それは、ただの虐殺だった。

戦う力の無い民を容赦なく殺し、滅ぼす事がラクスの任務だったのだ。

ラクスはこの任務に不満を覚えたが、騎士として恩あるガロンに対して逆らう事が出来なかった。

「さて、お前に褒美を授けたいが・・・何が良い？」

「私は褒美など・・・ただ、貴方に忠誠を尽くせばそれだけで満足です」

「くはっはっは！。言いよるわ。だが、今回は何も渡さん訳にはいかん・・・そうだ。ラクス。お前は確か・・・まだ所帯を持っていなかったな？」

ガロンの突然の所帯と言う言葉にラクスは困惑しつつも、ガロンに頷く。

「丁度良いな・・・皆を呼べ」

「はっ！」

ガロンの命に従い兵士は走って行くと、ラクスは何がなんだか分からず混乱していた。

数分後、兵士から伝わって呼び出されたマークス達とカムイ、アク

ア、マクベスにガンズと言った面々が集まった。

「どうなさいました父上？。我々を呼び出すとはどれ程のご用件でしようか？」

マークスが代表してそう言っていると、ガロンは不気味に笑いながらカムイに向かって指を指した。

「カムイを……ラクスに嫁がせようと思つてな」

「ッ!？」

「カムイを……ッ!？」

「ラクスに……嫁がせる……!？」

ラクスを含めた全員が驚くと、ガロンは笑う。

「こやつ of 働きは凄まじさを増すばかりでな。こやつを縛るうえでも、褒美としても良い話ではないか？」

「し、しかし……カムイ様は元は白夜王族!。仮にカムイ様が白夜へ戻ったらそれこそラクスの離反を招くのでは!？」

マクベスが慌ててそう言っていると、マークス達は声には出さないが内心、マクベスの行動に同意する。

「そうなりそうなら……ラクス。貴様が責任を持って、カムイを殺せ」
「……しかし、政略結婚と言えどカムイ様のご意志が」

「王族や重臣が常に恋愛で結ばれるとは思ふな。分かつていた筈だ。身分の高い者が政略結婚が常だと?」

「くッ……!」

ラクスはもう言い返せないといわんばかりにうつむくと、ガロンは玉座から立ち上がり宣言する。

「今日、本日を持って……カムイはラクスの婚約者だ。異論は誰も認めん!。……以上だ。もう下がってもよい」

ガロンがそう言っていると、マークス達は失意の内に王座の間から立ち去り、マクベスとガンズはラクスに対して疑わしとばかりに睨んだ後、立ち去った。

アクアも、何も言わずに立ち去る。

「……失礼する」

ラクスもまた、どうしようもない結果にうつむきながら王座の間か

ら出た時、カムイが手を握った。

「待つてください。・・・ラクスさん」

「・・・何ですか？」

「・・・すみません。私が、王族だったばかりに・・・！」

ラクスはカムイの謝罪の意味が分からなかった。

何故、カムイが謝る必要があるのか全く理解できない。

ラクスは困惑しながら聞く。

「何故、謝られる？」

「だって、貴方に想い人がいるかもしれないのに・・・こんな形で・・・」

「・・・確かにそうかもしれないませんが、私は別に想い人はいませんよ？」

「え？」

「私は暗夜王の懐刀・・・常に王の側で仕え、必要なら刃を振るう。自分の事など二の次でした。それよりも、貴方こそ想い人がいるのでは？」

「・・・私には」

カムイはそう言つて目をそらした。

ラクスには分かっていった。

白夜平原でのあの時以来、カムイは間違いなくマークスに惚れていると、そう考えていた。

あの時以来からカムイはマークスに対して話す度に顔を少し赤く染めているのだ。

だからこそ、ラクスはカムイとの政略結婚は乗り気ではない。

「いるのですね？」

「・・・」

カムイは黙り混む姿に確信を得ると、ラクスはカムイを壁に寄せ、両手をカムイの横の壁につけた。

所謂、壁ドンの状態だった。

「残念ですが、諦めてください。もう、決まった事・・・貴方は既に私の物だ。政略的にも良い話だが、私は別に好きでなくても・・・一度懐に入れれば最後まで愛用するたちなんです。だから、その想い人には絶対に渡しませんから・・・」

「・・・ラクス、さん？」

「・・・私とした事が。カムイ様、ご無礼をお許しください・・・では、私はこれで」

ラクスはそう言うと、そそくさと立ち去って行った。

一人残されたカムイは頬に手を当てると少し暖かみを感じた。

数日後、暗夜王城で華やかな式が行われようとしていた。

ラクスは騎士の正装で出ようとしたが、ガロンから何時もの服装で出るように命じられた。

マークス達の目の前なので、マークス達からは文句は言われない事はラクスには救いだった。

「・・・はあ」

「不安？」

「・・・ベルカ、か？」

ラクスは何時もの鎧兜姿ままで振り向くと、そこには正装姿のベルカがいた。

「まさか貴方がカムイ様と結婚するなんてね・・・」

「・・・命令だ。致し方ない」

「断ることも出来た筈よ？」

「私にカムイ様との結婚話が来るんだ。マクベスやガンズにカムイの政略結婚が回される危険性があった。マクベスはまだまだもだから兎も角、ガンズにはやるくらいなら私が貰い受ける」

ラクスの言葉にベルカは呆れながら溜め息をついた。

「その話があの人だけに回るとは思えないわ。血の繋がりが無い以上はマークス様やレオン様にも来る筈よ？」

「ガロン様がむぎむぎ暗夜王家の血を白夜に入れると思うか？」

「・・・思えないわ」

ラクスの言葉でベルカは完敗だとばかりに手を軽く挙げた。

「・・・もう、時間だ。私は式場に行き、花嫁を迎える準備をする。ベ

ルカも式に出席するののか？」

「見れば分かるでしょ？。私は貴方の親族みたいな物なのよ。・・・結婚の話、孤児院の皆には？」

「・・・孤児院の皆には、私が死んだ事にした」

「ッ!？」

「分かっている。だが、カムイ様は仮にも暗夜王家の一員。結婚してしまえばもう、孤児院に連れ添って行けない・・・ベルカ、孤児院の皆を・・・家族を頼む」

ラクスはそれだけを言うと、式場に向かった。

くカムイsideく

私は今日、ラクスさんと結婚する。

お互いに好きでもないのに結婚するのは何故だか本当に空しく感じてしまいます。

本来なら祝ってくれそうなマークス兄さん達やジョーカーさん達は暗い表情を出しています。

確かにラクスさんの評判は悪い方向にあります。

ですが、そこまで悪い人ではない筈です。

だから、私は今まで懂れていた花嫁衣装を着てラクスさんのいる式場に向かいます。

例え、私の誰よりも愛しい人と結ばれなくても・・・。

くside終了く

式は順調に進められた。

ラクスとカムイは横に並び、司祭から誓いの言葉を交わされて最後にキスをして閉幕の筈だったが、兜を着けていたのでそこは省略されてしまった。

ラクスはこの結婚で暗夜王家の一員となり、回りの貴族から執拗な媚が来るようになった。

結婚式の後、次は華やかな宴が開かれてラクスとガロンは話していた。

「ククク・・・どうだ、お前の嫁の様子は？」

「何とも言えません……ですが、すぐに馴れるでしょう」

「そうか……幾ら血の繋がりが無くともわしの娘だ。大事にせよ」

「はい……」

ラクスはそう返答すると、ガロンは向こうを見る。

ラクスも続いて見てみると、そこには美しく着飾れたカムイの姿があった。

ラクスはカムイを見て美しいと感じ、暫く見つめていたがそこでガロンに茶化された。

「何だ？。結構乗り気だったのか？」

「え、いや……」

「ふむ、お前にも人を好きになる事があるのだな……ふはっはっはっはっ！」

ガロンはそう言うと、高笑いしながら去っていった。

ラクスは兜の下で顔を赤くしながらガロンを睨み終えると、またカムイの方へ見た。

何処までも透き通る様な白い肌、美しく輝く白い髪に赤いルビーの様な瞳……化粧などしなくてもその美しさは変わらないが、今日のカムイは化粧無しの時よりも数倍の美しさだった。

「……欲しい」

ラクスはそう小さく呟いた。

宴が終わると、ラクスとカムイは今日から一緒に部屋になった。

ガロンの変な計らいなのか無駄に広い部屋に、家具やダブルベッドが用意されている。

「……さて、どうしますか？」

「え？。何をですか？」

「初夜」

ラクスのその言葉にカムイは顔を赤面させた。

幾ら世間知らずのカムイでも初夜の事は知っていた。

「結婚したからには……しても良いですよね？」

「ら、ラクスさん……！」

「……カムイ。私は……本当に、貴方が欲しくなっていました」

ラクスはそう言うと、兜を脱いで素顔を去らした。
初めて見るラクスの素顔はカムイから見れば中々の美形だった。
ラクスは鎧も脱ぎ捨てると、カムイの肩に手を置いた。

カムイは微笑んでいるが、何処か悲しそうな表情で受け入れる。

「……良いです、よね？」

「……はい」

ラクスはそれを聞くと、カムイにお預けになったキスの続きをするのだった。

後の歴史書に暗夜王女カムイと騎士ラクスの政略結婚が記された。

カムイとラクスは政略結婚とは思えない程に仲睦まじく、カムイ自身も幸せに感じたと記されている。

だが、カムイには他に想い人がいるとされていたが、それは未だに不明である。

【おまけ】

〜イズモ公国〜

カムイ一向は旅の途中、イズモ公国に情報収集と休息の為に立ち寄っていた。

そこで、リヨウマ達と再開したりゾーラの襲撃等があったりした物の何とか事なきを得ていた。

一つ、問題があるとすればカムイとラクスが政略結婚をして子供を二人も儲けていた事だった。

それがリヨウマ達に露見してしまい、リヨウマとラクス、カムイで話し合う事になった。

「……それで？。何か言う事は？」

「……政略結婚とは言え、本当に申し訳ない……」

現在、ラクスはリヨウマに対して相手方の父親に結婚報告をしている様な雰囲気でも対峙していた。

カムイはビクビクしているラクスを心配そうに見つめており、何とも言えない状況だった。

ラクスはビクビクしながらリヨウマと向かい合って座るなか、レ

ラとカンナはリヨウマの息子であるシノノメとマークスの息子であるジークベルトと話していた。

「反対は出来た筈だ。何故、しなかった？」

「腐れ軍師のマクベスや変質者犯罪野郎のガンズに渡る可能性があった。奴等に渡すくらいなら私が貰うと心に決めただん．．．」

「随分と勝手な判断だな？。まるでカムイを愛してない様な口振りをしているが、愛してないのか？」

リヨウマの鋭い指摘にラクスは先ほどまでのビクビクとした雰囲気から真剣な顔立ちでリヨウマを見る。

「愛している。それだけは断言できる」

「ほお？」

「．．．最初こそは愛しているか分からなかった。だが、ずっと側にいると．．．愛しくて、離したくなくて、ずっと側にいて欲しいと思えた。私はカムイを愛している。リヨウマ王子。敵同士とは言え、勝手とは言え、どうかカムイとの結婚を認めてください」

ラクスはそう深く頭を下げた。

リヨウマはまさかの行動に目を見開いており、静か雰囲気の流れる。

カムイはラクスの本音とも言えるカムイへの愛情に顔を赤くしてしまっている。

暫くその姿勢でいた三人だが、そこでリヨウマは溜め息をついた。

「．．．分かった。認めよう」

「ツ!?!。それでは！」

「．．．もう、色々と遅すぎる。レーラとカンナだったな．．．雰囲気がかムイそっくりだ。あの二人を實の親から取り上げる等できる訳がない。認めはしたが、身内だからと言って戦場では手加減しないぞ？」

リヨウマはそう言って微笑むと、ラクスは安堵し、カムイも安心した。

「父さん、母さん！」

事態を解決したラクスの元にレーラが笑顔でやって来た。

「何だレーラ？」

「あのね・・・私、シノノメ王子と付き合いたいのです！」

そう言ってレーラは手を引いて連れてきたのはリヨウマの息子であるシノノメだった。

「え、えーと・・・どうか、付き合う事を許してくれないか？。ぜ、絶対に幸せにするから・・・！」

シノノメは照れながら満更でもなさそうな顔で立っている。

「ふふ、困りましたね。二人共？」

カムイがそう言って困り顔で微笑むも、今の二人にはその言葉は届かない。

次世代の暗夜の王女レーラと白夜の王子シノノメが付き合う。

それは何れだけの外交のカードになり、何れだけの混乱を招くのか予想がつかない。

ラクストリヨウマはそれを想像してフリーズしてしまい、更なる苦難が幕を開けたのだった。

バレンタインデー企画番外編：夫婦の馴れ初め

マイキャツスルの一角にある部屋で、バレンタインデーのチョコ作りをするベルカとチョコ作りを手伝う娘のレーラがいた。

ラクスは普段の戦闘とは違う別件の任務に当たっており、留守にしている。

そんな中で、レーラはチョコ作りをしながら口を開いた。

「ねえ、母さん」

「なに？」

「前から思ってたんだけど・・・母さんと父さんの馴れ初めってどんな感じだったの？」

娘からの突然、馴れ初め話を切り出されてベルカは手を止めて目を見開いて驚いている。

普段は真面目で騎士として鍛練を欠かさず、女の子らしい事をしないレーラに驚きを隠せなかったのだ。

暫く静かな時間が流れたが、ベルカは応える。

「・・・どうしたの・・・いったい・・・？」

「えーと・・・普段ならいつも母さんと父さんは仲が良いなーって思ってた」

レーラからの純粋な質問にベルカは考えながらも恥ずかしそうに話始める。

「・・・そうね。レーラ・・・私が殺し屋をしているのは、知ってるわよね？」

「うん・・・」

「私はカミラ様の臣下になってからも殺し屋を続けていた時の事よ。私は何時もの様に依頼を受けて暗殺に行った時、もう殺す筈だったターゲットが既に死んでたのよ。その横に剣を片手に鋭い視線をぶつけてくる・・・暗殺者としてのラクスと再会したのよ」

「え？。再会って、父さんとその時、知り合いだったの？」

「ええ・・・ラクスと私は同じ師を持つ兄弟弟子・・・その時は喧嘩してそのまま、再会した時は居心地が悪かったわ。今となっては良い

思い出かもしれないけど」

ベルカはそう言いながら少し笑う。

レーラは殺人の現場で再会したのが何処か良い思い出なのか分からなかったが、納得する。

「ラクスは剣を鞘に収めると私を無視してその場を去ろうとしたわ。私は呼び止めようとしたけど、ラクスは止まる事もなく消えたわ」

「え？。それじゃ、今は何で今は仲が良いの？」

「・・・色々あってね。私が仕事をしくじったのよ」

ベルカは微笑みから少し暗い雰囲気話し始める。

「あれは・・・確かに6年前の事だったわ。その時もバレンタインデーだったけど、その時は私には渡す人はいなかったからその日も暗殺の依頼をこなそうとしたわ。でも、私は罫にはまって捕まってしまった」

ベルカはチョコを作る手を止めて思い出す様にレーラに話している。

「椅子に縛り付けられて拷問も受けたわ。話はしなかったけど、体力の限界が徐々に近づいてきていたの。私はこの前成すが成されるままになる位なら舌を噛み切ってしまうわ・・・そんな事も考えてたわ。それで行動しようとした時、扉がいきなり開け放たれてそこにラクスが現れたわ」

「開け放たれて現れたって・・・その時に母さんをどうやって見つけ出したの？」

「それは・・・教えてくれなかった。でも、言える事があるとするば・・・私を助ける為に公務を全部ほっぽり出して来たって所よ。ラクスは素早い身のこなしで私を捕らえていた奴らを倒して私を助け出してくれた。ラクスに散々言われちゃったけど・・・最後に、喧嘩した事を謝られた」

「へえ〜。昔の父さんも結構、不器用で律儀な所があったんだね」

「そうね・・・。私は、そんなラクスにいつの間にか・・・好きになつてたのかもしいわ・・・」

ベルカは微笑みながらチョコ作りを再会し始めた時、部屋の扉が開

かれてラクスが入ってきた。

ラクスは疲れた様な表情をしつつも笑顔でベルカ達の元にやって来た。

「ただいま。ベルカ、レーラ」

「お帰りなさい父さん！」

レーラはそう言うと、同時にラクスに抱き付いた。

ラクスはいつもと違うレーラの行動に戸惑いを感じ、動けなくなっている、レーラは笑顔で言う。

「母さんから父さんとの馴れ初めを聞いちゃいましたよ！。凄く素敵です！」

「なッ!?／＼。べ、ベルカ！。それは、恥ずかしいから言うなと言ったじゃないか・・・／＼／」

「そうだったからしら？」

ベルカは微笑みながそう言うと、ラクスは顔を赤らめながら溜め息をついたが幸せそうに微笑み返す。

「全く・・・」

ラクスは心の底からベルカとレーラに出会えて良かったと感じていると、ベルカが何かを差し出してきた。

それは丁寧に包まれた手作りのチョコだった。

「今日は、バレンタインデーだから・・・あの時と違ってちゃんと用意したわ・・・一生懸命作ったから、食べてね／＼／」

「・・・ありがとうな、ベルカ」

ラクスは微笑みながら受け取ると、この幸せが長く続く様に願った

if 番外編：もしも、親世代で戦争が終結しなかったら・・・前編

数年前、暗夜王国が白夜王国の白夜平原に進攻した事が切っ掛けで起きた暗夜・白夜戦争は多くの犠牲者が出たものの未だに終結の兆しが見えずにいた。

白夜女王ミコトは何者かに暗殺され、暗夜王ガロンは長い戦いの影響か病に倒れ亡くなった。

今は暗夜王マークスと白夜王リョウマの二人の時代となり、其々の子もいるも、彼らも戦火の中に入る定めだった。

～白夜平原～

数年にも渡る暗夜と白夜の全面戦争は未だ終結しない。

その証拠に何度、戦場になったのかわからない荒れ果てた白夜平原と睨み合う様に陣取る暗夜軍と白夜軍がいた。

暗夜軍の陣では、その光景を見つめる金髪の若い青年がいた。

「・・・はあ」

「不安ですか？」

青年は声を掛けられた方を向くと、そこには水色のサイドテールに誰もか美人と答える程の整った顔立ちをした鎧姿の少女が現れた。

「レーラ・・・ああ、不安だ。また多くの兵士達がこの戦場で散る事になると思うとな・・・」

「・・・確かに血生臭い事にはなりそうですね。ジークベルト様」

レーラとジークベルト。

ジークベルトは暗夜王国の王子にして次の暗夜王とされ、レーラはジークベルトの臣下であり父譲りの才能を持った女騎士だ。

二人が生まれる前から戦争が始まっており、両軍どちらも譲らない

戦況になっていた。

暗夜王国は大戦力を持って白夜領を攻めていくも、白夜王国の奇策により大敗退を決し、マクベスやガンズ等のガロンの重臣や王女カムイの戦死等と被害は桁外れだった。

そして、白夜軍は攻勢に転じて反撃していき元の国土へと戻った。白夜王国はこれを気に暗夜王国が被害者拡大を防ぐべく、和平をしてくると考えていた。

だが、暗夜王国は和平を提案せず、再び白夜王国に進攻を開始した。暗夜王国は多くの人材を失ったにも関わらず、白夜軍を圧倒する質のある兵士で構成した軍を派遣。

白夜平原で数年にも及ぶ戦いが繰り広げられた。

現在、親達が駆けていた戦場に親から受け継いだ血と共に戦場にレーラ達は立っているのだ。

「……ジークベルト様。そろそろ軍議に移りましょう。皆で帰る為に」
「……そうだね」

ジークベルトはそう言うと、レーラを連れて仲間達の元へと向かった。

く暗夜軍 本陣く

暗夜軍の本陣に二人が着くと、そこには現王マークスとレオン、カミラやエリーゼ等と王族を初めとした仲間達がいた。

「来たかジークベルト、レーラ。早速だが軍議をすぐに始める・・・席に着いてくれ」

二人は席に着くと、レーラは一つだけ欠けている席を見つけ、マークスに質問する。

「マークス様・・・父は？」

「彼奴なら」

マークスがそう言いかけた時、金属がリズム良く響く音が聞こえ、その方向に全員が振り向く。

そこには、全身を鎧に身を包み、顔すら兜で隠した騎士がいた。

「遅くなりました。少し、工作に手間を取りましてね・・・」

「別に構わん。遅くなったにせよ、工作が上手くいくならそれで良いぞ？ラクス。それよも、発覚する事はないか？」

「痕跡は残しませんでした。相当、感が強くなければまずバレません」

そうラクスは言うと、席に座った後、兜を脱ぎ机に置いた。

レーラはラクスに少し、不安を覚えてたが軍議が始まると感じると、すぐに頭から消す。

「では、軍議を始める」

軍議が終わり、レーラは戦闘で任された位置に行くとそこには銀髪の温厚そうな少年がいた。

レーラはその少年を見つけると無表情な顔立ちから優しい笑みへと変えて近付いた。

「カンナ様」

「レーラ。来たんだね」

「はい、私の役目は貴方様を守る事。戦いが始まれば激戦になるのは必須ですから」

レーラはそう言って鞘に入れた状態の剣を杖代わりにして地面に突き立てて戦場を見る。

暗夜、白夜共に睨み合いが続く戦場・・・レーラに緊張が走る。

「・・・ねえ、レーラ。この戦争は意味があるのかな・・・？」

「・・・分かりません。ですが、もう退けません。散ってしまった兵士達や・・・母さん達の死が無駄になってしまふ。そんな気がしてしょうがないんです・・・」

レーラは悲痛そうにそう言うと、カンナは落ち込む様にうつ向く。暫くして開戦の合図が鳴り、両軍が目の前にいる敵に向かって駆けて行く。

「始まりました。カンナ様・・・此処は自陣ですが、白夜の忍が現れないとは限りません。常に警戒してください」

「うん・・・」

カンナは不安そうに頷き、レーラはカンナのその行動に申し訳なきようにした。

レーラ自身は主君と挙げるジークベルトの弟カンナに争い事に巻き込みたくなかった。

カンナは夜刀神を受け継いでいるとは言え、今回は初陣なのだ。

戦いに未熟、母譲りの優しい性格故に潰け込まれやすい体質・・・レーラはまた暗夜の光を白夜にもぎ取られるのではと言う不安と自分の弟の様なカンナの手を血で染めさせる行為に罪悪感を感じていた。

「・・・戦況は？」

「はッ！現在、五分の戦いです。ですが、そろそろラクス様の工作が効果を現し始めるかと・・・」

「父さんの・・・工作、か。まあ、幾ら補給の効く白夜でも・・・」

レーラはそう言いながら剣をゆつくりと引き抜くと丁度そこに伝令がやって来て報告する。

「報告！工作は・・・成功！白夜軍の補給は絶たれました！」

それを聞いたレーラは剣先を戦場に向けた。

「絶たれたら崩れる。全軍、攻撃用意・・・これより、白夜軍とぶつかる。・・・カンナ様、後は貴方がご命令を」

レーラはそう言ってカンナに命令を委ねると、カンナは意を決したのか叫ぶ。

「皆、行くよ！」

カンナの命令に部隊は怒号を挙げると、カンナは先頭に立って前進を開始した。

レーラはカンナに付き添う様に進み、障害になる白夜兵に斬り掛かる。

戦いは激しい乱戦へと発展、斬る度に返り血が飛び散りレーラを赤く染めていく。

「どけー！」

その声と共にレーラの前に現れたのは白夜の剣聖の鎧を纏い、黒いボサボサの頭に白いハチマキをした青年が現れた。

何処かジークベルトと似ている雰囲気にはレーラは少し動揺した。

「俺は白夜王国第一王子シノノメ！相当な腕を持つ暗夜の兵と見受けた。この俺と一騎討ちをしろ！」

「・・・中々の大物が出てきましたね。私は暗夜王国第一王子ジークベルト様の臣下にして、暗夜王国騎士団団長レーラ。一騎討ちを受けてたちましよう・・・我が主の為にその首を貫き受けます！」

レーラはシノノメにそう名乗りを挙げると、カンナを兵士達に任せて馬を駆けシノノメに向かっていく。

シノノメもまた刀を手にレーラに向かって行き、目の前までやって来た。

「行くぞー！」

シノノメはそう言って飛び上がると、レーラに刀を振るう。

レーラは獅子の盾で防ぐとシノノメにカウンターを仕掛けるも、刀で防がれた。

二人は激しい斬り合いになり、どちらも譲らない戦いになった。

「くっ・・・どうやら王子の名に胡座をかいてはいないようですね・・・とても強いです・・・」

「お前こそ、いったいどうしたらそんな風に強くなんだよ？」

二人は間合いを取りながら攻撃の隙を伺っていると、不意にレーラの目にカンナの姿が入った。

カンナは今、追い詰められていた。

白夜の忍びがいつの間にか奇襲を仕掛け、カンナを狙っていたのだ。

幸いカンナに事前に注意していたので被害は少ないが、持ちこたえるには少なすぎる戦力だ。

「カンナ様！」

レーラはそう叫んだ。

それが間違いだった・・・シノノメはレーラの唯一の隙を突いて斬り掛かった。

レーラは咄嗟に防ごうとするもう遅く、シノノメの刀がレーラの腹に入った。

「ぐ、はあッ・・・！」

シノノメが行った攻撃は峰打ちだった。

その為、レーラは斬られはしなかったが、強烈な痛みにも襲われ意識を朦朧とする。

「いけない・・・このまま意識を失ったら・・・！カン、ナ・・・様・・・」

レーラは意識を失うのと同時に馬から落馬する感覚を最後に気を失った。

くシノノメsideく

俺は迫り来る暗夜軍の部隊を相手に戦っていた。

敵の部隊は予想以上に強く、熟練の兵士揃いだと嫌でも分かった。

激しい乱戦の中、俺は暗夜兵を斬り捨てて移動していた、時、俺は不覚も目を奪われた。

俺が見た物は照らされた夕日で光る水のような髪色の髪、白い肌に血が媚り着いていても分かる備忘録、黒く分厚い鎧を着ていて分かる細さ・・・女性としては完璧過ぎる美貌を持つ暗夜の騎士が暴れまわっていた。

「おい、彼奴は誰だ？」

「はあ・・・見た所、暗夜の騎士と思われませんが・・・？」

「・・・彼奴、中々の女だ。まず、生半可な奴じゃ相手は勤まらねえ・・・

よし、俺が行く！」

「え？ちよ、ちよつと待つてくださいー！」

兵士の制止を聞かずに俺は彼奴の前に立った。

返り血が目立つがやはり中々の良い女・・・敵であったとしても俺は彼女が欲しいと言う欲求に駆られたりするが、抑えつつ名乗りを挙げた。

「俺は白夜王国第一王子シノノメ！相当な腕を持つ暗夜の兵と見受けた。この俺と一騎討ちをしろ！」

俺はそう叫ぶと、彼女はそれを聞いて目の色を変えて俺の方を向いた。

その目には明らかに憎悪を宿し、今にも殺してやると言わんばかりだ。

「・・・中々の大物が出てきましたね？私は暗夜王国第一王子ジークベルト様の臣下にして暗夜王国騎士団団長レーラ。一騎討ちを受けましょ・・・我が主の為にその首を貰います！」

レーラ。

その名前を聞いて良い名前だと何故だが思えた。

俺はレーラと斬り合いながら彼女がますます欲しくなりつつも、戦う。

激しい斬り合いの中、互いに睨み合いになり始めた時、彼女は不覚に別の方向を見て血相を変えた。

「カンナ様！」

彼女が今、守っている者だろうも考えたが今はそんな事はどうでも良い。

俺は刀を峰打ちに向けてレーラの腹に勢いよく振るう。

攻撃が当たり、レーラは意識を完全に失ったのか馬から崩れ落ちる様に落馬しようとしていた。

「おっとー！」

俺は咄嗟にレーラを横抱きに受け止めると改めて彼女の顔を見た。本当によく整った顔立ちで、もう欲しいと言う欲求には勝てなくなった。

「・・・レーラを捕らえた。だが、こいつの身柄は俺が預かる。手を出したりした奴は身内でも容赦しないと全員に伝える」

「はッ！・・・所で、シノノメ様。今回の戦闘で敵の部隊長を捕らえましたが・・・どうしますか？」

「・・・もしかして・・・そいつ次いでに預かると言っておけ。聞きたい事もあるしな」

「はッ！」

兵士は全員に伝える為に急いで走って行った。

その後、白夜軍は捕球を絶たれたりしたが暗夜を追い返す事に成功。

今回は白夜の勝利となった。

〈side終了〉

if 番外編：もしも、親世代で戦争が終結しなかったら・・・中編

テンジン砦。

そこで、暗夜軍の命運が決まった・・・

難攻不落と呼ばれる砦にカムイ隊を先方とした暗夜軍が攻め込み激戦を演じた。

両者は激しい戦いの末にカムイ隊は砦の奥深くに侵入、制圧した。

だが、そこに守りに付いている筈の軍師ユキムラと王女サクラがいなかった。

そこで、カムイ隊は気づくべきだった・・・カムイ隊は砦を落とすたのではなく、砦の内部に引き摺りこまれたのだと・・・

暗夜軍が続々と砦に入る中で、それは起こった。

砦が突如、大爆発し暗夜軍は大きな被害を受けてしまった。

カムイは爆発からは逃れたが、爆発で飛んだ木の破片が一人の兵士に飛ぶ所を目撃。

カムイは兵士を庇って犠牲となり、木の破片がカムイに刺さってしまい、カムイは刺さり所が悪く死んでしまった。

暗夜軍はこの罠を機に撤退を開始、白夜軍の激しい築城きを受けて軍師マクベスとガンズは討死、そして・・・ラクスは爆発で負傷し戦えず、ラクスの最愛の妻ベルカがラクスの殿を務めるも白夜の忍びサイゾウによって討ち取られる。

ラクスはそれを知るとすぐに反転し、サイゾウに怒りの一撃を放つも、サイゾウの右腕を奪って終わってしまった。

この戦い以降、ラクスは療養する中で誓った。

”最愛の妻を奪った白夜に必ず復讐し、白夜の全てを葬りさる”

その誓いを抱き、ラクスは療養を終えたとすぐさま元ガロン派閥を吸収し、暗夜の内政と軍事を牛耳り暗夜を私物化。

白夜に対して戦争継続を宣言する事となる・・・

く暗夜・白夜戦争録より抜き出しく

白夜王城の一室・・・レーラはそこで目を覚ました。

レーラは起き上がり辺りを見渡すと、暗夜とは違う造りの部屋に目を見開いた。

「此処は・・・!」

「起きられたのですか?」

レーラは声を掛けられた方を見ると、そこには長髪の赤い髪の少女が水のはいった桶を持って入ってきた。

レーラは警戒して身構えると、少女は落ち着かせる様に笑顔を見せ

る。

「そんなに警戒しなくても大丈夫です。私達は貴方に危害を加えませんが」

「・・・敵国の白夜が？」

レーラは今、自分のいる所が分かっていた。

だからこそ、目の前にいる少女は白夜の人間だと考えにすぐいいたっただけだ。

「そうです。危害は加えません・・・私の名前はマトイです。貴方は・・・レーラさん、でしたよね？」

「・・・そうだけど何？」

レーラはマトイの温厚な態度に対して激しい警戒心を解かずいた。

マトイは白夜の人間。

レーラにとっては母の仇とも言える国の者を信用が出来る訳がなかった。

「・・・貴方は今はこうして戦いの療養をしていますが、それは貴方が目覚めて沙汰を負うまでの話です。まだ暫くは安静が必要ですが捕虜として沙汰をお待ちして頂きます」

マトイはそう真剣な面持ちで言うと、レーラは当然の事だと考えた。

白夜が怨敵とも言える暗夜の騎士を捕虜として処遇しない訳がないのだから。

「・・・当の昔に覚悟はしているわ。でも、一つだけ聞かせて。・・・
カンナ様は・・・ご無事ですか・・・？」

レーラは先の戦いで忍びに襲われていたカンナの安否を確かめると、マトイは微笑みながら答える。

「ご安心を。カンナ様はご無事ですよ」

「そうですか・・・良かった・・・」

レーラはそう言つて安堵する。

マトイは一通り作業をしてから退出し、レーラ一人が残された。

今なら抜け出せる・・・そうレーラの頭に過るが首を横に振つて頭から消す。

「(下手に抜け出せばカンナ様が危ない・・・今は大人しくするしかないわね・・・)」

レーラは白夜に捕らわれている間は大人しくするしかないと言う結論に落ち着いた。

レーラは大人しくしていると縁側から足音が聞こえてきた。

レーラは縁側に視線を向けるとそこには戦場で刃を交えたシノノメがいた。

「お、目が覚めたのは本当だったのか！」

「・・・シノノメ王子」

レーラはシノノメを見るとすぐに警戒心を剥き出しにして見る。

「おいおい、そこまで警戒すんなよ」

「私やカンナ様を捕らえておいてよく言いますね。どうせ、私達を処刑するのではしょ？」

レーラは一通りの人間が危害を加えて来ないと分かっているが、ただ捕虜としての沙汰が下されていなかった。

白夜王リヨウマが処刑と言えばすぐの頸と胴体が真つ二つになるとレーラは考え、シノノメに対して嫌味とも呼べる言葉を放った。

だが、シノノメはキョトンとした顔でレーラを見る。

「おいおい、聞いてねえのか？マトイから聞いてるだろ。危害は加えないって」

「白夜王の沙汰が下されていないのに何故、処刑しないと仰うのですか？」

レーラの言葉にシノノメは察した様に説明する。

「ああ・・・いや、今回の沙汰は俺が決める。レーラ、俺はお前を処刑したりしない。寧ろ、殺すのは惜しい程だ」

「惜しい？」

「そうだ。俺はお前の戦う姿に惚れ、じゃなかった・・・勇猛さを感じて俺はお前を臣下に加えたい」

レーラはシノノメの言葉に驚きを隠せず、目を見開いて驚いた。

白夜の第一王子が敵対国である暗夜の騎士を臣下に加えたい。

実力主義の暗夜でもこれには流石に呆れしかない。

「何を仰っているのですか？暗夜者の私を臣下に加えたいなど・・・正気ですか？」

「おう、正気だぜ」

シノノメの言葉にレーラは溜め息をついた。

「私は貴方の臣下にはなりません。寧ろなるくらいなら死んだ方がマシです」

「そ、そこまで言わなくても・・・」

シノノメはそう言って軽く落ち込み、レーラはそっぽを向いた。そこにドガドガと足音が立ちながら迫って来る。

「やべー！オボロさんが来やがった・・・すまん！押入れの中に隠れさせてくれ！」

「え、ちよつと・・・！」

シノノメはレーラの制止を聞かずに押入れの中に隠れる。

そして、暫くして縁側から般若の様な顔をした女性が現れた。

レーラはオボロの般若の形相に流石に怯えを隠せずにいると、部屋を見渡してオボロがレーラに問いかける。

「・・・すみません。此処にシノノメ王子が来ませんでしたか？シノノメ王子が此処へ来たと思っただのですが・・・」

オボロは嘘は言わせないとばかりに睨むと、レーラはその威圧に負けて押入れを指差す。

「シノノメ王子は押入れです」

「そうですか」

オボロはそう言つて押入れの戸を開けると、シノノメは怯えた顔で屈んでいた。

シノノメは開けられると同時にレーラを見て「裏切ったな!」と言わんばかりの顔をしている。

「こらあ!あれほど行かないように言われてたのにどうして行くの!」

「い、いや・・・興味が湧いて・・・つい?」

「ついじゃありません!全く、白夜の王子である事を少しは自覚してください。仮にもこの子は敵国の暗夜の騎士ですよ!」

「うツ・・・す、すまない・・・」

オボロのハーメルンの形相での説教にシノノメは体を小さくして聞いていると、向こうからまた別の足音が聞こえた。

「あれ?母さんとシノノメ。この部屋で何してるの?」

「キサラギ!私はシノノメ王子を連れ戻しに来たのよ。それより、何で貴方も此処に来てるの?」

「シノノメが夢中になつてる人がいるって聞いたから見に来たんだよ」

キサラギはそう言うと、レーラの方を見る。

「ふーん……この子、凄く別嬪さんだね。ねえ、母さん？」

「いや、確かに別嬪だけど……兎に角！ほら、早く出るわよ。仮にも怪我人の部屋なんだから」

オボロはそう言って二人を連れて行くと、レーラは呆然とした顔で見送った。

「……別嬪、て何？」

レーラは別嬪の意味を知らずただ、頭に突っ掛かる思いに陥った。

その頃、白夜王城の玉座の間では現白夜王リヨウマが二人の捕虜について考えていた。

一人はカンナ。

カムイと似た容姿と性格を持つ、カムイの実子。
そんなカンナを戦場で捕らえて連れて来られた時、リヨウマはカンナを亡きカムイに姿を合わせた事で手厚くしている。

もう一人はレーラ。

リヨウマの父であるスメラギを撃ち取り、戦争を継続し続ける元凶、ラクスの実の娘。

気を失っていた為、沙汰は目覚めて完治しだい下すつもりでいた。

この二人の捕虜にリヨウマはどうするべきかを考えていると、そこへ一人の口元に仮面を付けた男が現れた。

「リヨウマ様」

「サイゾウか。すまないな……右腕を失ったお前をこき使う事を……」

「いえ、これが俺の仕事ですから……」

サイゾウはテンジン砦の戦いで、ラクスとの戦いによって右腕を失っている。

妻のカゲロウに右腕の負担を支えて貰いつつ、忍びとしての仕事を全うしていた。

「それで暗夜は何か動きはあるか？」

「はい。暗夜ではラクスが血眼にしてカンナ様やレーラの行方を追い掛けています。白夜にも多数の密偵を送りつけてきている事から既にラクスは白夜にいると感付いているのでしよう」

「そうか……もし、奴が二人が囚われていると知ればすぐにでも兵を送り込んでくるだろうな……」

リヨウマは難しい顔でそう言うと、サイゾウは申し訳なきさそうにうつむく。

「俺が……奴の伴侶を殺していなければ……」

「お前のせいではない。あの時、あの様な策をとらなければ……カムイも、死なずに済んだのかもしれない……」

リヨウマはそう言うと、サイゾウは更にうつ向く。
カムイの死はリヨウマ達に大きなショックと変化を与えた。

カムイの死後、リヨウマは交戦ではなく講和を模索する様になり、タクミはカムイへの憎悪が嘘の様になくなり、ヒノカはよりいっそう稽古に打ち込む様になり、サクラは基本的に民や兵への治療を行ったりにしているが自身も戦えて身を守る様になる為に弓を取り始めた。

こうした変化をもたらしたカムイの死にリヨウマ達は変わった……
変わってしまったのだ。

「……明日、レーラを此処に呼べ。捕虜としての沙汰を出す」

「……処刑するおつもりですか？」

サイゾウの問いにリヨウマは無言を貫く。

サイゾウはそれを見ると、玉座の間から立ち去った。

if番外編：もしも、親世代で戦争が終結しなかったら・・・後編

～暗夜王城～

暗夜王城の一室では実権を握り裏舞台から国を支配するラクスが苛立ちを覚えながら部下である親衛隊所属の密偵の報告を聞いていた。

ラクスの部下である親衛隊の密偵はラク스에怯えつつ報告する。

「以上がご報告です」

密偵の報告はレーラとカンナの二人の搜索だが、めぼしい痕跡がなく見つからなかった為、一度帰還して報告していた。

そんな密偵にラクスはかなり不機嫌になりながら書類を片付ける。

「結局、二人は見つからずじまいか？」

「・・・はい」

密偵はそう怯えつつも言うど、ラクスは深い溜め息をついた後、机を力強く叩いた。

密偵がビクツとなった後、ラクスは密偵に静かに告げる。

密偵が苦戦するのは無理もなかった。

先の戦いで白夜出身の忍びスズカゼが妻のニユクスを庇って矢を受けて戦死してしまったのだ。

ニユクスは夫の死後、悲しみを見せなかったが陰でスズカゼの死を嘆いている。

ラクスはスズカゼを密偵として一人の仲間として高く評価しており、惜しい存在だと考えて手厚く吊っている。

「馬鹿者が・・・！見つからないなら白夜領の奥だろうが探せ。何としても二人を見つけ出し連れ戻さなければ・・・分かっているな？」

ラクスがそう言うど密偵は慌てて部屋を出ていき、ラクスはまた書類仕事に戻った。

ラクスは二人の所在が割れないまま白夜に攻め込めば二人に危害が加わると考え、次の遠征の延期命令書を書いた。

「どのみち、私を蹴落とそうとする愚か者を片付けねばなるまいしな・・・」

ラクスはそう呟きながら、マークス派に属する政敵に対しての対抗策を考えていく。

レーラはシノノメとの戦闘で傷ついた傷を勘違いさせ、体を不自由なく動かせる様になった。

最初は傷の痛みでまともに動けず、回りの者達に助けて貰っていた。

レーラは母ベルカの死が原因で白夜嫌いになった父が白夜の文化で唯一気に入っている縁側に座っていた。

傷が完治した事で遅かれ早かれ捕虜としての沙汰が下されるとレーラは思い待っていると、そこにマトイがやって来た。

「レーラさん。リヨウマ様がお呼びです」

「・・・沙汰が下るの?」

「・・・はい」

マトイはレーラの問いに答えると、レーラはうつむきながらも立ち上がった。

「行きましょう。処刑されようが幽閉だろうが・・・もう、人を殺す事がないならどっちでも良いです」

「・・・レーラさん」

マトイはレーラの事を心配する。

マトイは数日の間だけレーラの世話をしていた。

短い日数でも、レーラの性格は分かりやすい物で、レーラは純粋でマトイと同じ努力家でもとても優しい人物だとマトイは分かった。

その証拠に母殺しの憎い敵国の人間である筈のマトイに少しだけ笑顔を見せるのだ。

マトイはうつ向きながらも、レーラをリヨウマのいる玉座の間へと

連れていく。

レーラはマトイと共に玉座の間の前に来ると、玉座の間の中にはリヨウマと臣下のサイゾウ、軍師のユキムラを始めとする重臣達が集まっている。

レーラは静かに深呼吸すると、玉座の間へと入った。ただならぬ重圧感に襲われながらもレーラはリヨウマの前へと出た。

「お前が・・・レーラか？」

「はい」

リヨウマの威厳のある問いにレーラは臆する事なく答えると、リヨウマは感心した様な表情を見せる。

「お前、まだ若い筈だが中々しつかりしているな？」

「一々、怯えていても仕方ありません。それで？私に下される沙汰は何ですか？」

レーラは礼儀の無い言葉でリヨウマにそう言うと、回りの重臣達から無礼等の言葉が飛び交い、リヨウマが制す。

「そうだな・・・沙汰はとうに決めているがその前に聞きたい」「何ですか？」

「お前は、自分の父であるラクスに不満は無いのか？」

「ッ!？」

レーラはリヨウマに見透かされたかの様に凶星を突かれて驚く。

レーラは動揺しつつも見透かされない様にリヨウマに言い返す。

「何を仰っているのですか？私が父に不満を抱えていると何故、そう言うのですか？」

「お前は優しい人物だとカンナから聞いてな・・・もしかしたら不満があるんじゃないのかと思ってな」

「・・・ある訳がないです」

レーラは動揺をしつつもラクスの事を思い出す。

ラクスは復讐の為に暗夜王国の実権を取り上げ、私物化している。だが、だからと言って私欲の為だけに政治をしておらず、国を治める存在として民の為に、国の為に、そして王族達の為に政務をこなしている。

復讐の為に戦争をすると同時に白夜さえ手に入れば国の民は飢えや暗闇の恐怖から解放されると信じての行為でもあるのだ。

マークス達もそれを分かっているからこそ、下手に大きな事を起こさずにおり、ラクスも暗夜王であるマークスへの忠誠を忘れた訳でもないのだ。

レーラは確かに何時までも争いを続けるラクスに不満を覚えるも、それが正義から来ている物だとも知っているからこそ、リヨウマにこれ以上言われたくはなかった。

「父に不満がある訳がないんです。絶対に……」

「何故だ？」

「何故、て……それは……」

レーラはリヨウマの問いに答える事は出来ない。

父であるラクスの事は慕っているが、やはり戦争を続けるラクスに不満はある。

純粋な性格故に不満は無いと言っても、心の奥底の感情が否定してしまうのだ。

「……答える事が出来ないか。確かにラクスは優秀で、此方からもラクスの行動は把握している。しかし……奴は度の過ぎた争いを続けている。民を疲労させてまで争い続けるのに何が不満はないのだ？」

「うるさいー」

レーラはつい怒りに任せてそう言うと、リヨウマはにがむしを噛んだかの様に歪ませる。

「確かに私たちは度の過ぎた争いを続けているわ……でも、争って奪わないと此方の民が飢えて死ぬのよ！光のあるこの国で夢物語を語ってばかりいる貴方達に暗夜の何が分かるのよ！」

「貴様……！」

レーラの叫びでリヨウマの側に控えていたサイゾウが前に出ようとした時、リヨウマが制す。

「待て」

「しかしー!」

「・・・確かに俺達は暗夜について何も知らないし、ただ敵としか見ていなかった。故に深い対立と憎しみを引き起こしてしまい大事な兄妹を亡くしてしまった」

リヨウマの言葉にレーラは少しだけ落ち着きを取り戻す。

「大事な兄妹であるカムイだけでなく、白夜や暗夜の愛する者たちまで亡くした・・・もう、これ以上の争いを続けてお前達、次の世代が大事な者を亡くす様な事をさせたくない。お前の母親の様にな・・・」

リヨウマは目を瞑りながら母親であるミコトを思い出す。

カムイに似た性格をしていたミコトは誰もが慕う女王であったが、何者かの魔の手によって亡くなった。

リヨウマは母親を亡くしたレーラと自分を重ねて見たのだ。

母親を奪った深い憎しみを宿して敵を殺すその姿を。

「私は・・・」

「・・・これ以上はもう良い。お前に沙汰を下す。お前は・・・暗夜王子カンナと同じく幽閉。以上だ」

リヨウマはそう言うと、レーラは呆然とした。

レーラの頭の中ではどうしても幽閉と言う言葉が信じられず、敵として処刑されるつもりでこの場に望んだのだ。

暗夜騎士として不名誉な幽閉を下されたレーラはリヨウマに向かって叫ぶ。

「待ってください!何故、幽閉なのですか!私に生き恥を晒せというのですか!!!」

レーラは騎士として生き恥を晒す事は絶対に避けたかった。

生き恥を晒した不名誉がラクスに伝われば自分は捨てられてしまう。

そうレーラの頭の中でその言葉が支配して必死にリヨウマに懇願しようとした。

「馬鹿者!!」

リヨウマは必死に処刑を求めるレーラの一喝すると、リヨウマは怒鳴る。

「先程言ったばかりだろ！大事な者を亡くす事はさせたくない！とお前にはまだ帰りを待っている者達がいるのに死のうとする気か!!!」

リヨウマの言葉にレーラは自分の主君であるジークベルトや弟の様なカンナ、友達のゾフィーとエポニーヌにオフェリア達を思い出す。

そして、最後に父であるラクスを思い出すと涙を流して崩れる。

「私は・・・私は・・・!」

「・・・お前が死ぬ事はない。死ぬ事が誇りと思うなら、大事な者達を思いだして留まれ。死ぬ事はお前の事を思っていてくれる者を悲しませるだけだからな」

レーラはリヨウマの言葉を聞いて完全に負けてしまった。

騎士の誇りなど忘れて泣き声を挙げた。

今まで抱え続けた苦しみや久納をレーラは泣いて吐き出していく。

その頃、暗夜王国では暗夜王国の王女である一人のレディとして認められる程に成長したエリーゼが歩いていた。

だが、エリーゼの顔は昔の様などんな屈強をも跳ね返す程の笑顔は無く、無表情でしかなかった。

エリーゼがこんな風になってしまったのはカムイの死が大きいか関わっているが、大きな原因は臣下であるハロルドとその妻であるエルフイが共に一人息子を残して戦死してしまった事だった。

カムイや二人が死んでからエリーゼは笑う事を忘れてしまったかの様に笑う事がなくなり、無邪気なその姿を見せる事は無くなってしまった。

「・・・はあ」

エリーゼは軽く溜め息をついた時、ラクスの部屋の前を通り掛かった。

エリーゼは何時もの感じで通りすぎようとしていた時、ラクスの部屋から誰かと話す様な声が聞こえた。

「そうですか。——は、健在ですか」

「誰と話してるのかしら？」

エリーゼは人格こそ変わってしまったているが、中身は変わらずで、好奇心から聞き耳を立てた時、ラクスの声が聞こえる。

「まさか二人が囚われるとは夢にも思いませんでした。それで？今は二人を助ける必要はないと言うのですか？・・・まあ、ハイドラがそう言うのなら」

「(ハイドラ・・・!?)」

エリーゼはかつて暗夜王国を治めていた父ガロンが信仰していたハイドラの名を聞いて驚愕した。

エリーゼ自身はその時に産まれてはいないが、ガロンがハイドラを信仰し始めてから暗夜が可笑しくなったと言う事は聞いていた。

そんな暗夜王国とガロンを狂わしたハイドラをラクスが口にするとは夢にも思わなかった。

「まあ、貴方との契約は守りますよ。復讐がなされるのなら・・・白夜を血染めにしてしまったって構いません。それよりも問題なのは・・・ベルカを甦らせてくれるのかと、言う事です」

ベルカを蘇らせると聞いたエリーゼは更に困惑していると、ラクスは続けた。

「貴方が何を成そうとしているのかは知りません。またベルカとレーラで平穏に暮らせるのなら・・・白夜の民なんてどうでも良い。復讐する国の民なんて・・・ただの生け贄でしかない」

ラクスはそう言い終わると狂った様に笑いだし、エリーゼは聞き耳を止めてマークスの元に向かおうとした時、ラクスの声が冷たく響く。

「さて、こんな所で聞き耳を立てている王女様。中に入ってはどうぞで

すかな？」

「ッ!？」

ラクスの冷たく響く声にエリーゼはどうするべきか迷った。

下手に入れば口封じとして暗殺される可能性がある。

ラクスは暗殺者の顔もあり、暗殺なんてお手の物で、殺されてそのまま闇に葬られる可能性がある。

エリーゼはその可能性が過った時、迷う事なく走った。

入らなかった可能性など考えず、ただ走った。

そんな中、ラクスは執務室で呑気にコーヒーを口にして微笑んでいた。

「相変わらず廊下を走ってしまおうですね・・・何も心配しなくとも口封じなどしないのに・・・」

ラクスはまるでエリーゼの考えを読んでいたかの様に狂氣的に微笑んだ。

時代の闇は深くなっていくばかり・・・

一人の希望を失ったこの世界で残された物達はどう行動するのか・・・

”まだ、分からない”

コラボ企画番外編2：二人の狂人

夜のように暗く荒れ果てた様な地にて、一人の顔を兜で隠した騎士が血塗れた剣を手に黙々と歩いていた。

騎士は剣を引き摺りつつ、ただ歩き続けていた時、向こうから巨大な鉄塊を持った変わった格好の剣士が現れた。

騎士はその剣士を知っていた。

だから、騎士は剣を勢いよく振りかぶり斬りつける。

騎士の剣はとても人間技とは思えない速さで振るわれ、常人なら確実に殺せる物だった。

だが、剣士は常人ではない……。

剣士は騎士の剣を簡単に受け止めると腹を勢いよく蹴り、騎士は蹴飛ばされた勢いで遠くに飛んでいく。

「たく、危ねえだろうが?」

剣士はそう悪態をつくど、騎士は空中で体勢を整えると着地してゆっくりと起き上がった。

「ククク……久しいな……マーシレス?」

「ちツ……てめえ、あいつじゃねえな?。……誰だ、お前は?」

「俺はラクス……名前はそのままだよ。ただ、この戦いの場においては……狂気とも呼んで良いぞ?」

騎士ラクスはそう不適に笑うと、マーシレスは溜め息をついて頭をかかす。

「たく、お互い面倒な物を背負った似た者同士、て訳か?」

「ククク……そうかもな。今回は俺が歓迎をしてやるよ……お前の血でこの地を赤く染め上げてな!!!」

「それはてめえがそうなんだよ!!!」

二人は勢いよく地面を蹴ると激しい斬り合いが始まった。

ラクスの剣は何時もの様な洗練された剣術ではなく、獣の様に荒く振るった物だ。

対してマーシレスは巨大を活かしたグレートソードを常人では考えられない速さで振るう。

互いに一進一退の攻防を遠目で見ている者がいた。

それは、二人の娘であるスミカとレーラだ。

二人は母譲りの髪色と父譲りの戦闘力を持っている。

そんな二人は遠くから二人の戦いを見続ける。

「あのラクスさんが彼処まで狂った様になつてゐるなんて・・・一体どうしたらあんな風になるのよ？」

「・・・分かりません。ただ、母さんは何か知っている様ですが・・・教えてはくれません。ただ、あの状態の父さんは非常に危険と言えます」

レーラは不安そうにそう言うのと再び二人の戦いを見る。

マーシレスとラクスの戦いは更にヒートアップをしていた。

マーシレスのグレートソードをラクスは常人離れした技で避けると、脇に入り込み斬りつける。

マーシレスの横腹に血が吹き出し、マーシレスは素早くラクスから距離を取った。

「ちツ・・・獣みたいに動きやがって・・・ちよこまかと動くんじやねえよ！」

「ふん、そんなもんお前も同じだろ？デカイ剣を振りやがって、やりづらなんだよ！」

「うるせえ！」

マーシレスはラクスの挑発に乗ると勢いよくグレートソードを縦に振るう。

ラクスは見切ったとでも言う様に横に反れると、獣の様な剣術から洗練された剣術へと変えてマーシレスの首動脈目掛けて突く。

「貫った！」

ラクスは勝利を確信した様にそう叫んだが、マーシレスはそれを読んでいた様に素早くラクスの剣の刃を掴んだ。

「なッ!？」

これにはラクスも予想だにしておらず戸惑っていると、マーシレスはグレートソードをいつの間にか片方の手で殴る体勢に入っていた。

「いい加減・・・目を覚ましやがれ!!!」

マーシレスの拳がラクスの兜で覆われた顔に当たると、ラクスは勢いよく吹き飛び、体勢を保てないまま地面に落ちた。

「父さん!」

殴り飛ばされたラクスの元にレーラは走って近づいて駆け寄ると、ラクスは頭を押さえながら起き上がった。

「・・・クソ、何だ・・・かなり痛いぞ・・・」

「ようやく目が覚めたか?」

ラクスは見上げるとそこにはマーシレスが見下ろす様にたっていた。

「マーシレス?何でまた・・・まさか、またベルカの件か?」

「違うぜ。今回は暴走気味のお前をぶん殴りに来ただけだ」

「何言ってるのよクソ親父。今回の事に便乗してまた母さんの事で喧嘩しようと思っただけじゃない」

「ちよっ!?それは秘密だぞ!」

スミカの指摘にマーシレスは慌てた様な素振りで見ると、ラクスは吹き出して笑った。

「はっはははは!そんな事だろうと思っただよ・・・」

「笑うなよ・・・言っておくが俺の方がベルカを愛してるからな!

「何を言う・・・私の方が愛してる。永遠に、誰の目にも入らない様に閉じ込めてしまいたい程にな・・・」

「お前、地味にヤンデレ属性を出すなよ・・・」

マーシレスは流石にラクスの発言に引くと、スミカがまた指摘する。

「・・・父さんも大概だけどね」

「スミカ!・・・はあ・・・お前なあ・・・少しはレーラのように誠実さを学んだ方が良くぞ・・・?」

マーシレスはぐったりしながらそう言う。

「余計なお世話よ!私だってその気になれば誠実さぐらい身に付けるからね!」

「えーと・・・誠実さって身に付ける物なんですか?」

「お前の場合は身に付けておいた方が良いスキルだ。国の社交界では誠実さが好かれるしな。・・・お前の場合はスミカのような率直さでもう少し身に付けて欲しいが・・・」

ラクスは自身の娘の欠点を小さく言うが、レーラは聞こえていないのか誠実は身に付けるべき物なのか悩んでいる。

「はあ、親も大変な物だな・・・マーシレス？」

「俺は娘の反抗期があるから余計に大変だぞ・・・何でお前の所は反抗期は無いのやら・・・」

「父さん。やっぱり人徳の差よ」

「もう良い！それ以上は挟らないでくれ！」

マーシレスはスミカの新たな指摘にツツコムと、ラクスとレーラは苦笑いする。

その後、二人の父と娘を迎えに来た嫁のベルカに連れられて帰宅したそうだ。

〜後日談〜

ラクスは自宅とも言える部屋でレーラが悩んでいる姿を見つけた。

「どうしたレーラ？何か悩み事か？」

「はい・・・思ったのですが、私とスミカさんはどっちが強いのでしょうか？」

「・・・はっ..」

レーラの言葉にラクスは啞然とした。

「いえ、父さん達が戦う姿を見ていたら何だがそう思えて・・・だから、次に再開したらスミカさんに戦いを挑んでみたいですよ！」

「・・・おいおい、流石にもう会わないだろう。流石に」

ラクスはそうレーラに言うが、まさか本当になるのではとラクスの頭の中で不安になった。

一周年記念番外編：因果

闇夜が広がる暗夜王国。

そこでは一つの戦いが終息しようとしていた。

玉座の間の前で激しい斬り合いをしているが、一人が大きく体勢を崩す。

「終わりですー!」

銀髪の長髪と赤い瞳が特徴的な軍のリーダーのカムイが漆黒の鎧兜を纏う騎士ラクスを討ち取った。

ラクスは鎧の上からでも分かる程に出血しており、息が荒くなる。

「ぐはあッ!・・・流石は王、族と・・・言った所か・・・カ、ムイ・・・」
「王族だからではありません。私には仲間がいます。貴方の様な仲間すら殺す見境の無い人とは違います」

カムイにそう言いうと仲間達を率いて玉座の間の扉を開けて中へと突入していく。

一人残されたラクスは息を荒げつつ天井を見つめる。

「・・・仲間、を・・・見境無く・・・こ、ろすか・・・」

ラクスはカムイ達と戦う前に多くの仲間である筈の者達を殺した。命令に戸惑いを感じた親衛隊、実態を犯した兵士と騎士、やたらと暴走気味なガンズ、そして・・・ラクスを恐れて武器を向けてきたベルカ。

ラクスはこの尋常ではない数の仲間殺しに笑ってしまった。

「遠ざ、け様と・・・した・・・だけ、で・・・これか・・・べ、ルカ・・・せめ、て・・・お前に・・・」

ラクスは天井に手を伸ばしてそう呟くと息絶えた。

ラクスは気がつくとも薄暗い屋敷の様な一室にいた。

体には鎖がびつしりと巻き付いており、動けない。

「・・・また、繰り返したのか・・・今度のは酷い物だ・・・」

ラクスはそう呟いて力無く笑った。

ラクスは世界を何度も巻き戻り、何度も繰り返してきた。

自身が望んでいた訳でもなく、ただ始まる前に記憶が無くなり繰り返し始める。

それがもう何日と続いているのだ。

「終わらない・・・繰り返えす度に結果が変わっても終わらない・・・仲間と共に進む道、仲間と敵対する道、仲間を殺す道、自身が全てを終わらせる道・・・何故、繰り返す・・・何故、俺なんだ・・・何故、何故・・・何故なんだ!!!」

ラクスはそう叫ぶも、誰も返事をしない、声だけが響く。

「・・・もう、止めてくれ・・・人をこれ以上殺したくない・・・頼む・・・無理ならせめてベルカだけは・・・」

ラクスは絶望の中で懇願するが、無情にもラクスの記憶が消され始めた。

「止めてくれ・・・止めてくれ・・・頼む・・・もう、もう止めてくれ!!! いっせ殺してくれ!!!」

ラクスはそう叫び消えていった。

ラクスが消えた後、そこにラクスと同じ姿をした人物が現れた。

「許す訳ないじゃないか。お前は苦しみ続ける。何時だって・・・今度はどんな展開になるんだろうなあ？さあ、お前の抗い、手のひらで踊り狂う姿を見せてみる。まだまだ時間はあるんだからな・・・だがな、お前の苦しみが終わる時はもう」

”すぐそこだ”

ラクスと似た様な人物はそう言って壁に目をやるとそこにはびっしりと線があった。

四本を縦に、一本をその四本の中心に書く形で365程あった。

「・・・早く時を進めろよ・・・このクソツたれな因果に終止符を打つためにもな」

そう言って暗闇へと消えていった。

if 番外編：もしも、ラクスがベルカ以外の別の仲間と結婚していたら・・・【ピエリ編 カムイ・白夜ルト】

ラクスは戦況が悪化するにつれて苛立ちを覚えていた。

カムイ率いる白夜軍の予想外の快進撃によって、暗夜軍は弱体化し続け、更には暗夜領内に侵攻を許したのだ。

土地勘のあるジョーカーやフェリシア、サイラスが白夜に寝返っている事で更に戦況が不利になり、余計に苛立ちを覚えているのだ。

「くそが・・・！」

ラクスは地図を睨みつつ苛立ちを覚えながらも暗夜の勝利の為に策を練っていると扉が突然開かれ、そこから派手な髪色がラクスの視界に最初目に写るとラクスは溜め息をつく。

「ラクスーっ！飯出来たのー！」

入ってきたのはマークスの臣下で戦闘狂であり、ラクスの妻であるピエリだった。

だが、妻と言ってもガロンが始めた貴族の娘をを自身の近しい者に嫁がせて繋がりを強化する政略結婚で、ラクスはピエリの事を愛してはいない・・・むしろ嫌いな部類なのだ。

ラクスは多くの人間をこの手で殺して来たが、遊び心など入れはしなかった。

だが、ピエリは本当に楽しそうに戦い、命を奪っていく。

その殺人衝動は自身の家の使用人にまで手が及んでいるとラクスは聞いているので尚更だった。

だが、ピエリは何故かそんなラク스에常に甘えてくる。

ラクスがどれだけ遠ざけようとしてもピエリは必ず何かしらのアプローチを仕掛けてくるのだ。

ラクス是不機嫌そうな顔をしてピエリに話す。

「・・・後で食べる。置いといてくれ」

「駄目なの！最近、全然食べてないの！仕事は後にするの！」

ピエリはそう怒るとラクスは反論しようとした時、腹の虫が鳴り響いた。

ラクスは常に戦略を考えてばかりでろくに食べていなかったのだ。ピエリが料理を用意しても結局、食わずに終わる事もしばしばあった。

「・・・分かった」

「やったのね！」

ピエリはそう言って走り去ってしまうと、ラクスは溜め息をついた。

ラクスはピエリの作った料理を黙々と食べていた。

ピエリはご機嫌そうにニコニコと微笑みながらラクスの顔を見ている。

ラクスは料理を黙々と食べてはいるが、何時までも見てくるピエリが気になってしょうがなかった。

「何だ？何か顔に付いているのか？」

「何にもないの」

ピエリはそう言いながら微笑むとラクスは何時もの事かと気にしなくなった。

ラクスは食事をしながら思い出したかの様にピエリに伝える。

「ピエリ。私はカムイ討伐の為、軍を率いて暫く戻らない」

「・・・また何処かいくなのね」

ピエリは先程の微笑みから寂しそうな表情屁と変えた。

ラクスはその顔を見て胸がズキリと痛んだ。

正体不明なその痛みにはラクスは戸惑うもすぐに平静になりピエリに話す。

「すぐに帰ってくるだろ。カムイ隊は王族が揃っていようと少数。今度の部隊は大隊・・・必ず勝つ」

ラクスは自分にもそう言い聞かせる様に言うとピエリは笑う。

「だったら早く勝って帰ってくるの！それまで待つてるの！」

ピエリはそう言ってからラクスに近づくとラクスの頬にキスをし
て出ていく。

「・・・早くに勝てるかは分からないがな」

ラクスはそう言って料理と共に置かれていた安物のワインを口に
する。

ラクスは暗夜軍の大隊を率いてカムイの搜索、及び討伐を開始しよ
うと暗夜王城の前にいた。

ラクスの後ろには何百人と言える軍が集結しており、更にラクスが
鍛え抜いた精鋭部隊である親衛隊までもがいた。

「さて、行くと」

ラクスが言いかけた時、暗夜軍の伝令が走ってきた。

「申し上げます！暗夜王城で白夜の奇襲！」

「何だと!?部隊を率いている者は！」

「白夜の第二王女カムイです！」

ラクスはカムイの名を聞いてしてやられたと考えた。

カムイは何らかの方法で暗夜王城の侵入経路を探りだし、奇襲を仕
掛けて来たのだ。

「全軍、王城内に急げ！カムイ隊を迎え撃つぞ！」

ラクスはそう言って暗夜王城内に走った。

ラクスは王城内に来るとそこには暗夜兵の死体でいっぱいだった。

ラクスは一人、城内を歩いていた時、向こうから金属がぶつかる音
が聞こえ、急いで音がする方向へ来るとそこでは暗夜軍と白夜軍が激
しい戦闘を繰り広げていた。

「くツ・・・！玉座前まで攻められたか・・・全軍、私に続けえ！」

ラクスはそう言つてディアブ羅斯を抜くと白夜軍に斬り掛かる。
次々と向かつてくる白夜兵に対して奮戦するラクスは奥へ奥へと
進んで行くとある物が目に入った。

見慣れた派手な髪色をしたツインテールで軽装の鎧・・・ラクスは
それを見て動揺が走る。

「ピエリ・・・！」

ラクスはピエリを見つけ走ろうとした時、ピエリの体を金色の刃を
持つ刀に切り裂かれた。

切り裂いたのは金色の刃を持つ夜刀神の継承者であるカムイ本人
の攻撃だ。

「ピエリーーーーー!!!」

ラクスはそう叫びながらピエリの元に走る。

カムイ達もその声に驚き動きが止まるも、ラクスは構わずにピエリ
の元に行き抱き起こす。

「ピエリ、しっかりしろ・・・ピエリ！」

「・・・ら、くす？」

「しっかりしろ・・・！大丈夫だ、すぐに衛生兵を呼ぶ・・・だから・・・」
ラクスは今にも泣きそうになりながらもピエリにそう励ますがピ
エリは虫の息で助かりそうにないのは分かっていた。

「ラクス・・・ピエリ、ね・・・ずっとら、くすに嫌われてるの知って
いな・・・」

ピエリは息を切らしつつもラクスに伝えていく。

ラクスは嫌っていた筈のピエリの言葉を必死に聞こうとする。

「でもね・・・ピエリ、ラクスの事、が好き・・・になったから・・・
振り、向いて・・・欲しかった、の・・・最後、に・・・振り向いて
くれて嬉しかった・・・の」

「もう良い喋るな・・・！まだ死ぬ訳ではない。死ぬな・・・」
「・・・ラクス・・・あい、してるの・・・」

ピエリはそう言う息を引き取った。

ラクスは静かに眠る様に死んでいった。ピエリを寝かせると静かに
立ち上がりカムイの方に振り向いた。

カムイは明らかに動揺しきった顔で夜刀神を持つ腕が震えている。ラクスは怒りを露にしつつカムイに言う。

「・・・武器を構えろカムイ。貴様は私の妻を殺したただけで戸惑うつもりか？」

「ッ!?!」

「戸惑い止まると言うのなら・・・それは死んでいったピエリと私への侮辱だ。・・・さあ、武器を構えろ」

ラクスはそう言ってディアブロスをカムイに向けた。

自身の嫌っていた筈の存在を失い、初めて愛する者を失ったと気づいたラクスにはこれしかなかった。

ただ、目の前にいる敵と戦う・・・それだけを目的に。

if 番外編：もしも、ラクスが女性だったら・・・
前編

日の当たる白夜王国とは対の暗闇の広がる暗夜王国には、暗夜王ガロンと呼ばれる暴君が君臨していた。

暴虐の限りを尽くすガロン王には常に全身を鎧で纏い、兜で顔すら隠す騎士が控えていた。

その騎士の名はラクス。

暗夜王の懐刀と呼ばれる暗夜屈指の騎士である。

しかし、ラクスは白夜王スメラギの暗殺の際に白夜の忍びの不意討ちを受け、首元を斬りつけられ死亡した。

その姿を目元に斬り傷のある人物が無表情で見届け、姿を消していく事を知らずにスメラギ暗殺は幕を閉じていった。

数年後、暗夜と白夜はスメラギ暗殺での損害が双方大き過ぎた為、互いに戦う所ではなくなっていた。

白夜側は白夜王スメラギとスメラギに付いていた王女カムイの誘拐。

暗夜側は暗夜王国の土台を支えていた騎士ラクスと王女アクアの誘拐。

双方の土台と王女誘拐によって、戦争等と構ってる暇もなく互いに建て直しをしているのだ。

そんな中、暗夜王城では意気揚々とトレイに乗せたお茶菓子を運んでいる目元に斬り傷のあるメイドがいた。

メイドは鼻歌を奏でながら一つの部屋へ来るとノックする。

「カミラ様。言われたお茶菓子をお持ちしました」

「入って良いわよ」

メイドはその声を聞くとトレイを片手に持って、もう片方の手で扉を開けた。

中には暗夜王家の王女カミラとエリーゼの二人がいた。

「ふふ、待ってたわミラ。お茶菓子をテーブルに置いてくれるかしら？」

「はい」

ミラはカミラに言われた通り、テーブルに置くとエリーゼは大喜びだ。

「わあ美味しそうだね！ありがとうございますミラ！」

「喜んで頂きとても嬉しいです。エリーゼ様」

ミラは微笑みながらそう言うと、二人はお茶会を始める。

仲の良い二人にミラは微笑みながら見守っている中で、一つの記憶が呼び覚まされる。

それは鉞や鎌、鍬などで襲ってくる村人の集団から逃れようと必死に逃げ続けるミラ自身の姿だった。

目元に血を流しながら必死に逃げ続けるこの光景にミラはいつの間にか無表情になりつつあった。

「ミラ?」

「え・・・?」

ミラは突然、エリーゼに呼び掛けられて正気に戻るとミラはエリーゼに微笑む。

「何でしょうか?」

「何だか少し元気が無かったなくて、思ってた」

「・・・いえ、大丈夫です」

ミラはそう返すと、今度はカミラが心配そうに聞く。

「そう? 何だか何時もとは元気が無さそうだけど・・・」

「本当に大丈夫ですよ」

ミラは困ったような表情になると、カミラはやはり心配なのかミラに命令する。

「そうはいかないわ。貴方に少し休息をあげるから休んできて。貴方には多くの仕事を回してか疲れてるのよ・・・これは暗夜の王女としての命令よ」

カミラはそう言うと、ミラは諦めて一礼する。

「・・・分かりました。では、失礼します」

ミラは部屋を出ると、大きな溜め息をついて廊下を歩く。暇を持て余すミラはそのまま部屋に戻ろうとしていると、前から軍師のマクベスがやって来た。

「おや、ミラですか。丁度良かった」

「マクベス様。丁度良かったとは？」

ミラはマクベスに訪ねると、マクベスは答える。

「ガロン様がお呼びですよ。今日も、部屋に来いと」

マクベスの言葉にミラはまたかと言う表情をしそうになるが、押さえる。

「分かりました。すぐに向かいます」

「よろしい。では、行きなさい」

マクベスはそう言って歩いていってしまうと、ミラはまた溜め息をつけてガロンの部屋へと向かった。

ガロンの部屋では、部屋の中で外でも聞こえる声が男と女の物で別れて聞こえていた。

そこを通る者はガロンが王城でも美女と評判のミラを連れ込んで毎夜々と、夜伽をしていると言う噂を話している。

だが、その声の正体は机に向かつて大量にある案件の記された書類の山と格闘するガロンとミラがいた。

「どうしてこんなになるまで溜め込むのですか……」

「お前がわしの騎士を止めるからだろうが……」

「だからと言って止めた者を政務で濃き使わないでください……」

「すまんなラクス……」

ガロンの口からラクスと言う名が出ると、ミラは慌てた様に扉を方を見てからガロンに向く。

「ガロン様。その名は捨てたのです。今は暗夜王の懐刀ラクスではなく、メイドのミラです」

ミラの正体、それは暗殺事件で死んだとされたラクス本人だった。何故、死んだ事にしてでも騎士を止めたのかと言うと、ラクスとしての人生に嫌気をさし、ガロンに頼み込んで死んだ事にして騎士を止めたのだ。

王の騎士ではなく、一人の女性として人生を歩む為に。ラクスとしての顔は常に男として振る舞っていたおかげでメイドとして働いても何の影響もなく働いている。

「そうだったな……メイドのミラか。メイドとして暮らし始めてからわしの息子や娘達によく頼られているではないか？騎士のラクスはかなり嫌われておったのにな……」

「あれだけ殺して来れば嫌でも嫌われます。私はもうラクスではもう

ありません・・・メイドのミラ。それだけです」

騎士時代のミラはガロンの為ならどんな犠牲も問わない冷酷な騎士として知られていた。

ガロンの邪魔となる存在がいるなら暗殺し、反乱が起これば鎮圧して反乱を起こした者達を一族全員打ち首にする程だった。

その行動をガロン以外の王族達は気に入らず、常に嫌われ、避けられていた。

ミラはメイドとしての温厚な瞳ではなく、鋭い殺気だった瞳でガロンを睨んだ後に書類の方に目を戻す。

ガロンはミラのその行動を受けても平然と不適に笑いながら言う。

「白夜への復讐すら忘れてか？」

ガロンの言葉にミラの手が止まると、ガロンは続ける。

「お前は昔、わしの政治の圧力に負けた母と共に白夜へ亡命しようとしていた。平和で心の優しい白夜なら受け入れてくれる・・・そう信じて白夜へ向かってお前は母を亡くし、目元に永遠に消えない傷が残された」

「・・・何が、言いたいのですか？」

ミラは無表情でガロンにそう問うと、ガロンは率直に言う。

「もう一度、わしの騎士となり白夜を滅ぼさんか？奴等への復讐を果たしたくないか？」

「お断りします。私はもう、気にしていません・・・もうこれ以上の流

血は望んだりしませんから・・・」

ミラはそう言って立ち上がると、ガロンにお辞儀する。

「それでは、メイドとしての仕事がありますのでこれで失礼します」

ミラはそう言うとそのくさと立ち去って行き、一人残されたガロンは不適に笑い続ける。

if 番外編：もしも、ラクスが女性だったら・・・
後編

暗夜王城ではガロン主催の舞踏会が行われる事になっていた。

バトラーもメイドも慌ただしく動く中、ミラも例外ではなかった。

「全く、あの馬鹿のせいで本当に忙しいわ・・・！」

ミラはガロンに悪態をつきながらいつも以上に掃除をして、舞踏会用の料理を並べ、会場をセッティングする。

「・・・これなら大丈夫ね」

ミラはセッティングされた会場を見てそう呟くと、後ろから足音が聞こえ、ミラは振り替えるとそこには暗夜王国の第一王子マークスがいた。

「マークス様？」

「ミラ・・・」

マークスはミラを見つけるとゆっくりと歩いて来る。

その顔は何処か赤くしており、ミラはきよとんとしていた。

ミラの元にマークスがやって来ると、静寂が支配する。

「・・・あの、マークス様？何か御用があるのでは？」

「その、実はだな・・・」

マークスが何かを伝えようとするが中々言い出さず、ミラは首を傾げて困った様な表情をしていると、向こうから同業者のメイドに呼ばれる。

「ミラ！此方に来て！」

「はい！すみません、またの機会にお願いします」

「ま、待て」

マークスの制止を聞かずにミラは走って行ってしまい、マークスは項垂れた。

くマークス side

私は今まで色恋などに興味はなかった。

だが、数年前に新しく入ってきたメイドであるミラの事が気になっ

て仕方なくなっている私が出た。

ミラは誰よりも心配り、心優しく、しつかりとした良く出来た女性だ。

私はいつの間にかそんなミラに恋をしていた……。

通常なら王子とメイドの恋など認められる訳がないが、暗夜王国は実力主義の国だ。

身分が下でも認められるなら王族と平民の結婚すら許される。

ミラなら父上に認められる……いや、最初から認められている程のメイドだ。

だからこそ、私はミラへの恋を隠さない

その勢いで何度かアプローチはした。

だが……ミラはとても鈍感なのか私のアプローチに全く気付かず、微笑む姿を見せるだけだった。

私の想いを知ってか知らずか先程の様に告白に戸惑っている私に喋る事を促して余計に告白出来ない事もある。

だが、私は諦めん。

せめて、ミラに私の想いを告げるまでは……。

だから、私は今回の舞踏会で……

side終了)

あれから数時間後、ミラ達が準備を終えて夜になり、舞踏会が開かれた。

ガロンを中心に有数の貴族や騎士達が料理を食べたり、踊ったりする中でミラ達、使用人は王族、貴族達の為に追加の料理やワイン等の酒を持ってきたりと働いている。

だが、ミラは忙しい中で多く貴族や騎士達に取り囲まれてしまっていた。

「ミラ殿。どうか私と踊って頂けないか」

「す、すみません。私は仕事なので……」

「な、ならこの舞踏会が終わってからなら……!」

「いえ、その後にもまだありますので……」

勢いのついている貴族、騎士達にミラはたじろいでいると、奥から

エリーゼがやって来た。

「ミラー！」

貴族や騎士達はエリーゼだと分かると一斉に頭を下げ、ミラーも例外ではなく頭を下げる。

そんな中、エリーゼは無邪気にミラーの両手を掴む。

「ミラー！一緒に踊ろ！」

「エリーゼ様……すみません、まだ仕事なので……それに、私は女ですよ？」

「大丈夫だよ！行こ！」

エリーゼはそう言っつてミラーを連れて走って行く。

エリーゼに連れられて来るとそこにはカミラやレオンがいた。

「カミラ様、レオン様？」

ミラーは唾然としていると、レオンは呆れ顔でミラーに言う。

「全く……何してるんだよ。僕達がエリーゼに言っつて連れ出さなかつたらずつと囲まれてたよ」

「うッ、申し訳ありません……」

レオンの言葉にミラーは申し訳なそうに頭を下げると、カミラは微笑みながら言う。

「謝る事ではないわ。悪いのは貴方を困らせる人達だもの」

「そうだよ！幾らミラーさんが綺麗な人でも困らせるなんて！」

カミラに続いてエリーゼがそう言っつと、ミラーは困った様に微笑む。

「私は……綺麗ではありませんよ。ほら、目元にこんな斬り傷がありますし」

ミラーがそう言っつと、三人は溜め息をついた。

確かに目元に目立つ斬り傷があるものの、それを除けばとても理想的な女性だと言っつのにミラーは自覚のしていないのだ。

ミラーは三人の溜め息に困惑していると、広場の大扉が開かれてガロンとマークスの二人が入っつてきた。

「あら、マークス兄さんも来たわね」

「いつもなら私達と一緒に来てた筈なのに・・・何してたのかな？」

「父上と一緒にいたんだ。何かあるんだろうね」

三人はそれぞれの感想を言い合っていると、ガロンが演説始める。

全員がガロンに注目し、会場が静かだ。

「ふむ・・・今回、集まって貰った事を感謝しよう。我々のこの暗夜には光は無い・・・だが、光が無いのなら得るまでの事！光が与えられないのなら奪うまでの事！この行為は全ては民の為だ！」

ミラは無表情でガロンの演説を聞いていた。

普通のガロンならこんな演説はしない、全てミラが事前に用意し、覚えさせた物だ。

この演説によつて、貴族や騎士、そして王族の兄妹達は暗夜の方針が正しいと誤認し、協力的な行動をする様にする為の偽りの正義の演説だ。

ミラは騎士は止めた・・・だが、根本的に政治から遠からず、常にガロンを支え続ける姿は正しく影の支配者だった。

「暗夜の民は飢えに苦しんでおる・・・我らはこれほどまでに贅沢出来るのは民の努力だ。その民に相応の対価を取らせるべきであろう・・・ならば、民の為に安全で、豊かで、光ある土地を手にするべきだ！民の全てが幸福になるまで我らは止まる事は出来ん！今回の舞踏会はこれからの厳しい道のりを共に進む事への労いだ。好きだけ楽しんで行つてくれ」

ガロンの演説が終わると、会場は大きな拍手が巻き起こった。

ミラはガロンが演説を終えた事で、安堵していると突然ガロンの声が響いた。

「舞踏会を楽しむ前にまだ話さなければならぬ事がある・・・マークス」

ガロンがそう言うと、マークスが出てきた。

” 予定に無い・・・！”

ミラがそう思う中、会場内がざわつく中でマークスは話続ける。

「すまないが皆に言わなければならぬ事がある・・・私は暗夜王国の第一王子として多くの責務を果たしていると思つている。だが、暗夜

王国一の騎士と言う誉れ得ても私にはまだ足りない物がある。それは・・・私の、伴侶だ」

マークスの言葉に最大級のざわつきが巻き起こった。

これには他の兄妹達も驚いており、ミラ自身も驚いている。

「私は今までは伴侶を得るなど興味は無かった・・・だが、一人の女性がその考えを壊し、私を夢中にさせている。私は今宵、その女性に求婚したいと思う！」

マークスの宣言に貴族や騎士の息女達は興奮を隠せず声を出した。

マークスは辺りを見渡した後、見つけたのかゆつくりと近づいて行き、回りが見守る中でその女性の前に膝を着くと手を優しくゆつくりと取る。

「・・・どうか、私の妻になってくれないか?・・・ミラ」

マークスの求婚相手・・・それはミラだった。

「・・・え?」

そう、ミラが求婚受けたのだ。

辺りは驚きの声を挙げる中、ミラは完全に戸惑い、混乱してしまっ

た。

「え・・・え、わ、わわ、私ですか!」

「そうだ・・・私は、お前の事が好きだ。ミラ・・・結婚をしてくれるか?」

「で、ですが私は・・・」

ミラはガロンに視線を送り、助けを求めるがガロンは知らんぷりである。

ミラはそれを見てガロンに謀られた事を知った。

「(あの、クソ親父・・・!)」

「ミラ?」

「え?」

「早く、返事を聞かせてくれないか?・・・緊張して落ち着かんだ」

マークスの言葉にミラは顔を紅く染め上げ始めた時、頭の中にある記憶の片隅を思い出してしまう。

それはラクスとして活躍して頃、多くの者を殺し、自身を血に染め上げ、マークス達から嫌われた本当の自身の姿をだ。

兜を取ったその素顔はまるで何も関心が無いように無表情で、ミラ自身ですら寒気を覚えた。

ミラは自身、ラクスとして得た罪を償う為にも幸せではいけない。だから、ミラはマークスに対してこう告げた。

「・・・出来ません」

「すまない、よく聞こえなかったのだが？」

「結婚の申し出は・・・お受け出来ません・・・」

ミラの返答にマークスはおろか、カミラ達も驚きの声を挙げた。

身分の上のしかも、第一王子からの結婚の申し出を断るのはそれほどまでに驚かせる物なのだ。

「・・・何故だ、ミラ？」

「私は・・・マークス様の伴侶に相応しくありません。私はメイドですし、身分は平民ですし、それにこの傷が・・・」

ミラは必死に言い訳を探してマークスに言う。

自身の過去については話さず、マークスからの求婚を回避しようとするも、マークスは全く諦める素振りを見せない。

「この暗夜では身分などは関係ない・・・それに、私は人を見た目で判断して求婚などもしない・・・ミラ、私はお前の中身を見て惚れているのだ」

「ッ!?!?!」

ミラはつい、顔を紅く染め上げるがそれでも無理な物は無理だった。

もしも、マークスと結ばれたらとミラは思い始めるが、ミラは自身の影であるラクスの姿がまた見えると更に結婚など出来ないと思わせる。

「出来ない物は出来ません・・・すみません、失礼します・・・!」

「ミラー」

ミラはマークスの制止を聞かずに逃げる様に走り去って行き、会場内を啞然とさせた。

暗夜王城の地下にある地下街に逃げ込んだミラは酒場の個室で酒を大量に飲んでた。

「何で……何で私なのよ……」

「私に言われてもね……」

ミラは泥酔している中、ミラの数少ない身内であり、親友のベルカに呆れなれていた。

「貴方、まだ過去の事を背負ってるなんて思いもしなかったわ」

「……だって、下ろしたくても下ろせないのよ……私の、ラクスとしての過去は……」

「はあ……全く、貴方って人は……」

ベルカはそう言うと言われたエールを一口飲む。

「それでどうするの？マークス様の求婚を断ってしまったから」

「……もう、メイドじゃいらねないのかな」

ミラは不安そうに言う。

公の場でマークスの求婚を断り、振ってしまった事でマークスに大恥をかかせたと見られてもおかしくない。

それで、良くてメイド首宣告、悪くて物理的に首宣告をされる可能性がある。

「もし、いられなくなったら亡命するしかないわ。例えば白夜」

「白夜だけはお断りよ！白夜に行くぐらいなら処刑される方がマシだわ！」

ミラはそう叫ぶとテーブルを勢いよく叩く。

ベルカはミラに対して白夜の事を言うのは禁句だったのを思い出し、謝る。

「ごめん。貴方に白夜の事は禁句だったわね……」

「……此方もごめん」

お互いに謝り、重たい空気が流れる中、ベルカは提案する。

「……もし、メイドが駄目になったら。暗殺家業を再開したら？」

「また・・・暗殺者になるの？」

ミラは騎士になるはずと前、ベルカの養父の弟子になり、暗殺者として技を磨いていた。

多くのターゲットや自分の命を狙ってきた暗殺者を返り討ちにするなどと、名を挙げていき、遂にはガロンの臣下になる程になった。

「暗殺はラクスの十八番だった事は分かっている・・・でも、他にやれる職は無いわよ？」

「・・・そうね。もし、メイドじゃいられなくなったら・・・暗殺者に」「暗殺者が何だ？」

ミラとベルカがビクツと羽上がると、そこにはマークスが立っていた。

「ま、マークス様・・・！」

ミラはマークスの姿を見て青ざめつつ、マークスに問う。

「・・・いつから、そこに？」

「・・・暗殺はラクスの十八番の所までだ」

ミラはそれを聞いて終わったと心の中で呟くと、奥底から溢れる絶望に泣きそうになる。

「・・・お前はラクスなのか？」

「ッ！」

「凶星か・・・」

マークスに自身がラクスだとバレたミラは本当に泣きそうになった。

ラクスとしてのミラはマークス達に嫌われ、ミラ自身は気にしていた。

だから、また嫌われるのではと思うと余計だ。

「まさか、お前がラクスだったとはな・・・」

「待ってください！彼女は・・・」

「ベルカ。もう良いの・・・どのみち、私は光には入れなかっただけ・・・闇は闇なのよ・・・」

ミラは悲しげにそう言うと、ベルカは黙るしかなかった。

マークスは無言でいると、ミラは悲しげにマークスを見ると問う。

「私は・・・貴方様に大恥を晒してしまいました・・・マークス様は、私をどうしたいのですか？」

ミラはそう聞くと、マークスは惚けた様な顔でミラに返答する。

「何の事だ？別に大恥などかいてはいらない」

「え・・・？」

ミラはマークスの言葉に唾然としてみると、マークスはミラの手を取る。

「また此処でお前に求婚し、お前から良い返事をくれれば大恥などかいてはいない」

「マークス様・・・！私は・・・」

「分かっている・・・だが、今のお前はミラだ。私は確かにラクスとしてのお前を嫌っていた。だが、それはお前の本質を見ていなかっただけだけだ」

「・・・その本質すら仮面かもしれないませんか？」

「なら、その仮面を本当の顔にするまでだ。・・・ミラ、もう一度言うぞ・・・私と結婚してくれないか？」

マークスの求婚にミラは自身の心を押さえきれず、遂に首を縦に振った。

「・・・結局、相談は意味無かったわね」

二人が仲睦まじい姿を見せる中、ベルカはエールを飲む。

その頃、暗夜王城にいるレオンは本を読んでいた時、後ろに眼帯をした男が現れた。

「レオン様。ミラに関しての経歴を調べましたよ」

「ご苦労ゼロ。それで結果は？」

「経歴の全ては嘘です。全く、本当の経歴だけが見えず、嘘だらけです。出生も調べましたが貴族の行儀見習いとして来たのではなく、本当の出生は俺と同じ貧民です」

「貧民？・・・なら何故、彼女は父上とあそこまでに近いんだ・・・」

レオンはミラが求婚を蹴る前からミラの事を調べていた。

何故なら、ミラはガロンのお氣にのメイドであり、そして証拠は掴めてはいなが、暗夜の政治に荷担していると言う情報も得ている。

「・・・もし、ミラが本当に政治に口を出せる様な立場なら・・・このままマークス兄さんと結婚すれば危険かもね」

「殺しますか?」

「いや、下手な事はしたくない。やりたくはないけど、彼女を監視するぐらいに留めるよ」

レオンはそう言って窓から外を見る。

「・・・彼女が暗夜の厄災でない事を祈るしかないか」

レオンはそれだけを言うと本に目を戻した。

過去番外編：暗夜の懐刀〜前編〜

常に夜の国、暗夜王国。

その国は四六時中、夜の世界であり、光が無い為に作物はおろか草木に渡って緑が無い。

そんな暗夜はガロンが侵略を日常的に行い始め、結果として暗夜は他国や部族挙げ句の果てには国内にも敵を作ってしまった。

それでもガロンは侵略を止めずにいる中、そんなガロンに対して正義感を出した者達が再び現れた。

その者達は暗夜の政務官であり、ガロンの政策に我慢の限界を感じたのだ。

だが、そんな彼らは暗夜の闇に包まれる様に消える・・・

ある日、政務官達は暗殺された。

喉や胸、動脈等と急所を正確に切り裂かれて見つかったのだ。

その次も政務官が同じ手口で殺された。

その次は反ガロン派の大貴族。

その次は軍の一部隊を任された反ガロン派の騎士。

どれもこれも同じ手口であり、人々はこの奇怪な連続殺人に共通点がある事を知った。

それは全員がガロンに反抗的な存在だったと言う事だ。

前に殺害された騎士は反乱を企てていると噂があり、ガロンの言葉の中には「芽は早い内に摘む方が良い」と言っていた事からガロンの刺客に暗殺されたと大きな噂になった。

犯人は誰か？ガロンが扱う刺客は？

そこで挙げられた刺客と思われる人物が出た。

その人物はラクス。

暗夜王の懐刀と称される程の凄腕の騎士であり、暗夜の政治の大部分を任される程の政務官だ。

ラクスはガロン派の人間の中ではガロンに最も忠誠を誓っており、ガロンの為ならどんな汚れ仕事もこなす事は有名だった。

これは、暗夜王の懐刀ラクスの暗殺者として物語である。

暗夜の暗闇の中、一人の男が必死に走っていた。

男は暗夜王国の公爵で、徐々に圧政と戦争によつて疲弊する暗夜王国を憂いて暗夜王ガロンを王位から退けようと画策していた。

だが、計画を実行する前に男に賛同した他の貴族が無惨な死体で見され、男もまた命を狙われる。

「くそ・・・ガロンめ！」

男がそう言った時、背中に激しい痛みが走り倒れ伏す。

男は這いつくばっても逃げようするが、背中に剣を突き立てられて死亡した。

男が死亡した事を確認した追跡者である騎士ラクスは何の感情も無いとばかりに男を見た後で立ち去った。

場所は変わり、暗夜王城にある玉座の間でガロンに暗殺の成功を知らせるラクスがいた。

「以上が、謀反人一党暗殺のご報告です」

「そうか。よくやった・・・これでまた火種は消え去り、暗夜の情勢も少しは落ち着くだろう」

ガロンは玉座に深く座り直すと、ラクスはガロンに政策に関しての進言を挙げた。

「しかし、まだこの暗夜に反旗を翻そうとする者は後が絶ちません……何か政策を変えてみてはどうですか？」

「ほお、政策を変えるか……して、どの様にだ？」

「例えるなら……税率を下げ、徴兵を一時的に止める等と民衆の不安を減らす事から始めるべきかと。そうすれば自ずと火種は減らせませぬ」

ラクスの進言にガロンは考える様に髭を撫でた後、ラクスに命じた。

「では、お前の提示した政策を実行せよ。だが、我が国の方針である白夜侵攻に響く様な事はするな」

「かしこまりました。では、これで……」

ラクスは立ち上がるとガロンに一礼してから玉座の間を後にしようとした。

だが、そこでガロンに呼び止められる。

「待てラクス」

「はい、如何なさいましたか？」

ガロンにラクスはそう問うと、ガロンは内容を伝える。

「今、思い出したが……また火種を撒き散らそうとする不穏分子がおる。お前に何時もの様に脅威を抑える事を命ずる。その脅威は……氷の部族だ」

「氷の部族ですか？」

氷の部族は暗夜王国が氷の部族の長であるクーリアに臣従を迫り、属領にしたのだ。

その氷の部族に不穏な動きがあると言うのはラクスも初耳だった。「奴等は我が国が各地の脅威を払っている隙を突いて反旗を翻し、独立を目論んでおると報告で聞いた。お前には奴等の真意を見抜き、火種を消せ。政策はそれが終えてからだ」

「……分かりました。では、出陣の準備を行いに行きますので今度こそこれで……」

ラクスは今度こそと玉座の間から出ていくと氷の部族の里に向かう為の準備に向かった。

過去番外編：暗夜の懐刀く中編く

暗夜王国の北にある氷の部族の里。

その名の通り氷の力を使う事が出来る為、その力に目を付けた暗夜王国の圧力が氷の部族の里を襲い、属領化せざるおえなくなつた。

だが、氷の部族達は暗夜からの独立を諦めず、反旗を翻す機会を伺っていた。

だが、そこで予想だにしない客人・・・いや、客人達が来訪した。「どうして・・・どうして、あの暗夜王の懐刀であるラクス自らが・・・軍を、率いてくるとは・・・！」

部族兵からの暗夜軍接近の知らせを受けたクーリアは慌てて来ると、そこには暗夜軍の大軍がそこにおり、先頭には黒を主色とする鎧を着込む暗夜でも異様な程に黒で統一した鎧兜を纏い、馬に誇るラクスがいた。

「クーリア様・・・！」

「落ち着け・・・！下手に、行動はしないように・・・」

クーリアは少し深呼吸をすると、意を決してラクスの元に向かう。

反旗を翻そうとしている事がバレて殺されるかもしれない・・・そんな考えがクーリアに過るがラクスが単に別の要件で訪れた可能性はまだあつた。

だから、クーリアは悪い報告に行かない事を願いつつ、ラクスの前に立った。

「ラクス卿。お出迎えにあがりました・・・」

「・・・クーリア殿が自ら出迎えて下さるか。下の者に任せて貴殿は別の案件に集中してもよ良かったのだがな？」

ラクスの言葉にクーリアはギクリツと体を震わせるも、苦笑し誤魔化す。

「暗夜王の側近である貴方が来たのに代理では流石に失礼ですから」

「それもそうだな・・・此処に来たのは遠征次いで単なる様子見だ。

この里が暗夜の軍門に下つてまだ日が浅い。我が国を困らせる様な事は起こっていないかと思ひ立ち寄つたが、大丈夫そうだな」

ラクスがそう言うと、クーリアは安堵しラクスを屋敷まで案内する。

屋敷に通されたラクスはクーリアと共に客間に来ると向かい合つて椅子に座る。

「さて・・・様子見に来たと言ったが、クーリア殿。貴殿は何か私に隠してはいないな？」

クーリアはラクスのその言葉に冷や汗をかいた。

ラクスはクーリアの表情が僅かに変化したのを見逃さず、更に追及を続ける。

まるで、罪人の尋問の様だ。

「貴殿に、いや・・・この氷の部族全体に謀反の準備が進められていると言う噂が王都に流れていましたね。まさかと思いますが・・・謀反などと考えてませんかよね？」

「・・・いえ、謀反など考えておりません。氷の部族と暗夜王国では力の差がありすぎますので」

クーリアは何としてもラクスからの追及を逃れたかった。

暗夜に反旗を知られれば氷の部族は滅ぼしれ、部族達は全て首を切り落とされて国の見せしめにされるのは分かりきっていた。

今此処で戦う道を選んでも暗夜軍は大軍、しかも百戦錬磨の名将であるラクスが率いている為、勝ち目は無い。

「力の差が有りすぎる・・・だが、それでも我が国に対する謀反の火は消えない。例え小さな村でも謀反に手を貸す・・・その中の内に、氷の部族が入っていてもおかしくないと思うが？」

「・・・謀反など、考えておりません」

「それを証明する証拠は？」

ラクスは鋭い殺気と疑惑を含めた視線で睨みながらクーリアにそう言うと、クーリアは次の言い訳が思い付かなかった。

「(これまでか・・・!)」

クーリアはラクスの厳しい追及に耐えきれず、魔導書を手にした時、扉が開かれた。

入ってきたのは紅茶を入れたポッドやカップ、お茶菓子を乗せたトレイを覚束ない手で持つてくる茶髪の少女がやって来た。

「お、お茶をお持ちしました・・・！」

少女はそう言つて歩こうとした時、勢いよく転んでしまい、そのままラクスの顔に目掛けて飛び出た紅茶が当たった。

「ラクス卿!？」

クーリアは思わず立ち上がつて叫び、ラクスは無言のまま失態を犯した少女を見つめる。

少女は転けた態勢で怯える中、クーリアは慌てて頭を下げた。

「申し訳ございません！娘のフェリシアが何と言う粗相を！」

クーリアは全てが終わつたと考えた。

暗夜王の側近であるラクスの兜で隠された顔に紅茶を浴びせるなど、里を攻められてもおかしくない状況だった。

クーリアは震えるつつもラクスの返答を待っていた時、ラクスは立ち上がりフェリシアの元に来る。

「(ま、まさかフェリシアを殺すつもりか・・・!)」

クーリアはフェリシアが怒りを買つて殺されるのではと思つた時、ラクスはフェリシアの頭を撫でた。

「大丈夫か？」

「へ・・・？」

「大丈夫かと聞いている」

「は、はい！」

ラクスはフェリシアの言葉を聞くと、フェリシアを持ち上げて立ち上がらせた。

クーリアは啞然としてみると、ラクスは愉快そうに言う。

「何だ、私が子供に手を挙げると思つたのか？こんな事で一々怒つたりはしない」

「し、しかし・・・」

「しかしではない。私は子供に手を上げる行為は嫌いだ。子供に手を

上げる様な・・・非道な手段を取る事は人として堕ちた事を意味するからな」

ラクスはそう言うのと扉の元へ行き、ドアノブに手を掛けた。

「そうだ、忘れていたが。近い内にお前の娘二人を行儀見習いに出させる」

「行儀見習いですか・・・まさか」

「そのまさか・・・と、言った所だな」

ラクスはフェリシアとクーリアのもう一人の娘であるフローラの事を考えていた。

この二人を人質にすればクーリアは下手な事は出来なくなり、争う理由も無くなる。

ラクスは無駄な戦いは避ける事と同時にある事も視野に入れていた。

「カムイ様の元にもそれなりに人が集まっても問題ないからな・・・」

ラクスは今だに暗夜の王族として囚われているカムイの事を思う。

カムイには暗夜での味方が少なく、マークス達とギョントー、左遷と言う形で見込みのありそうな少年ジョーカー等とガロンと言う脅威から守り通すには味方が少なすぎた。

マークス達ならガロンに進言可能だが、ガロンがそれを聞くとは限らない。

もし、カムイがガロンからの脅威を逃れて北の城塞を出ても味方がいなければどうなるかは目に見えている。

だから、せめてカムイの味方となりそうな者を集め地盤を固めようとラクスは画策していた。

フェリシアはどんくさい性格だとラクスにはすぐに分かったが動きからして戦闘を極めればかなり使える存在になるとラクスは分かった。

本当はフローラだけを行儀見習いに出すつもりでいたラクスも、フェリシアも加えた。

「良いか？必ず、二人を行儀見習いに出せ。これは・・・命令だ」

ラクスはそう言うとクーリアは表情を暗くして命令を承諾した。
ラクスは去り際にフェリシアを見ると部屋を出ていき、暗夜王城へ
帰還する事を決めた。

過去番外編：暗夜の懐刀〜後編〜

氷の部族の謀反の火を消したラクスは仕事に明け暮れていた。

仕事と言っても血塗られた戦い・・・謂わば虐殺を行っており、ラクスは帰り血が飛ぼうと命乞いをされようとも容赦なく剣を振るい、罪も無いただ生きるのに必死だった民を殺していく。

ラクスの進言で行う筈だった緩和政策はどの様な手段を取ったのかマクベスに握り潰されてしまい、ラクスには反乱の平定と言う名の虐殺を命じられ今に当たる。

「虚しい物だな・・・この地位になっても何も変わらない、変えられないとは・・・」

ラクスは権力を持てば多少は国を良くする事が出来ると信じ、望みもしない地位を次々と得て遂に暗夜王の懐刀の異名と側近の地位を手にしたが、軍師マクベスによる妨害やまともな政策をガロンに提示しても却下される等と国を変えられなかった。

「・・・私は、何がしたかったんだ。国を変えられず、民を殺し、次代を背負う王族にも嫌われて・・・私は・・・」

ラクスは拳を握った時、反乱を起こした民が武器を手にラクスに向かって行く。

ラクスは向かって来る民を素早く斬り捨てると、奥へ進み襲われては斬り、また進んでは襲われたから斬るを繰り返す。

もはやラクスに勝てる者は皆無とした言えず、遂に反乱を平定し、反乱のあつた集落は炎に包み込まれた。

ラクスはそれを見届けると、兵士達が集まってラクスの指示を待っており、ラクスは馬に股がって指示を出した。

「帰るぞー」

ラクスはそう言うと、帰還する為に馬を進める。

兵士達もそれに続いて行き、軍靴の音だけが炎に包まれた空間に鳴り響く。

暗夜王城に帰還したラクスはガロンに報告し終え、自身の執務室で仕事をしようと城内を移動していた。

移動している最中、暗夜王国の貴族やメイド、バトラーや拳げ句の果てには兵士達からヒソヒソとラクスを見ながら話していた。

「来たぞ、ラクス卿だ」

「あれが暗夜王の懐刀……」

「良いか新人……？よく覚えておくんだ……ラクス卿だけは敵に回すな、殺されるからな……」

「恐ろしいわ……」

「あの、鎧兜だけでも不気味だと言うのに……更に騎士に相応しくない暗殺を行うと噂がある……」

「恐ろしい者だ、全くです……」

色々な言葉がラクスの耳に入るが、何時もの事だと気にも止めずに執務室にやって来て扉を開けようとした。

「ラクス」

ラクスは声を掛けられた方を見ると、そこにはラクスの幼馴染みで唯一、ラクスを恐れずに側に来るベルカがやって来た。

「どうした、お前が私の私室ではなく此処に来るとは？」

「仕事の報告よ。ガロン様は忙しいみたいだから貴方を通させて」

「そうか……なら、報告次いでに紅茶でも飲んで行くか？良い茶葉を拝借してな」

「拝借？」

ラクスはしまったとばかりに口ごもるが、無言で扉を開けてベルカを招く。

ラクスはベルカを執務室にある客人用のソファアに座らせると、ラクスは紅茶を入れてお茶菓子をソファア前にあるテーブルに配膳する。

配膳を終えたラクスはソファアに座ると、兜を脱いで素顔を晒す。

「さて、まずは報告をしてくれ」

「ええ、まずは……」

ベルカは持参していた荷物入れから血の付いたペンダントと訓練用の木剣を取り出しラクスに見せた。

ラクスは二つを受け取ると確認し、確認を終えると二つを自身の横に置いた。

「すまないな・・・こんな汚れ仕事をさせてしまうとは・・・」

「良いわ別に・・・それよりも貴方、後悔は無いの？騎士としての恩師である、ギユンター卿の婦人とその子を暗殺を計画するなんて」

「他ならぬガロン様のご命令だ。逆らう事は許されない・・・」

ラクスはそう言うと、紅茶を飲む。

ベルカはラクスを見つめながら少し悲しい顔をする。

「・・・貴方は変わった。昔とは違う・・・」

「私が、変わった？」

「昔は俺だったのに私になって、面倒くさがりだったのに

に絵に描いた様に真面目になって、軍を率いて誰よりも殺しをする様になった。本当に・・・変わったわ」

ベルカの言葉にラクスは微笑みながらカップを置いた。

「お前も変わったよ。カミラ様とルーナと出会ってな・・・以前よりも笑い、楽しげにしている。殺し屋としての顔は未だにあるが、それでも・・・カミラ様とルーナに出会ってからは本当に変わったぞ」

ラクスがそう言うと、笑いつつお茶菓子を食べる。

ベルカはガロンの配下として徐々に血に染まるラクスを見ていつか壊れるのではと、思い始めた。

ラクスは誰よりも殺し、誰よりも争いを嫌って苦しむ。

ラクスのメンタルが弱い事を知っているベルカはそう考え始めるとラクスを良い方向に導こうとしようとした。

王族の臣下と言う立場を捨ててでもラクスの心を守ろうとした。

「ラクス、私と」

ベルカが言葉を言い掛けた瞬間、部屋の扉が開かれてラクスは素早く兜を着けて身構えると、そこにはカミラが立っていた。

「ベルカ・・・！」

「カミラ様？」

急に入って来たカミラ王女にベルカとラクスは固まっていると、カミラはベルカを見て安堵した様な顔をした。

「・・・良かった。ベルカがラクスの執務室に入ったと聞いててつきり・・・」

「私を何だと思っているのですか、カミラ様？」

「怖い人とは思っているのは、確かかしらね・・・」

カミラがそう言うと、ラクスは溜め息をつく。

「ベルカ。どうやらお前を長居させてしまった様だ・・・もう報告は終わらせて帰っても良いぞ」

「・・・分かりました、ラクス卿」

ベルカは渋々、カミラと部屋を出るとラクスは執務室の窓の外を見る。

外は少ない光しかなく不気味な世界が広がっており、暗夜の今を物語っていた。

「私が、変わった・・・か・・・」

ラクスはベルカに変わったと言われた事を気にし、兜を撫でた。

この兜に隠された顔も、表情も恐らくベルカとガロンそして親衛隊の面々以外には誰にも知られる事なく生涯を終えるだろうとラクスは考え、執務に戻った。

その後起きる、出来事で運命が変わるとは知らずに・・・

コラボ企画番外編3：ヤンデレはお好き？

とある辺境の街。

その街は片田舎と言うには建物が多く、都会と言うには規模が小さい何処にでもありそうな所だった。

だがその街はある事で有名で、よく男女の二人旅が訪れる。

”そう、男女の二人旅だ”

その有名な物とは、男女のカップルが街の名所とも言える木の下で口と口を重ねれば必ず永久に結ばれると言う物だ。

口と口・・・そう、つまりキスの事である。

これは、カップルの名所である街で巻き起こる前代未聞の事件の記録である。

カップルの名所である街に異様な格好をした男女が歩いていた。

「たく、今度は俺達が旅行かよ」

「良いじゃない別に。母さんがせっかく用意してくれた旅行よ」

「どうせならベルカと来たかったよ・・・」

その男女は此処とは違う異世界の住民、マーシレスとその娘のスマカ。

マーシレスとスマカはベルカから日頃の仕事の休みと親子の仲を深めさせようと用意した旅行に来ており、カップルの名所ではあるが、少しだけ観光名所としても名があるこの街に立ち寄ったのだ。

「しかし、カップルの名所か・・・本当にやけにカップルが多いぜ」

マーシレスはそう言っただけで辺りを見渡すと、右も左も前も後ろも全てカップルで埋め尽くされていた。

今にもハートが出てきそうな雰囲気の中、二人は観光していると、向こうからとんでもない速さで走ってくる鎧姿の騎士が走ってきた。

「レーラー・マクラス！何処にいるー！！！！」

その騎士は暗夜の懐刀の異名で呼ばれるラクスだが、暗夜の重臣的

存在のラクスは現在では威厳を放り捨てて鬼の形相で走っている。

「レーラのお父さん!？」

「あいつ、何してんだ？」

二人は立ち尽くしてラクスを見てみると、ラクスは二人の前で止まった。

「マーシレスとスミカか!今回はどう・・・いや、今はそれは置いておくとして・・・マーシレス、スミカ。レーラとマクラスを見ていないか!」

「レーラとマクラス?見てないぞ俺は」

「私も」

「・・・そうか」

二人の答えにラクスは息を切らしつつ落胆すると、ラクスの後ろからラクスの部隊である親衛隊数名がやって来た。

「本当に、待つてください・・・隊、長・・・!」

「はあ・・・はあ・・・やっと、追い付きました・・・」

息を切らしてラクスにそう言うと、ラクスは息を切らした親衛隊を見て怒鳴り散らした。

「馬鹿者!息を切らしている暇があるならレーラとマクラスを探せ!

あの二人がアレを実行する前に何としてと止めるんだ!!!」

「し、しかし・・・それでしたら待ち伏せすれば済む話では・・・?」

「甘いぞ・・・彼奴らが私の追跡を予想して今すぐに実行しようとはしないのは明白。それに彼奴らはキスをする前に此処を観光する可能性もあしな・・・それに何時、来るか分からない二人を待っていたらアレ以上の行為をするかもしれないだろ!!!」

「いやいや、お嬢様が嫁入り前にそれ以上はしなないと思いますが・・・多分」

ラクスの無茶苦茶な言動に親衛隊達は困り果てた様子でラクスを宥める。

その光景をマーシレスとスミカはこの空気をどうするかと考える。

「・・・なあ、スミカ。取り敢えず彼奴から訳を聞いてくれ」

「はあ!?何で私なのよ!聞くなら父さんが聞きなさいよ!」

「いやだつて、関わりたくないぞ。関わったら間違ひなく面倒な事になる感じだぞ本当に」

マーシレスとスミカはどちらが訳を聞く役になるのか揉めていると、ラクスは一通り親衛隊を一喝したのか、親衛隊を散開させて捜索させ始める。

「・・・さて、取り敢えず私は時間が無い。何か用があるならまたの機会にしてくれ」

ラクスはそう言つて走つて行き、残された二人は立ち尽くして啞然としつつも助かつたと内心では安心してゐた。

「はあ、何だつたんだよ・・・レーラとマクラスが二人きりになるのがそんなに駄目なのか？」

「二人きり・・・ああ、成る程ね。分かつたわ」

「何が分かつたんだよ？」

「この街、カップルの名所でしょ？ある木の下でキスをするると永久に結ばれるつて聞いているでしょ？」

「・・・ああ、成る程な。要するにレーラとマクラスが此処にデート的な何かで来てて、それを察知したラクスが親馬鹿本能丸出しで部隊を連れて追いかけてきたつて事か」

マーシレスはそう言つと、スミカは頷くとマーシレスは呆れつつもラクスに同情する。

「まあ、分からない事はねえけどな・・・」

マーシレスはそう呟き、それを聞いたスミカが首を傾げていた時、また誰かがマーシレス達の前に走つてきて止まった。

「マーシレスさん、スミカ！」

「どうした？えらく慌てて。レーラと熱々のデートをしてるんじゃないのか？」

マーシレスは半分からかいつつマクラスにそう言つと、マクラスはマーシレスの両肩を掴んで必死な形相をした。

「お願いです！匿つてくださいー！」

「な、何だよ！匿うつて誰から」

マーシレスが聞きかけた時、向こうからゆっくりと歩いて来る何時

もの鎧姿ではなく、私服を着ているレーラが現れた。

「マクラス、そこにいたのね。あ、マーシレスさんとスミカさんも来たのですか?」

「ああ、観光にね。なあ、何かマクラスがかなり怯えてるが…一体、何しようとしてやがったんだ?」

マーシレスは意を決してそう聞くと、レーラは両手で頬を押さえながら照れる。

「もう、マーシレスさんたら!此処に来た理由は分かりますよね?」

「噂の…願い事をしに来たの?」

スミカがそう聞くと、レーラは微笑んで頷く。

「そうです。マクラスさんと…その、デートで来たんですがマクラスさんが照れちゃって逃げ出してしまったので迎えに来たんです。／＼

レーラの言葉を聞いたマーシレスはマクラスを見てみると、全力で首を横に震るマクラスがそこにいた。

マーシレスとスミカは間違いなく、騒動に巻き込まれた事を感じとり、後退りながら誤魔化す。

「おいおい、マクラス本人は首を物凄く横に振ってるぜ?何したらそうなるんだよ」

「え?普通に買い物に行こうと誘って、馬車に乗せたあと飲み物に入れた睡眠薬で眠らせてからこの街に運んで例の名所でキスをしようとしただけですけど?もしかして邪魔をするのですか?もし邪魔をするなら…友人である貴方方二人でも容赦は致しませんよ?マクラスさんは私の物です、例え貴方方二人が立ちほだかろうと彼を物に見せます」

レーラは今まで輝かしていた瞳を暗く濁しながらそう言うと、マーシレスは得体のしれない雰囲気を感じとり、寒気が背中を走る。

「(おいおい、こいつヤンデレ系女子だったのか!?瞳が濁っちゃってるぞおい!)」

「と、父さん…!」

スミカもレーラの以上に気付いたのかマーシレスを呼び掛けると、マーシレスは未だに瞳を濁らせているレーラの方を向くと。

「じゃあ、俺達は観光するからまたな」

それを言うと、マーシレスは全速力でスミカを引っ張って逃げた。

「くそ！観光に来ただけで何でヤンデレ化したレーラと会わなきゃならねえんだよ！」

「父さん！後ろ後ろ！」

「え？」

マーシレスは後ろを見ると、レーラが微笑みながら全力で追い掛けて来ていた。

「ちよつと待てー！ー！何で追い掛けて来てるの!?マクラスは置いてきたじゃん！」

マーシレスがそう叫んだ時、横にレーダーの反応を感知したマーシレスが見てみると、そこに共に全力で逃げるマクラスがいた。

「お前も来てたのかよ!?!」

「いやだって、置いてかれたら捕まるじゃないですか！」

「だからって此方に逃げてくんなよ！」

三人は必死に病んだレーラから逃げていると、前方にラクスが歩いているのが見え、全速力でラクスの元に走った。

「ラーラークラーラーズーラー!!!」

「ん？何だマー・・・て、マクラス！見つけたぞ！」

「ラクス卿！お叱りは後で受けますから助けて！」

マクラスの必死の叫びを聞いたラクスはマーシレス達の後ろを見ると、全力で追い掛ける病み状態のレーラが追い掛けていた。

「な、何だ・・・!?!」

ラクスは微笑みながら全力で追い掛けているレーラを目撃した時、マーシレス達はラクスを通り抜けるとレーラは飛び上がって足を付きたし。

「ぐほおツ!?!」

ラクスを思いっきり飛び蹴りして突破してきた。

「ら、ラクスさんがレーラにやられたわ！」

「おいおい、もう理性がねえじゃねえか・・・！」

「逃がしませんよ、マクラスさん！」

完全に理性を失ったレーラの追撃は激しさを増して行き、街中での命懸けの鬼ごっこを強制的に興じられているマーシレスはある事に気づく。

「・・・マクラスを彼奴に渡せば俺らはたすかるんじゃないね？」

「あ・・・」

「え？」

マーシレスの言葉にスマカはそれには気付かなかつたと言う顔をし、マクラスは聞きたくなかつた言葉を聞いたとばかりの顔をする。

暫く、無言で走っていた三人はマーシレスの行動でまた騒ぎながら逃走する。

「おっと足が滑った！」

「うお！危な!？」

マーシレスがわざとらしく足を器用に出してマクラスを転ばそうとするが、マクラスは運良く避けた。

だが、そこでスマカからも器用に足を出される等の妨害が起きる。

「私も滑った！」

「ちよ、何やってるんですか！足を掛けて転ばそうとするのはやめてください！」

「うるせえ！さっさと転けてレーラの熱いアプローチに答えて来いやあー！」

「そうよそうよ！あの子、かなり性格が良いのに逃げるなんて！」

「今そこで性格の良さを出されても説得力ありませんから！寧ろそれを言うタイミングが悪すぎます！」

「うるさい！大人しく転けて捕まれや!!！」

二人からの足掛けを受けてマクラスは遂に転けてしまい、すぐに立ち上がって逃げようとするもレーラに素早く迫られてのし掛かられた。

「さあ、捕まえましたよ。ふふ、もう照れ屋さんなんですから」

「た、助けて！襲われる！意味深げな方で襲われる!!！」

「勘弁してくださいマクラス。私は本当に貴方が好きなんです・・・絶対に逃がしませんし、逃がすつもりはありませんからね」

レーラは濁らせた瞳でそうマクラスに告げると、マクラスは詰んだと悟った。

レーラに掴まれて立ち上がらされかけた時に覚悟を決めた瞬間、レーラの肩に手が置かれ、レーラは振り向くとそこにはラクスが怒りの形相で立っていた。

「レーラ」

「と、父さん・・・！」

「何か言う事はあるか？あるなら言え、そして謝れ」

ラクスの凄みにレーラは体を震わせながら頭を下げた。

「すみません・・・」

「たく、今回の騒動と言い・・・マクラスを襲つてると言い・・・お前は何をしている？マールシレスとスミカにも迷惑を掛けやがって後で二人にも謝るように。それと私はマクラスの事は絶対に認めん。マクラスの人柄には関心はあるが、奴と親族にはなりたくないし、そもそもお前をまだ嫁に出したくない」

「嫌です！私は絶対にマクラスと結婚します。だって、本当に好きなんです・・・もう、心の全てを明け渡してでもほしいのです！それにこの歳になって嫁に行かなかつたら行き遅れになってしまいます！」

レーラの年齢は19歳。

ラクス達の世界で15歳が成人とするとレーラは十分、嫁入りに遅れている。

何故なら暗夜も白夜も身分関係なく女性は成人を迎えると20歳を迎える前に結婚させる為、20歳を越えてしまうと行き遅れと考えられてしまうのだ。

因みにレーラの元に身分の高い貴族や騎士達からの見合いの話が来てはいたが、ラクスが全て闇に消し去っているのは別の話。

ラクスと正気に戻ったレーラが口喧嘩をし始めた所で、マールシレスとスミカが戻って来た。

「まあまあ、嫁に行くか行かないかはレーラの将来だろ？気長に覚悟

を決めておけ」

「お前はいきなり現れて何を言っただやがる？」

いきなり現れたマーシレスに呆れるラクスはもう疲れたとばかりに額に手を当てた。

「今回はもう帰らせて貰う。マクラス、親衛隊全員を呼んでこい。帰るぞ」

「はい」

マクラスは助かったと言う顔をしつつ親衛隊を呼びに行き、残されたラクスは溜め息をつく。

その後、マクラスは親衛隊を連れて来たが親衛隊の一人が誤って転けてしまい、手にしていた酒をラク스에浴びせて更なる修羅場を呼んだのは別の話。

if 番外編：もしも、ラクスが騎士ではなく現役の暗殺者だったら・・・序章

暗夜王国の暗闇の中、闇に紛れて暗夜王国の王城に侵入する者が二人いた。

一人は水色の短髪で黒いバンダナを結んだ少女、もう一人は黒装束でフードを深く被った青年がいた。

青年は鍵で閉じられた扉を鍵開けの技術を使い開け、回りに人がいないか確認する。

「手筈通り其々の依頼を遂行する。ベルカ、お前は確か・・・カミラ王女を暗殺だったよな？」

「ええ・・・貴方はマークス王子ね。大丈夫なの？暗夜一の騎士を敵にして？」

「そう言うお前も依頼対象であるカミラ王女はもかなりの豪傑だと聞いている・・・同じ事は言えないぞ」

ラクスはそう言うと、扉を静かに開けて中へと入ると辺りを見渡して誰もいない事を確認してからベルカを招き入れる。

暗殺者のラクスとベルカは其々異なる対象の王族の暗殺で、依頼主は道津人物だ。

依頼主である暗夜の第二王子レオンの母親で、とてつもない野心を抱いてレオンよりも上の継承者を殺して王に付けようと言う魂胆だと嫌でも分かった。

だが、ラクスは名を挙げて更に高い報酬の依頼を得る為に、ベルカは機械的に依頼を受け、今にあった。

「此処から別行動だ。俺はもう行くから後はお前次第だ」
「分かったわ。気を付けてね」

ベルカはカミラのいる寝室に向けて足音をたてない様に歩いて行き、ラクスもマークスの寝室に向けて動き出した。

ラクスは暫く歩くと事前に入手した情報通り、マークスの寝室に辿り着くとそつと扉を開けて様子を伺う。

マークス王子は机に向かつて何かを書いており、ラクスは存在に気付いていないと考えて悟られない様に入り込むと、暗器を引き抜いてマークスの背中を突き刺そうとしたその時、扉の向こう側から足音が鳴り響く。

「暗殺者だ！カミラ様をお守りしろ！」

「（あいつ、しくじったな！）」

ラクスが悪態を心の中でついた時、ラクスの首元に剣が振るわれ、ラクスは間一髪で避けた。

ラクスは暗器を構えて剣の振るわれた方を見た時、そこには油断なく身構えているマークスがいた。

「・・・気付いていたのか？その油断の無さと身構え方・・・事前に知っていた様な素振りだなは」

「私の側には優秀な弟がいる。世間を騒がせ、人の命を喰らい糧とするお前を・・・暗刃を誘き寄せる為に私の弟レオンに無理を言って協力して貰った」

暗刃とはラクスの暗殺者としての異名であり、暗殺者としての仕事用の名前代わりの物だった。

ラクスはベルカの父デュラハから様々な暗殺術を学び、遂にはデュラハ本人から自分を越える才能と表された程だ。

「それで？俺を誘きだして・・・どうする？」

「勿論・・・貴様を倒す！」

マークスは剣を振るい、ラクスを攻撃するとラクスは避けて暗器を投げ付けた。

マークスは暗器を避けた瞬間、ラクスの素早い斬撃がマークスを襲い、激しい斬り合いに発展した。

剣の腕はどちらも互角の腕で、決着の見えない戦いが続く。

「暗刃がこれ程の腕を持つとは・・・お前が騎士なら何処まで登り詰めていたのか容易に想像できるぞ」

「俺は身分やら権力には興味はない・・・あるとすればそれは・・・金だ」

「金・・・貴様は金の為に戦っているのか?」

「金が無ければ生きられねえ。お前達のように常に安全な場所で、暖かい食事をして、フカフカのベッドで寝てる訳じゃねえんだよ」

ラクスの言葉にマークスは唖ると、扉をまるで壊しに掛かったかの様な勢いで兵士が何人も突入してきた。

「マークス様を暗殺者の手からお守りしろ!」

「ちッ、今回は失敗か・・・マークス王子。また会おう・・・次も俺の獲物だったらな」

「待て!」

マークスは逃げようとするラクスを捕まえようとせるが、ラクスは素早く窓に迫ると窓を割って外に逃げ出した。

マークスの寝室は大騒ぎする中、ラクスは手早く予定逃走ルートを進んで走っていた時、目の前にベルカが現れた。

「ベルカ・・・この馬鹿、仕事をしくじったな。お前のせいで仕留め」
ラクスが話をしている途中、ベルカは何を考えたのかラク스에 斧を向けてきた。

「おい、どう言うつもりだ?」

「・・・私は、カミラ様に仕える事にした。その最初の仕事として・・・貴方の首を取る様に命じられた」

「・・・そうか分かったぞ。あれだろ?あの豪傑王女から逃れる為にそう嘘をついているんだよな?だったらもう芝居なんて必要ない・・・もう止めろ、その芝居を・・・裏切ったなんて・・・ないよな?」

ラクスは信じられないとばかりにそうベルカに聞いた時、後ろから二人程の足音がラクスの耳に入り振り向くと、そこには例のカミラとその臣下であるルーナがいた。

「その子の言っている事は本当の事よ暗刃のラクス」

「貴様は・・・!ベルカに一体何をした!答えろ!!!」

「・・・私はただあの子の壊れそうになった心を支えただけよ」

「壊れそうな・・・心?どういう事だ?」

「それも知らなかったなんて・・・良い、貴方は気付かない内にベルカの心が壊れかけていた事に全く気付いていなかったのよ。私の暗殺に失敗して、殺さなければ帰れないと何回も呟いて・・・あの子の心の傷は本当に深いわよ」

カミラの言葉にラクスは動揺を隠せずにした。

ラクスは今までの様にベルカと過ごしておいてベルカの状態に全く気付いてやれなかった。

ラクスは悔しさと後悔が入り乱れる感情の中、カミラに手を差し出された。

「貴方も来なさい。私は別にベルカと貴方を争わせたくてこうしてる訳じゃないの。貴方は腕の立つ冷酷な暗殺者と噂だけど、ベルカの事を思う貴方がそこまでの人間ではないと私は思ってる・・・だから」

「王族の犬にでもなれと?・・・馬鹿々しいにも程があるぞ!」

ラクスはそう吐き捨てると、ベルカに向けて残りの暗器を投げ付け、ベルカが避けた瞬間を狙ってラクスの剣がベルカの胸を狙って突き殺そうと迫っていた。

ベルカは咄嗟に斧で防ぐも、ラクスの蹴りで吹き飛ばされた。

「ベルカ! 貴方、本気で戦うつもりなのね・・・!」

「・・・そうだ。ベルカが誰の臣下になろうと俺の知った事じゃない・・・だが、仲間である俺を裏切って危険に曝しやがった! これは最悪の裏切りだ・・・例え、ベルカだとしても・・・俺は殺す・・・!」

ラクスの鋭い殺気を出しつつそう言うと、ベルカは立ち上がった身構えた。

二人が睨み合う中、先にラクスが動きベルカの首を狙って剣を振るった。

だが、そこを狙っていたかの様にベルカは斧で器用に返し、ラクスの左目を切り裂いた。

大量に出血する中、ラクスは堪らず叫び声を挙げて左目を押さえるとベルカは更に追撃してラクスを追い詰めて行き、遂には川の側までラクスを追い詰めた。

「・・・終わりよ、ラクス。もう止めましょう」

「馬鹿が・・・俺がそんな玉に見えるのか？俺は裏切りを許さない、この目を奪ったお前を・・・許さん・・・！」

ラクスの残された右目に憎しみに燃えた瞳が写り、ベルカはたじろいでいると、ラクスは隙を突いて川に飛び込んで逃げた。

「ラクス！」

ベルカは川を覗くも、既にラクスは流されたのかおらず、残されたベルカは悲しみに暮れた。

その頃、川に流されるままに移動したラクスは岸に這い上がると、息を切らしながらベルカの事を考えていた。

「俺が、俺が気付いてやれなかったからお前は裏切りだったのかよ・・・ベルカ」

ラクスはそう呟いた後、急に裏切られた事に怒りを感じ初め、地面を勢いよく叩き血を流した。

「俺は、俺は許さねえぞ・・・理由はどうにしろ、お前が先に裏切ったんだからな・・・！」

ラクスは悔しき、悲しみ、怒り、憎しみ等と感情を感じつつ裏切ったベルカに対して必ず報いを受けさせると誓いを立てた。

if 番外編：もしも、ラクスが騎士ではなく現役の暗殺者だったら・・・くカムイ・白夜ルートく

ベルカの裏切りの後、ラクスは暗夜に戻りベルカ暗殺の計画を練っていた・・・が、ラクスの生存を風の噂で聞き付け信憑性を探りそして得たレオンにラクスが生きている事を知られ、刺客を放たれる様になった。

ラクスは長きに渡る逃走と戦闘の中で、白夜王国へ落ち延びると白夜の兵士に倒れていた所を助けられ、匿われる形で白夜に滞在する事になった。

何日か滞在する中、カムイ王女の帰還、ミコト女王暗殺、暗夜の進攻、そして戦争等と様々な事が度重なり、カムイは白夜に着いて戦い、ラクスも白夜への恩を返す為にカムイと共に白夜に着いて暗夜王国との戦乱へと身を投じた。

激しい戦いの中、匿って貰った兵士の義娘であるオボロと仲を深めていき、やがて結婚し一人娘が生まれ共に戦う様になった頃、運命の再開をラクスはシュヴァリエ公国で起ころうとしている事はまだ誰も気付かない。

カムイ達はシュヴァリエ公国を訪れ一息ついていた。

「此処が、シュヴァリエ公国ですか・・・」

「そうだ。シュヴァリエは暗夜の前線で、反乱軍の激しい抵抗活動が繰り返されている戦場でもある。・・・戦場と言ってもやけに静かだが・・・」

ラクスは辺りを警戒しながらそう言うと、少し歩いて回りの建物を見た時、暗闇の広がる窓の中に人影があり、ラクスが見た後に姿を隠す様に引つ込めたのだ。

ラクスは噂の反乱軍かと考えていると、向こうから誰かが歩いて来

るのをラクスは確認した。

「カムイ様」

「分かっています。あの人は……」

向こうからやって来る人物は、暗夜特有の黒い鎧を纏い、豊満な胸を強調する様に開かれた胸元、体格も顔も整った正に美女と呼べるに相応しい女性……暗夜王国の第一王女カミラその人だった。

「やっと会えたわね……私の愛しいカムイ」

カミラはそう言ってカムイに抱き寄せた。

「カミラ姉さん……」

「ふふ、此処に来たと言う事は暗夜に戻って来てくれたのね。大丈夫、お父様の事は私が何とかするから」

「カムイから離れる！カムイは私達の兄妹だ！」

ヒノカはカミラとカムイの間に割り込む様に入ると、カミラは明らかに不機嫌そうな顔になった。

「あら、血は繋がってなくてもカムイは私達の兄妹でもあるのだけど……そうよね、カムイ？」

「私は……」

カムイは迷う素振りを見せた時、ラクスが割って入った。

「カミラ王女。例え貴方の主張が正しくとも、この戦争に何の関係があるのですか？」

「あら、随分と久し振りね……レオンの刺客で死んだのかと思ったわ」
「残念ながら……まだ俺の目的は済んでいないのでまだ死ねませんよ」

カミラとラクスは互いに牽制しつつ、睨み合う。

「あの、二人とも知り合いなのですか？」

「ええ……昔、彼はマークス兄さんの命を狙った暗殺者だって言う面識で」

「マークス兄さんの命を……！」

カムイはそれを聞いてラクスの方を見ると、ラクスは涼しい顔をしてカミラに言う。

「俺はカミラ王女に、仲間を……幼馴染みを殺す切っ掛けを無理矢理作らされる面識でだ。……裏切りの主導者め、思い出しただけでも

腹が立つ」

「幼馴染みを・・・殺す？ 一体、何を・・・」

カムイが動揺しきつていた時、ラクスはカミラを睨み付けて問う。

「貴方がいると言う事は彼奴もいる筈だ。何処にいる？」

「あの子の命を狙う貴方に教えるとても？」

「・・・そうですか。なら、自力で探させて貰います」

ラクスはそう言ってカミラの横を通ろうとした時、カミラの斧がラクスの前を阻んだ。

「やらせたりしないわよ？」

「・・・俺はカムイ様と同じ様に貴方と戦いたい訳ではない」

一新即発の雰囲気の流れるラクスとカミラにカムイはどうすれば良いのか分からずにいると、向こうから水色のバンダナを結んだ少女に現れた。

ラクスは少女は見て顔を歪める。

「ベルカ・・・！」

「ラクス・・・やっぱり、カムイ様といたのね」

「やっぱり？ 俺の行動を把握していたのか・・・まあ、どのみちお前がノコノコと現れたんだ。この機会を逃してやるものか・・・！」

ラクスはそう言つて剣を抜いて飛び掛かろうとした時、ラクスの剣を手にする腕をオボロが掴んだ。

「ちよつと！ 何するつもりなの！」

「武器を手にしたらやる事は決まっているだろ？」

ラクスの妻を気遣う温厚な声と普段と違う冷たく冷酷な声にオボロは背筋を震わせると、次に止めに入ったのは娘でラクスと同じアサシンでもあるレーラだった。

「待ってよ父さん！ その人が何をしたのよ！」

レーラの問いにラクスは答えずにいると、ベルカが答える。

「私は・・・ラクスの元仲間。今はただの裏切り者・・・」

「裏切り・・・？」

レーラは裏切り者と言う言葉に困惑していると、ラクスはいつの間にかベルカの前に立っており、ベルカを睨み付けつつ立っていた。

ラクスの黒装束のアサシンの服とフードのせいでその姿は死神その物だった。

「数年前の決着を着けるぞ。互いの因縁と遺恨を断ち切る為にな……」
「ええ……」

ベルカも斧を手に、ラクスと対峙しもはや二人の戦闘は避けられないとカムイとカミラは判断すると、止める事を止めた……止めるしかなかった。

ラクスの妻のオボロと娘のレーラもラクスの戦いに口を出さなくなった。

ラクスとベルカは静かに歩き、隙を伺いつつ回る。

「貴方にも、娘がいたのね」

「その言いぐさ……お前も結婚でもしたのか？」

「ええ……変わってて、とても性癖もおかしい人だけどね。とても、優しい人」

「そうか……こんな形で戦う事がなかったら、祝ってやりたかったよ」
「……私もよ」

ベルカがそう言い終わった時、ラクスが斬り掛かる。

対してベルカは斧で……防がなかった。

ラクスは目を見開いて驚き、剣を止めようとするも間に合わずにベルカを切り捨ててしまい、ベルカは血を大量に出して倒れてしまった。

「ベルカー！」

カミラはベルカの元に来ると、抱き上げ徐々に冷たくなるベルカにカミラは涙を流す。

「ご、めんなさい……カミラ……様。私は、此処で……死ぬつもりだった……」

「そんな……！」

カミラはベルカは最初から死ぬつもりで現れた事に泣き崩れると、ラクスがベルカの元にやって来た。

「ベルカ……」

「ラクス……ごめ、んなさい……わ、たし……」

「・・・謝るのが、遅いぞ」

ラクスはうつ向きながら涙を流し、剣を取り零して膝をついた。

「何でだよ・・・お前なら、俺を返り討ちに出来るだろ・・・本当に強いのはお前の筈なのに・・・」

「・・・私は、貴方・・・を、裏切った・・・償わな、ければ・・・いけない・・・わ・・・」

「お前には家族がいるだろ！お前の夫は！娘は！」

ラクスの言葉にベルカは笑った。

「やつぱり・・・貴方は私を殺すつもりは・・・なかつ・・・たのね・・・義父さん・・・来て・・・くれたのね・・・」

ベルカの言葉の中に義父さんと言う言葉にラクスは反応し、ベルカの肩を掴む。

「行くな！俺をまた一人に」

「貴方は、一人・・・じゃない・・・もう、家族が・・・いるじゃない・・・」
ベルカの言葉でラクスはオボロとレーラの二人を思い浮かべると、ベルカは優しくラクスを見て微笑んだ。

「さようなら・・・もし、やり、直せたら・・・また家族・・・に・・・」
ベルカはそう言って事切れると、ラクスは暫く涙を流しながらも立ち上がり、カムイの元に戻った。

「・・・俺の野暮は終わった。勝手な事をして、すまない」
「・・・いいえ」

ラクスの心中を察してカムイはそれ以上の事は言わなかった。

カミラはベルカの死に悲しみ、泣き叫ぶ中、ラクスは拳を握りしめカムイに言う。

「進みましょう。立ち止まっている暇は・・・ない」
「・・・はい」

カムイ達は悲痛な表情を浮かべつつシュヴァリエを後にし、オボロとレーラは憎み、愛した友を失った悲しみを背負うラクスをただ見守るしか出来なかった。

暗夜と白夜の戦争はカムイ達の活躍によって終結し、数年の月日が流れた。

戦争が終わっても暗闇の広がる暗夜王国の墓場をレーラは歩き、一つの墓の前に立った。

「・・・随分と探したのよ。父さん」

レーラの前にある墓にはラクスとだけ書かれた墓があり、レーラは手にしていた花束を墓の前に置いた。

「もう・・・母さんと私を置いて急にいなくなったらと思ったら、死んでたなんて・・・噂を辿ってあちこちを旅して見つけたのは父さんの墓。・・・何で、一言もなく死んだのよ・・・」

レーラは涙を流し、ラクスの墓に問うも返る訳がなく、レーラは墓から背を向けた。

「・・・父さん。私はやっぱり、父さんと同じ暗殺者になる。今の暗夜に暗殺者達を束ねる人がいないから好き勝手殺してる人が沢山いる。だから・・・その好き勝手している人達を纏めて必要な時にしか刃を出さない様になりたい。だから・・・私は、私の身近を進むね」

レーラはそれだけを言うのと去り、道を歩いていると木に持たれている水色のお下げをした少女の元に来る。

「お待たせエポニーヌ」

「別に良いわよ。貴方のお父さんのお墓参りでしょ？」

「・・・父さん、恨まないの？」

エポニーヌは暫くレーラを見つめた後、溜め息をついた。

「過去は過去だしもう死んだ奴なんか恨まないわよ」

「エポニーヌ・・・」

「ほら、辛気臭い顔なんてしないで行くわよ！貴方の歩く道って奴を」

「・・・はい！」

レーラはエポニーヌと共に暗夜王都へ足を進める。

この後に、レーラは暗夜王国において最高の暗殺者として知られ、自身が同業の暗殺者の刃に倒れるまで彼女の統括で必要以上の殺しは無くなった。

レーラの傍らには常に義賊として活動し、レーラの生涯の友とされるエポニーヌは詳しい事は残されてはいないが、レーラが暗殺された後、レーラの意味を継いだとも、他の大陸に渡ったとも言われている。

ただ、レーラとエポニーヌは互いに常に信用し合い裏切る事は絶対にしなかったと言う事はどの書物でも残されている。

プロローグ

暗夜王の懐刀

とある村。その村は赤く高い炎が燃え盛り村の住民達は逃げ惑っていた。

その住民達に容赦無く剣や槍、斧と武器を振るって殺める兵士達の後ろに顔が兜で隠れた騎士が馬防具を身に付けた馬に乗って兵士に指示していた。

騎士の名はラクス。

暗夜王ガロンの懐刀にして腹心のパラディン。

ラクスは何の感情も無いかの様に燃え盛る村を見ていると年老いた村人が体を引きずり恨みを込めた目で睨みつつラクスの元に来た。

「おのれガロンの手先め・・・お前はガロンと同じ様に罪深いお前は、必ず討たれる・・・平和を信じる者達によって、滅ぼされが良い……！」

「・・・それだけか？」

ラクスはそう言うと言と腰に差してあった剣を引き抜いて村人を突き刺して止めを刺した。

ラクスは剣を引き抜くと軽く降って血を払う。

「お前達が反乱など企てるから軍を送り込まれたのだ・・・大人しくしていれば私はお前達を殺す事はしなかった。それだけだ」

ラクスがそう既に死んだ村人に言い放つと同時に仕事を終えた兵士達が集まってきた。

ラクスは剣を鞘にしまうと馬を反して進め兵士もそれに続いていく。

～暗夜王国・王城～

「此度の反乱の平定・・・ご苦労だったラクス」

「は・・・勿体なきお言葉ですガロン王様」

ラクスは反乱平定と言う名の虐殺の報告をしていた。

ラクスは内心ではヘドが出るような思いで虐殺をしたが何時もの

事だと気にせず、ガロンに膝まずいてガロンの褒め言葉を返す。

「お前は常に我の命に従い行動する。今回はその働きの数々を讃え褒美を取らず。受け取れ」

ガロンはそう言う、一本の剣を何処からと取り出してラクスに渡した。

剣は黒い刃で覆われ、その柄すらも黒一色であった

「その剣は我が暗夜王国に伝わる宝剣、ディアブロス。その剣は神器に匹敵はするが扱う者の技量が低ければ命を奪う代物だ……だが、お前なら使えこなせよう」

「ありがたき幸せ……喜んで受け取らせてもらいます」

ラクスはそう言う、剣を受け取る。命を奪う剣と言うだけに触れただけでかなりの違和感を感じたが、ラクスの身には何も起きなかった。

「では、行くが良い」

「は……」

ラクスはガロンにそう命じられると、王座の間から出ていく。

ラクスは王座の間から出て廊下をしばらく歩いていると、別れ道に差し掛かった所で誰かにぶつかった。

ぶつかった方は豪快に転けたが、ラクスは全くビクともしなかった。

「いった〜い……」

「何をしているのですか、エリーゼ様」

「……あ、ラクス」

ぶつかった方は暗夜の第三王女であるエリーゼであった。王族の中ではかなり子供らしいが、そんな彼女には苦手な存在がいた。

その苦手な存在が今ぶつかったラクスだ。

エリーゼは幼い頃は特にラクスを苦手とは思わなかったが、戦場帰りの帰り血だらけのラクスを見て怖くなり、今に当たる。

「貴方ときたらまた、城を走り回っていたのですか？危険だから止めてくださいと言ってますよね」

「ごめんなさい……」

「……次は気を付けてください」

ラクスはそう告げると再び歩きだした。

安らぎ

ラクスは王城から出て地下にある街とも言える広場にやって来た。
いた。

ラクスは普段の鎧姿ではなくラフな服装をしておりそのせいかラクスの近くを通る人々はラクスとは思ってはいなかった。

ラクスは暫く歩くと大きな囲いと建物がある場所へやって来た。

そこには子供がはしゃいで遊んでいたり何かの手伝いをしていたりしている事から孤児院であった。

「ただいま」

「あ、ラクス兄ちゃんだ！」

「お帰りー！」

子供がラクスの元に走ってきて抱きついたりしてラクスを囲む。

ラクスは普段は隠れた素顔だが表情は普段のラクスとは思えない笑みを浮かべていた。

「ちゃんと良い子にしていたお前ら？」

「うん！」

「してたよ！」

「そうか」

ラクスは子供の一人に頭を撫でてやると子供は笑う。

ラクスが子供達と戯れていると建物の中から老人が現れる。

「おお、ラクスか。久しぶりじゃのお」

「院長。お久しぶりです」

院長と呼ばれた老人は穏やかに笑うと子供達を他の場所に遊びにいかせてラクスと共に建物に入っていく。

ラクスは建物にある部屋に招かれると質素な椅子に座る。

老人は紅茶をラクスの座る位地に置くと自らも座る。

「それで軍での仕事は順調か？」

「はい。私はただ、立って見張る位の仕事なので特に危険の無い仕事。
ある意味、天職ですよ・・・」

ラクスは敢えて嘘をついた。自分が軍の指揮官として自国の民を

殺しているとは口が裂けても言えなかった。

ラクスはこの孤児院の出身で身寄りの無い自分をここまで育ててくれた老人に誰よりも感謝していた。

だから、老人にだけは嫌われたくなかった。

親代わりでだが唯一の親なのだ。

「そうかそうか……。お前が軍に行くと言った時は本当に心配したが」
「あの時は本当に心配を掛けてしまった……。すまない」

ラクスはそう言うと言った。

「これこれ、頭を上げなさい。もう過去の事だ。軍にいる限りは安全ではないがお前が元気ならそれで良い」

「院長……」

ラクスは院長の言葉が心の奥底まで突き刺さる。

嘘をついてまで自分の立場を隠し、罪の無い者を殺す行い、ラクスはその全ての罪悪感に襲われつつも平静を装う。

「おっと、もうこんな時間か。今、夕飯の仕度するから食べていきなさい」

「院長。すまないが俺はこの後に仕事があるんだ。夕飯はまたの機会にしてくれないか？」

ラクスは残念そうな顔で院長にそう告げると立ち上がる。

「そうか……。仕事なら致し方ない」

「すまない。でも、また来るからその時に久しぶりに食べよう」

「ああ……」

ラクスはそう言うと言った。

外には子供達が走り回ったり人形遊びをしたりしていた。

「あ、ラクス兄ちゃん！もう帰るの？」

「ああ、仕事があつてな。だが、また来るからそれまで楽しみにしていてくれ」

「うん、分かった！」

ラクスは子供達に別れを告げると孤児院から離れていく。

カムイ

「北の城塞の王女が来る?」

「うむ、お前もスメラギを殺した時にいたであろう。そやつの残した娘だ。名はカムイだ・・・覚えておけ」

ラクスは王座の間でガロンから北の城塞から暗夜王国の王女カムイが来る事を聞いていた。

だが、カムイは王女とは名ばかりで本当の出生は白夜の生まれの王女だ。

ラクスは昔に暗夜軍の所属としての初仕事としてガロンと共にスメラギを暗殺した。

その時にガロンに生かされ暗夜の王女として生きた。

「・・・」

「どうしたラクス?」

「・・・いえ、何でも御座いません」

ラクスはスメラギを暗殺した時、止めを刺す様にガロンに命じられラクスは矢が大量に突き刺さり弱り果てていたスメラギの腹に深く剣を突き立て抉る様に引き抜いた。

あの時の不快な感覚はラクスは今でも覚えていてその事を思い出す度にラクス不快な感覚に襲われ続けていた。

「父上、マークスです。入ってもよろしいでしょうか?」

「うむ、入れ」

どうやら到着した様で暗夜の第一王子のマークスと続いて第二王子レオン、第一王女カミラ、第三王女エリーゼそして、今回の話題である第二王女カムイが王座の間が入ってきた。

「(成長したな・・・)」

「父上。カムイが外へ出られる資格を得たのでここへ連れて参りました」

「そうか。カムイよく来たな。話は通っている。マークスから一本を取って見せた様だな」

「はい」

ガロンは威厳ある声でカムイに問いかけカムイはその問いに応える。

ラクスは黙ってカムイを見ているとカムイの隣にいたマークスが何かを囁いていた。

「どうやら何か企んでいると思われるのか険しい顔でカムイに何かを告げていた。」

「マークス様。何をカムイ様に言っているのか分かりませんが別に何も考えてはいませんよ」

ラクスは意地悪そうにマークスにそう言った。

「ツーいや、私はラクスの事を言っている訳ではなかったのだが……」

「……そうですか」

「カムイ side」

私はお父様と謁見をしている時、お父様の隣に立つ全身を鎧で包んだ人を見た。

その人は表情こそ見えなかったが冷たい目で見られると同時に暖かさを感じた。

そこにマークス兄さんが呟いてきた。

「カムイ。父上の隣に立つ男にはあまり関わるな」

「何故ですか？」

「あの者の名はラクス。腕が立ち尚且つ暗夜に最も忠誠心を持っているが奴は一度戦闘の命令と来れば残虐な手段で命令を遂行する冷酷な男だ。私はあまりラクスをお前に近づけたくはない」

マークス兄さんがそう言うのと耳に届いたのかラクスさんがマークス兄さんに話しかけてきた。

まるで内容は丸聞こえと言わんばかりにと言うので珍しくマークス兄さんが焦っていた。

ラクスさんはマークス兄さんがラクスさんに対して何も考えてはいないと聞いてまた口を閉じた。

「(何故でしょう。私はラクスさんが根から悪い人とは思えません……だって)」

あんな寂しそうな雰囲気を出しているのですから。

（side終了）

ガロンは一通りカムイと話終わると一振りの剣を取り出してカムイに差し出した。

その剣は禍々しい光を放っており嫌な感じを醸し出している。

「その剣は魔剣ガングレリ。お前が北の城塞を出れた祝いの品だ。受け取れ」

「ありがとうございます。お父様」

カムイはガングレリを受け取るとガロンはカムイに課題をぶつけた。

「所でカムイ。お前の實力を見せて貰おうか」

「私の實力ですか？」

「そうだ・・・ラクス」

「捕虜を此処へ」

ラクスがそう言うのと兵士が捕虜を連れてきた。

炎の部族の女と緑の髪の子とその他の捕虜が連れてこられた。

カムイの実力

捕虜を連れてこられた事をガロンは確認するとカムイに話す。

「カムイよ。見事この者らを打ち倒し己の力が本物かどうかを証明してみせよ」

「わかりましたお父様」

カムイはそう言うと言おうとガングレリを構え捕虜と向き合う。

その時にカムイと共に来た臣下らしき二人が現れカムイの横に立つ。

どうやら戦いを手助けする様で武器を取っている。

「よろしいのですかガロン様。これはカムイ様の腕試しと思われるのですが？」

「良い・・・」

ガロンはその一言だけ言うと言おうとカムイ達の戦いを見る。

戦況は数的には捕虜の方が優勢だがカムイが竜脈を発動させ戦況を有利にさせた事で戦いの流れを変えていた。

「(流石だな・・・白夜の者とはいえ流石は王族と言った所か)」

ラクスはそう考えていると戦いは白熱する。

炎の部族が臣下の一人であるグレートナイトの戦い、緑髪の忍びとカムイ・バトラの戦いが始まっている。

両者の戦いは激しさを増すが徐々に捕虜二人は押され遂に倒れた。

戦いは完全に決着しカムイ達の勝利となった。

「ガロン様。どうやら決着が着いたようですね」

「うむ、カムイよ・・・止めを刺せ」

ガロンの止めを刺せと言う言葉にカムイ達とマークス達兄妹が驚く。

ラクスも表面は落ち着いている様に見えるが内心動揺している。

「ガロン様何を言っているのですか？」

ラクスはつい聞き返してしまうがガロンは気にしていないかの様に返す。

「言ったであろう。カムイに止めを差し刺させるのだ」

ラクスはガロンの言葉に本当に恐怖を覚えた。

戦いで弱り果てた捕虜をこのまま殺そうとするのだ。

ラクスは反対したい気持ちを抑え黙り込むが一人そうはいかない者がいた。

「待つてくださいい！この人達はもう戦えません。何故殺さなければならぬのですか！」

カムイは兎の場で唯一反論したのだ。

その事が気に入くないのかガロンは眉間にシワを寄せている。

「もう一度言う・・・殺ろせ」

「嫌です！」

「・・・そうかラクス。お前がやれ」

「畏まりました」

ラクスは捕虜の元に来るとディアブ羅斯を引き抜き捕虜を斬ろうとした。

だが、カムイのガングレリがそれを阻み金属音を鳴らしながら剣を鏢迫り合いをしている。

「・・・カムイ様。貴方は何をしているのかわかっているのですか？」

「わかっています・・・でも、殺す事なんて」

「ラクス。時間の無駄だ。カムイを痛め付けてでも白夜兵を殺せ」

「・・・畏まりました」

ラクスはそう言うのと剣を突き放して剣の横でカムイの腹を殴る。

カムイは意気なりの攻撃に反応すら出来ずに唾を吐きながら吹き飛ばされ地面に倒される。

「カムイ！」

「姉さん！」

「カムイ！」

「カムイお姉ちゃん！」

マークス達は吹き飛ばされたカムイを案じるかの様に声を上げた。

ラクスはその声が聞こえてはいないと言わんばかりに近づき立ち上がるうとしたカムイに更に攻撃を加える。

縦に横に斜めに、と連続で攻撃を浴びせ最早気絶していると判断す

る程に痛め付けた。

「悪く思うなこれは命令だからだ。お前が邪魔さえしなければまだこんな事はせずに済んだ」

ラクスはそう言つて捕虜に歩いて近づいて殺そうとした時、後ろから気配を感じたラクスは振り替えるとそこにはガングレリを振りかざしたカムイがいた。

「チッ！（避けられないか！）」

ラクスは少し体勢を反らしすとガングレリはラクスの兜を少し切り裂いて地面に落ちラクス自身は無傷だった。

「まさか気を失つていなかったとは……」

「はあはあ、これでもマークス兄さんに鍛えられてきましたから……」
「成る程……だが、お前はもう限界だろう。残念だったな」

ラクスはそう言うと同時に今度こそカムイは気を失った。

ラクスはそれを見届けると無言でカムイを見ている。

「何をしているラクス。早く止めを刺せ」

「ガロン様。今回の処刑……レオン様にお任せさせて頂けませんか？」

「ッ!？」

ラクスの言葉にレオンは厳しい目付きでラクスを見る。

「ほお、何故だラクス？」

「他の仕事もありますのでこれ以上は時間が裂けません。推薦は優秀で冷徹なレオン様が適任だと思ひ言っただけなので……では失礼します」

ラクスはそう言うくと王座から出ていきガロン達はそれを黙って見ている。

幼馴染み

王座の間での一騒動の後、ラクスは王城の出口辺りの物陰である人物を待ち伏せていた。

その人物はマークスとレオンの二人でラクスは何故待ち伏せているのかと言うと二人が捕虜を生かしているかを確認する為であった。

あの時、ラクスは仕事などは無かったがガロンに嘘をついてわざとレオンを処刑人として指名して生かす可能性があるかとわかっていて立ち去ったのだ。

「・・・来たか」

待ち伏せて暫くした後マークスとレオンそしてラクスの予想通り炎の部族の女と緑髪の忍びの男の捕虜が生かされた状態で来たのだ。

「全くあまいな。まあ、私も言えないか・・・」

ラクスは兜越しで微笑んでいると後ろから気配を感じ腰に差してあるディアブロスに手を掛けた。

「何者だ？私の後ろを取るからには相当な手練れだと見受けるが・・・私よ」

「その素っ気なさは・・・ベルカか」

ラクスはそう言い警戒しながら振り替えると薄い水色の短髪に額に黒い鉢巻きを巻いて黒い鎧に身を包んだ少女が立っていた。

彼女の名はベルカと言い暗夜王国第一王女のカミラの臣下でありラクスが孤児院に拾われるまで共に地下の貧民街で過ごした言わば幼馴染みだ。

「どうしたんだお前が私に会いに来るなんて」

「カミラ様から貴方が不穏な動きをしている所を見たと言われて様子見を命じられた」

「成る程・・・つまりカミラ様に私が何かしらの行動をしたら」

「殺せ、と」

ベルカは全く迷いの無い目でラクスを見てくる。

ラクスは暫く小さな殺気を出しているベルカを見ていたが溜め息

をついてディアブロスから手を放す。

「別に何もしない。ただ、計画通りにあの二人が捕虜を逃がしているのか見に来ただけだ」

「何故生かすの？」

「・・・私もあまいと言う事だよベルカ」

ラクスはそう言うのと立ち去ろうとするが何かを思い出したかの様にまたベルカの方へ振り向く。

「忘れていたが私が捕虜を逃がす計画を建てた事はカミラ様には言わない。何か適当な訳でも考えてそれを言っておいてくれ」

「何故？」

「私には善人は似合わないからだ」

ラクスはそう言うのと今度こそ立ち去っていく。

ベルカ side

私はカミラ様の命でラクスが不穏な動きをしている所を見たと言われて様子を見てくる様に言われ何かカミラ様の兄妹達に危害がある様な事をしようとしていたら殺す様にと命じられてラクスの元に来た。

私はラクスとは幼馴染みだが別に殺す事は構わないの思っていたがここ数年で私に気が付かない内にラクスは異常なまで強くなっているのが分かった。

何故そんな事が分かったのか。

それは彼が剣を手に掛けた瞬間、顔には出さなかったが今まで感じた事の無い悪感に襲われたのだ。

だが、命令を無視する訳にはいかないので私はラクスに話しかけた。

彼はすぐに私だと気づくと警戒をしつつ振り向く。

そこには顔こそ隠れているが気配はラクス本人だった。

私はラクスに対して何をしているのか聞いた。

ラクスは捕虜を生かしてマークス様とレオン様を利用して逃がしていたのだ。

私はその彼の計画を進行を見守っている時に来たようでラクスは

完全に安心しきったのか剣から手を放し悪感が収まった。

色々と話した後にはラクスは立ち去ったが私は彼が最後に言った言葉が気になった。

”私には善人は似合わないからだ”

何故、そんな事を言うのだろうか。

彼は最近になってやけに自分を追い詰め他人に全て嫌われる様な行動しかしない。

私にはわからない。

「・・・善人は似合わない、か」

私はラクスの言葉の真意について暫く考えたがすぐに止めた。

今は任務の途中であり何よりラクスから適当な訳でも考えて言ってくれと言われているのでその訳を考えなければならぬからだ。

（side終了）

相談

ラクスは捕虜二人が逃げたのを見送った後、王城のラクスの執務室で書類仕事に追われていた。

普通、暗夜騎士なら書類仕事より訓練を優先されるが暗夜王ガロンの腹心ともなると書類仕事を任される事が多いのだ。

「今回はやけに仕事が多いな。またマクベスの嫌がらせか何かか：」
マクベスとは暗夜王国の軍師で見た目が不気味かつかなり非道な策を扱う。

ラクスはそんなマクベスを毛嫌いしてはいないが好きとも言えない感じだった。

マクベスは出世欲がかなり強く他者を追い落として軍師の地位に就いたが腹心の座はラクスが既に取っている為、あの手この手で追い落とそうとしてきている。

そのマクベスの追い落としをラクスは普通に避けるのでマクベスから必要に仕事を押し付けられたりする嫌がらせを受けたりする。

「まあ、どっちでも良いがいい迷惑だな本当に」

ラクスはぶつぶつと文句を言いながら仕事をしていると扉がノックされる。

「(一体誰だこんな夜更けに・・・) どうぞお入りください」

ラクスは見上の者の可能性も考えて敬語で返答すると扉が開かれる。

そこにいたのは最近まで自分を避けていたエリーゼ本人だった。

「エリーゼ様。こんな夜更けにどうなさいました？」

「あのね相談したい事があって・・・」

いつもお転婆なエリーゼが悩み事を抱えている時は家族かその他の人物関係だと考えたラクスだがあえて聞く。

もしかしたら別の悩み事かも知れないからだ。

「それはどんな悩みですか？」

「カムイお姉ちゃんが王城に来た時の騒動を覚えてるよね。その時にお父様とお姉ちゃんが喧嘩しちやっった事も・・・」

エリーゼの悩みはあの騒動の時の事らしくガロンとカムイがいきなり意見を分けた事を悩んでいるのだろうとラクスは思った。

だが、ラクスには一つ気になる事がある。

それは何故、エリーゼは他の兄妹や臣下がいるのに自分の元に相談しに来たのかわからなかった。

だが、ラクスはあえて伏せ話を続ける。

「つまりガロン様とカムイ様の仲を直したいのですね」

「うん・・・」

エリーゼがそう頷くとラクスが考え込む。

ラクスはガロンとはもう長い付き合いでガロンの性格は把握しているつもりだった。

ガロンは残虐で手段を選ばずそして尚且つ逆らう者には容赦はない人物だった。

そんなガロン相手にカムイの仲介は難しいとラクスは考えたが悩むエリーゼを捨て置けずここはエリーゼの性格に合わせた仲介で勝負する事を決めた。

「そうですね・・・ここは貴方様が間に入ってみれば如何でしょう？」

「間に？」

「はい。ガロン様の性格は難しいですが貴方様の笑顔を見ればきっとわかってくれます。きつと・・・」

ラクスはそう優しく言うときつとエリーゼは少し考える素振りをしたが決断は早かった。

「うん！ラクスの言う通りを試してみる！」

「そうですか。では、もう大丈夫ですね？」

「うん！じゃあ、行ってくるね！」

エリーゼはそう言うとき元氣よく走っていく。

ラクスはその姿を呆れながら見ていた。

「・・・廊下を走らないで下さいよ」

くエリーゼ side く

お父様とお姉ちゃんがかげんかした日の時、私はお姉ちゃんがどうすればお父様と仲直りできるか考えた。

でも、良い方法は見つからなくてお兄ちゃんやお姉ちゃん達に相談しようと考えたけど皆忙しそうにしててなかなか言い出せなかった。私は誰に相談すれば良いか考えていると一人思い当たる人がいたの。

その人はあの騒動の時にお姉ちゃんを剣で殴って気絶させたラクスだったの。

私はラクスが苦手だった。

昔に見た血塗れのラクスの姿を見た時にその光景が焼き付いてそれが切っ掛けでラクスをそのつもりじゃなかったけど避けてた。

でも、他に頼れる人がいなかったからラクスの執務室まで行って扉を叩いた。

「どうぞお入りください」

敬語でそう聞こえたので私は扉を開けて中に入るとそこにはラクスがいた。

全身を鎧で包むその姿に私はやはり怖いと思ったりしたけど勇氣を振り絞って相談したの。

だが、その心配を消すかのラクスは真剣に私の相談を聞いて考えてくれた。

そして出された案は私が二人の間を取り持つ事を言われ私は少し考えたけどその方が良いとすぐに思った。

この時のラクスは優しくいつも怖いと思う感じがなくなって笑顔になれた。

悩みが解決した私はラクスと別れると急いでカムイお姉ちゃんの所に走った。

side終了

偵察任務と陰謀く前編く

ラクスはエリーゼからの相談を受けてから数時間が経過した後でガロンから王座の間に来るようにと兵士から言伝てが来た。

ラクスは王城の廊下を歩きながら何故、自分が呼び出されたのかを考える。

だが、何も思い当たる事は無くただ、ガロンの待つ王座の間へと急ぐ。

「まさかエリーゼ様の相談の件でじゃないよな・・・」

ラクスはまさかとは思いつつも不安になる。

ガロンがラクスがエリーゼの相談を聞いて余計な事をしたと言う事で罷免しようとするならとんだとトバッチリを受ける事になる。

王座の間の前に着いたラクスは深呼吸しつつ大きな扉の前で声を出して呼び掛ける。

「ガロン様。お呼びだしと聞いて参上したラクスです」

「入れ」

「失礼します」

ラクスは扉を開けて中に入ると玉座に座るガロンがおりその付近にはカムイとその兄妹達が立ちガロンの横にはマクベスまでおりそして、知らないスキンヘツドの如何にも極悪人とも言える男もいた。ラクスはそれを見てただ事ではない事を感じとりガロンの前にやって来た。

心配そうに見ているエリーゼ以外はマークス達、特にカムイを溺愛しているカミラにかなり睨まれながらも前に立つ。

「カムイよ。お前の任務にこのラクスも連れていかせる。こやつ腕はお前はもう身を持って知っている筈だ」

「はい。ありがとうございます」

カムイはガロンに頭を下げて感謝の言葉を言う。

ラクスの頭の中は混乱しており何の事か理解できていなかった。

「ラクスよ。お前を呼んだのはカムイの初任務に同行する事だ。そこにいるガンズだけでも良いが備えはある方が良いからな」

「(成る程な私は見張り役と言う訳か)」

ラクスはガロンの真意にすぐに気づいた。

ガロンはカムイを消すつもりなのだ。

消すと言うのはつまり暗殺をしようとしている事でラクスはガンズと聞いてある事を思い出した。

ガンズは暗夜を荒らし回った極悪人で噂でガロンがガンズを登用したと聞いていたがラクスは本当だと把握していなかった。

「わかりました。慎んでお受けいたします」

ラクスはそう言うのと深々と頭を下げガロンも頷く。

無限溪谷の吊り橋を渡って今回の目的である無人の砦の付近までやって来た。

ラクスはこの場所が何なのか知っていた。

ここは暗夜と白夜の不可侵の領域でそんな不可侵の領域に無人の砦等ある筈がないとラクスは考えていたがあえてカムイに伝えなかった。

「(近くにはガンズがいる。余計な事したら真つ先に私に矛が向くだろう。とにかく最善の注意をしなければ)」

そんなラクスの事をお構いなしにカムイ達は進む。

崖の下は何処まで続いているのかわからない程に深い所で落ちたら一貫の終わりだ。

特に馬を使っている為にバランスが取りづらいラクスとグレートナイトのギョウターには酷な事だ。

「高い所ですね・・・」

「足元にお気を付けてください。うっかり落ちたら命はありませんぜ」

ガンズが不適に笑いながらそう呼び掛ける。

ラクスはそんなガンズに注意を向け常に警戒していた。

暗殺の危険があるカムイをできる限り守り無事に帰すと考える。

自分の過去の、カムイの父であるスメラギを目の前で殺したその過ちを償う為に。

「ガンズ。そんな事を言うな。カムイ様は初めてここを通るんだ・・・恐怖心を与えたら余計に危ない」

「すみません」

ラクスは悪びれる気配の無いガンズに溜め息をつきつつも渡り続けられていると砦から大きな声が聞こえた。

「貴様達は暗夜の者か！ここは暗夜と白夜の不可侵の領域だ。即刻立ち去れ！」

「やはりか・・・！」

ラクスの考えは当たった。

無人の砦の砦には白夜兵が多く警備していてその一人にカムイ達は見つかってしまった。

「何でここに白夜兵が！」

「カムイ様。一先ずこれ以上の混乱を避ける為に退きま」

「いや、その必要は無いぜ！」

ギョんターが進言している時にガンズが早まった事に斧片手に白夜兵の元に走っていき斬り着ける。

これを見た白夜兵達はすぐに戦闘体制に入りカムイ達も応戦しなければいけなくなった。

「カムイ様。こうなれば致し方ありません・・・応戦しましょう」

「ラクスさん！」

「カムイ様。こればかりはラクス殿の言う通りです。戦うしかありません！」

カムイに対して戦う事を言ったラクスとギョんターの声にカムイは決断したのかガングレリを引き抜く。

「わかりました。でも、できる限り白夜の兵士達を殺さないでください」

カムイの命令で迫ってくる白夜兵を倒す為にガンズとは別の橋を渡って行く事を決める。

道は白夜独特の兵種である天馬武者が立ち塞がりカムイ達はなか

なか進めずにいた。

そんなカムイ達を尻目にラクスは天馬武者が出撃してくる砦の一つを押さえる為に既に橋を渡りきっていた。

「暗夜めが、死ね！」

「邪魔だ」

「ぐはあ！」

ラクスは攻撃してくる天馬武者をディアブロスで斬り裂いて突き進み続ける。

天馬武者は諦めが悪い様に無数の数でラクスを攻撃するが全く敵ではないと言わんばかりに天馬武者を蹴散らして遂に砦を押さえ天馬武者の援軍を半減させる。

「カムイ様。ラクス殿が砦の一つを押さえている内に突破しましょう！」

「はい！」

カムイ達は何とか橋を渡りきり何とか有利な戦況を作る事ができたのであった。

偵察任務と陰謀く中編く

橋を渡りきったラクスとカムイ達は砦へと行く為に進もうとしたが砦の先は崖になっており通れる道は無かった。

ラクスは流石にこの崖を突破するのは不可能だと判断しカムイに指示を仰ぐ。

「道がないな。どうしますかカムイ様？」

ラクスが諦めたかのような声を聞いてカムイは考える素振りを見せたが何かに気が付いたかのように一点を見る。

カムイが見る先は崖で特に何も無い。

「待ってください。あそこに竜脈があります」

「竜脈があるのですか？」

「はい。竜脈を発動させて見ます！」

カムイはそこに向かうと竜脈を発動する。

すると今まで道が無かった崖に道が現れ進める様になり引き返す事は無くなった。

「道ができたのか・・・？いや、今は竜脈に考えるより戦いに勝つ事を考えねば・・・」

「ラクスさん？」

「いえ、何もありません」

暫く考え込むラクスにカムイが話し掛けるとラクスは誤魔化す様に敵に向かっていく。

その姿をギンターやバトラのジョーカーに睨まれつつ。

くギンターsideく

私はガロン様の偵察任務の命を受けたカムイ様の付き添いでジョーカーとガンズそしてラクスと共に無限溪谷へとやって来たが偵察目標である無人の砦には多数の白夜兵が警備していた。

見つかった時点で引き返せば何とかなっていたがここで予想だにしない事態が引き起こる。

ガンズの乱心だ

ガンズは何を考えているのか白夜の兵士を斧で斬り白夜兵との戦

闘にもつれ込んだのだ。

流星にラクス自身も予想だにしていなかったのか落ち着いた声で喋るが慌てているのがわかる。

カムイ様の指揮で戦いは始まり最初こそは苦戦はしたがラクスの突破力と高い戦闘能力が項を然して何とか目的地の場所へと足を進めた。

だが、それ以上に道は無く崖しかないまさに絶望的な状況になってしまった。

だが、幸いにも竜脈があつた事でカムイ様がそれを発動させた事により道は開かれた。流星に

だが、可笑しい・・・話が出来すぎているのだ。

無限渓谷には誰もいないとガロン様がそう言っていたのにも関わらず白夜兵はおりラクスは確かに最初は驚いてはいた・・・ガンズの特攻だけを。

奴は白夜兵がいて見つかったにも関わらず想定内と言わんばかりに静かだった。

ガロン様の腹心なのだ把握していても可笑しくない人物であるのは間違いない。

「じじい、やっぱ可笑しくねえか？」

「ああ、奴は恐らく砦に白夜兵がいる事を知っていてカムイ様を近づけたのだろう・・・そうだとするとこれは」

”畏”

この言葉がやけに私の頭に響き私はラクスを睨むしかなかった。

side終了

ラクスは先頭に立って馬を走らせ迫り来る白夜兵をディアブロスで次々と討っていく。

腕を斬り飛ばし、首を斬り飛ばす等とラクスの戦いを見て白夜兵は恐れをなし始めた。

「怯むな！敵将の首は目前だぞ！」

白夜の将は激昂するが兵士の恐怖を拭いきれず次々と恐怖が蔓延する。

ラクスは敵兵をディアブロスに突き刺した状態で白夜の将の元に歩み寄ってくる。

”死神”

正しくその姿は死神その者で白夜の将は恐怖を押し殺すしかなかった。

ラクスは近づくとディアブロスに刺さっている死体を投げると白夜の将に問い掛ける。

「貴様が白夜の将か？」

「そ、そうだ！貴様を」

「さらばだ」

「へ？」

ラクスの言葉に白夜の将は啞然とした瞬間、首が勢いよく吹き飛び一人の白夜兵の足元へと飛んで転がる。

生首となって息絶えた白夜の将を見て白夜兵達は慌てて逃げ始めた。

「ば、化け物だ！」

「ひいひい！」

「逃げる、逃げるんだ！」

口々にラクスを化け物扱いしたり逃げる事を促す白夜兵を見てラクスは決着は着いたと安堵した。

ラクスが馬の上でカムイ達が来るのを待っているとカムイを達はやって来た。

「ラクスさん！」

「カムイ様。ご無事ですか？」

ラクスはそう言うとかムイに近づく。

ラクスは兜越しでカムイの状態を見たが少しの怪我程度で済んでおり後は何ともないとラクスは判断した。

「はい。それよりラクスさんの方が心配です。一人で白夜兵に突っ込んで行ったのでしたから・・・」

「一人で突っ込むのはいつもの事です。まあ、戦いは終わりました。敵の増援が来る可能性があるのですぐに」

ラクスが引き上げようとカムイに言い掛けた瞬間、ラクスは何かが自身に飛んでくる気配を感じとりディアブロスを引き抜いて振るう。

激しい金属音と共に手裏剣と呼ばれる武器が落ちた。

「この手裏剣は・・・チツ、もう来たのか」

「どうしたのですか!」

「・・・どうやら退くのが遅すぎた様ですカムイ様。白夜の忍びに囲まれています」

そうラクスが言うとな多数の忍びが次々と現れラクスとカムイ達を取り囲んだ。

「(不味いな数が多すぎる・・・)」

ラクスは焦りを見せ始めた。

自分一人ならまだ突破する事ができるかもしれないがカムイ達がいるのだ。

多数の忍びを相手にカムイを守る戦いは不可能と言わざる得ない。

「(どうする。このままではカムイだけでなく私や他の者の命も危ないだろう)」

ラクスがディアブロスで牽制しつつも忍びはジリジリと迫ってくる。

ギョんターとジョーカーはカムイの近くで守りを硬めているがラクスと同じ事で徐々に追い詰められている。

「暗夜の者だな?」

「何者だ?」

「我が名はサイゾウ・・・お前達の命を貰い受ける」

白夜の忍びサイゾウはそう言うとなラクスに手裏剣を投げつける。

ラクスは手裏剣を弾き返しサイゾウに斬り掛かるがサイゾウは避けてまた手裏剣を投げってくる。

「ちよこまかと動き回るか・・・」

「俺は忍びだ。忍びが英傑に対して距離を取って戦って何が悪い?」

「まあ、そうだろうな」

ラクスはそう言うとなディアブロスを構えつつどう戦うか考えていると後ろから金属音が聞こえた。

「(しまった!)」

後ろにはカムイ達がおりサイゾウは一番の手練れであるラクスを引き剥がす役目だとラクスは気づき戻ろうとした時にサイゾウに阻まれる。

反転させた後なので大きな隙が出来てしまっていた。

「貴様……!」

「終わりだ……爆散れ!」

サイゾウの攻撃にラクスは死を覚悟した瞬間、何処からともなく魔法がサイゾウに襲い掛かりサイゾウはその魔法を避けて距離を取る。

魔法はリンゴの木が生えた様な物でこの魔法の名前をラクスは知っていた。

「この魔法はブリュンヒルデ……まさか」

「そのまさかだよ」

ラクスは振り替えるとそこには馬に乗ったレオンがいたのだ。

レオンだけではないマークス、カミラ、エリーゼと暗夜王族が勢揃いしたのだ。

「嫌な予感を感じて来てみればいつものお前とは思えない程にドジを踏んだね」

「申し訳ありません。しかし、助かりました」

「お前の為じゃないカムイ姉さんを助ける為に来たんだ。お前はおまけだ」

レオンにそう言われラクスは内心傷ついた。

これまで自分に寄り付かない様に様々な悪名を作り上げてきたが此処まで言われたのは初めてだ。

「そうですね。では取り合えず……」

ラクスはディアブロスを構えると忍びが飛び掛かってきた。

「お前達を潰さないとな」

後ろの憂いが無くなったラクスは忍びを一網打尽にすべく反撃を開始した。

偵察任務と陰謀く後編く

ラクスはカムイの事をマークス達に任せて忍びに斬り掛かる。

忍びは素早い動きで隙をつこうとするがラクスにとつての憂いが無くなった今、その隙をつく事すらさせなくなった。

次々と忍びを葬るラクスにサイゾウは厳しい顔つきになる。

「く、もう少し早く仕留めていれば」

「サイゾウ」

「カゲロウか？」

サイゾウの元に女の忍びカゲロウが姿を現した。

「リヨウマ様の援軍はもうすぐ着くそうだ」

「そうか。リヨウマ様の援軍が来るまで持ちこたえる。行くぞ！」

サイゾウはそう言うと言とうとマークス筆頭の暗夜軍に向かって飛び掛かって行く。

ラクスは激しい乱戦の中、馬を走らせ忍びを次々とディアブロスで斬り裂き続けていた。

戦いの途中、ラクスはマークスとの合流に成功した。

「マークス様」

「ラクスカ」

「今回の件。大変申し訳ございません。私がいながらこの様な事態にしてしまうとは……」

「いや、気にしてはいない。それよりもできる限り早く撤退するぞ。

カムイは既にギウンターと共に撤退させている。お前も早く撤退しろ」

「何ですって……？」

ラクスはマークスの言葉に耳を疑った。

カムイが一時とはいえラクス自身の目から離れた少しの間にカムイはギウンターと二人で撤退していた。

これは暗殺の危険を持つカムイに万が一危険があったら非常に不味い。

いつの間にかガンズの姿も見当たらないので余計だった。

「・・・」

「どうした?」

「いえ、ではお言葉にあまえて撤退させて貰います」

ラクスは馬を走らせて元来た道から撤退する。

カムイと早く合流すると言う言葉が常に頭から離れずとにかく急いで馬を走らせていると暗夜領へ続く吊り橋にやって来るとそこには怯えたガンズと前までの姿からかけ離れた姿をしたカムイが立っていた。

「カムイ様!」

「ラクスさん?」

ラクスの言葉に反応したカムイと思われる人物が振り向くと顔はやはりカムイだった。

カムイは完全にラクスの方に振り向くと元の姿に戻るがガンズは僅かな隙について今だと言わんばかりに走り出した。

「くッ!」

「ッ!?待ちなさい!」

カムイはガンズを追いかけようとした瞬間、カムイの手に握られていたガングレリが突然、光だしてカムイを無限溪谷の崖に引っ張られるかの様に落ちていく。

「そんな・・・カムイ様!」

ラクスは馬を降りて橋から身を乗り出して底を見るとカムイの姿は無かった。

ラクスは膝を着いて絶望した。

「私は、守れなかったのか・・・」

ラクスは暫く項垂れたが立ち上がり馬に乗ってその場を後にする。

ラクスは帰還するなかでマークス達にどう言い訳すれば良いかわからず静かに悲しみに暮れながら暗夜王国の王城まで帰還した。

悲しみと戦争

ラクスは王城に帰還した後、ガロンに報告をする為に王座の間まで足を運び悲痛のままにガロンの前で膝ま付いた。

「ご報告します。カムイ様は運が悪く無限溪谷の崖に落ちました。生存は絶望的です」

ラクスはガロンに嘘をついて報告をした。

明らかにガングレリがカムイを落としたがそのガングレリ落としたのは他ならないガロン自身の手で渡されたのだ。

明らかにカムイを亡き者にしたのはガロンだと嫌でもわかった。

「そうか・・・もう良い下がれ」

「は・・・」

ラクスはガロンに退出する様に促されて退出すると王座の間の扉前にはマークス達がいた。

マークス達は信じられないと言う様な顔をしていてラクスは見てはいられなかった。

「おい、さっきの話は何なんだ。カムイが死んだとは？」

「・・・申し訳ありません」

「申し訳ありませんではない！カムイはどうなったと聞いている！」

マークスの怒りの言葉にラクスは黙り混む。

ラクスはマークス達に真実は言えなかった。

カムイはガロンによって暗殺されたなど父を慕うマークスに対して言えるわけが無かった。

「死にました。橋から足を滑らせて落ちたのです」

「嘘よーそんな事・・・」

ラクスの言葉にカミラは大きな声で訴えるがラクスは黙ったままその場から離れる。

後ろから泣き声が聞こえるがラクスにはどうしようもできなかつた。

「(おのれガロン・・・この借りは必ず返すぞー)」

ラクスは怒りをガロンへとぶつけるがラクスの姿は周りから見た

らいつもの冷静なラクスだった。

くカミラ side く

カムイの死亡。

その言葉を偶然聞いた私達はどうしても信じられなかった。

王座の間から出てきたラクスにマークス兄様が怒鳴りながら問い詰めるがラクスは私達に残酷な言葉を二度も言った。

”死にました。橋から足を滑らせて落ちたのです”

私は頭が白くなっていくのがわかった。

私の可愛いカムイの急な死に私は泣き崩れてしまいマークス兄様に慰められる様に背中を擦られる。

エリーゼも泣いてしまい泣き声は聞こえないがマークス兄様とレオンも恐らく泣いている。

誰が、いったい誰がカムイを死に追いやったのか

私はそれだけを考えているうちに一つの疑問にぶつかった。

それはラクスがカムイを陥れて殺害したのではと考えるようになった。

結論から言うとかなり有り得る話でカムイを邪魔者と見た父の命で実行したに違いないのだ。

許さない・・・絶対に許さない！

私はラクスへと怒りの矛先を向けた。

く side 終了く

カムイ死亡の方を報告した数日後、ラクスはあれから黙って仕事に没頭していた。

カムイの死を早く忘れる為に、自分の罪悪感から逃れる為に、ガロンへの報復方法を考える為にだ。

ラクスはどうしてやろうかと考えていると扉が開かれる。

「ラクス様。ガロン様からの緊急の評定がありますのですぐに来てください」

「わかった・・・」

ラクスは報告してきた兵士の報告を受け取って王座の間へと赴く。

「失礼します」

ラクスは王座の間に入るとガロンを筆頭に暗夜の兄妹とマクベスそしてどの面を下げて戻ってきたのかガンズがいる。

「揃ったな・・・では、今回の評定を始める。今回の評定は白夜王国の侵攻についてだ」

「白夜王国への侵攻・・・!?」

ラクスは長い間、ガロンに仕えてきたが訳がわからなかった。白夜王国は領土全土に強力な結界が張り巡らされており戦闘意識のある者の戦意を全て削いでしまうのだ。

その鉄壁の守りのある白夜王国に侵攻とはどういう事かとラクスは考える。

「今日ハイドラ様の御告げがあり白夜王国の結界が崩壊したと御告げをくださった。その御告げを信じ白夜王国に攻め込む！」

「お待ちください。私はハイドラ様を信じてはいない訳ではありませんが今回、暗夜王国には戦争継続の為の兵糧がありません。ここで攻めても」

「ラクス殿。別に問題はありませんよ。数の少ない白夜には勝ち目はありません・・・すぐに決着が着きますよ」

「しかし、マクベス殿！」

ラクスはマクベスに対して反論しようとしたがガロンに遮る様に右手を上げて制止する。

「お前の意見はわかった・・・だが、もう決めた事だ。お前の意見は無しだ」

「くっ・・・」

「フフフ・・・」

意見を却下されたラクスは唇を噛み締めマクベスは不適に笑う。

「では、マークス。お前が指揮官として軍を率いる。編成はレオン、カミラ、エリーゼ、ガンズ、ラクス、マクベスの将を筆頭に副官をラクスする。行くのだ！」

ガロンの命令でラクス達は白夜王国の侵攻の為に白夜平原へと進

軍を開始した。

運命の決断へ

白夜王国領の白夜平原へと侵攻にしたマークス率いる暗夜軍は高い丘を陣取り白夜軍を迎え撃つ構えを取る。

ラクスは副官としてマークスの補佐をしていたがカムイの死を切っ掛けにマークスからあまり信用されてはいなかった。

「（不利な状況で戦争が始まるとは・・・だが、やるしかなきか）」

ラクスは覚悟を決めた様に迫り来る白夜軍を見つめる。頭数は意外にも同等で将らしき者達も多数いる。

まともにぶつかれば両者共に甚大な被害になるだろう。

「マークス様。っ指示を」

「ああ、全軍攻撃！」

マークスの指示で遂に開戦を迎え両軍突撃を開始した。

激しい怒声と足跡が鳴り響く中で白夜王国の赤い鎧を着た侍が部隊を率いて暗夜軍に襲い掛かっていた。

鋭い剣劇と華麗な動きで次々と暗夜軍を突破してくる。

「我が名は白夜王国第一王子リヨウマ！暗夜軍の将よ、一騎討ちを申し込む！」

まさかの大将がラクスの目の前にいた。

ラクスはディアブロスに手を掛けてリヨウマと対峙しようとした時にマークスに遮られる。

「私が相手をする。お前は軍の指揮を」

「わかりました」

マークスはラクスにそう言うとりヨウマの方へ体を向けた。

「暗夜王国第一王子マークス。一騎討ち受けよう・・・我が剣の露と消えるがいい。はあ！」

マークスは馬を走らせ丘を勢いよく駆け降りていきマークスを討たんとした白夜兵はマークスの神器ジークフリートによって斬り裂かれていく。

リヨウマとマークスはお互いの邪魔者を打ち倒した事で二人は激突した。

「はああああああ！」

「うおおおおお！」

リヨウマとマークスの一騎討ちは激しい物で誰も介入を許す者はおらずただ、邪魔をしないようにするしかなかった。

「白夜軍を一気に叩くぞ。私に続け！」

ラクスも白夜軍に攻撃する為に馬を駆けて白夜兵に攻撃する。

大軍同士の戦いは熾烈を深めていく。

「はあ！」

ラクスは白夜兵を斬り捨てて行くなかで赤い短髪の女天馬武者に攻撃を仕掛けられラクスは攻撃を防ぐ。

「何者だ？」

「白夜王国第一王女ヒノカ！これ以上は好き勝手はさせん！」

まさかの白夜の王族が勝負を仕掛けてきた。

ラクスは油断の無い構えでヒノカと向き合う。

「良いだろう相手をしてやる・・・こい！」

「はあ！」

ヒノカは天馬を飛ばし素早い動きで迫り薙刀をラクスに振るう。

ラクスヒノカの薙刀を避けてディアブロスでヒノカを攻撃するが防ぐ。

「成る程な。少しはできるようだ・・・」

「女だと思って舐めているとその口・・・黙らせてやるぞ」

ラクスは別にヒノカが女だからと言って舐めてはいなかった。

暗夜でも多くの女の兵士や騎士がいるのだ。

舐めてたら暗夜では身が持たない。

「舐めてはいないが、そろそろ終わらせてやる」

ラクスはそう言うとヒノカに剣先を向けて技を放つ仕草を見せた。

「・・・消え失せろ」

ラクスはそう言うのと暗夜の基本の技である月光をヒノカに当てるべく馬を駆け迫る。

ヒノカはラクスの月光を避けようとするが運悪く暗夜側の矢が飛んできてヒノカは反射的に避けてすぐにはラクスの月光を避ける事

はできなかつた。

「しまったー！」

「終わりだ」

ラクスがディアブ羅斯をヒノカに当たろうとした時に黄金の剣がラクスの攻撃を防いだ。

ラクスは防がれたと同時に距離を取って誰が邪魔をしたのか観察したらそこには信じられない人物が立っていた。

銀髪の赤い瞳の死んだと思われた人物が今、ラクスの目の前にいるのだ。

「カムイ・・・様？」

「やめてくださいラクスさん！何故白夜を攻めてきたんですか！」

ラクスは戸惑いつつもカムイの言葉を返す。

「・・・ガロン様の命だ。騎士の俺は主君の命令には逆らえない」

「そんな・・・」

カムイはラクスの言葉に絶望した様な声を出して立ち尽くすが立ち直ったヒノカがカムイの前に立つ。

「カムイ下がってろ！こいつは手強い相手だ。私が押さえ替えている間に逃げろ！」

「話の邪魔をするな。カムイ様。どうして白夜にいるのですか？貴方は暗夜の人間の筈です。どうか早く戻ってマークス様達に」

「騙されるなカムイ！お前は白夜の人間で私達の兄妹だ。奴等がした事をお前はもうわかつている筈だ」

ヒノカの言葉を聞いたラクスは動揺が走った。

カムイは既に白夜の者達によって幼い頃の記憶を取り戻しているかもしれないとラクスは考えたのだ。

カムイはうつ向きながらラクスに向けて恐れていた言葉をラクスに向けた。

「ラクスさん・・・貴方は私の父を殺したのですか？」

「・・・」

「応えてください、ラクスさん！」

「・・・そうだ。俺が、殺した」

「ッ!？」

ラクスの言葉にカムイは確信に至った顔になり悲痛な表情を見せる。

ラクスは兜の下ではカムイと同じ様に悲痛な表情をしているがそんな事が周りにわかる訳もなくヒノカから殺気が出ている。

「お前が、父様を殺したのか!」

「ああ、そうだ」

ラクスはもう自棄になりつつもカムイの方へ手を伸ばす。

「だが、暗夜での貴方様の兄妹には関係ない。例え血が繋がらなくても兄妹は兄妹だ。戻ってほしい・・・どうか」

「私は・・・」

「まだ迷いがある様ですね。ならば、戦場の中央に来てください。そこでどちらに来るか決めて貰います」

ラクスはそう言うのと戦場の中央へと馬を走らせて去っていく。

後ろからヒノカの大きな声が聞こえるがラクスには関係は無くそれよりも大きな問題があった。

”カムイが記憶取り戻した可能性である”

その可能性は有り得る物でその証拠にスメラギを殺害した本人の姿を思い出していたのだ。

「希望は薄いか・・・」

ラクスは一握りの希望を抱きつつカムイの帰還を望むのだった。

決断の時

カムイの生存を知ったラクスはカムイにどちらに着くか決断をさせる為に一時戦いを止めた。

戦場は静まり返りさつきまでの怒声と金属音は消え去り血の臭いと両軍の死体しか残っていなかった。

「本当なのかラクス。カムイが生きているのは？」

「はい。確かに見ました」

「・・・良かった」

マークスは安堵したかの様に笑いラクスはそれを見て肩の荷を一つ下ろした様な感じがした。

他の場所で戦っていた王族達にも伝令を放ってカムイ生存の知らせを知らせに走らせカムイの決断を見届ける為に気高い丘で戦場の中央を見ていた。

ラクスは二つの事を考えていた。

一つはカムイがやって来たが白夜へ着くとしたらすぐにでも殺しにかかる事

二つはカムイがこのまま出てこなかったら白夜に着いたと考えマークスを押しきってでもカムイの首を取る為に戦闘を続行させる事

この二つの最悪の出来事をラクスは来ない事を祈りながら見ているとカムイが現れる。

ラクスは一先ずは最悪の事態の一つ目を越えられたと考えた。

「無事だったのだなカムイ。さあ、此方へ来るんだ共に戦えばこれ以上の犠牲は無く戦いを終えられる」

「騙されるなカムイ。奴等はお前を利用してしようとしているだけだ。耳を貸すな」

マークスが最初にカムイを説得してそこにリョウマが割り込む。

他の兄妹達も声を掛けカムイを引き込もうとする。

「戻ってきてくれカムイ」

「こっちだ！」

兄妹達の言葉にカムイは迷っていた。

絆を結んだ暗夜の兄妹か血の繋がりのある白夜の兄妹か。

カムイに取ってどっちも大切なのだろから無理もなかっただ、カムイが此方に来る事をラクスは祈る。

「私は……」

カムイは決断をしたのか覚悟を決めた瞳で両者を見つめる。

↳カムイside↳

私は決断を迫られていた。

ラクスさんは父の仇である存在だがやはり白夜王国で悪逆非道の人物だと聞いたがやはりそうは思えず何か裏のある人だと感じた。

そんな人に暗夜に戻ってくる様に言われ迷っていた。

「カムイ。ヒノカから話は聞いている。奴の言う事に聞く耳を持つ事はない。奴等は卑怯な手段で父上を殺した……そんな奴等を信じて良い筈がない」

リヨウマさんの言葉に私は本当にどうすれば良いのか深く考える。

そんな時にラクスさんのあの言葉が響く。

” 例え血が繋がらなくても兄妹は兄妹だ”

ラクスさんの言う通り例え血は繋がっていなくても皆と過ごした楽しい思いでは偽物ではない。

私は暫く考えた末に決断をした。

「リヨウマさん……私は彼の返答に応えにいきます」

「何だと……！ 罨かも知れないのだぞ」

「わかっています。でも、このまま返答しないでいると後悔しそうなんです」

「……わかった。だが、俺達も行く事を条件にしてくれ」

「わかりました」

私はまだ迷いはあるがそれでも決めた道を進む。

それが大切な人達と戦う事になっても。

↳side終了↳

ラクスは狂気じみた言葉を平然と口にするラクスに背筋が凍る思いをする暗夜の王族達は何とか止めようとするが体が動かない。

「さあ、楽に殺してあげますから動かないでくださいね……」

「カムイ下がれ！」

リヨウマがそう言つて白夜の神器雷神刀をラクスに向ける。

ラクスはそれでもカムイに向かって行こうとするがマークスやレオンに押さえ込まれる。

「止めろラクス！」

「おい！いつものお前は何処に行ったんだよ。しっかりしろ！」

「離してください……離せ！」

マークスとレオンの必死の押さえに白夜側はどうすれば良いかわからずにいるとリヨウマが叫ぶ。

「奴から離れろ！奴は今、正気じゃない！」

リヨウマがそう叫ぶと同時にカムイも含めて全員すぐに離れる。

カムイ達にはいつまでも狂気ともとれるラクスの叫びが耳に響くのであった。

くカムイsideく

私は白夜王国に着く事と決めた。

白夜王国に着いたのはお母様を救えなかった罪悪感と暗夜王国が正しいとは思えず白夜王国を選んだ。

だけど、私が白夜王国を選んだ事でラクスさんはどうしてしまったのか狂ったかの様に私に刃を向ける。

狂気に飲まれた状態でもその剣劇は衰えを知らず私は避けるのが精一杯でした。

ラクスさんは壊れたかの様に私を容赦なく殺そうと迫り私はラクスさんに対して恐怖心を覚えてしまい動けずにいるとリヨウマさん、いやリヨウマ兄さんが前に立つてくれた。

リヨウマ兄さんが武器を構えているにも関わらず私を狙うラクスさんは武器を手に私に斬り掛かろうとした時、マークス兄さんとレオンさんが押さえに掛かった。

どうやらこれは暗夜側でも想定外の事らしくマークス兄さんやレ

オンスさんの焦った表情は久し振りに見た。

この状況をどうすれば良いのかわからずにいるとリヨウマ兄さんが離れると叫んで私達はすぐに離れていく。

後ろからラクスさんの声が響くなかで

side終了

ラクスはカムイ達が離れた後も暴れ続けた。

情を捨てた状態のラクスにマークスとレオンもどうすれば良いかわからないでいると竜に乗ったベルカが飛んできた。

「ベルカどうしてここに！」

「説明は後でします。とにかく離れて」

ベルカはカミラにそう言うと言おうとラクスに近づいていき鎧の上しかも馬の上にいるにも関わらず腹を勢いよく殴る。

「ぐはあ！」

当然、ラクスは痛みと吐き気を覚えて崩れ落ちる。

マークス達はその奇妙な光景に啞然とするがラクスは立ち上がりマークス達は咄嗟に身構える。

だが、ベルカはラクスに対して身構えずに話しかける。

「しっかりして。貴方また狂気状態になってた」

「はあはあ、すまない・・・」

ラクスはベルカにそう言うと言おうとラクスは礼言いでディアブ羅斯を杖にしながら立ち上がる。

「いったい何だったんだ・・・」

「彼は一定まで感情を高めるとこんな風に暴走するんです。その度に私が止めるんですが一発で良かったです」

「一発・・・？」

「下手したら五回ほど殴る」

ベルカはそう言うと言おうとラクスの方へ向く。

ラクスは落ち着いてはいるがまだ心の安定はできておらず頭を片手で抱えている。

「今回の戦いは彼にとって負担が大きい。彼を離脱させる許可をください」

「・・・わかった。頼んだぞ」

「ベルカ。帰ってきたらちやんと訳を話すのよ」

「はい」

ベルカはそう言うのとラクスを竜に乗せて飛び立つ。

ベルカは暗夜領の一角まで来ると降り立ちラクスを下ろす。

ラクスはへたり込む様に座る。

「貴方。ここ最近まで狂気なんて無かったのにどうしたの？」

「・・・別に」

ベルカの質問にラクスは誤魔化す様に一言しか喋らない。

ベルカはそんなラク스에黙ったまま見つめ静かな環境が生まれる。

「・・・」

「・・・カムイ様の事ね？」

「奴は裏切り者だ。敬称はいらん」

「・・・強がり」

「おい、それは無いだろ」

ベルカの挑発ともとれる発言にラクスは食い付きまるで子供の様な行動だった。

そんなラク스에ベルカは話し続ける。

「貴方はいつもそうね臆病で強がりでも悲しい時も常に一人で悲しんで悩む時も一人・・・貴方には他に頼れる人を作るべきよ」

「・・・もういるさ」

ラクスはそう言うのと立ち上がりベルカに向き合う。

そして、ラクスは徐に兜を脱ぎ素顔を去らす。

その顔は落ち着きのある好青年で静かに笑みを浮かべている。

「お前がいる。貧民街の時も暗夜軍の兵士として働いていた時も一緒だったお前がいる。ここ最近、疎遠になってしまったがそれでもお前は唯一私が頼れる人だよ」

「・・・」

ベルカは無表情でラクスを見ているが少し顔を赤く染めている。
ラクスはそのベルカの少しの変化に気付かず兜を被るとベルカに話しかける。

「じゃあ、また乗せてくれないか？馬を戦場に置いてきてしまったから足が無いんだ」

「・・・貴方という人は」

ベルカは文句を言うが満更でもない様子でラクスを竜に乗せる。

修羅の道

暗夜王国の王城に帰還したラクスとベルカは其々の仕事に戻る。

ラクスはガロンへの報告、ベルカは白夜平原に戻りカミラと共に白夜軍を倒す為に行動する。

「気を付けて行けよ。奴等はや手加減してくれないと思うからな」

「わかってる」

ベルカはその一言だけを言っただけで飛び立っていく。

ラクスはそれを見届けるとガロンの元へ報告に戻っていく。

「それで戻ってきたのか？」

「申し訳ございませぬ。あのまま暴走した私が戦場にいれば勝利に異常をきたすと思ひ離れるしかありませんでした。どうか処罰を……」
ラクスはガロンに膝ま付きながら処罰を求めろがガロンは怒る事もなくラクスに話す。

「良い……お前にはしばらく休息を取らせる。調子が戻り次第白夜を捻り潰せ」

「は……寛大な処置にありがたく受けさせて貰います」

ラクスはそう言うのとガロンに礼をして王座の間から出ていく。

ラクスが出ていくとガロンは不適に笑う。

「くくく……遂に奴の力が目覚め始めたか。このまま行けば……」
ガロンが笑うなかラクスは休息を取る様に言われながらも書類仕事をしていた。

読んでは羽ペンでサインしての繰り返しでたまに出てくる不適切な物は省いたりしている。

そんなラクスの元に執務室の扉が叩かれる。

「私よ」

「ベルカか。入って良いぞ」

ラクスがそう言うのとベルカは入ってくると同時に呆れる。

ラクスは休息を言い渡されているにも関わらず仕事をしているのだ。

この状況を見て誰でも呆れる物であるのは間違いない。

「休息は？」

「これが俺の休息だ。この仕事をやっていると時間を忘れていられる」

ラクスはそう言って仕事を続けていく。

「所でお前がここに来たのは何か用があるんだろ？」

「うん。今回の戦いの結果を伝えに来た」

「・・・それでどっちが勝った？」

「白夜軍」

ラクスはやはりと考え顔をしかめる。

元からカムイを取られたのは痛い話でカムイに軍才がある事は既にラクスは見抜いていたのだ。

あの実力を確かめる戦いを見た時から。

「(それにカムイの手に握られていた剣はあの伝説の剣、夜刀神。カムイが選ばれた勇者ならば暗夜には勝ち目は無い)」

ラクスと深く考える様に黙り混んでいる。

「ラクス？」

「ん？ああ、すまない。続けてくれ」

「そう。暗夜は敗退した後撤退、白夜軍も勝利は掴んだけど大きく戦力を削がれた為、撤退した」

「そうか・・・なら、まだ手を打つ事はできる。白夜が体勢を整える前にこちらも体勢を整える準備をさせるとしよう」

ラクスはそう言うの一つの案書を取り出して書き始める。

それは不足した物資を補う為の略奪案だった。

「ツ!?!何をするつもりなの」

「白夜王国の多くの村に盗賊と見せかけて略奪させる。無論、ばれない様にだ」

ラクスの慈悲の無い作戦に流石のベルカも顔を歪めている。

ラクスのこの無慈悲な作戦は今に始まった事ではなくある時は反乱の予兆のある村に大量のノスフェイトウを送り込み壊滅させ、ある時は籠城する敵に生き物の死体か何かを投石機で投げ入れ籠城する民ごと疫病を流行らせる等様々である。

「・・・変更は？」

「ない。誰かいるか！」

ラクスはそう言うと兵士が現れる。

「この案件をガロン様に渡してくれ至急だ」

「わかりました」

ラクスの命令に兵士は走っていく。

ラクスはそれを見届けた後にまた書類仕事をし始めた。

「貴方が仕事をしていた事張れるんじゃない？」

「別にもう張れてるよ」

ラクスはそう言うのと側にあつたコーヒーを飲む。

ラクスの案件は採用され後日、ラクス自らがそれにあたる事になった。

ラクスは自分が進んでいる道が修羅の道だと分かっているがラクス自身はもう引き返せないと考えて。

略奪者

決行の日、ラクスは何時もの鎧ではなく軽い服装と顔を隠す様に口元を布で巻いて隠した服装をしている。

他の兵士もそうで正しく盗賊その者だ。

「今回の作戦は新兵の者もいるかもしれないから説明しておく。今回は略奪だ。非道な行いを嫌う者には酷な話だがやらなければならぬ。それでも嫌なら抜けてくれ・・・邪魔になる」

ラクスのそう言うと共に進む。

兵士は覚悟を決めていると言わんばかりにラクスに続く。

ラクスの部隊は山の木々に隠れ村を襲うタイミングを見計らっていた。

戦争で白夜軍が付近の村まで兵を配置して警戒しており一度逃げれば増援が来るので慎重をきたしていた。

「なかなか警備が厳しいが、やれない事はない・・・行くぞ」

ラクスはディアブ羅斯は使わず銀の剣を持って馬を駆り他の兵士達もラクスに続いていき村の付近まで接近した。

その姿を白夜兵は見つけて叫ぶ。

「盗賊だ！盗賊が出たぞ！」

「早く武器を取れ！村の者達を守るのだ！」

白夜兵は武器を取ったが既に遅くラクス達の突撃を許してしまった。

次々と斬り捨てられる白夜兵と村人達を余所にラクスは数人の兵士を連れて倉庫へと向かう。

「よし、開けろ」

「はー！」

兵士はラクスの命令を聞くと鍵開けを開始した。

この兵士は本物の盗賊で鍵開けは容易い物だと言わんばかりにす

ぐに開けた。

ラクスは開けられた扉を開くとそこには大量の食料があった。

「運び出せ」

ラクスはそう言うのと兵士達は食料を運び出し始め次々と馬車に乗せていく。

その光景を見た村人の一人が慌てた様子で止めに入る。

「止めてくれ！その食料は今年の冬を乗り切る為の」

「黙れ」

「ぐはあ！」

ラクスは食料を奪おうとする行為を止めようとした村人を斬り殺す。

「この様子だとまだ蓄えはある筈だ。探せ！」

ランチの声に兵士達は次々と倉庫だけでなく民家まで押し入り略奪していく。

その際に民家を破壊したり火を着けたりする。

略奪者と化した暗夜兵の横暴を止められる白夜兵も数に圧倒され村人共々皆殺しにされる。

「ラクス様。もう全て奪い尽くしました」

「そうか・・・ん？」

ラクスは離脱を命じようとした時、物陰に隠れる様に箱が置いてあった。

ラクスはまだ手を付けていないのかと思いついていく。

??? side

あたしは何時もの様に畑を耕している時に盗賊団の襲撃にあった。

盗賊達は白夜の兵隊さんに次々と容赦の無い攻撃で殺し回って拳げの果てには村の皆までに刃を向け始めた。

あたしはお母さんと必死に逃げたけど徐々に近づいてきてもうダメやと思うた時にお母さんに箱の中に隠れてなさいと言われて無理矢理押し込まれた。

あたしは必死に箱から出ようともがいたけどお母さんの悲鳴が聞こえて泣いてしまった。

お母さんは盗賊に殺されてしまうたと言う現実になんて信じてられなくて泣くしかなかった。

あたしが暫く泣いていたらもう片付いてしまったのか静かになつて助かったと思つた。

でも、此方に来る足音が聞こえて危険を感じて息を殺した。

”見つかったら殺される”

あたしは必死に気配を隠すけど足音は箱の前で止まって箱を開けようとしてくる。

「誰か・・・誰か助けて！」

あたしはすぐる様に心の中で助けを求めた

side終了

ラクスは隅に置かれていた箱を開けようとしていた。

だが、箱の蓋はびくともせずとても硬く閉じられていた。

「どうした物か・・・」

ラクスは少し考えると剣を引き抜いて何を思ったのか箱に向かつて剣を振る。

木と鉄がぶつかる音がしつつもラクスは箱に剣を振るい続けあと少しの所まで開きそうになっていた。

「あと一回だな・・・」

ラクスは剣を振るおうとしたその時、一人の兵士が走ってくる。

「ラクス様大変です！白夜の増援が接近してきています！」

「チツ・・・まあ良い目的は果たした。退くぞ」

ラクスはそう言つて馬に乗つて撤退していく。

side

私は村が盗賊に襲われていると聞いて急いで駆け付けて見ると住民と兵士の死体が乱立し民家も崩壊していたり燃えていたりして酷い有り様だった。

ジョーカーさんが言うには住民の生存は絶望的と言いましたが私は少しの可能性があるならと生存者を探しました。

「誰かいますか！」

「こゝこゝです、助けてください！」

私は声が聞こえた方へ走ると無残に斬りつけられた箱を見つけた。声はこの中の物らしく私は急いで開けた。

「大丈夫ですか!」

「は、はい助かりました・・・」

私が助けた生存者の名前はモズメと言い盗賊団から逃れた生存者だ。

モズメは箱から出ると自分の母を見つけた様で涙を流して殺された母を抱きしていた。

私はモズメさんの母と村の人達を殺した盗賊を許す事はできない。

「辛い所をお聞きしたいのですか盗賊達は何か言っていないませんでしたか?」

「・・・そうや。盗賊達があたしが隠れてた木箱の近くでラクス様と言ってた様な気がする」

「何ですって!?!」

私は心の底から驚いてしまった。

盗賊達の首謀者はラクスさんだと私は考えてしまった。

まだ早すぎる結論でありもしかしたら名を語った偽者かもしれない同名の人物の可能性もある。

でも、私はどうしても白夜平原で見たラクスさんの姿が写る。

「・・・」

「ど、どうしたん?」

「あ、いえ何でもありません・・・」

その後、モズメさんを保護しましたが盗賊団は多くの村を襲って姿を消してしまい追跡が不可能になってしまった。

事の真相も解き明かせず私は次の目的地へと向かう。

side終了)

風の部族

ラクスは略奪した食料を王城へと運んでいる時、兵士の一人がやって来た。

「ラクス様。ガロン様がお呼びです」

「ガロン様が？わかったすぐに行く」

ラクスは持ち場を任せてガロンの元へ向かっていく。

ラクスは王座の間へとやって来るとガロンが玉座に座っていた。

しかし、戦時の時はいつもガロンの徒なりにいるマクベスが見当たらずラクスは不審に思いつつもガロンの前が出る。

「お呼びでしょうか？」

「うむ、今回呼んだのは他でもない。お前に風の部族の村へと攻め混んで貰いたいのだ」

「風の部族の村を？何故ですか。彼等は中立を貫き戦争には関係ない筈ですよ」

ラクスにはこれ以上の敵対者を作る理由がまるでわからないと言わんばかりにガロンに反論する。

「奴等が白夜と手を組み我々に滅ぼさんとするつもりなのだ。これは由々しき事態であり即急に解決すべき物だ」

「だからと言って・・・」

「カムイ」

ラクスが反論しようとしたがカムイと言うガロンの発言に黙る。

「カムイが風の部族の村へと向かっている。これはカムイが風の部族に対しての使者と言っても過言ではない」

ラクスはガロンの言葉を聞いて無茶苦茶な内容だと思ったがラクスは好機と捉えた。

これはラクスの中で一番の驚異であるカムイを葬れるチャンスなのだ。

ラクスは兜の下で不適に笑うとガロンの任務を受ける。

「わかりました。風の部族の村へ進攻します」

「うむ、では行け・・・我が懐刀よ」

風の部族の村ではカムイ達は不本意な戦闘が行われていた。

王城にいなかったマクベスの罠にカムイ達は引掛かり風の部族と敵対する事になったのだ。

だが、カムイ達は見事に風の部族族長のフウガを打ち倒した。

暫くの平穏を得ていたが部族兵が伝令に走ってきた。

「報告します！中規模の暗夜軍が進攻。此方に迫ってきています」

「何だと！暗夜め、遂にこの風の部族までも手を出してきたか」

「フウガさん私達も戦います！」

カムイの戦うと言う言葉にフウガは首を横に振る。

「いや、お前達はイズモ公国に行くのであろう・・・早く行くのだ」

「しかし！」

「カムイ様。敵は我々よりも多いです。数が少なく疲労の多い我々では戦うのは困難です」

「・・・それでも風の部族の皆さんを見捨てる事はできません」

スズカゼの進言を聞いてもカムイの決意は揺らがない。

フウガはその姿を見て笑う。

「フフフ・・・やはりスメラギの娘だな」

フウガは懐かしむ様に言うと言と暗夜軍が迫ってくる方向を見る。

フウガが見る先には暗夜王国の紋章を掲げて進軍してくる暗夜軍が現れた。

「ここが風の部族の村か？」

「ッ!? 貴様は！」

「ん？お前は・・・ヒノカと言ったか。それとあの時の捕虜の忍びと・・・知らない顔ばかりだな」

ラクスは面倒くさそうに数える。

ヒノカはラクス様に態度に怒りを覚えつつ警戒する。

ラクスの強さは白夜平原で経験済みで下手に出たら死ぬとヒノカは考えていた。

「まあ良い・・・それよりもカムイは何処だ？私の目的は風の部族を亡ぼす事だが私個人としては裏切り者のカムイを討ちたいと思つてきたんだ。早く出てこい」

ラクスはディアブロスを引き抜いてヒノカ達に向ける。

「止めてくださいラクスさん！」

「来たか・・・」

ラクスは呼ばれた方を見るとカムイが現れる。

ラクスは自分の悩みの種が自らが現れてくれた事でラクスは冷峻な笑みを浮かべる。

「やっと会えましたね。貴方を殺し暗夜の脅威を絶ち斬らせて貰います」

「ラクスさん。戦う前に一つ聞きたい事があります」

「何ですか？」

ラクスはわかつてカムイの話に乗る。

カムイはラクスを睨みながら問いたです。

「貴方は村々への略奪は貴方がしたのですか？」

「そうですか？」

ラクスは悪びれずカムイにそう言いカムイは怒りを露にする。

カムイは荒らされた村やモズメの悲しみを考えラクスに対して憎悪が深くなった。

「許せません。貴方は何処か優しいさがあるとと思っていましたが私の勘違いだったようです・・・」

「・・・」

ラクスはカムイの言葉が突き刺さるがすぐに元の自分へと戻る。

もう引き返せないだから何処までも落ちようとラクスは考えたのだ。

「勝つ為には手段は選ばない。それが私の方針だ。誰にもその方針を覆させはしない・・・それがお前であっても」

ラクスはそう言うとカムイに向かっていく。

【イメージ戦闘BGM 漆黒の騎士戦】

ラクスは馬を走らせてカムイに一気に近づいて攻撃する。

カムイはラクスの攻撃を夜刀神で防ぐがラクスの二激目が襲い掛かる。

「くっ！」

カムイは間一髪避けるとラクスに反撃する。

ラクスはカムイの攻撃を軽くあしらいながら隙を伺っている。

「ふん、少しは戦い慣れているか。だが、あまい！」

ラクスはカムイの攻撃を弾き返しカムイの体勢を崩す。

その隙を狙わない訳がないラクスはカムイを斬ろうとディアブロスを振るう。

「貫った！」

「カムイ！」

「カムイ様！」

だが、惜しい所でヒノカの薙刀が阻みスズカゼが手裏剣を投げた。

ラクスはヒノカの薙刀からディアブロスを離すと手裏剣を横に奮って落とす。

「勝負に手を出すとはな」

「お前が一方的に始めたんだ！カムイ私達も戦うぞ」

ヒノカがそう言うのとカムイに着いてきた白夜の者達が身構えてくる。

今気付いたのだがサイズウもおり手練れだらけだとラクスは思った。

「(まずいな・・・敵は少数だが手練れが多い。致し方ない撤退だ。どうせ滅茶苦茶な戦いだっただ別な問題は無い。カムイを討てなかったのは残念だがな)」

ラクスは溜め息をつくとディアブロスを収める。

カムイ達はその状況に困惑の表情を浮かべている。

「興が覚めた・・・決着はまた何処かで着けよう」

「逃げる気か」

サイゾウがラクスに対して言う。

「お前達を相手にしていたら疲れる。私は帰らせて貰うよ」

ラクスはそう言うのと砂煙と共に軍共々姿を消した。

イズモ公国

ラクスは砂煙に混じって撤退した後、無駄な労力を兵士に負わせてしまった事を悔やんでいた。

兵士達は移動するだけでも疲労が多くなり疲れきっていたのだ。

「やはり休息が必要か」

ラクスは立ち止まって地図を広げて休める場所を兵士と共に探した。

周りの国や集落は暗夜に対して何もしないが敵対的な勢力ばかりでとても受け入れてくれそうな場所は見つからなかった。

「ラクス様。イズモ公国は如何でしょう？」

「イズモ公国だと？あの中立の国か」

「はい。暗夜王国とは敵対的ではありませんので休息がとれると思います」

「ふむ・・・」

ラクスも良い考えだと思い兵士に頷く。

ラクス達はイズモ公国へと足を運んでいく。

ラクス達はイズモ公国へやって来るとそこは神秘的な場所でも何処か神々強い国だった。

ラクスはイズモ兵に近づいて行くと話し掛ける。

「我々は暗夜軍の者だがここで休息が取りたいのだ。どうか、許可を頂けないだろうか？」

ラクスの言葉を聞いたイズモ兵は門に入って行き数分後、戻ってきた。

「どうぞお入りください。公王様も歓迎されています」

ラクスはその言われるとイズモ公国へと入っていく。

だが、ここで予想外の出来事が発生した。

「ラクスさん！」

「カムイ！・・・随分と早い再開だな」

ラクスはそう小さく言うとかムイ達が向いてラクスから左の方から呼び掛けられる。

「やあやあ君がラクスだね！初めましてイザナです！」

「あ、ああ、よろしく・・・」

ラクスはイザナのテンションに驚きつつも受け答えをしてからカムイ達と同じ様に座る。

「いやあ、カムイ達が来てくれなかったら僕はあのゾーラて人にずっと閉じ込められたままだったよ。ありがとね！」

「は、はい・・・」

「（ん、ゾーラだと？）」

ラクスはゾーラと言う名前前に聞いた事があった。

暗夜の魔導師で変身が得意な人物だがそれしか能が無く無能とラクスは考えていた。

「待てどう言う事だ？何故ゾーラを知っている？」

「知らなくて来たのですか？」

カムイがそう言うて事の成り行きを話す。

ゾーラがイザナを捕らえてゾーラが変身でカムイ達に罠を張ったのだと言ったのだ。

「成る程、それでゾーラは？」

「今は捕らえています。レオンさんに殺され掛けましたが」

「そうか・・・すまないがゾーラを引き渡してくれないか？奴はどうやら独断で軍を動かした様でな処罰しなくては・・・」

ラクスはそう言うて鋭い目でカムイを見る。

「駄目です！私はゾーラさんの命を助けました。だから彼の生死は私が決めます！」

「だが、それでは立場が無い・・・今回のゾーラの事件は暗夜の責任だ」
「どちらも譲らない二人にイザナが割って入る。

「まあまあ、落ち着いて。ラクス今回はカムイが正しいよ。一度命を助けた人物がその助けた人物の命を預かるんだよ」

「・・・わかりました」

ラクスは納得できないまま、黙った。

「所でラクス。君、面白いね。いったい何れくらいの顔を持っているの?」

「ッ!?・・・何の事ですか」

聞いていたカムイはラクスの僅かな反応に気づく。

動揺しているのが一瞬の行動を見て看破したのだ。

「うーん。その様子だと知られたくなさそうだね・・・言わなくて良いよ」

「はい・・・」

ラクスはそう言うのと今度こそ喋らなくなった。

謁見は終わりを迎えて其々の部屋に通されて泊まる事になった。

その夜、全員が寝付いている時にラクスは中々寝付けずにいた。

「(私の本当の姿を知られたらどうか・・・)」

ラクスは考えない様に寝ようとしたがやはり眠れないので夜風に当たる事にした。

外は月に照らされており暗夜では見られない光景だった。

ラクスは暫く眺めていると足跡が聴こえそちらに向くとそこにはカムイが歩いていた。

ラクスは現在は完全な寝巻きで兜をしてはいなかった。

ラクスは焦っているとカムイが来てしまった。

「あ、こんばんわ。貴方も眠れないのですか?」

「は、はい(気づいていない・・・?)」

ラクスは一安心した様に小さく溜め息をつくとかムイは縁側に座った。

「眠れないと言う事は貴方も?」

「はい・・・私はある人についてわからなくなってしまっただけで」

「悩んで眠れないと?」

カムイは頷く。

ラクスはカムイの悩みは自分の事だと気づくとどうした物かと考える。

このまま立ち去るのは良いがそれでは夢見に悪いとラクスは悩む。

「その人物はどんな人なんですか？」

「素顔がわからない人で、父の仇なんです。でも、仇討ちらしいつもりです。でも、その人の事が憎くて、許せなくなっているのです」
「・・・」

「だから、私は彼とどう向き合えば良いかわからなくて・・・それで悩んでいるんです」

ラクスは考える素振りを見るとカムイに言う。

「許せなくて良いのではないですか」

「え？」

「人を憎くむのは人の感情で無くしたくても無くしきれない物・・・でも、それを乗り越えて許せると思える様になれば良いと私は思っています」

「・・・でも」

「でも、では在りませんよ。やらなければいけないんです。それがどんなに辛くても」

ラクスの言葉にカムイは少し笑顔になる。

「ありがとうございます。赤の他人の私の相談に乗ってくれて・・・私はカムイです。貴方の名前は？」

「私は・・・レスターと言います」

「レスターさん。相談に乗ってくれてありがとうございます。では、私はもう寝ますね」

カムイはそう言うのと立ち去っていく。

ラクスもそろそろ寝る為に自分の部屋へと戻って行くのだった。

楽園の戦い〜前編〜

ラクスは朝一にイズモ公国を出る事にしイザナに軽い挨拶をする為に見送っていた。

「もう帰っちゃおうの？」

「はい。私は早くガロン様に御報告をしなければなりませんので……」
「そうか。できれば偽りの顔をした君じゃなくて本当の顔をした君と話したかったよ」

ラクスは兜越しではあるが軽く微笑むと礼をしてその場から出ていく。

イザナはラクスの表情の変化に気づいていると言わんばかりに笑っていた。

「ミューズ公国へだと？」

ラクスは王城に帰還している時に伝令が走ってきてミューズ公国へ来るようにとガロンからの知らせだった。

「はい。ガロン様は今回、ミューズ公国で休息を取られる為、エリーゼ様と共に先にミューズ公国へ」

「そうか……わかった。すぐに行くとガロン様に伝えてくれ」

ラクスはそう言うと言令は馬に乗って戻っていく。

「では、行くとしよう」

ラクスは馬の手綱を靡かせて馬を歩かせると兵士達はそれに続いていく。

ミューズ公国。

そこは楽園の様な国で歌や歌劇等の文化が最も発展している国であり時々、他の王族達の休息を取りに来る程の場所である。

ラクスはミューズ公国へ到着すると滞在中の兵士にガロンの所在を確かめる。

「ガロン様は今どちらに？」

「は！ガロン様は今ミューズ公国の劇場におられます」

「わかった」

ラクスは兵士の言う通り劇場に向かっていきそこにいた兵士に案内されて中へ進んでいくと王族の特等席にガロンが鎮座し、その横にエリーゼが不安そうに座っていた。

「ガロン様」

「来たか・・・その様子だと失敗した様だな」

「申し訳ございません。私はカムイを侮っていました」

嘘ではない。

ラクスは内心では知らないの内にカムイを侮っていたのか油断があったとラクスは考えていた。

「もう良いそれよりももうすぐ歌姫が現れる。おつて処遇を言い渡す」

「は・・・」

ラクスは暫くの間、ガロンの右側に立って護衛をしていた時、歌姫が現れる。

だが、その姿はカムイの側にいた水色の髪の少女でラクスは驚きを隠せない。

「お父様。あの人が歌姫ですか？」

「うむ、我は昔、聴いた時は本当に心を動かされた物だ。お前も楽しみにしている」

「(何を企んでいるカムイ・・・歌でガロンをどうにかしようとする訳があるまいし・・・)」

ラクスはカムイの企みを読もうと必死になっている時に音楽が始まり歌姫は歌い出した。

その歌は美しくラクスの思考は停止して聞き惚れてしまっていた。

歌姫は更には水を操り劇場を更に飾る様に展開し引き立たせるがラクスは聴いている途中で左から呻き声が聞こえてみるとガロン

が苦しんでいた。

「ガロン様！」

ラクスは慌ててガロンを支えていると何処から途もなくカムイ達
が現れたのだ。

「してやられた。この歌は呪いの類いか！」

「お父様！」

「エリーゼ様！ガロン様を連れて早く安全な所へ！」

ラクスはそう言った瞬間、ガロンが制すように右手を挙げた。

「ふふふ・・・案ずるなラクス。これは想定内だ」

ガロンがそう言うときカムイの周りに暗夜軍が現れた。

「しまった！」

カムイの言葉がラクスに届くぐらいの声で叫びが響く。

ラクスはガロンを支えて立ち上がらせるとガロンはカムイに対し
て言った。

「お前達の企みは既に露見しているぞ。覚悟せい」

「諦めません！貴方を止めるまで私達は何度でも立ち上がります！」

「そうか・・・ラクス。カムイを殺せ」

ガロンの命令を受けたラクスは特等席から飛び降りて着地しデイ
アブロスを引き抜く。

「逆賊カムイ・・・今度こそ逃がしはしないぞ」

「くツ、貴方が相手ですか」

ラクスは馬が無い状態の戦いとなるが問題はなかった。

「では、行くぞ！」

【イメージ戦闘BGM 漆黒の騎士戦】

戦いはラクスの先制攻撃から始まりカムイに斬り掛かりカムイは
夜刀神で防ぐが強い力で押され体勢を崩し掛ける。

ラクスは第二激、第三激と攻撃しカムイに防戦を強いていく。

「どうしたその程度か？」

「くツ、はぁ！」

カムイはラクスに対して反撃をした。

風の部族の時に戦った時よりも一段と強くなっておりラクスは冷

静に防いでいく。

「(やはり成長してきているか。早くカムイを倒さねば暗夜は終る・・・)」

「やはり強いですね・・・」

「修羅場を何度も潜って来たんだ。これぐらい強くなくては意味は無いんだよ・・・ふん！」

ラクスはそう言うのとディアブロスをカムイに振るいカムイは夜刀神で受け止めると鏢迫り合いになった。

激しい金属音が鳴り響きお互い譲らない接戦になっていた。

「カムイ！」

「カムイ姉さん！」

ヒノカと白夜の第二王子タクミが助けに入ろうとしたが兵士に邪魔をされる。

「もう、誰にも邪魔はさせん。決着を着けるぞカムイ！」

ラクスはそう言うて夜刀神からディアブロスを放すと攻撃する。

今度はカムイの腕を掠めて負傷しカムイは倒れ込むとラクスはディアブロスをカムイの首に突き立てる。

「ふん、呆気ない最後だな・・・」

「くッ・・・」

「・・・死ね」

ラクスはそう言うのとディアブロスを高々に揚げて振るったが激しい金属音だけが響いた。

楽園の戦い〜後編〜

大きな金属音を響かせてラクスは目を見開いた。

ディアブロスの刃を槍が受け止めておりその槍を持つものは茶髪でそばかすのある少女だ。

「モズメさん！」

「カムイ様。助けにきました」

モズメはラクス方を向いて身構える。

「戦いの邪魔をするか小娘」

「あんたがラクスやな？村の皆の仇を取らせて貰うで！」

「村の・・・？ああ、生き残りか。全員殺したと思っっていたんだがな。まあ良い掛かってこい相手をしてやる」

「行くで！」

モズメが槍を突き立て様とラクスに迫るがラクスは避けて斬り込んでくる。

モズメは槍で受け止めつつもう一度槍でラクスを突くが今度は受け流された。

「村人にしてはやるがまだ実力差があるようだな」

「くそ・・・」

モズメはラクスを睨んでもう一度槍を向けるが兵士の一人がラクスの元へ飛んでくる。

「ラクス様！マークス様の援軍が到着しました！」

「マークス様の援軍か！これで奴等も終わりだ」

「まさかマークス兄さんまで来るなんて・・・」

カムイは出血する腕を押さえながら身構えていると先程、ガロンを苦しめた歌姫が現れた。

「カムイ。ここは逃げるのよ。このまま戦っても勝ち目はないわ」

「・・・わかりました」

カムイは歌姫と共にラクスに後ろを向けて走り出した。

モズメも悔しそうな顔をしてカムイに続いていく。

「追え」

「は！」

ラクスは兵士に追うように指事した後に後ろから気配を感じ振り向くとそこには馬に乗ったマークスとその臣下ラズワルドとピエリがいた。

「マークス様。お手数かけて申し訳ありません」

「いや、別に良い。それよりもカムイは何処に？」

「逃走しました。しかし、兵士に追撃をさせており私もすぐに追撃に行くつもりです」

ラクスが追撃すると聞いてマークスは暫く黙っていたが口を開いたと思ったら予想外の言葉を放つ。

「・・・カムイは今回は見逃せ」

「今、何を言いました？」

「カムイを見逃せと言ったんだ」

「しかし、奴等はガロン様の命を・・・」

「奴等は父上の命をです狙って来たのだろ。ここで戦力を分散させておく訳にはいかない。奴等がその隙について戻ってこないとも限らんしな」

マークスの正論にラクスは項垂れ反論が出来なかった。

「わかりました。兵を呼び戻します・・・」

ラクスはそう言つて立ち去っていく。

「マークス side」

ラクスは私でも何を考えているのかわからない人物だ。

ただ、一つだけわかるとすればカミラの臣下ベルカと古い付き合いである事と父上の臣下だと言う事しかわからなかった。

ラクスは危険な存在だ。

これは勘ではなく確かな確信があつて言える事であつて白夜平原で見たラクスの暴走は凄まじい物だった。

あの時、ベルカがこなければどうなっていたのかわからない。

「(やはり奴とは関わらない方が得策なのかそれとも・・・)」

” 奴を殺すべきなのか”

「side 終了」

里帰り

ミューズ公国での戦いが終わりガロンと共に王城に帰還したラクスは任務失敗について咎められていた。

「ラクス。今回、ミューズ公国での戦いは見事な物だったが任務失敗の事実はある。よってお前にはしばらく自宅での謹慎を申し渡す」

「ガロン様。あの、私はこの王城で泊まり込みなので家はごさいませんが・・・」

「そこは何とかせい」

ガロンの無茶ぶりの謹慎処分にラクスは落胆する。

ラクスには住む家は持つてはおらず常に王城で寝泊まりして買いそびれ続けていた。

騎士なら家ぐらい貰えるのだが外はあいにくノスフェラトウの溜まり場で危険過ぎると言う事で保留にされて今にあたる。

「はあ、いったい何処で謹慎しろと言うんだ・・・」

「どうしたのラクス？」

ラクスが落胆して歩いているとベルカがやって来た。

「聞いてくれベルカ。ガロン様に謹慎を言い渡されたのだが私に家は無いんだ。もうどうするべき悩んでしまっただけ」

ラクスは困り声でベルカにそう伝えると普段無表情なベルカの顔が小さく笑った。

「おい、笑うなよ」

「ごめん。あまりに面白かったから」

「はあ、全く・・・それよりも何処に行くべきかと思っただけ。昔みたいに地べたで寝泊まりする訳にもいかんし」

「貴方には帰えられる所があるじゃない」

ベルカという言葉にラクスは何処だと考え思い当たる所を頭から引き出していく。

そして、一つの答えへ辿り着いた。

「まさか、孤児院か？」

「うん」

「他に頼る所も無いか・・・」

ラクスはそう言うのと溜め息をついた。

「ありがとう。では、行ってくるよ」

「ええ・・・」

ラクスはそう言うのと自分の宛がわれている王城の部屋に歩いて行くのであった。

↳エリーゼ side↳

私は王城の廊下を歩きながらカムイお姉ちゃんの事を考えていた。カムイお姉ちゃんは白夜の人間として暗夜と敵対していて私もカムイお姉ちゃんと戦うのかと怖くて堪らなかった。

怖いて言っても争うが怖い。

さつきまで優しくかったお姉ちゃんと戦うなんて私にはできない。

そう考えていたラクスの部屋の近くまでくるとラクスの部屋から知らない人が出てきた。

私はおかしいと思ったの。

だってラクスは自分の部屋には人を絶対に入れられない人だからと知っていたから。

もう少し見ているとその人は部屋の鍵を閉めて歩いて行ったの。

「まさか今の人、ラクスなの？」

私は気がついたらその人を追い掛けていた。

↳side終了↳

ラクスは王都の地下の街に私服でやって来ていた。

普段は着ない私服にラクスは馴れない素振りです歩いていけると後ろから誰かに付けられている気配をラクスは感じ取った。

「(刺客か?)」

ラクスは警戒しながらも悟られない様に路地に歩いていき付けていた気配も後を追って路地に入るとそこにラクスが立って待ち構えた。

「ツ！貴方はエリーゼ様。どうして・・・」

「あ、あのその・・・」

エリーゼの反応からラクスはもう素顔は張れていると考えて諦め

てた。

「・・・はあ、とにかく此方へ来てください。路地は何かと物騒ですから」

「はい・・・」

ラクスに連行される様にエリーゼはついて行く。

街を歩きながらエリーゼはラクスに話し掛ける。

「ねえ、貴方は本当にラクスなの？」

「そうです」

「何でいつも兜をしていたの？別に顔を隠さなくても」

「何かと兜が隠れているのは都合が良いんです。終われている時に顔を知らないと追える者も追えませんしそれに、ガロン様の命でもありませんから・・・」

ラクスの厳しい顔付きでそう言うとエリーゼは表情を出して話すラクスに新鮮さを感じた。

普段は兜が隠れて表情はわからず、挙げ句の果てに考えている事すらわからないと来るのだから珍しいのは当然だった。

「何でお父様が？」

「・・・裏方の仕事をしていると、言っておきます。それ以上は貴方の命に関わる」

「ッ!？」

ラクスの言葉にエリーゼは凍りついた様にびくつく。

暫く無言で歩いていると孤児院に辿り着いたラクスは孤児院の門を開けて入る。

「ねえ、ここは？」

「孤児院です。身寄りの無い子供がここに拾われて育てられる場所です。ここは私にとつての故郷ですね」

ラクスはその言うのと微笑み浮かべて孤児院を見ている。

エリーゼはラクスの微笑みに見とれていると孤児院から子供が多く飛び出してきた。

「ラクス兄ちゃんだ！」

「おかえりなさいラクス兄ちゃん！」

「ただいま！お前ら元気にしてたか？」

「兄ちゃん」

ラクスは子供達との再開をよろこんでいると子供の一人がエリーゼを指差して。

「この人兄ちゃんの好きな人？」

「え、ええ！」

「いや、違うから」

エリーゼが赤面するがラクスがきっぱりと否定すると子供はそうかと言いいエリーゼは少し残念な思いをした。

「おやおや騒がしいと思ったら帰っていたのかラクス」

「ああ、ただいま院長」

「む、その方は何方じゃ？」

「初めまして私はエリーゼで言うの」

エリーゼの名前を聞いた院長は驚いて頭を下げた。

「こ、これは王女様とは知らず無礼な口を！」

「あ、頭を上げてお爺さん！」

いつも無邪気なエリーゼが慌てている光景にラクスは笑っていた。

ラクスは慌てて持て成しの用意に行ってしまった院長を見届けるとエリーゼに近づいて小さな声で話す。

「エリーゼ様。どうか私の立場を暗夜の兵士と言う事にしておいてください」

「何で？」

「私はあまり心配を掛けたくなくそれで自分の事を偽っているんです。どうかお願いしますね」

ラクスはそう言うのと建物内にエリーゼを連れていく。

壊される平穩

ラクスはエリーゼと共に孤児院の椅子に座って院長の持て成しを受けていた。

エリーゼはそれなりに遠慮してはいるが。

「それでラクスはここへ来たのか？」

「はい。帰宅する家すら無いのに謹慎を受けてしまい暫く厄介にならないかと思つて来たんだ」

「ほほほ、良いぞ。謹慎が解けるまで暫くここに住みなさい。子供達も喜ぼう」

「ありがとうございます」

ラクスは院長に礼を言つて頭を下げる。

「頭は下げんくて良い。それより何故、兵士であるお前がエリーゼ様と・・・」

「あ、ああ、それはエリーゼ様はお忍びで外に出て散歩したりするんだ。私はその付き添いの次いで」

ラクスは苦笑いしながら誤魔化すと院長は首をかしげながらラクスを見てくる。

ラクスに小さな汗が流れているとエリーゼがここでホローに入つた。

「そ、そうなの！いつも付いてきてくれるから安心して散歩できるの！」

「そうですか。ラクスがお役にたてて光栄です」

「（危ねえ・・・危うく張れる所だった）」

ラクスは冷や汗を流しながら出された紅茶を飲む。

ラクスとエリーゼ、院長の話は危うさもあつたが盛り上がつていき遂に夜を迎えた。

「エリーゼ様。そろそろ王城へお帰りにならないと皆様が心配しますよ。私が送っていくので帰りましょう」

「うん。院長さんいろいろありがとう！また来ても良いですか？」

「ほほほ、エリーゼ様なら大歓迎ですよ」

ラクスはエリーゼを王城へ送ろうとして扉を開けた時、そこには黒い鎧と仮面を着ける暗夜兵が立っていた。

この暗夜兵はガロン王直下の親衛隊の兵士でラクスの伏せられた部下でもあった。

「ラクス殿はいるか？」

「ラクスは私だ。何のようだ？」

ラクスは孤児院にいる際のうちあわせで会話すると兵士が通達書らしき紙を広げてラクスに向けて読む。

「ガロン様からの通達書である。本日、シユヴァリエ市場で反乱発生の為、その反乱鎮圧の為にラクス殿の謹慎を解き鎮圧軍参加するようにとの命令である。直ちに準備をして現地に赴くように」

兵士は読み終わるとその場に立って返答を待つ。

ラクスは後ろを見るとそこには不安そうに見つめるエリーゼと院長、そして子供達だった。

ラクスは振り向くと笑って見せる。

「心配しないでくれ。私は必ず生きて帰ってくる。それまでまた待っていてくれ」

「でも、戦いなんですよ！貴方でも死ぬかも知れないんだよ！」

エリーゼは泣きながらそう言うと言くとラクスを抱き締める。

ラクスはエリーゼを抱き返し安心させる様に呟く。

「私を誰だと思っている。私は暗夜王の懐刀なんだぞ簡単には死なん。待っていてくれるな？」

エリーゼは頷くとラクスは兵士にエリーゼを任せて兵士が用意した馬車に乗り込むと馬車に用意されていたラクスの鎧兜とディアブロスを身に付ける。

本当の顔である穏和で優しさのあるラクスから再び冷酷で残酷なラクスの顔へと変えたのだった。

全ては暗夜に暮らす大切な者を守る為に。

「もう、容赦はしない・・・狂気に飲まれると言うなら逆に此方が飲み干してやるまでだ」

ラクスがそう言うと言いつつ体を包む様に黒い霧が包むのであった。

シュヴァリエ市場

ラクスはシュヴァリエ市場へやって来るとまるで反乱等起きては
いない様な静けさを放っていた。

ラクスは不審に思いながらも愛馬に股がりシュヴァリエ市場に侵
入する。

「静かすぎる・・・ん？」

ラクスがそう呟いた瞬間、前に誰かに抱きついているカミラがおり
ラクスは誰に抱きついているのかと目を凝らすと抱きつかれている
のはカムイだった。

しかし、以前のカムイの服装とは違い白い白夜風の服装をしている
がラクスはカムイと認識した。

「全く何をやっているのですか・・・」

ラクスはそう言いつつも遠くから眺めていたがどうやら戦闘にな
る様でカミラが奥へと竜で飛んでいった。

「反乱軍は後の様だな・・・全軍、白夜軍を攻め立てろ！」

ラクスがそう言うのと暗夜兵が一斉にカムイ達の元へ走っていく。

くカムイsideく

私はカミラ姉さんと再開をしましたが戦闘になってしまい私達は
身構えて攻撃しようとしたが突然、横から暗夜軍が現れ襲い掛
かってきました。

「何故、横から暗夜軍が！」

「カムイ。奥を見て」

アクアさんの言葉を聞いて奥を見るとそこには何度も戦って殺さ
れ掛けた相手、ラクスさんがいたのだ。

「ラクスさん・・・！」

「どうやら彼奴とも戦わないといけないみたいだね」

タクミさんが忌々しそうにそう言うのと突撃してくる暗夜軍に対し
て神器風神弓を構え暗夜兵を射つ。

暗夜兵はタクミさんの風神弓の攻撃に倒れて行くが次々と沸いて
くる。

「このままじゃ押しきられるわ」

「くッ」

私は夜刀神を構えると暗夜軍を迎え撃とうとした時、奥から異質な気配を感じた。

「また会ったなカムイ……」

「ら、ラクスさん……」

異質な気配の発生源はラクスさんだった。

その気配はまるで白夜平原で見たラクスさんその物で私は恐怖した。

あの状態になれば理性がなくなるのは既にわかっているので余計に恐怖しました。

↳side終了↳

カムイとラクスが相対している時、カミラの元にもラクスが現れたと知らせがきた。

「何ですって。ラクスが！」

「はい。ラクス様は既にカムイと接触。今にも刃を交えんとしています」

兵士の報告にカミラは動揺を隠せないでいた。

ラクスがここに来るからには必ず理由がありそれは大体の事は反乱鎮圧でありもしかしたら偶然、カムイと遭遇したのかもしれない。「どうすれば。彼なら必ずカムイを殺そうとしてくる筈……何とか彼の気をそらさない」と

カミラはカムイを取り戻したいと思ってこのシユヴァリエ市場まで会いに来たのだ。

偶然、現れたラクスに邪魔はされる訳にはいかないと思っているとベルカが現れた。

「カミラ様。ここは私に任せてほしい」

「ベルカ？」

「彼と話して時間をくれる様に話します。どうか……」

「……わかったわ。お願いね」

カミラがそう言うのとベルカはラクスの元へ飛んでいくのだった。

その頃、馬に乗ったパラディンとしては完全体しかも狂気を纏ったラクスとカムイがお互い対峙して動かないでいた。

「・・・」

「カムイ。貴様はこの戦争をどう見る？」

「暗夜が白夜に侵攻を」

「違う。目的での話した・・・」

「暗夜は白夜を手に入れようと侵攻を、白夜は国を守る為に戦っています・・・」

「そうだ。戦いには常に目的がついてくる」

ラクスはそう言うと言いつつディアブロスを降ろす。

「何故、暗夜は白夜を手に入れたいと思う？」

「・・・わかりません」

「簡単な事だ。この国には光が無い・・・故に土地は荒れ果て作物は実りにくく、それで人々は飢えに襲われ、僅かな光さえ奪い合う毎日なのだ。この連鎖を終わらせる為に私は白夜との戦いに参加している」

「でも、それで良くなるなんて限りません！」

「それでも・・・それでもやるしかないんだ。私はこれ以上、何の希望もなく死んでいく民は見たくないんだ」

ラクスの言葉にカムイは心が揺らぐ。

ガロンのやってている侵略は間違っているかもしれないが戦う者達の思いまでは否定できない。

「だから・・・死んでくれ」

「ッ!?!」

カムイはラクスと戦う気持ちを持つとした時、一騎のドラゴンナイトが飛んでくる。

「ラクス」

「ベルカか・・・どうしたんだ？」

「カムイとの戦いを少しの間だけで良い、止めて」

「何故だ」

「・・・お願い」

ベルカの願いにラクスは考える素振りを見せるとカムイの周りを

見る。

カムイの周りには多くの仲間がおり今にもラクスに飛びかからんとしている者ばかりだった。

ラクスは別に問題はないと思ったが他ならぬベルカの願いだどラクスは待つ事に決めた。

「・・・わかった。だが、少しの間だけだぞ」

「ありがとう」

ベルカはそう言うとかミラの元へ飛んでいく。

ラクスはそれを見届けるとディアブ羅斯を収めカムイと向き合う。

「カムイ、そう言う事だ。暫くは手は出さないでおくが、時間がくればお前に攻撃する」

「・・・わかりました」

カムイはラクスとかミラの両方を同時に戦うのは得策ではないと判断してラクスの言葉に乗った。

狂気を纏いし騎士

ラクスは遠く離れて暫くカミラとカムイの戦いを観戦する事を決め二人の戦いを眺めていた。

カミラは臣下のベルカとルーナ、そして忌々しいガンズでの編成を中心とした暗夜軍はカムイ達に進軍を開始する。

カムイ達も暗夜軍に向かっていき戦闘が始まった。

「さて、現在はカミラ様が優勢だが・・・カムイは不利を有利に覆してきた奴だ。簡単には負けないだろう。フッフ、楽しませてくれよカムイ・・・」

周りにいる兵士達はラクスの不適な言葉に背筋が凍るが気にしないと考える様に見続ける。

戦いは徐々に白熱していくがここでカムイが竜脈を発動させ雷を落とし範囲内の暗夜軍を襲った。

「ほお、竜脈を使ったか」

「ラクス様。これではカミラ様が危険です！救援に」

「いや、まだだ。まだ、動く事はない・・・」

ラクスはそう兵士に言うが徐々に追い詰められているカミラを尻目にカムイを見続けている。

カムイは遂にカミラ達の元へ辿り着くとカミラ達のとの戦いになった。

「ラクス様！」

「・・・」

ラクスは兵士の叫びにも応えず黙って観戦をしているとカムイ達がかミラ達を下した。

ラクスはそれを見ると重い腰を上げた。

「・・・全軍。行くぞ」

くカムイsideく

私は激しい戦闘に打ち勝ちカミラ姉さん達に勝利した。

カミラ姉さんは傷つきながら戦おうと武器を手に戦おうとしてこようとしている時に最悪の事態が発生した。

「カムイ様！ラクスが動き出しました！」

「何ですって！」

「やれやれ、カミラ姉さんが負けたとわかってから来るなんてね……」
私は恐れていた人物が動き出した事に動揺していると横から馬に乗ったレオンさんが現れた。

「レオンさん……」

「カミラ姉さん。今の傷じゃ危険だ。ここは僕に任せて休んでて」

レオンさんがそう言うのとブリュンヒルデを開き私を攻撃にしようとした。

だが、ここで飛び出してきたジェネラルがレオンを攻撃してカムイへの攻撃を防いだ。

「き、貴様は！」

「貴様、シユヴァリエの兵か！レオン様へ攻撃するなど何たる不敬！王家直属部隊の我々が成敗してくれる！」

レオンさんが驚き、ガンズがジェネラルにそう言う。

「ふん、それだけの数でか？」

「何！」

「今だ！」

ジェネラルがそう言うのと無数のドラゴンナイトが現れ私も驚きを隠せないでいました。

「任せな！こんな奴ら、私達にかかればちよろいもんよ！」

「何……？こいつら、いったい何処から……!? もしや、反乱兵か!？」

レオンさんが珍しく焦っている何処からともなく声が響き渡る。

この声はまさに恐怖の対象であるラクスさんの物でした。

「ほお、ちよろいもんよか？舐められた者だな……」

「ッ!?ラクスさん」

side終了

ラクスは反乱兵と同等の戦力を率いて現れたカムイ達に立ちほだかった。

「さて、カムイ……第二回戦と行こうか？」

「……はい」

ラクスはカムイの答えに鼻で笑うとベルカの方へ向く。

「ベルカ。カミラ様とレオン様を任せたぞ。二人を連れてすぐに離脱してくれ」

「でも……」

「早く行くんだ。これはガロン様の臣下としての命令だ」

「……わかった」

ベルカは二人を連れてすぐに離脱する。

「さて、邪魔者はいなくなった。そして、何時までそんな鎧を着ているリヨウマ殿？」

「気づいていたか……」

ジエネラルが兜を取るとそこにはリヨウマの素顔が現れた。

カムイは驚きと嬉しさが込み上げて言う。

「リヨウマ兄さん……！」

「やっと来てくれたかカムイ」

カムイとリヨウマは再会を喜ぶがラクスはその時間を許さない。

「再会の喜びは後にしてくれ。まずは私を倒さねばならないだろ？」

「そうでした……では、行きます！」

カムイはラクスに向かっていくとガロンの仲間達も暗夜軍に向かっていく。

【イメージ戦闘BGM 漆黒の騎士戦】

「ここまで来て何れだけ強くなれたか見せてもらおうか？」

ラクスはそう言うと言に走らせカムイに向かってディアブ羅斯を振り降ろす。

カムイは夜刀神でディアブ羅斯を防ぐ。

「くッ！」

ラクスの重い一撃をカムイは受け止めるとラクスに反撃を仕掛ける。

「はあ！」

カムイはラクスに二回連続の攻撃を仕掛けラクスは一撃は防いだがもう一撃はラクスに当たった。

ラクスは激しい痛みを襲われ顔を歪める。

「まだまだ」

ラクスはカムイに三回連続で斬りつけカムイはその攻撃を防ぐが刃が霞めて血が出る中で夜刀神を構え続ける。

ラクスもカムイとの戦いで初めて受けた攻撃が蝕みギリギリの戦いをしていた。

「くっ……早めに決着を着けるしかないか」

ラクスは初めてカムイに対して本気の見せ始めようとした。

ラクスは目を瞑り自分の中の狂気を自ら呼び出し纏い始めた。

「さあ、戦いに決着を着けよう……」

「……ッ!?!」

ラクスの圧倒的な威圧感にカムイは怯んだが勇気を振り絞り夜刀神を構える。

二人の間には邪魔をする者はおらずこの戦いにおいてラクスとカムイの一騎討ちがなったのだ。

敗北

ラクスとカムイの間に緊張が走る中、先制を仕掛けたのはラクスだった。

ラクスは以前よりも素早くディアブロスを振るいカムイに襲い掛かりカムイはディアブロスを弾き返して夜刀神をラクスに振るうが防ぐ。

ラクスとカムイの戦いは激しさを増すがラクスはカムイに受けた傷のせいでまともな戦闘が続かなくなってきた。

「チツ・・・傷が痛むか」

「・・・退いてくださいラクスさん。勝負はもう決しました」

「何だど？ 私は、まだ戦えるぞ・・・ぐう！」

カムイの退けと言う言葉にラクスは反発するが傷の具合が悪くなり傷を押さえる。

「もう貴方は戦えません・・・退いてください」

「・・・やむ終えんか。認めなくては今回は、私の負けだ」

ラクスはそう言うと言と馬を走らせて逃走する。

その姿を見た暗夜兵達もすぐに撤退し始めシュヴァリエ市場は白夜軍と反乱軍による事実上の勝利となった。

ラクスはシュヴァリエ市場から撤退すると深い傷を負っているせいで目の前がボヤけて見えていた。

ラクス自身はまさかカムイからここまで傷を与えられるとは思ってもおらずラクスは自身もまだまだだと思った。

「ラクス様。大丈夫ですか？」

「ああ、何とかな・・・それよりもお前達は」

「負傷者が多数、死者は・・・」

「そうか。私が不甲斐ない、ばかりに・・・」

ラクスはそう自分を責めるた瞬間、ラクスは目の前が回り力無く馬

から落ちた。

「ラクス様！」

「衛生兵！衛生兵は何処だ！」

「しっかりしてください！」

ラクスは意識が無くなっていくと同時に聞き覚えのある声が響くのであった。

「うう……此所は……？」

ラクスは気が付くと見知らぬ場所で寝かされていた。

ラクスは辺りを見渡すと誰もおらずどうした物かと考えていると。

「あ！気が付いたんだね！」

「貴方は、エリーゼ様。どうして此所に」

「嫌な予感がしていても立つてもいられなくなってそれで来たらラクスが倒れてたから……」

エリーゼは今にも泣きそうな顔でラクスに話しラクスは罪悪感を抱いた。

「そうですか……でも、まさか一人でとは言いませんよね？」

「……」

エリーゼはラクスの問いを聞いて静かに目を反らす。

ラクスはそれを見て溜め息をついてラクスはベットに座る。

「エリーゼ様。貴方は何て無茶をするんですか。仮にも王女なんですから《省略》」

ラクスの説教がクドクドと始まりエリーゼは白夜で言う正座で説教を受けていた。

その説教は長く続きエリーゼの脚が痺れきっている時に扉が開かれる。

そこにいたのはベルカであった。

「……」

「おお、ベルカ」

「ベルカ・・・」

ベルカの目が写っていたのは半裸の状態で包帯を巻かれたラクスと脚が痺れ涙目で助けを請うエリーゼの姿だった。

ベルカはその光景を暫く見たのち静かに扉を閉めようとした。

「いや、待て待て待て！何故、閉める！」

「二人の邪魔をしたらいけないから」

「邪魔して良いから助けてよベルカ！」

エリーゼがそう叫ぶとラクスは説教を終えて二人に状況を聞いた。

「それで私が気を失っている間に戦況はどうなっている？」

「白夜軍が暗夜王国の国境を越え王都へ向かってたけどその際にレオン様とも対峙。戦いはレオン様は敗北でお終わってカムイ達はレオン様を下した後、姿を消し現在、搜索されてる」

「そうか・・・ぐッ！」

ラクスは何故、カムイ達の行方がわからなくなったのか考えているとラクスは痛みを忘れていたのか傷を押さえる。

「ラクス！」

「その体じゃ戦えなさそうね。一度王都に出直して」

「だが・・・」

「貴方が傷を癒し終わっている時にはカムイ達を倒してるから。だから療養して」

ベルカの言葉にラクスは反抗せずエリーゼと共に王都に帰還する事に決めた。

悪化する戦況

ラクスは現在、王都に帰還し自分の部屋で療養していた。

最初はガロンから任務失敗の咎めが来るのではと考えていたラクスだが以外にも許され今に当たる。

「・・・駄目だやはり奴等が何処に居るのかが気になる」

ラクスは本を読んだりして一度戦争の事を忘れようとしたができずカムイの行方を頭で追っていた。

「(奴等がいきなり消えたとなると転移の魔法だろう。しかし、目的地は不明かつ必ず暗夜にいるとは限らない。もしかしたら・・・一度国を出た後で戻ってきているのか?)」

ラクスはそう考えていると部屋の扉が開かれる。

兜を外してはいるがベットにあるカーテンで顔が隠れているので問題は無かった。

「ラクス。お見舞いに来たよ!」

「ありがとうございますエリーゼ・・・」

ラクスはエリーゼの格好を見て哑然とした。

エリーゼが着ている服装はどう見ても庶民の服で王族が着るような物ではなかった。

「え、エリーゼ様。何でそんな格好を?」

「うん。お忍びで地下の街に行こうかな、て」

「そうですか。では、私が供を」

「ちよつとラクスは安静にしてて! 私一人でも大丈夫だから」

エリーゼは立ち上がろうとしたラクスを無理矢理寝かせるとそう言った。

「しかし、エリーゼ様」

「本当に大丈夫だから。心配しないで」

エリーゼはそう笑ってお見舞いの花を置いていった。

綺麗な色の花で暗夜では見られない物だった。

「・・・全くエリーゼ様は」

「エリーゼ様にゾッコンねラクス」

ラクスはこの口調で言う人物は一人しかいないと考えるとその人物の名を言う。

「何とでも言えベルカ」

ラクスはそう言うと言を本を読み始める。

「それで何の様だ？」

「カムイが王都付近で目撃された。恐らく地下の事を利用してこの王城に入り込む気かもしれない」

「やはりな・・・地下は王城にも繋がっている。奴等が次に行くとするば王城の秘密の通路だ。そこで待ち伏せれば確実に当たる」

ラクスはそう言うと言を閉じてベルカにそう言う。

「ええ、だから私はカミラ様とカムイを捕らえに行くから安静にしてて」

「わかっている・・・行ってこい。必ず帰れよ」

ラクスはそう言うと言の外を見る。

ベルカ side

私はいつもの様にラクスに状況を伝えていたがここ最近、ラクスの側にいると胸が苦しくなる。

それに最近になって仲が修復されているエリーゼ様とラクスの仲の良さを見るとまた強く胸が苦しくなって仕方がない。

「何かの病気・・・？」

「探したわよベルカ！」

私の後ろから見慣れた赤いツインテールのルーナがやって来た。

「もう、カミラ様を待たせないでよ。いつものあんたならとつくに來てるのに！」

「ごめん・・・何だか胸が苦しくて時間を忘れてた」

「胸が？」

ルーナは疑問を抱きながらそう言うてくる。

「ラクスを見てると何だか胸が苦しくなる。何かの病気ならどうすれば良い？」

「・・・ベルカ。気づいてないの？」

ルーナは呆れ顔で私にそう言うてくるが何の事だが私にはわから

ない。

「はあ……良い。貴方が患っているのはラクスに恋心を抱いているからよ」

「恋？」

「まさか貴方が恋するなんてね」

ルーナが意外そうに私を見てくるが本当に恋なんだろうか。

「でも、ラクスとエリーゼ様が一緒にいる時は何だかもっと苦しくなる」

「ベルカ……それはエリーゼ様に嫉妬してるのよ。まあ、恋をした事がないならわからないのは無理ないけど貴方は今、エリーゼとラクスの取り合いをしてる様な物なの！」

私はルーナの話聞いて何故か顔が熱くなる感覚に襲われる。

ルーナが何か叫んでいるが聞こえずルーナは私の腕を引つ張っていく

side終了

長い時間が経過した後、ラクスは暫く外を見ていたがやはり気になつてしよがなかつた。

今、エリーゼは地下におりもしかしたらカムイと鉢合わせしている可能性もあり殺されはしないのは思うが心配で堪らなかつた。

「……」

ラクスが悪い考えをしない様にしていると部屋が急に開かれ兵士が慌てた様子で報告する。

「た、大変です！ 白夜軍がこの王城に侵入しました！」

「やはり敗れたか……私の武具を持ってこい！」

「し、しかし貴方様は……」

「早くしろ……着付けは自分でする」

ラクスの睨みを感じたのかすぐにラクスの鎧兜とディアブ羅斯を持ってくると部屋を出る。

ラクスは鎧兜とディアブ羅斯を差すと急いで歩いていく。

最後の戦いに身を投じる為に……

暗夜王の懐刀ラクス

ラクスは王座の間にやって来るとガロンが玉座に座っていた。

「ラクスカ。何故お前が此所にいる？」

「暗夜王国の大事ですので我が身を捧げる為に来ました」

「ほお、わしに最後まで付き従うと言うのか？」

「はい・・・私は数えきれない罪を犯してきました。その罪を償う為に
もここで」

ラクスはそう言うのとガロンに跪いく。

「私の罪を精算する為に戦わせて貰います」

「・・・好きにしろ」

ラクスがガロンにそう言われると同時に王座の間の扉が開かれた。

くカムイsideく

私達はガロンの元へ来ると玉座に座るガロンと何度も戦い苦しめた相手、暗夜王の快刀、ラクスさんがそこにいた。

「やつと、来たか・・・」

ラクスさんはそう言うのと剣をゆっくりと引き抜いてゆっくりと此方に振り向く。

その際に黒い靄が広がっていきまるでラクス自身の力の大きさを示していた。

ラクスさんは剣を横に振るうと靄は吹き飛ばせる様に消え去りラクスさんは剣を構えた。

「・・・この戦いを終わらせよう」

くside終了く

ラクスはディアブ羅斯を片手にカムイ達に立ちほだかった。

「・・・ラクスさん」

「カムイ・・・戦う前に聞きたい。エリーゼ様を見かけてはいないか？お一人でお出掛けになって心配でいるのだ。見かけてはいないか？」

「・・・エリーゼさんは死にました」

ラクスは兜の底で目を見開いた。

エリーゼが死んだ、ラクスの中でその一言がりピートし続ける。

「（・・・エリーゼ、様）」

ラクスは悲しみを堪えるが涙が流れる。

「そうか・・・惜しい者を亡くした・・・」

「ラクスさん・・・今ならまだ間に合います。戦いを、止めてください」

カムイの言葉にラクスは静かに首を横に振る。

「何故ですか!」

「・・・私は、多く罪を犯した。私は償わなくてはならない」

「でも・・・」

「あまえるな!今貴様の目の前にいるのはお前の父スメラギを殺した騎士ラクスだ。剣を構えろ、カムイ!」

ラクスの声にカムイは怯むがカムイは夜刀神を構える。

ラクスは満足げにその姿を見るとディアブ羅斯を構える。

「できるじゃないか・・・」

「もう、話し合えないのですね・・・なら、私は全力で貴方を倒します!」

【イメージ戦闘BGM 荊をその身に】

「はあ!」

カムイはラクスに夜刀神で振りラクスに斬り掛かるがラクスは避けカムイに反撃する。

カムイもラクスの攻撃を防ぎカムイに斬り掛かりカムイはギリギリ避けるが頬を霞め血が出る。

「どうしたその程度か?」

「くツ、せやあ!」

カムイはラクスに斬り掛かりラクスは防ぎつつカムイを攻撃するがカムイはラクスの攻撃弾き返しラクスの隙を突く。

「ぐはあ!」

ラクスは攻撃が当たり血が多く出てくる。

だが、ラクスはそれでも立ちはだかり続けた。

ラクスは馬を走らせカムイにディアブ羅斯を振るう。

「せや!」

ラクスの攻撃を防ぎ罅迫り合いになりカムイは押しきれられない様

に力を込めて押す。

「くっ……やはり強いです」

「当たり前だ。私はガロン様の騎士。簡単に負ける様ではやってはいけん！」

ラクスはそう言うのとカムイを一気に押してカムイに連続で斬りつける。

カムイはその攻撃を防いでいくが所々、攻撃が霞めておりカムイ！痛みに耐えるしかなかった。

「はあ！」

「きやあ！」

カムイは最終的に吹き飛ばされカムイは立ち上がろうとしたが中々、力が入らない。

「止めだ！」

ラクスはカムイに止めを刺そうと馬を走らせると高く飛び上がりディアブロスを突き立て様とカムイに向ける。

「ッ!？」

「終わりだ」

ラクスはそう言うのとディアブロスを突き刺す。

だが、そこには刺されていないカムイがおりそして、カムイの夜刀神がラクスの腹を突き刺していた。

「あ、ああ……ラクス、さん……?」

「……ようやく……終われるか」

ラクスはそう言うのと馬から落ちていく。

カムイはラクスに近づいて抱き寄せる。

「ラクスさん！」

「カ、ムイ……お前が私を、殺してくれ、ると信じていた……ぞ」
「そんな……死んでは駄目です！」

「わ、たしはお前の父を、奪ったあの日か、ら……罪悪、感に悩まされ生き、てきた……だが、それも今日で……」

カムイは涙を流しながら首を横に振る。

だが、ラクスの目は虚ろになり始めておりラクスは最後にカムイに

願った。

「た、のむ……この暗夜を、光ある、国、に変えて、く、れ……」
ラクスはそう言う息を引き取った。

「ラクスきーん！」

カムイの叫びも空しくラクスは眠りに着くように死んでいる。

誰も最後までラクスの表情を知らないまま。

希望の光

ラクスは目が覚めるとそこは何もない白い空間だった。
ラクスは辺りを見渡しても何処までも同じ景色だった。

「ここは……」

「ラクス」

ラクスは聞き覚えのある声に振り向くとそこには死んだと言われているエリーゼの姿があった。

「エリーゼ様。良かった生きていたのです」

ラクスの言葉にエリーゼは悲しそうな顔で笑い首を横に振る。

ラクスはその意味をすぐに理解した。

ラクスはカムイの夜刀神で腹を突き刺され死んだのだ。

「そうか……私は、死んだのですね」

「うん……」

エリーゼの言葉にラクスは納得しエリーゼの元に行く。

「すまなかった貴方を守れなかった……私は」

「ラクス。自分自身を責めないで……貴方が私が元気を無くした時にいつも励ましてくれたあの時のラクスの笑顔は何処に行ったの？
笑って」

ラクスは悲痛な表情から笑顔になるがその目には涙が流れていた。

「ねえ、ラクス。貴方はベルカの思いに気づいてた？」

「……はい」

ラクスは応える。

「じゃあ、好きだった？」

「はい」

ラクスはベルカの事が好きだと言うと言葉に応えるとエリーゼは少し残念そうな顔をした。

「やっぱり初恋は叶わないんだね。フラれちゃった」

「すみません……でも、どうしてもベルカが好きだったです。ベルカを巻き込みたくなかったから気付かない振りをし続けていました
が……」

ラクスはそう言うとエリーゼが提案する。

「じゃあ、会っても良いんじゃない?」

「え?」

「かなりの年月が経っちゃったけどまだ間に合うよ!」

エリーゼがそう言った瞬間、白い空間から扉が現れ開かれる。

「良いのですか?」

「うん。でも、一回切りで時間も短いから気を付けてね」

エリーゼにそう言われると押される様に扉に入れられる。

ラクスは突然の事に動揺して対処できない。

「頑張ってね!」

そんなエリーゼの無邪気な声がラクスの耳に入るのであった。

「う、ここは・・・」

ラクスが目覚めた所は木々が生い茂げ光りが射す森の中だった。

「ここは・・・白夜か?」

ラクスが立ち上がって周りを見ると近くに墓があった。

その墓にはこう記されていた。

勇敢なる暗夜の騎士ラクス此所に眠る

自分を偽ってでも国を思い、民を思うその名は後世まで受け継がれる物と願ひ此所に葬る。

ラクスはそれを見て死んだと再確認すると後ろから何かが落ちた音がして振り向くとそこには水色の老いた老婦がいた。

「・・・ラクス」

「お前、もしかして・・・ベルカ?」

ラクスはそう言うのと老いたベルカはラクスに向かって走り出し抱き締め泣いた。

ラクスはベルカを優しく抱き締め返し落ち着くまでその状態でいた。

ベルカは落ち着くと座って話す。

「あれからもうかなりの年月も経っているのか」

「ええ、もう知っている人も多くいなくなっただけど次の世代が上手くやっている。カムイ様は老いてもご健在だけど」

「ははは、そうか！」

ラクスは大笑いする。

「それでベルカ・・・その、お前は結婚したりしているのか？」

「いいえ・・・結局しなかった」

ベルカの言葉にラクスはうつ向く。

「そうか・・・」

「でも、仲間達が楽しい一時をくれた。私はそれだけでもう良い。それに死ぬ前にラクスに会えた」

「死ぬだと？」

「・・・私も歳を取りすぎた。本当はもう限界なのでも、貴方と最後まででいたい」

「・・・ベルカ」

ラクスはベルカに向き合うと老いたその手を優しく握ると告白する。

「・・・お前を誰よりも愛している。だからもう、一人にはしない」

ラクスの告白にベルカは笑顔で頷く。

「ベルカさーん！」

森を走ってくるカムイの鎧と同じ物を着た青年が走っていた。

その青年の名はカンナで白夜王家の一員でカムイの息子だった。

カンナは目的のベルカがいる墓まで来るとそこには墓に寄り添う様に眠っているベルカがいた。

だが、カンナにはわかっていて。

カンナは静かに近づくと悲しそうな顔で最後の別れを言うのであった。

「・・・お疲れさまベルカさん。もう、こっちは大丈夫だからラクスさ

んの所に安心して行ってね」

【白夜ルート編 完結】

暗夜ルート編

光を闇に求める者

「・・・退いてくださいリヨウマ兄さん」

カムイの言葉にラクスは僅かな希望が実った気がした。

しかし、リヨウマが簡単に諦めるような人物ではないとラクスは考える。

「まずいな・・・」

リヨウマは神器雷神刀を構えカムイと対峙しており今にも戦いが始まりそうになっていた。

ラクスは馬を走らせカムイの元へと向かう。

リヨウマの雷神刀がカムイを斬り裂こうと振り下ろされた瞬間、雷神刀は横から出た黒い剣に受け止められていた。

「ラクスさん!」

「武器を取れカムイ。今は戦うんだ」

ラクスはカムイの横に馬を着けるとディアブ羅斯を構えリヨウマと対峙する。

リヨウマは警戒しつつも雷神刀を構え一新即発だった。

「・・・わかりました。リヨウマさん、私の意思は変えません。例えお父様が間違っついても暗夜にいる兄妹達を捨ててはいけません!」

「そうだカムイ。例え血の繋がりは無いがお前には絆と言う繋がりがある。それを忘れるな」

「カムイ。本当に戻ってきてくれて良かった・・・例えお前との血が繋がりは無いが私はお前を兄妹だと思っっている」

ラクスとマークスはカムイにそう言うとかムイと共にリヨウマと対峙する。

リヨウマは流石に不利と考えたのか汗が一粒流れている。

「くツ、これは俺が不利か!」

リヨウマがそう呟くと無限渓谷でラクスと戦ったサイゾウとサイゾウに知らせに来たカゲロウが現れた。

「リヨウマ様。加勢に参りました」

「私も加勢します」

「すまないサイゾウ、カゲロウ！」

リヨウマ、サイゾウ、カゲロウの三人を相手にラクスは顔を歪める。

「面倒なのが増えたな・・・あの二人は私が相手をします。マークス様とカムイ様はリヨウマをお願いします」

「やれるのか？」

「舐めてもらっては困ります。私は貴方のお父上であるガロン様の臣下であり快刀なんですから」

ラクスはそう言うのとディアブ羅斯を片手にサイゾウとカゲロウに突っ込む。

サイゾウとカゲロウは素早く動きラクスを翻弄し始める。

「我々二人に一人とは舐められた物だ」

「白夜王スメラギ様の仇。今こそ取らせて貰う！」

サイゾウとカゲロウは手裏剣を手にラクスに斬り込むがラクスは絶妙な動きで避けサイゾウにディアブ羅斯を振るう。

サイゾウはラクスの攻撃を避けると手裏剣を投げラクスはディアブ羅斯で弾き返すと次はカゲロウが斬り掛かる。

ラクスはカゲロウの攻撃も防ぐと距離を取る。

「やはり中々の手練れだな。簡単には倒せはしないか」

「それはお前とて同じ事だろ？」

「二人同時にここまで戦えるとは化け物か」

カゲロウの言葉にラクスは少し傷つくがすぐに気を取り直す。

ラクスは油断無く身構えていると後ろから声が聞こえる。

ラクスは警戒しながらも振り替えるとそこにはカムイとマークスがおりリヨウマはいなかった。

「ラクスさん。リヨウマさんを退かせました！」

「今、加勢に行くぞ！」

カムイとマークスが走ってくるのを見たサイゾウとカゲロウは顔を歪める。

「リヨウマ様は退かれたか・・・」

「サイゾウ。ここは退くぞ」

サイゾウとカゲロウは不利と悟るとすぐに撤退した。

ラクスはその光景を見ると構えを解いてマークスとカムイに体を向ける。

「此方も終わりました」

「まさかここまで強いとは・・・お前は本当に何者なんだ？」

「秘密です」

ラクスはそう言うのと残りの白夜軍を倒す為に馬を駆けながら暗夜軍を鼓舞しに掛かる。

「暗夜軍よ！白夜軍総大将リヨウマはカムイ様によって敗走した！この期に乗じて攻め立てろ！」

「」「」「うおおおおお！」」「」「」

ラクスの鼓舞し暗夜軍はリヨウマが敗走したと聞くと士気を大幅に上げて白夜軍を押ししていく。

白夜軍は逆にリヨウマの敗走で士気が下がり逃げ出す者さえ現れた。

「（勝敗は決したな）」

ラクスはそう思うと予想通り戦いは暗夜軍の勝利となった。

ラクスはマークス達もカムイの元に行くのと今度の方針を話し合う。

「マークス様。現在、暗夜の遠征軍は兵糧が少なすぎます。しかもこの戦いで大幅に戦力を削れこれ以上の遠征は不可能と考えています。私は一度帰還する事を進言します」

「・・・わかった一度帰還しよう。カムイの無事も報告したいしな」

マークスがそう言うのとカミラ、レオン、エリーゼがカムイの元に向かう。

「無事で良かったわカムイ。お姉ちゃん泣いちゃったのよ」

「本当に世話が掛かるんだから・・・」

「無事で良かったよお姉ちゃん！」

「・・・皆さん」

ラクスはようやくマークス達が笑顔になれたと思えば後始末の為に歩くとマークスに呼び止められる。

「待てラクス。・・・今回、お前がカムイを見つけ説得をしてくれたそうだな。ありがとうラクス・・・」

「・・・やめてください。私は感謝されるなんて、柄ではありません」
ラクスはそう言うのと今度こそ後始末に向かった。

カムイの試練

王城に帰還したカムイ達とラクスはガロンに報告するべく王座の間まで足を運んでいた。

王座の間ではガロンが玉座に座っている。

「父上、ただいま戻りました」

「・・・マークスか。白夜王国でのお前の活躍は聞いているぞ。敵国での戦闘、ご苦労であったな」

「ありがとうございます」

ガロンがそう言うのとマークスは微笑む。

そして、マークスはガロンにカムイの生存を伝える。

「それと、一つよい知らせが。死んだとされるカムイが無事に戻りました」

「カムイが・・・」

ラクスはガロンの僅かな反応を見逃さなかった。

明らかに眉間に皺を寄せている。

カムイが生きていたのは想定外的だと言わんばかりの表情だ。

「・・・お父様」

「何をしに戻ってきた」

「え・・・？」

カムイはガロンの言葉に困惑する。

「お、お父様・・・？どうしてそんな言い方・・・」

「よいか・・・カムイ。お前が行方不明になってから今まで白夜王城にいたと聞く。そこで白夜女王より出自を聞かされたであろう？自分が幼い頃に攫われた、白夜王国の王女だと。そして、我が暗夜王国が、憎き敵国であると。にも拘わらずこの城に戻ってきたのは何故だ？」

ガロンの言葉はカムイを疑う様な内容でラクスは反論するべきかと考えているとマクベスが割って入る。

「もしや・・・敵側に取り込まれ、ガロン様の暗殺を企てているのではないでしょうな？」

「ま、まさか・・・！私はそんな事・・・」

マクベスの言葉にラクスは黙ってはいなかった。

ラクスは前に出てマクベスに反論する。

「マクベス。カムイ様は自分の意思で戻ってきた。私が命に変えてもそれを保証しよう……」

「ふん、どうだか……」

ラクスの言葉にマクベスは諦めて縮籠る。

「うむ、ラクスはわしにとつては最も信頼できる騎士……だが、お前の発言でも信用には値できません」

「父上、カムイは白夜の手先ではありません」

「何故、そう言いきれぬ？」

マークスはガロンに対して怯まずに応える。

「白夜の手先ではない証拠にカムイは殆ど初陣であるのに拘わらず、先の戦いで……たった一人で白夜王国軍を撤退させました」

マークスの大胆な嘘に流石のラクスも焦りを見せる。

幾ら何でもやりすぎだろうとラクスは思っていると以外とガロンは気付いておらず表情が変わっていない。

顔を歪めるをラクスは見てマクベスは戦場に出てはいたが実際に前線に出てこずカムイの戦いなど見てはいないとラクスは推測する。

「マークス兄さん？私は」

「カムイ様。ここは合わせて……」

ラクスが悟られない様にカムイにそう言うマークスは続ける。

「それにカムイは、私達の目の前で、この暗夜王国に戻ると決意しました。そのせいでリヨウマ王子の怒りを買ひ、一時は殺されかけたのです……もしカムイが白夜の手先なら、自分の命を顧みずにその様な行動をするでしょうか？」

マークスの言葉にガロンは考える素振りを見せ始めた。

しかし、マクベスがまた余計な事につかかってくる。

「ふむ……ですが、それが芝居であった事も考えられますな」

「黙れ、マクベス。あれは芝居などではなかった。その場にいなかったお前に何がわかる」

マークスの威厳ある言葉にマクベスは黙り混むとガロンが制す。

「もうよい、マークス。お前の言い分もわかった。それより、カムイよ。わしが渡した剣はどうしたのだ？」

「あれは・・・あの剣は、白夜王国で壊れました。・・・爆発したので私の目の前で」

ラクスはガングレリに細工があったのかと考えているとカムイは続ける。

「母・・・いえ、白夜女王に庇われなければ私は死んでいたでしょう」

「ほう・・・それは災難であったな」

「あの・・・お父様。一つお聞きしたい事があります。あの剣は白夜王国を攻撃する為の物だったのですか？」

「カムイ様・・・！」

ガロンに対するカムイの言葉にラクスは慌てた。

カムイの言っている事はまるでガロンがカムイを駒として白夜王国に自爆させに行ったと言っている様な物だ。

「おい、カムイ。今その話は・・・」

「いえ、今聞いておきたいのです。犠牲になった白夜王国の人達の為にも」

マークスが止めようとするがカムイは止まらない。

「・・・お父様、お答えください。あの爆発は、お父様の企てた事ですか？私は白夜王国にあの剣を持ち込む為に、その為に、ここで育てられたのですか!？」

カムイの悲痛な叫びが響く王座の間でラクスは兜を片手で覆う。

やってしまった・・・

その言葉がラクスの頭に繰り返し響く。

ガロンが怒っているか見ると以外にも平然としている姿がラクスの目に映りホッとする。

「さて・・・？爆発の事など、知らぬぞ。あの剣は、ただの剣だ。」

「ですか・・・！」

「知らぬと言っておろうー！」

流石のガロンも怒りを露にしてカムイを怒鳴り付ける。

カムイはガロンの怒鳴り声に怯みあがった。

「まだ王の事を疑われるとは・・・やはり白夜で何か吹き込まれた様で
すな？ガロン様、やはりこの者は白夜の手先である可能性が高いか
と」

「違うな。カムイ様は気が動転してお疲れの様なのだ。こう言っ
てしまふのは無理なしからぬ事」

「しかし、ラクス殿。いくら気が動転していても」

「まあ、待て。ここはハイドラ神様にカムイの処遇を問うて見る事
にする」

ガロンはそう言うのと立ち上がり両手を上げる。

「ハイドラ神様よ・・・我に神託を・・・」

ガロンがそう言うのと黙り混み静かになっていたがすぐにガロンの
口が開いた。

「・・・たった今、御告げがあつた。その言葉に従い・・・カムイを、
暗夜王国に受け入れよう」

ガロンの言葉にマークス達とラクスは安堵の溜め息をついた。

しかし、ガロンは予期せぬ事言った。

「だが、一つ条件がある」

「条件・・・？」

「そうだ。カムイには反乱を企てている氷の部族の平定に行つて貰
う。それがハイドラ神様の御告げだ」

ガロンの言葉にラクスは胡散臭そうに聞いて黙っていた。

ここで余計な事を言えばどうなるかわからないからだ。

「暗夜王国の王族として見事その任を果たした暁には、お前を以前と
同じ様に、わしの子として迎え入れてやろう」

「反乱の平定・・・わかりました。その任、必ず果たしましょう」

カムイは任務を受けるとマークスが割ってはいる。

「心配するな、カムイ。反乱を平定するなら私が軍を出す。人手さえ
あればそれ程難しい任務ではないだろう」

「うんうん、もし怪我した時の為に、私も付いて行ってあげるね」

マークスとエリーゼがそう言った瞬間、ガロンがまたしてもとんで
もない事口にした。

「それはならぬ。ハイドラ神様は。軍隊を連れずにたった一人で任を果たせと仰っている」

「ツ!?お待ちくださいガロン様!一人で反乱平定など不可能です!」

ラクスは咄嗟にガロンに反論するがガロンは動じない姿勢でラクスに言う。

「これはカムイのハイドラ神様からの試練だ。それにお前もかつて反乱平定に行った際に一人で平定して参った時があったではないか?」

「それは・・・私の行動を悟らせない様に一人で行動し兵に罫を張らせたからなせた事で」

「とにかく、カムイ。お前一人で氷の部族の村に向かわせる。良いな?」

ガロンはラクスの反対を押しきりカムイに問いかける。

「大丈夫ですラクスさん。私一人でも、何とかできますよ」

「では、行け。カムイよ・・・」

ガロンはそう言うとかムイは王座の間から出ていきラクスはその姿を静かに見て一つの考えを打ち出すのだった。

暗躍

ラクスは王座の間から出たのちすぐに行動に移す為にエリーゼの元に向かった。

ラクスは考えとしては反乱の平定に向かっカムイに誰かを唆してその誰かを送り込む事で人材の補強をする事にしたのだ。

だが、問題は誰にするかだった。

「マークス様は・・・ガロンの命には簡単には逆らわないし、レオン様は・・・余計な行動はしない、カミラ様は・・・余計に悪化するか」
ラクスは頭を悩ませながら廊下を歩いていると目の前にエリーゼが歩いていてラクスは一つの答えに辿り着いた。

「エリーゼ様。確か回復系の魔法が使い尚且つ臣下にはアーマーナイトとアクスファイターの二人とバランスが良い・・・だが、あまり危険な事は」

ラクスは頭を悩ませ続けるも結局、エリーゼにする事にした。

「エリーゼ様」

「ら、ラクス・・・どうしたの？」

エリーゼは不安そうな顔をしながらラクスに聞くとラクスは本題に入る。

「エリーゼ様。頼みがあります。カムイ様の元へ渡して頂きたい物があります」

「渡したい物？」

「ええ、渡しす物は極秘で直接渡しに行きたかったのですが生憎、別の仕事が入ってしまいました・・・エリーゼ様に頼むしかないんです」

ラクスはそう言っているが実際は建前の言い訳だった。

エリーゼがカムイの所に言っても物を渡してに出たと言う名分があるので相当な事が無い限りは咎められる事は少ないとラクスは考えた。

「うーん・・・良いよ！渡して来てあげる」

「そうですか。ありがとうございます」

ラクスの言葉に微塵も警戒する事なく了承しラクスから荷物を受

け取ると走って行く。

「廊下を走らないでくださいね！・・・何とか誘導出来たか。後は様子見だな」

ラクスはそう言うのと廊下を歩いて行くがその光景を見ていた人物がいた。

その人物はレオンでラクスとエリーゼの会話を聞いていたのだ。

「ラクスの奴。エリーゼを唆していったい何を企んでいるんだ？・・・こうしてはいられない」

レオンは急いで廊下を歩いて自分の臣下の元に向かう。

ラクスはいつもの服装からマーシナリーの装備で兜は被っていない。

そんな、ラクスは悪霊の沼に先回りしてカムイを待っていた。

カムイが無事にこの森に来てくれなければ折角エリーゼを動かしたのに意味を無くしてしまうからだ。

「・・・来たか」

ラクスは遠目から映るカムイの姿を見て安堵のしていると沼から異様な気配を感じ見てみるとそこにはノスフェラトゥが現れたのだ。

「ノスフェラトゥー！」

カムイも気づいた様で夜刀神を引き抜き構えるとノスフェラトゥがカムイに突っ込んで行く。

ラクスは前に出ようとした時、ノスフェラトゥは何者かの攻撃によって倒れた。

「彼奴はジョーカーか？」

ジョーカーは無限渓谷での戦い以来、行方を眩ませていたがまさか今までカムイを探していたのだ。

カムイとジョーカーは互いの背を任せてノスフェラトゥに向かっていく。

「(全く、心配させるなよ・・・)」

ラクスは冷や汗をかいているとカムイの来た道から馬の足音が聞こえた。

ラクスは見てもみるとそこにいたのはエリーゼと見られぬソルシアナイトだ。

「誰だ、彼奴は？」

ラクスは思い当たる人物を探して行くがやはり知らない諦め様子見を決める。

「(それにしてもエリーゼ様は臣下を置いてきたのか？何で一人なんだよ)」

ラクスは悪態を付いて観戦しているとエリーゼの臣下ハロルドとエルフィが到着した様でハロルドが泥だらけなのはラクスは見なかつた事にした。

「やれやれ、二人ほど余計なのが入っているが、これでどうにかなるか・・・」

ラクスがその場から離れようとした瞬間、ラクスは風を切る音を聞き素早く避けるとラクスが隠れていた木に矢が刺さっており更に雷がラクスに襲い掛かり避ける。

「何者だ」

「それは此方のセリフだよな、不審者さん？」

「ふん、闇夜に紛れる暗躍者め」

ラクスは立ち上がり目を凝らすとそこにはレオン配下のゼロとオーデインの二人だ。

ラクスは何故、こんな所に、そして何故自分を攻撃したのかわからなかつたがわかる事は一つ、レオンに感ずかれたのだ。

「どうやらレオン様の言う通りラクス殿の暗躍がありそうだな」

「俺達はお前と言う邪悪な手先からカムイ様を守る様にレオン様の命を受けてきた。この漆黒のオーデインと対峙するからには覚悟するが良い」

ゼロはともかくオーデインはわざわざ訳のわからない言葉を使ってきてラクスは困惑する。

ラクスはそんな二人に対して開き直って身構える。

「やれやれ、まさかレオン様に見られるとは。なら……逃げるのみ！」
ラクスはそう言う人と人間場馴れして速さで駆け出した。

「あ、待て！」

オーデインの叫びが聞こえるがラクスには関係なく走って行く。

「戦えない事は無いが、今はマーシナリーだ。条件的にも二対一、しかも弓と魔法。厳しい戦いになる以上は逃げるしかない」

ラクスはそう考えると走って逃げて行くがその姿が別の人物に見られているとは知らずにただ走る。

盗賊襲来

ラクスはゼロとオーデインの二人を撒いて、死霊の沼から少し進んだ先にある村にやって来ると、小屋に身を潜めてカムイ達が来るのを待った。

ラクスはカムイ達が来るまでの間にゼロとオーデインの二人の追っ手をどうするかを考える。

「さて、私の予想が正しければそろそろ来ても良い筈だが・・・」

ラクスは、地図を見ながら考えていると外が騒がしくなり始め、ラクスは小屋の隙間から除き混むと村を襲う盗賊達がいたのだ。

「チツ、こんな時に限って盗賊だと。邪魔をされてなる者か」

ラクスは鋼の剣を手に小屋から飛び出して行った。

くカムイ side く

私はお父様の命で、氷の部族の反乱の平定に出向く途中で一つの村に辿り着きました。

しかし、村は喧騒に包まれており、とてもただ事ではない雰囲気を出していました。

ジョーカーさんが目を凝らして村を見てくれているとジョーカーさんは驚いた顔をして私に報告しました。

「カムイ様！村が盗賊に襲われております！」

「何ですってー！」

私は村の方をよく見ると数人の武装した人が襲っているのが見え私は、すぐにでも無限の人達を助けに行きたかった。

「皆さん！村の人達を助けに行きます。私に付いて来てください！」

私はそう言う村に走って行きました。

く side 終了く

ラクスは、盗賊と数人对一と言う無謀な戦いを繰り広げており、ラクスは倒しても倒しても増えてくる盗賊に嫌気がさした。

「くそ、数が多いな」

「死ねえ！」

「はあ！」

「ぐはあッ！」

馬上から襲ってくる盗賊をラクスは斬り捨てると、ラクスはいつの間にか囲まれていた。

ラクスは剣を肩に置きながら盗賊達を見る。

「やばいな・・・」

ラクスはそう呟くと同時に盗賊達が襲ってきた。

ラクスは剣を構えて迎え打とうとした時、盗賊の数人が倒れた。

「大丈夫ですか！」

そこにいたのは、カムイ達で盗賊を相手に奮闘し始め次々と仕留めていく。

カムイはラクスの元に近づくと無事かどうかを確かめられた。

「ああ、大丈夫だ。ありがとうな助けてくれて」

「はい。一緒に盗賊達を倒しましょう」

カムイはそう言うのと夜刀神を手に盗賊に斬り込んでいく。

ラクスはその後ろ姿を見て思った。

「(情けないな、この私が助けられるとは・・・)」

ラクスはそう思うと、カムイの後ろを襲おうとした盗賊を斬りカムイの後ろを守る。

「ありがとうございます！」

「気にするな乗り掛かった船だ・・・とことん、やってやるさ！」

カムイとラクスは盗賊を相手に二人は合わせて戦う。

そして、盗賊は恐れをなして逃げ出していく、カムイとラクスは一息ついた。

「何とか片付いたか」

「はい」

ラクスは剣を鞘に納めるエリーゼ達がやって来る。

「お姉ちゃーんーん！」

「カムイ様、ご無事ですか！」

「はい。私は大丈夫ですよ」

二人の大きな声にカムイはそう返事をする。ジョーカーはカムイの後ろに立つラクスに目をつけた。

「お前は誰だ？」

「この人は盗賊を相手に一人で戦っていた人です。名前は……」

カムイがラクスの名前を言おうとするが、名前事態聞いていないのでラクスは溜め息をつきながら偽名を言う。

「私の名はレスターだ。旅の傭兵をしている」

「レスターさんですね」

「ああ、旅に立ち寄ったら盗賊の襲撃があつてな……致し方なく相手取ったんだ」

ラクスは平然と嘘をつくが、やはりジョーカーは何かを感じずいているのか鋭い目で見てくる。

カムイはそれに気づかないでいる事にラクスは小さく溜め息をつく。

「では、また何処かで会おう。カムイ殿」

「はいー！」

ラクスはカムイと別れるとすぐに身を隠すとカムイを着けて行く。

ラクスは内心では、カムイと鉢合わせした事に非常に焦りを覚えたが張れる事はなかった。

「（やはり、いつもの鎧でなくて良かった……）」

ラクスは心底思った。

氷の部族

現在、ラクスはカムイ達の後を追っていたがもう吹雪に見舞われて非常に焦っていた。

「この寒さ・・・カムイ様は鎧を着込んでいるとはいえ、素足だ。長く持つか」

ラクスはカムイが倒れない事を祈っているが結局、カムイはソシアルナイトのサイラス以外とはぐれてしまい倒れる。

「(寝るなカムイ、死ぬぞ!)」

ラクスはそう思いながらカムイの元に向かおうとしたが前から誰かが来た。

ラクスは咄嗟にしゃがみ気配を消す。

「(誰だ・・・まさか、氷の部族か?)」

ラクスはそう考えているとその人物はカムイを背負うとサイラスを連れて歩いていく。

「やれやれ、手を焼かせてくれる・・・」

ラクスはそう言うのと気配を消しながらカムイ達の後を着ける。

ラクスは吹雪を突破するとそこには雪景色に囲まれた村があった。

氷の部族の村。

その単語が脳内に響きラクスは身を潜めながらカムイ達が村にある大きな屋敷に入っていた。

「おいおい、彼奴は族長か何か?どちらにしろ、この村では相当な権力者だろうな・・・」

ラクスはそう言いながら持っていた干し肉を食べる。

暫く、ラクスは寒さに震えながらカムイ達が出てくるのを待っているとカムイ達がいきなり飛び出してきて村の左端付近まで走ってきた。

そして、屋敷からはさっきの男と水色の髪をしたメイドが現れた。

「あのメイドはカムイ様の・・・成る程な、やはり反乱を企てていた。私が出て来ても良いが、それではカムイの為にはならんだろうな」

ラクスはそう考えていると、右端から二人の人物が現れた。

その人物はゼロとオーデインでカムイの味方をし始めた。

「流石はレオン様だ。刺客か何かと思われた私の始末だけでなくカムイの護衛に回すとはな」

ラクスは笑いながらそう呟くと、カムイ達は戦う中でいくつかの家を訪問して敵の増援を増えるのを防いでいく。

カムイは戦場と成り果てた村を走り抜けているとメイドと鉢合わせし戦いになった。

メイドは暗器を投げたり、斬りつけたりしながらカムイを攻撃するがカムイは反撃しない。

「何をしているカムイ。反撃するんだ」

ラクスは咄嗟にそう言うてしまう程にカムイは反撃しないでいたが、遂に反撃した。

激しい戦いになったがジョーカーがカムイの元に行つて加勢した事により、メイドは倒された。

考えているとが走り屋敷の前になると男が待ち受けており魔導書を開き、魔法は放つてくる。

カムイは魔法を避けて隙を作り、ジョーカーは暗器を投げてその隙を突く。

二人の合わせ技は中々の物で族長である男が倒れた。

「決着は着いたか。さて、カムイの判断はどうするつもりだ？戦った相手は全員、死んでいないが・・・」

ラクスはカムイの判断を見守っているとカムイは族長を殺さず夜刀神を収める。

ラクスは溜め息をついて呆れ果てるが、それでも良い判断だと考える。

「これで氷の部族の反乱は血を流さずして平定された・・・私は退くでしょう」

「待ちな」

ラクスはその一声を聞くと素早く前転して避けると矢が刺さる。
カムイ達はその光景に驚いている。

「レスター、さん……」

「お前……後を着けてきたのか！」

「いや、前からずつと着けていたんですよ。死霊の沼からね……」

ゼロの説明にカムイ達は完全に警戒しておりレスターこと、ラクスは
はどうした物かと考える。

「(面倒な事になった……さて、どうするか)」

「レスターさん。貴方の目的は何なのですか？」

カムイの質問にラクスは困り顔で答える。

「それは極秘でしてね、どうしても言えません……ですが、害ある行
動は致しません」

「そんなの信じられるのか？」

ジョーカーが突っ掛かってくるがラクスは怯まない。

「そう言うしか無いんですよ今は……では、また会いましょうかカム
イ様」

ラクスはそう言うと言雪の上だと思わせない走りて逃げていく。

くカムイ side く

私は氷の部族との戦いの後、ゼロさんから着けられていた事が判明
した。

後を着けていたのはレスターさんで、死霊の沼から後を着けて来た
のだとゼロさんが言いました。

「彼は何者なんですか？」

「わかりません……あの身のこなしは只者ではありません。ですが、
レオン様によるとラクス殿の密偵だと思われれます」

密偵。

その言葉を聞いて私は氷の部族が心配になった。

氷の部族は反乱を企てた事は間違いなく、このままレスターさんを
逃せばどうなるかと思いました。

「しかし、今回は我々に害は無いでしょ？」

「何故ですか？」

「本当に害があるなら奴はもつと早くに反乱の事を話すと思ったので
す。戦いの最中なら、逃げるなど容易いですからね」

ゼロさんの言葉に私は少し安堵しました。

でも、本当にレスターさんは本当に密偵なのでしょいか。

どこかで感じた事の雰囲気でしたが・・・

〈side終了〉

手合わせ

ラクスはカムイと別れると、王城にこつそりと戻り何事も無かったかの様に振る舞った。

そんな、ラクスにレオンが近づいてきた。

「ラクス。今回は随分と外出していたそうだね・・・」

「はい。私は極秘の任務の為、遠出をしておりましたが、それが何か？」

ラクスはレオンの言っている事がわからないと言った素振りで行う。

レオンは苦虫を噛んだような顔で暫く睨むとラクスの横を通り抜けていく。

「カムイ姉さんの周りに配下を彷徨いたり害すさせらるなら・・・消し灰にしてやるからな。ラクス」

レオンはそう言うのと警告ともとれる言葉を吐いてその場を去っていく。

「やはり、レオン様に悟られていたか・・・」

ラクスは冷や汗をかきながら呟くと再び歩きだしたが今度はマクベスが現れた。

「ラクス殿。貴方にお話があるのですが？」

「何ですか？」

「貴方はカムイ様の試練の際に何処にお出掛けで？」

「極秘の任務だ。さつきに会ったレオン様にも話している」

ラクスはそう言うのとマクベスは可笑しいとばかりに顎を撫でる。

「本当に、ですか？」

「本当だ。前からガロン様に頼まれていた事だ・・・嘘と思うならガロン様に直接、聞くが良い」

「むう・・・」

ラクスは自信を持ってマクベスにそう言う。

本当はそんな任務は受けてはいないが、マクベスは出世欲の強い人物で咎めがくる可能性のある事は、マクベスは絶対に避けると、ラク

スは考えたのだ。

それに、ガロンは前に与えた任務は、殆ど忘れるので更に好都合だ。

「では、失礼・・・」

ラクスはそう言うのと自分の執務室に戻っていく。

ラクスはいつもの様に書類整理とは違い、今回は剣の鍛練の為に王城の訓練所を訪れていた。

ラクスが青銅の剣を手に素振りをしていると見知った顔がやって来た。

「ベルカ。お前も鍛練か？」

「うん」

ベルカはそう言うのと青銅の斧で素振りを始めた。

「貴方が鍛練なんて珍しいわね」

「色々とおったんだ。己の鍛練不足で軍の足を引っ張るわけにはいかない」

ラクスはそう素振りをしながら言うのとベルカは無表情なまま素振りをし続ける。

「なあ、手合わせしてくれないか？」

「良いけど、他の人は？」

ベルカの質問にラクスは親指を立てて後ろを指すとそこにはポロポロに倒れた、暗夜兵だらけだった。

余談ではあるが、その中にガンズも含まれており、ガンズだけ徹底的にしごかれたのは有名な話となる。

「・・・私もあるの？」

「馬鹿か。彼奴らは生温い鍛練しかしていなかったから私とその根性を鍛え直しただけだ」

ラクスは平然と応えると青銅の剣を構える。

ベルカも致し方なく青銅の斧を構える。

互いに長所となる竜も、馬も無い鍛練が始まる。

「……いくぞー！」

「……！」

ラクスはベルカに向かって行き青銅の剣を降り下ろし、ベルカは素早く横に逸れると青銅の斧を振るおうとしたが、ラクスはそれを許さず更に振りかぶる。

ベルカは青銅の剣を受け止めるが、ラクスは連続で攻撃してくる。

「どうした、鈍ったか？」

「ッ！……！」

ベルカに少し怒った様な表情が現れるが、すぐに冷静になったのか、また表情が無くなる。

「やはり挑発は通じないか……」

「何れだけの付き合いかあると思っっている？」

「そうだ、な！」

ラクスはそう言うともまた素早く振りかぶりベルカと戦う。

今度は、ベルカも攻撃を仕掛けてくる様になり一進一退の攻防になつた。

くカミラsideく

私はベルカに少し用があつて訓、練所に訓練所にやって来たのだけれど、ベルカはあのラクスと二人で手合わせをしていた。

ベルカはともかく、ラクスの剣技は尋常ではない程の速さで振るい、ベルカを押ししている。

「(直接、戦う姿は見た事も無かつたけど何て、速さなのかしら……)」

私はラクスを見て彼が味方であつた事を、本当に良かったと思つた。

いくら私でも、あんな速さで剣を振るわれたら勝つのは難しくなる。

私は冷たい汗が、頬を伝つていく感覚を覚えながらも私は二人の元に歩いて行く。

くside終了く

二人は、手合わせを続けていると足音が聞こえてきた。

二人は足音の聞こえる方向を見ると、そこには妖艶な笑みを浮かべ

るカミラだった。

「カミラ様」

「これは、カミラ様。貴方様も鍛練を？」

「いいえ、少しベルカに用があつてね」

「私にですか？」

カミラの言葉にベルカは首を傾げると、カミラは微笑む。

「お父様から直々の任務を受けたの。だから、貴方も出発の準備をする様に言いに来たの」

「わかりました。準備してきます」

ベルカはそう言うのと訓練所から出ていき、ラクスとカミラの二人だけとなったが、ラクスも用がありカミラに向かって礼をして出ていく。

「では、私もこれで・・・」

「ええ・・・」

カミラは笑ってラクスを見送るが、カミラのその目は全く笑ってはいなかった事をラクスは気づいていたが、深くは考えなかった。

「はい！」

ガロンから我が子として受け入れると、告げられたカムイだが、マクベスがまた、邪魔をし始めた。

「……ですがガロン様、カムイ様はどうやらお一人で向かわれたのではないようですよ」

「……！」

「マクベスめ、余計な事を……」

「何だと……？」

マクベスの発言で、カムイとマークスは焦りを覚え始め、ガロンは眉間を皺を寄せて怒りを露にし始める。

「一人で部族の村に向かったのではない？それは本当か、カムイ？」

「ガロン様。申したい事が……」

「何だ……？」

ラクスは、挙手してガロンに発言の許可を貰う。

カムイとマークスは何を言い出すのかと更に焦りを見せる。

「マクベス様が見たのは、恐らくエリーゼ様でしょう。私はカムイ様の任務の無事な達成できる事を込めて、特效薬を三つ程、エリーゼ様に預けたのです。まさか、エリーゼ様とその臣下達がカムイ様に着いて行くとは思わず、私の監督不届きです……申し訳ございません」

「……成る程。確かにそれはお前の責任だ。此度はカムイを許そう。試練を達成したのも事実である以上はハイドラ神様もお許しになるう」

ラクスはそう言うとう頭を下げる。

カムイとマークスはガロンの言葉を聞いて安堵し、マクベスは悔しそうな表情を見せる。

「ありがとうございます、お父様。それにマークス兄さん達も……そして、ラクスさんも、ありがとうございます」

「……ああ」

「……」

カムイの感謝の言葉にマークスは軽く返事し、ラクスは腕を組んで、何の事やらと言う様な態度を見せる。

「だが、お前達がこんなにも良い働きをしてくれるとは思わなかったぞ。その実力を買って・・・早速、次の任を下そう」

「次の任、ですか？」

「ああ。次はお前達を、ノートルディア公国に向かわせる。その地を制圧し、暗夜王国の支配下に置いて貰いたい」

「ノートルディア公国を・・・？」

カムイは疑問に思いながらガロンにそう言うと、ガロンは頷く。

「良いか・・・戦端が開いた後、あの地には、白夜王国の軍隊が蔓延つてしていると聞く。そこで白夜の者達が、暗夜王国に仇為す策を講じているらしいが、悪い芽を早めにつむのは早い方が良い。一刻も早く公国に向かい、公国にいる白夜軍を根絶やしにするのだ」

「白夜軍と・・・戦うのですか・・・」

「ほう・・・やはり、不本意か？生まれた国に刃を向けるのは」

カムイの迷いのある言葉にガロンは指摘すると、カムイはすぐに否定する。

「・・・まさか。私はもう、暗夜王国の人間です。その任、必ず果たして見せましょう」

「そうか。期待しているぞ、我が子よ・・・その言葉通り、良い成果を挙げてくるが良い」

「はい・・・お父様」

カムイはそう言うと、王座の間から立ち去る。

「・・・ラクス」

ラクスはその後ろ姿を黙って見ていたら、ガロンに話しかけられ手で招く。

この仕草は裏の仕事の時に使う合図で、ラクスは耳元を近づけ、ガロンの言葉を聞く。

「・・・カムイの後を着ける。そして、あやつの行動を逐一に、わしに報告するのだ」

「わかりました・・・」

ラクスはそう言うと王座の間から退出する。

カムイと共に

出発の日、ラクスは広間でマーシナリーのレストアーでの姿でカムイを待っていた。

ラクスは静かに待っているとカムイとマークス達、王族が現れた。カムイとマークス達が話している時に、ラクスは近づいて行く。

「カムイ様」

「貴方は……！」

カムイはラクスの姿を見た瞬間、驚く。

マークス、カミラはわからないと言う顔だが、レオンとエリーゼは警戒している。

「……何の用ですか？」

「はい。私はラクス様の命で、貴方に着いて行く様にと言われ、貴方様の元に来ました」

ラクスは無表情のまま、カムイにそう言うのと少し迷っている様な顔をして、ラクスに言う。

「……わかりました。戦力は少しでも多いに越した事は、ないですかね」

「カムイ……！」

「ありがとうございます。では、私は部隊の方で待機させて貰いますね」

ラクスは微笑むと早速、歩いて行くと真剣な顔でガロンの策略に対抗する案を考える。

「（一先ずは潜れたが、カムイの臣下やゼロとオーデインは厄介だな……だが、彼らはカムイに必要な人材であるのは確かだ）」

ラクスは考えながら歩いていると少数の兵とカムイの臣下ジョーカーとエリーゼの臣下エルフィ、ハロルドとレオンの臣下ゼロ、オーデインがいた。

「てめえ、何の用だ？」

ジョーカーが突つかかってくるが、ラクスは冷静に応える。

「私はラクス様の命で、カムイ様に同行する事になりました。既にカ

ムイ様の許可も貰っています」

「チツ、そうかよ・・・だがな、万が一お前がカムイ様に危害を加える気なら、容赦はしねえからな・・・！」

ジョーカーはそう言うと言いついていきラクスはこの先、無事に行けるだろうか、考えた。

出発したカムイ達は、朽ちた黒竜砦へとやって来ていた。

黒竜砦は元々、生きていた竜が死に絶えその竜を、砦へ変えたのが黒竜砦である。

「(相変わらず生きている様で、気持ちが悪いな・・・)」

ラクスがそう最後尾で思っていると、カムイ達は止まって何かを話している。

ラクスは静かに待機していると、黒竜砦の門の右に人影を見た様な気がして、よく見ようとした瞬間、ジョーカーに肩を捕まれていた。

「おい、戦闘準備だ。早くしろ」

「・・・わかった」

ラクスはそう言うのと、戦闘の準備をする為に馬車に向かい、ジョーカーはラクスを見て舌打ちして睨む。

「気に食わねえ奴だ・・・」

ジョーカーはそう呟くと馬車に向かって行く。

ここに、レスターことラクスのカムイの部隊での、初めての戦いが始まる。

黒竜砦の戦い

ラクスは準備を整えると、剣を片手に、カムイが決めた場所で待機する。

ラクスが待機した場所、門の真っ正面でカムイと同じ場所だ。

「カムイ様。一つ申したい事があるのです」

「何ですか？」

「黒竜砦の門の右側に人影を見たので、警戒してみてもどうでしょうか？」

「人影を？わかりました。私が直接、行ってみますので貴方は配置通りに白夜軍と戦って下さい」

「了解しました」

カムイはジョーカーとサイラスを連れて門の右側に向かって行き、ラクスは手筈通りの位置で白夜軍がいる黒竜砦を見る。

白夜軍が此方に向かって来るのがわかり、ラクスは剣を構え白夜軍の方へ走っていく。

「暗夜の者め、覚悟！」

「邪魔だ」

ラクスに斬り掛かってきた白夜兵を、ラクスは簡単に倒すと次々と、白夜兵は迫ってくる。

「暗夜め・・・」

「白夜の民とミコト様の仇！」

「仇討ちか・・・しかし、対象が間違っているぞ」

ラクスはそう言いながら、白夜兵を次々と倒していき自分の回りに血の池を作っていく。

ラクスだけでなく、エルフィ、ハロルド、ゼロ、オーデインも王族の臣下として、恥じない戦いを見せつける。

ラクスは粗方、白夜兵を倒すと砦内に、侵入しそこでも白夜兵と戦う。

「ふん、次だ来い！」

ラクスは圧倒的な強さで白夜兵を倒していつている時、壁が突然、

崩れ落ちそこからカムイ達が現れる。

「カムイ様・・・その子供は？」

ラクスが見たのは、ダークマージの格好をした少女でラクスは首を捻る。

少女は不機嫌な顔で、ラクスを見てくる。

「この子は黒竜砦を抜けようとしていたので、私達と一緒に抜ける事になったんです」

「ニユクスよ。よろしく」

「はい。私はレスターと言います」

ラクスは少し微笑んでそう言った瞬間、白夜兵がラクスの後ろから斬り掛かってくる。

「レスターさん！」

「鬱陶しい」

ラクスはそう呟くと白夜兵を斬り返り血がラクスの顔にかかる。

「だ、大丈夫ですか！」

「ええ、何ともありません。それよりも畳み掛けて行きましょう」

ラクスがそう言った瞬間、突然、地響きが起きて上から酸が白夜に降り注いだ。

白夜兵は溶けるような熱さに襲われ悶え苦しんでいる。

「ここは死んだ竜の中じゃないのか？」

「恐らくこれは、竜脈です。誰かが発動したかもしれません」

ラクスは剣を肩に置いて成る程と、思った。

「誰が竜脈を発動したにしろこれは、チャンスです」

「はい。皆さん、行きましょう！」

ラクスとカムイ達は白夜軍を蹴散らしつつ、突き進み、ラクスが奥に行くとき大将らしき男が薙刀を持って立っていた。

「貴様が大将か」

「そうだ。我が名は、ハイタカ。暗夜の者よ・・・いぎ、参る！」

ハイタカはそう言うと、ラクスに斬り込みラクスは剣で受け止める。

ハイタカは、相当な薙刀の使い手なのか、かなりの腕前をしていた。

「少しはできるようだな」

「舐めるなよ暗夜の者よ・・・我々が常に平和ボケをしていたと、考えているなら今のうちに撤回しておくが良いぞ」

「ふん、そうだな・・・だが」

ハイタカが斬り込むと同時に、首が吹き飛んだ。

「弱すぎる・・・」

ハイタカが最後に見たのは、研ぎ澄まされた冷酷な目をするラクスの姿だった。

「ふう・・・」

ラクスは返り血を拭いながら一息着いていると、カムイ達がやって来た。

「レスター、さん・・・」

「ああ、カムイ様。もう決着はつけました。これで戦いは終わりです・・・」

ラクスはそう言いながら微笑むもカムイは引き顔になっており、回りもそんな顔をしている。

ラクスの回りには、首の飛んだハイタカの死体と血の海ができて尚且つ、ラクスは血だらけだったのだから。

「さて、その影にカクレテイル貴方も出てきては如何ですか？」

ラクスがそう言うと、物陰から水色の長髪の少女が現れる。

「アクアさん！」

「知っているのですか？」

「はい。白夜王国で会った私の対の人質です・・・」

ラクスはカムイの言葉を聞いて、引っ掛かりが解けた様に思い出した。

確かに、カムイがガロンの娘として育てられていた時に、連れ去られた王女がいたのだ。

「久し振りねカムイ」

「はい。アクアさんはどうしてここに？」

「貴方が暗夜についた時に、白夜兵達に連れてこられたの。リョウマ達も庇ってくれたけど・・・」

「(要するに白夜兵の独断で連れてこられたのか・・・)」

ラクスはそう考えていると、アクアがラクスを見た。

「貴方は、見ない顔だけど誰？」

「私はレスター。訳あってカムイ様に同行している」

「そう、私はアクアよ」

ラクスは軽く挨拶すると、アクアは無表情でそう言った。

アクアとニユクスがカムイの陣営に加わり、ノートルディア公国に向かう港町に向かうのだった。

望まぬ再開く前編く

港町ディア。

そこは多くの船が、行き交う暗夜領の町で、これから向かうノートルディア公国に向かう為の船がある場所。

「やっと、ディアに着きましたね」

「はい」

カムイとジョーカーが話している最中、ラクスは定時報告をガロンの元に送る為に、書いているとエリーゼが話しかけてくる。

「ねえねえ！何してるの？」

「これは、ラクス様への定時報告の為の文です。今はカムイ様の下にいるとはいえ、私の主は悪魔でラクス様なのです。内容は・・・まあ、戦闘報告と現在位置、と言った所です」

ラクスはそう言うと、鳩の足に文を結ぶと、飛ばす。

鳩は真っ直ぐに飛んでいきすぐに、見えなくなった。

「へえ、大変なんだね」

「仕事ですから」

ラクスはそう微笑むとカムイの元に向かおうとした瞬間、二隻の軍船が、港に入ってきた。

旗は、白夜王国の紋章だ。

「ツ!?カムイ様、白夜軍です!」

「何ですって!」

カムイは港を見ると、既に、白夜軍は船を着けて上陸しており、その戦闘には白夜平原で、見た白髪を結んだ青年だ。

「タクミさん・・・」

「タクミ?あの、白夜王国第二王子の?」

「はい・・・」

カムイは辛そうな顔でラクスにそう言うと、ラクスはタクミを見る。

タクミは、神器風神弓の使い手で、簡単には倒せない。

ラクスは対策を考えていると、遠くから羽音が聞こえ、音の発生源

に視線を向けると、見えたのはカミラとベルカ、ルーナだ。

「カムイ様！カミラ様が此方に向かってきています！」

「カミラ姉さんが？」

カムイはそう言うと同時に、カミラがやって来た。

「大丈夫、カムイ？任務を終わらせて助けに来たわよ」

「ありがとうございます。カミラ姉さん」

カムイとカミラが話している時、ラクスはベルカと向き合っている。

ガロンと、その直下の親衛隊以外で顔を知る唯一の存在であるベルカは何故、ラクスが顔を晒して、ここに居るのかと疑問に思っている。

「・・・何してるの？」

「任務だ。内密だから頼むぞ」

ラクスはベルカに、ジョーカーやその他からの目線は感じないからラクスが探った後で、小声でそう言った。

ラクスは、合わせると言わんばかりに、ベルカに挨拶する。

「初めまして。私はレスターです」

「ベルカよ」

怪しまれない様に、お互い知らない振りで挨拶し、白夜軍と対峙する。

「さて、やるか・・・」

ラクスは剣を抜くと、迫ってくる白夜軍に向かって走り出す。

ベルカはドラゴンナイトの為、竜に乗って白夜軍へ向かい、ラクスと二人で中央の広場に斬り込んで来た、天馬武者から陣地を守る。

「敵は多い。油断するなよ、ベルカ」

「貴方もね」

次々と飛んでくる天馬武者をベルカは空を、ラクスは地上から防ぎ、息の合った連携技も見せる事もあった。

「凄い・・・」

カムイは同じ様に、中央の広場で白夜軍の大軍から陣地を守っていた。

それにより、カムイは二人の戦いを目の当たりにする。

互いの欠点を守り、そして息を合わせた攻撃に、カムイは見惚れてしまった故に、白夜兵がカムイを攻撃してくるのを気が付かなかった。

「覚悟！」

「しまったー！」

「ふん！」

その声と共に、白夜兵は投槍が突き刺さり絶命した。

カムイは投槍が飛んできた方向を見ると、そこにはラクスが何かを投げたかの様な体勢で、カムイを見ていた。

「気を付けてください！白夜兵はまだまだ、来ます！」

マーシナリーの筈の、ラクスが槍を扱った事にカムイは驚いていたが、すぐに気を取り直して戦う。

ラクスは、カムイの一時的に止まった行動に呆れつつも戦っていると、白夜の槍術士が走ってくる、かなり怖い顔でだ。

「あんたは暗夜の兵ね！」

「そうだが・・・？」

「私は、白夜王国第二王子タクミ様の臣下、オボロ！勝負しなさい！」

オボロはそう言うと、薙刀を構えてくる。

「おいおい、暗夜に何の恨みがあるのか知らないが、私はここで死ぬ訳にはいかないんだよ」

ラクスは剣を構えると、オボロと対峙する。

「（・・・にしても、何処かで、見た様な顔だな。いったい何処で・・・）」

「行くわよー！」

ラクスはそう、考えているといるとオボロが薙刀を振るって、ラクスへ攻撃し始めた。

ラクスは軽く避け、オボロの二激目をさせる前に斬り込んむ。

オボロはラクスの攻撃を上手く防ぎ、ラクスにリーチを生かした薙刀での突き、斬りつけをしてくる。

「チツ、思った以上にやるな・・・」

「まだまだ、これからよー！」

オボロはそう言うと、薙刀を大降りに振るってきた時に、ラクスは

右に逸れて地面に落ちた薙刀を踏みつける。

「なッ!？」

「これでもう、薙刀は使えん」

ラクスはそう言うと、剣を横に振るいオボロを斬ろうとした。

オボロはこの時に、剣がゆっくりに流れる様に見え、今までの人生が走馬灯に流れる。

「(ごめんなさい、タクミさま……!」

オボロはそう心で叫んだ瞬間、激しい金属音が流れた。

「大丈夫か、オボロ?」

「ヒナタ……」

そこには、白夜の侍がおり、ラクスはすぐに身を引いて身構える。

「へえ、どうやら相当な、剣の使い手の様だな……お前、何て名前だ?」

ヒナタは笑顔でラクスにそう言うと、少し考える素振りをした後に名乗った。

「私の名は、レスター。暗夜王の臣下ラクス様に、仕える者だ」

望まぬ再開く後編く

「私の名は、レスター。暗夜王の臣下ラクス様に、仕える者だ」
ラクスはそう名乗りを挙げると、二人は驚いた様な顔をする。
「まさか、あんたがスメラギ様を殺した奴の臣下だったなんてね……」
「そりゃあ、強いよな……スメラギ様を殺すぐらいの実力者の臣下なんだからな」

二人の話を聞いたラクスは、白夜王国ではスメラギ殺害の話はどうやら、膨張して話を通っているのか、ラクス一人でスメラギを殺害した感じになっている。

「少し内容は違うが、実力は合ってるな」

ラクスはそう言うと、剣を構えた時にベルカが飛んできた。

「レスター」

「ベルカか。お前が手間を取るなんて、どうしたんだ？」

「白夜軍の数が多かったから、始末に手間取った」

ラクスは、ベルカの言葉を聞いてベルカの飛んできた方向を見ると、見事に血の道が出来上がっていた。

「成る程な、どうりでいないと思ったよ」

ラクスはそう言うと、ベルカは横に付く。

「さて、これで二対二だ。さあ、殺しあいを始めようか……？」

その言葉と、同時に放たれたラクスの異様な威圧感に、二人は怯み上がった。

「くツ」

「レスターだけに手間取っているのに、これはきついかもな……」

ラクスは怯むヒナタに斬りつけ、オボロは防ぎヒナタが、ラクスへ反撃するが、ラクスはその攻撃を避けて、今度はベルカが斬りつけてくる。

一進一退の攻防が続き、両者はどちらも退かない戦いを見せるが徐々に、実力差でオボロとヒナタは、押されていく。

「まだ、粘る気か？」

「まだまだ……、私達は負ける訳には、いかないのよ！」

「……終わらせよ」

「ああ……」

ベルカがそう言うのと、ラクスは了承して疲労する二人に近づいた瞬間、白夜兵が伝令に走ってきた。

「オボロ様とヒナタ様に、伝令！タクミ様から、撤退命令が出されました。至急、撤退してください！」

「そんな、私達は負けたの？」

「オボロ。どうやら俺達の負けらしい……タクミ様に従って退こう」

オボロとヒナタは、撤退していきベルカが、追撃しようと竜を飛ばたかせようとしたが、ラクスに腕を出されて止められる。

「止めておけ。追っても無意味な殺しになるだけだ……」

「……わかった」

ラクスは、戦場となったディアを見渡すと彼方此方に暗夜兵と白夜兵の死体がありラクスは少し、顔を歪めた。

「（これが……暗夜の選んだ道か……）」

ラクスは、戦争を止められなかった自分を悔やんだ。

もっと反対をしていれば戦争は無かったかもしれない、多くの兵士が血を流す事は無かった。

「……」

「ラクス」

「……なんだ？」

「早くカムイ様と合流しよ。白夜軍が撤退した今、船が出せる筈」

「わかった……」

ラクスはそう言うのと、多くの兵士が流した血の道を歩いて通り、カムイの元に向かっていく。

ノートルディア公国、到着

「ノートルディア公国」

「着いましたね．．．ここがノートルディア公国ですか」

ノートルディア公国に着いた、カムイ達とラクスは一息つける事ができた。

「何事もなく上陸できて一安心ですね」

「ああ。たが．．．妙だ」

「どうかしましたか？サイラスさん」

サイラスは何かを感じ取ったのか不審感を感じている。

ラクスもまた、ノートルディア公国に着いた時に、違和感を感じたのだ。

「(何故、白夜軍はいない?)」

ラクスはそう思っていると、サイラスもこの事態に気づいたのか、カムイに説明してカムイもすぐにその事に気づく。

白夜軍がノートルディア公国に駐留しているなら何故、カムイ達を上陸させたのか。

ラクスは奇襲を警戒しながら周りを見渡すと、人を見つけカムイも気づいた。

「．．．あーあそこに人がいますよ。すみませーん！そこの方ー！」

「えッ．．．わ、私かい？」

「あの、すみませんが、教えて頂きたい事があります。この国に白夜軍がいると聞いたのですが．．．」

「白夜軍．．．」

カムイの質問におばさんは考える素振りを見せると、何かを思い出したのか話してくれた。

「ああ、あの方達なら、この前会ったねえ。物腰の柔らかい、良い人達だったけど．．．なかなかやる事がごういんでね。警護だとか言って、虹の賢者様を山に連れて行っちゃったんだ」

「そんな．．．虹の賢者様を!?!」

「(まずい事になったな．．．)」

おばさんの言っている事が本当なら虹の賢者は白夜の手中にあり、カムイは力を得られない。

もし、得るなら白夜軍と戦う事になるのは明白だ。

「その山は、何処にあるのですか？」

「ええと・・・彼処に見えるノートルディア山がそうだけど・・・まさか、あんた達、あの山に行くつもりなのかい？止めておいた方が良いでしょう。命が欲しいならね」

「どう言う事ですか？」

カムイの疑問にラクスが答える。

「ノートルディア山は登る者に試練を与える高峰だと言われている。今まで、何人もの猛者が挑戦したが、帰ってきた者は殆ど皆無だった・・・昇れたとしても、頂上に立つ七重の搭の内部で命を落としたりする」

「七重の搭・・・」

「へえ、あんた詳しいねえ」

ラクスの説明に、カムイは七重の搭に反応し、おばさんはラクスの詳しい説明に関心を抱いている。

「ねえ・・・どうする？カムイ。罨に飛び込む様な物だけけど」

「でも、引き下がる事はできません。もし任務に失敗したら、お父様は私を始末するでしょう。そうなたら、この手で戦争を終わらせる事なんてできません。これが試練だというなら、望むところでですよ」

カムイの決意は固い物だとラクスは感じ黙っていた。

「カムイ様は軍才はあるが、優しすぎるのが災いしている。その優しさが、カムイ様の弱点と言うのなら補っていかなくては・・・そうしなければ、虹の賢者の試練は越えられん」

ラクスはカムイを見ながら思い剣をそっと、握る。

七重の搭く前編く

カムイ達とラクスは、虹の賢者に合う為にノートルデイア山を登頂していた。

カムイは息を切らしながらも、登り続けている。

「はあ、はあ……流石、試練を与える高峰……一筋縄では、通してぬれませんね……」

「可愛そうに、カムイ……さつきからとても辛そうよ。私の竜に乗せてあげるから、少しは休んだ方が良いわ」

「カミラ姉さん……、ありがとうございます。でも大丈夫ですよ。私は良いですから、もつと疲れている人を乗せてあげてください。それに、私はレスターさんを少しは見習わなくてはいけません」

カムイがそう言いながら前を見ると、前方で息を切らさないで警戒するラクスの姿だった。

まるで慣れていと言わんばかりにペースを落とす事なく歩く。

「凄い体力ね……」

カミラも驚いていると、ラクスが振り替える。

「大丈夫ですか?」

「はい、何とか」

「無理をはいけませんよ。この山は本当に険しいですから」

ラクスはそう言うと、再び歩き出した。

暫く歩いたカムイ達とラクスは頂上付近までやって来た。

山登りに、慣れている者以外はかなり疲労してはいたが、支障は無かった。

「やっと着いたか……」

「!もしかしてあれが、七重の搭ですか!?!」

「何とか、頂上に辿り着いたようね。でも、大変なのはここからよ。恐らく中には……戦闘準備を整えた、白夜兵でいっぱいだから」

「安心しなさいな。カムイ。恐れる事はないわ。貴方には私達がついてるのだもの。そうよ……例えば貴方の姉が中にいたとしても……負けはしないわ」

「はい……私達は勝ってみせます。例え、あの中の誰がいたとしても」

カムイは覚悟を持って答える。

「……カムイ様の迷いとなる者は私が……」

ラクスの心の奥底で、そう言うとかムイ達と共に七重の搭へ入っていく。

く七重の搭 内部く

「失礼します、ヒノカ様。暗夜王国の軍勢が此方に」

「何……!?!この山を登って来たと言うのか?」

七重の搭、最上階では、ヒノカと白夜の忍びスズカゼがいた。

虹の賢者の警護の為に、七重の搭にいた時に、暗夜軍到着の知らせが届い

「思っていたより、骨のある連中のようだ。だが、その疲労しきった体では我々白夜軍には敵うまい。虹の賢者様は、私達がお守りするぞ……全員、持ち場に着け!」

ヒノカがそう叫ぶと、白夜軍は戦闘態勢に入った。

「やはり、それなりに白夜軍がおります」

「ここからは、別れ道になっていきますね。どちらに進めば……」

「ここは分隊を試してみればどうでしょうか?戦力は分けられますが、必ず正解の道に行きます」

「……わかりました。それで行きましょう」

分隊はカムイ率いるジョーカー、サイラス、ラクス、ゼロ、ハロルド。

カミラ率いるエルフィ、ベルカ、ルーナ、エリーゼ、オーディン。それぞれ分けられた後、搭を進んで行く。

七重の搭く中編く

カムイ隊は、右側の通路を通って行くとそこには、白夜兵が守りに着いていた。

白夜兵はカムイ達を見つけると、すぐに襲い掛かってきた。

カムイ達も応戦を始め、乱戦状態になる。

「はあー！」

ラクスは迫りくる白夜兵を次々と倒していき、カムイ達の活路を開いていく。

そんな、ラクスを後ろから斬りつけようとした白夜兵が現れた。

「うおおおおー！」

「ツ!?しまった!」

多くの白夜兵に注意が行き渡っていた為、ラクスはすぐ後ろの敵に気付けなかった。

だが、その白夜兵はカムイによって倒される。

「大丈夫ですか!」

「何とか大丈夫です」

ラクスはそう言うと、すぐに剣を構え直して残りの白夜兵を討ち倒し、カムイ達と共に次の階へと進む。

次の階も白夜兵が多数存在し、そして何よりあの時の捕虜であった緑の髪の毛の忍びがいた。

「スズカゼさん」

「カムイ様。どうか、お許してください・・・私は白夜王国を守る為に、貴方を討ちます」

スズカゼはそう言うと、手裏剣を構えると白夜兵が襲い掛かってきた。

スズカゼは真っ直ぐに、カムイの元に向かおうとしたがラクスによって遮られた。

「悪いな。カムイ様の元には行かせはしないが、その変わり俺と、少し付き合え」

「良いでしょう。貴方を倒してカムイ様を討たせて貰います」

ラクスとスズカゼの戦いが始まり、両者は激しい戦いを始めた。スズカゼは、手裏剣の長所を活かした戦いでラクスを翻弄しようとするが、ラクスは簡単に防いでいく。

「私の攻撃が通じませんね……」

「以前、サイゾウと言う忍びと戦っているからな。お前の攻撃が遅く見える。それだけだ……」

「成る程、兄上と戦ったのですね……それなら貴方が忍びとの、戦いに慣れている事理由がわかります」

「(兄弟だったのか)」

ラクスはそう考えると、スズカゼは再び飛び掛かってくる。

ラクスはまた、スズカゼの攻撃を防ごうとするが、スズカゼは攻撃せずラクスが防御した瞬間、左に逸れてラクスを攻撃する。

「チッ！」

ラクスは間一髪、右に逸れて急所から離れたが、腹を斬られた。

ラクスの腹は血が流れる様に出てきており、ラクスは油断したと顔を歪めた。

「姑息な真似をするか……」

「それでもしないと、貴方には勝てないと思ったので……」

スズカゼが澄ました顔でそう言うと、ラクスは斬られた痛みと血の出血で目の前が回って見える。

「(まずいな……)」

ラクスは少し焦りを見せると、そこへカムイとジョーカーが走ってきた。

「レスターさん！」

「チッ！世話を焼きやがって！」

ジョーカーはラクスに杖リライブで、回復させるとラクスの横に立って暗器を構える。

カムイも同じ様に夜刀神を手にラクスの横に立つ。

「遅くなってすみません。でも、ここからは一緒に戦いましょう」

「……感謝する」

ラクスはそう言うと、剣を構える。

スズカゼは流石に三対一は厳しいと思ったのか、顔に汗を流しているのが見える。

「流石に不利ですね・・・体勢を立て直させて貰います」

スズカゼはそう言うと、消えた。

スズカゼを退かせたカムイ達とラクスは、最上階で待ち受ける敵の大將の元へ向かっていくと、カミラと合流した。

「ああ、カムイ。無事だったのね」

「はい。皆様のお蔭でここまで来れました。次は、この奥の大將が相手です。油断無く行きましょう・・・」

カムイはそう言うと、七重の搭、最上階の奥へと入っていく。

七重の搭く後編く

カムイ達とラクスが進むと、そこには天馬武者の部隊と白夜王族のヒノカが待ち受けていた。

「ヒノカさん・・・」

「カムイ。まさか、お前がこの七重の搭を攻め登ってくるとは思わなかったぞ。だが、お前の姉ではあるが私は、お前に負ける訳にはいかない！」

ヒノカはそう言うと、薙刀を構えカムイ達とラクスに対峙する。

カムイは夜刀神を構えてヒノカと戦おうとするが、ラクスが制す。

「カムイ様。ここは私が相手をします」

「レスターさん？」

「白夜の者とはいえ、貴方の実の姉だ。辛い戦いはさせたくない」

ラクスはそう言うと、ヒノカと対峙する。

「来い！私はお前達を一步足りとも、虹の賢者様に近づけさせはしない！」

ラクスは、ヒノカの言葉を聞いて斬り掛かる。

カムイ達も、天馬武者の部隊と交戦を開始した。

ラクスは斬り掛かったがヒノカは避け、ラクスに反撃する。

「やあー！」

「あまいな」

ヒノカの攻撃をラクスは防ぐと、ヒノカに連続で攻撃する。

ヒノカは、ラクスの連続での攻撃を防いでいると、ラクスが飛び上がり、蹴りを入れた。

「ぐはあー！」

ヒノカはまとも当たってしまったが、天馬から落ちる事はなく体勢を整えようとすると、ラクスは着地した後、素早く斬り込む。

「くッー！」

ヒノカは、ラクスの攻撃を間一髪の所で防ぎ、ラクスは距離を取る。

「流石は王族だな。手強いものだ・・・」

「私はカムイを取り戻したい一心で、鍛練を積んできたからな。だが、

まさかこんな形で、振るう事になるとは思わなかったが・・・」

ヒノカは、悲痛ともとれる表情を見せるがラクスもまた悲痛な表情を出す。

ラクスの目的はスメラギ暗殺での贖罪を果たす為に、カムイを影から守っているが、スメラギの子である白夜王族もその対象なのだ。

だが、ラクスはそれでも敵だと、割り切りながら剣を構える。

「確かに、血の繋がりはお前達にあるかもしれない・・・だが、それでも繋がった絆を断ち切るのは不可能に近い物だと思え」

「くッ！・・・うおおおお！」

ヒノカはラクスの言葉を言い返せず、薙刀を振るう。

ラクスは、薙刀を弾き返すとヒノカは体勢を崩し、ラクスはその隙を衝いてヒノカを掴み、天馬から落とす。

ヒノカは立ち上がろうとしたが、ラクスはそれを許さず踏みつけて剣を突き立てようとした。

「止めてくださいレスターさん！」

「何故ですか？こいつは白夜王族だ。生かしていたら面倒な事になります」

「もう勝敗は決しています。これ以上の殺戮は止めてください」
「・・・」

ラクスはカムイの命令を聞いて足を退けると、ヒノカはゆつくりと立ち上がる。

「くッ・・・私の負けか・・・」

「はい。私達の勝ちです。ですが、私達は無用な殺戮はしません。ヒノカさん・・・退いてください」

「・・・致し方ない」

ヒノカはそう言うと、天馬に跨がって七重の搭から逃げ出す。

他の白夜軍も同じで、ヒノカに続いていく。

「・・・本当によろしかったのですか？」

「はい・・・では、行きましょう。虹の賢者様の元へ」

カムイはそう言うと、扉を開けた。

虹の賢者

扉を開けたカムイが見たのは、広い部屋と、一人の年老いた老人だった。

「えつと、貴方が虹の賢者様ですか？」

「いかにも。わしが虹の賢者。よくここまで辿り着いたのう」

老人が虹の賢者だと名乗ると、ラクスの方に向いてきた。

ラクスは全力で、目を合わさない様にした。

何故なら、

「久しぶりのう、レスター」

知り合いだから。

「は、はい、久しぶりです……」

「ええ！レスターさん。虹の賢者様と知り合いなんですか！」

「マーク様が虹の賢者様から力を貰った、言う話を聞いただろ。あの時、マークス様の護衛の兵士の一人としていたんだよ」

ラクスは、咄嗟に嘘をついた。

確かに、護衛として来てはいたが、それはガロンの護衛であり、その時のラクスは、騎士に成り立ての頃だ。

ラクスは何事も無く、ガロンの仕事はすぐに終わると思っていたが、ガロンが何を考えたのかノートルディア山に登らされた挙げ句、七重の搭の幻影兵と戦わされたのだ。

「……嫌な思い出だ。ガロンの命で登らされて、戦わされて、別にいらぬのに力を得てしまったなんて、ここにいる奴等に言えない」
ラクスは虹の賢者が余計な事を言わないかと、ヒヤヒヤしていると、察してくれたのか合わせてた。

「うむ、確かにマークスと一緒にいたのう。あの時のお主は中々、印象深い少年じゃったからよく覚えておる」

「そうなんですか？」

「うむ、それが」

「賢者様。もう思い出話はそれぐらいにしておいてください」

ラクスは虹の賢者の話が長くなるのを感じ取って、すぐに止めに入る

る。

賢者も、カムイの目的を思い出して、思い出話を止める。

カムイは賢者の前に行き目的を話す。

「あの……！私達は、貴方にお会いすれば力を得られると聞いてきました。どうか私達にも、力を授けて頂けないでしょうか!?!」

「ふおおおお、面白い事を言うのう。力なら既に、試練を乗り越えたお前さん達の物になっておるよ。あの搭を破る前と比べて、体が軽くなっておるのを感じんか?」

「そ、そういえば……」

カムイは賢者に言われるまで、体が軽くなっているのに気づいていなかった。

ラクスは最初からノートルディア山と七重の搭その物が、試練であり力なのだ知っていた。

「良いか? わしに会って得られる力とはな、わしに会うまでの試練の中で自ら身につける力の事なのじゃ。よく頑張った。力を授かりし勇者達よ」

「ありがとうございます、賢者様……!」

カムイは賢者に礼を言うと、賢者は更に話す。

「それより……カムイ。お前さんは神刀、夜刀神を次ぐ者じゃな」

「! どうしてその事を!?! それに、私の名前も……」

「ふおおお、わしには何でも分かるのじゃよ。お前さん達が今まで何をしてきたか、そして、何処に向かうのかもな。……わしは伝えねばならぬ。神刀を次ぐ者……カムイは、真の平和の為に炎の紋章の謎を解き明かす運命にあると」

「炎の紋章……?」

カムイは疑問の声を挙げると、賢者は続ける。

「ああ。この夜刀神は、炎の紋章を繋ぐ鍵となる。炎の紋章に至る第一の道標をわしが示そう。残念ながら……この場にはまだ、夜刀神を導く暗夜の勇者はおらぬ。じゃが遠からぬ未来……機は必ず訪れる。その時、今から施す儀が役に立つ筈じゃ。カムイよ。夜刀神を掲げるが良い」

「は、はい」

カムイは夜刀神を鞘から抜いて掲げる。

「――― 我は神刀を鍛えし者、禁忌を犯せし者、伍色を紡ぎし者……我が名に応えよ、炎の紋章よ」

賢者が唱える様に話すと、夜刀神に変化が起きた。

夜刀神は以前より輝きが増していて神々しくなっている。

「これは……?」

「今はまだ、変わりはない。暗夜の勇者と道を同じくする時……その時、夜刀神は新たな姿へと生まれ変わる。長き夜の世を導く者……夜刀神・長夜へとな」

「夜刀神・長夜……それが、炎の紋章ですか……?」

カムイは夜刀神を見てそう言うと、賢者は否定する。

「いんや、それはまだ道半ば……真の炎の紋章の姿ではない。じゃがいずれ……そこに至るであろう。いずれ、な……わしが言えるのは、ここまでじゃ。さあ、先を急いでおるのじゃろ?早く父王の元に戻り、任を果たした事を伝えるがよい」

賢者はそう言うと、カムイは夜刀神を収める。

「よし、これでこの地は制圧したし、賢者様から力も得ました。後は王城に戻って、お父様にご報告するだけです」

カムイは無事に任務を果たせた事に、安堵していると、予想外の人物が現れる。

「……カムイ様」

「ま、マクベスさん!?いつの間に来ていたのですか!」

「カムイ様、これは幻影魔法です。恐らくマクベス殿は王城かと……」
ラクスがそう指摘すると、マクベスは不適に笑う。

「正解ですレスター……いや、ラクス殿と言った方がよろしいですかな?」

「何ですって!……レスターさんが、ラクスさん?」

カムイとその他の者達は驚きのあまり後ろに引いている。

ラクスはマクベスを睨み付ける。

「何故、お前が俺の正体を?」

「その訳はガロン様からの伝言で分かりますよ。ガロン様は、今日より正体を隠さなくても良いと仰り、素顔を晒した状態での活動も許可する、とね。それで分かったのですよ」

「・・・ガロン様がねえ。あの方は本当に気紛れな人だ」

ラクスはそう言うのと、マクベスを睨むのを止めた。

正体を隠さなくても良くなった以上は、隠していても意味は無いと、ラクスは考えたのだ。

「それと、カムイ様に、ガロン様より下された追加の命をお伝えに参りました」

「追加の命？」

「(何だ・・・何か嫌な予感がする)」

ラクスは直感で、感じ取った予感に不安を感じた。

「はい・・・今後、力を授かる者が出さぬよう、虹の賢者を殺せ、と」
「!?虹の賢者様を!?そ、そんな事はできませんよ、マクベスさん。賢者様は私達に力を与えてくださったんです。その恩を、仇で返す訳にはいきません。それに・・・白夜王国のリヨウマ王子は既に力を得た後です。今さら賢者様を殺す必要はなんてないでしょう」

カムイは必死にマクベスに訴えるが、マクベスは不適な笑みを崩さず残酷な事を言い放つ。

「ですが、カムイ様。王命は王命です。逆らえば反逆となり・・・王は再び、貴方の処刑を考えるでしょう。命が惜しければ聞き入れてくださいませ、カムイ様」

「くっ・・・」

カムイは処刑と言う言葉を出されると言葉を出せなくなった。

だが、そこにラクスはマクベスに提案する。

「マクベス。・・・私が虹の賢者を殺そう」

嘆き

「マクベス。・・・私が虹の賢者を殺そう」

ラクスは、そう言うと同じりは容赦の無いラクスの言葉に、驚愕する。

マクベスは、ラクスの言葉を聞いて考える素振りを見せる。

「別に私が殺しても、虹の賢者は死にカムイ様の命は達成される。それで良いだろうか？」

「・・・分かりました。では、おやりりください」

マクベスがそう言うのと、ラクスは剣を抜いて賢者に迫る。

そんなラクスの前に、カムイは両手を広げて立ち塞がる。

「止めてください！ラクスさん！」

「退いてください、カムイ様。虹の賢者は私が殺します。だから・・・」

「もう、良い」

カムイとラクスが言い争っていると、賢者が制す。

「もう、良いのじゃ・・・」

「しかし、賢者様！」

「カムイ、わしはそなたを最後に力を授けたら死ぬつもりでいたのじゃ」

「そんな・・・！」

カムイは、賢者が死ぬつもりで最後に力を授けたと聞いて、悲痛な顔になる。

「わしはそなたに力を与えた後、わし自身の力を使い果たした。もう、生きる力すら残っておらん」

「・・・賢者様」

「ふおふお、何だラクス。そなたらしくないの？そなたはもっとしっかりとした騎士じゃ。泣くのは止めなさい」

「え？」

賢者の言葉に、カムイは振り替えると涙を溢れんばかりに流すラクスがいた。

「そなたはいつも泣いてばかりだったの。ガロンの気まぐれとは言え、力を得たがそれを気に、国を変えようと努力した姿はわしは覚え

ておるぞ」

「知っていたのですね……」

「優しすぎるそなたが心配だったからかの。だが、もう見守る事はできません……」

賢者はそう言った瞬間、力無く倒れる。

「賢者様!?!」

「賢者様……!」

ラクスとカムイは、賢者に近づきラクスは賢者を抱える。

「どうやら限界が来たようじゃ……」

「賢者さま!どうか死なないでください!私は……」

「賢者様……」

「二人共、泣くではない。人はいつか死ぬ定め……その定めが、わしに來ただけの事じゃ……」

賢者はそう穏やかな表情を浮かべて、優しく語る。

カムイは、涙を流しながら賢者にすがり付いていたが、賢者は息を引き取った。

「……賢者様……?賢者様……!」

「……くッ」

ラクスは涙を堪えて賢者をそっと寝かせると、マクベスに向かって行く。

「……追加の命は果たされた。もう、ここには用は無いだろ、マクベス?」

「ちッ……ええ、もうありません。では」

マクベスはそう言うと、消え部屋は静かに悲しみに溢れかえっており、ラクスは涙を見せまいとずっと、カムイ達に後ろ姿だけを見せていた。

交流

「マイキャツスル」

ラクスはマイキャツスルと言う、異世界にあるカムイの城にいた。ラクスはマイキャツスルで、当番で肉を取る為に狩猟に当たっている頃。

「カムイside」

私は、レスターさんいえ、ラクスさんは正体が知られても私の元に残って行動していました。

でも、ラクスさんは兜をしていなくても表情が読み取りづらく、仲間内で色々と誤解を招いたりしているそうで、私はどうするが良いか考えましたが、私はラクスさんの事をあまりよく知りません。

「どうするが良いのでしょうか・・・」

「あら。どうしたのかカムイ」

「あ、カミラ姉さん」

私の元にカミラ姉さんがやって来ました。

私は、カミラ姉さんにラクスさんの事を話してみる事にしました。

「カミラ姉さん。相談したい事があります」

「何かしらカムイ？」

「はい。実はラクスの事を私はあまり知らなくて、それでどう接すれば良いのか分からなくて・・・」

「優しいのねカムイ。でも、私もラクスの事をあまり知らないの」

「そうですか・・・」

私はカミラ姉さんも、よく知らないと分かると更に頭を悩ませました。

ですが、カミラ姉さんは以外な人物を挙げた。

「でも、ベルカならラクスの事を、よく知っていると思うわ」

「ベルカさんが？」

「ええ。彼女、ラクスとは古い付き合いみたいだしもしかしたら、知っていると思うわよ」

「そうですか。ありがとうございます。早速、行ってみますね」

私はカミラ姉さんと別れると、ベルカさんの元に向かいました。

「ベルカさーん！」

「・・・カムイ様」

ベルカさんは当番の鉱石採集をしている最中で、片手には鉱石を持っていた。

「何ですか？」

「はい。実は・・・」

私はベルカさんに訳を説明すると、ベルカさん考え初めましたが、すぐに此方の方に向きました。

「ラクスは常に冷静沈着で冷酷な人と呼ばれてるけど、実際は逆」

「逆、ですか？」

ベルカは頷く。

「ラクスはあれでも、臆病で落ち着きの無い人。嫌われようとしてるのに、嫌われるのを恐れる。白夜で言うなら・・・天邪鬼、と言った感じ」

「天邪鬼・・・」

「でも、彼に一つだけ裏表の無い感情は優しさ。ラクスは私と同じ貧民街の出身だけど、孤児院に拾われてそこで愛されて育てられたからのか。優しさが出てくるの」

私はラクスさんの原動の殆どが性格の正反対と聞いて驚いきましたが、何よりラクスは優しさだけは裏表が無いと言うのだ。

確かに、ラクスは人が困っている時は力を貸してくれる人だと私は思い出しました。

「意外な一面ですね」

「そうですね？ 普段、彼は冷酷な騎士を振る舞っているから・・・話はこれで、終わりです。私は仕事に戻ります」

「ありがとうございます。ベルカさん。ラクスさんの事を色々教えてください」

私はそう言うと、ベルカさんは少し笑った気がした。

（side終了）

ラクスは狩りを終え獲物を運び血抜きをしようと移動していると、ベルカとカムイが何かを話している。

ラクスは獲物を持ちながら、カムイ達に近づいて行く。

「カムイ様、ベルカ。何を話しているのですか？」

「ラクスさん」

「少しだけ昔話をしていた」

「そうなのか？珍しいなお前が昔の話をするなんてな」

ラクスはベルカにそう言う、ベルカは少し微笑む。

「あの、ラクスさん！」

「な、何だ？」

「後で私の部屋に来ませんか？少し貴方と話がしてみたくて」

「・・・別に暇だから良いが」

ラクスの言葉に、カムイは満面の笑みを見せて手を合わせる。

「そうですか！じゃあ、待ってますね」

「はい・・・」

ラクスがそう言うと、カムイは笑みを崩さず去っていき。

ラクスは何が何だか分からなかった。

唯一カムイの行動理由を知るベルカは、鉱石採集に戻っていた為、聞くに聞けなかった。

過去

ラクスは、カムイとの約束通りカムイの部屋もとい、マイハウスにやって来ていた。

マイハウスはツリーハウスになっており、梯子を上って入る。

ラクスは梯子を上ると扉をノックする。

「誰ですか？」

「ラクスです」

「どうぞ」

「失礼します」

カムイの許可が降りたラクスはマイハウスに入ると、ベットに座るカムイがいた。

本を読んでいたのか、ベットの横に本が置いてある。

「待っていましたラクスさん。一緒に紅茶を飲みながらお話をしましょう」

「はい」

カムイとラクスは、テーブルまで行くとカムイはラクスを座らせて、紅茶を入れる為の道具と茶葉を何処からか持ってくる。

「貴方が紅茶を入れられるのですか？」

「実は、ジョーカーさんに紅茶の入れ方を教わりまして。まだ未熟ですが、何も無いよりは」

カムイはそう微笑みながら紅茶を入れていく。

手際は上手い物でラクスも関心を抱いている。

カムイが紅茶を入れ終わると、ラクスに差し出した。

「どうぞ」

「・・・いただきます」

ラクスはカップを持って紅茶を飲み初めると、違和感を感じとり紅茶を見る。

「（・・・薄いな）」

紅茶の色は濃いのに、味は薄い。

ラクスは頭の中をハテナ（？）で一杯にした。

「(おかしい・・・何故、普通に入れておられたのに、こんなにも薄い・・・?)」

「どうですか?」

ラクスはカムイの方を見ると、目を輝かせて見てくる。

「(言いづらい・・・だが、ここで言わなければカムイ様は必ず誰かに、紅茶を入れるな)」

ラクスはカップを受け皿に置くと、紅茶の感想を言う。

「・・・薄いです」

「そうですか・・・」

カムイは落ち込む様にしゅん、とする。

「ですが、良い方向までに行っているのもう少し練習する事をお勧めします」

「はい」

カムイとラクスは暫く、薄い紅茶での茶会を楽しんでいると、カムイはカップを置いてラクスに聞く。

「ラクスさん。ラクスさんの子供の頃はどんな感じだったんですか?」

「・・・そうだな」

ラクスはカップを置いて考える素振りを見せる。

暫く、静かな雰囲気になっていたが、ラクスは話初める。

「私がまだ、騎士でもなく貧民街の住民としていた時の話だ」

↳数年前、王都地下街↳

地下街では、連日連夜と殺人、強盗が起こる貧民街。

そこでは、ゴミを漁り使えそうな物を探している少年時代のラクスがいた。

ラクスはゴミを漁っていた使えそうな物を拾いそれを売るなどで生計を立てているが、今回は収穫は無かった。

「チツ、今日はしけてやがる・・・」

ラクスは立ち上がると歩き出した。

「(今回も収穫は無し、このままじゃ俺は飢え死にだ……仕方ない、またやるか)」

ラクスはそう考えると人混みの多い所へ出て、その中に紛れ込む。ラクスが適当に歩いていると、裕福そうな服装をした男がおり、ラクスは素早く悟られない様に、近づくと男の懐から財布を抜き取る。ラクスのあれとは、スリの事だったのだ。

ラクスは収穫の無い時は仕方なくスリをしており、男から財布を抜き取って歩きながら財布の中を見るが、ほぼ空っぽだった。

「あの野郎、服装は裕福そうなのにケチツてるな……」

ラクスは、また獲物を探して歩いていると、今度は目立たない服装をした男と、その隣に水色の髪の少女がいた。

「(あの男で最後にするか……)」

ラクスはいつもの様に近づくと、懐へ手を伸ばす。

だが、衝突にその手は掴まれた。

「ほお。こいつは中々のスリだな……」

「ッ!？」

ラクスは男に見られた瞬間、背筋が凍おりついた。

男はまるで、何人も殺してもきた様な目をしており、ラクスは男の隙を見計らって抜け出すと、逃げ出した。

「何なんだ……彼奴は……!？」

ラクスは逃げながら後ろを見ると、男が追い掛けてきており、ラクスは逃げる為に、罾が多くある路地に逃げ込むと、罾を作動させない様に進みきると、起動させた。

男が来ると同時に、多くの罾が襲い掛かるが男は容易く避ける。

「くそー何なんだよー!？」

ラクスは更に別ルートで罾を発動させようとしたが、男は素早く近づくと、ラクスを押さえ込む。

「ぐはあー!？」

「ふむ、身体能力も抜群とはな……」

「この野郎、離せ!？」

ラクスは抵抗するが、男の方が力が強く抵抗らしい抵抗もできない。

「お前……」

「(やばい、殺される……!)」

ラクスは覚悟して、目を閉じると男は意外な言葉をラクスに言った。

「私の弟子にならないか?」

ラクスはそれを聞いて啞然とした。

それが後にベルカとの出会いであり、ラクスが暗夜王の懐刀として出世する、切っ掛けだった。

殺し屋の弟子

「私の弟子にならないか？」

この言葉にラクスは哑然としてみると、男は話を続ける。

「お前は長い間、背後を取らせなかった私の後ろを取り尚且つ、財布をすられようとした直前でだ。しかも、お前は中々の身体能力も兼ね備えてもいる」

「な、何の弟子だよ。そこまで分析して・・・」

「・・・殺し屋だ」

「・・・殺し屋？嫌だね。例え殺されても、俺は殺しをする様な奴の下には着かない」

ラクスは強がりながら男にそっぽを向く。

「なら、どう言う奴の下に着く？」

「俺が生活に、永遠に困らないぐらいの保証してくれる奴だ。要は金だよ」

ラクスは、これなら諦めるだろうと思った時、地面にジャラリ、と音がして見てみると大量の金が落ちてある。

そして、悪戯ぽく笑みを浮かべる男の顔も見える。

「これなら下に着けるだろ？」

「(マジかよ・・・)」

ラクスは、完全に逃げる事を諦めた。

男の脇でトボトボ、と着いてくると、さっきの少女が無表情で立っている。

「ベルカ。今日から新しい仲間だ。ほら、挨拶しろ」

「・・・ラクスだ」

「ベルカ」

「何だ？素っ気ないな・・・まあ、良い。お前の修行は明日からだ。寝坊すれば、死ぬと思っとけよ」

ラクスは男の言葉に、背筋が凍る。

こうして、ラクスは不本意な修行生活が始まった。

だが、長くなるので修行生活はまたの機会に語ろう。

殺し屋の弟子になってから、二年以上が経過しようと、していた。

今、ラクスはベルカと戦いの鍛練をしており、ラクスは剣を、ベルカは斧と互いに殺さない程度で、戦う。

「たく、まだ腕を上げんのかよベルカ」

「貴方も腕を上げてる」

「ふん、お前には負けたくないからな。」

二人の鍛練はヒートアップしていくと、二回程、手が叩かれて二人は鍛練を止める。

「そこまで。もう夕飯だぞ、早く手を洗って来い」

「はい」

二人は同時に返事をする、男は入っていく。

「はあ、腹へった」

「食いしん坊」

ラクスがそう言うと、ベルカはからかう様に言うと、腹から大きな腹の虫がなった。

二人は静粛に包まれ、ベルカがお腹を押さえながら顔を赤く染め上げる。

「ぶっはははは！お前、人に言っけてそれか！」

「うるさい……」

ベルカは、怒りの顔でラクスを追いかけ始めた。

しかも、白夜の武器である金棒を持って。

「おいおいおい！何でお前、金棒なんて持ってんだよ！」

「黙って殴られて」

「いやいやいや、死ぬから！殴られたら死ぬから！」

ラクスとベルカの全力の鬼ごっこに師である男は「何やってんだ？」と思った。

男によって止められた、二人の全力の鬼ごっこは終わって、夕飯を食べていた。

「さて、ラクス。お前には明日から私と共に初仕事をして貰う」

「初仕事？」

「ああ。暗殺の標的は、白夜の呉服屋の店主とその妻の二人。目撃者はできるだけ殺すんだ」

「・・・別に良いが、ベルカは？」

「ベルカにはもう少し技能を身に付けて貰う。少なくとも後、一週間くらいは・・・」

男の言葉にラクスは違和感を感じたが、気にしなかった。

ベルカも得に気にしてはいないのか、黙々と夕飯を食べている。

暗殺実行の日、暗夜王国特有の暗闇に乗じて、対象を待つ。

男とラクス以外にも、多くの殺し屋がおり余程、その呉服屋の夫婦は恨まれているのだな、とラクスは思った。

「・・・来たぞ」

男の言葉にラクスは目を凝らして見ると、荷台が列を作る集団の前に、二人の男女がいる。

「良いか？手筈通りに行くぞ」

ラクスは頷くと、剣を引き抜き待ち構える。

標的は徐々に近づいてきて、すぐ側まで来た時に、男が合図を出す。

「・・・今だ！」

合図を聞いて、ラクスと殺し屋達は一齐に飛び掛かり襲い掛かる。

「ツ!? 賊か！」

「あなた！」

「主人殿をお守りしろ！」

呉服屋の用心棒達が殺し屋の相手をするが、ラクスと男の突破を許した。

「覚悟！」

「うおおおおお！」

二人は夫婦を斬りつけ、夫婦は力無く倒れ絶命した。

その死を見届けると、仕事は終わったと、二人は立ち去ろうとした時、奥の積み荷の箱が音があった。

「ラクス。見てこい・・・」

ラクスは、箱にそつと近づくと、箱をゆっくりと開けると、そこには、怯えた表情でラクスを見る少女だった。

腕には猫が抱かれておりガタガタ、と震えている。

「・・・」

ラクスは無言で少女を見ていたが、ラクスは人指し指を立てて口に運び、静かにする様にと合図をする。

ラクスは少女から猫を取り上げると、男に見せる。

「猫でした」

「そうか。じゃあ、早く逃げるぞ」

男はそう言うと、ラクスは頷いて猫を少女に戻す。

そして、喋らずに口元だけで、こう言った。

”もし、話したら殺す”

少女は何を言ったのか分かると、首を縦に振る。

ラクスはそれを見届けると、箱を閉じて用心棒達が来る前に逃げ出した。

暗夜王との出会い

初仕事を無事に達成してから更に月日が経ち、ラクスは仕事を夜に終えて、帰宅した。

「ただいま。・・・何だこの物静な雰囲気は？」

ラクスは早足で自宅の奥に行くと、そこには師である男と血だらけになって無表情で立っているベルカだった。

「ベルカ・・・」

「ラクス。お帰りなさい」

ベルカは当然の様にラクスにそう言う。

ラクスはどうしても状況が飲み込めずにおり、ただ立っているだけ。

「・・・何で師匠が死んでるんだよ」

「私が殺した」

「何でだよ・・・何で殺した！」

「依頼だった。養父を殺す様に言われて私はそれを遂行しただけ」

ベルカは相変わらずそう言うが、ラクスは心の何処かにドス黒い感情を感じそこで、意識が失った。

「ん・・・俺は、何を」

ラクスは気がつくくと、部屋は荒れておりラクスは立ち上がると、辺りを見渡す。

散乱している家具以外に、男の死体を見つけ夢ではないと分かる

ラクスはベルカを思い出した。

「ベルカは・・・ベルカは何処だ！」

ラクスは家の中を探し回ると、倒れているベルカがいた。

「ベルカ！」

ラクスは急いでベルカを抱き寄せると、息をしている事から気を失っているだけだと、気づき安堵する。

ラクスはベルカを無事だった寝室に運び込むと、ベルカを寝かせて考える。

「俺はベルカに何をしたんだ……」

ラクスをゆつくりと思いだそうとすると、記憶が鮮明に流れる。

ラクスは思い出したとばかりに、ベルカを見る。

「お、俺が……ベルカの、首を……！」

ラクスは震え上がり、外に出た。

暫く、外の城下を歩き続けていたラクスは、その場にへたりこむ。

「俺は……何て事を……！」

ラクスは後悔の念に囚われていると、ラクスの目の前に大きな影が現れた。

「おい、貴様」

声を掛けられ見上げると、そこにいたのは年老いた身分の高そうな男だった。

ラクスは不機嫌そうに、睨む。

「何だよ？ 上流の高貴な御方が何か御用でも？」

ラクスは嫌みを言う様に話すが、男は笑った。

ラクスはその男に疑問を浮かべると、同時に薄気味悪いと感じる。

「お前の様な若人が、何故ここで座っているのか気になってな。話しかけた」

「そうかよ。なら、ほっておいてくれ……」

ラクスはそう言うと、また俯くが男は何を思ったのかラクスと共に、地べたに座った。

「何で座るんだよ」

「何処に座ろうとわしの勝手だろ」

ラクスは舌打ちをして、俯く。

ベルカの首を絞めたラクスは途方もない罪悪間に苛まれていると、男はまた話し出す。

「お前、何か悩みがあるのか？」

「・・・」

「黙っていても分からんぞ。悩みがあるなら話せ。少しは楽になるだろう・・・」

「・・・実は」

ラクスは男に話した。

師である男が殺され、幼馴染みに対して首を絞めて殺そうとした事を。

男は静かに聞くと、考える素振りをする。

「成る程な・・・確かに落ち込む物だ」

「だろ？俺はこの罪悪感を何時まで持てば良いのか・・・」

「・・・何時までも持てば良いのではないか？」

「何？」

ラクスは男の言葉に戸惑う。

男は続ける。

「確かに師を殺されても怒りを抱くのは、無理もない・・・だが、お前は後悔をして反省している以上は、その罪悪感を胸に二度と引き起こさないと、抱いていけば良い・・・」

男はそう言うと、立ち上がって手を伸ばす。

「さあ、立て。もう迷いは無いのだから？」

ラクスは男の元に手を伸ばすと、引き上げられる様に立たされた。

ラクスはこの男の器の広さに咄嗟に聞いた。

「お前は何者なんだ・・・？」

「わしか？わしはガロン。この暗夜王国を治める王だ」

僅かな出会いの中で、ラクスはガロンに仕える切っ掛けになった出来事だった。

「と、言った所だ」

「本当に壮絶な幼少期だったんですね・・・」

「そうだな・・・あの時の事はベルカとはもう和解している。ある意味、ガロン様との出会いは良かったのかも知れないな・・・ん？もうこんな時間か。そろそろ戻って当番をするよ」

ラクスはそう言うと立ち上がる。

「お話を聞かせてくれて、ありがとうございます。また、お話を聞かせてください」

「ああ・・・考えておきますよ」

ラクスはそう言うと、退出した。

昏き企み

カムイ達とラクスは王城へ帰還する為に、移動していた。

「やつと、ここまで戻ってきましたね」

「うん。私も流石に疲れちゃったよ」

「はい。無理をさせてすみませんエリーゼさん。でも、後、三日で着きますから、それまで頑張ってください」

カムイ達とラクスは歩き出すと、エリーゼは息を荒げて始めた。

異変に気づいたカムイ、アクアそしてラクスはエリーゼの元に行く。

「どうしたのですかエリーゼさん？」

「何だか・・・目の前が回るの・・・」

「何だと？」

ラクスはエリーゼの額に手を当てるととても高い熱で、次に腕を見ると発疹が現れている。

「これは・・・！」

「何ですかラクスさん？」

カムイがラクスに質問すると、変わりにアクアが応える。

「エリーゼは恐らく島国特有の風土病にかかったのよ。このまま、ほっておけば命に関わるわ・・・」

「命に・・・!?!」

「この病を治すには特別な魔法薬が必要となる。サイラス！確か近くにマカラス宮殿があったな？」

「ああ。マカラス宮殿は確かに近くにあるぞ」

ラクスはそれを聞いてエリーゼを抱き上げると、馬に乗る。

「急ぎましょう。残された時間はあまりありません」

「はい！」

くマカラス宮殿く

カムイ達とラクスが急いで、マカラス宮殿にやって来ると、何処からともなく白夜兵が現れた。

「何故だ。何故、白夜軍が・・・！」
「カムイ」

カムイ達とラクスが声の聞こえた方向を見ると、そこらら白夜の王子リヨウマがいた。

「リヨウマさん」

「久しぶりだなカムイ。国境で別れて以来か？すっかり暗夜王国の戦士がいたについたな」

「カムイ様お下がりください・・・」

ラクスはディアブロスを抜いてリヨウマと対峙する。

「その顔がお前の素顔かラクス」

「今はどうでも良い事だ。通してくれないか？エリーゼ様が急病なんだ。戦いは後にしてほしい・・・」

ラクスそう言うと、リヨウマに威圧するがリヨウマも負けずにラクスを威圧する。

両者の威圧のぶつかり合いは、回りにいる者を怯ませるのに充分な物だ。

「・・・どうやら虹の賢者の力を得ているのは、本当の様だな。」

「お前達、暗夜を倒す為に身につけたら力だ。それと、カムイ。ラクスが抱えている暗夜の王女を助けたくば、白夜王国に戻ってこい」

「白夜王国に・・・！」

リヨウマのエリーゼを助ける条件は、カムイが白夜王国に戻る事だった。

ラクスは、怒りを表す様に顔を歪める。

「ほお、白夜も地に落ちたものだ。病人を人質変わりにカムイ様を白夜に連れ戻そうとはな」

「何とでも言え、決めるのはカムイ。お前だ」

リヨウマがそう言うと、カムイは覚悟を決めてリヨウマに言う。

「・・・それだけではできません。私はあの国でやる事があるんです」

「・・・なら、直接、刃を交えるしかないな」

リヨウマはそう言うと、雷神刀を構える。

ラクスもディアブ羅斯を構えようとした時、カムイに止められる。「待つてください。ラクスさん・・・貴方は先にエリーゼさんを連れて行ってください」

「しかし・・・！」

「ラクスさんは今、エリーゼさんを抱えている時に戦うのは無理です。だから、先に行ってエリーゼさんを助けてください」

カムイの懸命な言葉にラクスは暫く、沈黙したが頷いた。

「分かりました・・・でも、無理はしないでください」

「分かっています」

カムイの言葉を聞いたラクスは、馬を走らせて突破を図る。

「奴を食い止めろ！」

リヨウマの叫びと同時に、白夜兵が一斉に掛かってくる。

ラクスはエリーゼを落とさない様に動き、ディアブ羅斯を白夜兵に振るう。

「な、何て奴だ・・・」

「怯むな！行けえ！」

「やはり、敵が多いか・・・」

ラクスがディアブ羅斯を振るいながら進むも、白夜兵は東になって掛かってくる。

ラクスは中々進めずにいた時、手裏剣が白夜兵に突き刺さる。

「ツ!?!お前は・・・スズカゼ！」

「はい」

手裏剣を投げたのは、七重の塔の戦いで退いたスズカゼだった。

何故、スズカゼが自分を助けたのか分からなかった。

「何故、助けた？」

「はい。私はカムイ様の戦争を終わらせると言う、言葉を聞いて暫く、考えた後、私はカムイ様に着いて行きたいと思いついてここまで来ました。が・・・助けたのは貴方には借りがありますのでその借りを返したと言おう所です」

「借りか・・・まあ良い。今は誰だろうと助かる。突破するぞスズカゼ

！」

ラクスはそう言うと、再び前進する。
スズカゼの支援もあり、着実にマカラス宮殿に入り込めそうだった。

「行かせはせん・・・」

「くっ！また、お前か・・・サイゾウ！」

「カゲロウ。お前はスズカゼに当たってくれ。俺は・・・奴と戦う」

サイゾウはそう言うと、ラクスに手裏剣を構える。

「くそ・・・このままでは、エリーゼが」

ラクスはディアブロスを構えサイゾウと対峙する。

そこに、馬の蹄の音が聞こえラクスは振り替えると、派手な髪色をした、ソシアルナイトが槍を片手に突っ込んできていた。

ソシアルナイトは、サイゾウの元に行くと槍を突き出すが無視された。

「あ、避けられちゃったの」

「お前は、ピエリか」

「そうなの！」

マークスの臣下ピエリが参戦。

更にまた、別の人物が走ってきた。

「ちよつと待ってよ、ピエリ！」

「ラズワルド」

「あ、ラクス・・・殿だよ？そうだよ僕は、ラズワルドだよ」

マークスの臣下ラズワルドも加わって、形勢は完全に逆転した。

サイゾウは身構えて、一人も通さないと云う雰囲気を出している。

「ラクス殿。先に行ってください。ここは僕達が引き受けます！」

「そうなの！早く行くの！」

「・・・ありがとう」

ラクスはそう言うと、馬を走らせて突っ込んでいく。

「行かせん！」

「させないよ！」

サイゾウの手裏剣が、ラクスに襲い掛かるがラズワルドが防ぎ、ラ

クスはサイゾウ、カゲロウの二人を抜いた。

「もう少しです・・・あと、もう少しですから！」

ラクスがそうエリーゼに語りかけながら馬を走らせて、遂に突破した。

「・・・逃がしたか」

「サイゾウ。もはや、形だけだが、今回は我々の敗けだ・・・」

「・・・退くぞ」

サイゾウはそう言うと言姿を消し、カゲロウも続く。

安静

↳エリーゼside↳

私は王都に帰ってる途中、気を失って気がつくとき、知らない天井があった。

私は、回りを見ると、ラクスが椅子に座って居眠りをしている。

「ラクス……」

「ん……気がついたのでですか？」

「うん……」

私が返事をするとき、ラクスは私の額に手を当てて笑顔になる。

私はラクスの笑顔がとても、優しいと思える。

「熱が下がりましたね。カムイ様達をおよびしますが、何か欲しいものは？」

私は首を横に振ると、ラクスは笑顔で退出していく。

私は天井を見ながら、ぼんやりとラクスの笑顔を思い出していた。

カムイお姉ちゃんと同じくらいの笑顔……私は顔が熱くなるのを感じて胸が、ズキズキした。

↳side終了↳

ラクスは、カムイ達を呼ぶとき、エリーゼの寝ている部屋にやって来た。

「気がついたんですね、エリーゼさん」

「うん。心配かけてごめんね」

「いいえ……私がもっと早くに気づいてあげていたら」

カムイとエリーゼの微笑ましい光景に、ラクスは自然と笑みを浮かべる。

その顔を見たとき、ピエリは指を指して言う。

「あーラクスが笑ってるの！珍しいの！」

「お、おい……」

「へえ、貴方も笑う事があるのね？」

「カミラ様まで……」

ピエリの次はカミラにからかわれる様に言われて、ラクスも含め全

員その場で笑いあつた。

「(良かった・・・エリーゼ様が無事だったからこそ、この笑顔があるんだな・・・)」

ラクスは笑いながら、エリーゼを助けられて良かったと思つた。

だが、ラクスはエリーゼが熱い視線でラクスを見ている事は気づかなかつた。

「暫くエリーゼ様は安静にしていなくてはいけないから、暫くここに滞在ですね」

「本当にごめんね・・・」

「いや、仕方ないですよ。病気ですから」

ラクスはそう言うと、苦笑いをする。

「しかし、お父様はどう出るか・・・」

「それなら私にお任せください。もし、ガロン様が何かを言われれば、説き伏せて見せます」

ラクスは真剣な顔でカムイにそう言うと、カムイはラクスに礼を言つた。

「ありがとうございます。ラクスさん、エリーゼさんも目が覚めた事ですし、少し休んでください。ずっと、徹夜で看病をしてくれたのですよね?」

「はい。では、少し休ませて貰います」

ラクスは一礼して退出した。

ラクスが歩いていると、一羽の伝書鳩が飛んできた。

ラクスは、伝書鳩を腕に止めると、伝書鳩に結んである文を取り、読む。

「これは・・・!」

ラクスが読んだ内容は、シュヴァリエ市場で発生した反乱の鎮圧命令だつた。

秘めた想い

反乱の鎮圧の任務を受けた、カムイ達はマイキャツスルで戦いの準備をしていた。

エリーゼはさつきまでの元気の無さが嘘の様に無くなり動いている。

「・・・よし、後は補給品だな」

「ラクス」

「ん？どうしたのベルカ？」

ラクスは急に来たベルカに、問うとベルカは黙ったままにいる。

ラクスはベルカの不穏な空気に、ラクスはベルカが何かする為に来たのだと、推測する。

ラクスとベルカが、無言で立ち尽くしていると、ベルカの口が開いた。

「・・・貴方の暗殺依頼がきた」

「ほお・・・それで私を殺しに？」

「・・・違う、ここへ来たのは私に近づいて欲しくない事を言いに来た」
ベルカの言葉に、ラクスはベルカの心中を察する。

ベルカは依頼を受ければ何の戸惑いもなく殺せる。

だが、ベルカはラクスを殺したくは無いから近づいて欲しくないと、言いに来たのだとラクスは考え、溜め息をついて、ベルカに近づいていく。

「来ないで・・・！」

ベルカは一步、退いた所をラクスは近づき、ベルカの腕を掴んで引き寄せると、抱き寄せる。

「馬鹿か、お前は・・・私がお前を拒絶する様な事ができると思っているのか？お前がどんなに拒んでも、私はお前の側についてやる・・・！」

「・・・ラクス」

「いったい誰だ・・・お前を辛い思いをさせた奴は？」

ラクスはベルカを抱き寄せながら聞くと、ベルカは主犯は誰かを言った。

「・・・マクベス。貴方を殺してガロン様の腹心になるつもりよ」

「成る程な・・・ベルカが相手なら私は戦えず死に果てると考えたか。浅はかな奴だ」

「ごめんなさいラクス。私は・・・」

ベルカはそう言うのと、涙を流して謝る。

ラクスは、ベルカを背中を撫でながら励ます。

「良いんだ・・・お前が間違っではない。お前に対して酷い依頼をした奴が悪いんだからな」

ラクスは、マクベスを完全に敵と判断した瞬間だった。

「泣き止んだか？」

「ええ・・・」

ベルカはそう言うのと、顔を赤らめる。

ラクスはそんなベルカを見て、ラクスは自分のした事を思い出し、赤面する。

「す、すまない・・・急に抱き締めてな」

「・・・悪くなかった」

「え？」

「・・・悪くなかった。貴方に抱き締められるのは」

ベルカがそう言うのと、ラクスを見つめる。

ラクスは今まで、幼馴染みとしか見ていなかった、ベルカが魅力的に見え顔を更に赤く染め上げた。

「・・・私は、ずっと昔から貴方の事が・・・」

”好きだった”

ラクスはベルカの告白とも、取れる言葉を聞いて、顔を赤く染めつつも、返事を返す。

「・・・私も好きだった。幼馴染みとして、過ごしてきたが、今更になつてお前の事を、好きだと気づいた」

ラクスは照れながらそう言うのと、ベルカも照れながら笑う。

反乱鎮圧く前編く

くシュヴァリエ市場く

「ふう……ここがシュヴァリエ市場ですか」

カムイ達とラクスは、シュヴァリエ市場にやって来た。

シュヴァリエ市場は、反乱らしい面影を見せておらず静かだった。

「ええと……見たところ所、今は反乱らしき活動は起きていない様ですな」

「そうねえ……今はアジトにでも戻っているのではないかしら。私達もそろそろ休んで明日に備えた方が良いかもしれないわ。市場内には古城があるようだから、今日はそこで休息を取りましょう」

カミラの提案にカムイは了承する。

ラクスも懸命な判断だと、考えていたが市場の様子がおかしいのだ。

まるで、獲物を待ち構える様な罠の様に鋭い殺意が見え隠れする。

「……」

「あの、ラクスさん？」

「ん？何ですか？」

「どうしたのですか？黙り込んでしまつて？」

カムイの問いに、ラクスは再び市場を見たが殺意は無く、ラクスは気のせいかと考える。

「……いえ、何でも」

ラクスがそう言い掛けた瞬間、何者かが歩いてくる。

暗闇から現れたのは、タクミだった。

「……来たね、カムイ」

「え？」

カムイは前を向き見ると、タクミが風神弓でカムイに攻撃を加えてきた。

カムイに放たれた風神弓の矢を、ラクスはディアブロスで防ぎ、前に出てカムイを守る。

「カムイ!？」

突然、カムイに攻撃が加えられた事で、カミラは驚いていると、タクミは悔しそうな顔をする。

「ふん・・・惜しかったな。お前が邪魔をしななければ、頭に当たっていたかもしれないなかったんだけど」

「タクミさん・・・！やはり、貴方が・・・」

カムイは夜刀神を構えて、タクミに叫ぶ。

カミラは今にも飛び掛かりそうな、カムイを止める。

「駄目よ、カムイ・・・！危険だわ、下がっていなさい」

「ふーん。そいつを後ろにやっていいの？そっちにも僕の兵達がいっぱいいるんだけど」

タクミがそう言うと、確かに後ろに多数の殺気が感じられると、ラクスは思った。

カムイは落ち着いたのか、タクミを説得し始める。

「止めてください、タクミさん！私は白夜兵と戦うつもりはありません！ただ、シュヴァリエの反乱を収めに来ただけなんです。ですから、無駄な争いは・・・」

「チツ・・・やはり、お前達は、反乱を抑え込むつもりなのだ。ならば尚更、退くけにはいかない」

「！貴方は？」

カミラ達とラクスの前に現れたのは、深紅の鎧を着る女だ。

「私はクリムゾンだ。シュヴァリエで反乱をやっている」

「悪いけど、お前達が暗夜王国を出た時から、ずっと後を付けさせて貰ってた。同胞である白夜王国の兵に密告する為にね」

「・・・そういう事。とんだ裏切り者ね」

カミラが機嫌悪く言うと、タクミは言い返す。

「はあ？裏切り・・・？面白い事を言うね。クリムゾンはカムイと同じ事をしただけだよ。他国の者と手を組み、自国の民を陥れた」

「ちよっと待ってよ！カムイお姉ちゃんはそんな事をしてないわ！」

「鬱陶しいなあ・・・」

タクミはそう言うと、エリーゼに風神弓を向けて放つ。

エリーゼは、反応できず立ち尽くしていると、ラクスが咄嗟に、前

に出て身体をはってエリーゼを守った。

「ぐう！」

「ラクスさん！」

「ラクス！」

「ぐッ・・・大丈夫だ」

エリーゼを庇って負傷したラクスにカムイは叫ぶと、ラクスは大丈夫だと言う。

タクミはその光景を見て何とも思わないのか、吐き捨てる様言う。

「目障りなんだけど・・・さっさと死んでくれないかな？」

「僕やクリムゾンが望んでいるのは、この国を暗夜王国から解放する事・・・そして、暗夜兵の排除だ。僕達と戦いなよ

カムイ。ガロン王もそう思っているんだろ？僕達が死ねばいいって思っているんだろ？」

「違います！違うんです、タクミさん！殺し合わなくても、わかり合う事はできます！お願いですから、話を・・・」

「うるさい!!」

カムイの話の途中でタクミは急に叫びだした。

カムイ達とラクスはタクミの行動に驚かされた。

「今度こそあんた達を倒して、白夜王国に平和を取り戻す！全軍、戦闘準備!!暗夜王国の兵を壊滅せよ！」

「タクミさん・・・！」

「殺してやるよ・・・そうだよ・・・お前達さえ殺せば・・・そうすればきつと・・・この頭の痛みは、消えるはずなんだ・・・」

「ん・・・？」

ラクスはタクミの微妙な変化に気付いた。

明らかに何か抱え込んでいる様で、苦痛とも取れる表情もしていた。

「(いったいタクミの何を戦いに駆り立てている・・・)」

ラクスは疑問に思いながらも、ディアブロスを構えた。

「タクミ王子。貴方はそこまでして戦いを望むのか？」

「黙れ！父上を殺した暗夜王の犬が!!」

タクミはそう言うと、風神弓を構えて射る。

ラクスはディアブロスを振るって、風神弓の矢を弾いた。

「風神弓の矢を!?!」

「……この剣は神器に匹敵する宝剣。お前が神器を持っていても、簡単には殺せないと思え。それに私には、大事な妻もいるんでね」

そう、ラクスは言うとしてディアブロスをタクミとクリムゾンに向ける。

ラクスの威圧は、タクミとクリムゾンの二人にプレッシャーを与えた。

「くッ、やはり父上を殺しただけはある……」

「私でも分かる……こいつは、本物だ」

二人は身構えて、ラクスと対峙する。

ラクスは二人の行動を見て、一言告げる。

「さあ、始めようか？」

その言葉で、シユヴァリエでの戦いが始まった。

反乱鎮圧く後編く

カムイとタクミ、クリムゾンの戦いは開戦し、ラクスはまず、タクミに斬り掛かると、クリムゾンが竜に乗って斧でラクスの攻撃を防ぎ、タクミがラク스에 風神弓で射る。

「あまいな」

ラクスは、矢を避けると、再びタクミに斬り掛かる。

タクミは、ラクスの攻撃を避けると、クリムゾンが斬り掛かるが、クリムゾンは防ぐ。

「くッー！」

「どうした、反乱兵？この程度で私を倒そうと、言うのならあまい考えだったな」

「ッ!?言わせておけば!」

クリムゾンは斧で斬り掛かるが、ラクスは少し避けてディアブロスを振るう。

「ぐわあ!」

クリムゾンはまともに、ラクスの攻撃を受けて怯む、ラクスはもう一撃を入れようと、クリムゾンに迫ると、矢がラクスに向かって飛んできた。

ラクスはディアブロスで弾き、矢が飛んできた方向を見ると、天馬に股がり弓を構えながら微笑む女がいる。

「あら、弾かれてしまったわね?」

「貴様は?」

「私はユウギリ。さて、貴方はどんな声で泣いてくれますか?」

「・・・お前、Sか何かか?」

ラクスは顔をしかめながらユウギリにそう言う。

ユウギリは意味が分からないと言う様な、顔で見てくる。

「まあ良い・・・それよりも囲まれたか」

ラクスがそう言うと、前にユウギリ、後ろにタクミ、クリムゾンと完全にラクスを狙って囲んでいる。

「やっと、父上の仇が取れるよ・・・」

「これはお前の策か？中々、上出来だな・・・」

ラクスは、剣を肩に置きながらタクミにそう言うと、タクミは苛立ちを見せる。

「まだ、余裕ぶってるんだ」

ラクスはタクミの言葉に、不適に笑う。

「余裕ぶってる、か・・・」

「何がおかしい？」

「お前達にそう見えるのは、致し方ない。だが、別に私自身は余裕を持ってはいない。だが・・・」

ラクスは、ディアブロスの剣先をタクミに向ける。

「私には仲間がいる。その仲間がいる時、私は負けはしない」

ラクスがそう言うと、白夜軍の伝令がやって来る。

「申し上げます！暗夜軍の猛攻で、軍が押されています！」

「何だって!?!」

「言ったろ？仲間がいる限り・・・お前は私どころかカムイ様にも勝てない」

「ラクスさん!」

遠くからカムイの声が聞こえ、タクミは振り替えると、そこにはカムイ達が、突き進んで来ていた。

「くそ！せめてお前だけでも!!!」

「無駄だ」

タクミはラクスを風神弓で射ようとしたが、先にラクスに攻撃され、斬られる事はなかったが吹き飛ばされた。

タクミは、立ち上がって風神弓を構えようとしたが、ラクスのディアブロスが首もとに突き付けられる。

「終わりだ。退け・・・」

「まだだ・・・まだ負けてはいない!」

「いや、お前は負けた・・・この現実を受け止めて、退け」

次は無い。

ラクスが退け、と言った言葉の裏にそう感じ取ったタクミは回りを

見ると、既にユウギリは撤退、クリムゾンは取り押さえられている。完全に勝敗はカムイの元にある。

「・・・次に会った時は殺す」

タクミはそう言うと、走って退却する。

「ラクスさん!」

「カムイ様。ご無事でしたか」

「それは私の台詞です!一人で何で突っ込んで行くのですか!心配したのですよ!」

「す、すまない・・・」

ラクスはそうカムイ謝ると、回りを見る。

シュヴァリエは静かな街に戻っており、ラクスは反乱鎮圧がなされた、と、安堵した。

「何はともあれ反乱は終息した。王都へ」

「がっはっはっはっは!殺せ!」

ラクスの言葉を遮り、割って入ってきた野太い声。

ラクスは、声ができる方向を見ると、そこには燃え盛る家と民の死体、そして、暗夜兵がシュヴァリエの民を襲い掛かっている光景だった。

「何だ、これは!」

ラクスは思わず叫んだ時、ラクスは目の前にガンズが高笑いしながら指揮をしている姿を見た。

「貴様は、ガンズ!」

「んお!?ら、ラクス殿!」

「貴様・・・今、自分のしている事が分からないのか!」

「分からなくはないですよ。ですが、ガロン様の命なので・・・」

ラクスはガンズの言葉に耳を疑った。

ガロンが直接、ガンズに命じてシュヴァリエの民を襲っているのかと、ラクスは愕然としてみると、暗夜兵の一人が幼い少女を殺そうとしている所を見て、ラクスは思わずディアブロスを抜いて防いだ。

「ら、ラクス様!」

「子供まで殺す必要はあるのか?これがガロン様の命でも私は許さんぞ・・・」

ラクスがそう睨むと、回りで虐殺していた兵の動きが止まった。

ラクスは、暫く立ち尽くしていると、背中に小さな衝撃が走り見てみると、助けた少女が涙を流しながら憎しみに満ちた目でラクスを睨んでいる。

「人殺し！お父さんとお母さんを返してよ！ねえ返してよ！」

少女は涙を流しながら、ラクスに訴え続け、ラクスはただ、拳を握り締めて少女の責めに耐えるしかなかった。

「…無理だ。お前の両親は死んだ。それは、私の責任だ。すまない、と言っても許さなくて良い…憎めば良い…だが、自分の手は汚すなよ」

ラクスは少女にそう言うと、ガンズに視線を向けディアブロス片手に迫る。

「ラクス殿、何を!？」

「お前には今回の虐殺失敗の責任を取って死んでもらう。お前は民の抵抗にあつて兵を無駄に死なせた事にしてやる」

ラクスの目は明らかに異常な殺意があり、ガンズは震え上がった。

「止めてくださいラクスさん！」

「何故です。奴は…！」

「分かっています。でも、ここでガンズを殺せば貴方が処刑されてしまいます！貴方にはベルカさんと言う、大切な人が待っているんですよ！」

「ッ!?!?!」

カムの言葉にラクスはうつ向くと、ディアブロスを収める。

シュヴァリエの反乱は火と血の街と成り果てて終息する。

父と子

〈秘境〉

「……いつもそうよ。私は父さんと比べられてばかり。何で、誰も私を見てくれないの……」

一人の少女が、暗闇の中で、そう呟く。

嘆きとも取れれば、怒りとも取れる言葉を呟いた。

「ここがラクスさんの娘、レーラさんがいる秘境ですか？」

「はい。だが、レーラがいないな……いつもなら来ても良い頃なんだが」

ラクスは疑問に思っていると、水色の髪をサイドテールに結び、ソシアルナイトの鎧を着た少女がやって来た。

「……お久しぶりです。父さん」

「ああ。久しぶりだな、レーラ」

ラクスは微笑むが、レーラは全く笑わずそれ所か敵意を出している。

ラクスはその敵意を感じると、疑問を浮かべレーラに聞く。

「どうしたんだ？そんなに殺気だつて」

「うるさい……」

「ん？何だっ」

「うるさいって言ったのー！」

レーラはラクスに向かって叫んだ。

これには、ラクスとカムイは驚く。

「……いつもいつも、私は父さんと比べられてばかり……もう、嫌よー！」

「おい！そっちに行くな！」

秘境の外へ続く道へレーラが走って行ってしまいラクスが慌てて追いかける。

「・・・何で、あんな事を父さんに言ってしまったのかな」

レーラは一人、ラクスに対して言ってしまった事を激しく後悔した。

レーラは落ち込みながら、自分が秘境の外へ出てるとは気付かず歩いていると、巨体な緑の肌をした化け物ノスフェラトウが現れた。

「何!?この化け物は?!」

「グオオオオオ!」

ノスフェラトウは腕を降り下ろしてレーラに襲い掛かった。

レーラは咄嗟の事で反応できず、立ち尽くしている。

「レーラ!」

その言葉と共に、ノスフェラトウは斬られ倒れた。

レーラは見てみると、そこにはラクスの姿があった。

「大丈夫かレーラ!」

「は、はい・・・」

レーラは恐怖の余り、へたれ込んむ。

「はあ・・・全く。いきなり秘境を飛び出したから焦ったぞ」

「え?秘境を出てしまっていたのですか?」

レーラの素っ頓狂な言葉に、ラクスは額に手を当てて呆れる。

「全く、秘境を出た事すら気づかない位に動転していたのか・・・まあ、後で説教はするが。その前に・・・」

ラクスはディアブロスを構えると、多数のノスフェラトウが現れた。

「こいつらを片付けてからだ・・・」

「ラクスさん!」

後からカムイがやって来て、ラクスの隣に立って夜刀神を構える。

「申し訳ございませんカムイ様。お手数をお掛けします」

「いいえ、それよりも今はノスフェラトウを倒しましょう」

「はい」

カムイとラクスは、レーラを守りつつノスフェラトウを倒して行く。

ノスフェラトウを相手に戦う二人に、レーラを未だにへたれ込みな

がら見ていた。

「(父さんだけでなく、カムイ様まで迷惑を掛けるなんて……私はやっぱり……!)」

「レーラ！」

レーラが自分を責めていると、ラクスがレーラを呼んだ。

「お前が何を考えているか分からんが、そんな顔をするな」

ラクスがそう言うと、涙を流しているレーラがいた。

「お前を必ず守ってやる……だがら、泣くな」

「父さん……」

レーラはラクスの背中を見ながら、覚悟を決めて立ち上がる。

レーラは立ち上がると、同時に剣を抜いてラクスの隣に立った。

「ん、何をしているレーラ？」

「……私も戦います。いえ、戦わせてください！」

「……無理をするなよ」

ラクスはレーラにそう言うと、ノスフェラトウに向かっていく。

ラクスの剣技は、ノスフェラトウ相手に圧倒する。

レーラも受け継がれた物なのか、ラクスの実力までとはいかないが、鋭い剣技を見せた。

「見ない内に随分と上達したな」

「父さんがいない間、鍛練を続けていましたから」

ラクスとレーラは背中を合わせて後ろを取られない様に、ノスフェラトウを倒していく。

そして、ノスフェラトウを殲滅し終わると、ラクスは腕を組ながらレーラの前に立っている。

「それで、今回の奇行に走った訳を言ってくれるな？」

「……私はいつも秘境で父さんと、比べられてきました。私は、何をしても父さんの娘だからとしか、見てくれなくて……それで」

「今回の事になったのか？」

レーラは頷くと、ラクスは溜め息をついて、レーラの頭を撫でた。

「馬鹿だよお前は……お前はお前だろう？私の娘だからと言っても、お前のやり方がある。私はそれを尊重したいと思っている」

「うう、父さん・・・」

「はぁ・・・泣くなよ。全く」

泣き続けるレーラをラクスは微笑みながら、呆れる。

カムイも二人の親子に微笑む。

その後、泣き止んだレーラはラクスに提案した。

「父さん。私も一緒に戦わせてください」

「・・・何故だ？」

「私は今回の事で、自分の未熟さを痛感しました。私は父さんの元で強くなつていきたいんです！」

レーラの真剣な目に、ラクスは暫く考えてから口を開いた。

「分かった・・・だが、お前が弱音を吐けば秘境に戻すからな？」

「はい！」

ラクスはレーラの返事に微笑みながら、内心では。

「(ベルカにどう説明しようか・・・)」

と、考えるのだった。

ミューズ公国

レーラを仲間として加えた後、ラクスはベルカへの説明に追われていた。

安全を願って、秘境で育てたのにラクスが連れてきた事に、ベルカは怒りの形相で睨むのだからラクスは冷や汗物だった。

だが、レーラが自分でベルカに意思を伝えると、レーラが軍に着いて行く事をベルカは了承する。

「はあ、疲れた・・・」

「大丈夫ですか、父さん？」

「ああ・・・それにしても彼処まで怒らなくても」

ラクスは、ベルカの静かな説教を思い出して、更に疲れを出した。

「まあ、良い。私は次のミューズ公国に行く準備の為にカムイ様の元に行ってくるから、見てなくても鍛練をしておけよ？」

「はいー」

ラクスはレーラの返事を聞くと、カムイの元へ足を運ぶ。

「(それにしても、多くの者が結婚したな・・・)」

ラクスとベルカの他に結婚した者がいた。

図で書くと、こうだ。

サイラス×エリーゼ

ハロルド×エルフィ

スズカゼ×ニユクス

この組み合わせで、結婚し、子供がいる。

それに、シャーロットとブノワと言う兵士も加わり、ラクスは頼もしいと思っているが、シャーロットはラクスが結婚してのにも求愛してきたり(結婚していると気付かず)、ブノワは臆病な所がありラクスはどうにか改善できないかと、頭を悩ます。

ラクスは結婚した者へ今度、祝いの品を送ろうと考えているとカムイの元に着いた

「失礼します」

ラクスはミューズ公国に向かう為の準備の再確認をする為、カムイ

の部屋へと入っていくのだった。

〈ミューズ公国〉

歌と歌劇の楽園であるこの国に、カムイ達とラクスがやって来ていた。

「あの、今回は城に戻らなくて良いのですか？カムイ姉さん」

「ええ。お父様とは、このミューズ公国で落ち合う手筈となっているの」

「この国で？でも、お父様がこんな所まで出て来るなんて、危険ではないのですか？」

カムイが疑問を浮かべると、ラクスが応える。

「それは大丈夫です。ガロン様は定期的に訪れています。が今まで大きな問題が起きた事は、一度も無いですから。それに、ミューズ公国は中立の立場を取っている為、この地での戦闘行為をすれば、国の信用に関わりますからね」

ラクスがそう応えると、カムイは安心した様に笑顔になった。

「そうですか。それなら安心ですね」

「気を付けなよ？それでも警戒は怠らない方が良い。中立であるって事は、いつ白夜の者が現れてもおかしくないんだから」

そう言われて、カムイ達とラクスは振り替えるとそこにはレオンがいた。

「レオンさん……！」

「久し振り、カムイ姉さん」

「良かった……レオンさんもここにきていたのですね……！お父様からの任務は？」

「ああ。大方、終わったより今回の父上の警護が滞りなく終われば、後は好きにして良いってさ。だからこれからは、僕も一緒に戦うよ」

「ありがとうございます、レオンさん」

レオンは頷くと、ラクスの方を見る。

レオンの目は明らかにラクスを信用した物ではないと、ラクスは感じた。

「お久し振りです。レオン様」

「僕はお前を完全に信用した訳じゃない。でも、カムイ姉さんをここまで支えて来たからには、ある程度は信用しておくよ」

レオンはそう言うと、再びカムイの方を見る。

「そろそろ、父上がここに到着される頃だ。僕は先にショー会場に向かう事にするよ」

「ショー会場？」

カムイがそう言うと、レオンは応える。

「そうか・・・カムイ姉さんは初めてここに来るから知らないんだね。ここミューズ公国のアミュージアは歌と踊りのショーが盛んなんだ。父上が来ると、盛大なショーを開いて歓迎してくれるんだよ」

「へえ、そうなんですか」

「せっかくだから姉さんも楽しむと良い。戦士にも休息は必要だからね。ただし、あまり羽目を外しすぎない様に。そるじゃ、また後で！」

「はいー！」

レオンはそう言うと、任務に戻って行くの見送った。

「・・・とは言ってもシュヴァリエの事があつてすぐに、ショーを楽しむ気になんてとでもなれませんね。・・・お父様はどうお考えなのでしょう。もし、時間があるならガンズさんに下した命令について聞いてみるも言いかもしれませんね。あんなやり方、私にはやはり間違ってくると思えません・・・」

「(カムイ様・・・)」

カムイの言葉にラクスは心配そうに見るがどうしようもできない。

悪魔で、あの問題はカムイの問題なのだ。

ラクスがどうこうする訳にもいかない。

色々な不安の中でカムイ達とラクスはアミュージアへと足を踏み入れるのだった。

「へえ、ここがアミュージアの会場ですか・・・立派な所ですね」

「カムイ姉さん、こっち」

「ああ、レオンさん。無事に会えて安心しました。人が多くて、探すのにも一苦労ですよ」

「良いタイミングだよ、姉さん。ちょうど父上が到着された所なんですよ」

レオンはそう言うと、後ろを向く。

「父上、カムイ姉さんが参りました」

レオンはそう言うと、無言で立つガロンがいた。

「お父様・・・」

「久し振りだなカムイ。シュヴァリエの件は耳に入っておる。反乱兵のみならず、武器を持たぬ町の者達まで根絶やしにしたそうだな」

「あの、お父様。その件に関して何ですが」

「よくやった、カムイ。」

「え・・・」

カムイが疑問を聞こうとした時、ガロンはカムイを褒めた。

「お前の部隊がシュヴァリエ公国を壊滅させたという報せを聞いて、とても誇らしく思ったぞ。反乱の芽は早い内に摘んでおかに限る。お前もやつと、わしのやり方に賛同する様になったのだな。聞けば、始末される反乱兵を楽しそうに眺めておったそうではないか。暗夜王族らしい振る舞いであったと、ガンズも褒めておった」

ガロンの言葉にカムイは慌てて否定しようとした。

「そんな・・・ち、違います！何故、ガンズさんはそんな事を・・・！お父様。実はその事について、折り入ってお話したい事が・・・」

「カムイ様。ショーが始まる様ですよ。そろそろ席に着いてください」

「マクベス・・・!?!」

「おや、ラクス殿も来ていらしゃったか？貴方もショーを楽しんで行かれてください」

マクベスはそう言うと、ガロンを連れて特等席に向かっていく。

ラクスは拳を強く握りしめる。

「(貴様は絶対に許さんぞ・・・マクベス)

ラクスは表情を変えず、そう思った。

ベルカを利用した暗殺を許さないと、ラクスは強く思うのだった。

楽園の歌声

カムイ達は歌姫達のショーを見る為に、席に着いていた。ラクスはベルカ、レーラの三人でショーを見る事にした。

「父さん。ショーが楽しみですね！」

「ふ、そうだな。もう始まるから静かにしておくんだぞ」

初めてのショーにレーラは笑顔を浮かべ、ラクスとベルカは微笑みながらその姿を見ている。

やがて、ショーが始まり黒い服装をした歌姫が現れた。

ラクスはその歌姫を見て疑問を感じた。

「ラクス。始まったわ」

「・・・ああ、そうだな（誰かに似ているな）」

ラクスがそう思っていると、歌が始まった。

歌姫の歌声は透き通る様に美しく、そして美しく舞う姿にラクスはつい聞き惚れてしまった。

歌姫は歌い、舞いながら魔法なのか水の様な物を広げ更に引き立たせる。

「綺麗・・・」

レーラは目を輝かせてそう言う。

確かに綺麗な物ではあったがラクスはふと、特等席を見ると、ガロンが苦しんでいた。

「なッ!？」

ラクスは咄嗟に立ち上がり、歌姫を見たが何処にもおらずその変わりりに、舞台の奥から白夜兵が現れた。

「白夜兵・・・!?!成る程、事の発端は奴等か」

「命が惜しければここを退け！我々は戦争にしようりする為、今ここで・・・暗夜王ガロンの首級頂戴いたす！」

「何だと・・・?！」

ラクスは白夜兵は中立の立であるミューズ公国内でガロンの首を取ろうとしているのだ。

ラクス達の席から少し遠くにいるカムイとレオンもかなり驚いて

いる。

「致し方ないか・・・ベルカ、レーラ。戦闘の用意をしておくんだ。奴等を追い払うぞ」

「ええ・・・」

「せつかくの父さんと母さんとの時間を、邪魔した報いを受けさせてあげます・・・！」

ベルカとレーラは武器を手に愛機に跨がる。

白夜軍との戦いが勃発し、白夜兵が次々と突き進む。

「はあ！」

ラクスは、接近してくる白夜兵を倒していくが後ろを敵の矢がラク스에飛んできたが、ベルカが防いだ。

「すまないベルカ」

「次は気を付けて」

そう言うと、斬り掛かってくる白夜兵を斧で斬る。

レーラは馬を走らせながら、上手く戦い白夜兵を蹴散らしている。

「流石が私達の娘だな」

「負けてられない」

ラクスとベルカはレーラの戦いを見ていつも以上に戦い、白夜兵に恐怖を与えた。

「こ、こいつら強すぎるー！」

「ひいッ！」

「ええい！相手は三人だ押しきれー！」

指揮官の言葉を聞いても白夜兵は誰一人行こうともしない。

そんな状況の中で、遠くから走ってくるカムイ達の姿が見えた。

「皆さん大丈夫ですか！」

「ああ、まだ余裕がある位に大丈夫だ」

ラクスが余裕そうにそう言うと、カムイは微笑んで安堵した。

「良かった。では、白夜軍を共に倒しましょう」

「ふ、言われなくても」

ラクスはカムイの横に立つと、白夜兵を次々と斬り裂いて進むと、髪長い尻尾を生やした男が立っている。

「おい、その人！」

「きやつ!?尻尾を生えた人間が喋っていますよ!？」

「ガーン……」

カムイが可愛らしい声で驚くと、男は心底ガツカリしてカムイを見る。

「せっかく良さそうな奴だと思ったのに、この言われ様はシヨックだぜ……俺は尻尾の生やした人間じゃない!誇り高き人狼、ガルーだ!」

「ガルー?」

「ガルーとは、狼の姿に変わる事ができる種族です」

カムイの疑問にラクスが応えると、男は笑う。

「そうだぜ。この獣石を使ったら、大きくて強い狼になれるんだぜ。」
そう言うと、獣石を見せてくる。

「へえ……狼にですか、失礼な事を言つてすみませんでした。でもどうして、貴方の様な種族が此処に?」

「へっ!?そ、それはその……み、道に迷ったんだよ、それで、その……お前なら助けてくれそうだなって思つて……」

ガルーの男がそう言うと、カムイは微笑みながら問いかける。

「声を掛けてくれたのですか?」

「べ、別に……そう言う訳じゃ……」

「でも、申し訳ありませんが……私には貴方の故郷の場所は分かりません」

「……そう、か」

ガルーの男が残念そうな表情を出していると、カムイは提案した。
「ただ……仲間になってくれたら一緒に故郷を探す事はできますよ。貴方のその力は頼りになりそうですし、考えてみてくれませんか?」

「仲間……し、仕方ねえな。そこまで言われちゃ、ひきさがれねえよ。別に俺は一人でもやっていけるけどら力を貸してやっても良いぜ」

ガルーの男は素直に言っていないが尻尾のブンブン振っている。

レーラはその尻尾に無表情ながらも目を輝かせている。

ラクスは犬かと、心の中で、ツツコム。

「尻尾をブンブン振ってますね．．．もしかして、嬉しいのでしょうか．．．」

「俺はフランネル！お近づきの印に、この芸術的な毛玉をやるよ！」
「．．．ゴミクズ．．．？」

カムイは毛玉と思われるゴミクズを見て引いている。

「へへ．．．おれの宝物なんだ。べ、別に礼なんて良いぜ。仲間になった印っていうかさ．．．た、大切にしろよな！」

「あ、ありがとうございます．．．」

ガルーのフランネルが仲間になり、戦況は有利になった。

フランネルが獣石を使って巨大な狼に変わると、白夜兵をその巨体で吹き飛ばす。

「ふむ、流石はガルーだな」

ラクスは冷静に観察していると、白夜兵三人が来る。

ラクスはその三人に向かって馬を走らせると、ディアブロスで三人を斬り、遂に襲撃の首謀者まで辿り着いた。

「我はクマゲラ！いぎ、勝負！」

「ふん、そうか」

ラクスはそう言うと、馬を走らせると、クマゲラは棍棒を構えて迎え撃つ構えを見せ、ラクスが近づいて来た所を狙って、棍棒を振るつた。

「とおりゃあー！」

クマゲラの棍棒は勢い良く振られるが、ラクスは馬を飛び上がりせると、クマゲラを斬った。

クマゲラは大量の血を出して倒れ絶命した。

「身の程を弁えてから戦うべきだったな．．．」

ラクスは冷たい目でそう言うと、白夜兵達はクマゲラの死を見ると、一目散に逃げ出した。

「終わったか．．．」

ラクスは戦いを終えて一息をつくのだった。

夜刀神・長夜

ラクスは戦いを終えて、カムイの方を見ると、ガロンがやって来ていた。

カムイとガロンは何か話しているのかラクスには聞こえていないが、カムイの表情が変わった。

明らかに、最悪の事態だ。

「ガロン様！」

「ほお。ラクスカ・・・お前が結婚し、子供ができたと聞いて驚いたぞ」

「それよりも、カムイ様に何を・・・」

「カムイに命として、ミューズ公国の歌姫を殺す様に言った」

ラクスは耳を疑った。

シユヴァリエの次はミューズの歌姫を皆殺しにする気なのだ。

「あの歌姫でしょうか取り逃がしたからには、疑わしき者を全てを殺す事が得策・・・反乱の芽は早い内に摘んでおくに限る。お前もそう思っているのだろうか？」

「そんな・・・！私は、そんな事を・・・」

カムイが否定しようとしたが、マクベスが割ってはいる。

しかも、マクベスだけでなく、ガンズまで来る。

「承知しました、ガロン様」

「その命、我々にもお任せを」

「期待しているぞ。マクベス、ガンズ」

ガロンがそう言うと、二人は歌姫を殺しに行った。

カムイは歌姫の虐殺を止めようとする。

「ま、待ってください！二人とも！」

「お父様にお伺いしたい事があります。お父様の下される命は、いつも相手の命を奪う様な物ばかりです。ですが、殺してしまう前に話し合う事はできないのでしょうか。このままでは、例え戦争に勝ったとしても我が国への不信が高まるだけです」

「不信だど・・・？血迷ったかカムイ。お前もわしと同じ事をしておいで、今更何を言うておるのだ？」

「はい。確かに・・・私はシュヴァリエでガンズさんを止める事ができませんでした。ですが、このやり方が最善だとはとても思えませんが・・・自分の利の為に、何の罪も無い人々を殺してしまう事が、暗夜王国のやり方なのですか？これがお父様の望みなのですか!？」

カムイの必死の訴えにガロンは平然と応える。

「ああ。わしの望みは、白夜王国の支配。それを叶える為なら手段は選ばぬ。些細な不信感など取るに足らぬ事だ。逆らう者は皆、殺せば良いのだからな」

「!」

ガロンの殺せば良いと言う言葉にカムイは怒りを少し現した。

ラクスはまずいと思った瞬間、レオンが割って入る。

「姉さん、もう良いだろ。僕達も行こう。・・・父上。カムイ姉さんは戦闘が終わって疲れているんです。それでこの様な心にも無い事を・・・彼女の失言、どうかお許しを」

「いえ・・・私は正気です」

カムイの空気を読めない発言にレオンはカムイを黙らせる。

「いいから・・・!行こう、姉さん!!!」

そう言うと、レオンはカムイの腕を引っ張っていく。

仲間達とラクスもそれに続いていく。

「もう・・・カムイ姉さん、どういうつもりだよ。父上にあんな口を聞いて・・・しにたいのか?」

レオンの言葉にカムイは真剣な目でレオンに問う。

「レオンさん・・・貴方は、お父様と同じ考えなのですか？目的の溜めなら、罪も無い人々を殺しても構わないと思っっているのですか?」

「思っっていないよ、そんな事。だから、あの時だって・・・僕は父上の目を盗んでスズカゼやリンカを助けたんだ。けど、表だって父上に逆らう訳にはいかない。そんな事したら、僕らも、いつ始末されるか分かったもんじゃないよ。命が惜しければ大人しく従った方が良い」

「レオンさんも、カミラ姉さんと同じ事を言うのですね・・・」

「ああ、父上のやり方は僕達が一番よく知っている。例えエリーゼやマークス兄さんであっても、そう言うと思うよ」

レオンの言葉を聞いてカムイは真剣な面持ちでレオンに言う。

「・・・よく分かりました。お父様のやり方も、レオンさん達の考えもでも、すみません。レオンさん。私はやっぱり、先程の命には従えませんが」

「待って。カムイ姉さん。今のはあくまで・・・表向きの話だよ。」

「え・・・？」

レオンの言葉にカムイは疑問の声をあげる。

「良いかい？表だって逆らう事はできない・・・でも、裏で動く事ができる」

「レオンさん？」

「つまり・・・見当違いの場所を搜索させ、歌姫が逃げる時間を与えるんだ。そして捕らえられた歌姫が処刑される前に僕が始末した事にする・・・期待はしないで。僕にできるのはそれぐらいだ」

「レオンさん・・・！・・・ありがとうございます」

レオンの策にラクスは驚かされる。

裏で歌姫の逃げる時間を稼ぎ、レオンが殺した事にする。

ラクスはレオンを敵にはしたくないと思った。

「別に姉さんの為じゃないさ。姉さんが悲しむとカミラ姉さん達まで悲しむからね。だから・・・僕は僕のやり方で動く。それだけだよ」
レオンがそう言った瞬間、レオンの神器ブリュンヒルンデが輝き始めた。

「え・・・？ブリュンヒルデが、光っている・・・？それに、姉さんの夜刀神も・・・いったい、どういう事だ・・・？」

「まさか、これは・・・虹の賢者様が言っていた・・・きやつ!？」

カムイの夜刀神は突然、大きく輝きだし、光が消えるとそこには姿を変えた夜刀神があった。

「夜刀神が、別の形に・・・!?!これが虹の賢者様が仰っていた・・・夜刀神・長夜・・・？」

「長夜・・・？姉さん、何を言っているんだ？」

カムイは事の成り行きをレオンに言う。

虹の賢者がカムイ姉さんは伝えた事をレオンに言った。

「成る程ね。つまり僕が、その暗夜の勇者だつてこと？」

「はい・・・そうだと思います。私達の武器には、何か関係があるのかもしれません。賢者様は、いつか、この刀が真の炎の紋章と至るまでいつてました。それ以上の詳しい事は、誰にも解らないのですけど・・・」

「へえ・・・炎の紋章・・・興味深い話だけど、今その事を考えてる暇はないね。こうしている間にも、マクベスやガンズが歌姫達を見つけてしまうかもしれない。僕はもう行くよ。姉さん、くれぐれも父上には逆らわないようにね。次、また逆らったら・・・本当に死ぬ事になるよ」

「・・・」

そう言うと、レオンは行ってしまった。

友達

「レラ slide」

私には悩みがあります。

その悩みとは、友達が全くいないのです。

私と同じくらい歳の人がいない事が主な原因であるのは分かる事なんです、やっぱり寂しいです。

父さんにこの事を相談してみた事がありました、何故か目をそらせて誤魔化されました。

きっと、父さんも友達らしい人ができなかったのでしょうか。

だから、今度は母さんに相談してみたら母さんは自然としてたうできると言われました。

「自然としてたら、か・・・」

私は考え続けますが自然としてたらとはどうすれば自然となるのでしょうか？

「おーい！レラ！」

「サイラスさん。どうかしました？」

「いや、俺の娘も軍に入るから挨拶させようと思ってな。紹介するよ。娘のゾフィーだ」

サイラスさんがそう言うと、サイラスさんの後ろから隠れる様に見える同じ歳と思われる子がいた。

「おい、ゾフィー隠れてないで前に出ろよ・・・」

「ち、ちよつと緊張しちゃって・・・」

「・・・」

サイラスさんゾフィーさんと思われる子を前に出そうとしているが実際、私も緊張している。

サイラスさんはやつと、ゾフィーさんを前に出して挨拶させる。

「ぞ、ぞぞぞ、ゾフィーです！よ、よろしくお願いします！」

「・・・」

私は、緊張のあまり心臓が高まる中、ゾフィーさんが何を言っているのか分からなくなり徐々に意識が遠くなってきた。

side終了

side

あたしは父さんに連れられて挨拶に回っている時に、あたしと同じ位の年齢で軍に入っているレーラ、て子に会いに来ていた。

でも、初めてレーラを見た時、物凄く怖い雰囲気を出していて、あたしはもう怖くて仕方なかった。

でも、父さんに押されてあたしは挨拶したんだけど、反応がなかった。

「あ、あの・・・」

「・・・」

「・・・まさか」

父さんがレーラの目元を手で振るがそれでも反応が無い。

あたしは頭の中で、ハテナ(?)が一杯になる。

「・・・気絶している」

「えっ!？」

あたしは怖いと思っていた、レーラの立ったままの気絶に内心、驚きを隠せないでいる。

だって、鋭い目線で見えてきたレーラが立ったままの気絶は驚くしかない。

「・・・私、何かしたの？」

「サイラス。どうしたんだ？」

「ラクス、大変なんだ!レーラにゾフィーの挨拶に来たら気絶したんだ!」

「はあッ!？」

父さんがそう言うと、ラクスさんはレーラの両肩を持って揺さぶる。

「おい、しっかりしろ!」

「・・・はッ!私は何を・・・」

「お前が立ったまま、気絶していたんだよ。たく・・・」

あたしはレーラの以外な一面を見て、少し安心できた。

side終了

↳レーラside↳

恥ずかしい。

今、私はとてつもなく恥ずかしくて、穴があれば入りたい気持ちだった。

何故なら、サイラスさん、ゾフィーさん、そして何時、来たのか父さんにまで立ったまま気絶した姿を見られてしまいました。

「……／＼／＼」

「なあ、恥ずかしいのは分かるが……良い加減、立ち直れよ」

「だって……／＼／＼」

私は両手で顔を隠しながらしやがみ込む。

もう、恥ずかしくて父さんの言葉も入らない。

「あ、あの……レーラ」

「……何？」

ゾフィーさんが、私に話し掛けてくる。

「あ、あの！私と、友達になってくださいー！」

「へ……？」

ゾフィーさんの言葉に私は素頓つ狂な声をあげてしまった。

友達……私が長らく求めていた事を彼女は言ったのだ。

「何で……？」

「え、えつと……最初は怖いと思っただけど、何だか貴方が寂しそうな人だな……て」

「……友達」

私は父さんの方を見ると、頷いてくる。

私はその父さんの領ずきに応える様に立ち上がって、ゾフィーさんの前に立った。

「はい。よろしくお願いします」

「はいー！」

私はゾフィーと言う、初めての友達ができた。

白夜進攻

レーラとゾフィーの騒動の後、暫く留守にしていたカムイとアクアが戻ってきた。

その中に無限溪谷へ落ちた筈のギウンターもおり、ラクスを見て睨んでくる。

「ラクスカ・・・」

「・・・お久しぶりです、ギウンター殿」

ギウンターにラクスは一礼すると、ギウンターが聞いてきた。

「ラクス。お前は、カムイ様を陥れようとしたか？」

「・・・いいえ。むしろその逆でした。ガンズを加えた時点でカムイ様の危険を予期していましたが、守りきれませんでした」

「何故、言わなかった？」

「あの時はカムイ様の初任務。余計な負担を作る訳にはいかない。それに私は立場上、監視役みたいな物で下手に出れなかった」

ラクスの応えにギウンターは納得したと言う顔になった。

「成る程な。確かにお前の立場は元はガロン様の腹心の騎士。立場上、逆らう事は許されない、と言う事だろ？」

「はい。今はガロン様の手を離れているから此所まで行動しましたが、また一つ厄介な案件が来しました」

ラクスがそう言うと、一つの文をギウンターに見せた。

その内容は、白夜王国へ進攻せよと書いてあった。

「これは・・・」

「内容は書いてある通り、白夜王国に進攻する命をカムイ様は受けています。進攻の軍資金を珍しくマクベスが用意して準備が整い次第、進攻を開始する見たいです」

「・・・」

ギウンターは何とも言えないと、言う様な顔になりラクスを見る。

「王命である以上は従うしかない。カムイ様の為にも・・・」

ラクスはそう言うと、ギウンターから離れていく。

暗夜海の港、カムイ達とラジオは白夜王国に向けての進攻準備に取り掛かっていた。

ラクスは船の上で物資とマクベスから受け取った軍資金の確認をしたりしてふいに、港の方を見ると、マークスが合流していた。

「……これで兄妹達が揃ったな」

ラクスはそう言うと、仕事に戻り作業の最終点検をし始める。

帆も上ががなく、船を動かす兵士にも影響はないと判断すると、カムイの元に向かっていく。

その後ろ姿を見る者に気付かずいだ。

「カムイ様。出航の用意が整いました」

「ん？お前は誰だ？」

ラクスを見たマークスは、ラクスとは気付かず他人だと思っている。

ラクスは無理も無いとマークスに名乗った。

「私はラクスです。マークス様お久しぶりです」

「なに!?……いや、失礼した。私は初めてお前の顔を見たので気付かなかった」

「いえ、お気になさらず……それよりもカムイ様。船は何時でも出航できるので、出航の際はお声をお掛けください」

「はい。ありがとうございます、ラクスさん」

ラクスは一礼すると、自身の持ち場へと戻っていく。暫くして、カムイ達も乗り込み船が出航した。

船が波に揺られる中、ラクスは甲板で海を見ていた。

何処までも広がる海に、ラクスは黙って見ている。

「珍しいわね。貴方が仕事をしていないなんて」

「ベルカか。粗方、仕事が終わってな。海を見て暇を潰そうと思って

見ていた」

「そう」

ベルカはそう言うと、ラクスの隣に立った。

ラクスは首を傾げてベルカを見ると、ラクスの肩に持たれた。

「・・・暫くこのままできて良い？」

「・・・ああ」

ラクスは少し照れ臭そうに頬を指で搔きながら了承すると、二人に穏やかな時間が流れる。

その姿をこっそりと見ている野次馬はいる。

「結婚していたとは本当だったのか・・・」

「ちよつと、マークスお兄ちゃん。張れるから、もう少し隠れて・・・」

「！」

「あらあら、ベルカがあんなに大胆になるなんてね・・・」

「私も結婚したいです・・・」

「え、カムイ姉さん・・・!?」

後ろから隠れて見るカムイ達にラクスは気付いているが、ここでツツコムとベルカとの時間が無くなると思ひ黙っている。

「(全く何やっているんだか・・・)」

ラクスは呆れていると、大きな爆発が起きた。

「何事だ!?!」

「ご報告します! 賊が船を襲撃、船にある軍資金を略奪しております!」

「・・・辺りに船が無いと言う事はこの船に潜入していた?だとすると、私_が気付かない様な賊だとは厄介な相手だな」

ラクスは軽く舌打ちすると、ディアブロスを引き抜き兵士に命じる。

「襲撃している賊を撃破せよ! それと、賊にしては連繋が取れている事から賊の将が兵士に紛れている可能性もある。炙り出して見つけろ!」

「はー!」

ラクスの指示に兵士は聞くと、すぐに行動を開始する。

その後カムイ達がやって来た。

「ラクスさん！」

「カムイ様。ご無事でしたか」

「ラクスさん。賊の将は恐らく」

「やはり、紛れている、かと」

カムイの考えを先に言う、カムイは頷く。

「紛れているのは分かりますが、問題はここから。その将は何処にいるのかです……」

「ふむ、やはり兵士一人々を尋問するしかないか……」

「やむおえないかと……」

マークスの言葉にラクスが応え、カムイは指示を出した。

「ここは皆で分担して将を探しましょう。ラクスさんとマークス兄さん達は前を、私とカミラ姉さんとレオンさんは後ろをお願いします！」

全員頷くと、すぐに持ち場に向かっていく。

ラクスも向かおうとすると、ベルカに呼び止められた。

「ラクス」

「何だ？」

「……気を付けて」

「ああ……」

ラクスはベルカにそう笑いかけると、マークスと共に船の前へ向かう。

マークスと共にラクスは走っていると、数人の賊が攻撃してきた。

「邪魔だ」

「ふん！」

ラクスとマークスの攻撃は凄まじく、向かってくる賊を次々と倒していく。

やっと、船の前まで来ると、さっそく兵士を尋問する。

「そこのお前。お前を今から尋問するから動くなよ」

「待って、イタタタツ!? 何で顔を引っ張るんですか!？」

「ふむ、違うか……すまなかつたな」

ラクスが兵士に謝ると、マークスがやって来た。

「此方は本物だった。そっちは？」

「此方も白だ・・・残るは」

ラクスが船の後ろを見ると、マークスは察する。

賊の将は船の後ろにいと、マークスは考えると、ラクスはマークスの考えが分かる様に頷く。

「急ぐぞ、ラクスー！」

「はい！」

ラクスはマークスの言葉を聞くと、船の後ろまで走っていく。だが、やはり賊が阻み、ラクスとマークスは足止めを受けた。

「くッ、やはり簡単には行かせてはくれないか」

「いったい何処に戦意を持っているのやら・・・」

ラクスがそう呟くと、賊が一齐に斬り掛かってくる。

ラクスは軽く避けて賊を倒していき、マークスもラクスと同じぐらいの速さでジークフリートを振るう。

「流石は暗夜王国一の騎士ですね。惚れ惚れしますよ」

「お前こそ、中々の腕だ」

二人はそう言って笑い合っていると、賊に突っ込む。

賊を次々と斬っては刃の露にしていき、二人の戦いを見て賊は恐れをなし始めた。

「何だよ、こんなの聞いてねえぞ！」

「強すぎる！」

「賊共、我々が乗る船を襲ったからには生きては帰れないと思え!!」

怯えきった賊にラクスが威嚇する様に声を上げると、賊は悲鳴を挙げ始めた。

「やり過ぎではないか？」

「マークス様。賊に手加減してはいけませんよ」

ラクスはそく言うと、賊を斬ろうとしたら、兵士が走ってきた。

「申し上げます！カムイ様が賊の将を捕らえました！カムイ様はこれ以上の戦いは無用だと仰っております！」

ラクスはその知らせを聞くと賊達を見る。

震え上がり、もう戦う意志が無いと分かると、ラクスは降伏を呼び掛ける。

「聞いている通り、お前達の将を捕らえた。ここで選択をやる・・・ここで死ぬか、それとも生きるかだ。さあ、選べ」

ラクスの言葉を終わると同時に、賊は次々と武器を落として手を挙げる。

ラクスは降伏の意志と判断し、兵士に拘束させて賊との戦いを終息させた。

処遇

賊の襲撃が終息し、ラクスはマークスと共にカムイ達の元に行く
と、カムイ、カミラ、レオン、アクアがおりそして、縛られた盗賊ら
しき男がいた。

「こいつですか、今回の下手人は？」

「はい」

ラクスは賊の下手人を睨む様に見下ろすと、下手人は反省の色が無
いのか不適に笑っている。

「何故、こんな事をした？」

「たまたま、金が船にたんまり積んである、て話を聞いて乗り込んだん
だよ。で？俺の処遇は？できれば命だけは助けてほしい所なんだが
な」

「私ならこの場で縛ったまま海に投げ棄ててやる所だが、処遇はカム
イ様が決める事だ。私ではなく、カムイ様に聞け」

ラクスは冷たくそう言うと、カムイを見る。

カムイはこの男の処遇を迷っているのか、黙ったままだ。

「へ、流星は暗夜王の懐刀だな。堪らなく怖いねえ」

「黙れ」

男がラクスに対して言うと同時に、マークスが黙らせる。

ラクスはいい加減、この男を始末したくなってきた。

「それだけの事をしたのだから、警戒するのは当然でしょう？・・・見
た所、あなたは暗夜王国の盗賊みただけけれど・・・白夜王国行きの
船に乗って、一体どうするつもりだったの？戦争が始まったのに、わ
ざわざ敵地に行くなんて・・・何か特別な理由でもあるのかしら？」
「・・・」

アクアの問いたですが、男は黙ったままになる。

今度はレオンが口を開き喋る。

「まったく・・・こんな泥棒に事情なんてある訳ないよ。きつと後先考
えずに乗り込んだに決まってるさ。理由を聞いたって無駄だよ、アク
ア姉さん」

レオンの言葉は一理ありラクスも同意件の考えだった。

これだけ軍資金を積んでいるので賊が奪いに来るのは不思議ではない。

だが、男はアクアの名を聞いて反応した。

「!アクア．．．!?じゃああんた、もしかして、あの時の．．．!」

「え．．．?あなた、私を知ってるの?」

「さあな」

アクアが驚きながら聞くが、男は誤魔化す様にそっぽを向いた。

だが、アクアは諦めずに聞く。

「良いから応えて。でないとあなた、本当に殺されるわよ。もう一度聞いわ。あなた、私の事を知っているのね?」

「．．．ああ。よく知ってるさ。何せ、あんたは．．．俺が手引きしたせいで、暗夜王国から連れ去られちゃったんだからな」

「何だと．．．!?貴様があの時の事件に関わっていたのか．．．!」

男の言葉にラクスは反応し、男に対して更に睨み付ける。

「待ちなさいラクス。どう言う事なの?」

「俺はあの日、白夜王国のユキムラと言う軍師に手を貸して、暗夜王城に続く、秘密の通路を案内したんだ。俺は元々、白夜王国の王家に仕えた一族の者．．．今は亡きコウガ公国の忍だったんだ。だから、白夜王国の頼みには手を貸そうと思ったんだよ。ま、向こうは俺がコウガの忍だなんてまったく気づいちゃいなかったけどな」

男の語った話を聞いてアクアは更に問う。

「ねえ．．．確かコウガ公国は、隣国のフウマ公国に滅ぼされたのよね。民達は皆殺しにされたと聞いていたけれど．．．まさか、生き残りの者がいただなんて。その生き残りが何故、泥棒なんてしているの?」

「仕方なかったんだ．．．そうしないと、生きていけなかった。国を追われた俺は生き残った僅かな仲間達ともはぐれ、暗夜王国に流れて盗賊に身をやつす他なかったんだよ。いつか戦争でも始まってフウマを討つ機会ができるその時までな。だから．．．暗夜の王女の誘拐は戦端を開く良い機会だと思ったんだ」

男の言葉にラクスは心底、不機嫌な顔をした。

この戦争で多くの兵、民が死んだ。

原因は暗夜にもあるが、一つの争いの為に他国を巻き込むのをラクスは許さなかった。

「そう。それでまんまと戦争が始まって、機を伺う為白夜王国に？」

「・・・そうさ」

「そんな事情があったのですね。白夜王国出身の、元忍ですか・・・」
「へえ・・・あんた、話が分かりそうだな。俺はアシュラってんだ。もし俺をここで助けてくれるなら、その嬢ちゃん・・・アクアの従者としてお前達の力を貸してやるよ。あの時はすまないと思っっているし、俺も白夜王国には思う所があるからな」

「つまり、仲間にしろと言う事ですか？」

カムイの言葉を聞いてラクスは反対意見を出した。

「カムイ様。こいつは信用できません。昔にアクア様を拐った手助けをした奴の言葉など信用に値しない」

「ラクスの言う通りだ。こいつは始末しておくべきだよ、カムイ姉さん。都合の良い言葉を言っただけ・・・本当は白夜王国の斥候として、国に戻ろうとしていたのかもしれないよ。ここで殺しておくないと、後々面倒な事になるに決まっている」

「そうね・・・幾ら事情があったとはいえ私達に攻撃してきたのだから。この先、またいつ裏切るか分からないわ貴方の事が心配なの・・・カムイ」

ラクスの他に反対の意見を出したレオンとカミラ。

マークスはカムイに向かって言う。

「どうする？カムイ。この軍のリーダーはお前だ。私達はお前の判断に従おう。アシュラを殺すか、殺さないか。お前が今ここで、決めてくれ」

「・・・」

マークスの言葉を聞いたカムイはアシュラを見て考える。

マークス達とラクスは黙って見守っていると、カムイは口を開いた。

「えっと・・・確かに皆の言う通り、彼は危険かもしれませんが・・・で

も、信じて見る、余地はあると思います。殺しはせず、仲間になって貰いましょう」

「!本当か・・・!!」

「はい。辛い思いもしてきた様ですし・・・殺すなんて、あんまりでしょ。でも、少しでも怪しい動きを見せたら・・・分かってますね?」

カムイが凄む様にアシユラに言うのと、笑顔で頷く。

「ああ、勿論だ。俺は絶対に裏切らない。約束する。ありがとう、カムイ様。あんたは命の恩人だ・・・」

ラクスはアシユラの表情を見て本当に感謝している者だと感じた。

カムイとマークス達が話している時に、ラクスは考える。

「(賊であったアシユラもカムイ様の人徳に触れたか・・・やはり、カムイは暗夜王国に必要な方だ。絶対に、カムイ様の心を壊させる様な事はさせない)」

ラクスは窓の青空を眺めながら誓う。

裏切りの魔窟く前編く

カムイ達とラクスは無事に海を渡れ、歩いていた。

現在はフウマ公国辺りを進んでおり、桜の木が生い茂げその桜の花びらが美しく乱れる道を進んでいた。

「ふう・・・無事、海を渡れましたね」

「お待ちしておりました！カムイ様！」

突然、現れた忍らしき男にカムイは応える。

「えっ、貴方は？」

「はい。私はフウマ公国の公王、コタロウと申します。貴殿方を歓迎する為、お迎えに上がりました」

「！フウマ公国・・・アシユラさんの言っていた国ですか・・・」

カムイの言葉にコタロウは疑問を浮かべる様に顔を歪めた。

「え？我が国が何か？」

「あ、いえ・・・少し聞きたい事があつた物で、でも、フウマ公国は白夜王国の領内にあるのでしよう。私達暗夜軍に味方して、大丈夫なのですか？」

「ご心配には及びません。我が国は昔から暗夜王国と友好関係にございます。もともと、有事の際ひは貴殿方、暗夜王国にお味方するつもりでおりました」

コタロウの言葉にカムイは笑顔で応える。

「そうですか。ありがとうございます」

「ではさっそく、白夜王国王都へ攻め入る為の道を案内しましょう。さ、此方です」

コタロウはそう言うと、道案内する。

他の仲間も着いていくが、ラクスはコタロウの行動に不審に思った。

「(王都までの道を白夜側が放置しているのか？白夜にも忍びがいる筈、何故そんな道があるなら潰さない・・・)」

ラクスは歩きながら考えるのだった。

コタロウの案内で人気の無い道までカムイ達とラクスは来ていた。
コタロウは笑顔で道案内を続けている。

「此方ですカムイ様。この街道が、白夜王国に攻め入る為に最も適した道でございます」

「ありがとうございます、コタロウさん」

「いえ、本来ならば城にお招きしてゆっくりと休んで頂きたいのですが、先を急ぐ旅との事ですので道案内のみとなり、恐縮です」

「そんな・・・やはりお陰でとても助かりました」

カムイはコタロウに礼を言うが、ラクスはコタロウに対する疑いがどうしても晴れない。

「(悪い事が起きなければ良いが・・・)」

ラクスはそう願っていると、一人のフウマの兵が現れコタロウに報告する。

「ほ、報告です!!コタロウ様!」

「!何だ、取り乱して。カムイ様の御前だぞ」

「す、すみません・・・至急の伝令でございます。先程、白夜王国の忍びがフウマ公国に侵入し、森の洞窟内で戦闘が起こっているとの事です!」

「なに・・・!?白夜の忍だと・・・?」

伝令の言葉を聞いたラクスはサイゾウを思い出す。

サイゾウは白夜の忍びでは、かなりの手練れに当たるとラクスは考えた。

「(もしかして・・・サイゾウか?)」

ラクスがその答えに行き着くと、伝令の話が終わったのかフウマ兵が消えた。

「・・・えっと。今は・・・」

「はい・・・戦争が始まってからと言う物、こうして頻繁に白夜王国の者が我が国に攻め入ってきているのです。我々は、白夜王国に攻撃した事など無いと言うのに・・・」

「それはもしかして、この国が暗夜王国と友好関係にあるからですか？」

カムイの問いにコタロウは応える。

「恐らく、そうでしょうね。ですが連日の襲撃により、今の我々には手配できる兵が少ないのです。・・・カムイ様。とても心苦しいのですが・・・貴方様方のお力を貸してくださいれば、心強いのですが」

「分かりました。貴方達が私達に味方しているせいで苦しい目に遭っているのなら、暗夜軍として、それを助けるのは当然です。すぐにその洞窟に向かいますよう」

「ありがとうございます・・・!!」

コタロウは笑顔でカムイに礼を言うと、すぐに洞窟に案内する。

ラクスはコタロウの不審が気のせいである事を祈って進む。

洞窟に着くと、すぐに白夜軍の掃討が始まった。

数は然程、少なくない為、すぐに決着が着いた。

「此方の白夜兵は全て戦闘不能にしたぞ。カムイ」

「私の方も、何とか片付いたわ」

「此方も終わったよーっ。カミラお姉ちゃんとレオンお兄ちゃんが活躍立ったんだから！」

「私も白夜軍を戦闘不能にした」

「ありがとうございます、皆。・・・それにしても、殆ど私達だけで、片付けてしまいましたね。フウマ公国の兵はそれほどまでに足りていないのでしょうか・・・」

カムイの疑問の声にラクスもフウマ兵の異様な少なさに不気味に思えてきた。

「お父様に進言して、警備兵をつけて貰う事も考えた方が・・・」

「危ない、カムイ様!!」

「え・・・!?!」

スズカゼがそう言うと、手裏剣で敵の攻撃を弾いた。

「くっ……!!カムイ様を狙うとは卑怯な……!?貴方は……」

「!スズカゼ……?」

カムイに攻撃してきたのはサイゾウだった。

ラクスはカムイの前に出て、守る。

「兄さん……」

「これも宿命か……双子同士というのは、厄介な物だな……」

「はい……本当に……」

スズカゼとサイゾウは手裏剣を手に対峙し、お互い大きな威圧感を放っている。

「……退け、スズカゼ。俺はフウマ公王に用がある」

「いいえ……!そう言う訳にはいきません。私は暗夜王国の兵として、友好国の公王を守る義務があります」

「なに?お前、本気で言っているのか……?お前が敵側につこうと、俺の事を殺しに掛かろうと構わん。だが、彼奴に……コタロウ、従う事だけは、このサイゾウが決して許さんぞ!!」

サイゾウはそうスズカゼに怒鳴ると、スズカゼはいつものサイゾウでは無い事を見抜いた。

「どうしたんですか……兄さん……」

「お前は何も分かっていない!あの男……コタロウが父上にした仕打ちを!彼奴の卑怯なやり方を!……今だって、彼奴はカゲロウを人質に白夜兵に降伏を求めているんだ!お前はそんな奴に味方をするのか!!」

「何ですって……!?!」

サイゾウの話の聞いたカムイ達も含め、スズカゼは驚くと、向こうからコタロウが現れた。

「おやおや、遂に敵の親玉を誘き出されたのですか。流石カムイ様の部隊。素晴らしい実力の持ち主の様だ」

「……コタロウさん。」

「ああ、私の事は気にせず続けてください。其奴を殺せば、この戦は決します」

「そうはいかん……」

「コタロウの言葉を聞いてラクスは、ディアブ羅斯をコタロウに向けた。」

「何の真似です?」

「コタロウさん。一つ聞きたい事があるのです。彼奴はカゲロウさん
を人質に、白夜兵を降伏させようとしたのですか?」

「いえ、とんでもない、あの忍びがでたらめを言っているだけですよ。」

コタロウの言葉にサイゾウが怒りの声で怒鳴る。

「くそッ! 惚けるな、卑怯者! お前だけは、この俺が殺してやる!」

「兄さん! 落ち着いてください!」

「では、貴方の言う事が真実で、あの忍びが嘘をついていると言うなら、今から牢屋の中を見せてくれませんか。一つずつ、全てです。」

カムイのコタロウの意表を突いた言葉にコタロウは徐々に本性を
現しているのか、顔を歪ませている。

「はぁ……牢の中を、ですか……?」

「もし貴方にやましい事が無いのなら……この申し出を受けられる筈
ですよ? 暗夜王国に属する者として、貴方が正しいのだと、私達に
証明してください」

「カムイ様……」

コタロウは黙り込むと、遂に本性を現した。

「ふん、拾われ子の王女風情が、偉そうに……」

「え……?」

「そうだ、私は人質を使って白夜兵を脅していた……でも、それが何
だと言うのだ? 貴方が暗夜王国側の人間なら、むしろ私を褒めて頂き
たいぐらいだ」

「貴様……」

ラクスはディアブ羅斯を向けたまま、怒りを露にする。

コタロウは指を鳴らすと、フウマ兵が現れ取り囲んだ。

「お前達には死んで貰う……例え暗夜王族でも、私の野暮に立ちはだ
かる者は許さん!」

「……なら、相手をしましょう。皆さん行きますよ!」

裏切りの魔窟く後編く

カムイ達とラクス、そしてサイゾウは襲い掛かるフウマ兵を倒して進むもうとするが、巻きびしと呼ばれる地面にばら蒔く罠に、遮られて進めずにいた。

「くそ……」

「どけ」

サイゾウはそう言うと、巻きびしを取り除いた。

「成る程な、ありがとうサイゾウ」

「ふん、これはカゲロウを助ける為の共闘だ。別にお前達の仲間になった訳ではない」

サイゾウはそう言うと、奥に進んでいく。

ラクスもサイゾウに続いて行くと、フウマ兵が手裏剣を投げて、行く手を遮ろうとしてくるがラクスは、ディアブ羅斯を振るってフウマ兵を倒す。

「貴様達に用は無い！コタロウを出せ！」

「死ねえ！」

フウマ兵が飛び掛かってきたが、フウマ兵は斬り飛ばされた。

「父さん！」

「すまないレーラ。さあ、行くぞ！」

ラクスは引き続き、フウマ兵を斬りつけて進むと、壁が立ちはだかった。

「くツ……行き止まりか」

「ラクスさん！」

ラクスが行き止まりで引き返そうとした時、カムイがやって来た。

「カムイ様。ここは行き止まりです。引き返しましょう」

「待ってください。この近くに竜脈を感じます」

「竜脈が？」

「はい……ここです！」

カムイは竜脈のある所へ行くと、竜脈を発動させた。

すると、壁が下りる様に無くなり道ができたが、別の所から壁が出

てくる。

「成る程・・・竜脈を発動させると、交互に壁が動く仕掛けですか。これを駆使しなければコタロウには辿り着けないと、言う事ですね」

「はい。行きましよう」

カムイと共にラクス、レーラ、サイゾウは突き進む。

多くのフウマ兵が襲い掛かるが、もはや敵ですらなく遂に、コタロウの元に辿り着いた。

「ここか・・・」

「待ってくれ！」

ラクスは後ろから聞こえた声に振り向くとそこにはアシユラがいた。

「コタロウとは俺にやらせてくれ！この通りだ」

「・・・分かった。私は良いがカムイ様は？」

「私も構いません」

「だ、そうだ。しっかりとやって来い」

「ああ！」

アシユラはそう言うと、奥に走っていく。

カムイ達とラクスは奥に言って、アシユラの戦いの行方を見る為に、入ると、そこには椅子に座り待ち構えていた、コタロウがいた。

「ここまで来るとは予想外でしたよ・・・」

「今回、お前の相手はカムイ様でも私でもない・・・ここに居るアシユラだ」

ラクスがそう言うと、アシユラが前に出た。

「・・・貴様は」

「俺はコウガ公国の元忍アシユラだ。お前を殺して仲間の仇を討つてやる！」

「やはりコウガ公国の生き残りか！良いだろう、私が引導を渡してやる！」

「待て」

コタロウが立ち上がってアシユラと戦おうとした時、サイゾウが現れた。

「私も戦おう。卑怯な手段を使って殺した父の仇を討たせてもらう……覚悟しろ！」

「くっ……ちよございな」

「それなら私も戦いましょう」

「スズカゼ……！」

今度はスズカゼが現れ、サイゾウの隣に立つ。

「私だって兄上と同じ父に育てられてきました。貴方を討ち過去の因縁を終わらせます」

「へ……どうやら俺一人とはいかなくなったようだな」

三人は武器を構え、コタロウと対峙する。

コタロウは怒りの顔をして、三人を睨み手裏剣を構える。

「なら、お前達三人を殺してやるまでだ！」

戦いは始まった。

最初はコタロウの手裏剣が飛んできて、サイゾウは弾くとアシユラの弓が矢を射てコタロウを攻撃するが、コタロウは避ける。

コタロウはアシユラを攻撃しようとするが、スズカゼに遮られ、サイゾウの手裏剣が飛んできて肩を掠めた。

「チッー」

コタロウは飛び引くと、後ろにはスズカゼがおり、手裏剣を手に飛び掛かるが、受け止められて、蹴り落とされる。

コタロウは着地すると、スズカゼを殺そうと、素早く走り斬りつけようとしたが、サイゾウがそれを防いだ。

「くそ……」

「どうした？」

「もう疲れたのですか？」

「俺達はまだ、疲れちやいないぜ？」

三人の言葉にコタロウは血が昇り怒りのあまり手裏剣を手に飛び掛かった。

アシユラは冷静にコタロウに向けて射ると、コタロウの胸に当たりコタロウは血を吐いた。

その隙に、スズカゼとサイゾウが止めに手裏剣でバツマークに斬り

裂いた。

「ぐ、はあ・・・おのれ・・・私の野望が・・・消え・・・」

コタロウはそう言うと、完全に息を引き取って死んだ。

コタロウの死んだ姿を見た三人は全て終わったと、考えた。

「・・・終わったか」

「・・・はい」

「・・・ここまで、長かったがやっと、コタロウを討てた」

三人がコタロウを討ち取ったを確認したカムイ達とラクスは三人に近づく。

「気は済んだか？」

「ええ・・・」

「俺はカゲロウを助け出して白夜王国に退く。今回はカゲロウを助けてくれた礼だ。お前達を見逃してやる」

サイゾウはそう言うと、消えた。

「・・・素直じゃないな。それで、アシユラ。お前はコタロウを討った。次の目的はあるか？」

ラクスの問いにアシユラは首を横に振る。

「無いさ・・・だが、最後までお前達に着いて行くつもりだ。コタロウを討たせてくれたし、命をカムイ様に助けられた恩もある」

「そうか・・・」

ラクスはそう言うと、コタロウを見下ろす。

「馬鹿な奴だ・・・野心に溺れさせなければ死ななかつたのにな。だが、命はどんな者であれ平等だ。眠れ安らかに・・・」

ラクスはそう言うと、せめての情けとしてコタロウが安らかに眠れる様に祈るのだった。

描く未来

フウマ公国での戦い以来、結婚した者達がいる。
その構図はこうなっている。

カムイ×マークス

ラズワルド×ピエリ

カミラ×ゼロ

シャーロット×ブノワ

レオン×ルーナ

アシュラ×アクア

と、なった。

この全員は、既に子供がおり秘境で安全に守ってはいたが、結局、襲撃されたり抜け出したりして結局、連れてきていた。

フェリシアは戦いの後に仲間になり軍は更に騒がしくなり始めた。

「親になるのも大変ですね」

「ははは・・・まあ、大変ですよ。色々な悩みを抱えてたりするので」

ラクスは現在、カムイと紅茶を飲んで話していた。

カムイは結婚して、二児の母となって大切に二人の子供を育てている。

子供の一人はジークベルトと言う名前で、あの厳格なマークスとは似ても似つかない温厚な子だ。

だが、才能はあらゆる分野をこなしてはいるが、自信が常に無さげである。

もう一人はカンナと言う名前で、性格は完全にカムイ似で、よくラクスの元にも訪れてくれる。

「ええ、でもそれでも優しく時には、厳しく育てていきたいと思っってます・・・」

カムイはそう言い横を見るとそこには、レーラと遊ぶカンナ、それを優しく見守るジークベルトがいる。

「そうですね・・・」

ラクスは彼等が血で染め上がる前に戦争を終結させたいと、考え

た。

ラクス自身、カムイが暗夜側に着かなかつたらベルカと結婚せず、もしかしたら何処かで死んでいたかも知れないと考える。

だから、血塗られた戦争を今、経験しているからこそ子供に辛い目にあわせたくないというラクスは感じる。

「（この平穏を迎える前に終わらせたかったものだ・・・）」

「どうしたのですか？」

「ん？いえ、何でもありません」

ラクスはそう言つて微笑むと、カムイは不思議そうに首を傾げる。

「ラクスきーン！」

「どうしましたカンナ様？」

「はい！」

カンナはラクスに一輪の花を差し出した。

「これを私に？」

「うん！」

「・・・ありがとうございます」

ラクスは大切そうに花を受け取り見る。

その花は赤くまるで、血の様だ。

「（・・・ツ!?せっかくの贈り物で何を考えているんだ）」

カンナはラクスを見て笑っており、ラクスもカンナに笑い返す。

その目に動揺はあるが、カンナは気付かずレーラ達の元に戻っている。

「（守りたい・・・例えばどんな犠牲があつても私は迷う事なくこの身を差し出しても・・・）」

「どうしました？さつきから変ですよ」

「・・・本当に大丈夫ですから」

ラクスは誤魔化す様にカムイに笑い掛けると、カムイは少し心配そうな顔で、ラクスを見るのだった。

イズモ公国

カムイ達とラクスはイズモ公国へと足を踏み入れた。

イズモ公国の風景は、国全体が神々しく何処か恐れを抱いてしまう様な場所だ。

「何だか、綺麗な場所につきましたね」

「ええ……ここはイズモ公国よ。古くから神々のいる国として知られているわ。それに、他の国々が対立している時も常に中立を守り続けているの」

「へえ、中立国ですか……少し寄って行くのも、悪くないかも知れませんがね。戦いが続いて、皆もそろそろ疲れが出ている頃でしょうし」
「……そうね。それに、情報も必要だわ。白夜王都周辺はきつと警備が厳しいけれど……今の私達にそれを窺い知る術がないもの。その点、中立国の人々なら、何か有益な事を知っているかも知れないわ」
「そうですね。ではイズモ公国を訪ねてみましょう」

カムイはそう言うと、仲間を連れてイズモ公国に向かっていく。

ラクスはカムイに続いていくが、ここで予期せぬ人物達と鉢合わせをすると、カムイ達そしてラクスもまだ知らない。

カムイ達のラクスはイズモ公国の公王イザナと謁見する事になり、一同は広間まで来ると男が現れた。

「初めまして〜！よおく来てくれちゃったねえ〜！暗夜王国の使者さん達、歓迎するよ〜！」

「あ、ありがとうございます……」

「(か、軽い……)」

ラクスはカムイすら戸惑う程の軽さで、挨拶する男にそう思うと、黙り混む。

絡まれたら何か面倒事になると、思ったからだ。

「さあさあ、狭苦しいお城だけどゆっくりしていつちやてよ〜！」

「え、えつと・・・あの、貴方は・・・？」

「僕は公王イザナ！あはは！すっかり申し遅れちゃって悪かったね！」

「ええッ!?あ、貴方が公王!？」

自らを公王イザナと名乗った男にラクスを始め、一同は驚きを見せた。

何故なら、こんなにも軽い公王なんていると思わないだろう。

「軽い・・・とんでもなく軽い・・・」

「よく国民の指示を得られたわね・・・」

「恐ろしい国だ・・・」

この様にマークス、カミラ、レオンはそう言うが一人、おかしな方向に走った。

その人物はエリーゼだ。

「すごーい！何だか仲良くなれそう！イザナさん、よろしくお願いしまーす！」

「(エリーゼ様!?そこはツツコム所ですよ!?)」

エリーゼの元気な挨拶にラクスは内心でツツコミ、イザナは笑いながら挨拶を返した。

「あはは、此方こそよろしく、エリーゼ様〜！」

「ん？私、名前言ったっけ？」

「あつ・・・」

エリーゼの言葉に明らかに動揺しているイザナ。

ラクスはイザナの動揺を見逃さず、イザナを静かに睨んだ。

イザナはエリーゼの名前を出したからなのか、それともラク스에睨まれているからなのか動揺し続けていたが、すぐに立て直した。

「いやいや、だって君達王族じゃない？名前ぐらい、知ってるに決まってるよ〜！」

「へー、そうなんだ！」

「・・・」

ラクスはそれを聞いて睨むのを止めると、イザナは落ち着いたのか、安堵する。

だが、ラクスはイザナに不審を抱き始めたの言うまでもない。
アクアもイザナの言動に不審を抱いているのか見つめている。

「……」

「（どうやらアクア様も不審を抱かれています様だな……）」

「いやー、それより君達、タイミングが良いよ。今日は大きな宴を開くつもりだったんだ！実は今、君達の他にもすごい大物ゲストが来ちゃってるからさー！」

「大物ゲスト……？」

「……はいはいっ！何と白夜王国王族の皆様ですっ！」

イザナがそう言うと、白夜風の扉である襖が開かれ奥から白夜王族が現れた。

「カムイ姉様……!？」

「なに!?カムイ……何故、ここに……!？」

「……」

「カムイ……」

「リョウマ兄さん……皆……」

突然の再開にカムイと白夜王族の一同は無言が続く。

だが、ここでマークスが動いた。

「下がれ、カムイ。こいつらは危険だ！」

「何だと……？卑怯な暗夜王国の手の者が戯言を」

「ほう……聞き捨てならんな、その言葉。国の侮辱は、私が許さんぞ」
「侮辱などしていない。真実を述べたまでだ。」

「……貴様、相当私に斬られたいと見えるな」

「良いだろう、掛かってこい！」

二人は今にも武器を手に戦おうとするが、イザナに慌てて止めに入られた。

「わわっ！ダメダメダメダメ!!ストゥゥゥゥッ!!!」

二人に割って入ったイザナは両手で二人を制す。

「君達、こんな所で剣なんか抜いたら条約違反になっちゃおうよー！」

「……条約違反？」

「そう！我がイズモ公国内では、条約により戦闘行為が禁止されてい

ます！これ、破つちやうと王族様でも厳罰に処されちやうから気を付けてよね〜！」

イザナが怒りながらそう言うと、マークスとリヨウマは落ち着いたのか身構えらのを止める。

「・・・と言う訳で、君達全員、武器を下ろしてください！これは公王イザナの命令だよ〜！」

「・・・仕方ないな」

マークスはそう言うと、武器を収めラクスも同様に収めた。

「しかし、気を許した訳ではない・・・例え獲物は無くとも・・・隙あらば討つ」

「・・・！」

リヨウマの言葉にマークスが反応した瞬間、二人の間を何かが飛んだ。

二人は飛んで行った物を見ると、それは壁に刺さった小さな裁縫針だった。

「・・・やれるものならやってみろ。此方も武器では無いが、凶器にはなりうる物を全てをこの通りだ・・・」

ラクスの殺気に、リヨウマは冷や汗を流す。

「ま、まあまあ、喧嘩しないの〜！いくら戦争中でも、この国にいる限りは戦つちやダメ。この武器は君達が国を出るまで大切に預かるからね〜。じゃ、宴の準備ができるまで城内でこゆるりとお寛ぎあれ〜！」

イザナはそう言うと、退室して残されたのは暗夜王族と白夜王族とカムイそして、ラクスだ。

重い空気が流れる中でラクスはいるしかなかった。

「・・・」

「・・・ふん」

〜リヨウマ side〜

俺は久々に冷や汗を掻いてしまった。

マークス王子と言い争いあっている中で、俺が獲物が無くとも討つ、と言う言葉に父上の仇であるラクスが反応し、裁縫針を投げてき

たのだ。

何故、裁縫針なのか分からなかったが問題なのはそこではない。裁縫針は俺の首の脈を狙って投げられた物だったのだ。

もし、奴が本気で命を取りに来ていたらと思うと背筋が凍った。

「俺は奴に勝てるのか・・・」

俺は不安に思いつつも、イズモ公国で過ごすのだった。

side終了

ラクスはカムイ達の元を離れて一人、宛がわれた部屋の縁側に座って庭の風景を見ていた。

たった一人の空間で、ラクスは緑茶を飲むんでいると、ラクスは心配を感じ警戒する。

「・・・何者だ？」

「ひい！す、すみません！ま、迷ってしまいました！その・・・」

出てきたのは白夜の王女サクラだった。

サクラはもう涙目になってラクスに弁明すると、ラクスは脅かした訳でも無いのに泣かれるのは罪悪感が出てくる。

「・・・はあ、落ち着け。取り合えず茶を飲むか？」

ラクスは抹茶を差し出すと、サクラは警戒しつつも縁側に座り緑茶を受け取る。

怯えるサクラは緑茶を飲まずに、そのまま緑茶を見続ける。

「・・・」

「毒は入ってはいません・・・何なら、毒味しても良いですよ？」

「け、結構です！」

ラクスに促される様にサクラが緑茶を飲むと、今までの怯えた表情は消えた。

「美味しい・・・」

「ふふ、そうですね・・・」

ラクスはそう言うと緑茶を飲む。

くサクラ side く

私は道に迷っていると、一つの部屋に辿り着きました。

人がいる気配がするので、見てみるとそこには父様の仇であるラクスさんが座って緑茶を飲んでいました。

私はリヨウマ兄様の言い付けで、ラクスさんには絶対に近づかない様に言われている事を思い出したのですが、

「それにしても此所に来るとは物好きな人だ」

「は、はい……」

ラクスさんと何故か緑茶を飲んで話しています。

「(迷ったなんて、もう言えません!)」

私はどうすればと考えてラクスさんを見ると、何だか優しくそうな雰囲気を出していて、とても父様を殺した人とは思えません。

「サクラ様」

「は、はい!」

「後で送ろう……今頃、探し回っているかも知れないしな」

ラクスさんはそう微笑みながら言うと、また緑茶を飲む。

私はラクスさんのその姿を見てみると、とても落ち着きました。

「はい……」

私は緑茶を口にしようとした瞬間、バタバタと走る音と共に、イズモ兵が取り囲みました。

黒白の王子

いきなり取り囲んできたイズモ兵からサクラを庇う様に後ろに隠したラクスは、イズモ兵を睨む。

「お前達……これはどう言う事だ……?」

ラクスはイズモ兵に問うと、急に光だしラクスは目を瞑りそして、目を開けるとそこにはイズモ兵ではなく、暗夜兵が姿を現した。

「暗夜兵だ?!」

「ラクスさん!これはどう言う事ですか!」

「……分らんが、どうやら私が知らない間に独断で軍を動かした奴がいるのかもしれん……」

ラクスはそう言うのと、暗夜兵の一人が話し掛けてくる。

「ラクス様……その白夜の王女をお渡しください」

「ほお……それは何故だ?ここは中立の国の筈だ。余計な争いを持ち込む様な奴に渡す必要はないのだがな?」

ラクスは少し挑発的に言うが、暗夜兵は動じない所を見ると、それなりに精鋭が混じっているのだと、ラクスは考える。

「……渡してください」

「嫌と言ったら?」

「力づくで……」

暗夜兵はそう言うのと、剣や槍、斧を取り出して構えた。

現在、ラクスには武器は無い。

その状況を踏まえて暗夜兵は武器をラクスに向けたのだ。

「お前ら、私が武器が無くとも戦えないと思っっているのか?」

ラクスは暗夜兵に殺気を浴びせると、暗夜兵達は怯んだ。

ラクスは怯んだ隙に、素早く飛び込み手刀で剣を持つ暗夜兵が手に持っていた剣を奪い取ると、剣を構える。

「さあ、来い」

「ッ!……せやあ!」

「あまい」

ラクスは向かってきた暗夜兵を倒し、サクラを守る。

暗夜兵は一斉に飛び掛かるがラクスは剣を横に一振りすると、暗夜兵を斬り飛ばした。

「ふう、無事ですかサクラ様？」

「は、はい！」

「この事態は私も知らぬ事・・・恐らくカムイ様達にも危険があるかと思えます」

「姉様達も・・・!？」

ラクスは頷くと、サクラを背に城内を見ると、慌ただしく動く兵が見える。

「・・・サクラ様。私から離れない様に」

「はい！」

ラクスはサクラを守りつつ、城内を進むと暗夜兵が飛び掛かってきた。

ラクスは暗夜兵の攻撃を防いだり、避けたりしながら倒していき、更に進む。

暫く歩いた後、ラクスは壁の角から覗き込む様に見ると、警備が固い部屋があった。

「彼処が怪しいな・・・」

「リヨウマ兄様達はご無事なんでしょうか？」

「恐らくは・・・貴方様が捕まっていない以上は奴等も貴方の兄妹には手を出さないでしょう。何しろ白夜の王族が一斉に集まっている。全員捕まえて処刑する腹だろうし・・・」

ラクスはそう言うと、サクラは安堵する。

今はリヨウマ達に危害が加わらないとサクラは安心したのだ。

「だが、良い加減助けてやらないと殺されるかもしれない・・・サクラ様、少しお待ちを」

ラクスはそう言うと、静かに見張っている暗夜兵を素早く殺すと、錠前を見る。

ラクスは錠前を確認すると、道具を取り出して開け始めた。

時間は然程長くなく、すぐに開いて扉を開けた。

「ッ!? 貴様は!？」

「どうやら無事の様だ・・・サクラ様」

「は、はい！」

ラクスはサクラを呼び出すと、サクラはリヨウマ達を見て泣きついた。

「良かった・・・無事だったのですね！」

「すまない心配を掛けたな・・・」

「リヨウマ様」

リヨウマはラクスを見ると、何かが投げられ受け止めるとそれは剣だった。

タクミには弓、ヒノカには薙刀と武器を投げて渡す。

「それで自身達を守れるでしょ？では、私はカムイ様の元に行きます」
「待て」

ラクスはそう言って立ち去ろうとすると、リヨウマが呼び止めた。

ラクスは振り替えるとリヨウマは話した。

「・・・サクラを守ってくれて感謝する」

「父の仇に礼を言うとはな」

「サクラを守ってここまで連れてきてくれたのは事実。俺は仇でも感謝はする」

「・・・そうか」

リヨウマの言葉を聞いて再び振り替えると、ラクスは言った。

「・・・悪かった。お前達の父親を殺してしまって・・・」

ラクスはそれだけを言うと、カムイの元に向かっていく。

城の奥ではカムイ達によって激戦が繰り広げられていた。

イザナの正体が暗夜の魔導師ゾーラだと発覚し、囚われたリヨウマ達を助ける事とゾーラを倒す為に奪われた武器を取り返して、戦っていた。

「まったく、父さんはいったい何処をほつき歩いているのかしら！」

「そんな事言ってもラクスさんは私達と離れて過ぎたのよ！」

激戦の中に、レーラとゾファイが巧みな連繋で暗夜兵を倒していき、更に奥に進むとゾーラがいた。

「ツ!? 貴方様方はレーラ様とゾファイ様!？」

ゾーラは二人の名前を叫ぶ。

因みにゾファイはエリーゼが母の為、王族に当たり自然と、暗夜兵はゾファイを様付けする。

「ゾーラと言ったわね。貴方は暗夜の兵を無断で動かさし、イズモ公国を陥れようとした。それだけではない・・・白夜の王族達を卑怯な手段で、抹殺しようとした。これは明らかに軍則違反に当たる・・・よって、ゾーラ。貴方を討つ！」

「そんな!? 私は暗夜王国の為にした事なのに！」

「何がよ! 結局、貴方がしてるのは独断じゃない! しかも、中立国の公王を捕らえるなんて！」

二人から責められるゾーラは激しく汗を流していると、ゾーラは急に顔が青くなった。

「あ、あわわわ・・・」

「? どうしたのゾーラ」

「急に青くなるなんて・・・」

二人はゾーラの行動に疑問を持っていると、後ろからゆっくりと足音が聞こえた。

二人は振り向くと、そこには血塗れたラクスが本気で怒っていた。

「と、父さん・・・?」

「ら、ラクスさんが、ここまで怒るなんて・・・」

「・・・首謀者はお前か？」

「は、ははは、はい！」

「そうか・・・」

ラクスはゾーラを暫く睨むと、剣を素早く振るってゾーラを斬った。

ゾーラは大量の血が吹き出して倒れた。

「な、何故・・・」

「お前が独断で軍を動かさなければ良かったんだ・・・」

「そ……んな……グフツ」

ゾーラが息絶えた事を確認したラクスはレーラとゾフィーの方に振り向いた。

二人はビクツ、となつて縮こまった。

「……レーラ、ゾフィー様、よくここまで戦ってくれた」

「は、はい……！」

「う、うん……」

「ふう、後の事は私に任せてお前達は少し休んでこい」

ラクスの言葉にレーラは疑問に思った。

独断で動いた暗夜軍は多数であり、まだ戦闘をしているとレーラは考えたからだ。

「えつと……残党は……？」

「……全員始末した」

ラクスはそう言うと、歩いていく。

レーラは父である、ラクスの初めて見た冷酷な目に恐れをなして震え上がっていた。

宴

ゾーラをラクスが殺した後、本物のイザナを助け出した。

本物のイザナもかなりの軽く、ゾーラのあの行動に納得がいった。

「いや〜！ありがとうね〜！お陰で助かつちやったよ〜！」

「・・・軽い」

ラクスは全員が引く程のイザナの軽さにぼそりと、呟いてしまう程だった。

ラクスは宴に置かれている酒・・・ではなく水を飲んだ。

「あれ〜？ラクス。君はお酒を飲まないの〜？」

「ええ・・・何故かガロン様に公の場での飲酒を控える様に言われていて・・・」

「え〜！ここは暗夜王国じゃないんだよ〜！さき、飲んで飲んで！」

イザナはそう言うと、ラクスに酒を注ぐ。

ラクスは迷いながらも公王の酒を飲まないのは失礼にあたると思え、飲んだ。

「どう〜？」

「・・・」

「あれ？どう」

イザナが急に黙り混んだので喋りかけようとしたが、いきなり杯を出してきた。

「え、え〜と・・・ラクス？」

「酒・・・」

「酒？」

「酒を出せー!!!」

ラクスは顔を赤くしながらイザナにそう叫ぶ。

これには、かなり軽いイザナも吃驚して腰を抜かした。

ラクスは怒鳴ると椅子に座って今度は笑いだした。

「はっはっはっ！もつと酒を飲ませろ〜！」

「ら、ラクスさん？」

「誰だラクスに酒を飲ませたのは!？」

カムイはラクスの変貌ぶりを、マークスは何か知っているのか叫ぶ。

「奴は実力は申し分ない騎士だ……だが、奴は酒が極端に弱い！一度、父上がストローで酒を飲ませたらこうなったのだ!!」

「そんなに弱いなら何で宴を開く前に言ってくれなかったの!？」

マークスの言葉にレオンが怒る。

マークスは冷や汗を流しながら弁解する。

「奴は父上の命令されていた。公の場での飲酒は禁止するという事を……だから、飲む事はないと思っていた」

マークスがそう言い終わった瞬間、ラクスはカムイ達の方に振り向き、今度は泣き出した。

「ちくしよ！聞いてくださいよ！」

「え、えつと……何でしょうか……?」

「実は先週、ガロン様から仕事の書類を大量に送られて来たんですよ！何で俺一人がこんなに仕事をするんですか!？」

「は、はあ……」

カムイも流石に対処できずにいると、リヨウマが現れた。

「おい！大人しくしないか！」

「よせ！リヨウマ王子！」

「うるせえ！」

「うおッ!？」

マークスが止めに入ったが、時既に遅くリヨウマは背負い投げされた。

リヨウマは間一髪、白夜兵に受け止められたがラクスの暴走を止めようがなかった。

「どうするんだよ彼奴……」

「奴の酔いが覚めるまで待つしか……」

「でも、それじゃ被害が……」

「どうしたのですか?」

項垂れる一同の元にベルカとレーラがやって来た。

「あら、ベルカとレーラ。実は貴方の旦那さんが酷く酔っちゃったの

よ」

「・・・またですか？」

「ただと？　いったい言う事だ？」

「はい。実はラクスの普段の頑張りを労おうとして酒を飲ませたら・・・抱きつかれました／＼」

ベルカは恥ずかしそうに言うと、レーラは苦笑いであった。

「な、成る程・・・」

「何回かお酒を飲ませた事はありませんが暴れるのは初めて見た」

「なに？　奴はお前にしか抱きつかないのか？」

「分からない。見た事がないから・・・」

マークスにベルカがそう言うと、マークスは考える素振りを見せると、ベルカに提案した。

「すまないが、少しラクスの所に行ってみてくれないか？」

「マークス兄さん!?　ベルカは私の臣下よ。危険な事をさせたくないわ!?」

マークスの意見にカミラが反対した。

だが、回りは他に良い案は無く項垂れる。

「・・・行ってみます」

「ベルカ!?」

「あの人は私の夫です。その夫の暴走を止めるのも伴侶である私の役目です」

ベルカはそう言うと、ラクスの元に向かっていく。

ラクスは酒を杯に入れている所で、ベルカが近づいてくるのを感じたのか振り向く。

「・・・ラクス」

「・・・」

ラクスはベルカを黙って見ている。

静かな沈黙が続くが、先に動いたのはラクスだった。

「ベルカー!!!」

「きやあ!?!」

急に抱きつかれたベルカは声を挙げたがラクスは全く気にしない。

「もう何処に行っていたんだよ〜！全く〜！」

「・・・はあ」

ベルカはラクスに呆れながら見ていると、ラクスの手を外して抱える。

「ご迷惑をお掛けしました」

「本当にすみません！」

ベルカとレーラはそう謝罪すると、会場からラクスを連れ出す。

くカムイsideく

私は今回信じられない物を見てしまいました。

それはラクスさんが、酒によって暴れたり泣いたりするという騒動でした。

まさか、あのラクスさんがここまでお酒に弱いとは思いませんでした。

「しかし、一体誰がラクスに酒を・・・」

「は〜い！僕だよ〜！」

「・・・貴方でしたか」

イザナさんの言葉にマークスは呆れて額に手を当ててしまいました。

まあ、私も知らなかったので構いませんがラクスさん、リヨウマさんを投げてしまっていましたから大丈夫でしょうか。

「はあ・・・まさか背負い投げをされるとは思わなかったぞ・・・」

「あ、ああ・・・」

「兄さんの巨体を投げるって一体何処にそんなかいりきがあるんだろうね・・・」

「はう、怖かったです・・・」

取り合えず酒の勢いだと思ってくれている様で良かったです。

「それよりベルカさんは大丈夫でしょうか・・・」

「・・・」

宴の後、ラクスさんとベルカさんは朝まで見掛けませんでした。

朝に見掛けると、ベルカさんの顔は紅くしていたり、ラクスさんは何も思い出せないと言っていたりしてました。

Side 終了

妖狐の山

カムイ達とラクスはイズモ公国を去ると、旅を続けた。

だが、その道中に多数の白夜の軍勢を発見したのだ。

「カムイ姉さん、大変だよ。この先に、白夜の軍勢が……！」

「ああ。数千もの兵が街道を塞いでいる。このまま進めば……全滅は必至だろう」

「！まさか……」

「そうね。恐らく、先に戻ったりリヨウマ達が兵を配備したのだと思うわ。まあ、私達の居場所が張れた以上、当然の措置だと思うけれど」
あの時、リヨウマ達はカムイ達よりも早くイズモ公国を去っていた。

ラクスはこの為の早出だったのかと、舌打ちする。

「これでは王都までは辿り着けませんね……仕方ありません。一旦戻って、別の道を考えるしか……」

「……いいえ。此処からでも、行ける道は無い訳ではないわ」

「え……？」

アクアの言葉にラクスは疑問に思った。

そんな道があるのかとアクアの話に聞く。

「良い？この街道の西側に……白夜王国の者でも足を踏み入れない山が存在するの。そこなら白夜兵の手は届かない筈よ。……けれど、その山には狐に姿を変える種族、妖狐が棲む里があると言われているわ。もし彼らに見つかれば、生きて帰れるかは分からない」

「妖狐……」

ラクスはカムイを見て、決定を待った。

死ぬかもしれない戦いかもしれないが、カムイが命じるなら進むと、ラクスは考えていた。

「ねえ、どうする？わざわざ危険を冒したくないのなら無理強いはしないけれど……時間が経てば経つ程、白夜の守りは強固になっていくわよ」

「……分かりました。その山を通りましょう。戦が長引くのは、

何としても避けなければ。それに、私達は一刻も早く・・・」

「ええ・・・貴方の言う通りね」

ラクスはカムイの最後の言葉を聞き取れなかった。

一刻も早く戦いを終わらせたいのだろうか、ラクスは考え気にしない事にした。

「(気にした所で何にもならんしな・・・)」

「じゃあ、道案内は私に任せて」

アクアはそう言うと、歩き出す。

カムイ達とラクスは山道を歩いていった。

ラクスは回りのペースに合わせる為に馬を引いて歩いており、それなりに疲労が出る。

「けっこう登るな・・・」

「だが、此所を進まなければ引き返すか、愚策だが数千の白夜兵と戦うことになる。それを避けたいなら此所を通るしかない」

「そうですね・・・流石に数千となれば勝つのは無理ですし、引き返すのもね・・・」

ラクスはマークスにそう言うと、広い場所に出た。

その場所は平地とまではいかないが、それでも平たい土地で木々も所々しかない。

「・・・此処は本当に山か？」

ラクスがそう呟くと、草むらが揺れた。

ラクスは馬の手綱から手を離してディアブロスを抜いて、構えた。他の仲間も同じく武器を構えていると、奥から人が出てきた。

だが、尻尾や耳が生えており人とは思えなかった。

「・・・こいつはアクア様の言っていた妖狐か」

ラクスはそう言うと、妖狐はいきなり狐に変身して襲い掛かってきた。

ラクスは警戒する様にそう言った瞬間、多数の妖狐が草むらが現れ

た。

そして、その中に人の姿を取る妖狐がいる。

「・・・貴様は何者だ？」

「僕かい？僕はニシキ。この里の長をしてるんだ。ヨロシクね暗夜の人」

「・・・私達が暗夜王国側の人間だと何故、分かったの？」

ニシキの言葉にアクアが言うと、ニシキは笑顔で応える。

「着ている物と匂いで、何となく。僕、暗夜王国の人には何度もお世話になってるからね。里から出て迷子になった時も、皆優しくしてくれた・・・暗夜王国の人は大好きだなー」

「・・・」

「何だか思ったより友好的ですね出会ったら命はないような言い方をされているみたいですけど、もしかしたら、それはただの偏見で、話せば分かって貰えるんじゃないか？」

「・・・いいえ。どうやらそれは、期待できそうにないわ」

アクアの言葉にカムイは疑問に抱く。

「ど、どうしてですか？」

「こいつらがかなり殺気立ってるからだよ・・・」

ラクスはそう言うと、明らかに歯を剥き出して唸る妖狐の群れだ。

ニシキは笑ってはいるが、目は笑っていない。

「えへへ、久々のお客さんだから嬉しいんだけど・・・残念だなあ。この場所に来てしまったからには皆・・・死んでもらうしかないよ」

「何ですって・・・!?で、でもさつき、人間が好きだって・・・」

「それは、彼らが密猟にあっているからです。昔、私は密輸をしていた商人を捕縛した際にあっただんです。・・・妖狐の皮が、それも大量に・・・」

ラクスの言葉にカムイは驚愕し、ニシキは笑顔から睨んでいる顔になっている。

「うん。僕は外の世界で会う人は好きなんだよ。でも、ここに来る人は危ない人が多いから信用したら毛皮を取られて殺される、つてそう言う言い伝えられてきてるんだ。そういう人が来たら、ちゃんと始末

しておかないと。」

「ち、違います！ 私達はそんな事はしません！ただ此所を、通らせてほしいだけなんです！」

「うーん．．．信じてあげたいけど．．．僕は里の長だから、皆の事を守らないといけないんだ。大切な皆を死なない為には、余所者を簡単に信じる訳にはいかない。だから、悪いけど．．．」

ニシキにそう言って身構えた。

「待て」

「なに？」

「どうしたら信用して貰える？我々はお前達、妖狐と戦っても特はしないむろん、毛皮もいらん。此所を通るだけが目的なのにお前達を殺してまで行くなんて夢見の悪い事はしたくない．．．どうすれば通して貰える？」

ニシキは考える素振りを見せると、ラクスに提案する。

「じゃあ、これならどうか？」

ニシキは笑顔で条件を言うのだった。

密猟者狩り

ニシキの出された条件、それは山の近くに現れた人間を追い出す事だった。

「最近ね、人間達が山の近くに現れて木々を切って何か作ってるんだよ。そこは僕らの里の近くだから追い出してほしいんだ」

「・・・この辺りで。まさか開拓か・・・？まあ、良い。条件を飲もう。成功したら約束通り、信用して道を通してくれよ」

カムイ達とラクスは、その人が集まっている場所に向かっていった。

カムイ達とラクスが来てみると、確かに人が集まって木を使って何かを建てている。

ラクスはそれを見て開拓ではないと悟った。

「あれは、狩猟木屋だ・・・」

「狩猟木屋？」

「ああ・・・まさか奴等、この近くに拠点を建ててまで密猟をする気か」
ラクスは鋭い目で密猟者と思われる者達を見る。

密猟者達は狩りをするとは思えない服装と装備をしている。

鎧と人間相手に使う武器などが大量に置かれていたり、あるいは装備されている。

「どうみてもただの密猟者じゃないね・・・」

「はい・・・恐らく流れの傭兵団の可能性もあります。ここ最近の戦で荒稼ぎしていると思われませんが、それでも足りない所があるんですよね」

ラクスはそう言うと、密猟者達は集まり始めた。

「まずい！奴等行く気だな！」

「行きましよう皆さん！」

カムイの号令で、密猟者目掛けて突撃する。

密猟者達はカムイ達を見て、大混乱になった。

「な、何で暗夜軍がいるんだよ!?!」

「し、知るか!?!とにかく応戦しろ!!」

密猟者達は一斉にカムイ達に向かって攻撃を開始した。

「退け!」

「ぐわあ!」

「ぐえ!」

ラクスは馬を走らせ密猟者を斬り倒しながら指揮官を探す。

密猟者達の攻撃は激しさを増すが、それでも多くの激戦を乗り気つてきたカムイ達とラクスの敵ではなかった。

密猟者達は、徐々に数を減らしていき遂に指揮官と少数の密猟者だけになった。

「くそ、何なんだよ!妖狐の皮を剥いで売ってやろうと思ったのによ!」

「そんな貪欲な考えがあるから我々は動いたんだ。お前達の身勝手に妖狐の人間に対する信用が失われて、その妖狐によつて殺される者もいただろう。だから・・・お前達の様な者をこれ以上は放置する訳にはいかない!」

ラクスがそう言うと、密猟者の指揮官は歯ぎしりしてラクスを睨むと、襲い掛かってきた。

「死ねえ!」

振るわれた斧をラクスは防ぐと、後ろから蹄の音がした。

「父さん!」

「ん?レーラ?」

現れたのはレーラで、剣片手に指揮官に向かって行き剣を振り上げた。

「掛かってこいやあッ!」

指揮官がそう叫ぶが、レーラは臆する事なく馬を走らせ剣を振るつた。

レーラの剣を振るうのと同時に、指揮官の斧も振るわれた。

「はあッ!」

「うおおりやあッ！」

互いに武器を同時に振るいレーラは通りすぎた所で止まる。

「チッ・・・掠ったわ」

「・・・ぐッ！」

「まだまだ終わりじゃないわ！」

レーラが指揮官深い傷をつけ、そこへゾフィーが槍を手に馬を駆けて指揮官の胸を突いた。

レーラの斬り込みとゾフィーの止めで、指揮官は倒れ決着は着いた。

ラクスは少し冷々したが、レーラとゾフィーが無事で良かったと思っただ。

「レーラ！血が出てるよ大丈夫!?!」

「大丈夫です・・・少し掠っただけです」

「はあ、いきなり横から飛び出すからだ。不意は突いていたが、張れてたしな。ほら、レーラ傷を見せろ」

「はい・・・」

密猟者は全滅し、ニシキの条件を達成した。

カムイ達とラクスはさっそく、ニシキに報告しに行く事にした。

「ご苦労様！まさか本当にやってくれるなんて思ってたよ！」

ニシキは満面の笑みでカムイにそう言う。

「あの、これで通してくれますか？」

「良いよ。君達はこの里の住民を毛皮を狙ってた人間達から守ってくれたしね。通っても良いよ」

ニシキは笑顔でそう言うとかムイも笑顔で、礼を言う。

「ありがとうございます！」

カムイ達とラクスはニシキの許しを得て山を通過する。

「やっど、抜けられましたね」

「はい。ですが、まだまだ道はありますのでご油断無き様にお願いし

ます」

「はい」

カムイ達とラクスは先を急ぐ。

戦争を早く終結させ、平和を取り戻す為に。

番外編 肝試し

この話は本編と時間がずれた世界。

まだ存在しない子供がいたりする世界。

そんな世界の夏の暑い夜、こんな夜更けで子供を集めての肝試し大会を開こうと、カムイが言った事から始まった。

とある場所に集まったカムイ達とラクス、そしてその子供達がやって来た。

「それでは肝試し大会を始めます！」

「ルールは簡単だ。二人一組であの森をまっすぐに抜けて廃墟前の印を取ってくればゴールだ。言っておくが種々と仕掛けがあるから注意な」

カムイが宣言して、ラクスがルール説明を説明をする。

ここで、現在のペアを紹介しよう。

レーラ×ジークベルト

シグレ×カンナ

ディーア×ソレイユ

ルッツ×ゾフィー

フォレオ×イグニス

オフェリア×エポニーヌ

ペロア×ミドリコ

と、なっている。

「・・・」

「よ、よろしくレーラ」

無言のレーラに苦笑いで言うジークベルト。

「な、何だか怖いよ・・・」

「大丈夫だから。僕が側にいてあげるから」

怖がるカンナを励ますシグレ。

「はあ、肝試しなんて面倒だな・・・」

「良いじゃん肝試しぐらいー！」

やる気無しのディーアとやる気ありのソレイユ。

ルトは凄いと感じた。

「レーラはアクアおば様の怖い話を聞いたその後に、隅でガタガタ、てなつてあんな風になるのよ」

「そ、そうなのか・・・いつも鍛練でも戦闘でも勇敢な彼女にそんな弱点があるなんて」

「まあ、誰にでも弱点があるんよ。私だってアベルが戦闘以外で中々言う事を聞かないとかね」

ゾフィーが苦笑いでそう言うと、オフエリア×エポニーヌのペアが帰ってきた。

「へあ、ち、力が漆黒の魔に抜かれた・・・」

「しっかりしなさい！何で腰を抜かしたあんたをおぶって帰らないといけないのよ！」

腰を抜かしたオフエリアとオフエリアを担いで帰ってきたエポニーヌが出てきた。

次のペアはベロア×ミドリコのペアが行く。

「珍しい物を見つけた」

「行くよ！」

目的がずれた二人は森へと入っていく。

ジークベルトはもうレーラをどうにかしようとは思わず、順番を待ち続ける。

その隣にはゾフィーがいてレーラの背中を擦ったりしている。

数分後、ベロア×ミドリコのペアが帰ってきた。

腕の中には大量の何かを持って。

「珍しい物を拾えた」

「こんなに葉草が取れたよ！」

二人は笑顔で歩いて行き、次のペアであるフォレオ×イグニスが行く。

「じ、じゃあ行きますよ・・・」

「は、はい・・・」

フォレオとイグニスは森へと入っていく。

「ねえ、レーラ。もう怯えなくても良いんじゃないか？」

「わ、私は怯えてなどいません」

あくまで強がるレーラにジークベルトは本当に困ったと言った表情で見ている。

「ジークベルト。やっぱり怖い物は怖いだよ。あたしだってかなり怖かったんだから」

ゾフィーはそう言うのとレーラの背中を擦り続ける。

「・・・」

ジークベルト達が話していると、フォレオ×イグニスのペアが帰ってきた。

二人とも髪と服装が乱れており汗だくだった。

「はあはあ、もう、やりたくありません!」

「そ、そうですね・・・」

フォレオとイグニスがそう言って歩いて行く。

次のペアはシグレ×カンナのペアだ。

「ど、どうしょ。本当に怖いよ・・・」

「大丈夫だよ。僕がいるから」

シグレとカンナは森に入っていく。

「・・・」

「落ち着いた?」

「はい・・・」

ゾフィーに背中を擦られていたレーラは少し落ち着き、体育座りをして座っている。

レーラがこの座りかたをするのは、大体が落ち込んでいる時だ。

「・・・情けない。私がかここまで怯えるなんて・・・」

「はは・・・まあ、大丈夫だよ。皆も怖がって帰ってきてたし、オフエリアなんて腰を抜かしてたんだよ」

オフエリアの恥ずかしい事をちやっかりと言うゾフィーにレーラは暗い笑みで礼を言う。

「ありがとう・・・」

レーラとゾフィーが話していた時、シグレ×カンナが帰ってきた。シグレとカンナは笑顔で帰ってきたのだ。

「怖くなくっただらろ？」

「うん！シグレさんがいてくれたから！」

シグレとカンナがそう言っ歩いて行くと、遂にレーラとジークベルトの番が来た。

「行くよレーラ」

「は、はい・・・」

「頑張ってねー！」

二人は暗い森をランプ一つで歩いてた。

レーラはジークベルトの隣で歩いて怖くないと言う事を示しているのか、無表情でいる。

「ねえ、大丈夫？」

「・・・はい」

青ざめている顔で説得力がないレーラにジークベルトは苦笑いしかできない。

暫く歩いていると、木の上からいきなり不気味な人形が落ちてきた。

「きゃあああああッ！」

「ちよっど!?落ち着いて！」

レーラは叫びながらジークベルトの腕にしがみついている。

ジークベルトは顔を赤く染めてレーラを落ち着かせ様とした。

「・・・こ、怖くないです」

「分かってるよ。でも、腕を離してくれるかな？もう、動き」

ジークベルトは腕を離そうとしたが、レーラは離さない。

むしろ、もっと強くしがみつく。

「れ、レーラ？」

「お願いしますジークベルト様。暫くこのままお願いします・・・」
震えながら見つめてくるレーラにジークベルトは赤面しては、頷く。

二人はそのままの体勢で歩いていると、道端で倒れ込んでいる水色の長い髪の女の人を見つけた。

「ツ!?その人、大丈夫ですか!？」

「・・・ジークベルト様。これは肝試しですよ?もしかしたら・・・」
ジークベルトはそう声を挙げ、レーラは怯える。

女の人はゆっくりと後ろ向きで立ち上がると、声を掛けてきた。

「・・・探して欲しいの」

「な、何をですか?」

「私の・・・私の目を探して!!!」

そう言っただけ振り向くと、女の人の目が無かった。

流石のジークベルトも叫びを挙げた。

「うぉあ!？」

「きゃあああああッ!」

「・・・ふふ、二人とも私よ」

女の人はそう言うと、目を布で拭くとアクアの顔だった。

「アクアさん?」

「アクア、さん?」

「ふふ、二人の驚きぷりはどのペアよりも上よ。次も仕掛けがあるから頑張ってね」

アクアはそう言ってレーラとジークベルトのペアを手を振って見送った。

「それにしても凄く怖かったな・・・」

「は、はい・・・」

レーラとジークベルトは歩いていると、草むらからいきなり大きな巨大な狼が現れた。

「うわあ!」

「きゃあああああッ!」

「お、おい。そこまで驚くか?」

そう言うと、光り出し収まった時にそこにいたのはフランネルだった。
た。

「いや、あの姿で出てきたら驚きますよ・・・」

「こ、怖く・・・怖くない・・・」

レーラは涙目で怖くないと言うと、ジークベルトは苦笑いする。

「まだまだ仕掛けはあるぜ。がんばれよ」

フランネルとも別れてレーラとジークベルトは歩く。

その後、スズカゼに後ろから脅かされたり、大きな音を出して驚かさるたりするも、ようやく廃墟前に着くと印が置いてある。

「じ、ジークベルト様。早く取って帰りましょう」

「分かったよ」

ジークベルトはそう言うて印を手を伸ばした瞬間、廃墟からいきらに竜が現れた。

「ガオー！」

「・・・」

「・・・」

目の前の竜の余りに情けない咆哮に唾然とする二人に、竜は暫く立ち尽くしてから光り出すとカムイになった。

「はあ、最後の方でも驚きませんでした・・・」

「は、母上・・・」

「カムイ様・・・」

カムイは落ち込みながら印を二人に差し出した。

「はい。これを持って戻ってね」

「あ、ありがとうございます・・・」

「な、何故かすみません・・・」

二人はこの気まずい雰囲気から脱却したいのですぐにその場から去る。

二人は帰り際も威かされ、驚きながら歩いていると、空から竜が降りたって咆哮を浴びせた。

「グワオオオオオッ！」

「うわあ！」

「ぎやあああああッー！」

二人は驚いていると、竜の上に誰かいた。

それは、無表情で二人を見るベルカだ。

「ベルカさん」

「か、母さん!？」

「・・・二人共、熱いわね」

「え?」

レーラとジークベルトがお互いを見ると、ジークベルトの腕にレーラがしがみついている状態だった。

レーラは口をパクパク、と開けて赤面した。

「ち、違うの・・・これは」

「大丈夫よ。もう貴方は年頃の女の子なんだから」

ベルカはそう微笑むと、飛び立っていく。

「違うの!母さん!!!」

「もう、聞こえてないよ・・・」

レーラに苦笑いで言うジークベルトは、ベルカの言っている事を理解していなかった。

レーラは顔を両手で押さえながら歩いている。

「そんなに恥ずかしがらなくても・・・」

「だって・・・」

暫く歩いた二人は、出口付近までやって来た。

「もうすぐだよ」

「やっと終われる・・・」

レーラはもう疲れたと言わんばかりに、溜め息をついた。

「ん?」

「どうしました?」

「前に誰かいる・・・」

ジークベルトがそう言うと、レーラは目を凝らして見ると、そこにはボロボロの全身鎧で身に纏い、ボロボロのマントを羽織る馬に乗った騎士がいる。

「な、何なんだ・・・」

「ぼ、亡霊の役の人じゃないかしら・・・」

二人は震えながらみると、突如、騎士が馬を走らせて来た。

「うおおおおお、首を置いていけ」

酷く低い声なものにはつきりと聞こえた二人は本物の亡霊と思い、走って逃げ出した。

「うわああああああッ！」

「きやあああああッ！」

一人残された騎士は呆然と見た後に兜を取ると、そこにはラクスの顔があった。

「・・・そこまで驚かなくても」

ラクスは呆れながら二人を追いかけた。

暫く、二人は亡霊だと思い込んでいるラクスと鬼ごっこを興じる事になったが、すぐに捕まって出口に引つ張られた。

「たく、何も彼処まで驚かなくても」

「と、父さんの声が本物過ぎるのよ！」

「うん。あれは怖かったよ・・・」

三人は肝試しを終えて、スイカを食べていた。

「にしても、レーラ。お前はいつの間になんな大胆になったんだ？」

ジークベルト様の腕にしがみつくなんてな」

「そ、それには訳があつて！」

レーラが顔を赤く染めながら言うと、ラクスはニヤニヤ、と顔を歪ませている。

「まあ、お前がどんな奴に恋しようが勝手だ。空きにすればいいさ」

「だから違うって！」

「は、ははは・・・」

ジークベルトは隣にいるのに、二人はいないかの様に話す事に苦笑いする。

レーラは顔を赤く染めながらスイカを食べた。

風の部族

妖狐の山を通り抜けたカムイ達とラクスは、白夜王都までの中間にある風の部族の村の近くまでやって来た。

「白夜王都に行く為には風の部族の村を通るしかないわ」

「だが、風の部族は中立の立場にある部族だ。そう簡単に通してくれるのか？」

「・・・風の部族の族長さんと話しをするしかないのですね。どうか私達を通してくれるか頼んでみましょう」

カムイが言うと、アクアとラクスは頷く。

「軍のリーダーは貴方だ。我々は貴方が行くなら何処までも着いて行きますよ」

「ありがとうございます。ラクスさん」

ラクスの言葉にカムイは令を言うと、歩いていく。

風の部族の村の前まで来ると、武装して警戒する部族兵が現れた。

部族から見れば暗夜軍がいきなり現れたから警戒するのは当然とラクスは考える。

「何者だ！暗夜の者が何故ここに来た！」

「私達はこの村を通り抜けたいと思ってやって来ました。どうか、貴殿方の族長と面会させてください」

「面会だと・・・！・・・暫し待て！」

そう言うと、部族兵の一人が中に走っていく。

暫く、カムイ達と部族兵の無言の睨み合いが続いていると、部族兵が戻ってきた。

「面会の許可が降りた！代表者だけが入る様に！」

「カムイ様は当然として、他は？」

「私と貴方も含めれば良いと思うわ。カムイの守りにも最適なのは貴方だから」

「分かった」

アクアがそう言うと、ラクスは頷く。

三人は、村に入って族長の元に向かう。

村の奥に行くと、一人の半裸のスキンヘッドの男が立っていた。

「私が風の部族の族長フウガだ。今回は何でもこの村を通りたいと思うのだが、何ゆえだ？」

「はい。私達は白夜王都まで行かなければならないのです。その為には、この村を通るしかなく貴方に面会を求めました……」

「ふむ……だが、我々は中立の立場だ。例えどんな理由があろうと戦争をしているお前達を通す訳にはいかん」

フウガがそう言うと、カムイは俯く。

「どうにかありませんか？」

「ん？お主は今、噂になっておるラクスか？」

「噂？」

「うむ、何でも冷酷非道の暗夜王の騎士ラクスが、神刀夜刀神を手にした裏切り者の王女カムイと共に白夜王国を滅ぼそうとしていると……」

「……一部は間違っはてはいいませんが……それよりもどうにかありませんか？」

「……」

ラクスは話に戻すと、フウガは考える様に腕を組んでいる。

フウガの回答を待つカムイ達は唾を飲み込んだ。

「なら、お前達の力を見せて貰うとしよう」

「力を？」

「そうだ。我々と戦って勝てば村を通っても良いです……だが、もし、お前達が負けたらお前の持つ夜刀神を貰う」

「ッ!？」

フウガの案にカムイは驚愕した。

もし負けたら夜刀神を貰うと言うのだ、無理はない。

「どうしますか?」

「・・・その戦い、受けてたちます。私達はもうこれ以上の遅れは取りたくないんです」

カムイはそう言うと、フウガは微笑む。

「そうか。では、お前達の仲間を連れてきたのちに場所を変えようか」
フウガはそう言うと、カムイは頷いた。

風の村の覇者く前編く

仲間を呼び寄せると、戦闘体制に入った。

戦う場所は大きな風が吹き荒れ今にも、吹き飛ばされそうになる。「凄い風ですね。下手に動くと吹き飛ばされてしまうかもしれませんね・・・ん？至る所に竜脈を感じます」

「その竜脈はもしかしたら風を操れるかもしれません。その風を上手く使えば相手を吹き飛ばしたり、此方に引きずり込む事ができる筈です」

ラクスがそう言うと、カムイは頷く。

戦闘が開始され、戦いが始まった。

ラクスは左側の通路から馬を走らせて進むと、部族兵が数人待ち構えていた。

「遠慮はいらん！来い！」

「行くぞ」

ラクスはそう言うと、一気に馬を走らせて部族兵をディアブロスで加減しながら戦う。

部族兵を倒して進んでいると、いきなり風の向きが変わった。

「うおッ！」

ラクスは吹き飛ばされて別の場所に追いやれると、周辺には部族兵が大勢いた。

「やばいな・・・風の事をすっかり忘れていた」

「掛かれ！」

部族兵の一人がそう言うと、一斉に飛び掛かってきた。

ラクスは、部族兵の攻撃を紙一重で避けながらディアブロスを振るう。

「くツ・・・こいつ中々やるぞ！」

「困め！奴は今一人だ！」

「数が多いな」

ラクスがそう呟くと、また風が吹きラクスは身構えていると、ラクスではなく部族兵が吹き飛ばされた。

「何だ・・・まさか、竜脈か？」

「ラクス」

「ベルカか。すまない」

一人飛ばされたラクスの救援に、ベルカが飛んできた。

「全く、一人で突っ走るからこうなるのよ」

「はは・・・まあ、お前が来てくれたなら怖い者無しだ。行くぞベルカ！」

ラクスはそう言うと、馬を走らせ、ベルカも続く。

ラクスは迫ってくる部族兵を蹴散らし、ベルカは部族兵の天馬武者を倒して空の驚異を無くす。

ラクスとベルカは進んでいると、広い場所に出ると、部族兵と子供がいる。

「お前がフウガ様に挑む者か？」

「まあ、そんな所だ。所で何で子供がここに？」

「子供ではない！私はツクヨミ。勝負！」

ツクヨミと名乗った子供の威圧は凄まじい物で、ラクスも感心した。

「ほお、中々の威圧だな・・・なら、私も見せてやらないとな？」

ラクスはそう言うと、最大限の威圧を出す。

ラクスの威圧をまともに受けた部族兵達は次々と気を失っていき、残されたのはベルカと冷や汗を流すツクヨミだけだった。

「・・・何て威圧だ」

「そうか？まあ、そう感じるなら別に良いが・・・では、やるとすか」

ラクスはそう言うと、ディアブ羅斯を構えた。

ツクヨミは呪を構えて、ラクスと対峙した。

「・・・」

「来ないのか？やはり子供だな」

ラクスは挑発的に言うと、ツクヨミは怒った様な顔になって魔法に似た光を飛ばしてくる。

「私は子供ではないわ！」

「やればできるじゃないか」

ラクスはそう言うと、光を避けてツクヨミに向かっていく。

ラクスはディアブロスを振るうと、ツクヨミは避けてまた光を飛ばす。

ラクスは軽く避けると、ツクヨミを攻撃するとツクヨミはまた避けた。

「ふむ、実力も申し分ない・・・中々、厄介な相手だ」

「舐めるなよ。私よりお前の方が強くても・・・一矢報いてやる！」

ツクヨミはそう叫ぶと、ラク스에光を飛ばした。

「度胸も満天か。良い人材だが・・・」

ラクスはそう言うと、光を避けてツクヨミの懐に入ると、ディアブロスを勢いよく振るいツクヨミの腹を殴る。

「・・・ぐ、はあ！」

「まだ修練が足りないな・・・」

ラクスはそう言うと、倒れて気絶したツクヨミを見る。

「さてと、行くぞベルカ」

「ええ」

ラクスとベルカはツクヨミを倒して、先に進むとカムイ達が現れた。

「ラクスさん！」

「カムイ様。ご無事でしたか」

「私より風に飛ばされたラクスさんの方が心配です！怪我はないですか？」

「ええ。ご覧の通り」

ラクスはそう言うと、体を見せる。

無傷の体を見てカムイは安堵し、ホッと息をついた。

「良かったです・・・」

「私がそう簡単にやられないませんよ。では、フウガ殿の元へ行きましょうか」

カムイ達とラクスは走っていくと、かなり広いスペースの場所にフウガが腕を組んで立っている。

その回りには部族兵が多数。

「来たか」

「はい。私達は負ける訳にはいかないんです。貴方を倒して、先に進みます！」

「ふはっはっはっは、やはり面白い者だ。なら、私は全力で相手をするでしょう」

「共に行きましょう。フウガ殿を見る限り、かなりの強者……単独で戦っては勝つのは難しいでしょう。それに、この数です」

ラクスがそう言うと、カムイは頷いて夜刀神を構えた。

他の面々も武器を構えて対峙する。

「ふむ、確かに妥当な手段だ。だが、私が数で圧倒されるとは思わないよ」

「ああ、分かっている……」

「皆さん、行きますよ！」

カムイの号令でラクスと仲間達は一齐に飛び掛かった。

風の村の覇者〜後編〜

フウガとの戦いは始まり、部隊同士の一進一退の攻防が展開された。

その中で、フウガに対峙するのはカムイ、ラクス、マークスだ。

「ほお、お主も対峙するかラクス」

「随分と私の事を気にしているなフウガ殿。それは何故だ？」

「昔、わしは白夜王スメラギの親友だったと、言えば分かるか？」

「ッ!？」

フウガの言葉にラクスは驚愕した。

「・・・私を恨んでいるのか？」

「いや、今となつては恨みはしていない。それにお主は常に罪悪感に囚われて生きていると、初めて見た時に分かった・・・そんな奴へ恨んでも仕方なからう」

「・・・」

「ラクスさん・・・」

ラクスの悲痛な顔でフウガを見て、カムイはそのラクスを心配する。

マークスも何とも言えないと、言う顔だ。

「・・・そうですか。では、始めましょうか？フウガ殿」

「ふ、そうだな」

フウガはそう言うと、鋼の投撃棍を取り出し構えた。

ラクスも、ディアブロスを構え、カムイは夜刀神、マークスはジークフリートを構える。

「では、行くぞー!」

フウガはそう言うと、カムイ達に向かっていく。

フウガは棍棒をカムイに振るうと、カムイは避けてフウガに反撃する。

フウガは、カムイの攻撃を受け止めたが、ラクスの攻撃され、避けると今度はマークスの攻撃が来た。

だが、フウガは冷静にそれらを避けて再び、棍棒をカムイに振るう。

「くッ!？」

「どうした？夜刀神に選ばれた者がえらくへっぴり腰だな」

「まだまだ行きます!」

カムイはそう言うと、夜刀神を振るいフウガに攻撃すると、フウガは受け止め、マークスはその隙を突いて攻撃した。

「あまい!」

「ぐおッ!」

だが、フウガはマークスの攻撃を飛んで避けると、マークスを蹴る。フウガが着地すると、ラクスが馬を走らせて攻撃したがフウガに防がれる。

「中々の腕だな」

「伊達に鍛えていませんから」

ラクスはそう言うと、ディアブロスを離してフウガに斬りつける。フウガはまたしても避けた。

「やはり強いです・・・」

「三人同時に戦っていてこれ程とは・・・」

「ふ、伊達に歳を食っていないと言う事だ」

フウガは笑い、三人は息を切らした様に武器を構える。

「さあ、終わりにしようか!」

フウガはそう言うと、一気にカムイの元に迫り棍棒を振るった。

だが、その棍棒はラクスの手で防がれ掴まれていた。

「なにッ!？」

「今だ!!!」

ラクスがそう叫ぶと、カムイは勢いよく夜刀神をフウガに叩き付ける。

「はあ!」

「ぐはあ!」

フウガは堪らず気絶し、勝敗は決した。

戦いの後、フウガとツクヨミは目覚めカムイと話す。

「・・・どうやらお前達の力は本物のようだ。その力を証明された今、此所を通る事を許そう」

「ありがとうございます」

フウガの許可を得たカムイはフウガに礼を言った。

ラクスは無言で佇んでいると、フウガが話し掛けてきた。

「ラクスよ。わしは本当にお前を憎んではない。むしろ、お前がやった事の実は知っているつもりだ」

「・・・そうですか。ありがとうございます。少し気が晴れました」

ラクスはそうフウガに言うと、フウガは笑う。

「では、お前達の武運を祈っているぞ」

「はい」

カムイ達とラクスは無事に風の部族の村を通る事ができた。

次の目的地までの長い道を、ラクスは過去を振り返って進んでいた。

白夜王スメラギ暗殺

「数年前、暗夜王城」

この頃のラクスは新米騎士として、大忙しの日々を送っていた。鍛錬に、物の整理、ガロンの付き添い等の仕事をしている。

ガロンの付き添いは、ガロンがラクスをお気に入りとしており、何処かに行く際は絶対に行くのだ。

「はあ、全く仕事が多い・・・」

ラクスはそうブツブツ、と言いながら物を整理して片付けていると、後ろから声を掛けられた。

「その新米騎士。これも片付けておきなさい」

「はい！マクベス様！」

この頃のマクベスは、まだ軍師ではなく部隊長の立場であり、あまり出世に興味は無さそうだった。

「・・・やれやれ」

ラクスはマクベスに言われた物を持ち上げてしまおうとした時、一人の兵士が走ってきた。

「ラクス殿。ガロン様がお呼びです。至急、王座の間まで来てください」

「分かった」

ラクスは片付けている最中の物を置いて王座の間まで歩く。

優先されるのは、自分の仕事よりガロンの命なのだ。

ここまで気に入られて使われてくれるのに恩を仇では返せないのだ。

ラクスは王座の間まで来ると、兵士が王座の間の扉を開けてラクスを入れる。

ラクスが中に入ると、玉座に座るガロンがいた。

「ラクス。只今、参上いたしました・・・」

「ふふ、堅苦しい挨拶はやめい……わしとお前の仲だろう」

「分かりましたガロン様」

ラクスは堅苦しい挨拶は止めたが敬称は付けた。

ガロンは相変わらず真面目な奴と考えた。

「それで俺、いや私を呼んだご用件は？」

「ふむ……近々、白夜王国の王スメラギとその家族が此所に来る。持て成しの為にもわし自らが出迎え様と思つてな……」

「それで私も同行を？」

「うむ……」

ガロンは頷いた。

だが、ラクスは何か様子がおかしいと感じた。

現在、暗夜王国と白夜王国は一新即発の敵対関係にある。

そんな、敵対関係の王であるスメラギを此所に招く所かガロン自らが出迎えると言うのだ。

「明らかに何かおかしいが、もしかしたらガロン様は白夜との和睦を望んでいるのかもしれない」

ラクスはそう考えると、一礼した。

「分かりました。では、準備して参ります」

「うむ……」

ラクスは王座の間を出て廊下を歩いていると、見知った顔が見えた。

「(ベルカ……!)」

ラクスは咄嗟に隠れると、ベルカは通りすぎていく。

ラクスはベルカの首を絞めた事を悔やみ、今でもこんな感じになる。

ベルカが完全にいなくなつたとラクスは感じたら準備しに行く。

ガロンと共にラクスは、スメラギを出迎える為に暗闇が支配する王都にいた。

「此所で出迎えるのですか？」

「ああ。此所で出迎える・・・」

ガロンはその一言だけを言うと言った前方から誰かが来た。

近づくごとに徐々に姿を現し、見えたのは白い白夜風の鎧を着たスメラギとその後ろに隠れる様に見える少女、そして数人の護衛だった。

「ガロン王殿。此度の件の了承感謝する」

「いや、良い・・・」

「(やはり私の思い違いか・・・)」

二人の話を聞いている限りは特に何も無い。

ラクスは安堵していたその時、突然スメラギの護衛が矢の雨に襲われ死んだ。

「なッ!? 謀ったなガロン!?!」

「放て」

スメラギが雷神刀を抜いたが、ガロンは兵士に矢を放たせた。

スメラギは咄嗟に後ろの少女を庇う様に仁王立ちし、矢を大量に受け体勢を崩した。

「ガロン様、これはどう言う事ですか!?!」

「・・・ラクス、止めを刺せ」

「ガロン様!?!」

「くどい!!! 早く止めを刺さんか!!!」

反発したラクスにガロンは叱咤して黙らせる。

ラクスはガロンの叱咤に恐怖し、剣を抜いた。

「・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

弱り果てたスメラギをラクスは恐怖の目で見ながら剣を突き付けそして、スメラギの腹に勢いよく刺した。

ラクスは何人もの人の命を奪っているのに、スメラギに対してはかなり激しい罪悪感を感じた。

ラクスは剣を抜こうとした瞬間、スメラギに剣の刃を掴まれた。

「・・・お前は、それで・・・良いのか・・・ガロンは、国を滅ぼす・・・ぞ・・・」

スメラギはそれだけを言って刃から力なく手を放した。

ラクスは恐怖のあまり、力任せに剣を抜いた。

「はあはあ……」

「良くやったラクス……お前の手柄だ。ん？」

ラクスに話し掛けたガロンは不意にスメラギの方を見ると、恐怖した目で此方を見る少女がいる。

ガロンは斧を持って少女に向かっていく。

「まだいたのか。なら、此所で死んで貰うまでだ」

「お、お待ちください！」

ガロンの言葉を聞いたラクスは咄嗟にガロンの前に立ちはだかった。

「こ、この娘はまだ利用価値があるはず！ここで殺しても意味はありません！」

「……そうだな。なら、生かしてやろう。我が子としてな」

ガロンは少女の一掴みすると、ラクスに投げた。

ラクスは少女を咄嗟に受け止め様子を見たら気絶していた。

「其奴を北の城塞へ連れて行け。わしは王城に帰るとしよう……」

「はー！」

ガロンはそう言うと、兵士を連れて戻っていく。

ラクスは両腕に抱えた少女を見て、心に何か刺さる感覚を覚える。

「（私はこの子の父を奪ってしまったのか……）」

ラクスは悲痛な思いで、ガロンに命じられた北の城塞まで足を運ぶ。

王女カムイ

く北の城塞く

もう廃墟とも呼べる北に位置する城塞に、ラクスは少女を抱えてやって来た。

ラクスは少女を抱えて城塞内に入ると、そこは埃まみれでとても人が住めそうにない場所だ。

「こんな所に住まわせるのか・・・」

ラクスはそう呟きながら手頃でましな部屋を探す。

暫く歩き回った後、ようやく丁度良い部屋を見つけてカムイは一時的に床に置いて、ベットを整えてから少女を寝かせた。

その後にもう使えない木材の家具を使って暖炉を使った。

「少し汚れているが・・・まあ、ましだろ。雪も降るようなこんな寒い季節じゃな」

ラクスは椅子に座って窓の外を眺めていると、雪が降ってきた。

「・・・眠いな」

ラクスは目が少しずつ重くなるのを感じ、遂に眠ってしまった。

ラクスは眠っていると、揺すられる感覚を感じ目が覚めると、そこには気を失っていた少女がいた。

「ん？目が覚めたのか。具合はどうだ」

「・・・あの、此所は何処ですか？」

「此所は北の城塞だ・・・それより私が怖くないのか？」

「・・・お兄ちゃん。カムイの知り合い？」

「ッ!?!」

少女カムイはラクスの前で信じられない事を口にした。

目の前で、自分の父を殺した相手の顔を忘れている。

ラクスの考えられる事は一つしかなかった。

「(記憶喪失・・・まさか父を殺されたショックで)」

「お兄ちゃん？」

「あ、ああ・・・知り合いみたいな所です。何たって貴方は暗夜王国の王女なのですから」

「王女？」

カムイは首を傾げながらラクスを見る。

「そうです。貴方は訳あってこの城塞で暮らす事になりました。今はボロボロですが、きっと住み心地の良い場所にして見せますから・・・」

ラクスはそう言うと、カムイの頭を撫でた。

カムイは頭を撫でられて嬉しそうに笑う姿に、ラクスは更に罪悪感に苛まれた。

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません・・・それよりお腹空いてませんか？何か作りますよ」

「うん！」

ラクスはカムイを連れて食堂に行きカムイを座らせると、キッチンに向かうがまともな食材が一つもない。

一様、備蓄はされているが何れも質が悪い。

「・・・何とかするか」

ラクスは食材を手にとると、調理を開始した。

包丁を使ってリズムよく切ると、鍋を使って調味料を加えた後で食材を煮込む。

更にラクスは包丁で食材を切っていると、前でカムイが見ていた。

「何してるの？」

「料理をしているんです」

「料理？」

「はい、料理です」

ラクスはそう言うと、フライパンで炒めていく。

カムイはラクスの料理を静かに見ていると、ラクスは炒めおえ、事前に洗っておいた皿に盛り付けていく。

カムイはそれをキラキラ、と目を光らせてお腹を鳴らす。

「はい、野菜炒めができましたよ。それとコーンスープも入れますから暫く待っていてくださいね」

ラクスはそう言うと、鍋を開けてコーンスープを器に入れて運ぶと、カムイが野菜炒めを食べていた、それも素手で。

「カムイ様」

「はっ、ごめんなさい・・・」

「もう、食べるのは良いですが素手はいけません。はいフォークです」
ラクスはそう言うと、フォークをカムイに渡した。

カムイはフォークを興味津々に回したりして見ている。

ラクスはその光景に疑問を浮かべたが、カムイが白夜の人間である事を思い出した。

白夜はフォークやナイフ、スプーン等は使わず、箸を使って食べる。生憎、北の城塞には箸は当然、無いのでラクスは一から使い方を教える。

「カムイ様。フォークはこう使います」

ラクスはカムイからフォークを受け取ると、野菜を刺して食べる。

ラクスはそれを見せてからフォークをカムイに渡すと、カムイはラクスの見せた通りにフォークを使って食べる。

「美味しいですか？」

「はい！」

「それは良かった。では、スープも持ってきますね」

二人の楽しい夕飯はカムイは平らげて眠ってしまった。

「・・・ごめんな。私がお前の親を殺したばかりに」

ラクスはカムイの頭を撫でながらそう言うと、カムイの小さな手がラクスの手を掴む。

カムイの顔は笑っておりどんな夢を見ているのかとラクスは考えていると、いつのまにか微笑んでいた。

「・・・ふ、もう暫くいるか」

ラクスはそう微笑みカムイの側にいた。

「ラ・・・クス・・・ラクスさん！」

「ッ!?は、はい!何でしょう!？」

「どうしましたか? 貴方が声も聞こえない位に遠くを見つめているなんて・・・」

カムイは心配する素振りを見せると、ラクスは笑顔で答えた。

「少し昔を思い出していただけですよ」

ラクスはそう笑うとカムイは首を傾げる。

ラクスはその動作に幼い頃も首をよく傾げて聞いてきたな、と思いつつ、出しながら微笑んだ。

黄泉の階段

カムイ達とラクスは道中に洞窟に入ると、不気味な階段を見つけた。

「不気味な所ですね・・・」

「ええ。でも、此所を通れば白夜王都に近づく事ができるわ」

カムイ達は進もうとした時、ラクスは立ち止まっていた。

「どうしました?」

「・・・何か嫌な予感がするんです」

「嫌な予感?・・・ッ!」

ラクスの言葉を聞いたカムイは首を傾げつつも進もうとした時、何か大きな影が無数に現れるのが見えた。

その影はノスフェラトウの群れだ。

「ノスフェラトウ!」

「数が多いわ・・・!」

カムイ達はノスフェラトウの群れを見て武器を構えた。

だが、ノスフェラトウは後ろからも現れた。

「後ろにも!」

「カムイ様。ノスフェラトウを全て相手取るのは不可能です。ここは突破しましょう」

「分かりました!」

カムイはラクスにそう言うと、ノスフェラトウは雄叫びを挙げながら走ってくる。

カムイ達とラクスは、正面突破を試み突き進む。

「グオオオオオオオッ!」

ノスフェラトウの一匹が特攻してきて襲い掛かってきたが、ラクスによって斬り捨てられた。

「やはり数が尋常ではない・・・ッ!」

ラクスは馬を走らせていると、いきなり目の前に巨大な岩の巨人が現れた。

「ゴーレム!?!くそ、こんな奴まで!」

ゴーレムはラクスに頭を向けて顔を上げると、そこは空洞だが中から勢いよく岩が飛んできた。

ラクスは避けると、どう戦うのかと考えていた。

「さて、どうするか・・・」

ゴーレムは再び頭を向け顔を上げると岩を飛ばす。

ラクスは岩を避けると、ゴーレムに向かって強烈な一撃を放った。

ゴーレムは、ラクスの攻撃で崩れさる。

「一先ずは倒したが、まだこんなにいるのか・・・」

ラクスは見渡すと、前後のノスフェラトウとゴーレム数体が道を阻んでいる。

ラクスはディアブロスを構え、ノスフェラトウに向かっていく。

「はあー!」

ラクスはノスフェラトウを蹴散らし続け、カムイ達の道を切り開いていく。

だが、後ろから次々と迫るノスフェラトウは追ってくる。

「このまま戦っていれば直に追い付かれる・・・」

ラクスは馬を走らせつつノスフェラトウとゴーレムを撃破しているが、それでもまだ数が多い。

徐々にラクスと仲間疲労が見え始めていた。

「ん?あの光は・・・出口か!」

ラクスは階段を登り続けていると、階段の先に光が見えた。

ラクスは出口だと判断すると、カムイ達に叫んだ。

「もうすぐ出口だ!もう一つ踏ん張りしてくれ!」

「分かりました!」

カムイはそれを聞いて仲間達と共に一気に駆け上がる。

ラクスが出口の回りにいるノスフェラトウを倒すと、カムイ達が走ってきて、出口を抜けて離脱する。

ラクスはカムイを待っていると、カムイとアクアと合流する。

「皆さんは無事に抜けましたか?」

「はい。後は貴方達だけです」

「では、行きましょう」

カムイはそう言って離脱しようとした瞬間、ノスフェラトウが影から現れてカムイに奇襲する。

これには、アクアとラクスも対処できず立ち尽くしてしまった。

「カムイ様！」

ラクスが叫んだ瞬間、一匹の竜リリースが飛び出して防いだ。

ラクスは素早くノスフェラトウを倒すと、カムイとアクアと共にリリースに駆け寄った。

「リリースさん！」

「ご無事、でしたか・・・良かった・・・」

「喋るな。お前はまだ助かる・・・しっかりしろ！」

リリースを励ますカムイとラクスに、リリースは静かに目を瞑り首を横に振る。

「もう駄目です・・・傷は深く、助かる様な物では、ありません・・・」

「そんな！嫌です！」

カムイはそう叫ぶと、リリースの体が光だし人間の姿になった。

「ああ・・・星竜の情けかしら・・・最後に、この姿で・・・カムイ様に会えるなんて・・・」

「リリースさん・・・」

「くっ・・・」

もうリリースは助からないと、三人は感じると同時にリリースは息を引き取った。

この悲しみはとても深い物としてカムイの心に残る。

テンジン砦の戦い〜前編〜

カムイ達とラクスは黄泉の階段を抜けてテンジン砦の前へとやって来た。

テンジン砦はとても巨大な砦で、易々と攻められない様になっている。

「此所は難攻不落の砦として名が轟いている砦よ。此所を落とせば白夜王国は陥落したと言っても過言ではないわ」

「つまり、白夜の最大の要……一筋縄ではいかないだろう。もしかしたら、カムイ様の知っておられる者が守っているかもしれない」

「……覚悟はできています。もう、後戻りはできませんから」

カムイはそう言うと、テンジン砦の前に仲間を配置し、攻略の準備に入った。

ラクスは砦左翼へ配置される。

「……後はカムイ様の合図だけか」

ラクスはそう呟くと、空に矢が飛んだ。

「合図だ。……一気に攻めるぞ！」

ラクスはそう言うと、馬を走らせ進軍を開始した。

左翼に回った仲間と共にテンジン砦への内部に入ったが、多数の白夜兵と城壁に阻まれ中々、進軍ができない。

「くっ……やはり一筋縄ではいかないか……」

「ラクス」

「カミラ様。何か？」

「この辺りに竜脈を感じるわ。私が発動させるから援護してちょうだい」

「分かりました」

ラクスは竜脈の元に向かうカミラを援護して馬を走らせる。

途中、白夜兵が現れ向かってくる。

「これ以上は好きにさせませんぞ！」

「やあッ！」

「死ねえ！」

白夜兵は向かってくるが、ラクスが立ちほだかり白夜兵を倒していく。

「怯むな！押し返せ!!!」

「ここが正念場だぞー！」

「ほお、普段は私を相手取って逃げ腰になるのに今回は退かないか・・・」

ラクスは白夜兵に感心して構える。

「カミラ様。突破できますか？」

「ええ。此所は任せるわ」

「はい・・・」

ラクスの返事を聞いてカミラは竜脈の元に向かう。

カミラを追って行こうとした白夜兵に、ラクスは立ちほだかる。

「白夜兵よ。お前達の勇氣に敬意を賞して・・・私が相手をしてやろう」

ラクスはそう言うと、白夜兵達に威圧を当てた。

白夜兵は怯みながらも、武器を構えてラクスに対峙する。

小数ながらも、暗夜兵もおりラクスを守る様に、武器を構える。

「・・・来い」

「「「うおおおおおおおッ!」」」」

白夜兵達は一斉にラクスに向かっていき、ラクスも白夜兵に向かっていく。

白夜兵は次々と、武器を振るうがラクスに防がれたり避けられたりし、逆に殺されたりした。

「はあー!」

「ぐわあ!」

「ぐえッ!」

ラクスは一振りで白夜兵を倒していくと、横から刀が振るわれラクスは防いだ。

「あたしは白夜王国第二王女サクラ様の臣下カザハナ!暗夜王の懐刀と見受けたわ!私と一騎討ちをなさい!!」

サクラの臣下カザハナが刀を向けてラクスに言う。

ラクスは少し微笑むと、ディアブ羅斯を構えた。

「良いだろう。知っていると思うが名乗らせて貰おう・・・私は暗夜王国の王ガロン様の臣下ラクス。一騎討ちを受けさせて貰おう」

ラクスとカザハナは、両軍に見守られる中で一騎討ちが始まった。カザハナは刀をラクスに振るい、ラクスは防いでカザハナに攻撃する。

カザハナは間一髪の所で防ぐが、ラクスの攻撃が次々と振るわれ防戦一方となった。

「くッ！流石は暗夜王の臣下ね・・・一撃が一つ一つ重いわ・・・」

「まあ、この戦いまでに多くの血塗られた戦いを経験しているからな」ラクスはカザハナにそう言うと、ディアブロスを振るう。

カザハナは防ぐ、と見せかけて避け刀をラクスの脇腹に振るった。かつて、ラクスがスズカゼに受けたカウンターだ。

「あまい」

「ッ!」

ラクスはカザハナのカウンターを防ぐと、カザハナは後ろに飛んで距離をおいた。

「・・・もう、とつくに隙を克服したの?」

「スズカゼから聞いたのかは知らんが、私が何もせずに隙を残すと思うか?」

ラクスはそう言うと、ディアブロスをカザハナに向けた。

「お前の最後の手は崩された・・・もう、終わりにしよう」

「くッ！まだ・・・まだ負けてないわ！はあ！」

カザハナはそう言うと、ラクスに向かって来るがラクスはディアブロスを振るってカザハナを殴り飛ばした。

カザハナはそのまま気絶し、回りは騒然となった。

「敵将は私が倒した！歓声を挙げろ！」

「！！」「うおおおおおッ！！！！」

ラクスがそう言うと、暗夜兵から歓声が挙がり士気が高まった。

逆に白夜兵は怯みあがり退く事はないが、士気はただ下がりだ。

「この勢いに乗じて攻め立てろ！」

ラクスがそう言った瞬間、何かが崩れ去る音が聞こえ見てみると、

城壁の一部が壊れていた。

「カミラ様がやってくれたぞ。行くぞ！」

「「「うおおおおおおおッ！」「」「」」

ラクスはそう言うと、砦の奥に攻め入る。

テンジン砦の戦い〜後編〜

カザハナを撃破した後、カミラが開いた道を突き進む。

進み途中、白夜兵が襲い掛かってくるが、ラクスは蹴散らして進む。

「殆ど片付いているな……」

ラクスは白夜兵を蹴散らして進んでいるが異様に少ない。

ラクスは先に行った仲間がやったと考え進む。

「……ん？あれはカムイ様」

砦の塔近くに来ると、そこにはカムイとマークス達が戦っている。

敵には白夜の将と思われる丸眼鏡の男が何かに乗って操りながら

戦っている。

「カムイ様」

「ッ！ラクスさん！」

「ラクス……！まさかスメラギ様を殺めた者まで来るとは……」

「何者だ？」

丸眼鏡の男にラクスはそう言うと、丸眼鏡の男は名乗った。

「私は白夜王国の軍師ユキムラと申します……」

「ユキムラ……白夜の軍師……まさか！」

ラクスは目を見開いてユキムラを睨み付ける。

「……まさかアクア様を拐った男がこんな所にいるとはな。丁度良

かった」

ラクスはそう言うと、ユキムラに素早く迫り手加減の無い攻撃をし

た。

ユキムラは素早く避けると、身構えた。

「ラクス!？」

「止めないでください……こいつだけは生かして帰せません……」

ラクスはディアブロスを構え殺気だっている。

「まさか……貴方はあの時にいた青年ですか？」

「……ああ。力不足だったよ……お前達に勝てず生かされ怒りに沸

いた。だが、あの時の様にはいかんぞ」

ラクスは本気でユキムラを殺そうと、再び攻撃を開始し、ユキムラ

も応戦を開始した。

激しい戦いが始まり、互角の戦いを見せる。

「止めてください！ラクスさん！」

「ラクス！」

カムイとベルカは止めようと前に出たが、ラクスに睨まれた。

ラクスの殺気を含められた睨まみにカムイとベルカは怯んだ。

「……ラクスさん」

「母さん！父さんはどうしたの!?!母さん！」

「……」

ラクスの尋常ではない増悪を目の当たりにして、仲間達は混乱の淵にあった。

「くっ！あの時は全く違いますね！」

「それはそうだ。お前を殺してやりたくてウズウズしていたんだ……早くそのヒョロイ首を差し出せ、ユキムラ！」

ラクスはそう言うと、黒い靄がラクスを身を包んだ。

「ッ！あれは!?!」

「ベルカさん。何か知っているんですか？」

「あれは狂気状態。ラクスが感情が高ぶると、あんな風に暴走してしまうの……」

ベルカがそう言うとラクスを見る。

ラクスは更に靄を惑い獣の如く戦う。

その姿に、カムイはベルカに対処法を聞く。

「どうすれば良いのですか……!」

「……力付くで止めるしか」

ベルカの言葉に仲間全員がラクスを見る。

ラクスは徐々に人間らしい行動が無くなりつつあり、獣の様な唸り声を挙げ始めた。

ユキムラはそのラクスと戦って疲労を出している。

「……やるしかないですね」

「はい……彼にこれ以上の負担を与えてはいけない」

カムイ達は狂気状態のラクスに武器を構えた。

「何のつもりです。貴殿方の仲間ではないのですか？」

「確かにラクスさんは仲間です。ですが、こんな姿になるまで戦わせ
る訳にはいきません！だから、ラクスさんを止めます」

「どうやら、ラクス殿はもう正気を無くしてますよ。つまり貴殿方が
攻撃すれば容赦無く殺しに来ますよ」

「構いません！」

カムイの言葉にユキムラは少し考える様に目を瞑っていると、足跡
が聞こえた。

「共闘しましょうユキムラさん」

「サクラ様！お下がりにください！今は危険です！」

「嫌です！・・・彼はイズモ公国で会った時はとても優しい人でした。
そんな人がこれ以上、殺しをさせたくありません！」

サクラはユキムラに訴えかけると、ユキムラは少し考えてサクラに
結論を言う。

「分かりました。今回は彼らと共闘しましょう」

「ありがとうございますユキムラさん！」

サクラはそう言うと、ラクスを見る。

ラクスは今は大人しくしているが、獣の様な唸り声を挙げ睨んでい
る。

「皆さん。ラクスさんを止めますよ！」

カムイ達は一斉にラクスに飛び掛かる。

狂気の騎士

カムイ達は白夜軍と一時共闘して、ラクスに飛び掛かった。

ラクスはカムイ達の攻撃を認識すると、カムイ達に向かって行き攻撃してきた。

「グオオオオッ！」

「はあー！」

カムイは夜刀神で攻撃するが受け止められ、ラクスが反撃する。

その反撃をマークスが防ぎ、レオンが魔法を放つ。

だが、ラクスは常人離れた馬術で避け、マークスに向かっていき攻撃した。

「くッ！何て重い攻撃だ……」

「グルル……」

ラクスは馬上でマークスを蹴飛ばして、離すとマークスに攻撃しようとするが、今度はカミラが攻撃を仕掛けた。

カミラの斧はギリギリ避けられた。

「やはり……奴は暴走して実力はあると言う事か」

「ええ……しかもまるで獣。彼の行動が分かりません。気を付けてください」

マークスにユキムラがそう言うと、構えた。

ラクスは再び攻撃を仕掛け様とした時、横からの攻撃を感じとり防いだ。

「もう止めて父さん！」

攻撃したのはレーラだ。

目に涙を流しながら必死に鍔迫り合いをしている。

「グルル……レー、ラ……」

「父さん……!?!」

「うう……グルル……グオオ！」

レーラの言葉に一瞬、怯んだラクスだがすぐに戻りレーラは吹き飛ばした。

レーラは素早く馬の体勢を整えると、地面に着地する。

「父さんは・・・まだ・・・」

「意識が残っている！」

ベルカの一言で、カムイ達は振り向く。

ラクスは狂気に飲まれていたが、まだ意識が残っている。

この事実カムイは希望を見いだした。

「なら、また彼にかたりかけましょう。ラクスさんがどんなに暴れても正気に戻るまで！」

カムイがそう言うと、ラクスを見る。

ラクスは頭を抱えながら悶え苦しんでいる。

「ラクスさん！貴方にはベルカさんやレーラさんと言う、大切な家族がいる筈です！しっかりしてください!!」

カムイがそう叫ぶと、ラクスは更に苦しんだ。

「ラクス！お前はその程度の男だったのか。私はお前との付き合いは短いが誰よりも騎士らしい男だと思っている。戻ってこい・・・ラクス！」

マークスが訴えかける様に叫ぶと、ラクスは遂にディアブロスを落とすとした。

「お前は誰よりも頭が賢い。この僕よりも格上でチェスでも勝てなかった・・・だけど、そんな狂気に負けるなんて僕は許さない！早く戻れ!!」

「グルル・・・カムイ様・・・ベルカ・・・レーラ・・・グオオ・・・」

ラクスは頭を押さえながらそう呟く。

「ラクス・・・貴方はよく分からない人だわ。でも、ベルカから話を聞いて貴方は本当は優しい人だと分かったわ。誰よりも優しく不器用な人。でも、勇気ある人よ。だから、負けないで・・・負けたらベルカを返して貰うわよ」

「グルル・・・うう・・・」

徐々に人間らしさを取り戻し始めたラクスに今度はエリーゼが前に出た。

「ラクス。貴方は私を助けてくれたよね？危険なんてへっちゃらで単機で私を宮殿内に運び込んでくれて、徹夜で看病もしてくれた。そん

な貴方が好きだったんだけど今は大切な仲間だよ……だから、戻ってきてよ！」

「……うう……グルル……私、は……」

「ラクスさん」

ラクスは正気に戻り始めている時にサクラがやって来た。

「貴方様はとても優しい人です。ただ、不器用なだけで人との接し方もよく分かっていないと私は思っております。ですが、今の貴方はどうですか？ 貴方は人らしさを無くしてしまっています……戻ってきてください」

「……うう……」

ラクスはサクラの言葉を聞いて、馬上から落ちて倒れた。

カムイ達急いで駆け寄ると、気絶したラクスだ。

黒い靄も無く、正気に戻っていた。

「……正気に戻ってるわ」

「良かった……」

「うう……父さん……」

仲間達は安堵したが、まだ問題は残っていた。

サクラとユキムラ率いる白夜軍だ。

まだ、戦闘中である以上は戦わなければならない。

「……どうしますか？ できれば降伏してほしいのですが……」

「……やむ終えません。私達は先のラクス殿との戦いで疲労しました。今は生き残るのが得策……」

ユキムラはそう言うと、武器を捨てた。

その姿を見た白夜兵達も武器を捨てていった。

「……此所は？」

「気がついた？」

ラクスは目が覚めると、ベルカが真上にいた。

正確には膝枕をされており、ラクスはベルカに優しく撫でられていた。

「・・・何で膝枕されてんだ？記憶が・・・」

「・・・思い出さなくて良い」

ベルカにそう言われラクスは思い出すのを止めた。

ラクスは立ち上がると、そこには投降している途中の白夜兵と中心に集められたサクラ達だ。

「・・・私が寝ている間に戦は終わったのか？」

「ええ。貴方は戦が終わった途端に寝ちゃった」

ベルカがそう言うと、ラクスは疑問に思いながらもそう言う事にしておいた。

追求したら何か後悔する様な気がラクスは感じ取ったのだ。

「捕虜はどうするんだ？」

「牢に入れるとカムイ様達が」

「・・・良かった。あの中にはサクラ王女までいるからな。まあ、カムイ様は殺しは好かない事はしっているがな」

ラクスはそう微笑むと、立ち上がり歩こうとした時、向こうから軍勢が現れた。

旗は暗夜王国の紋章で、数は数万に及んだ。

「・・・遂に本隊が着たか」

「指揮官は？」

「無論、あの方だ」

ラクスはそう言うと、指差した。

そこにはガロンが馬に乗っていた。

「ガロン様のご到着だ。すまないがカムイ様に伝えてきてくれないか？ガロン様が来たから早く捕虜を隠せと」

「分かった」

ベルカはそう言うと、カムイの元に向かっていく。

ラクスはガロンの足止めをすべくガロンの元に向かった。

ラクスはガロンの元に来ると、ガロンは馬に乗ったまま出迎えた。
「ラクス。ここまでの戦は見事な物だと報告にあつたぞ。流石は我が
懐刀だ」

「恐れ入ります・・・」

「さて、我が軍はテンジン砦に入るとするか」

「お待ちください」

ガロンがテンジン砦に入城しようとした矢先に、ラクスは止めには
行つた。

「砦内部はまだ抵抗してくる白夜兵がおります。幸いにも、数は少な
くカムイ様の軍だけでも殲滅はできますが、まだ不穏分子は残つてお
ります・・・ですので、もう暫く此所でお待ちください」

「ラクス殿。何か砦で見られたくない事でもあるのですか？不穏分子
の排除なら我々も手を貸せば良い事でしょう」

「ガロン様の手を煩わせる訳には参りません。マクベス殿はわざわざ
ガロンよ手を煩わせる気ですか？」

「しかし」

「もう良い」

ラクスとマクベスの言い合いにガロンは制する。

「ふむ、確かにこの大軍で少数の白夜兵を相手取っても面白くない・・・
お前の言う通り待つてやろう」

「ありがとうございます」

「ああ、そうだ。思い出したぞラクス。お前に任を与えたい」
ガロンはそう言うのと、指を鳴らす。

すると、奥から重厚な鎧兜を身に纏った騎士が現れた。

ガロンの親衛隊の面々で、ラクスの分かたちだ。

「ラクス。お前に一軍を率いる名誉を与える・・・我が親衛隊を使い、
兵を率いてスサノオ長城を掻い潜り白夜王城を攻め立てよ」

「つまり、カムイ様達と離よと？」

「後で合流すれば良かろう・・・期待しているぞ」

ガロンはそう言うのと、テンジン砦を見つめる。

ラクスは与えられた任を遂行する事だけを考えてた。

奇襲戦

暫くした後、ラクスはガロン達と共にテンジン砦に入城した。

中では既にカムイ達が捕虜達を隠して出迎えていた。

「此度の戦は見事だったなカムイ。ラクスから全て聞いたぞ。多少の遅れはあったが、捕虜は捕らずに皆殺しにしたと聞いて、本当に誇りに思ったぞ」

「ありがとうございます。お父様」

ガロンの言葉に合わせる様にカムイは言う、ガロンは次の命を下した。

「次はスサノオ長城を攻め落とす。今回もお前に先鋒を任せる・・・それと、ラクスは一時的にお前から離脱させ白夜王都へ攻め入らせる」「ラクスさんをですか?」

「そうだ。ラクスの腕は知っておろう・・・知勇に優れた我が懐刀をお前に貸したが、やはり早期決着にはラクスの腕が必要であるからな」

ガロンの考えを聞いてカムイは顔を少し歪めたが頷いた。

「分かりました・・・」

「うむ・・・ラクス。進軍の準備をして命じた通りに行け」

「分かりました」

ガロンはそう言うと、テンジン砦内に向かう。

残されたラクスとカムイ達はすぐに話し合った。

「どうするのカムイ姉さん。今、ラクスに抜いたら指揮系統が大きく崩れるよ?」

「ああ・・・ラクスは今までカムイの副官の様な存在だったからな。此所で抜けるとなると」

「それにベルカとレーラはどうするつもりなの?彼女達も連れていか、置いていくか・・・」

「・・・どちらにしろ命令は絶対・・・なら、私と言う空白はレーラに任せてみたい」

ラクスはそう言うと、レーラを指名した。

カムイとマークス達は考える。

「確かにレーラはお前に劣らない所を持っている……だが、彼女はまだ未熟だぞ」

「分かっています……ですが、今は指揮系統を崩すのは良くないです。それに、マークス様達が幸いにも付いておられますから……では、カムイ様と娘をよろしく頼みます」

ラクスはそう言うと、一礼して立ち去った。

スサノオ長城の道から大きく擦れて、山奥を進むラクスの率いる暗夜軍の大軍が行軍していた。

ラクスの軍は警戒しつつ素早く移動する。

「急げ。ガロン様がスサノオ長城を攻め落とす前に奇襲成すのだ」

ラクスはそう言うと、更に急がせると山を抜けた。

山を抜けた先には、白夜王都が見えており白夜軍も少数だ。

「やはりスサノオ長城に兵を割いていたか……これより奇襲を決行する！ 私に続けえ!!」

「「「うおおおおおッ！」「」」」

ラクスの言葉に暗夜兵は雄叫びを挙げ、ラクスは馬を走らせると同時に暗夜軍も続く。

くりヨウマ side く

俺は暗夜軍に大しての軍議をしていた時だった。

一人の伝令が慌てた様子で襖を開けて入ってきた。

「申し上げます！ 暗夜軍の奇襲！ この王都に迫っています！」

「何?! スサノオ長城を掻い潜ったのか……敵の将は誰だ！」

「暗夜王の懐刀、ラクスです！」

俺は伝令から聞いた将の名前を聞いて納得がいった。

奴は常に白夜軍と対峙する際もカムイの側で指揮を取っている事が分かっている。

奴は武勇だけでなく知略にも長けた名将だ。

暗夜軍の軍師はマクベスと言う男だが、本当の軍師と呼べるのは奴

の事だ。

自ら前線に出て、戦い、的確な場所を突いて指揮をする。
正しく敵にしたくない相手だ。

「今すぐに兵を纏め撃退するぞ！出陣の用意だ!!!」

「「「はー!」」」

俺がそう言うと、白夜の将達は一斉に退出していった。

残された俺は奴と、どう戦うのかを考える。

〈side終了〉

ラクスは王都から離れた平原で、白夜軍と対峙した。

数こそ少ないが、白夜兵一人一人が絶望など無い、と思わせる目をしている。

「流石は王都を守る兵だ。例えこの数でも相手にしてやろうと言う事か・・・」

「ラクス様。ご命令を」

「・・・全軍、故郷の民の為に剣を振るえ！王都に侵入したら略奪、虐殺等の横暴は許さん！正義を持って戦え！行くぞ!!!」

「「「うおおおおおッ!」」」

ラクスは先頭で馬を掛けると、その回りに親衛隊の騎士と普通の騎士達が槍を持って続く。

その後ろに無数の暗夜軍が駆けた。

白夜軍もそれに合わせて走りし、騎士が槍を突き出すのと同時に両軍は激突した。

「はあー!」

ラクスは両軍が激突した後、白夜軍を斬り捨てて戦っていると、奥から見知った紅い白夜風の鎧を着た人物が現れた。

「ラクス・・・」

「これはリヨウマ王子。貴方も戦場で剣を交えに?」

「そうだ・・・貴様を倒し、白夜の平和と父上の仇を取る!」

「・・・やはり恨んでおられるか」

「・・・恨んでいないと言えば嘘になる。イズモ公国の際は世話になったが、こうして敵としてくれば刀を交えるしかない」

リヨウマがそう言うと、ラクスは静かにディアブロスを構えた。「なら、来れば良い……私は国と民の為にこの刃を貴方に向ける。なら、貴方も国と民の為に私に刃をを向ける。迷うな……全力で掛かってい！」

「言われなくとも！」

リヨウマはそう言うと、ラクスに向かっていく。

リヨウマは雷神刀をラクスに振るうと、ラクスはディアブロスで防ぐ。

両者の刃は激しい音を立てて突風を起こした。

リヨウマは素早く後ろに下がると、驚いた顔をした。

「雷神刀と互角……何だその剣は……！」

「この剣は宝剣ディアブロス。神器と引けを取らない名剣だ！」

「成る程な……だからお前が来たのか。神器に対抗する術のある武器を手に入れているお前が！」

「リヨウマ王子の言う通りこの剣は確かに強力な物だ。だが、この剣は相応しい実力が無ければ逆に命を取られかねない代物でもあるがな」

「そうか……だが、今はそんな事を構っている暇は無い！」

リヨウマはそう言うと、ラクスに攻撃する。

ラクスはリヨウマの攻撃を受け止めると、リヨウマに攻撃し、リヨウマはそれを避ける。

「何故だ。何故、お前の様な誇りを知る者が暗夜の侵略に荷担する……私とてやりたくない……だが、この侵略を成功させるば多くの暗夜の民が救える。だから、私は今までの横暴にも目をつむり時には自らもその横暴に加担した……それが民を飢えから救う唯一の道だ……」

「それで民達はお前の行動を理解するのか！ただ、恐れられ、憎まれるだけの存在になっっているお前の……！」

「それでも……民に安息が来ればそれで良い。民の飢えの苦しみが無くなるなら……どんな手段でも使ってやるさ！」

ラクスはそう言うと、左腕を挙げると大量の矢がリヨウマに降り注ぐ。

リヨウマは素早く走り抜けて矢を避けて、ラクスを睨む。

「貴様……！」

「お前には分かるまい……暗夜の者はこんな汚い手段を使わなければ生き残らないと言う事」

「貴様にも何が分かる！ 白夜は平和を愛していた。その平和を壊され何れだけの白夜の民が嘆いたか！」

「……どちらにしろもう引き返せない。さあ、決着を着けようリヨウマ王子」

ラクスとリヨウマは再び対峙すると、白夜の伝令が現れた。

「ご報告します！ 暗夜軍がスサノオ長城を陥落させました！ 暗夜軍はまっすぐ此方に向かっていきます！」

「くっ……ラクス。決着は次の機会にだ。全軍撤退だ！」

リヨウマがそう言うのと、後ろを向いて走っていく。

そのリヨウマを追撃しようと暗夜兵達が走ろうとしたが、ラクスに止められた。

「捨て置け……どうせ逃げたりせず籠城を選んでくるさ」

ラクスはそう言うと、白夜王都へゆっくりと進軍する。

死神の行軍

ラクスは白夜王都に着くとそこには白夜の民達が立ち尽くしていた。

「暗夜軍だ！暗夜軍が攻めてきたぞー！！」

「あの指揮官・・・まるで死神だわ」

「・・・」

口々にラクス達、暗夜軍を恐れる様な声を挙げて逃げ始める。

ラクスはそんな白夜の民達などお構いなしに軍を進めていると、ラクスの元に石が飛んできた。

ラクスは飛んできた石を片手で受け止めて、飛んできた方向を見ると、そこにはまだ幼い子供がいた。

「出ていけよ暗夜！」

「止めるんだ坊主！」

ラクスは受け止めた石を持ったまま子供の元に馬を進めていく。

白夜の民はラクスに恐れを成して、子供を助ける気力すらなかった。

「・・・石を投げたのはお前か？」

「そうだ！この侵略者！」

子供の言葉にラクスは笑う。

「ふ、面白い奴だ。こんなにも胆の据わった者を見るのは暗夜でも希だ・・・今回はお前の胆に免じて命は取らん。だから・・・失せろ」

「ひッ!？」

ラクスは威圧を子供にぶつけると、石を投げて捨てた。

ラクスは元の場所に戻ってから行軍を再開した。

ラクスは白夜王城を完全に包囲して兵糧攻めから始めた。

「奴等の士気は大きい。無駄に戦わず相手方の士気を挫き、ガロン様の本隊と合流して・・・討つ」

「ですが、白夜方は黙って見ているのでしょうか？兵糧攻めをされ続けなければ負けると分かっています」

「それも計算に入れている。万が一、奴等が打って出れば・・・その時

こそ白夜の終わりだ」

ラクスは不適に笑う。

「そこまで計算すくでしたか・・・」

「ああ、だが油断するな。敵は少数とは言え手強いぞ？」

「承知しております」

ラクスはそれを聞くと、再び白夜王城を見つめる。

補給の絶たれた白夜軍が、ガロンが来る前に降伏してほしいとラクスは思っていた。

ラクスはカムイの考えはよく知っている。

カムイは白夜の兄妹を助けようとしているとラクスは考え、早期の決着を着けてリヨウマ達をガロン達に内密で保護しようとしていた。

「早く出てこい・・・打って出てくれば何とか早く決着を着けられる！」

ラクスはそう願うが、その願いを壊す様に伝令が走ってきた。

「ご報告します！ガロン様の本隊が到着しました」

「・・・ご苦勞」

ラクスはそう言い振り向くと、暗夜軍の大軍が音を立てて行進している。

まるで、死神の行軍であった。

「ラクスよ。よくぞ白夜軍を追い詰めた。褒めてつかわずぞ」

「・・・ありがたき御言葉」

「さて、お前にはカムイの元に戻り先鋒として仕事を果たせ・・・お前はわしの自慢の臣下だ、期待しているぞ」

ガロンはそう言うと、奥の方に下がって行った。

ラクスはガロンが行くのを見送ると、拳を力強く握った。

「・・・そろそろ、決断するべきかもしれないな」

ラクスはそう言うと、カムイ達の元に向かった。

白夜王女ヒノカ

ラクスはガロンに抱き始めた不審を抱えつつもカムイ達と合流しようとして歩いていると、暗い顔をするカムイがいた。

「どうしたのですか？そんな暗い顔をして」

「ッ!?ラクスさん……」

「貴方らしくない……何があったのですか？」

「……タクミさんが、行方不明になりました。スサノオ長城から落ちた筈なのですが……」

「何ですって？スサノオ長城から落ちて行方不明と言ったのですか？」

ラクスは信じられないと言った顔をする。

城から落ちるなど、死んだも当然の筈なのに行方不明と言うのだ。

「……」

「タクミさんは、行方不明ですが……私は止まる事はしません」

カムイはそう言うと、歩いていく。

ラクスはその後ろ姿を見てラクスは決断を迫られていた。

「(私は、このままガロン様に従って良いのか……従わないにしろ私だけでなくベルカとレール、カムイ様にも危害が及ぶ可能性もある……だが、一つ道があるとすればそれは)」

”反乱しか無いだろうな……”

カムイ達とラクスは先鋒隊として、白夜王城の城門に進軍を開始した。

ラクスはレーラの隣に立ってスサノオ長城での戦いの報告を聞いていた。

「そうか……やれるようになったな」

「はい。最初は不安でしたがカムイ様達の支えもありスサノオ長城を攻略できました。しかし、カムイ様の実の弟であるタクミ王子を救え

ませんでした……」

「お前が悔やむ事はない。タクミ王子は自ら飛び降りたんだ……それはお前の責任ではないさ」

ラクスはそう言うと、白夜王城の城門前に来ると白夜兵がいた。

「……打って出てきたか。もう少し、早ければ」

「父さん？」

「いや、何でもない」

ラクスはそう言うと、カムイの元に向かっていき命令を仰ぐ。

「カムイ様。ご命令を……」

「……皆さん、行きますよ！」

カムイの命令で仲間達は進軍を開始した。

ラクスは馬を走らせると、空から何が来る気配を感じたラクスは上を見た。

そこには、天馬に跨がったヒノカが現れたのだ。

「白夜王国第一の王女、ヒノカ！参る!!!」

「ヒノカ王女が大将か」

「む、貴様はラクス。できれば戦場では会いたくなかったが……」

「会ってしまった物はしょうがないさ……では、戦うか」

「そうだな……行くぞ、ラクス！」

ヒノカはそう言うと、天馬で空を駆けながら薙刀を振るい、ラクスは防いだ。

ラクスはヒノカの薙刀を受けて、腕が上がっているとラクスは感じ取った。

「腕を上げか」

「貴様と戦って負けたのが悔しくてな。必死に鍛練したんだ」

ヒノカは薙刀を構えながらそう言うと、ラクスは小さく笑いデイアブロスを構えた。

「そうか。だが、悪いがまた負けて貰うぞ……早めに勝たなければならぬ。ガロン様が虐殺を始めたら大変なんだからな」

「卑劣な……民を天平にかけるとは！」

「いや、かけてない……ただ、ガロン様の性格から割り出した答え

だ。・・・早く降伏してくれ。これ以上、カムイ様を苦しめるな」

ラクスはそう言うと、左手を差し出した。

だが、ヒノカは薙刀をラクスに振るって攻撃する。

ラクスはディアブロスで防ぐと、鏑迫り合いになった。

「断る！例え、カムイが苦しむ事があっても・・・白夜を暗夜には渡せん！」

「・・・それが返答か？後悔はしないな？」

「ああ、後悔はしないさ！」

ヒノカはそう言うと、ラクスから離れると空高く飛び勢いよく空から向かってくる。

「覚悟しろ!!!」

「ヒノカ女王・・・貴方の・・・負けだ」

ラクスがそう言うと、ヒノカは肩辺りに矢が突き刺さった。

その矢は兵士が放った物で、ヒノカは落ちた。

「くっ・・・卑怯な・・・」

「時間が無いんだ。本当にガロン様が虐殺を始めてしまう・・・もう、これ以上は仲間達やカムイ様の手を罪も無い者達の血で染めるわけにはいかない。だから、待っている、戦が決するまで」

ラクスはそう言うと、兵士に場を離れさせるとヒノカを抱える。

「なッ!? 貴様何を!?!」

「今のお前は動けないだろ？矢を受けただけでなく高い所から落ちた以上はまともに動けない・・・お前の臣下の所に連れていくから何処かに隠れている。武器は貰っていくが」

「何故だ？私を討ち取れば良いだろ。何故・・・」

「カムイ様が悲しむからだ」

ラクスはそれだけを言うと、ヒノカをこっそりと運ぶ。

「くっ！思った以上に勢いがありますね・・・」

「アサマ・・・ヒノカ様がない」

「・・・まずいですね。このままてば」

「ヒノカ女王なら心配はない」

アサマとセツナが声のする方を見ると、そこにはラクスと抱えられているヒノカがいた。

「ヒノカ様!?!・・・貴方は?」

「私は暗夜王国のガロン王の騎士ラクス。訳は話すから一先ずは警戒しないでくれ」

「アサマ、セツナ。一先ず、警戒を解け」

「しかし・・・分かりました」

アサマとセツナは警戒を解くと、ラクスはアサマに近づいていく。「ほら、ヒノカ女王だ」

アサマはヒノカを受け取ると、ラクスは話始める。

「私はこの戦をすぐに終わらせたい。それも、お前達白夜の兄妹達を亡くす事なくだ」

「何故ですか。それなら討ち取ればすぐに終わると、思うのですが」

「カムイ様は、これ以上の流血を望んでもいないし人が死んでいくのも望まない。ならば私がやる事は一つ・・・白夜との戦争を終わらせ・・・ガロン様、いや、暴君ガロンを討つ」

ラクスの言葉にヒノカ達は驚いた。

自らの主君に反逆して、討つと言ったのだ、驚くのも無理はなかった。

ラクスは続ける。

「その為にはこの戦争に勝たなくてはいけない・・・勝たなければ白夜は暗夜に逆侵行し、戦争は長期に渡り犠牲は増え続ける・・・だから、リヨウマ王子を降伏させる」

「・・・兄上が領くとでも?」

「・・・脅せば良い。お前達を捕虜にしたと言って脅して降伏させる。無理なら、力付くで」

ラクスの言葉にヒノカは迷いながらも領いた。

「・・・分かった。兄上を、頼む」

「ああ・・・戦が終わるまで隠れていてくれ。カムイ達にも死んだ事に

しておく」

ラクスはそれだけを伝えると、ヒノカ達は走る。

ラクスは後から回収した雑刀を持って、カムイ達の元に向かう。

企て

ヒノカとの戦いの後、ラクスはヒノカの薙刀を持ってカムイの元に現れた。

血塗られた薙刀を見たカムイは驚いて声も挙げられなかった。

「その・・・薙刀は？」

「・・・白夜王国第一王女ヒノカの薙刀です」

ラクスはそう言うとカムイは立ち尽くしていた。

「ラクス・・・まさか！」

「・・・討ちました。やむ得えず」

ラクスの言葉に、仲間達は黙り込んだ。

「・・・何で、何でヒノカさんを！」

「・・・」

「話してください！ラクスさん!!」

「カムイ!・・・辛いのは分かる。耐えるんだ」

ラクスの胸ぐらを付かんで叫んだカムイにマークスは咎めると、カムイは静かに離れた。

「・・・カムイ様。今日より、貴方の部隊から離脱させてください」

「ッ!?!」

「私は貴方の実の姉を殺しました。それは事実・・・だから、貴方に着いていく資格は、ない」

「ラクスさん・・・」

カムイの言葉にラクスは悲痛な表情をしつつ一礼し、立ち去った。

ラクスはカムイの元を離れて歩いていくと、ベルカが現れた。

「何の用だ？お前はカムイの部隊だろ」

「貴方・・・本当はヒノカ王女を殺していないんでしょ？」

「・・・やはりお前には分かるか」

「何れだけの付き合いだと思ってるの？それで、貴方の目的は？」

ベルカの問いにラクスは応える。

「白夜に勝利した後で、反乱を起こしてガロンを討つ……」
「ッ!？」

「もう、これしか無いんだ……暗夜は血と罪に汚れすぎた。ガロンを討つ事しかもう、救えない」

「でも、反乱を起こして負けたら……!」

「その時は、死のう……お前には迷惑を掛けるかもしれないが、これだけは俺の道だ。お前達を巻き込みはしない」

ラクスはそうベルカに伝えると、ガロンの元に向かい歩いていく。

「ラクス!」

「なん、ッ!？」

ラクスは振り返った瞬間、ベルカにキスをされた。

「……必ず無事で帰ってきて」

「……てつきり止めに入るのかと思ったよ」

「貴方は一度決めると意思は変えないのは、昔も今も知ってるから……だから、見送るしかない」

「……すまない」

ラクスは今度こそ、ガロンの元に向かった。

「ラクスよ。城門の守りに着いていたヒノカを討ち取ったらしいな……」

「はい……此所まで来ればカムイ様は私の助けは必要無いでしょう。だから、私は貴方の元に戻りました。どうか、臣下として復帰させてください」

「良かろう……それ以外に望みは?」

ガロンの言葉を聞いて、ラクスは言う。

「王城に攻め入る先鋒を」

「くくく、お前は働き者だな……良かろう、任せてやる」
「ありがたき幸せ……」

る。
ラクスは王城に先に入る名分を得ると、次の行動に移す為、移動す

密約

ラクスは部隊を率いて王城の城門前に来ていた。

ラクスは反乱の賛成した者で構成された部隊に命じて爆薬を仕掛けており、ガロンやカムイ達が来る前に終わらせた。

「後は指示が来るのを待つだけだ」

数分後、ガロン達とカムイ達がやって来ると、カムイ達は悲痛な表情でラクスを見ている。

それは当然の事で、ベルカ以外はラクスが反乱を企てているとは知らず、ラクスが裏切った様にしか見えない。

「(それで良い・・・お前達は知らなくて良いんだ・・・)」

「・・・時間だ。押し潰せ」

ガロンの命令を聞いてラクスは、ディアブ羅斯を抜いて部隊に命じた。

「突撃！」

ラクスの命令を聞いた部隊は一斉に突撃し、ラクスも突撃した。

ラクスは少し入った所で立ち止まり、爆薬の点火を命じる。

「点火しろ」

「は！」

暗夜兵は爆薬に点火すると、火を起こし激しく爆発した。

くカムイsideく

私は先鋒の役目をラクスさんに取られ次鋒として、待っていた時、城門がいきなり爆発して道が塞がれました。

突然の事に私や皆は固まってしまいました。

「爆発!?!」

「もしかして、白夜が・・・!?!」

「・・・ラクスは!?!」

「ツ!?!お父様、ラクスさんは!?!」

私は慌ててお父様にラクスさんの安否を聞きましたが、お父様は冷静でいた。

「お前が心配する事はない・・・ラクスはわしの臣下。この程度の事は

既に折り込み済みだったのだろうか」

「そんな・・・」

私はラクスさんを誤解していました。

手柄欲しさにヒノカさんを殺し、先鋒を奪ったと思っていましたが、こんな事態がラクスさんが予想していたなんて思いませんでした。

「ラクスさん・・・」

私はラクスさんの無事を祈るしかありません。

side終了

ラクスは城門を爆発させた後、王城を歩いてリヨウマを探す。

ラクスが歩いていった時、目の前に影が降りてきた。

「・・・サイゾウか」

「できれば戦場で会いたくなかったぞ。貴様には恩があるが、これもリヨウマ様の為だ」

「話を聞け・・・私はリヨウマ王子と密約を交わしに来た」

ラクスの密約を交わしに来たと聞いて、サイゾウは目を見開く。

サイゾウは白夜筆頭の忍びで、ラクスの事などすぐに調べられる。

ラクスは誰よりも王族、ガロンに忠誠を誓っている騎士とサイゾウは調べで知っていて驚いたのだ。

「・・・とにかく時間が無い。リヨウマ王子の所へ連れていってくれるか?」

「だが・・・」

「待てサイゾウ」

サイゾウは後ろを振り向くと、そこにはリヨウマが腕を組んで立っていた。

「リヨウマ様!?危険です。お下がりにください!」

「いや、下がらん・・・俺はラクスと話して見ようと思う」

「ッ!?!」

「奴が密約を望むと言う事は暗夜を裏切ると言っているに等しい・・・なら、使える手は全て使う」

「それが、罠でもですか・・・」

リヨウマは頷くと、サイゾウはそれを見てリヨウマの後ろに下がった。

「それで密約の内容は？」

「・・・一時的で良い、死んだ事になってくれ」

「ッ!? 貴様!!!」

「待て」

ラクスの死んだ事にしろと、言う言葉に激昂したサイゾウをリヨウマは止めた。

「何故だ？」

「この戦を早く終わらせる為だ。白夜が負けてこの城が陥落すればガロンは意気揚々と入城する。そこに付け入り、反乱を起こす」

「つまり、少数になったガロンを襲うのか？」

「ああ・・・この城にも限界はあるからな。それに外に残る兵の大部分は国や故郷を追われた者達で、私の賛同者しかない。よって、ガロンとそれに付き従う直属軍は包囲され逃げ場が無くなって殺される」

ラクスの策にリヨウマは一つの疑問をラクスにぶつける。

「カムイはそれを知っているのか？」

「敵を欺くにはまず味方から・・・この言葉の意味は分かるでしょ？」
「・・・」

ラクスの言葉を察したりリヨウマは黙って考え込む、ラクスは了承してくれる事を祈っていると、リヨウマは顔を上げた。

「良いだろう・・・一度死んでやる。だが、必ずガロンを討て」

「はい・・・」

ラクスはこの時、策の実効が可能になった事を確信した。

リヨウマはその後、ラクスが用意したジエネラルの鎧を使って暗夜兵に紛れ込ませ、ラクスは一つの部屋に火を放ったのだ。

リヨウマが自害したと見せかける為に。

反乱

全ての用意を整えたラクスは、出口に向かうと瓦礫が退かされ、今にも攻め入らんとしているカムイ達だった。

「ラクスさん！無事だったのですね。火の手が上がったので心配しました」

「お陰様で・・・それと貴殿方の出番はもう、ありません」

「え？」

「・・・リヨウマ王子が自害されましたから」

ラクスがそう言うと、カムイは立ち尽くした。

実の兄の自害と聞けばこうなるのは知ってたラクスは内心、苦痛に思いながらも平静としている。

「よくやった、ラクス。これで世界はわしの物だ・・・ふ、ふふ、ふっはっはっはっはっはっは！」

「おめでとうございますガロン様・・・」

ラクスは心にもない事をガロンに言うと、ガロンは機嫌よくラクスに言う。

「お前の働きはかなり大きい。手柄にこの白夜の半分を与えたい所だ」

「いいえ、私はガロンの側で仕えます。私は領主には向いていませんから」

「くくく、欲がないな。では、わしは王座の間に行ってくる」

ガロンはそう言うと、マクスとガンズを連れて中に入る。

「カムイ様達も、王城に入ってお休みください。後は私がやっておきます」

「・・・はい」

カムイは仲間達を連れて王城に入って行くのを見送ると、暗夜兵の一人がやって来た。

「・・・策を実行に移せ。今こそ、暴君を葬る時だ」

「はー」

暗夜兵が走っていくと、ラクスは城下の中央広場に歩いて行く。

ラクスが城下の中央広場では無数の兵士と騎士がいた。

それぞれ、自分達の得物を持ってラクスの指示を待っていた。

「勇敢なる暗夜の兵達よ！我々は今日までガロンの圧政や侵略に目を瞑って従ってきた・・・だが、もう我慢の限界だ！私はガロンを玉座から引きずり降ろすべく、今ここに反乱の実行を宣言する！」

「「「うおおおおおおおッ！」」」

「圧政者を倒せ！」

「我々の故郷を奪ったガロンを倒せ！」

「民の虐殺を我々にさせた暴君を倒せ！」

ラクスの反乱宣言に暗夜兵達は一斉に怒声を挙げて武器を掲げた。

「さあ、先ずは白夜の捕虜達を解放するぞ！」

「「「うおおおおおおおッ！」」」

くカムイsideく

私はアクアさんと話している時、兵士が慌てて走ってきました。

かなり息を切らしており、とても喋れそうではなかったので私は水を兵士に飲ませて落ち着かせました。

「どうしたのですか？そんなに慌てて」

「はあ・・・はあ・・・ら、ラクス様が、謀反！兵士を扇動して捕虜にした白夜の兵や将を解放して回っています！」

「何ですって!？ラクスさんが・・・謀反・・・」

「カムイ。少し話が・・・」

私は気が動転するなか、アクアさんに呼ばれて側に来ました。

「これはチャンスよカムイ。今なら直属部隊は反乱軍の鎮圧で拡散するわ。今しかマクベスとガンズを倒せないわ」

「でも・・・ラクスさんが」

「・・・もしかしたら、私達を巻き込みたくなかったから離れたのでしようね」

アクアの考えを聞いて私はやはりラクスさんが裏切っていないかつ

たと確信しました。

彼の行動を無駄にする訳にはいかない、私は決断してアクアさんに言う。

「皆さんをお呼びください。今から……暗夜王ガロンの真実を伝える為の戦いをすると」

（side終了）

ラクス達、反乱軍は直属部隊が作った臨時の檻に襲撃を掛けて捕虜を解放していると、直属部隊が鎮圧に出てきた。

「武器を納めろ！今ならまだお許しが出るぞ！」

「黙れ！」

「お前達はまだ分からないのか！」

「俺達は暗夜王に付き従ってきたが罪も無い者ばかり殺してきた！もう嫌なんだよ！」

反乱軍の兵士達は直属部隊に罵声を浴びせ、雪崩の様に襲い掛かる。

数は天と地差があり、直属部隊は堪らず壊滅する。

「まだ終わりじゃないぞ！ガロンを倒すまで戦いは終わらんと思え！」

ラクスはそう言うと、反乱軍の士気は更に上がった。

ラクスは一つの檻に向かうと見知った顔があった。

「お前達はタクミ王子の……」

「何よ？私達が反乱軍に解放されない様に殺しに来たの？」

「違う、私が反乱の首謀者だ。今からお前達を出すから離れろ」

ラクスはそう言うと、ディアブ羅斯を抜いて振るい、錠を壊した。

「さあ、早く出ろ！」

「タクミ様は？タクミ様がいなければ離れられない」

「……タクミ王子は行方不明だ」

ラクスの言葉にオボロとヒナタは絶句した。

「嘘……」

「くッ、俺達がいながら……」

「泣くのは早い。死んだ、捕まった等の報告はない以上は希望はある。

「さあ、早く行け！」

ラクスはそう叫ぶと、オボロとヒナタは自分達の武器を手に走っていく。

「ラクス様。捕虜を全て解放しました！」

「よし、後はガロンとその残党だ。王城の城門前に全員を集めろ」

「は！」

ラクスはそう言うと、城門に向かっていく。

ラクスは反乱軍を率いて王城前まで来ていた。

ラクスの後ろには無数の反乱軍で埋め尽くされ、ラクスの号令を待っている。

「・・・行くぞ！」

ラクスはそう言って王城に入って行くと、反乱軍も後に続く。

無数の大軍が王城内に攻め入ると、そこでは既に戦闘が起きていた。

悪逆の果てに

城内の戦闘に呆気にとられていたラクススの元に兵士が報告しに来ました。

「ラクス様！城内では直属部隊とカムイ様の部隊が戦っております！」

「何だ?!?何故だ・・・何故、カムイ様達が！」

「わ、分かりません・・・」

兵士の言葉にラクスは顔を歪めると、兵士に指示を出した。

「この際だ！カムイ様達の戦いに乗じて直属部隊に攻め掛かれ！」

ラクススの命令を聞いた兵士達は直属部隊に攻め込む。

瞬く間に乱戦となり、ラクス自身もディアブ羅斯を手に直属部隊を相手に戦う。

「マクベスとガンズを探せ！奴等さえいなくなればガロンは手足をもがれたも当然だ。探せ！」

ラクスは城内を歩きながらマクベスとガンズを探していると、カムイが走って来るのが見えた。

カムイもラクスを見つけたのか立ち止まった。

「ラクスさん・・・」

「カムイ様・・・何故、こんな事を？」

「それは私の台詞ですよ。ラクスこそ何で謀反を仕掛けたのですか？」

「・・・私は自分の良心に従って動いただけです。貴方の為ではない」
ラクスはカムイにそう言うと、歩いて行こうとする。

「待ってください！貴方は何故一人で背負おうとするのですか！・・・仲間なんですから私達に頼ってください」

カムイは悲痛な顔で見つめてくる。

「・・・私は貴方の父を殺した、それも目の前で。だから、貴方の仲間に相応しくない・・・！」

「そんな事はありません。だって貴方は私をこの場所に来るまで守ってくれました・・・それなのにお父様の事で仲間ではないと言うのは

おかしいです!」

「カムイ様……」

カムイの言葉にラクスはうつ向きながら悲痛な顔をする。

今までにカムイの父スメラギの事で、常に不意目を感じていたラクスにとつては救いのある言葉だった。

「……ありがとうございます。ですが、それでも私自身で決着を着けたいのです」

「……それなら私も一緒に戦います」

「ッ!？」

「貴方がお父様……いえ、ガロンと戦うのなら私達も共に戦います!」

カムイはそう言うと、ラクスは涙を流した。

「……私にとつて本当に勿体無い仲間達だ」

「おやおや、謀反人のラクスとカムイではありませんか?」

空気の読めないこの発言を聞いてラクスは予想がついた。

ラクスがそこを見ると、マクベスがいたのだ。

「マクベス……!」

「ふん、まさか貴方が謀反とは……世の中分かりませんね」

「黙れ。お前の様な野心家に言われたくない。今すぐにその首を差し出せ。私の妻を泣かせたんだ……楽に殺してはやらん!」

ラクスはディアブロスを構えてマクベスにそう言うと、マクベスは不適に笑って魔導書を手にした。

「ふふ、貴方は変わりませんか? 暗夜の出世頭同士の対決……ガロン様が見れば喜びそうですね?」

「正気だったらな。もはやガロンはどうかしている……あの方はもう、私利私欲にしか動かない」

「そうですね……ですが、それでこそ私は出世できた! だが、貴方に今、壊された! 出世どころの話ではない……もう、私の命すら危険なんですよ!」

「ッ!?! ラクスさん!」

カムイの叫びと同時に、マクベスは逆ギレとも取れる言葉をラクスに言い放ちながら魔法をラクスの至近距離で発動させる。

だが、ラクスは魔法を意図も容易く避けてマクベスを斬りつける。マクベスはラクスの攻撃を肩に受けて思わず、身を引いた。

「ひッ！な、何て奴だ！至近距離の魔法を！」

「お前には分かるまい・・・望まないのに勝手に出世する者の苦しみを・・・出世した分だけ人を殺して苦しむ気持ちを・・・」

「それが何だと言うのです！暗夜は！」

「暗夜が何だ？暗夜は戦争する為の国家あるいは出世する為の国家とでも言いたいのか？笑わせるな・・・お前の様なクズに暗夜を語る事は許さない」

ラクスはそう言うと、ゆっくりとまさかに向かって歩いて行く。

マクベスは魔法を発動させ様もしたが、中々発動しない。

ラクスはマクベスの前に立つと、ディアブ羅斯を降り下ろした。

「ひいッ！・・・あれ？」

「消え失せろ・・・二度と暗夜にその面を見せるな」

ラクスはマクベスの目と鼻の先にディアブ羅斯を止めており、マクベスは腰が抜けてへたれ込む。

「ど、どうして殺さないのですか？」

「・・・昔の借りだ。新米だった時、戦地で偶然にも助けられたその借りを返した。さあ、死ぬか消えるか早くしろ」

「・・・あまい奴め。だが、もう二度とお前の前に出てやるものか！」

マクベスはそう言うと、走って逃げていった。

「良いのですか？」

「・・・彼奴の処分は外にいる反乱兵に任せる。私は個人的に命は助けたが、反乱兵は許すと言っていないだろ？」

ラクスはそう言ってカムイに微笑むと、仲間達がやって来た。

「カムイ。片付いたぞ・・・ラクス」

「父さん・・・」

「・・・マークス様、レーラ」

「・・・ラクス。反乱の訳は後で聞こう。それよりもカムイ、お前の父上に対する真実とは何だ？」

マークスはカムイに問うと、カムイは真剣な顔つきで言う。

「はい。私が今から王座の間で見せる物が真実です。暗夜王ガロンの
本当の姿を」

カムイはそう言うと、アクアと共に王座の間に歩いて行く。
そのカムイの後に続く様にラクスと仲間達も続く。

真実

カムイ達とラクスは王座の間の前まで足を運んでいた。

何も知らないマークス達やラクスにはこの中に何の真実があるのかと、疑問に思っていた。

「カムイ。この中にお前が言っている真実があるのか？」

「はい。今からお見せする真実をしっかりと見てください」

カムイはそう言うのと、王座の間の扉を開け放ち中に入っていくと、そこにはドロドロの異形の怪物が鎮座していた。

その姿は、崩れているがガロンその物だった。

「いやあああああッ！」

「ッ!? 父上……!?!」

「嘘……」

「こ、これは……」

「な、何でこんな……」

マークス達とラクスは目の前の異形の姿をしたガロンに信じられずに見ていると、ガロンが動いた。

「……お前達！よくもわしの本当の姿を見よったな。こうなれば、一人も生かしては帰さん！」

ガロンはそう言うのと、泥の様な腕を回してマークス達とラクスに攻撃を仕掛けた。

突然の事に、全員対処できず攻撃を受けてしまった。

「皆さん！目の前の怪物はお父様ではありません！戦ってください！」

「無理だよ……」

「そんな事を言われても……」

「例え異形に成り果てても私達の父親……割り切れないわ……」

カミラ、エリーゼ、レオンは倒れ込んだままそう言い、マークスとラクスは黙ったまま倒れ込んでいる。

カムイは全員を振るい立たせようと、ガロンに向かっていくが夜刀神が通じなかった。

「ッ!?!」

「はっはっはっはっ、そんななまくらではわしを傷つける事すらできません!死ねえ!」

ガロンはそう言うと、再び腕を回して攻撃を仕掛けてきた。

カムイは咄嗟に目を瞑ったが、いつまで経っても痛みはこなかった。

「……ッ!?!マークス兄さん、ラクスさん!?!」

「……」

「……」

「貴様ら!わしに齒向かうのか!」

「黙れ異形の者よ」

「何!?!」

マークスはガロンに対して冷たく言い放つと、ラクスも言い放つ。

「私は……ガロン、いやガロン様に救われた命をガロン様に差し上げたが、異形の怪物に渡した覚えはない。ましてや自らの子に手を挙げた事すら無かった事を知っている私にとっては貴様は偽者だ!」

「ああ……私はいつか本当の父上が戻って来てくれると信じて剣を振るってきた。だが、もうそれが叶わないなら……カムイと共に貴様を倒す!」

マークスがそう言った瞬間、ジークフリートが光り出してカムイの夜刀神と共鳴した。

「何だ……ジークフリートが……!?!」

「この光は!?!」

カムイがそう言うと、夜刀神は激しく光だして光が消えると、そこには新たな姿をした夜刀神があった。

「この夜刀神は……新たな力を得た夜刀神、暗夜!」

カムイはそう言って夜刀神を掲げた。

夜刀神の力が以前よりも強くなっており、回りの者にその存在感を感じさせた。

「その様な形を変えただけの剣でどうにかできるものか!」

「形だけが変わっただけと言うのなら、その身で受けてみてください

！」

カムイは再びガロンに攻撃すると、今度は攻撃が通った。

「ぐおお！何故だ、何故攻撃が……！」

「この夜刀神・暗夜はマークス兄さん達との絆！もう、貴方に負けたりしません！」

カムイがそう叫ぶと、他の兄妹達も立ち上がった。

「ここまで言われちゃ戦わない訳にはいかないね」

「そうね。私もカムイの為に戦うわ」

「私も頑張ったちゃうよ！」

「皆さん……ありがとうございます」

カムイはそう言うと、再びガロンと対峙する。

「おのれ……！貴様らも反旗を翻すか！良かろう……全員、皆殺しだ！」

ガロンはそう叫ぶと、腕を再び回して攻撃を仕掛けてきた。

その攻撃はカムイに向かっていくが、ラクスが防いだ。

「行け！私が援護する！」

「はい！」

ラクスの言葉を聞いたカムイは走り出して、ガロンの元に向かっていき攻撃した。

「ぐおお！」

ガロンは叫び声を挙げて身を引いた。

続けざまにマークスとレオンの連携攻撃が加わり更にダメージを

負い、カミラも竜に乗りながら斧でガロンを攻撃する。

「くそお！何故だ、何故攻撃が当たらない！」

「それは以前の貴方の攻撃より遅いからですよ」

ラクスはガロンにそう言いながらディアブ羅斯を構えた。

「貴方は昔、勇猛な戦士だった……だが、今は泥の怪物。そんな柔らかい体で以前の戦いができる筈がない！」

ラクスはそう言うと、ガロンを攻撃した。

「くっ……わしへの恩を忘れたか……ラクス！」

「恩は忘れていません……ですが、どちらにしても貴方に刃を向け、

国を救おうとしたでしょう」

ラクスはディアブロスを構えつつガロンにそう言うと、ガロンは叫ぶ。

「おのれ！貴様に、その剣を与えるべきではなかったか！わしが信じられぬ少数ない臣下であった筈なのに！」

「それは貴方が変えたんだ。私はカムイ様達と旅をしなければ、この戦いでも黙って付き従っていただけの人形に成り下がっていた。カムイ様の側で旅を続けている内に私は本当にこれで良いのかと考える行動できたんだ。貴方のお陰でね」

ラクスの言葉にガロンは黙り込んだ。

「お父様……いえ、異形の怪物よ。今こそ貴方を倒します！はあ！」
カムイはそう言って走ると、ガロンは腕を大きく横に振りかぶった。

「死ねえ！カムイ！」

「ッ!？」

カムイはガロンの攻撃を咄嗟に飛んで避け、夜刀神をガロンの頭に突き刺した。

「ぐおおおおお！」

ガロンは悶え苦しみながら倒れていき、動かなくなった。

「……さよなら。ガロン様……」

ラクスはそう言って、ディアブロスを鞘に納めようとした時、ガロンから声が聞こえた。

「……ふん、貴様達に討たれる日が、来るとはな……」

「ッ!？」

「まだ生きていますか!？」

カムイとマークス達は一斉に武器を構え直した。

「そう警戒するな……もう、異形の存在ではない……」

「……本当のガロン様ですか？」

「そうだ……まさか、忠義者のお前が反乱とは驚いたぞ。だが、それで良かったのかもしれない……」

ガロンはまだ異形の姿だが、何処か笑っている様に見える。

ラクスは慌てて駆け寄る。

「・・・ガロン様」

「ふん、泣くか・・・あの頃に出会ってから泣かなかったお前がまた泣く日が訪れるとは、生き恥を晒すのも悪くない・・・」

「何故、あんな・・・」

「・・・それは言えん」

ガロンの言葉にラクスは深く追求はしなかった。

ガロンの元にカムイやマークス達もやって来た。

「父上・・・」

「マークス・・・苦勞を、かけたな・・・」

「いいえ・・・最後に父上が戻ってきてくれただけでも、私は・・・」

「ふ、そうか・・・カムイ・・・」

「はい・・・」

「すまなかった・・・わしが操られていたとは言え、お前の父を殺した・・・」

「もう良いんです・・・その言葉だけで充分です・・・」

カムイの言葉を聞いたガロンは穏やかな雰囲気を出して、静かに溶ける様に死んでいった。

マークス達は涙を流しながら悲しんだ。

最後に見せた父の本当の姿を目に焼き付けて。

タクミの異変

ガロンを討ち倒したカムイ達は、反乱を起こしたラクスの処遇を話し合っていた。

共にカムイ達と戦ったとはいえ、反乱を起こしたのは事実なのだ。「……ラクスさん。貴方が反乱の首謀者だと言う事は間違いないですね?」

「はい……もう覚悟はできております。どうぞ、お斬りください」

「……ラクスさん。私は、貴方を斬る様な事はしませんよ」

「……何故?」

「私は貴方に言いましたよね? 仲間だと……だから、仲間であるラクスさんを斬ったりしません。それに貴方には家族がいるではありませんか」

カムイはそう言うと、ラクスは振り向くと不安そうに見つめるベルカとレーラがいた。

「ですが、私のした事は暗夜王国への反逆であるのは許される物では……」

「貴方が何と言おうと、斬りはしません。これはこの軍のリーダーとして、暗夜王国の王女としての命令です。生きてくださいラクスさん……」

カムイはそうラクスに告げると、ラクスは頭を下げた。

「……寛大なご処置ありがとうございます」

「はい……では、ラクスさんの件はこれで終わりです。後は反乱兵達の戦闘停止させるだけです」

ラクスがそう言った瞬間、突然、何処からともなく不気味に光る矢がカムイに襲い掛かる。

カムイは間一髪避け、飛んできた方向を見るとそこには不気味な光を纏ったタクミだった。

「タクミさん……!? 生きていたのですか、タクミさん!! でも、その姿は……殺してやる……」

「……殺してやる……」

「え．．．？」

「殺してやる!!カムイつつ!!!」

タクミはそう言うと、再びカムイに弓を引いて矢を放った。

その攻撃は三回あり、最初は避け、二回目は防ぎ、最後はカムイの腕に掠めた。

「お前なんか、殺してやる．．．殺してやる、殺してやる、殺してやる．．．」
「タクミさん! 攻撃を止めるのです! ガロン王はもういません．．．戦争は終わったんです! これ以上無意味な戦いをする必要はありません!」

「殺す．．．お前だけは僕が殺す．．．そう決めていたんだ．．．」

タクミは虚ろな目で、カムイに殺気を向け続ける。

カムイはどうかタクミを止めようと、説得を続ける。

「くツ．．．! 話を聞いてください、タクミさん」

「待って、カムイ! 説得が通じる相手ではないわ! 信じたくはないけれど．．．彼もガロン王と同じように、何者かに囚われている」

「何ですって!？」

「残念だけど．．．あの姿は、もはや手後れよ．．．おそらく、スサノオ長城から身を投げた時に、タクミはもう．．．」

「そんな．．．!」

アクアの言葉にカムイは打つ手が無い事に悲痛な表情をする。

「では、倒すしかないと言うのですか!?! お父様と同じ様に!」

アクアは黙ったままになり、カムイはその意味を理解したのかタクミを見る。

タクミは今にも攻撃を仕掛けてくる気配を出しており、危険な状態だった。

「お前のせいだ．．．お前のせいで、白夜王国は．．．僕達の国は．．．滅茶苦茶になってしまった．．．お前さえいなくなれば楽になれる．．．こんな思いもしなくて済むのに．．．! お前さえ．．．いなくなれば．．．!」

「それは違うぞタクミ」

その声は、王座の間の扉から聞こえた。

そこには、リヨウマ、ヒノカ、サクラの三人がいた。

「リヨウマさん！ヒノカさん！生きていたのですね！」

「ふ、そこにいるラクスに一時的に死ぬ様に言われてな・・・戦争を長引かせるのを俺も避けたいと思い、ラクスの策に乗ったんだ」

リヨウマはそう言うのと、タクミに向かって叫ぶ。

「しつかりしろタクミ！お前は本当にそれで良いのか！カムイは確かに俺達の手から離れはしたがそれでも、カムイは戦争をどうにかしようとして頑張ってきたと、ラクスから聞いた」

「黙れ・・・！」

「カムイは両国の為に平和を取り戻そうと長い旅を続けてきた。俺達と戦う事になっても諦めずにだ！お前は諦めるのか・・・操られたままで終わる気か！」

「黙れッ！」

タクミはそう言うのと、弓を引いてリヨウマに矢を放とうとしたがその腕は掴まれた。

腕を掴んでいるのはラクスだった。

「何!？」

「いい加減に・・・しろー！」

ラクスはそう叫ぶと、タクミの顔をおもいつきり殴った。

タクミは堪らず吹き飛び、ラクスは吹き飛んだタクミの胸ぐらを掴んで叫んだ。

「お前は操られているとはいえ、何も聞こえないのか・・・カムイとリヨウマ王子達の悲痛な叫びが！聞こえないなら、また殴ってやる！聞こえるまで何度でもだ！」

ラクスはそう言うのと、タクミは悶え苦しみながら暴れる。

「・・・僕は・・・僕は・・・！」

「ッ!?今なら！」

アクアはそう言うと、歌い出した。

その歌はとても綺麗な物で心が洗われる様な感覚だった。

タクミは暴れるも、ラクスに押さええられた。

「離せっ!!!」

「離さん！お前が正気に戻るまでは離さんぞ！」

「ぐわあああああッ！」

「お前の心の中にあるタクミとしての人格を思い出せ！タクミ！」

ラクスはそう叫ぶと、タクミはいきなり倒れラクスは慌てて支える。

「タクミさん！」

「タクミ！」

カムイ、アクアとリョウマ達は急いで駆けつけると、そこには穏やかに寝息を立てるタクミがいた。

「気絶しているだけです」

「・・・良かった・・・タクミさん」

「まさか、貴方の叫びで手遅れだったタクミの意識を取り戻すなんて・・・」

「私は心の奥底で叫んだだけだ・・・むしろ、カムイ様とリョウマ王子達の思いの方が通じたのだろうか」

ラクスはそう言った時、後ろからとてつもない気配を感じとりラクスは素早く振り向いた。

そこには、黒いフード付のコートを着ている男が立っていた。

「お前はあの時の!?!」

「誰ですか・・・?」

「・・・私の母を殺めた男です。気を付けてください・・・あの方は、私でも強いと感じます・・・」

「・・・この道はイレギュラーに邪魔をされたか・・・まあ良い、次の道で殺してしまうまでだ・・・」

「待て！それは何の事だ！イレギュラーとは何だ!!!」

「くく、いつか分かる・・・去らばだ、イレギュラーよ」

男はそう言うと、消えていった。

時代の流れと歴史

戦争終結から月日が経ち、ラクスは騎士としての仕事から一線を引いて書類仕事に明けくれていた。

羽ペンで次々と書類に名前を書いたりしていると、扉がノックされた。

「父さん。レーラです」

「入って良いぞ」

ラクスが許可をすると、レーラは大量の書類を持って入ってきた。

ラクスはそれを見て溜め息をつく。

「全く、誰がこんなに仕事を貯めたんだ・・・」

「父さんだと母さんが言っていました」

「・・・そうか」

ラクスはまた溜め息をつくと、仕事を再開する。

「所でお前、ジークベルト様の臣下だろ？離れていて良いのか？」

「大丈夫です。むしろ、父さんが仕事辛さで脱走しない様に見張ってくれと言われました」

レーラはニコやかにそう言うと、ラクスは苦笑いをした。

ジークベルトは最近になって厳格とは言わないが、マークスに似てきていた。

真面目な所にも助すけられているのかカリスマ性も高まっている。

「まさか、あの自信の無さが出ていたジークベルト様が頭角を現すとはな。うれしい限りだ・・・」

「そうですね」

ラクスはふと、レーラの薬指を見ると指輪が光っていた。

ラクスはそれを見て、固まってしまった。

「父さん。どうしました？」

「・・・れ、レーラ。その薬指の指輪は？」

「え？あ、はい・・・実は・・・プロポーズされました」

「だ、誰にだ？」

「・・・ジークベルト様」

ラクスは自分の娘にプロポーズした相手がジークベルトと聞いて更に固まる。

ラクスは何も聞いてはおらず、何故今更そんな報告をするのかと頭でいっぱいになる。

「ほお、そうか・・・何で報告しなかった？」

「ジークベルト様がもう少し覚悟してから行きたいと言うので・・・」
「まあ、妥当だろうな・・・レーラに手を出そうとした奴を叩きのめしてる所を近くで見てたからな」

ラクスはそう思いながらも言わなかった。

自分の娘が結婚するかもしれないし、何よりジークベルトなら任せられそうだったからだ。

「はあ、本当に結婚するのか？指輪を付けているが・・・」

「はい・・・この指輪を受け取った時から覚悟しています・・・」

「・・・そうか。じゃあ、ジークベルト様の覚悟ができたらもう一回、二人で報告に來い。いいな？」

ラクスはそう笑いながらレーラに言うと、レーラは泣きながら頷くと部屋を退出した。

「・・・寂しくなるな」

「貴方もやっぱりそう思うのね」

「ベルカ、いつ入ってきたんだ？」

「少し前よ」

ベルカがそう言うと、側にあつた椅子に座る。

「戦争が終わってからかなり月日が経つたな・・・」

「ええ・・・マークス様とリョウマ王子の戴冠式とか平和条約の締結とか国の建て直しと貧困問題の解決とか忙しそうにしていたものね」

「だが、それでも短い物だったよ・・・」

ラクスは懐かしそうに外を見ると、賑わう外の城下が見える。

あちこちに灯りが着いていて幻想的な街並みで、暗夜王国の名物になりつつあった。

「短いと言ってもここまで立て直せるとは思わなかった」

「まあ、私だけでなくこの国の王であるマークス様とその王妃カムイ

様と共に頑張ったからだよ。それと、他の仲間達も」

「・・・そうね」

ラクスとベルカは笑いながら話していると、ラクスが徐に時計を見ると立ち上がる。

「すまない次の仕事の時間だ。また一緒にゆつくりと話そう」

「うん・・・楽しみにしてるわ」

くある歴史書く

数百年前に起こった暗夜王国と白夜王国の戦争は英雄カムイと両王族達が納め終結させた。

英雄カムイの性別は分からないが、マークス王の妻と記されている事から女性である説が根強く学者達に残されている。

そんな、英雄カムイの元には決して光に照らされる事のなかった英雄が一人いた。

その名はラクス。

かつて暗夜王国の暴君ガロンに仕えた冷酷な騎士として、歴史に深く刻まれているが真実は定かではなく、諸説では反乱を引き起こし、ガロンを討つ為の戦いをしたと言う記録があるが何故かこの部分は全て破り捨てられた後があり、知る事はできなくなっている。

謎の多い騎士ラクスは、かなり愛妻家で仕事に時間が空いたら常に夫婦で過ごしていたとされるが、その妻も不明で本当は結婚してはいないので、と言われる。

だが、ここで驚きの真実が明らかになった。

それは、現暗夜王には騎士ラクスの血を受け継いでいると語って貰え、一つの文章が渡された。

それは、暗夜王国初の女騎士団長でラクスの娘とされているレーラの書き記した物で、そこにはラクスについての記録が沢山記されていた。

その中の一部に、誰よりも勇敢で賢い父親だが、結婚報告に来たジークベルト様を叩きのめしたと、恨み事を吐く様に書き記していた。

ラクスはかなり親バカなだけだと思われたが、書き記していた文章の注目する所はそこではない。

ジークベルト。

この名前は歴代暗夜王のマークスの息子で、マークスから王座を譲り受けた暗夜王の一人なのだ。

その人物を叩きのめしてるのはともかく、ジークベルトとレーラは結婚報告をラクスにしたと言う事は、二人は夫婦である事が分かり、ラクスが結婚をしていたと言う事と現暗夜王の言っている事の証拠でもあった。

謎の多い騎士ラクス。

まだまだ、追及すべき内容は多く残っている。

その答えがいつ明らかになるかは・・・まだ不明である。

【暗夜ルート編 完結】

透魔ルート編 道を探る者

「・・・マークス兄さん。軍を引いてください」

カムイの言葉を聞いたラクスはディアブロスに手を掛けたが、ここで予想外の答えがカムイが言う。

「リヨウマ兄さんも軍を引いてください」

カムイの答えは、どちらにも着かないと言っているに等しい事を言っている。

ラクスはカムイの言葉にどうすれば良いのか分からなくなり、マークスを見る。

「カムイ・・・裏切るつもりか？」

「違います！私は」

「くっ・・・お前にはまだ迷いがある様だな。ならば、私がお前の迷いを絶ちきってやろう」

「させるか！カムイは俺達の兄妹だ。絶対に渡さん！」

マークスとリヨウマは各々の得物を構えて対峙した。

「止めてください！マークス兄さん！リヨウマ兄さん！」

「下がれカムイ・・・リヨウマ王子。貴様とはいつか刃を交えるつもりだった」

「第一王子同士の戦いか。良いだろう、貴様を倒し、カムイを連れて帰る！例え、無理矢理でも!!」

二人は戦いを始め、両軍も戦闘を再開し始めた。

ラクスはディアブロスを引き抜くと、白夜軍に向かっていく。

「行くぞ！」

「」「うおおおおおおおッ！」「」

ラクスの命令を受けた暗夜軍は白夜軍と全面衝突し、激戦になった。

ラクスは次々と来る白夜兵を斬り捨てていると、軍に乱れが起きているのに気づいた。

ラクスは辺りを見渡していると、伝令が走ってくる。

「ラクス様に伝令！カムイ様率いる部隊が我が部隊を攻撃しているとの事！」

「何だど!?では、カムイ様は白夜に!？」

「い、いえ．．．それがカムイ様は白夜軍の部隊にも攻撃を．．．」

「．．．いったい何を企んでいる」

ラクスは両軍を敵に回したカムイの行動に信じられないと考えていると、カムイが現れた。

そこには、水色の長い髪をした少女とジョーカーと茶髪のメイドもいる。

「ラクスさん．．．!」

「．．．カムイ様か。あと、ジョーカーと他の二人は知らんな」

「．．．今はそんな事は良いのです。お願いです．．．退いてください」

「何故だ？国の為に戦う騎士である私が何故、退かなくてはならないのです？今なら間に合う．．．カムイ様、暗夜にお戻りください」

「それはできません．．．私は両国がどちらも争わない道を探すと決めたのです」

カムイの言葉にラクスはもうカムイの考えを変える事ができないと考え、ディアブロスを向けた。

「そうですか．．．なら、死んでください」

「ッ!？」

ラクスからの突然の攻撃を避けたカムイは、ラクスに夜刀神を向けた。

「お願いです．．．軍を退いてください!」

「はあ．．．やはり裏切り者に成り果てましたか．．．早く死んでください。私は白夜と戦争をしなくてはいけないのです」

ラクスはディアブロスを再びカムイに振るうが、メイドが防ぎジョーカーが暗器を投げてきた。

ラクスはそれを簡単に弾き返すと、今度は水色の髪の少女が薙刀で攻撃してきたが、これも防ぐ。

「四対一か．．．」

「・・・退いてくださいラクスさん。今の貴方に勝目はありません」
「ふぎけるな・・・私が数が増えたぐらいで負けると思っているのか？
お前さえ倒せば・・・終わりだ！」

ラクスはそう言いながらディアブ羅斯を振るおうとしたが、暗夜兵
数人に止められた。

「邪魔だ！」

「落ち着いてください！ラクス様、回りを見てください！」

ラクスは言われた通り回りを見ると、暗夜軍と白夜軍が奥に退き始
めていた。

「これは・・・お前達、いったい何をした・・・!？」

「両軍の部隊長を倒しました。どちらも大きな被害で退かざるおえな
い状況にしたのです。ここにいるアクアさんの策ですが」

カムイは隣にいる少女アクアに顔を向けて言う。

「ちツ、まさか策士が紛れているとはな・・・」

「策士と言う訳ではないわ・・・ただ、両軍の部隊長が倒れば戦いを
一時的に止めざるえないと言う事を知っていたから」

アクアが無表情でそう言うと、ラクスは兜の下で悔しきで顔を歪め
た。

「ラクス様！我々にも撤退命令が出されています！どうか撤退を！」

「・・・撤退だ。今すぐに退くぞ」

ラクスがそう命じると、暗夜兵達は撤退していく。

「カムイ様いや、カムイ・・・今回は私の負けだ・・・だが忘れるな
お前は必ず討たれる・・・両国を敵に回したのだからな」

ラクスはそう言ってから自分も撤退していく。

まさかの結果にラクスは悲痛な思いをしつつも、今は撤退するしか
なかった。

決別

カムイによつて退かされたラクスはマークスの元に向かった。指示を仰ごうとしたが、とてもそんな状況ではなかった。

マークスは辛い顔をして、カムイを見ている。

「・・・くツ。何故だ、カムイ。何故暗夜に刃を向けた。例え血は繋がらなくとも、私達は本当の家族ではなかったのか？」

「マークス兄さん・・・！私はただ、話を聞いてもらいたいです！」
カムイの言葉にマークスはもう聞く気はないのか黙っている。

「カムイ・・・どうして白夜を裏切った。お前の正義とは、一体、なんだったのだ・・・」

「違います！リヨウマ兄さん！私は白夜を裏切った訳ではありません！」

リヨウマも同じなのか、マークスと同じ様に黙り込む。

ここでマークスが口を開いた。

「私は・・・ずっとお前の事を、本当の兄妹だと思って・・・っ。・・・全軍に通達。カムイは暗夜を裏切った。以降はカムイを敵とみなす。速やかに捕縛せよ！」

「そんな・・・！」

「カムイ・・・お前が連れ去られた時の身の裂ける思いは今も忘れていない。共に過ごせなかった時間を取り戻す事もできない・・・だとしても・・・俺はお前をもう一度、家族として・・・いや・・・それはもう夢物語なのだ。・・・皆に伝える。カムイは白夜を裏切った。敵に回るのならば・・・戦うしかない！」

「リヨウマ兄さん！私は・・・私は・・・！」

二人の言葉を聞いたカムイは悲痛な表情をしている。

ラクスも内心ではかなり辛い物で、兜の下ではカムイと同じ悲痛な表情をしている。

だが、ラクスはそれを押し殺して全軍に命じた。

「・・・全軍、マークス様の言葉通りカムイを・・・捕縛せよ！」

「ラクスさん・・・！」

「待つて、カムイ。今は無理よ。三人に貴方の言葉は届かないわ。一先ず此所を離れましょう。捕まる訳にはいかないもの」

「マークス兄さん・・・リヨウマ兄さん・・・ラクスさん・・・」

カムイはそう言い残すと、逃げ出した。

「追え！決して逃がすな!!」

ラクスの命令で暗夜軍の一部がカムイ達を追いかける。

ラクスは追撃を命じた後、マークスを見ると辛そうに顔をうつ向かせている。

「・・・辛いのは分かりますが、今は目の前の戦いに集中してください。言っても、両軍はカムイによって崩されて士気ががた落ちしてお互いに戦いになりませんが・・・」

「・・・士気が下がった以上は仕方がない。全軍、退却だ!」

マークスはそう命令すると、速やかに暗夜軍は退却し始めた。

白夜軍に動きはなく、それ所か同じく退却していく。

「(今回は引き分けか・・・まあ、兵糧が少ないから丁度良いが・・・カムイ。貴様は絶対に殺しておかなければならんな)」

ラクスはそう思いながら、馬を走らせる。

進攻

暗夜の王城に引き分けと言う、結果を持ち帰ったマークス率いる暗夜軍。

軍を率いた将達は咎めをくろう覚悟で、ガロンの前に立った。

「・・・白夜への進攻は失敗したのか？」

「申し訳ございませぬ・・・全ての責任は副官である私の責任。どうか、咎めは私一人で負わせてください・・・」

ラクスの言葉にマークス達は驚き、マクベスは笑った。

全責任をラクスは取ると言った事にガロンはまるで結果は既に分かっていたと言わんばかりに、ラクスを咎めない。

「・・・いや、それはない。お前だけの責任ではないのは分かっている。何故、他の者を庇う？」

「・・・」

「ふふ、言えぬか？まあ良い・・・それよりも次の戦いだ。マークス、レオンは主力を率いて近隣諸国を制圧、カミラ、エリーゼは待機、ラクス、マクベス、ガンズは白夜へ進攻せよ」

「・・・了解しました父上」

マークスが代表してそう言うと、解散する。

ラクスも白夜へ進攻しに行こうとした時、ガロンに呼び止められた。

「ラクス」

「はい。何でしょうか？」

「お前には白夜への進攻と同時にやってもらいたい事がある」

「・・・その内容は？」

「カムイの討伐だ」

「ッ!？」

ガロンの言葉に目を見開いたラクスは平静を保ちつつ、それを了承した。

「分かりました。必ず謀反人カムイの首を挙げて見せます・・・では」
ラクスはガロンにそう言うと、退出していく。

ラクスは白夜の国境線にある村まで来ると、村の者達は逃げる支度をしていた。

「・・・どうやら張れていたらしいが、そんな事はどうても良いな・・・全軍、突撃！」

ラクスが命じると、暗夜軍は突撃して村に襲い掛かった。

暗夜兵は村人を斬り捨て、家に火を放ち、略奪したりしている。

ラクスは暗夜兵の横暴を止める気はなく、ただ茫然と見ていた。

「(借り物の暗夜兵はやはり狂暴だな。私の兵士ならすぐに首が飛ぶのだがな・・・)」

ラクスは黙って見ていると、遠くから誰かかやって来ていた。

その姿を見たラクスは目を見開いた。

「カムイ・・・!?!」

ラクスが驚いていると、カムイ達は暗夜兵を攻撃し始め、押され始めた。

「ラクス様！戦況が不利です！ご指示を!!」

「・・・そのまま戦え」

「へ・・・?」

「そのまま戦え。お前達はカムイだけを倒す事に集中しろ・・・他はどうでも良い」

ラクスはそう冷たく言い放つと、暗夜兵は絶望しながら戦いに戻る。

「(さて、見極めさせて貰いますよ・・・貴方の本気をね)」

ラクスは兜越しで不適に笑うと、暗夜軍がカムイ達に向かって行く。

だが、少数である筈のカムイ達が暗夜軍を押し歩いていき遂に敗走させた。

「(やはり本気か・・・だが、いつまで戦えるかな?)」

「ラクス様！・・・はお退きください！この戦いは敗れました！」

「ふん、分かっている・・・全軍、撤退！」

ラクスは撤退を命じると、軍は撤退する。

ラクスは撤退しようとした時、視線を感じそちらに向くと、カムイが此方を見ていた。

ラクスは此方を見てくるカムイを気にせず撤退していく。

一時帰還

進攻に失敗したラクスは、戦力がこれ以上減らさない為に暗夜王国に退却をしていた。

現在、ラクスは何故かマクベス、ガンズと共にガロンから咎めを受けていた。

「(こいつらも失敗したのか……)」

「それで？ 白夜王国に進攻した際に失敗した理由を聞こうか？」

ガロンは無表情で三人に聞く。

「はい……私は白夜王国の国境付近に辿り着いた時、村を攻撃したのですが謀反人のカムイによって妨害を受け、大きな損害を受けたので撤退せざるおえませんでした……」

「白夜王国に進攻したのは良かったのですが、私を通った道には何故か白夜軍の大軍がおり、戦っている内に被害が大きくなり流石に撤退しなければいけませんでした……」

「俺は部隊を壊滅させてしまいました……」

「いや、可笑しいだろ」

二人のまともな理由からのガンズの部隊壊滅と言う失態を聞いて、ラクスとマクベスはツツコム。

「お前は馬鹿か。何で部隊を壊滅させた？」

「そこはラクス殿に同感ですな？」

「いや、何か奇襲を受けちまってよ……」

「本当に馬鹿だ……」

ガンズが頭をかきながら苦笑いすると、ラクスがガンズを罵る。

ガロンはこのコントに見える三人の会話に溜め息を漏らした。

「はあ……もう良い。それよりも次の任を与える。ラクス、お前にはもう一つの命であるカムイ討伐を続行しろ。マクベスはここに残り策を練り直せ」

「が、ガロン様……俺は？」

「お前は王城を掃除している。部隊を壊滅させた罰だ」

ガンズはガクリツ、と頭を下げる。

「ガロン様。任の続行に伴いお願いがあります」

「何だ？」

「私が鍛え上げた軍を率いさせてください……そう、貴方の親衛隊の事です」

ラクスの言葉にマクベスが反対意見を挙げる。

「なりません。親衛隊はガロン様をお守りする為の兵士、騎士達。態々、戦場に出すなど」

「何故、親衛隊なのだ？」

「私が率いさせて頂いた軍は練度が低く、まともに戦えないと判断したのです。もし、軍を変えたとすれば率い慣れた親衛隊の方が良いと考えたのです」

「ふふ、そうか。親衛隊はわしの直属部隊の中で、一番の実力を持つが獣同然の者が多い……わしの手に余るならお前に任せた方が良さそうだな」

ガロンはそう言うと、ラクスは頭を深々と下げた。

「ありがとうございます。必ずやカムイを討ちましょう……」

ラクスはそう言って退出すると、マクベスはガロンに問う。

「ガロン様。何故、ラク스에親衛隊を？」

「言ったであろう……親衛隊はわしの手に余りすぎる。元々はラクスが拾ってきたゴロツキ共で、ラクス以外の他人の命令など聞かん。強力故の諸刃の刃よ……下手をすればわしの命すら無視するだろうな」

ガロンはそう言いながら笑うと、マクベスは親衛隊の実態がまさかそんな風になっているとは思わなかったと思っている。

「だが、ラクスが親衛隊を率いる話は別だ。暗夜王国の最精鋭に恥じぬ実力を敵に見せつけ恐怖を刻んできた。これでカムイも終わるだ……」

ガロンはそう言うと、笑った。

騎士と第二王女

ラクスは出撃までかなり時間がある為、王城の図書室で本を読んでいた。

王城の図書室にある本は膨大で、何年掛けても全て読み終わるのに時間が掛かると言われている。

ラクスが人気の無い所で、兜を脱いで本を読んでいると、足跡が聞こえラクスは素早く兜を着けた。

「誰だ・・・？」

ラクスはそつと覗き込むと、そこにはエリーゼが本を探していた。

ラクスはエリーゼが本を探しに来たのだと分かると、覗き込むのを止めて兜を着けたまま読むのを再開しようとしたが、足跡がラクスの元に来ていた。

「あ、ラクス・・・」

「エリーゼ様。如何なさいましたか？何か本をお探しても？」

「・・・」

エリーゼが黙り込んでしまいラクスは困り果てた。

言ってくれなければどうしようもなく、ラクスは溜め息をついて、エリーゼに再度問う。

「黙っているのは分かりませんか？悩みがあるのですか？」

「・・・ラクス。カムイお姉ちゃんを殺そうとしているのは本当なの？」

「・・・カムイの事は忘れてください。もう、貴方の姉ではないのですよ」

「嫌だよ・・・カムイお姉ちゃんの事を忘れろなんて無理だよ・・・」

エリーゼは泣き出してしまい、ラクスはいよいよどうして物かと考え始めるが、現実をエリーゼに突き付けるしかなかった。

「カムイは謀反人ですよ。何で姉としか見れないんですか？奴を殺さなければ暗夜が危険に立たされるかもしれないのですよ？」

「ッ!?!ラクスの馬鹿!!」

エリーゼはそう叫ぶと走り出してしまった。

ラクスは一人になると、机を思いつき殴り付けた。

大きな音が図書室に鳴り響く中で、ラクスは椅子に座って落胆した。

「(他にどうしろと言うのだ……!カムイは暗夜王国を捨てたんだ。絶対に生かしてはならない……暗夜王国の為にも……!)」

ラクスは決意を固めると、椅子から立ち上がり図書室を出ていく。

ラクスは王城前に来ると、親衛隊の兵士、騎士達が整列もせずに酒盛りやら、博打やらと好き勝手していた。

「……この、馬鹿共!!」

ラクスの怒鳴り声に親衛隊一同はビクついた。

「ら、ラクス……これはその……」

「呼び捨てにするな……後、何だこれは?此所はいつから宴会場やら博打場になったんだ?」

「あ、あのですね……私達、ずっと待っていてんですがあまりに暇です……」

衛生兵役のメイドが必死に弁解しようとしたが、無駄だった。

「貴様、他に準備とかがあるだろ?その時間が暇潰しに宛がうとは余程、鍛え直されたい様だな?」

「ひッ!す、すみません!」

「ラクス、じゃなかった隊長!自分達が悪いですが大人げないので威圧は止めてください!」

兵士の言葉にラクスは威圧を出している事に気づき押さえる。

威圧を押さえた事により、親衛隊の一同は安堵する。

「何は途もあれ、お前達……帰ったら説教だ」

ラクスはその言うど馬に跨がり、親衛隊一同は意気消沈している。

ラクスは頭を抱えながら悩む。

「(こいつら全く変わらん……ガロン様を筆頭とした王族や高官に対しての無礼、軍内部の風紀を乱したりもする……ガロン様達は広い心で許してくれているが、甘やかしてはいかん。何としてもこいつら

を正さなくては・・・」

「どうしました？」

「いや、何でもない・・・では、出発だ」

ラクスは不安を抱えながら、カムイ討伐に動く。

その行軍は狼の群れの如く、鋭い殺気を纏いながら進んでいく。

遭遇戦

ラクスは地図を見ながらカムイの同行を探って移動していた。

村での戦闘以来、あちこちで現れているらしいがそれでも簡単に掴めない。

「困った物だ・・・奴等の動きを把握できぬとはな・・・」

「最後に目撃されたのはテンジン砦だそうですね？」

「テンジン砦だと？白夜の軍事的要所で？」

ラクスは疑問に思いながら聞くと、親衛隊兵士から信じられない言葉を聞く。

「そうなんですよ。何でも、白夜王国のサクラ、て言う王女とその臣下を仲間にしたらしいんですよ」

「何だと？白夜王国の王女が何故・・・」

「仲間にした後、黄泉の階段の方面に向かって行ったとも、情報がありましたよ」

それを聞きラクスは考え込んでいると、カムイの行き場所に気づいた。

「・・・イズモ公国か」

「え？」

「白夜から黄泉の階段を使うのは大抵はイズモ公国へ向かう時だ。そこからまっすぐ進めばイズモ公国」

ラクスは確信めいた言葉で馬を進め様としたが、前方に土煙が見えた。

「武装した軍隊です。旗は白夜ですね」

「ほお、我々に気づいたか？」

「隊長！好き勝手に暴れて良いですか！」

「久々に腕が鳴るぜ！」

親衛隊は其々の得物を持って興奮気味に騒いでいる。

ラクスは溜め息をつきながら頷く。

「・・・程々にな」

「よっしやー！行くぞー！」

親衛隊はラクスを置いて次々と白夜軍に向かって行き、襲い掛かった。

戦闘は戦いとは呼べないくらい悲惨な物だった。

親衛隊は圧倒的な戦闘技術で白夜軍を蹂躪するが、他にもわざと急所を外して楽しむ様な者がいる。

「程々にしろと言ったのに・・・」

ラクスは頭を抱えながら呆れ返る。

親衛隊はそんな事も気にしていないのか、白夜軍を襲い続ける。

中には言えないぐらいに残酷な手段で殺す様な者もいる。

「そろそろ止めるか・・・」

ラクスはそう呟いて向かって行く。

ラクスが来ると、白夜軍の士気は完全に無くなっており後ろに徐々に下がりながら震えている。

そんな白夜軍に不気味に笑いながら迫る親衛隊。

「そこまでだお前ら」

「隊長！」

「あと少し！あと少しだけ！」

「馬鹿か。これ以上、時間を掛けるな。カムイに逃げられるだろう」

ラクスの言葉に親衛隊は非難する様な目で見てくるが、ラクスの睨みで無くなる。

「さて、白夜軍よ。私達はお前達をこれ以上は殺さない・・・だが、また会えば次は無いぞ」

「ひ、ひいッ！」

ラクスの言葉を聞いて白夜軍は全員逃げ出していく。

「ふう・・・では、行くとするかイズモ公国へ」

ラクスは再び馬を歩かせると、親衛隊も後ろから続く。

イズモ公国

ラクスは親衛隊を率いてイズモ公国まで来ると、イズモ公国は何故か雪まみれになっていた。

親衛隊は興奮気味になって雪に突っ込んで行ったりする。

「何やっているんだ・・・まあ良い。この雪の中にカムイがいる可能性があるしな。全部隊、雪の破壊して突き進め！遊ぶなよ！」

ラクスはそう命令すると、親衛隊は雪を崩して進み始めた。

ラクスも同様に雪を崩して進んでいると、暗夜兵が雪から出てきた。

「ん？何故、暗夜兵が此所にいる？」

ラクスは疑問に思い近づくといきなり攻撃を仕掛けられた。

ラクスは攻撃を避けると、暗夜兵を斬り殺した。

「何だ？何故、暗夜兵が私を攻撃する・・・一様、親衛隊の奴等にも警戒させないとな。おい、親衛隊に全員に雪から出てくる暗夜兵に警戒しつつ保護、敵対的なら殺す様に言え」

「分かった！」

ラクスは伝令を飛ばすと、更に雪を破壊して奥に進んでいく。

雪から出てくる暗夜兵の大半が敵対的な態度で攻撃してきたがラクスは蹂躪していく。

「やっど、城か・・・ん？」

ラクスは城の前に来ると、カムイ達が一人のサクラ王女と思われる少女を人質に取っているダークマジと対峙していた。

ラクスはそのダークマジに見覚えがあり、声を掛けた。

「これはこれは、元王女のカムイ様ではありませんか？それとゾーラ・・・」

「ラクスさん!？」

「ひッ!?ら、ラクス様・・・!？」

「何を怯えているゾーラ?ああ、そうか・・・また威圧を出してしまっていたのか・・・そうだろ？」

ラクスの言葉にゾーラは怯えきって腰を抜かしている。

ラクスはそんなゾーラに困った様に見ていたが、カムイを見る。

「カムイ様いや、カムイ。お前には暗夜王ガロン様から直々の討伐命令が出されている・・・楽に殺してやるから大人しくしている」

ラクスは殺気と威圧をカムイ達にぶつけ、カムイ達はその強大きに怯む。

「くっ！何て威圧感なのですか・・・」

「こ、怖いです・・・」

「・・・」

「さて、戦闘と行きたい所ですが、ゾーラ。何故、お前が此所にいる？何故、卑怯にも人質を取っている？」

「そ、それは・・・」

「こいつは独断で動いたんだよ」

ラクスは振り向くと、そこにはレオンがいた。

「レオン様。ゾーラの件、詳しくお聞かせ貰いませんか？」

「そいつは暗夜軍を独断で動かし、目標でもなかったイズモ公国と公王を襲ったんだ」

「・・・成る程。ここまでゾーラが怯えるのに納得した。親衛隊、ゾーラを捕らえろ！」

ラクスがそう言うと、親衛隊が何処からともなく現れゾーラを捕縛し、その際にサクラが離れカムイが保護する。

その後から、グレートナイト一騎がカムイの元にやって来た。

「ギユンターさん！」

「っ!?カムイ様、御下がりください！奴等は親衛隊です!!」

「親衛隊？」

「我が主ガロン様の直属部隊の一つだ。私の軍ではあるが、こいつらは実力を買われ王を守る役目についてはいるが・・・」

ラクスが親衛隊にチラ見すると、親衛隊は不気味な笑顔をして、ゾーラを押さえている。

「・・・いろいろ問題がある」

「そ、そうなのですか？」

「奴が言っている事は事実です。親衛隊は暗夜王国の最精鋭ですが、

素行が悪く凶暴な者多い・・・時としては、暗夜王にさえ、逆らう者もいる」

「ガロン王にも・・・」

カムイは冷や汗をかいてラクスと親衛隊を見る。

暗夜王国屈指の実力を持つラクスと暗夜王国最精鋭の親衛隊。

この二つの壁にカムイはどうするべきか考える。

「ラクス。そいつは僕が片付けたんだけど離してくれる？」

「態々、レオン様が手を下す事はありません・・・やれ」

ラクスはそう言うのと、押さえていた親衛隊とその他の親衛隊が次々と、ゾーラに刃を降り下ろす。

「ぎやああッ！止めて！やめ、てーぎやああああッ!!」

ゾーラはわざと急所を外され苦痛な表情と声を挙げる。

親衛隊は楽しむ様にゾーラに武器を降り下ろし続ける。

「止めてください！幾らなんでもやり過ぎです!!」

「こいつが選んだ道だ。規律を破る者、謀反を起こす者は等しくこれだ・・・お前も私に敗ればこうなる」

ラクスはそう言い、ゾーラに視線を向けるとゾーラは傷だらけで苦痛に満ちた顔で死んでいた。

ラクスはそれを見て、不気味に笑う。

「何て酷いのですか・・・」

「許せません・・・ラクスさん!」

「許せません？私からするば暗夜王国を裏切り、お前を信じていたマークス様達を裏切ったお前が許せん」

カムイはラクスの言葉に何も言えない。

「今回は我々の失態だ・・・見逃してやる・・・だが、次はお前がゾーラのように死んで貰うからな。それか、お前の父親の様に腹を裂かれて苦しんで死ぬか？」

「ッ!？」

ラクスの挑発的な言葉にカムイは思わず飛び込んでしまった。

カムイは今、今まで経験した事のなかった怒りに沸き立っていた。

ラクスはカムイの攻撃を受け止め弾き返すと、カムイをディアブロ

スで勢いよく殴る。

「ぐ、はあ！」

「・・・ふん」

カムイはそのまま吹き飛ばされ、カムイの仲間の元まで吹き飛ばされた。

「姉様！」

「カムイ様！・・・てめえ！」

「そちらから仕掛けたんだ。今回は見逃すがまた攻撃すれば今度は・・・私と親衛隊が相手だ」

ラクスがそう言うと、カムイの仲間達項垂れた。

下手をすれば数で勝り実力でも勝りかけている親衛隊も敵になる。

それは避けなければならなかった。

「では、次に会う時を楽しみにしているとカムイに伝えておいてくれ」

ラクスはそう言うと、親衛隊を連れて立ち去っていく。

レオンはその姿を見届けた後、レオンも立ち去った。

頼み

ラクスはカムイを一度見逃して王城へ帰還した。

ラクスはガロンへの報告に王座の間までやって来ると、ガロンへ報告する。

「ラクスよ。結果はどうであつた？」

「はい。カムイをイズモ公国国境まで追撃しましたが、一足早くイズモ公国に逃げ込まれてしまい追撃は不可となつてしまいました。申し訳ございません・・・」

「・・・そうか。中立国に逃げ込まれては致し方ない。今回はゆっくり休むが良い」

ガロンの言葉を聞いてからラクスは一礼して退室する。

ラクスが王座の間から出ると、慌ただしそうに暗夜兵が動いている。

「おいお前、何があつた？」

「ラクス様。今、マークス様とカミラ様の出撃準備に取り掛かっている所です」

「出撃？何処にだ？」

「マークス様はミューズ公国へ、カミラ様はカムイ討伐へです」

ラクスはマークスの出撃は置いとくとしてカミラまでもがカムイ討伐に動くと聞いて不安になった。

カミラは暗夜王族の中でカムイを一番溺愛している。

もし、カミラが情に負けてカムイに寝返つたら、と想像だけでも身震いした。

「・・・カミラの件は決まつた事なのか？」

「はい。ガロン様直々のご命令です」

「そうか・・・引き留めて悪かつた仕事に戻つてくれ」

ラクスはそう言うと、考えながら歩く。

もし、カミラの寝返りを許せば他の王族、臣下も続いて離反する可能性があり、ラクスはカミラがカムイと接触する前に何としても仕留めなければと考えた。

「・・・彼奴に頼んで情に動かない様に見てもらおうか」
ラクスはそう呟くと、ある人物の元に向かう。

ラクスは一つの部屋にやって来ると、軽くノックする。

リズムの良い音がしたと同時に、部屋から声が聞こえ開けられた。

「・・・ラクス」

「ベルカ・・・立ち話は好まない。部屋に入って良いか？」

ラクスの言葉にベルカは頷くとラクスはベルカの部屋に入る。

ラクスは兜を脱いでベルカは向き合って座り話す。

「それで用件は？」

「ああ・・・カミラ様がカムイ討伐に動くと聞いてな。お前にカミラ様が情に動かない様に見てほしいんだ」

「それは私の主であるカミラ様を見張れと言う事？」

ベルカは少し殺気を出してラクスを睨むがラクスは首を横に振る。

「じゃあ、どうして？」

「・・・カミラ様がカムイに寝返ったりすれば他の王族達とも戦う事になるだろう・・・そんな事を私はさせたくないんだ。万が一、カミラ様がカムイに着いてしまう切っ掛けが生まれる様なら・・・止めてくれ。私は二度と王族同士の争いを見たくないんだ」

ラクスは真剣な目でベルカに言ってから頭を下げる。

ベルカは驚く。

普段はガロンやマークス達にしか頭は下げない。

それが今、ラクスはベルカに頭を下げたのだ。

「頭を上げて。・・・分かったからその依頼を受けるから」

「・・・すまない」

ラクスはそう言うと、立ち上がる。

「私もすぐに出る・・・カミラ様がカムイに接触する前に決着を着けなければいけないからな。ベルカ、万が一にも私がカムイを取り逃がしてカミラと接触したら・・・分かっているな？」

「分かつてる・・・」

ラクスはベルカという言葉聞いて安堵し、兜を着けて退出する。

一人残されたベルカはうつ向きながらラクスに謝罪した。

「・・・ごめんなさい。私には、カミラ様は止められないわ・・・」

その言葉を聞く者はおらず、空しく響くだけだった。

刺客

ラクスはガロンに一言言ってから親衛隊を率いて、再出撃すると急いでカムイの同行を探る。

早くカムイを探さなければカミラは必ずカムイと接触する事になる。

「（危険は潰さなければ・・・何としても。あの時、カムイを見逃さず討つていれば!）」

ラクスは後悔しつつも足を進めていると、回りに気配を感じとり足を止めた。

「・・・お前達、分かるか?」

「はい・・・手練れが何人か囲んでいますね・・・」

「ちツ・・・急いでいるのに・・・」

ラクスがそう言った瞬間、いきなり人が飛び掛かってきたが、ラクスが斬り殺した。

それと同時に更に武装した人が現れ、襲い掛かってきた。

「全部隊、殲滅せよ」

ラクスの一言で親衛隊は飛び掛かって斬り殺していき、ラクスも襲い掛かってくる人を倒していく。

「こいつら刺客か・・・?何故、私が狙われている?」

「そりゃ、隊長は何処でも恨みを抱えていますからね。恨みを晴らすと刺客を送り込んだんでしょ?」

「そんな物か・・・?」

ラクスは戦いながら刺客を殲滅していく、親衛隊も軽くあしらいなから刺客を殲滅していく。

「数が多い・・・何れだけ雇い入れたんだ?」

「それ以前に貴方はどんな人物を敵に回したのですか?」

「知らん・・・が、刺客を数人残せ。後で、尋問する」

ラクスははそう言うと、刺客を倒していく。

ラクスは刺客との戦闘を終えると、生き残った刺客を尋問し始めた。

刺客は怯えきった表情で、うつ向いている。

「さて、お前達は刺客だな？ いったい誰に雇われた？」

「・・・」

「言わないか・・・ふん！」

ラクスは刺客の一人の首を斬り飛ばした。

首はゴロゴロ、と転がり刺客達は更に怯える。

「・・・これでもまだ答えないか？」

「・・・」

「そうか・・・」

ラクスはもう一度、刺客の首を斬り飛ばし、刺客に見せつけた。

それが何度も続き、遂に最後となった。

「お前が最後か・・・さあ、言え。雇い主は誰だ？」

「・・・や、雇い主は・・・ベルカ、と言う女だ」

「何だ?!」

ラクスは驚愕した。

ベルカがラクスに対して刺客を送り込んだのだと言ったのだ。

ラクスは刺客の袖を掴んで問い詰める。

「何故だ！ いったい何の目的で!!」

「そ、それが・・・殺さなくても良いから足止めしろと」

「・・・ベルカが自分から刺客を送り込みはしない・・・カミラ様か!!!」

ラクスはベルカを通じて刺客を送り込んだのはカミラだと予測した。

ベルカは暗殺業を止めてはおらず、刺客達のコネは沢山あるのは元から知っていた。

だから、カミラがそのコネを使ったと考えても有り得た。

それに、ベルカがラクスに刺客を送る理由も無い為でもある。

「・・・厄介な事になった」

「どうしたので？」

「カミラ様が私がカムイと戦う前に接触するつもりだ」

ラクスはそう言うと、親衛隊はざわつく。

「道を急ぐぞ！一先ずはベルカの事は捨て置け！」

ラクスは馬を走らせると、親衛隊も続いていく。

ラクスは何か嫌な予感がしており、刺客の戯れ言であってほしいと願った。

裏切りく前編く

く港町ディアく

ラクスはディアにやって来ると、慌ただしく怒声と金属音が聞こえてくる。

ラクスはこの二つの音で戦闘が始まっていると悟る。

「敵は誰だ？」

「あ、貴方は！は、はい！現在、裏切り者のカムイとその軍と交戦中！今は我々が押されています！」

「やはりか・・・親衛隊。今度は逃がさなくても良い・・・皆殺しだ！」

ラクスはそう言うと、親衛隊は戦場に散っていく。

ラクスはさつそく、カムイを探しに馬を走らせ探していく。

「・・・見つけた」

ラクスはカムイに向かって更に馬を走らせる。

くカムイsideく

私は親友と名乗る青年が率いている暗夜軍と戦闘になっていました。

最初にエリーゼさんが来た事は驚きましたが、頼もしい仲間が増え、更にエリーゼさんが新たにシャーロットさんとブノワさんを仲間にしてくれました。

おかげで暗夜軍を押し返す事ができていた時、一つの知らせが私に届きました。

知らせを伝えに来た兵士は傷だらけで、サクラさんとエリーゼさんが癒してから聞きました。

「ほ、報告します！ラクス率いる親衛隊が増援としてやって来ました！」

「何ですって!?!」

「カムイ！彼等と戦うのは得策ではないわ・・・一度、引き返すと言う事も考えて」

アクアさんはそう言いますが私はやはり、引き返す訳にはいきません。

「戦いましょう・・・彼等に勝てなければ真の敵に勝つ事すらできません・・・！」

「・・・分かったわ。でも、無理はしないで」

アクアさんがそう言うと同時に、馬を走らせて迫ってくるラクスさんが現れた。

（side終了）

ラクスはカムイの元まで来ると、カムイの回りを見る。

カムイの回りは味方で溢れ、更に戦力が増していた。

それだけではなく、カミラと何故かエリーゼまでいるのだからラクスは驚く。

「・・・カミラ様、エリーゼ様。どう言う事ですか？何故、カムイの側にいるのです？」

「私はカムイの味方に着く事にしたの。ラクス・・・退きなさい。幾ら親衛隊が強くても指揮系統の無い軍では勝ち目は無いわよ？」

カミラがそう言うと、ラクスは親衛隊を見る。

確かに親衛隊は好き勝手に暴れ、命令など知った事ではないと言う様な物だった。

「ふん、確かに指揮系統は無いが・・・彼奴らはやる時はやるぞ？」

「あら、私にため口を吐くのね？」

「貴方はもう裏切り者だ・・・エリーゼ様はどうしますか？」

「わ、私もカムイお姉ちゃんと一緒に戦う！」

カミラとエリーゼの言葉にラクスは恐れていた事態が起こった事を理解した。

ラクスは致し方なくディアブ羅斯を抜く。

「良いだろう・・・お前達、裏切り者は・・・死ぬだけだ」

「させない」

ラクスがカムイ達に斬り掛かろうとした時、前から竜に乗った何者かが斧降り下ろさせた。

ラクスは回避すると、攻撃を仕掛けてきた者の正体を見て、激しく動揺した。

「ベルカ・・・！」

「・・・カミラ様の邪魔はさせない」

「何故だ・・・何故なんだベルカ・・・暗夜を・・・私をも裏切るのか・・・？」

「・・・否定はできない」

ラクスは動揺してディアブ羅斯を震わせる。

「(私は・・・私は・・・!)」

「ラクス・・・お願い退いて」

「・・・拒否する。お前まで、敵になるのなら・・・私は・・・」

ラクスはディアブ羅斯を震える手で構え、ベルカと対峙する。

「ベルカ！」

「来ないでください。私がラクスの相手をします・・・カミラ様達は暗夜軍を」

「でも・・・分かったわ。死なないで頂戴ね」

「はい・・・」

ベルカがそう言うと、カムイ達は暗夜軍に向かっていく。

「待て！」

「逃がさない」

ベルカは再び斧を振るいラク스에攻撃すると、ラクスは防いで、ベルカに反撃する。

「ベルカ・・・!やはりお前は・・・」

「・・・ごめんなさい。私はやはりカミラ様に着いていく・・・」

「・・・そうか。なら、カミライや、お前の仲間全員を皆殺しにしてお前を連れて帰る・・・お前を誰にも渡さない・・・!」

ラクスは黒い霧が全身に包まれる。

ベルカは目を見開いて驚いた。

「狂気・・・」

「さあ、始めようか?ベルカ・・・」

ラクスはそう言うと、ベルカに襲い掛かる。

兜の奥底に悲しみの色に染めた瞳を宿してディアブ羅斯を振るう。

裏切り〜後編〜

ラクスはベルカに斬り掛かり攻撃し、ベルカはラクスの攻撃を避けて急降下で、ラク스에 斧を振るう。

ラクスは防ぎきれないと判断して避け、降りてきたベルカに突進し、ベルカを竜ごとぶつ飛ばす。

空に飛んでいた事も含め、容易く吹き飛ばされたベルカと竜は体勢を整えようとしたが、ラクスの追撃に合う。

「はあー！」

ラクスのディアブロスは壁に勢いよく突き刺さった。

ベルカは間一髪、避けたがラク스에 首を掴まれ壁に押し付けられた。

「ベルカ．．．何故だ？何故．．．裏切った．．．」

「ぐッ！．．．私は、カミラ様に恩が、返しきれないくらいあるわ．．．その恩がある、限り．．．私はカミラ様に着いていく．．．！」

「そうか．．．なら、お前の手足を斬り飛ばしてでも連れて帰ろう．．．」

ラクスはベルカは放り投げると、ディアブロスを片手に迫る。

ベルカは首を絞められて咳き込みながら、後ろに這いずる。

ラクスがゆつくりと近づいてディアブロスを振り上げた瞬間、暗夜軍を倒したのかカムイ達がやって来た。

「ベルカさんー！」

「ちッー！」

ラクスはカムイ達が来た事で攻撃が停止し、その隙を突かれた。

カミラがベルカを掴み上げ、持ち去られた。

ラクスはこの形勢逆転劇にラクスはかなり焦り始めた。

「降伏してくださいラクスさん．．．貴方の親衛隊とは壊滅しました．．．」

「親衛隊が壊滅しただけで降伏すると思ったのか？とんだ愚か者だな。父親の様に甘い奴だ」

カムイは怒りを抑えた。

挑発に乗って攻撃してもラク스에 逆に殺されるのは明らかだ。

「確かに私の父スメラギは甘かったかもしれませんが……ですが、両国の平和の為に行った行動は私は誇りに思います！」

「父親の様に甘い奴だ……良いだろう。なら、本当の戦いと言う物を……その身に刻め！」

ラクスはそう言うのとカムイに攻撃し、カムイはラクスの攻撃を防いで反撃する。

ラクスはカムイの攻撃を防せぐと、反撃に出ようとしたが、光輝く矢が邪魔をした。

「姉さんはやらせないよ」

「白夜王国の王子タクミか……厄介だな……」

ラクスはいつの間にか取り囲まれているのに気がついた。

カムイを筆頭とした王族とその臣下。

どれも手強い相手しかいなかった。

「ラクスさん……私は一度、貴方を恨もうとしていました……ですが、恨んでも全てが帰る訳ではありません。貴方が父を殺したのにも何か理由があるのだと私は感じます」

「ッ!？」

「凶星ですね……」

ラクスの反応を見たカムイは確信めいた言葉を言う。

「何故、そう思う……?」

「はい。私は少しですが、父の死んだ後の記憶を思い出したのです。私が、ガロン王に殺されようとした時、父を殺した筈の貴方が前に立って止めてくれましたよね?」

「……そんな記憶。正しい訳がない。お前はガロンに拾われて運よく生き残っただけだ」

「果たしてそうでしょうか?」

ラクスの言葉にカムイは一つ一つ、紐解く様に過去を思い出してラクスに言う。

「確かに私は気を失う前はガロン王によって拾われ運よく生き残ったかもしれませんが……ですが、それでは貴方が前に出てまで私を守った意味がないんです。……教えてくれませんか?父が殺される前の

事を・・・」

「・・・教えん」

ラクスはカムイ言葉を聞いて教えないと一言を言い放った。

カムイは悲痛な表情で見ってくる。

「教えてどうする？ガロン様に復讐でもするのか？例え理由はどうあれ、教えはしない・・・」

「何故、教えてくれないのですか？」

「・・・敵に語る言葉は無いからだ」

ラクスはそう言うと、馬から降りてカムイの元にやって来る。

回りの者達は警戒するが、カムイはラクスと向き合う。

ラクスはカムイの前に来ると、ディアブロスの柄をカムイに向け差し出す様に渡そうとした。

ラクスが行っているのは騎士の降伏礼でつまり、ラクスは戦う事を諦めたのだ。

「さあ、殺せ・・・私は屈しない。例え、お前だろうと・・・」

「・・・」

カムイは黙ったまま暫く見つめていたが、覚悟を決めた様に手を伸ばす。

捕虜

カムイはラクスに手を伸ばしラクスが覚悟を決めた時、カムイはラクスの肩に手を置いた。

これはラクスも予想外で、混乱した。

「殺しません……。今回は互いに不本意な戦いだっただけです」

「私に慈悲をかけるのか？馬鹿な……。私を殺せばお前達が有利に立てる筈だろ？」

「それでも殺しません。それに貴方が心の底から悪い人とは思えませんから……。でも、解放もしません。貴方を捕虜として捕らえます」

カムイの言葉にラクスは呆れて物も言えなかった。

カムイは自分を捕虜にして生かすつもりだと理解したが、敗者が文句を言える立場ではなかった。

「……。分かった」

ラクスはそう言うと、手にしていたディアブ羅斯をカムイに渡し戦鬪に決着が着いた。

ラクスは現在、カムイ達の捕虜となり牢屋に閉じ込められていた。素顔は流石に晒せないで常に被っていて特に過ごせない事はないが、同じく捕虜になった親衛隊の一同が隣の牢で博打騒ぎになっている。

「はあ……。もう少し緊張感を持って……」

「ええ〜！何ですか〜？牢屋に入ってから暇なんですよ〜」

「はあ……」

ラクスは溜め息をつくとき、出口から足跡が聞こえ出口の方を見る。出口から来たのはベルカで、ラクスと向き合う様に立つ。

「ラクス」

「ベルカか……。何の様だ？」

「ラクス。私達の仲間にならない？」

「断る。幾ら降伏したとはいえ、ガロン様は裏切れん」

ラクスはそう言つてベルカを睨む。

ベルカはラクスの睨みをまるで受けていないと言わんばかりに平然としている。

ベルカはそのまま屈んで説得を続けてくる。

「貴方はガロン様の異変に気づいていないの？最近のガロン様は白夜だけでなく暗夜まで滅ぼせと言われたと噂されているわ」

「噂だろ？そんな戯れ事を信じるとはな・・・」

「確信があるから言ってるの。ラクス・・・昔の事は取り返しがつかないのは知ってる・・・でも、いつまでも罪悪感に囚われて良いの？」

「黙れ！」

ラクスは思わず怒鳴った。

一番触れられたくない事をベルカが触れられた事で怒鳴ってしまったのだ。

ラクスはすぐに正気に戻り、うつ向く。

「・・・帰ってくれ」

「・・・また来る」

説得は今回は不可能だと考えたベルカは立ち去っていく。

ラクスがうつ向いていると、親衛隊が茶化しにきた。

「おお！堅物の隊長が女がいた！」

「ヒューー！ヒューー！」

「うるせえ！黙ってる！」

ラクスはいつまでも茶化す親衛隊に怒鳴りながら一眠りする。

翌日、ラクスは眠りから覚ますと何故かベルカが牢屋の外で毛布を被って眠っていた。

「・・・何してんだ？」

ラクスは疑問に思いつつもやる事も無いので二度寝しようとした時、ベルカが目を覚ました。

「・・・ラクス」

「起きたのか。何でこんな所で寝ている？」

「・・・眠れなくて貴方の側にいたら眠れたの」

「・・・そうか」

ラクスはそう言うと、窓を見る。

鉄格子が填められ僅かな光が入る窓を見て暗夜の事、ガロンの噂を考える。

あの時、ベルカの目は嘘ではなく本当の事を言っている目だった。

「・・・ベルカ。私はどうすれば良いのだろうか・・・ガロン様には恩があり、敵である筈のカムイにも恩ができた・・・はつきり言つてどちらに着けば良いのか分からない・・・」

「・・・貴方の好きな道を選べば良い。今度は、私も着いて行つてあげるから・・・貴方の道を選んで」

「ベルカ・・・」

二人の間に親密な雰囲気の流れる。

ラクスは少し考えると意を決した様にベルカを見る。

「・・・仲間になってやる」

「ラクス・・・」

「だが、私は完全にカムイ達を信用した訳ではない。怪しい動きを見ればすぐに離反するからな？」

「ええ・・・ありがとう、ラクス」

ベルカの笑顔にラクスは兜の下の顔を赤く染めてうつ向くと、隣の牢が騒がしくなる。

「ヒューー！ヒューー！」

「朝から熱いね〜お二人さん！」

「きやー！お似合いですよ！」

「うるせえ！茶化すな！」

ラクスが親衛隊を怒鳴るも更に茶化され始め、ラクスは諦めた。

ベルカはそんなラクスも見て頬を赤く染めたのは、ラクスは気づけなかった。

温泉

新たに仲間になったラクスは今回当番はなく、暇をしていた。

ラクスが地べたで座ってそらを眺めていると、ベルカがやって来た。

「ラクス」

「ん、何だ？」

「貴方、最近お風呂に入っていないでしょ？温泉があるから入ってきて」

「ああ・・・じゃあ、入ってくるよ」

ラクスは風呂に入れとベルカに言われて、温泉に向かっていく。

くタクミsideく

僕は日頃の疲れを取る為に温泉へとやって来た、温泉にゆつくりと浸かっていると、出口から足跡が聞こえてきた。

「誰だろう？」

僕は目を凝らして見てみるも湯気が邪魔で全く見えない。

僕が懸命に見ていると、その人物が入ってきた

「ふう・・・いつぶりの風呂だろうな・・・」

「その声は、ラクスか？」

「ん？まさかタクミ王子ですか？奇遇ですね」

僕はまさかラクスとは思わず固まってしまった。

だって、素顔を知らない人物が今、近くで風呂に入って素顔を晒していると思われるからだ。

「それにしても、良い湯ですね・・・心が癒されます」

「（僕は今、かなり疲労したよ・・・）」

僕はそう思うが、ラクスは気付かないのか気にもとめない。

それに、やはり素顔がどうしても気になるが、やはり見えない。

「そ、そう言えば、ラクスはベルカとどんな関係なんだ？前に戦った

時、知り合いみたいに接してたけど」

「・・・幼馴染みと言うやつですよ・・・彼奴といろいろと縁がある」
「そうなかのか・・・」

僕はラクスは血も涙も無い人物だと思ったけど以外な人間との関係があるんだなと思う事にした。

この会話を最後に静かな空間が広がってしまい、居心地が悪くなった僕は出ようとした時、出口から足跡が聞こえ、正体も分からぬまま入ってきた。

「誰だ？」

「え？ラクスさん!？」

「その声は、カムイ姉さん!？」

「タクミさんもいるのですか!？」

僕は思わず立ち上がると、湯気は晴れてきてそこには水着姿のカムイが現れたのだ、カムイ姉さんも流石にこの事態に赤面して慌てている。

「カムイ姉さん!また間違えて入ってきたの!？」

「全く・・・何しているんだ・・・」

僕は赤面してカムイを咎めるが、ラクスは冷静に呆れている。

カムイ姉さんはそのまま立ち上がって上がっていく。

「す、すみません!すぐに出不すから!」

カムイ姉さんはそのまま走り出して、出口まで行ってしまう。

残された僕は啞然としていた時、気がついた。

湯気が晴れていて今ならラクスの顔を見れると思ったからだ。

「(いったいどんな顔、ええッ!?)」

「ん、どうしました?」

僕が見たのは、湯気で顔の隠れたラクスだった。

何で湯気がラクスの顔を隠しているのか分からないまま固まっていると、ラクスは立ち上がった。

顔が湯気に隠れたまま。

「では、お先に失礼します・・・」

ラクスはそう言うとお風呂場から出ていってしまった。

その後、僕は脱衣場で目が覚めた。
その後、逆上せたらしく運ばれたそうだ。
side終了

懐刀

ラクスは次の戦いの為に物資等の確認をしている時、オボロがやって来た。

「あ、ラクス」

「オボロか・・・て、顔が怖いぞどうした？」

「この顔は暗夜の人を見るとこうなるのよ。一樣、敵対しないなら戻るから」

「そ、そうか・・・それで、ここには何しに？」

ラクスはオボロが何か様があつて来たのだとラクスは考える。

オボロは怖い顔のまま、真剣な目で聞いてくる。

「貴方・・・私の両親を殺した奴等を知らない？両親は呉服屋を営んで商いの為に暗夜に行つてたんだけど」

「・・・何故だ？」

「・・・何となくよ。貴方、何だか色々とか何か知つてそうだし」

オボロは鋭い目でラクスを見てくる。

ラクスはまさか自分の殺した呉服屋の夫婦の娘がオボロとは思わなかつた。

ラクスはオボロを見ていて思い出したあの時、ラクスが見逃した娘であつたのだ。

「・・・知らんな」

「・・・そう。じゃあ、別の誰かに聞くわ」

「その別の誰かとは誰だ？」

「ベルカよ」

ラクスは内心驚いた。

オボロはほぼ真実に辿り着きかけている。

このままオボロに対して知らない振りを通して、ベルカが話さないとも限らない。

オボロが立ち去ろうとした時、ラクスは呼び止めた。

「待て」

「何よ？」

「……はあ、知ってるよ。その暗殺事件は」

「……やっぱり知ってたのね」

オボロは怖い顔しながらラクスを見てくる。

ラクスはもう言い逃れができないと悟ると、オボロに真実を告げる事にした。

「呉服屋の暗殺事件は私も関わっている。そう私は、元暗殺者だ……」
「つまり貴方が殺したの？」

「……ああ。あの事件が私の初仕事だった……最初聞いた時、違和感があったが、何も考えない様にしてお前の両親を殺した……」

「……許せない。例えどんな理由があっても、私の両親を殺したのは事実じゃない……絶対に許せない！」

オボロはそう言つて立ち去つて行く。

ラクスは一息ついて再び、物資等の確認を始めた。

「……許せない、か……それで良い……」

「何がそれで良いの？」

「……ベルカか。お前には関係ない……」

「……何があつたの？」

ベルカの問いにラクスは無言になる。

「言えない事？」

「ああ……言えない事だ」

「オボロが貴方に対して許せないと聞こえた」

「……昔の話だ。忘れてくれ」

ラクスはベルカに打ち明け様とはしなかった。

事件にはラクスの師であり、ベルカの養父も関わっている。

これ以上の支障は出す訳にもいかなないと責めはラクスが全て背負うつもりだった。

「……そう」

ベルカはその一言だけを言うと、立ち去りラクス一人になったが物資等の確認をし続けた。

求める物の道程

くノートルディア公国く

カムイ達とラクスはノートルディア公国へと赴いた。

ラクスはガロンと共に赴いた事があり、カムイ達の目的もこの地にある話から伝わる虹の賢者を探しに来たのだ。

カムイ達とラクスは一軒の家で虹の賢者を最も詳しく知ると言う老人を訪ねる。

「このノートルディアまで、よく来なすつたのう。異邦の旅人殿。して、わしに何の用じゃ?」

「はい……公国内では、あなたが最も虹の賢者について詳しいと聞きました。お願いです。賢者様の居場所を教えてください」

「……ふむ。お前さんが持っている武器は夜刀神じゃな?」

「えッ?は、はい。そうです。よくご存知で」

カムイは困惑しつつも老人にそう言うと、老人はカムイに問いかける。

「……何故、賢者に会いたい?お前さんも力を求めるのか?」

「いえ、私が欲しいのは力ではありません。賢者様に教えて欲しい事があるんです」

「……ほう。知識を求めるか。……なるほどのう。ノートルディア山の頂に七重の塔が建つておる。賢者はその塔の最上階にいるらしい。もつとも、ノートルディア山は高峰じゃ。殆どの者は塔にすら辿り着けんがな。わしの知るのは、これぐらいじゃ」

「ありがとうございます」

老人がそうカムイに告げると、カムイは礼を言う。

「賢者様に会う事ができたら、必ずここにまたぐ挨拶にきます」

「……ああ。くれぐれも死なんようにな」

「……」

ラクスは老人を黙って見つめていた時、老人と目があつた。

目があつた時、微笑みを浮かべておりラクスはその微笑みに隠された意味を悟ると、ラクスは小さく頷いた。

カムイ達とラクスはノートルデイア山の険しい道を登っていた。カムイ達は息を切らしながらも懸命に登っていたが、一人慣れた様に進んでいくラクスは息を切らさず平気で歩いている。

「さっきのおじいさんの言う通りだな。こんなきつい山、初めてだよ……」

「大丈夫ですか？皆さん。疲れた方がいたら言ってくださいね」

「そう言うカムイにも疲れの色が出てるわ……そうだ、私が手を引いてあげましょうか？おんぶでも構わないけれど……」

「え、えーと……それは遠慮しておきます」

カミラの誘いにカムイは引きぎみで遠慮した時、エリーゼが少し体勢を崩した。

サクラがその時にエリーゼを咄嗟に掴んだ事で事なきを得た。

「あ、あのっ、大丈夫ですか、エリーゼさん？」

「ありがとう！ナイスキャッチだよー。危なく麓まで転がり落ちるとこだった！」

「……いえ、いくら何でもそこまで転がらないと思います……」

「(はぁ……不安だ)」

ラクスは危なっかしいエリーゼに不安を抱きながら心配していると、カムイが話しかけてくる。

「ラクスさんは疲れないのですか？」

「ええ。馴れてますから」

「え？」

カムイがラクスの疑問を解く前にラクスは先に進んでいく。

カムイ達も続いて行き、遂に頂上付近まで到達する。

「……！見て。塔が見えるよ」

「あれが七重の塔ですか。と言う事は頂上は近い様ですね」

「ふうん……この塔の中に虹の賢者がいるのか……」

タクミが塔を見ながらそう言う。

ラクスは兜越しで懐かしそうに塔を見つめる。

「(また此所へ来たか・・・あの頃が懐かしい・・・)」

「ラクスさん？」

「ん？どうしました？」

「塔に入りますよと声を掛けたら反応しなかったので体調が悪いのかと・・・」

カムイが心配そうな顔でラクスを見つめてくる。

ラクスはカムイのその顔を見ると、少し微笑む。

「いえ、大丈夫ですよ。それよりも、この七重の塔に入れば次の試練です。気を引き閉めてください」

「はい・・・」

カムイは頷くと、ラクスと共に七重の塔に入る。

次の試練はこの塔へ入った時から始まると覚悟して。

七重の塔の試練〜前編〜

カムイ達とラクスは七重の塔の内部に入ると、何処から途もなく声が聞こえた。

「よく来たな・・・異邦の者達よ。虹の賢者に会いたくば七つの試練を突破し、最上階にある扉を開くがよい・・・」

「やはり塔の中に試練があった様ですね・・・」

「油断してはいけませんよ。この塔は無数の幻影兵が守りを固めています。簡単には進めません」

ラクスの言葉にカムイは疑問に思った。

何故、始まってすらいらない試練の内容を知っているのかとカムイは聞こうとしたが、ラクスはディアブロスを引き抜いて構えた。

「では、行きましょう」

「は、はい・・・」

カムイも夜刀神を引き抜いて構えると同時に戦闘が始まった。

多数の幻影兵がカムイ達の元に向かって進んでくるのが見える。

カムイは別動隊に分けて進む事にして、右側の通路をラクスと共に進む。

「はあー!」

ラクスはディアブロスを振るって幻影兵を蹴散らしていく、前に、横に、後ろに迫る敵を容赦なく斬り伏せる姿はまさしく死神そのものだった。

「いつ見ても凄いわね・・・」

「カミラ姉さん。ラクスさんの戦っている姿を見た事があるのですか？」

「ええ・・・昔、内乱鎮圧の際にまだ経験の浅いマークス兄様と初陣だった私とラクスで出撃したの。その時にラクスの戦いを見たの」

「どんな戦いだったのですか・・・?」

「・・・殆ど虐殺よ。指揮官はマークス兄様だったが、経験が浅いと言う理由でラクスが指揮を取ったの。私達は後方で待機させて何もさせずラクスは前線に出た。遠くからでも見えたわ・・・ラクスの異

常なまでの指揮と戦いで反撃を殆ど許さず戦いを終わらせたのだから」

カミラの言葉にカムイは唾を飲んだ。

ラクスの強さは昔からの物だったのだ。

誰よりも経験深く、誰よりも強く、誰よりも冷酷、それがラクスの本質とカムイは理解した。

「ラクスさん……」

カムイは呟くと、ラクスを見る。

ラクスはディアブロスを片手に幻影兵を倒していき、道を開けた。

「さあ、次の階へ行きましょう」

「はい……」

カムイ達とラクスは階段を昇ると、小さな少女がいた。

「……」

「な、なんですか？子供？ここにいたら危険ですよ。私達が保護しますから、此方に」

「いらないわ、保護なんて。私は子供ではないもの」

カムイの差し出された手を取る事はなく、少女は保護を断った。

「え？でも……」

「お嬢ちゃん、耳が遠いの……？必要無いと知っているでしょう」

「お、お嬢ちゃん!?!どう見ても私の方が年上ですよね!?!」

「面倒事はごめんだわ……私にもう関わらないで。私はただ、誰の目にも触れず一人で生きていきたいだけなの……」

少女の言葉にカムイは疑問を浮かべた表情で、少女に問う。

「一人？貴方、一人何ですか？ご家族は？」

「ええ。そんなもの……とつくの昔にいなくなつたわ。皆、私の事を気味悪がつて離れていった……だから、私は一人よ。今でも、これからも、ずっと……」

「そうですか。じゃあ、私達と一緒に来ませんか？」

ニユクスの言葉を聞いたカムイはニユクスと一緒に行かないかと誘った。

ニユクスは呆れる様にカムイを見る。

「はあ？何を言っているの？人の事情を知らない癖に仲間に招き入れるなんて、貴方正気？」

「はい。確かに貴方の事情は分かりませんが・・・それでも、仲間にはなれるでしょう？誰にだって人には言えない事情や秘密がある物ですよ」

「・・・ふうん。若いのに、知った風な口を聞くじゃない」

カムイに対してニユクスは皮肉を言う様に話すがカムイは諦めない。

「そうですよね・・・私にもありますから。人には言えない、大きな秘密が。でも、それでも仲間はいます。同じようにしてくれる人だつて。だから私も、貴方が何者であろうと一人にしておきたくないんです」

「・・・」

「それに・・・やはり子供を放っておけませんし」

「もう・・・だから私は、子供ではないと・・・でも、そうね・・・悪い話ではないかもしれないわ。貴方なら、私の事を理解してくれそうなのがするもの・・・良いわ。わたし、貴方に付いて行く。この力、好きに使うといいわ」

こうしてカムイの軍にダークマージの少女(?)ニユクスが加わった。

ラクス達は更に幻影兵を打ち倒して、先に進み続ける。

七重の塔の試練〜後編〜

カムイ達とラクスは進み続けていると、一人の男が立っていた。カムイは男に話しかけてみる。

「あの。貴方は……この塔の兵ではありませんよね？」

「はあ？何だ、お前は。俺は見ての通り、れっきとした人間だこの塔の化け物どもと一緒にしないでくれ」

態度の悪い男に、ラクスは少し苛立ちを覚えるが我慢する。

「……そうですね。お見受けした所、貴方は盗賊の様ですが……塔の宝でも狙いに来たのですか？」

「んにや、俺が欲しいのはそんな物じゃない。虹の賢者の力だ。……俺には力が必要なんだ。憎きフウマ公王を倒し、俺の故郷を再建する為の……」

「！フウマ公王……それは確か……この前の……」

カムイは何か知っているのか驚きの声を挙げた。

ラクスはフウマ公国と何かあったのかと、首を傾げ。

「何だ、お前。奴を知っているのか？」

「はい。彼は私達が倒しました。だから今は……もういません」

「!!何だと……!?!?……そうか……では、俺達コウガの民の仇はあんた達が討ってくれたって事だな……俺はアシユラ。フウマ公国に滅ぼされた国の、忍びだった者だ。あんた、名前は？」

「え？わ、私はカムイです」

「ん？カムイ……？もしかして、白夜王国から連れ去られたっていう王女か？」

「私の事を知っているのですか？」

「ははっ。俺の情報網を舐めるなよ、あんたの噂は色んな所から聞いているぜ。何でも、伝説の刀を持ち逃げした上に、暗夜も白夜も敵に回して戦っているそうじゃないか」

カムイが夜刀神を持ち逃げしたと言って、ラクスは少し納得した。

噂は元暗殺者であるラクスの元にも常に入ってくるのだ。

ラクスは少し笑ってしまうが誰も気づかなかったのは別の話。

「ははは……も、持ち逃げとは……でもまあ、だいたい合っている……
のでしょうか。……私はどちらの国の味方をしません。この世界の、
真の敵を倒す為に。だから、ここまで来たのです賢者様に会って、こ
の世界を救う方法を教えて貰う為に」

「へえ……成る程ね。……事情はだいたい分かった。じゃあ、俺も
力を貸してやるよ」

「!・本当ですか?」

男はカムイの仲間になると言い、カムイも本当かと聞いた。

「ああ。あんたはフウマの公王をぶつ潰してくれたみたいだし……付
いて行けば、俺の野望も果たせるかもしれない。あんたも、戦力は多
い方が良いだろ?」

「はい。とても心強いです。ありがとうございます。アシユラさん
!」

「俺に任せろこれからあんたが、俺の主だ。よろしく頼むぜ、……
カムイ様」

こうして、アドベンチャーのアシユラも加わり、戦況が有利に
なった。

ニユクスの強力な魔法とアシユラの正確な弓で遠い敵に大打撃を
与えていく。

「凄いな……カムイ様は中々の拾い物を拾った物だ」

ラクスは二人の実力に関心を抱きながらディアブロスを振るい、幻
影兵を蹴散らして進む。

最上階までの階段をカムイ達と共に駆け上がると、他の仲間とも再
会し、最後の攻勢を掛ける。

「はあ!」

ラクスの剣技は、幻影兵を近づけずに切り裂いていきカムイ達の道
を開く。

カムイ達とラクスが扉の元へ向かうと、そこには番人らしき幻影兵
が札を構えて待ち構えていた。

「よくぞ最上階まで辿り着いた、勇敢な者達よ。試練の終わりは近い。
この私、塔の番人を倒せば、賢者への扉が開かれるであろう」

「この幻影兵が番人・・・」

「油断してはいけませんよ。同じ幻影兵とは言え、番人と名乗るからには・・・強いですから」

ラクスがそう言った瞬間、番人が呪術をラクスに放ってくる。

ラクスは避けると、数人の幻影兵に囲まれた。

「ちッ、まさか手出しさせないつもりか?・・・あのじじい・・・」

「ラクスさん!」

「此方は大丈夫です。それよりも、貴殿方は目の前の番人を倒してください」

ラクスはそう言うと、幻影兵に斬りかかる。

ラクスが幾らを倒しても、幻影兵が次から次へと現れ、ラクスを阻む。

「切りがないな・・・」

ラクスはそう思いつつも、幻影兵を斬り捨てる。

長い時間が戦場を支配する中、ラクスは息を切らす事もなく多くの幻影兵を倒した。

ラクスは更に倒そうとした時、ラクスを取り囲んでいた幻影兵が消えた。

「見事だ・・・そなたらこそ、五番目の勇者に相応しい・・・」

カムイ達に倒された番人はそう言うと言えと消えてしまい、事実上、カムイ達の勝利となった。

虹の賢者

カムイ達とラクスは幻影兵の番人を倒し、扉の前に立った。その扉は何か異様な気配を放ちながら閉じられている。

「すごい！とうとう最上階だね！この扉の向こうに、虹の賢者がいるのかな？」

「いや、まだ油断は禁物だよ。扉の向こうから・・・妙な気を感じる」
はしやぐエリーゼに、タクミは扉の異様な気配を感じたのか警戒を促す。

「み、妙な気ですか？分かりました。慎重に行きましょう」
「そうね。まだ仕掛けがあるかもしれないもの。気を付けて・・・カムイ」

心配する仲間達に見守られながらカムイは扉を開け放った。

眩しい光が最上階を包み込み、光が消えた時にはそこは、虹の賢者をよく知るあの老人の家だった。

「・・・えッ!?ここは・・・」

「ふおっふおっふお・・・よく帰ってきたのう、お前さん達」

「ええッ!?貴方は・・・さっきのおじいさん!?ど、どうしてここに!?だって、ここは、塔の・・・!」

老人が現れると同時に、カムイは驚きの声を挙げた。

「ああ。この場所は・・・塔の最上階と繋がっていたのじゃよ」

老人は愉快そうに笑っていると、呆れる様な声でラクスが老人に話す。

「もう、正体を明かしても良いでしょ・・・虹の賢者殿?」

「ええッ!」

「ふおっふおっふお。やはり気づいておったか」

老人はそう言うと、眩しい光を出して姿を替えた。

その姿はまさしく虹の賢者だった。

「久しぶりじやのう。ラクス」

「お久しぶりです。虹の賢者殿」

「えっと・・・二人は知り合いなのですか?」

まるで親しい友人同士の会話にカムイは戸惑いながらも聞く。

「ええ……昔、ガロン様に無理矢理、登らされた時に……」

「ふおっふおっふお。あの時、力を求める理由を聞いたら無理矢理やらされたからと言っておつてつい、笑ってしもうたのう」

「……勘弁してください」

虹の賢者が笑いながらそう言うと、ラクスは頭を抱える。

「それって……ラクスさんは虹の賢者の力を得ているのですか？」

「そうじゃ……其奴は本当に無欲な奴でのう。力も知恵もいらなから下に帰してくれと言った。じゃが、もうラクスは力を身に付けてしまっておったのである時は本当に困ってしまったわい」

「もう、良いですか……？話を続けてください」

虹の賢者の話が長くなるのを感じ取ったラクスは、呆れるつつも虹の賢者に話の続きを促す。

「おう、そうじゃったな。では、あらためて……試練を乗り越え、よく辿り着いた。ラクスを抜いてお前さん達こそ五番目の勇者じゃ。聞きたい事があるんじゃない？さあ、何でも言うてみい」

「……はい。貴方に聞きたいのは竜の居場所です。私はどうしても竜に会いたいです。私は竜に会って……この戦争終わらせる方法を聞きたい。白夜と暗夜の無益な戦争を終わらせる為なら……何でもします！」

カムイは思った通りに虹の賢者に言うと、虹の賢者は静かに言葉を返す。

「ほう……戦争を終わらせる、か……成る程。では、竜の居場所を教えてやろう。その前に……その夜刀神をかしてごらん」

「あ……はい。どうぞ」

虹の賢者にカムイは夜刀神を渡すと、虹の賢者は何かを唱え始めた。

「……
——私は神刀を鍛えし者、禁忌を犯せし者、

伍色を紡ぎし者……我が名に応えよ、炎の紋章よ——」

虹の賢者がそう唱え終わると、夜刀神が激しい光を出し、部屋を包む。

夜刀神は光と共に姿を変え、新たな姿となった。

「これで・・・お前さんの刀は力を得たはずじゃ」

「ありがとうございます・・・！」

「もしかして・・・これがフウガ様が言っていた炎の紋章ですか？」

「・・・いや、違う。炎の紋章を完成させるには・・・五つの神器が・・・揃わればならん。・・・その時こそ、炎の紋章は・・・伝説の・・・ファイアーエムブレムとなる・・・」

「ファイアーエムブレム・・・」

虹の賢者が言う、ファイアーエムブレム。

神器と言う事は、タクミを除いてリョウマ、マークス、レオンがいなければならぬ。

ラクスはこの三人がカムイの元に来るのかと、ラクスは気になったが今は考えない事にした。

「ああ・・・それを得なければ・・・お前さん達は、強大な敵には勝てんだろう・・・だが、案ずるな。自分の信じる道を・・・まっすぐに進めば・・・神器は・・・揃うはず・・・っ、うっ・・・」

「賢者様ッ!?!」

虹の賢者はいきなり倒れ、カムイは虹の賢者を抱き抱える。

ラクスも慌てて虹の賢者に駆け寄る。

「サクラさん、祓串はありますか!?!」

「は、はいっ!」

「エリーゼさんも、杖で回復をお願いします!」

「・・・頑張るね!」

「死ぬなじじい!お前はこんな事で死ぬような奴じゃないだろ!?!」

カムイはサクラ、エリーゼに回復を指示し、ラクスは必死に虹の賢者に叫ぶ。

「・・・ふおっふおっふお・・・口が悪いのが・・・直ったと・・・思ったのじゃがのう・・・」

「しっかりしろ!口が悪いのは元からだど、知っているだろ!」

ラクスは叫び、サクラとエリーゼが回復させようと来た時、虹の賢者はやんわりと断った。

「やめておけ．．．わしはもく．．．寿命じゃよ．．．」

「え．．．？」

「それに．．．人の魔法は．．．わしには効かん．．．」

「人の魔法．．．？」

カムイが人と言う単語に、疑問に思った瞬間、カムイは何か気づいたかの様に声を挙げた。

「!!．．．貴方は、もしかして．．．」

「．．．ああ。このわしが、お前さんの探していた竜じゃ．．．」

「遙か昔．．．十二の竜はみな野心にあふれ．．．世界の覇権を巡って争った．．．わしは夜刀神や神器を創り．．．竜の戦いに人間達も巻き込んでしまった。その罪滅ぼしができるまでは．．．死にきれんかったのじゃ．．．」

「そんな．．．」

カムイは悲痛な表徐で虹の賢者を見つめる。

「お前さんの夜刀神には．．．わしの．．．最後の力を込めておいた．．．カムイよ。その．．．夜刀神で．．．自分の道を．．．切り開く．．．のじゃ．．．それと、ラクス．．．お前は．．．もう、一人ではない．．．仲間を信じ．．．共に．．．歩むのじゃ．．．」

「．．．賢者様．．．」

「．．．じい．．．」

虹の賢者が息を確認したカムイとラクスは、悲痛な表情で立ち上がった。

微笑みを浮かべながら眠る虹の賢者を見てラクスは兜の下で涙を浮かべる。

「．．．ありがとうございます、賢者様。いえ、古の時代から生きて．．．偉大なる竜よ。貴方の想いは、貴方の力は．．．決して無駄にはしません。．．．さあ皆さん、無限溪谷へ戻りましょう。白夜と暗夜の空が入れ替わる日は、もうすぐです」

カムイはそう言うと、仲間と共に部屋から出ていく。

ラクスは暫く、部屋に止まって虹の賢者を見つめていたが、すぐに仲間を追う様に出ていくのだった。

意外な一面

「オボロside」

私は少し不機嫌だった。

タクミ様に軍議をするからラクスを連れてきてくれと言われ、ラクスを探している。

でも、ラクスは私の両親を殺した仇、私はラクスが関わってくると常に不機嫌になる様になった。

「見つけた。ラク」

私は声を掛けようとした時、ラクスは真剣に何かを書いている。

私はその紙が手紙だと分かると一つの考えに辿り着いた。

”密告”

ラクスは元々、ガロン王の臣下。

密告をしてもおかしくない。

私はこの事を伝えるかどうか迷っていると、ラクスは私の気配を感じたのか振り向く。

「side終了」

ラクスは後ろから気配を感じ、ペンの腕を止めて振り向く。

そこにはオボロがおり、ラクスは何で黙って立っていたのか疑問に思った。

「・・・何をしている。用があるなら言ってくれ」

「え、ええ・・・タクミ様が軍議を始めるから来てくれ、て言ってたわよ・・・」

「そうか・・・」

ラクスはそう言うと、椅子から立ち上がってオボロの横を通ろうとする。

「待って！」

「何だ？他に用があるのか？」

「・・・あれは何？まさか密告してないわよね？」

「密告？そんな事、できる訳ないだろ。私が書いていたのは家族宛の手紙だ」

ラクスの手紙の宛先はオボロの予想の斜め上に行った。

「家族？貴方、家族がいるの？」

「ああ・・・言っても血の繋がりには無い家族だ」

「血の繋がりが無い？」

オボロの疑問の声に、ラクスは軽く頷く。

「私は孤児院で育つてな。親が院長、兄妹が孤児院の子供達・・・私はそこには後から入ったが皆、優しくかった。だから、少しでも生活を安定させたくて軍に入って・・・」

ラクスは話の途中で、黙ってしまふ。

オボロは突然、ラクスが黙った事に疑問に思い始める。

「どうしたのよ？」

「・・・もう行って良いか？軍議に遅れる」

「え、ええ・・・」

オボロは戸惑いながらも道を開けると、ラクスは歩いて行く。

オボロは意外だと感じていた。

ラクスに血の繋がり無し家族があり、そして、ラクスはその家族を誰よりと大事にし、愛しているのだ。

その証拠が、この手紙なんだろうとオボロは考える。

「・・・ラクスがさつき言い掛けた最後の言葉は何かしら？」

ラクスが軍に入って、の先が分からずじまいになったオボロ、考える。

ラクスは噂では冷酷非道の騎士と呼ばれ、勝利の為ならどんな手段も使うと言う。

しかし、あの時のラクスはどう考えてもその人物象とは掛け離れた家族の事を優しく語る者の雰囲気だ。

「もしも・・・」

もしも、オボロがラクスを仇として殺したら・・・ラクスを慕っているかもしれない孤児院の子供は、自分を恨むのかとオボロは考える。

「・・・分からない事が多いわね」

オボロはそれだけを呟くと、立ち去る。

ラクスの一日

今日、ラクスは昼からカムイへの報告書を書いており、報告書の作成に時間が掛かって夕方になった頃。

後ろの扉が誰かに開かれるのを感じ取って振り向くと、そこにはベルカがいた。

「どうした？」

「貴方に相談があるの」

ベルカはそう言うと、一つの紙を手渡した。

ラクスは紙を受け取って見てみると、そこにはラクス自身の暗殺依頼だった。

「・・・それで。私を殺すか迷っているのか？」

「・・・」

ベルカは黙ったまま頷き、ラクスは溜め息をついた。

ラクスは徐に立ち上がると、蠟燭の火で依頼書を燃やしてして暖炉に捨てた。

「ッ!？」

「これで、この依頼は無しだ。今回は見なかった事にするから帰るんだ」

ラクスはそう言うと、報告書を再び書き始めた。

「何故、依頼書を燃やしたの？」

「ああでもないしないと、お前は迷ったまんまだったら？私はまだカムイ様を見極めきれしていない・・・見極まるまでは私は死ねん」

「・・・まだ信じてなかったのね」

「あんな事を言われてすぐに信じられないさ。だが、確信は行っているがな・・・」

ラクスの言葉にベルカは首を傾げる。

「お前は知らなくて良いぞ。その内に決着は着けておくさ」

「・・・何を考えているか分からないけど、早まった行動は慎みなさい」

ベルカの言葉にラクスはまるで聞こえなかったかの様に黙っている。

ラクスは黙々と報告書を書き続け、静かな沈黙が保たれている。

「……黙っているつもり？」

「……」

「そう……なら、もう何も言わないから」

ベルカはそう言うと、何を思ったのか近くの椅子に座った。

「(何やっているんだ……?)」

ラクスは報告書を書きながらベルカの行動を考える。

たまにベルカと一緒にいたりするが、これは初めてのパターンなのだ。

ラクスはこの初めて見るパターンにどう対処するかを考える。

「……何故、そこに座る？」

「……」

「……黙る事はないだろ」

ラクスは溜め息をつきながら報告書を纏めると、立ち上がった。

「おい、私はそろそろ……ん？」

「すう……すう……」

「こいつ……寝てやがるな……」

ラクスはベルカがまさか居眠りするとは思わず、呆然とした。

ラクスはベットから毛布を持ってくると、ベルカにそっとかけてから退出した。

「これで、報告書も出し終わったな……」

ラクスはカムイに報告書を提出した時は、既に暗くなっており、ラクスは暇そうに歩いていた。

ラクスは暫く歩いてみると、暗闇に何処から途もなくドンチャン騒ぎが聞こえてくる。

「この音……まさか！」

ラクスは走ってドンチャン騒ぎの場所に向かうと、親衛隊が酒盛りや博打をしていた。

その中に何故か、ヒナタも参加している。

「お前達、また博打をしているのか！」

「げえ！隊長!？」

「ちよ、これには訳が！」

「問答無用！全員、正座！」

ラクスは親衛隊を全員正座させた。

かつて、ラクスが白夜の事が書かれた本を読んで正座での説教を知って、親衛隊を説教に使えると言う事で実践している。

「まあ、待てよラクス」

「ヒナタ殿」

「こいつらは俺と親睦を深めようと開いてくれた博打なんだ。別に金なんて賭けてねえよ」

「しかし・・・いくら親睦を深める為とはいえ・・・」

「頼む！俺に免じてこいつらを許してやってくれ！」

ヒナタが両手を合わせながらラクスに頼み込む。

ラクスは少し考えると、返答する。

「・・・分かりました。しかし、親衛隊には外周して貰いますから軽く十週」

「が、外周十週！・・・説教よりましか」

「分かったら行け！」

ラクスに促される様に親衛隊は走り出して行き、ラクスは溜め息をついた。

「はあ、見苦しいところをお見せしました。では・・・」

「まあ待てよ。ラクス、俺と手合わせしてくれ！」

ヒナタの突然の言葉にラクスは反応できずにいる。

何故、手合わせなのか全く分からないし、疲れていると見えないのかと思った。

「・・・また今度、時間ができたらしましょう。まだ仕事があるので」

「そうか・・・残念だな。じゃあ、また今度行くぜ！」

「はい・・・」

ラクスは疲れが増したと言わんばかりに、ゆっくりと歩いて去って

行く。

無限溪谷の戦い〜前編〜

ラクスは当番で店番をしていた時、カムイがやって来た。

ラクスはカムイが何か買いに来たと思いい声を掛けた。

「いらつしやいませ。何かお買いになりますか?」

「いえ、リリースさんからラクスさん宛の手紙を預かったので渡しに来ました」

「私宛に?」

ラクスは手紙を受け取ると、手紙を開けて読んだ。

だが、その内容は驚愕と動揺をラクスに与えた。

貴方の親族達はこの私、マクベスが人質としました。

助けたくば、貴方一人で無限溪谷に来なさい。

なお、一人で来なかつたら親族全員殺しますね。

ラクスは手を震わせながら怒りを露にし、手紙を持って外へ走つた。

「ラクスさん!?!」

今のラクスにはカムイの声は届かず、馬に乗って無限溪谷へと駆けて行った。

自分に残された家族呼べる者達を守る為に。

ラクスは一人で無限溪谷へやって来ると、立ち止まって叫んだ。

「マクベス!!!」

ラクスは怒りを露にして叫ぶと、マクベスと無数の暗夜兵が現れた。

ラクスは暗夜兵全員、直属軍だと推測し、本気で殺しに来ていると、感じ取った。

「お久し振りですね。まさか、貴方まで裏切るとは思いませんでしたよ」

「俺の家族・・・孤児院の皆は何処だ！」

「ああ・・・それらな此所ですよ」

マクベスが指差した所には武器を突き付けた孤児院の皆だった。院長と泣き叫ぶ子供の姿を確認すると、ラクスは少し安堵しマクベスに叫んだ。

「皆を解放しろ！お前の目的は私だろ！」

「そうはいきません・・・貴方の實力は私も知っているんですよ。人質がいなければ貴方は刺し違えてでも私を殺すでしょ？」

「くツ・・・卑怯者め・・・」

「誉め言葉として受け止めておきましょう」

マクベスはそう言うのと、手を挙げると一斉に暗夜兵が弓を構える。

「最後に言い残す事は？」

「・・・無いな」

ラクスは諦める様に言い残す事は無いと言った。

「(すまない皆・・・助ける事が、できなかった・・・)」

「いいえ、ある筈ですよ」

その声が聞こえると、後ろにはカムイ達が現れた。

ラクスは何故、この場所が分かったのか分からなかった。

「何故、此所が・・・」

「お前が慌てた様子で馬に乗って駆けて時に、これを落としたんだ。これを読んで事態に気付いたんだよ」

タクミがそう言うのと、手紙を取り出した。

それはマクベスからの手紙で、ラクスは懐を探るが手紙は無かった。

「ちツ、邪魔が入りましたが状況は変わりませんよ。此方には人質が」

「人質がどうした？」

マクベスが言い掛けた時、マクベスの後ろにはサイゾウが立っていた。

「き、貴様！いつの間にな？」

「見えていなかったのか？人質は既に解放されているぞ」

サイゾウの言葉を聞いてマクベスが見てみると、人質である孤児院

の皆はカムイの元にいる。

「ぐ……しかし！此方は大軍です！すぐに終わらせてあげますよ!!!」

「……マクベス。貴様だけは生かして帰さん。私の大切な家族を手に掛けようとしたんだ……絶対に殺してやるぞ!!!」

「望む所です。死ぬのは……貴方だ!!!」

無限溪谷の戦い〜中編〜

形勢が不利な中で、カムイ達とラクスの戦いは始まった。

マクベス率いる暗夜軍は、数に物を言わせて押し寄せてくる。

ラクスは多数の暗夜軍に果敢に挑んでいく。

「はあー！」

ラクスの振るう剣技は今まで以上に冴え渡り、暗夜軍を恐怖で凍てつかせる。

ラクスは完全に頭に血が昇ってしまう程、怒りに満ちており並みの暗夜兵では止められなかった。

「と、止めるのです！ 奴を私に近づけさせてはなりません！」

マクベスは必死にラクスを止めようとするが、ラクスは向かってくる暗夜兵を物ともしない。

「マクベス!!!」

「ひい！無理だ、ラクス様を敵に回すなんて！」

「逃げろ！最初から勝てない戦いだっただんだ！」

ラクス一人の猛攻で暗夜軍は士気が大きく下がり逃げ出し始めた。

その光景を見ているカムイ達は唾然とした。

「すごい・・・ラクスさん一人で暗夜軍を」

「隊長は本気で怒ると鬼神になっちゃいますからね・・・」

「そうなんですか？」

「はい。昔、隊長を怒らせた敵がいましたね。無関係な人も含めて燃やし尽くしてしまっただんです。最後には、とても後悔していました・・・」

親衛隊のメイドはそう言うと、懐かしそうに思い出す。

「何故、怒ったのですか？」

「それはですね・・・昔、親衛隊には珍しい温厚な子がいて隊長が心を許せる数少ない一人ですが、不意打ちで殺されたんです。その仇討ちに・・・」

「仇討ち・・・」

「まあ、隊長は辛かったと思うのですが、隊長はああ見えて喜怒哀楽が

激しい人ですから、その激しさが動いて……燃やしつくしたんです。それを切っ掛けに感情を表に出さなくなりました」

カムイはラクスの怒りの激しさの原因を聞いて、ラクスを案じる。悪い方向へ行かない事を。

一方その頃、ラクスは暗夜軍を蹴散らしてマクベスの元に辿り着いた。

「マクベス……！」

「遂に来ましたか……！」

「貴様は許さん……この剣の錆にしてやる……！」

「私は貴方を政敵と見ていましたが、同時に暗夜に最も忠誠心があると信じていました……しかし！貴方は暗夜を裏切った！その報いを受けなさい!!!」

ラクスとマクベスの戦いは始まった。

暗夜の二柱の戦いは、とても激しい物でラクスの剣は回りを叩き潰し、マクベスの魔法は回りを破壊する。

二人が暗夜王に取り立てられた最も確証のある証拠だった。

「マクベス!!!」

「ラクス!!!」

二人の力は互角、戦いは回りを徐々に巻き込みつつあった。

敵味方関係なく、二人の攻撃に巻き込まれたりする者が続出する。

「いけない！二人を止めないと！」

「でも、どうすれば！あのお二人、とても強い力を出しています！」

「こんな時、兄さん達がいてくれれば……」

カムイ達は止められない戦いに、どうするば良いのか分からずにいると、誰かがやって来る気配を感じ、カムイは見てみると、そこには白夜軍とリヨウマとヒノカの姿があった。

「待たせたなカムイ」

「リヨウマ兄さん！ヒノカ姉さん！」

「遅くなってすまなかった。だが、この状況は何だ？あそこだけ激しい戦闘が行われているぞ」

リヨウマはそう言うと、ラクスとマクベスが戦う場所を見る。

「はい……。実はラクスさんとマクベスが本気を出して戦っているのです……」

「成る程……本気を出しすぎて回りに被害を出しているのか。あの二人が回りが見えていないなら、力強くで止めるしかない」

「でも、明らかに人の域を越えてるよ。まともなぶつかったら返り討ちに合う」

「だが、他に方法はない」

リヨウマは複雑な表情をしながらそう言うと、カムイは決断した。

「……止めましょう。このまま捨て置けば被害が拡大してしまいます。何としても止めないといけません」

「……姉さんがそう言うなら、僕も行くよ」

「はい……!」

タクミとサクラもカムイに続く事を決め、他の仲間も同様に続く事を決めた。

「ありがとうございます。では、止めに行きましょう」

無限溪谷の戦い〜後編〜

カムイ達が向かっている頃、ラクスとマクベスの激しい一騎討ちが続いていた。

剣と魔法がぶつかり合い、二人の技量は本当に腕が経った。

「くッ！手強いな・・・」

「ふん、私だつて戦う事はあるのでよ？腕が立たなければ軍師になんてなれませんよ」

「だが、疲れている様に見えるぞ？」

「そちらもでしょ？」

ラクスは馬を走らせてマクベスを斬ろうとした、マクベスは魔法で迎撃しようと、呪文をとなえている。

「これで終わりだ!!!」

「死になさい!!!」

二人は同時に、攻撃しようとした時、二人の間に爆発が起こった。

二人は距離を置くと、何時来たのか、馬に乗ったレオンが魔導書を持って身構えている。

「もう、その辺にしときなよ。これ以上、被害を出さないでくれる？」

ラクスは回りを見ると、地形が見るも無残な光景になり、暗夜兵が倒れていたりする。

ラクスはやり過ぎたと考えるが、マクベスへの敵対心は消えない。

「・・・どうするマクベス？」

「ふむ・・・不本意ですが一度、戦いを止めますか？」

「・・・そうだな」

ラクスとマクベスは、お互いに武器を下ろした。

そこへカムイ達が現れ、現状が収まっているのを確認した。

「ラクスさん！」

「・・・すみません。少し、頭に血が昇りすぎました」

「いいえ・・・」

「カムイ姉さん」

ラクスの心配をしていたカムイに、レオンは声を掛けた。

カムイはレオンに気付く。

「レオンさん！」

「久し振りだね。僕達もカムイ姉さんに味方するよ」

「僕達？他に誰か来ているのですか？」

「そうだ」

カムイは振り向くと、そこにはマークスが立っていた。

「マークス兄さん！来てくれたのですね！」

「ああ・・・私は迷ったが、父上はやはり何か可笑しいと思っていた・・・だから、カムイ。お前の話を信じる事にしたのだ」

「マークス兄さん・・・」

これで両国の王族が揃い、カムイの元に多くの仲間が終結した。

後は、残された問題のみだった。

「・・・さて、マクベス。覚悟は良いか？」

「ラクスさん・・・!？」

「すみません・・・マクベスは生かす訳にはいきません・・・奴は腐つても王の臣下ですから・・・」

「なら、早めに決着を着けましょう・・・!」

ラクスとマクベスは再び、武器を構えて戦闘体勢に入った。

カムイはそんな二人を止めようと間に入った。

「止めてください二人共！」

「退いてくださいカムイ様・・・」

「我々の戦いに間を挟むとは・・・余程、死にたい様ですね？」

「二人共！これ以上戦っても何も得られません！・・・だから、戦いを止めてください！」

カムイは悲痛な思いで叫ぶ、だが、ラクスとマクベスはカムイを無視したのだ。

ラクスとマクベスは互いに戦い始めた。

「ラクスさん！マクベス！」

「カムイ。これ以上の説得は無駄よ。力強くで止めるしかないわ・・・」
「くっ・・・！分かりました。力強くで、止めに入ります」

カムイはラクスの振るうディアブロスを受け止めて、防いだ。

「・・・何のつもりですか？」

「戦いを・・・止めます・・・」

「・・・なら、手加減はしません」

ラクスはディアブロスをカムイに振るう。

カムイは防戦一方で、戦っている内に、マクベスが、魔法を撃ってきた。

「死になさい！」

「ちっ！」

ラクスはカムイを吹き飛ばすと、魔法をディアブロスで防ぎ斬り掛かるも、今度はマークスとリヨウマが割ってきた。

「ラクス、もう止める！これ以上は本当に無意味だ！」

「邪魔です。マークス様・・・何故、マクベスを庇うのですか？」

「庇ってはいない。だが、お前達の争いを止めるべきだとカムイが言った以上は止める！」

「俺もだ」

マークスとリヨウマがそう言っただけで構えると、ラクスも構えた。

「なら、貴殿方二人を先に倒させて貰います・・・」

ラクスはディアブロスを振るい、マークスとリヨウマに戦いを挑んだ。

回りが見たら、ラクスは二人を相手にしているにも関わらず互角に戦っている様に見えるが、実際は押されていた。

「くっ！」

「はあ！」

「せやあ！」

「うっ！しまった！」

二人の同時に攻撃に、ラクスのディアブロスは飛ばされた。

その隙にリヨウマがラクスを取り押さえた。

「終わりだ・・・」

「・・・その様だな」

ラクスはふと、マクベスを見ると、同じ様に取り押さえられており、戦いは終わった事を理解した。

更なる驚異

戦いが終わり、マクベスは縛られた状態で処遇を待っていた。

ラクスは今、武器を取り上げられており、何も持っていない状態でマクベスの処遇を待っている。

「それで？マクベスはどうするおつもりで？」

「はい、マクベスは・・・処断しません」

カムイの言葉にラクスは驚き、反論の声を挙げようとした時、カムイは続ける。

「確かにマクベスは酷い行いをしたかもしれませんが・・・ですが、国を思う気持ちがあると言う事は否定できません。だから、今回はマクベスを処断しません」

「しかし、奴を生かしてしまった・・・！」

「それでもです・・・」

カムイの言葉にラクスは、暫くカムイを見つめていたが諦めた様に溜め息をついてディアブロスを収めた。

「・・・今回だけですよ、しかし、マクベスは拘束させて貰います。奴は捨て置いたら何をするか分かりませんから」

「ありがとうございます」

「ふん、情に任せて私を生かすのですか？一思いに殺せば良いものを・・・」

「殺しません。私は何を言われようと貴方を殺しはしません」

「・・・好きにすればいい」

マクベスは飽きれと諦めの言葉とも言える事を言うと、戦いはカムイ達の勝利で決した・・・筈だった。

「ふっふっふ・・・やるではないか、カムイ」

「ッ!?その声は！」

カムイ達は声のする方へ向くと、そこにはガロンと透明な兵士の軍勢が現れた。

「ガロン！」

「久しぶりだなカムイ、マークス達よ。そして・・・ラクスよ」

「・・・お久しぶりです。ガロン様」

「ふ、律儀な所は健在か」

ガロンは不適に笑うとマークスが前に出た。

「父上。貴方はもう・・・元の父上ではないのですか？」

「そうだ。貴様達がわしの正体に感ずき始めたのは予想を外したわ・・・」

「それでは・・・貴方は何者かに操られたと言うのですか？」

ラクスの問いにガロンは不適に笑っているだけで何も言わない。

ラクスは悲痛な表情を表し、兜を脱ぎ捨てた。

ラクスの晒された素顔にベルカ以外の仲間全員が驚く。

「・・・何故、兜を脱ぎ捨てた？」

「・・・あの兜は貴方への永遠の忠誠を表す為の物。貴方は操られた今、我が主として相応しくもない」

「それで忠誠を捨てたのか？」

「いえ、私が今忠誠を誓えるのは・・・此所にいるカムイ様ただ一人です」

「私、ですか・・・？」

ラクスの言葉にカムイは戸惑いつつも聞くと、ラクスは頷いた。

「貴方は私が迷わずこの言葉を言える程、勇気とまっすぐに選んだ道を進む姿を見せ、私の家族を救ってくれた・・・この恩は貴方への忠誠として捧げさせていただきます。・・・受け取ってくださいですか？」

「・・・はい。貴方の忠誠・・・受け取らせて貰います」

カムイの言葉にラクスは微笑むと、ガロンと対峙した。

依然としてガロンの回りに透明な兵士がこった返しているが、倒せない数ではない。

「皆さん、行きますよー！」

カムイの号令と同時に、無限溪谷最後の戦いが始まった。

暗夜王ガロン

戦闘が始まり、カムイの仲間達とガロン率いる透明な兵士達との戦いが始まった。

数はガロン側が優勢だが、戦闘面ではカムイ達が圧倒的に優勢を保って敵の陣形を崩していく。

ラクスは今までにないくらいに獅子奮迅の如く蹴散らして仲間を道を切り開いていく。

「ガロン、何処だ！」

「ククク・・・わしは此所だ」

ラクスの元にガロンがベルヴェルクを片手に現れ、二人を囲む様に透明な兵士が取り囲む。

「ちツ・・・囲まれたか・・・！」

「ふん、別に多数でなぶり殺したりはせん・・・どうだ、わしと一対一の戦いをせんか？」

「・・・何のつもりだ？」

ラクスはガロンの発言に意味が分からないと言わんばかりに聞くと、ガロンは笑いながら答える。

「貴様と同格に戦える者は限られておる。その限られた者の中で、わしが入っておるだけだ」

「成る程な・・・なら、納得だ」

ラクスはそう言うと、静にガロンに剣先を向け、ガロンもベルヴェルクをラクスに向けた。

くカムイsideく

私はガロン王が率いる透明な兵士達と戦っている時、ラクスさんがいない事に気づきました。

私は辺りを見渡すと、取り囲む様に立つ透明な兵士達を見つけ近づいて行きました。

「一体何が・・・ッ!?ラクスさん！」

私が見たのはラクスさんとガロン王の一騎討ち。

両者は互角の戦いを見せるなか、私はらさんの元へ向かおうとしま

したが兵士が邪魔をして進めません。

「くっ……どうすれば……」

「カムイ！」

「マークス兄さん！」

遠くから馬を走らせたマークス兄さんと合流しました。

マークス兄さんも状況を察したのか、驚いています。

「これは……！」

「マークス兄さん。ラクスさんを助けないと！」

「しかし、取り囲む兵士をどうにかしなければ……」

マークス兄さんは苦虫を噛んだように顔を歪め、私はラクスさんが心配で見守るしかできません。

私が見守っていると、空に羽ばたく音が聞こえました。

〈side終了〉

ラクスはガロンに対して猛攻を見せるが、ガロンは簡単にラクスの攻撃を弾き返し、戦いは長引いていく。

「ふん、腕が鈍ったのかラクス？」

「……まさか。腕は鈍ってはいませんよ……ただ、異形に身を売り偽りの力を手に入れた貴方に手こずっているだけです」

「ほお、言ってくれるな……」

二人は武器を構え、緊迫した状況の中で睨み合いを始める。

次の一撃で決める、二人の中にはそう考えがっていた。

「(やはり強い……隙を見せないか……)」

ラクスはガロンの隙の無い構えにどう攻めるか考えていると、ラクスは空に気配を感じ取って見てみると、一騎の竜が飛んできた。

竜の背中にはベルカがいる。

「ベルカ!？」

「ラクス。助けにきたわ」

ベルカの言葉にラクスは考える様にうつ向くが、すぐに頭を上げてベルカの方を見る。

「……助けに来てくれたのは嬉しい……だが、今は一人で戦わせてくれないか？」

「何故？」

「ガロンとは・・・私自身で決着を着けたい。頼む・・・」

「・・・分かったわ。でも、危なくなったら貴方を連れて撤退するから」

「ああ・・・」

「話は終わったか？」

二人の話が終わるのを律儀に待っていたガロンの言葉にラクスは頷くと、二人は構え直した。

暫く時間が流れたが此所でガロンが動き、尋常ではない速さでベルヴェルクを振り下ろす。

しかし、ラクスは咄嗟に避け、ディアブロスガロンの胸に突き立てた。

「終わりだ・・・ガロン！」

その一言で、ガロンは崩れ落ち、ラクスは勝利者として堂々と立っていた。

絆

ラクスがガロンを倒した瞬間、透明な兵士達は消え去り気配の1つもなく静な空間が流れる。

カムイ達は決着が着いたと判断して、仲間達の安否を確かめに行き、ラクス一人残された。

ラクスはそんな状況を気にせず倒れているガロンの元へ近づいた。

「……まだ息はあるのだから？」

「……ふん、気付いておったか……」

「僅かに息をする行動が見えたのでな……ガロン。私の質問に答えろ。何故、操られてまで戦争を起こした」

「……抗う事が出来なかった。取り返しがつかなくなる事は分かっていた筈だったのだが、頭に響くのだ……。白夜を……暗夜すら滅ぼせと」

「ッ!？」

ガロンの言葉にラクスは驚きを隠せずにいると、ガロンは笑う。

そこには冷酷な一面ではなく、優しさの笑顔だった。

「ラクス……わしは何処で道を踏み外したのだろうか……」

「……ガロン、様」

「また敬称で呼んでくれるのか……？お前はわしにとって勿体無い臣下……ラクス」

「はい……」

「暗夜を……カムイ達を頼むぞ……」

ガロンの最後とも取れる言葉に、ラクスは深く頷いて答えた。

「了解しました……」

「ふッ……去らばだ……我が臣下ラクスよ……出切れば最後に……」

ガロンは最後の言葉を話す事も出来ず、泡となって消え去っていく。

ラクスはその光景をただ黙ってガロンの最後を見届ける。

そして、一人となったラクスは涙を流してカムイ達の元へ向かう。

「……必ず。カムイ様達を……」

”守って見せますから・・・”

ラクスの胸にその一言を響かせると、まるでガロンが答えたかの様に静な風が流れた。

戦後処理を終えて、カムイ達は溪谷の橋の上に集まりカムイの言う、真の敵のいる場所へ向かう事になった。

「・・・この吊り橋から、下に飛び降りるんです」

「此所から飛び降りる・・・？僕達に自殺しろって？」

「カムイ様。流石にこれを信じて貰うのは難しいのでは？」

確かに無限溪谷の真下は暗闇が広がる無の世界。

落ちればどうなるのかは誰にでも分かる事で、ラクスも流石に戸惑いが生まれる。

「そうですね・・・でも、それは分かっていた事です。皆、今まで本当にすみませんでした。これからずっと黙っていた真実をお話しします」

「それを聞いてもらえればら皆も飛び降りる覚悟が出来ると思いますが」

「待って、カムイ！何を言ってるの!?!今それを話したりしたら、貴方は消えてしまうのよ!?!」

アクアの言葉に、ラクスは耳を疑ってしまった。

真実を話してどうして消えてしまう事態になるのか頭が追い付かないでいる。

ラクスが混乱していると、マークスが問い掛ける。

「カムイ、どういう事だ？」

「・・・此所で本当の事を話せば、私はこの世から消えてなくなってしまうでしょうだから、吊り橋を飛び降りた後の事は・・・リヨウマ兄さん、マークス兄さんそしてラクスさん。よろしくお願いします」

カムイの言葉に黙って聞くリヨウマとマークス。

暫く静な時間が続いていたが、一人の声がそれを破る。

「・・・ふざけないでください。そんなのは断らせてもらいます」

「俺もそんな話はお断りだ」

「全くだ。誰がそんな頼みを聞くか」

「ど、どうしてですか？」

三人の言葉にカムイは戸惑いを見せながら聞くと、クリムゾンが答えた。

「馬鹿だね。あんたのお兄さん二人とラクスが言いたい事が分からないのかい？ちゃんと命令しろって言っているんだよ。吊り橋からとべって」

「え・・・？」

クリムゾンの言葉にカムイはまだ意味が分からないと言う表情を見せると、リヨウマが先に言う。

「いいか？俺は一度信じると決めたら、何があろうと最後まで信じ抜く。それが侍の誇りだ」

「ああ。疑うつもりなら、最初から此所には来ない」

「暫く貴方と旅をして・・・信じられる人物だと分かっている。なのに今更信じられないなんて事は致しません」

ラクスの言葉が終わわり、リヨウマは更に続けて言う。

「ましてや、お前は俺達の妹でラクスの主君だ。カムイ、お前を最後まで信じる」

「リヨウマ兄さん、マークス兄さん、ラクスさん・・・ありがとうございます」

カムイは三人の言葉に涙を流しながら感謝の言葉を言う。

「・・・さて、行きましようか。溪谷の底にある真実へ」

番外編：Bad END 敗北と狂愛

数カ月前、ディアの港町でラクス率いる親衛隊はカムイ討伐を達成した。

カムイは殺さず捕らえ何人かは取り逃がしたが、暗夜を裏切った者達もその場で粛清した事でラクスは暗夜王ガロンの信頼が大きく上がると同時に、人々から更に恐れられる存在になった。

白夜はタクミとサクラ等の有力な白夜の者達を失った事もあり、戦線は崩壊しつつあり白夜の崩壊は時間の問題となった。

そんな中、ラクスは一人薄暗く寒い地下牢へと足を運び一つの牢の前にたつた。

「・・・無様だな。あれだけ仲間を集めておいて私に敗北して全て失うとはな・・・カムイ？」

「くッ・・・！」

牢の中には虫の息のカムイが、手や足を拘束された状態で監禁されていた。

「お前が暗夜に着けばこんな結末にはならなかったのにな・・・」

「それでも、私は・・・」

「そんな話は聞き飽きた。真の敵？そんな者がいるなら何処にいる？いるなら証拠を見せて貰いたいものだがな」

「・・・ッー！」

カムイは項垂れると、ラクスは溜め息をついてカムイを冷たく見つめる。

ラクスの目にはもう、情と言う無くしていた。

「明日、お前は処刑される。何か言い残す事は？」

「・・・ありません」

「・・・そうか」

カムイはそう静かに言うと、ラクスは牢を去っていく。

ラクスは自分の部屋の扉を開けた瞬間、いきなり殴りつけられるがラクスは容易く避けて殴ってきた相手を押さえる。

「またか・・・ベルカ」

「・・・」

ラクスはベルカを投げ飛ばすと、ベルカは投げ飛ばされたがすぐに体勢を整えて身構える。

今のベルカは首や手足に枷が掛けられており、まるで奴隷の様な姿だった。

ベルカはラクスに対して憎悪を宿した瞳で睨むと、ラクスは溜め息をつく。

「はあ・・・懲りずに逃げ出そうとするとはな。喉を潰され声を失って間もないのに今度は何処を失うつもりだ？」

ラクスは戦いの後、ベルカを自分の物にする為に生きて捕らえガロンに自分の褒美として貰ったのだ。

だが、ベルカは何度も逃げ出すかラクスを殺そうとしてきたのでラクスは、ベルカを拘束して喉を潰したのだ。

「お前は私の物だ。絶対に逃がしたりしない」

ラクスはそう言ってベルカに近づいた瞬間、ベルカが隠し持っていたのかナイフをラクスに突き立てようとした。

ラクスはナイフを握る手を掴んでナイフを奪うと、ベルカの顔を掴んだ無理矢理キスをする。

「ッ!？」

ベルカは激しく抵抗するが、拘束され弱り果てた体では到底抗えず成すがままにされる。

「・・・もう、何処へも行くな。お前を失ったら今度こそ私は折れてしまいそうだ」

ラクスの優しいげな言葉の裏に冷酷な冷たさを感じたベルカは抵抗を止めてしまった。

喉を潰された痛みを思いだし、恐怖が襲ったのだ。

「・・・愛してるよ・・・ベルカ」

捻曲がった狂愛の中でも、ラクスに唯一残された一つの愛にラクス

は溺れていく。

深淵の罨

仲間達がカムイを信じて無限渓谷の底に飛び降りて行く中、残ったのはカムイとクリムゾンとラクスそしてギユンターの四名となった。

「では、私達も参りましょう」

カムイはそう言つて橋から身を乗り出して橋から飛び降りる。

続いてクリムゾンも降りて行くと、ラクスも続いて降りた。

鎧を着ていても何とも言い難い難い浮遊感を覚えたラクスだが、それでも安定して降りている時、ラクスに突如激しい悪感が襲つた。

「何だ……この感覚は……」

ラクスは嫌な予感を感じて振り向くと、後ろに強大な力が突然現れ、魔法か何かがカムイを貫こうとしている。

「カムイー！」

ラクスは咄嗟にディアブロスでカムイへの攻撃を防ごうと振るうと防げたが、ディアブ羅斯はへし折れ、ラクスは勢いよく落とされて行く。

「ぐわああああああ！」

ラクスはそう叫びながら落ちて行くと、カムイの叫びが空しく聞えてくる。

ラクスは目が覚めるとそこは、何とも不思議な世界が広がっていた。

ラクスは立ち上がって回りを見渡すも、人は誰一人としておらず、静かだった。

「……カムイ様達は何処へ？」

ラクスがそう呟いた瞬間、後ろから殺気を感じてラクスは避けるとそこには透明な兵士がおり、更に後ろには多数の透明な兵士がいた。

「ちっ……こんな時に……」

今のラクスは武器を持っておらず、逃げるしか手が無かった。

ラクスは敵の攻撃を避けつつ走って行く。

敵は執拗に追い掛けてくるが、ラクスは上手く逃げて行き、離脱する事に成功した。

「何とか撒いたか・・・？」

ラクスは疲れ果てその場で座り込む。

体を休めつつもラクスは脳内で情報を整理してこの世界での対応策を考える。

「(今手持ちの武器は無い・・・逃げられない事はないが何時まで持つか・・・それにカムイ様達を探さねばならない・・・先ずは武器を手に入れるしかないか)」

ラクスはそう結論を出して立ち上がった時、草むらが揺れる音を聞き、草むらの方へ身構える。

「ぶはあ！やつと出れたぜ・・・」

「ガンズ？」

「げ、ラクス殿！」

現れたのはガンズで、ラクスは驚きのあまり声も出なかった。

何故ガンズが此所にはいるのか分からずにいたが、ラクスは取り合えずガンズに問う。

「何故、貴様がこの地にいる？答えろ」

「そ、それはあんたがこんな所に落としたんだろが！」

「なに？・・・見に覚えがないな」

「しらばくれんなよ！あんたがマクベス軍師と戦っている時に巻き込まれて落ちたんだろが！」

ガンズの言葉にラクスは少し思い出した。

確かに戦っていた時、暗夜兵が吹き飛んでいたのは知っていた。

その中にガンズがいたのは予想外だったと、ラクスは思った。

「・・・まあ、そんな過去は捨て置き。今はカムイ様達と合流する」

「け！何であの王女と合流するだよ」

「今の状況を知っているのはカムイ様だ。今は探しだして合流するしかない・・・ガンズ。貴様もそうするしかないんだろ？」

ガンズは凶星突かれたと口ごもる。

「さて、満場一致だ。ガンズ・・・さっそくだが剣か槍はあるか？」

「何でまた？」

「・・・ディアブロスが折れた」

ラクスは悲しそうに自分の愛剣を見て答えると、ガンズは荷物を入れる袋を探って一本の銀の剣を出した。

「敵から取ったんだがよ。これで良いか？」

「盗みは感心しないが・・・まあ、この状況じゃ仕方がない」

ラクスはそう言って剣の状態を確かめながら言うと、剣を鞘にしまった。

「行くぞ、ガンズ」

ラクスはそう言って戦場の突破を目的とした戦闘が開始される。

突破戦

ラクスとガンズは道を進んでいると、無数の透明な兵士がそれぞれ異なる得物を持って待ち構えていた。

ラクスはそれを見て、銀の剣を抜くと身構えた。

「来やがったか」

「おいおい、この数はやべえだろ？」

「・・・どうにかするしかないさ」

ラクスはそう言うと、兵士に向かって走って行きガンズも斧を持って走った。

目指すは突破する事であり、二人は兵士を斬りながら突き進む。

「うおおー！」

ラクスは次々と向かってくる兵士を切り裂いていると、ガンズが後ろから襲われそうになっているのを見つけ、ガンズを守る為に兵士を剣で突いた。

「もう少し気を付けろ」

「分かってる・・・ぜ！」

ガンズはそう言うと、ラクスの後ろに手斧を投げ兵士に当てた。

「これで借は返したぜ？」

「ふん、余計な事を」

ラクスとガンズは後ろを預けながら回りを見るも、どこもかしこも気配だらけで絶対絶命の状態だった。

「やべえな取り囲まれてやがる・・・！」

「もはや此処までか・・・最後までいい騎士らしく死ぬのも悪くないか・・・」

「お前は馬鹿か！こんな所で死ぬような事を考えるなよ！待っている奴がいるんだろ？もう少し生き残る方法を考えやがれ！」

「ガンズ、お前・・・まともな事が言えたのか？」

「今それを言うのか!？」

二人はコントをしていた所を兵士が襲い掛かって来ると、ラクスとガンズは敵を倒した。

兵士は数で押し寄せて二人を殺そうとするも、中々二人を殺す事が出来ずにいる。

「私は・・・死ぬ訳にはいかない。私は生きて必ず」

ラクスは言いかけた瞬間、兵士の一体が漉きを突いてラクスを襲った。

今回はガンズに守られはされず、ラクスは死を覚悟をした時、兵士が突如空から飛んできた何かに吹き飛ばされた。

「あれは・・・ベルカか！」

「おい、それって味方だよな！」

「ああ、味方だ」

ラクスはそう言った時、向こうからカムイ達が駆け付けて来たのだ。

「ラクスさん！」

「カムイ様。無事だったのですか」

「はい！・・・何故、ガンズも此所に？」

「話は後です。今は・・・」

ラクスはそう言うと、兵士に剣を向けて身構えた。

「奴等を殲滅しましょう」

言い終わったラクスの元に兵士は一斉に武器を構えて襲い掛かり、カムイ達は応戦を開始し激戦になった。

激しい戦いになるなか、ラクスは剣を振るっていると、後ろから兵士に襲われそうになった。

だが、兵士は飛来した何かに切り裂かれて絶命する。

「借は返したよラクス！」

「助かったぞ。クリムゾン」

ラクスはクリムゾンが無事だった事に安堵すると、戦いを続行した。

次々と向かってくる兵士を倒していくと、遂に決着が着いた。

「終わったか・・・」

「ラクスさん！」

ラクスが一息ついていると、カムイが慌てた様子で駆け付けてき

た。

「無事だったのですねラクスさん！」

「はい。私はまだ死ぬわけにはいきませんから」

「生きていたのは何よりだが、こいつはどうするつもりだ？」

ラクスは振り向くと、そこにはジョーカーがガンズに暗器を向けていた。

「こいつは暗夜の兵士、しかもガロン側のだ。何でこんな奴がいるのか分からねえが捨て置く訳にはいかねえぞ？」

「そいつは偶然落ちただけだ。今すぐ何処かにやるなり殺すなりしたのですが、残念な事にそいつに借を作ってしまった。そいつが剣を渡さなかったら死んでました」

ラクスはそう言うと、カムイは迷う様に考え始めた。

暫くして時間が経つと、カムイは決意をしてみた。

「ガンズを牢へ入れます。あの時は酷い人とおもいましたが、ギョーターさんは幸い死んでおらず、何よりラクスさんの命を救う切っ掛けを作ったなら尚更牢へ入れておきます」

「何で牢なんだ？」

「皆を納得させる為です」

カムイがそう言うと、カムイの仲間達はガンズを静かに睨んでいる。

ガンズは納得したのか大人しくお縄になった。

悪夢と懺悔

燃え盛る街、逃げ惑う民・・・その光景を黙って見つめるラクスがいた。

ラクスは兜を被つて表情こそ見えないが、悲痛な表情で残酷な光景を見ている。

「うおおおおおッー！」

ラクスが見ていたその時、剣を片手に突っ込んでくる中年の男が走ってきた。

ラクスは迷わず斬り捨て、中年の男は大量の血を流して倒れた。

「父ちゃんー！」

生き絶えた中年の男の元に少年が走って来た。

親子であったであろう生き絶えた男と泣き叫ぶ少年をラクスは黙って見ていた。

「うう・・・何だよ・・・何で父ちゃんを！街の皆を殺すんだよ!!!」

「・・・反乱を企てた報いだ。それに先に斬り掛かってきたのはその男だ・・・正当防衛だよ」

「うるさい！殺してやる・・・絶対に殺してやる!!」

少年が剣を取ろうとした時、ラクスは少年を斬った。

少年も生き絶えて倒れ、残されたのはラクス一人となった。

「・・・これが、ガロン様の正義なのか・・・こんな、事・・・」

ラクスはただ、嘆き悲しむ事しかできず、悲痛な想いで剣を罪無き民に向ける。

「ラ・・・クス殿・・・ラクス殿」

「ッ!?・・・アサマか?」

ラクスはアサマの声で目を覚ました。

ラクスは日頃の疲れで、壁に持たれながら居眠りをして悪夢を見たのだ。

「はあ・・・夢か・・・」

「どうしたのです？ 貴方が魘されるとは余程、酷い夢なのでしょうね」

「ああ・・・昔の、夢を見てな・・・本当に嫌な夢だ・・・」

ラクスはうつ向きながらそう言うと、アサマは笑っている。

「良ければ話してみてくださいませんか？ 少しは楽になれると思いますよ」

「・・・そうだな。少しなら話そう・・・」

ラクスはアサマに過去の罪を懺悔する様に話す。

「・・・成る程。貴方もやはり人の子なのですね」

「ああ・・・罪を私は背負い続けるが、やはり辛い時がある。たまには人に話してみるのも・・・悪くないな・・・」

ラクスはアサマに話した事で、気持ちが少し楽になった。

「ありがとう・・・お陰でまだ罪に押し潰される事はなさそうだ」

「・・・あのですね。貴方、その罪を背負い過ぎているのではないですか？」

「ん？」

「貴方は今までの罪悪感を背負ってガロン王の右腕をしてきたとなると、かなり負担を持っていると言う事になります。だから、たまには誰かを頼ってみてはいかがですか？」

アサマの人に頼ると言う言葉に、ラクスは少し考えてから結論をアサマに言う。

「・・・分かった。たまに人に頼ってみるとしよう。では・・・」

ラクスはそう言うと、去っていく。

「・・・全く、あの様子だと人を頼る気は無さそうですね」

アサマは困った様に頭をかくのだった。

番外編：Badend その罪と共に

処刑当日、広場にはカムイの処刑を一目見ようと集まる群衆でごった返しており今か今かと待ち続けている。

ラクスはその光景を見ながら何とも言えない気持ちを抱く。

「戦いには勝利した・・・だが、何だこの思いは。いったい・・・」
ラクスは処刑台の上で考えていた時、群衆の中に孤児院の皆も見に来ており、ラクスはあまり彼らを見ないようにした。

長く感じた時間が経って処刑の時間となった。

ラクスは振り向くと、カムイが兵士二人に連れられて手枷と足枷で拘束されながら処刑台に近づいてくる。

向こうにはガロンとマクベスもおおり、処刑が始まる事を自覚した。

カムイが処刑台に登ってくると、ラクスはカムイに皮肉を言う。

「もう終わりだな。お前の正義は証明されず、朽ち果てる。無様だな」

「・・・そうですね。確かに無様ですが、私は自分の選んだ道を・・・最後まで信じます」

カムイはそう言うと、兵士に押さえ込まれて断頭台に無理矢理乗せられる。

そして、兵士が斧を持ってカムイの首に狙いを付け始めた。

「さて・・・兄妹の見送りもないが、言い残す事は本当はないのかな？」

「・・・ありません」

カムイはそう言うと、ラクスは頷いて兵士に合図した。

兵士は大きく斧を振り上げると、カムイの首に目掛けて斧を振り下ろそうとした瞬間、兵士の首に矢が刺さり、ラクスの近くで魔法なのか大きな木が生えた。

「何だ!?!」

「処刑はさせないよ」

ラクスは声のする方向を見ると、そこにはブリュンヒルデを持ったレオンがラクスと対峙していた。

民衆の動揺が広がる中で、ラクスは問う。

「・・・どう言う事ですかレオン様？まさか、裏切るつもりか？」

「・・・そうだよ。カムイ姉さんは殺させはしない。絶対にだ」

レオンがそう言った時、ラクスの後ろから切りつけられラクスはディアブスを咄嗟に抜いて防いだ。

「貴方は・・・マークス様!？」

「・・・ラクス。貴様の好きにはさせせん」

マークスはそう言うと、ジークフリートを向けて対峙した。

ラクスは予想外の裏切りに動揺を隠せないでいると、今度は処刑台の回りがうるさくなった。

ラクスは戸惑っていると、マークス達はいつの間にかカムイを抱えて逃がっている。

「逃がすな、追え！そこのお前、この騒ぎの原因は何だ!」

「そ、それが白夜軍が警備兵に攻撃を!」

「白夜軍だ!?! 奴等は国の防衛に兵力を割かれていた筈だ・・・まさか、国の守りを捨ててまで」

ラクスは白夜軍の予想だにできなかった襲撃にさらに混乱に陥ったが、すぐに正気を取り戻して命令した。

「迎え撃って時間を稼げ! 伝令を出して親衛隊や正規兵を呼び出し、数で圧倒しろ!」

ラクスはそう言うと、何処かへ立ち去ろうとする。

「ラクス様は?」

「・・・他に用がある」

ラクスはそう言って処刑台から降りると、まっすぐに孤児院の皆の元にやって来た。

「あ、貴方様は・・・!」

孤児院の皆は怯えるような顔でラクスを見てみると、ラクスは言った。

「・・・立ち去れ」

ラクスはそれだけを言うと、城の方へ向かっていく。

ラクスはマークス達の反乱をあまり考えたくなかった。

反乱を起こすのはあり得ないとされたマークスを筆頭に暗夜軍や白夜軍が一齐に攻撃を仕掛けてくるとは夢にも思わかった自分自身をラクスは責めながら兵士に対処の命令を下しながらガロンの元へ向かう。

ラクスがガロンの元へ来ると、ガロンはマクベスとガンズを側において玉座に座っていた。

「ガロン様」

「何だラクス。何かあったのか？」

「ええ……」

ラクスは歩いてガロンに近づいていくと突然、ディアブ羅斯を抜いてガロンに斬りかかった。

「ガロン様!!」

咄嗟にガンズが盾となって斬られ、マクベスが魔法でラクスを攻撃した。

しかし、ラクスは魔法を避けてマクベスを斬る。

「ぐう……裏切り者め……!」

「そうだな」

マクベスの最後の言葉を聞いたラクスはマクベスに止めをさし、ガロンにディアブ羅斯を向けた。

「次は貴方だ」

「……何故、裏切った？あれほど従っていたお前が？」

「……ディアでの勝利の時、そこで腹を決めたのです。カムイは負けた。なら、もはやこうするしか貴方を止める方法はもうない……カムイ達を欺き、ベルカを傷つけてでも、貴方を殺すしかなかった!」

ラクスはそう言うと、ディアブ羅斯をガロンに向けて振るうも、ガロンはベルヴェルクで防ぐ。

激しい音を立てて押し合うガロンとラクスの間には凄まじい威圧が出ている。

「ほお、狂ったと思っておったが……全て芝居か？」

「白夜にはこう言うことわざがある。壁に耳あり障子に目あり……い

つ何処で見られていたり、聞かれていたりするか分からないと言う事だ。流石にマークス様達の反乱や白夜の襲撃には驚かされたが」

「ふん、相変わらず警戒心が強いくせに抜けておるな」

ガロンがそう言い終わると、二人は離れて斬り合う。

激しい斬り合いになるなか、戦いの最中に蠟燭を倒してしまい絨毯に燃えると同時に次々と燃えて遂に王座の間は火の海になった。

「偶然とはいえ……もはや互いに逃げられなくなりましたなガロン？」

「ククク、そうだな。戦っても死、戦わなくとも死ならば……戦うしかないだろうな」

「……死か。こんな死にかたも悪くはないが、確かに先に戦いに……専念しよう！」

ラクスはそう言つてガロンに斬りかかると、ガロンは攻撃を防いでラクスに反撃すると、ラクスは防いで反撃する。

その行動を繰り返していたが、先にラクスがガロンの腹を斬った。

「ぐうー！」

「止めだー！」

ラクスはそう言うと、ガロンの腹を突き刺し止めを指すと、ガロンは倒れた。

ガロンが死に絶えたのを確認すると、ラクスは周りを見渡すと、回りは火の海でどうしようもなかった。

「……ふん、結局は誰にも目とられずに死ぬのか。悪くない。私は沢山の罪なき者を殺したんだ……当然の報いだな」

ラクスは兜の下にある瞳を静かに閉じていた時、王座の間の扉が急に開かれた。

ラクスは見てみると、そこにはカムイ達がいたのだ。

「カムイ……」

「ラクス……さん？」

カムイは力なく立っているラクスの下を見ると、そこには生き絶えたガロンがいた。

「ラクスさん……貴方は何をしたのですか!？」

「……見て分からないのですか？私は自分の主君をこの手で殺したの

です……」

「何故……？」

「もう、我慢の限界だった！国は傾き、罪もない民が死に、マークス様達まで離反した……そんな状況下なのにガロンの罪を問わない訳がないだろ……！」

ラクスは興奮しきった声でそう叫ぶ姿にもはや常に冷静沈着なラクスの姿は無かった。

「ガロンに罪があるなら私にも罪はある……だから」

ラクスはディアブロスの刃の先端を掴み、首もとに当てた。

「ラクスさん!!!」

カムイは何をするつもりなのか理解し、止めようとしたが火に阻まれ進めず、そして……。

「罪を償おう」

紅い流血が吹き出し、ラクスは燃え盛る王座の間で倒れ伏せた。

くカムイsideく

助けられなかった。

ラクスさんは目の前で自身の首を切って自害してしまいました。

私は貴方に死んでほしくなかった、貴方の大切な家族から託された願いすら伝えられなかった。

「お願いです．．．ラクスを．．．ラクスを助けてください．．．！同名の人物だと思っていたが、懐刀とは思わなかった．．．。あやつは多くの罪を背負ったかもしれない．．．だが、あやつは本当は優しい若者じゃ！子供達の為にせいかつひを代わりに養ってくれた。戦地から孤児になってしまった子供を連れてきたりして世話もしていた。あやつの優しさは冷酷と言う名の仮面に隠してあるだけで、本心からではない。頼む．．．助けてくださいやってくれ．．．！」

孤児院の院長さんの想いを聞いて私は頷きました。

ラクスさんを助ける．．．でも、現実ではラクスさんを助ける事すら出来ずに見殺しにしてしまいました。

院長さんだけではありません。

ラクスさんに軟禁され声を奪われたベルカさんもラクスさんの助命を求められました。

ベルカさんは無言で私にラクスさんの日記を手渡されて読んでみると、ラクスさんの文章がありました。

、今日より日記を付ける。明日、遂に騎士として戦場に立つ。絶対に平和な時代になるようにしなければ、

、私は疑問が出来た。ガロン様は敵や反乱を企てた民を皆殺しにする様に命令され続けた。私は助命を求めたが聞き入れてすら下さらなかった。何故なんだ、

、単純な答えだった。ガロン様はもはや正気を無くしていたのだ。次は白夜を狙うつもりのようなだが、果たして上手くいくのだろうか、
、カムイ様が離反された。何故、何故なのだ。貴方は絆のある暗夜の御兄妹でも、血の繋がりのある白夜の兄妹にすら味方しなかった。何故なんだ、

、ディアでカムイを捕らえた。任務は成功し、こちらも削られはしているが暗夜と白夜の臣下と王族二人を負傷させたのはよかった。だが、負傷させただけでは面倒な事に繋がるだろう。私は暴君ガロンを殺す警戒に支障をきたすしな。死んだ事にしておこう、

、今日、ベルカの声を奪ってしまった。奴等からの警戒を無くす為とは言え、とんでもない過ちを犯してしまった。私は何処まで落ちれば良いのだろうか、何処まで。だが、此処で心を折るわけにはいかない。ガロンを討ち、後の世代へ託す為に、

、遂に決行の日だ。この処刑当日を利用し、ガロンを討つ。カムイ様は集まると思われる民衆に親衛隊数人を紛れ込ませて助ける。他の親衛隊には集まれと言う言葉で一斉に離反する様に命令しておけば、後は奴との決着だけだ。この日記は閉じて鍵を掛けておこう。どうせ読まれる事もなく、埋もれるんだからな、

日記を読み終わると、私はラクスさんを誤解していたのだと気づきました。

私は必死に探しました。

ガロンの自室、広間等と回って最後に王座の間を開けると、火の海が広がり立たずむラクスさん。

ラクスさんは興奮しているのか、嘆く様に叫んでいました。

そして、ラクスさんは首を切りました。

助けられなかったラクスさんを見て、私は……何て無力なものでしょうか。

side終了

数年後

カムイは一度は崩壊した仲間を再び纏めあげ、更にリヨウマやマークス達を仲間に入れ、本当の敵であるハイドラを打ち倒した。

ベルカは戦える状態ではなく、離脱していた。

理由は怪我の事もあったが、ベルカは……身籠っていたのだ。

ベルカは子を産み、不器用ながらも仲間の助けを借りながら育てた。

そして今、ベルカと娘のレーラは墓地に来ていた。

「ねえ、お母さん。誰のお墓に行くの？」

レーラはベルカに問うと、ベルカは紙に文字を書いてレーラに見せる。

、貴方のお父さんのお墓よ、

ベルカは見せ終えると、再び手を繋いで歩くと、墓に辿り着いた。墓にはこう刻まれている。

， 暗夜の罪深き懐刀。その罪と隠した優しさと共に墓に眠る，
「お父さんのお墓？」

レーラはそう問うと、ベルカは笑顔で頷いて花を供えた。

ベルカは墓を見ながら悲しそうに見つめていると、墓から少し離れた場所にラクスの面影がベルカに写った。

， ラクス！

ベルカは立ち上がって辺りを見渡すと、ラクスはいなかった。

あるのは静かな墓地と幼いレーラのみ、他に何も無かった。

「どうしたの？」

レーラの問いにベルカは笑顔で頭を撫でて、レーラの手を引きながら立ち去っていく。

密かな悩み

戦いが日常化するある日の事、ラクスは心が締め付けられる様な苦しみに悩んでいた。

ラクスはベルカを見たり、考えたりするとこの症状に悩まされとても我慢できる物ではない為に誰かに相談する事を決めた。

「それで私ですか？」

「そうだ・・・」

ラクスは現在、アサマの元にやって来て相談をしていた。

アサマは呆れた様に溜め息をついてラクスに言う。

「あのですね・・・相談しろとは言いましたが、それは心に悩みが溜まった時にお願ひしたいのですが？」

「悩みがそれで溜まったのだから来たのだ。それで？アサマはこの悩みの解決方が分かるか？」

「分からないと言う訳ではありませんが・・・本当に分からないのですか？」

「そうだと言っているだろ。・・・ベルカを見たり考えたりすると締め付けられる様な感覚に襲われるのだ。・・・まさか何かの病か何かか？」

ラクスの言葉に更に呆れ果てたアサマはどう説明すれば良いのかわからなくなった。

アサマにはラクスの原因をすぐに突き止められたが、自身にも経験が無い為、対処に困り果てた。

「はあ・・・難しいですね・・・何と説明すれば鈍感な貴方でも納得するか・・・」

「鈍感な余計だが・・・何故、説明できない？」

「それはですね・・・何と言うか・・・ある意味、病気ですね」

「病気!?つまり病なのか!!」

「いや、そこまで深刻にしなくても・・・まあ、心の些細な病ですよ。そう深刻にしないでください」

アサマの言葉にラクスは納得なさげな表情をしつつも落ち着く。

アサマはその様子を見ると、本題に出す。

「貴方が今、悩んでいる病氣の名前は・・・恋ですね」

「恋・・・？私がか？」

「ええ・・・まず、ベルカさんを見たり考えたりすると恋が締め付けられる様な苦しみに襲われる。間違いなくお相手はベルカさんです」

「確かにベルカは女性だ。だが、今まで幼馴染みとして過ごしていたが全くそんな感情は・・・」

「それは単に幼馴染みとして見ていたからでしょうね。ですが、今は無自覚でベルカさんを異姓として見てますよ」

アサマの答えにラクスは項垂れた様に腕を組んで考え始めてしまった。

ラクスは自分のしてきた悪行を思いだし、首を横に振って振り払うようすると、アサマに顔を向けた。

「・・・何故、恋などをしたのだろうか。私には無理な話なのにだ・・・」

「何故その様に考えるのですか？」

「・・・私はこれまで数多くの者を殺してきた。盗賊や海賊ならまだしも、罪無き民、白夜王スメラギ等と殺さなくても良かった筈の者まで入っている。そんな私に幸せになる権利は無い筈だ

「悪く考え過ぎですよ。それでも貴方は国をより良くしようとしたのですよ？」

「・・・確かにしてきたが、それでも殺しの方が圧倒的に多い。元暗殺者でもある私には政敵となる正義のある筈の貴族や反乱の首謀者までもこの手殺しているのだからな。アサマ。相談に乗って貰って感謝する」

ラクスはそう言いアサマから離れて行くと、アサマは困った様な顔でラクスを見送る。

「参りましたね・・・あそこまで悪く考えるなんて・・・もし、ラクスさんがベルカさんを狙わなかったら」

”私が狙っても良いですよね？”

取り合い

マイキャツスルの一室で、ラクスは何処にもやりようのない怒りに身を震わせていた。

何故、ラクスが怒りに身を震わせているのかと言うと、アサマがベルカと親しげに話している姿を見てしまったのだ。

それ以来、ラクスはやりようのない怒りに身を震わせて苛立っている。

「・・・くそ、考えても仕方がない」

ラクスは部屋を出て気分転換を図ろうとする。

暫く歩いていたラクスは前を見るとベルカがおり、その横には何と、ハロルドがいる。

ベルカとハロルドの話す姿にラクスは更に苛立ちを覚え始め、ラクスは早歩きでその場を去る。

「くそ・・・！何だこの苛立ちは・・・！」

ラクスは苛立ちを表しながら二人を見ていると、ハロルドは立ち去っていきベルカも何処へ歩いていく。

ラクスは先回りして極限まで気配を消してベルカが来るのを待った。

暫くしてベルカがやって来ると同時にラクスはベルカの腕を掴むと引き寄せてベルカを壁際に立たせて両腕をベルカを挟む様に壁についた。

「ラクス・・・？」

「ベルカ。アサマやハロルドと何を話していた？随分と楽しそうだったか？」

「ただの雑談だけど？」

「雑談、か・・・何だろうな・・・理由は知れたのに未だに苛立ちが収まらない。この感情は何なんだろうな」

ラクスは優しそうに微笑んでいるも、目は冷たかった。

ベルカはそれを見て背筋を凍らせると、ラクスはベルカの両腕を押しさえて壁に付けた。

「な、何をするの・・・!?!」

「・・・ベルカ。私は・・・俺はお前が欲しい。例えるなら・・・どんな手段を使つても欲しいくらいに・・・」

ラクスの素の言葉をベルカは少し怯えた表情でもあるが、何処か顔を赤らめている。

ラクスはそのベルカの表情を見てまた微笑むと、ゆっくりと顔をベルカの顔に近づけて行く。

もう少して唇が重なるうとした時、突如ラクスを引つ張られベルカから突き放された。

「誰だ?」

「誰だと言われても私は貴方によく皮肉を言う人ですよ?」

「・・・その声はアサマか?」

ラクスはゆっくりと自身を引つ張った人物に顔を向けると、そこにはアサマがベルカを抱き寄せて立っている。

ラクスはそんな二人の状態を見て更に苛立ちを募らせた。

「怯える女性に対して何をしています?まさか襲っていた等と言いませんよね?」

「襲ってはいない・・・」

「では何故、壁に押し付けて接吻しようとしていたのですか?理由次第では幾ら私でも許しませんよ?」

ラクスとアサマの間に火花が散っているが見える位に二人は殺気だっている。

ベルカはそんな二人が自分を巡っていきなり喧嘩になるとは夢にも思わず、経験のない事にどうすれば良いのか戸惑っていた。

「ほお、やるつもりか?戦闘員でもないお前が欲しい?」

「平和的な話し合いもするのも大事だと言われた事がないんですか?」

「ない」

「即答ですか」

二人の喧嘩はヒートアップしていき、遂に戦い始めようとした時だ。

「ちよつと、何やってるの!」

そこに偶然きたラズワールドが慌てて止めに入ってきた。

ラズワールドはいがみ合うアサマとラクスをまず離すと、二人を宥める様に訳を聞く。

「二人供。何があつたか分からないけど少し落ち着こうよ」

「黙れラズワールド。この問題はそう単純でもない……これは俺とアサマの問題だ……!」

「え……ラクスの一人称で、俺だっけ……?」

「ラクスの言う通りです。これは私とラクスの問題……ベルカさん以外は口を出さないで欲しいですね」

「何で私……?」

ラクスとアサマは二人の困惑する中、またにらみ合いが始まってしまった。

ラズワールドはこれでは埒が開かないと考えた。

「はあ……ベルカ。この喧嘩はカムイ様達に止めて貰うしかないよ。今の二人を僕は止められないよ」

「そうね……早く呼びましょう」

ラズワールドとベルカが走りだし、カムイ達を呼びに行った。

その後、カムイ達を連れて次に来た時には、ラクスが何時もの調子に戻っており、アサマは気絶していた。

ラクス曰く、雑談中にアサマが勝手に気を失って倒れてしまい今から運ぼうとしていたと言うのだ。

ラズワールドはラクスに何か言おうとしたが、微笑みを浮かべて冷たい瞳をラズワールドに向けて”そうだよな?”と、目で伝えてラズワールドを震え上がらせて黙らせたのは別の話。

溺れた告白

ラクスは固まって動けなくなっていた。

朝、気が付いたら生まれたまの姿でベッドに寝ており、その隣には同じく生まれたままの姿で寝息を經てているベルカがいた。

「(どうしてこうなった・・・!)」

ラクスはゆっくりと記憶を辿るように目を瞑ると、徐々に思いだていく。

〜記憶の回想〜

カムイは今回、仲間入り達を労う為に細やかなパーティーを開いていた。

仲間達は思い々にパーティーを楽しんでいた時、ヒナタがラクスがある物に全く手を付けていない事に気が付いた。

「なあ、ラクス。何で酒を飲まないんだ？」

「ん？ああ、何故かは知らんがガロンやマークス様、それにマクベスにすら酒を飲むなど厳命されていてな・・・ガロンやマクベスは兎も角、マークス様が生きている限りは酒は飲まないつもりだ」

ラクスはそう言いながら水を飲むと、ヒナタが笑いながら酒瓶を差し出した。

「たまには良いじゃねえか。一杯くらいバレやしねえよ」

「いや、しかし・・・」

「遠慮すんなって」

ヒナタはそう言つて酒を注いで差し出すと、ラクスは仕方なく受け取つて口に運ぶ。

その光景を見たマークスは慌てて走りながら叫んだ。

「ま、まてええええええー！」

「へ？」

マークスのその慌てぶりに唾然したヒナタは次の瞬間、遠くに吹き

飛んでいった。

「遅かったか・・・」

「ど、どうしたのですか!」

落胆するマークスの元に騒ぎを聞き付けたカムイが走ってやってきた。

そこでカムイが見たものは・・・。

「あっはははははは!」

大きな高笑いをして片手に酒瓶を直に口に付けて飲んでいるラクスの姿だった。

「これはいったいどうしたのですか・・・?」

「・・・ラクスは酒がかなり弱くてな・・・ほんの少しでも飲めばとんでもない酒乱になってしまふんだ・・・酔ったラクスは父上ですら制する事すら出来なかった言わば最強の酔っぱらいだ・・・」

マークスは眉間を押さえながら言うと、カムイはラクスの意外な一面に驚いている。

ラクスはそんな二人に構わず、高笑いをしながらアサマに絡んでいた。

「おい、アサマ。何でお前、ベルカを俺から取ろうとしてんだよ。」

「彼奴は俺のもんだぞ?」

「ベルカさんは物ではありませんよ。それより口調が変わってませんか?」

「気にするな!」

ラクスはそう言つてアサマの背中を叩くと、アサマは勢い余つて目の前にあつた鍋に勢いよく頭をぶつけて気絶した。

「あっははははは!気絶しやがったこいつ!はっははははは!」

ラクスは高笑いしながら酒を飲み始む。

「おいおい、これはやべえだろ・・・!」

「はわわわ・・・」

ジョーカーとフェリシアはラクスの行動に危険を感じていた時、ラクスと目があつてしまった。

「おお、ジョーカーとフェリシア!お前らも此方に来て酒を飲め!」

ラクスは満面の笑みで二人にそう叫ぶと、二人はお互いを見て頷くと走って逃げた。

「やっつけられるか、あんな酔っぱらいの相手！」

「逃げるが勝ちですよ！」

二人の逃走にラクスは立ち上がると、尋常ではない素早さで走り、そして二人の襟を掴んで捕まえた。

「何で逃げんだよく。さあ、行くぞ！」

「は、離せ！」

「た、助けてくださいーい！」

ラク스에 敢えなく捕まった二人はそのままズルズルと引き摺られて戻ってくると、さつきまでパーティーをしていた仲間達は何処にもいなかった。

ジョーカーとフェリシアは悟った。

仲間達に囮として残されてその場から逃げ出したと。

二人の考えは当たっており、仲間達はマイキャツスルのあちこちに分散して隠れてしまっていたのだ。

ラクスは誰もいない事に少し考え込むと、ニヤリと笑った。

「成る程。俺の酒が飲めないのか。だったら……無理矢理でも付き合わすまでだ！」

ラクスはそう言うと、二人を側にあつたロープで縛ってから仲間を探しに出た。

ラクスはまず食堂内を探していると、目立った髪がチラホラと見え
ている。

ラクスはゆっくりと悟られずに近づくと、後ろから服を掴んだ。

「ピエリ、見つけた！」

「びえええええええ！」

ピエリを見つけたラクスはピエリを引きずってジョーカーとフェリシアと同じように縛ってから探しに出た。

ラクスはその後、次々と仲間達を見つけ出しては縛っていき、遂にカムイと王族組、そしてベルカのみとなった。

「ふふふ、やはり残ったのはカムイ様達か……やりがいがあるね！」

ラクスはそう言って歩いて行くと、一人見知った顔が見えた。

「あ、ラクス。・・・顔が赤いけど、どうしたの？」

「酒を飲んでたんだよ。ベルカも飲むだろ？」

ラクスは笑ながら言うと、ベルカはその言葉を聞いて悟った。

不味い時にラクスとあつてしまったと。

ベルカはパーティーの際、任務があつた為に少し遅れてやって来たのだ。

ベルカが帰って来ると、だれもいないので探していたら酔ったラクスがいたのだ。

「い、いえ・・・私は遠慮するわ・・・」

「へえ・・・断るのか・・・だったら、言う子とを聞かないベルカにはお仕置きをしないとな」

ラクスは怪しい笑みを浮かべると、ベルカを素早く捕まえて横抱きにした。

「ちよっ！何をするの!？」

「何って・・・お仕置きする為に移動するのさ」

ラクスはそう言うと、歩きだした。

ベルカは今のラクスが何をするか分からない為、必死に抵抗力するも、ラクスはビクともしないまま寝室にやって来た。

ベットの近くに來ると、ラクスはベルカをベットの上に投げた。

「きゃあーラクス、何を!？」

ベルカは立ち上がるうとした時、上からラクスが覆い被さる様にし掛かった。

ベルカは服が少しはだけて白い肌と細い体が見えており、ラクスの情欲を上げていく。

「さて・・・どうされたい？俺は今すぐに食べてしまいたいんだが？」

「い、いや・・・駄目・・・!」

のし掛かられて今にも獣の様に襲い掛かって来そうなラクスに対してベルカは涙目でラクスの顔を見た。

ラクスはそれを見て、少し動揺を走らせた。

「ベルカ・・・そんな顔をするなよ。別に無理矢理したい訳じゃない・・・」

嫌なら別にかまわないが・・・」

ラクスはそう言つてベルカの頬を優しく撫でた。

ベルカはラクスのその行為に驚きつつも、ドキリと胸を確かめた。「俺はな・・・お前が欲しいんだよ。永遠に閉じ込めて誰も触れられず目にも入つてしまわない様にしたいたい程に・・・だが、そこまでは望まないから敢えてこう言うぞ・・・」

ラクスとそう言つてベルカの耳元に顔を運ぶと、囁く様に言った。

「好きだ・・・ベルカ、お前の綺麗な姿も、中身も、血で塗られたその手も、全てを愛している・・・だから・・・お前の全てを俺にくれないか・・・？」

「ッ!?!?!」

ベルカはラクスの告白とも言える言葉に顔を真っ赤に染めると、ラクスは酒のせいなのかそれとも告白のせいなのか分からないぐらいに顔を赤くしている。

ベルカはラクスを見つめながら、うっとりした顔で頷いた。

ラクスはそれを見ると、微笑んでベルカとキスをして溺れていった・・・。

「(思い出したああああ!!)」

ラクスは両手で顔を隠しながら心の中で叫んだ。

普段、酒を飲むと全ての記憶がなくなってしまうラクスだが、今回は記憶がはつきりと残つてしまっていた。

だからこそ、ラクスは不可抗力でベルカに告白してしまいあまつさえ、意味深げの方で食べてしまった。

「(不味い! 夫婦所か恋人にすらなっていないのに嫁入り前のベルカを・・・! しかも、告白まで・・・! まだ覚悟もない・・・。此処は少し離れて覚悟決めなければ・・・!)」

ラクスはそう考えてベルカを見た瞬間、何時起きていたのか顔を染めたベルカが横向きの状態でラクスを見ていた。

「・・・」

「・・・おはよう」

「あ、ああ・・・ベルカ、その・・・」

「・・・責任は・・・取ってね／＼」

ベルカのこの言葉で今度こそラクスはやってしまったのだと理解した。

ラクスはその後、ベルカにしてしまったあの事で意気消沈しつつも内心、告白でき受け入れられた事にスッキリとしていたが酔っぱらった時に手酷くやられた仲間達の報復を受けたのは言うまでもない。

正反対の親子

ラクスは自分の娘レーラに会う為にアサマと共に秘境に向かっていた。

アサマはうんざりした様な顔でラクスに聞いた。

「はぁ・・・何故、私まで付き合わなければならぬのですか？行くだけならあなたの貴方一人でもできるでしょ？」

「前にお前の娘の騒動を助けたろ？その借りを返せとは言わないが・・・私の娘が万が一、同じ目にあっていないかと考えるとな・・・」
ラクスは前に一度、アサマの娘が襲われていた時に参戦して助けた経緯があった。

アサマはエリーゼの臣下であるエルフィと結婚しており、その間に娘のミタマを授かっていた。

そのミタマが秘境で襲われ、助けだした後に仲間に加わったのだ。
ラクスはミタマの件で自分の娘であるレーラも同じ目にあっていないか心配になり、秘境に向かっていたのだ。

「つまりは戦力ですか？・・・同じ目にあつてるとは限らないのに心配性な方ですね・・・」

「何か言ったか？」

「いいえ」

ラクスの高圧的な言葉にアサマははぐらかす様にそう言うと、レーラの住む秘境に到着した。

「着いたな・・・。おい、レーラ！会いに来たぞ！」

ラクスはそう叫ぶが、いつまで経ってもレーラ来ない。

ラクスは不信に思っていると、レーラの世話係をしていた親衛隊のメイドが慌てて走っている姿を見つけてラクスは呼び止めた。

「おい、どうした？」

「ら、ラクス隊長・・・！いえ、別に大事ではありませんから気にしないで」

メイドがそう言い方た瞬間、親衛隊のソシアルナイトがメイドの元へ着た。

「レーラ様が隊を引き連れて秘境を出てしまっていると目撃情報があったぞ！急いで追いかけるぞ！」

「ほお・・・レーラが秘境を抜け出したのか？それも隊を引き連れて・・・」

ソシアルナイトはゆつくりと振り向くと、そこには微笑んではいるが、濁って殺気だった瞳をしているラクスがいた。

メイドはやってしまったとばかりに怯えている。

「ラクス・・・隊長・・・！」

「それで？レーラがどうしたんだ？」

ラクスはメイドとソシアルナイトの二人に問い掛ける様に言うと、二人は観念して事情を話した。

「・・・実はレーラ様は何度か秘境の外にお出になられた事がありました・・・いや、護衛は着けていましたから剣を抜かないでください！」
ラクスは知らない内にレーラが親衛隊と共に外に出ていた事に静かな怒りを感じていた。

ラクスは外に出るのは構わないが、護衛を着けていても黙って出るのはゆるせなかった。

「・・・それで？今回の騒ぎは？」

「今回もレーラ様は外にお出になられた際に賊が民を襲っている見て、急いで戻ってきたかと思ったら武装させた隊を率いて行ってしまわれました・・・と、止めたんですよ！ラクス隊長が来るからもう少し待って下さいと言ったんですよ！でも、それじゃ間に合わないと言って・・・」

「・・・そうか」

ラクスは話を聞いてそれだけを言うと、馬に又借りアサマに言った。

「行くぞアサマ。レーラの戦いを見届けにな」

「私まで付き合うのですか？」

「元より戦力で来たんだ。嫌でも着いてきて貰う。お前達は他の親衛隊を集めて早急にレーラのもとに向かえ。戦場では何が起こるか分からないからな・・・増援としてレーラを助けるように」

「はッ！」

ラクスはそう聞くと、馬を走らせてレーラの元に向かって行く。

その頃、村を襲う賊をレーラは自身の隊を指揮して討伐しようとしていた。

隊は親衛隊で構成されており、練度も士気もかなり高くレーラの満足度のいく指揮が出来ていた。

だが、賊が想定以上に数が多く捌ききれない戦線が出始めていた。

「くッ・・・数が多い・・・でも、此所で退いたら民が・・・！」

レーラは戦うのと同時に民を避難させている所で、隊を分けて当たらなければならなかった。

徐々に不利になる戦況にレーラはどうするべきか考えていると、命令がレーラの元にやって来た。

「伝令！親衛隊の増援が到着した模様。率いているのはラクス隊長です！」

「父さんが・・・！。・・・うかうかしてられない。暗夜の懐刀と呼ばれた父さんに恥じない戦いをしないとね。全軍、民が避難でき次第攻勢に出る！民が逃げるまで持ちこたえて！」

その頃、ラクスは到着すると同時に感心していた。

ラクスが把握している記憶の中でレーラは初陣である筈なのに巧みに指揮をして戦っている。

ラクスは護身として剣術は教えていたが戦術までは教えてはいなかった。

「全く何処で戦術を学んできたのやら・・・」

ラクスはそう呟くと、親衛隊の一人が訳を話す。

「ああ、それは・・・マクベスから学んだみたいなんですよ・・・」

「・・・は？」

ラクスはマクベスと聞いて咄然としていると、話は続く。

「ほら、最近マクベスが外に出れる様になってるじゃないですか？

レーラ様は置いてあった戦術書だけでは満足ができなくてそれで・・・」

マクベスは最近、牢の中で大人しくしていたがカムイはラクスが知らない時に粘り強く説得をして仲間に率いれたのだ。

マクベスもどうせ仕える主はもういないと吹っ切れたのか大人しく仲間になっている。

言ってもマクベスの性格の悪さはラクスに対してだけ健在である。

「マクベスに頼み込んだのか？」

「いえ、拉致しました。命令を受けて約一週間程」

ラクスはそれを聞いて唾然とした。

自分の娘が拉致事件を引き起こしているとは思わず、溜め息をついてしまった。

「あいつ・・・」

「まあまあ、それよりも目先の敵ですよ」

「・・・はあ」

アサマの言葉を聞いてラクスは溜め息をつくど、馬を走らせる。

レーラは民の避難を終えて賊に対して攻勢を仕掛けており、不利だった戦況を引っくり返して有利になっていた。

「このまま押し切って！数は多くても素人の賊よ。練度に勝る私達の敵ではないわ！」

「レーラ！」

「父さん！」

「全く・・・心配を掛けさせるとはな・・・」

「すみません・・・」

ラクスと合流した矢先に説教を受けたレーラはシユンとして落ち込んだ。

「・・・レーラ。まだ戦いは終わってはないぞ」

「え？」

「・・・最後まで戦え。やるからにはな」

ラクスはそれだけを言うと、賊に向かって攻撃する。

賊達はラクスの姿を見て、一気に怯んだ。

「あの姿は……ら、ラクス！」

「暗夜の懐刀が来やがった！」

「ひいッ！」

賊達はラクスの前に立つことすら出来ず、逃げたしたりラク스에斬られる者達が続出し始めた。

そんな賊達の元に頭領と思われる大男が現れた。

「情けねえ！俺が奴をぶった斬ってやるぜ!!」

大男はそう言うのと、斧を片手にラク스에振るう。

ラクスはそれを意図も簡単に避けると、溜め息をついた。

「はあ……何だその力だけの攻撃は？相手にすらならんな。丁度良
い……レーラ、お前がこいつの相手をしてやれ」

「私ですか？」

「私が教えた剣術をこなせばこんな奴は取るにたらん……初めに戦い
を始めたお前が決着を着けろ」

「……分かりました」

レーラはラク스에促される様に大男の前に立つと、大男は薄気味悪
い笑みを浮かべている。

「おいおい、こんな小娘が俺をやるうてか？舐められたもんだな」

「小娘だと思つて甘く見すぎない方が良いですよ？そんな図体のでか
いだけの体で何ができるのですか？」

レーラは軽く挑発すると、大男は笑みから怒りを露にしたような表
情を出してレーラを睨み付ける。

「掛かつてきなさい……せめてもの情けです。楽に逝かせてあげま
しょう」

「ほぎけッ!!」

大男は斧を大きく振るつて叩き付けるように振り下ろしたが、レー
ラは上手く避けて大男の首を切り落とした。

大きくは首から大量の血を流して倒れると、他の賊達は怯み上がつ
た。

「……全員、降伏しなさい。今なら命は助けます。武器を捨てなさい」
レーラのその一言で賊達は武器を捨てようとした時、ラクスが間に

入った。

「待て。降伏はさせるな・・・全員その場で切り捨てろ」

「ッ!?。何故ですか?」

「奴等は賊だ。この中には初めての犯行の者がいるかもしれないが、賊は賊だ・・・今まで奪われてきた民達の為にも奴等を葬るべきだ」
「しかし、彼らはもう戦意はありません!戦う意志がないのなら捕らえて裁きに掛けさせた方が」

「甘いな」

レーラの言葉を遮る様にラクスは甘いと言った。

「レーラ。今の暗夜と白夜には奴等を裁いているほどの余裕はない・・・それに連れて行って投獄したとしても裁く前に他に賊が現れ、何処かが荒らされる。それなのに投獄し続けていたらどうなる?牢は満員になり、閉じ込められる場所は無くなるし、被害も増えていく・・・そうなれば切りがない」

ラクスはそう言うと、レーラは拳を握ってラクスの言いたい事を言った。

「・・・つまり、負担を省き効率化する為だけに彼らのいのちを取ると?」

「ああ・・・」

ラクスの冷酷で慈悲の無い案にレーラは迷う様にうつ向く。

賊の命か、効率か、どちらかを選ばなくてはならなかったが、レーラは決断をすぐに下した。

「・・・父さん・・・私は戦意を失った賊達を殺す事はやはり出来ません・・・」

「・・・何故だ?」

「確かに彼らは賊で他人の物を奪い、命を奪ってきたかもしれないですが、彼らは好きで賊に落ちた訳ではない筈です!貧困や戦で苦しんで、悩んだ末にそれで賊になるしかなかったのかもしれない・・・私は彼らの中にそういう人物がいるのなら助けたいんです」

レーラはまっすぐ瞳をラクスに向けると、ラクスはその瞳をカムイと合わせていた。

カムイと同じ目を持つレーラに、ラクスは溜め息を着いて剣を納めた。

「・・・今回だけだぞ?」

「ツ!?ありがとうございます・・・父さん」

レーラはそうお礼を言うと、同時に賊達は一斉に武器を捨てた。

武器を捨てた賊達は涙を流しながらレーラにお礼を言っており、レーラも優しく微笑んでいる。

ラクスはレーラのそんな姿を見て考えていた。

「(私と全く正反対な性格だな・・・殺すことを躊躇い、戦意が無いと分かれれば降伏を勧告して降伏させる・・・全く誰の影響だ?)」

「おやおや、随分と正反対な性格をしていますね。貴方の娘さんは?」

「ふん、何とでも言え。・・・あいつは甘い。いつかその甘さが命取りにならないければいいが・・・」

「本当に心配性ですね・・・それを言ってしまうとカムイ様はとつくと死んでますよ?」

アサマの指摘にラクスは項垂れると、戦後処理をしていたレーラがやって来た。

「父さん」

「何だ、そんなに改まって?」

「私も・・・私もカムイ様達の陣営に加えてください!」

「・・・」

ラクスはレーラの言葉に無言でいると、レーラは続ける。

「私はまだ未熟です・・・民達は救えましたがそれでも完全にはいえません・・・私は民を全ての驚異から守れる様な騎士になりたい!お願いです・・・もつと、強くなりたいんです・・・」

「・・・はあ、お前達」

「何ですか?」

「・・・こいつの荷物を整理してマイキャツスルへはこべ。必要な家具以外は置いて」

ラクスのその言葉にレーラは笑みを浮かべて頭を下げた。

「ありがとうございます、父さん！」

「騎士が簡単に頭を下げるな。頭を下げる時は見上の者か、本当に頼みたい事か、本当に悪い時に謝るぐらいにしておけ。・・・着いてくるからには弱音を吐くな。もし、弱音を吐いたら秘境に戻すからな？」

「はい！」

ラクスはレーラの元気のあるその返事に微笑みを浮かべてあたまを撫でてやる。

「(帰ったらベルカが怖いな・・・)」

ラクスの妻であり、レーラの母であるベルカの予想できる説教コースを想像してラクスが震え上がるのは別の話。

師と弟子

カムイ達は大地が飛び、複雑化している透魔王国の道をひたすら進み続けていた。

道中、透魔兵が立ち塞がる物の少数であった為、あまり時間を割くことはなかった。

カムイ達は順調に歩んでいた時、深そうな森が見えてきた。

「・・・アクア様。もしかして、森を通るのですか？」

「ええ・・・危険は伴うかもしれないけど・・・今はこの道しかないわ・・・」
アクアの言う危険。

それは、奇襲の危険性だった。

視界の悪い森や山は奇襲にうってつけの地形で、道も狭く、細い陣形にもなってしまう。

ラクスは暗夜に所属して戦場で戦う時はあまり立ち入らない様にしていく程だ

「・・・奇襲に気をつけて通らしましょう。カムイ様」

「はい・・・」

カムイ達は森の中に入って行く・・・その姿を遠巻きに見ていた者がいたと気が付かず。

森の中に入ったカムイ達は、森の予想以上の深さに困惑していた。
アクアも長い間、この地を訪れていなかったとはいえ、此所まで深いとは思わなかった様だ。

ラクスは警戒しながら進み続けていると、急に嫌な寒気を感じとり、立ち止まった。

「待て」

「どうしたのですかラクスさん？」

カムイの問いを聞いても返事を返さず、ラクスは森の奥を見ていると突然、数本の暗器が投げつけられた。

ラクスは素早く抜刀して暗器を弾き返すと、鋭い殺気を出した。

「・・・この腕。まさか、貴方なのですか？」

ラクスはそう言うと、奥からボロボロの外衣と衣服を感った無償髭の男が現れたのだ。

その男を見たベルカは信じられないとばかりに目を見開いている。

「そうだ。よく気付いたなラクス・・・」

「お久しぶりです。師匠・・・」

「え!?!ラクスさんの・・・師匠?」

ラクスから発せられた師匠と言う言葉にカムイは驚くと、ベルカを除く他の仲間達も驚きの顔になった。

「あんたはカムイだね?。いつも俺の馬鹿弟子と馬鹿娘が世話になってるよ」

「娘・・・?」

「ああ、やはり知らないのか・・・まあ、知らなくて当然だが・・・」

男はそう頭をかきながら言うと、ベルカは体を震わせて男を見ている。

無理もなかった。

ベルカは依頼とはいえ、育ての親をその手で殺している。

例えば表に出さなくても心の奥底ではそれ相応のダメージを負っているのだ。

「ベルカ?」

震わせているベルカを見たカメラが声を掛けた時、男がベルカを見つけた。

「そこにいたのかベルカ」

「え?」

「・・・お父さん」

ベルカの言葉にラクスを除く全員がベルカの方を見た。

確かに男とベルカが親子だとは誰も思わなかっただろうとラクスは考えるが、それよりも何故、男が生きていたのかを知りたかった。

「・・・何故、生きていている?」

「そうだな・・・何かハイドラとか言う奴の眷属にされてなあ・・・そ

れで甦って戦う事になった。お前らとな・・・」

「ッ!?。またハイドラの眷属ですか」

「また?」

「はい・・・ラクスさんと合流するまえにシエンメイさんと名乗るアクアさんの母で、ハイドラの眷属に会いました・・・」

カムイはそう言うと、ラクスは納得した。

「成る程な・・・シエンメイ様か」

「知っているのですか?」

「知ってるも何も・・・ガロンを可笑しくさせてしまった原因で、昔にお亡くなりになったと聞いている。まさか、ハイドラとか言う奴は死人を甦らせて操るとはな・・・」

「まあ、普通は気味悪いわな・・・分かるぞラクス」

男はそう頷きながらラクスの考えを読むように言う。

アクアは警戒しながらも、男に問う。

「貴方・・・完全にハイドラの支配下ではないの?」

「んー・・・よく分からんが、多少は俺の意志が強いようだな。まあ、支配下ではあるのは変わらん。それより、早速だが戦うとしようか・・・ラクス、ベルカ。お前達の成長ぶりを俺に見せてみる」

男はそう言うと、鋭い強烈な威圧と殺気を出してカムイ達を怯ませた。

「な、なんて殺気だ・・・!」

マークスがそう言った時、一人だけ怯んでいない者がいた。

それはラクスで、慣れていると言わんばかりに立っている。

「・・・流石は師匠か。その存在感は未だに健在し続けているとはな」

「・・・お前だけは怯まないのか?」

「そんな物、慣れっこだ。・・・どうやらまともに戦えるのは私だけの様だが、戦うか?」

「随分と勇ましい事を言う様になったな?。まあ良い・・・お前を先に殺してからでもあいつに咎められたりしないだろ」

男はそう言うと、暗器を取り出して構えた。

「ラクス！」

「ベルカ。．．．そこにいろ。もう、お前に親殺しはさせはしない」

ラクスはそう言うと、剣を構えて男に対峙した。

「まるで決闘だな．．．決闘には名乗りが必要だ。．．．俺はデユラハ。暗夜最強の暗殺者だ．．．」

「．．．暗夜王の懐刀、ラクス。貴様をもう一度、あの世に送り返してやる．．．！」

デユラハとラクスの師弟対決が幕を開けた。

師弟対決

師であるデユラハ、弟子であるラクス。

戦いは二人の鋭い殺気に包まれて始まった。

二人は師を、弟子を相手に本気で殺そうとそれぞれの得物を手に激しく斬り合う。

「す、すごい……」

カムイがそう呟くと、マークスも同感する様に頷く。

「流石はラクスの師と言える者だ……デユラハの技は常人離れをしているが、洗練された技……だが、ラクスも負けない技術だ」

マークスがそう言うと、冷や汗を流しながらリヨウマは真剣な眼差しで戦いを見ながら言う。

「ああ……ラクスの剣、あれは人を確実に殺す為の技が使われている。何処でそんな技を得たのか疑問だったが、暗殺者の弟子と聞いて納得した。あれは……暗殺術の剣だ」

「暗殺術の剣……？」

「カムイ。ラクスの剣の振りをよく見てみる」

カムイはリヨウマの言葉を聞きラクスの剣の振りを見てみると、剣は首や胸、動脈のある手首や頭等と何処も急所に向かって振られているのだ。

「あれは……！」

「あれが暗殺術の剣だ。暗殺において求められるのは一撃必殺……確実にかつ一撃で仕留める事だ。ラクスは恐らくそれに長けている。だからこそ、あれほどまでに急所を狙える」

「でも、ラクスは普段は……」

「……隠していたのだろう。あの暗殺術の技を見せるのは暗殺者が自分から素性を曝す様な物だからな」

カムイはリヨウマからそれを聞くと、心配そうにラクスの戦いを見る。

ラクスはデユラハの扱う暗器を弾きながら懸命に戦うも、中々有効打を撃てずにいた。

「くそ・・・よく勝ったなベルカの奴・・・！」

「可愛い娘が俺を暗殺するとは思わんだろうが。たく、いきなり何かで斬られたと思つたら、ベルカが斧を持って立ってたんだでビビったわ本当に・・・」

「普通は常に警戒するだろ・・・凄腕の暗殺者が狙われる事があるのを知っていたくせに」

「それでも家族を疑いはしないさ！」

デュラハはそう言つてラクスに斬り掛かり、ラクスは剣で受け止めた。

「それよりもだ、ラクス・・・お前・・・ベルカに手を出しやがったな！」

「悪いか？」

「悪いは！よくもうちの可愛いくて常に頭を撫でたくなるような愛らしさを持つていて何処か冷たくても優しいうちの娘を!!!」

デュラハの衝突な発言にラクスを除くカムイ達は啞然としてしまった。

いきなりベルカの事を褒めて怒り狂つたのだから無理もなかった。

「いい加減、ベルカを自立させろ！だからタマを取られたんだろうがクソ師匠！」

「嫌だ！まだ可愛がりたい!!」

「もう、結婚したんだよ、妻になったんだよ！あいつを何時までも子供と思ふな！もう、俺だけの物だ!!!」

「黙れ！クソ弟子が!!!」

もはや真剣な戦いではなくなっている戦いに、カミラとルーナは呆れ顔で見ている。

「全く男ときたら・・・」

「そうね・・・ベルカ？」

カミラはベルカの法を見ると、ベルカはリンゴやトマトの様に顔を真っ赤にさせてしゃがんで顔を両手で隠していた。

明らかにもう恥ずかしくて見てられないと言う様な感じだ。

「べ、ベルカ？」

「・・・もう、やだ。あの二人・・・／＼／＼」

「・・・何だかベルカのトラウマが蘇ってますね。カミラ様」

「そつとしてあげましょう・・・」

「恥ずかしがるベルカにカミラとルーナはそつとしておく事にし、呆れつつも戦いを見守る。」

「じゃあ、あれか！結婚したからベルカを抱いたのか！抱いたのか!!」

「それ以上は言うな！恥ずかしい!!／＼／＼」

「やっぱりかああ！よくもうちの娘の純潔を!!」

二人の戦いは理由はしようもなくも激しさを増していき、動きも更に速くなっていく。

「くそお・・・無駄に腕を上げやがって・・・」

「何時までも衰えない腕を持ちやがって・・・」

二人の戦いは全く決着を着ける事が出来ず、二人は息を切らしながら武器を構え続ける。

二人はジリジリと動きながら相手の隙を伺い、そして。

「これで・・・終わりだ!!」

二人同時に動いた。

「やめてください!!」

その大きな声で二人は止まり、振り向くとそこには恐ろしい表情で二人を睨むラクスのベルカの娘レーラが立っていた。

「だ、誰だあいつは？何て殺気だ・・・」

「・・・うちの娘です・・・お義父さん」

「どさくさに紛れて何を言ってるやがる！」

お義父さんと言ったラク스에デュラハはキレた時、ドンツ！と言う様な音が地面に響いた。

レーラの手には通常ではソシアルナイトでは扱えない棍棒が手にされている。

「やめてください、と言いましたよね？」

「す、すまん・・・」

ラクスは棍棒を持って怒るレーラを見て、やはりベルカの血引いていると改めて感じつつも、出来る限り矛先ならぬ棍先が来ない様に影

を薄める。

「だいたい何ですか！父さんとお爺ちゃんが良い年して喧嘩なんて……見てください！母さん何か恥ずかしさのあまり気絶してますよ！」

レーラが指を指すと、ベルカが顔を真っ赤にさせながら気絶している。

カミラとルーナは慌てた様子で介護している姿からすると、後で二人からも説教が来るとラクスは感じ取った。

「……今日はついてないな」

「お爺……ちゃん……俺はまだ若いぞ……」

「それについては……慰めようがない……」

「そこ！説教の途中で喋らない!!」

父親ラクスと祖父デユラハはキレた娘レーラに体を縮みこませながら説教をされ続ける。

カムイ達は普段は温厚なレーラが怒ると本当に怖い事から温厚な人ほど怒ると怖いと言う言葉が本当だと言う事を改めて認識した。

対決の決着

レーラに説教をされたラクスとデユラハは、気を取り直して戦いを再会させた。

二人の戦いは激しさを増していき、二人が何処にいるのかギリギリ分かるぐらいだった。

「ねえ、母さん」

「どうしたの？」

戦いを見ていたレーラは気絶から立ち直ったベルカに話し掛けた。

「父さんとは兄妹弟子で一緒に暗殺の修行をしてたんだよね？何で父さんは凄い動きができて、母さんはできないの？」

「・・・それはラクスに暗殺の才能があつたからかしらね。義父さんが見込んだ人だもの・・・義父さんは常にラクスにだけ特別な訓練をさせていたわ」

ベルカは懐かしむ様に言うと、レーラは首を傾げる。

「でも、才能だけじゃあんな風には・・・」

「だから特別な訓練をさせられていたのよ。才能を開花させる為に多くの殺しの方法、盗み、あらゆる武器の扱い方、俊敏な動き方・・・義父さんは教えられるだけラクスに叩き込んだ。私は普通の訓練で、嫉妬も覚えてしまう程よ」

ベルカはラクスとデユラハの戦う場所を見ると、ラクスとデユラハは楽しそうに笑いながら武器を振るっている。

ラクスが戦いを楽しそうにするのはとても異例で、仲間達はドン引きしている。

「まるで戦いそのものを楽しんでるみたい・・・」

ルーナがそう言うと、ベルカは応える。

「・・・ラクスも懐かしいみたいね。あれでも、ラクスにとって父親みたいな存在だから・・・昔の様に立ち合っているのが嬉しいみたい」

「・・・父さん」

ベルカの言葉を聞いたレーラは心配そうにラクスの方を見る。

ラクスとデユラハは必死にそれぞれの得物を手に戦い、自身の持つ

技術の全てをぶつけていた。

「本当によく此処まで強くなつたもんだ。師として鼻が高いな」

「俺だって強くなるさ。・・・家族を守為にな」

「・・・そこまでベルカの事を愛してやがるんだな」

「ああ、愛しているさ。この世界を探したってベルカの変わりになる奴はいないと言える程にな」

ラクスの言葉にベルカは少し恥ずかしそうに顔を赤くしてうつ向く。

デュラハはその姿を見た後、少し驚いた顔をしている。

「ベルカがあんな表情をするなんてな・・・。お前、やるじゃないか」

「これでも長い付き合いだからな」

ラクスはそう言うのと、剣を構えるとデュラハと応える様に暗器を構えた。

「さあ、決着を着けようか・・・。ラクス!!!」

「望む所だ!!!」

二人は走り出すと、自分達の得物を振るってすれ違い様に振るつた。

振るつた後、少しずつ進んだ後で振り替えて互いに身構えた。

暫くして、ラクスの腕から勢いよく出血した。

「ラクスさん!」

カムイはそれを見て叫んだが、ラクスは傷ついた腕で制する様に上げると、今度はデュラハが腹から勢いよく血が吹き出した。

「・・・俺の勝ちだ」

ラクスはそう呟くと、デュラハはゆっくりと倒れた。

伝わる真実・・・

デユラハを倒したラクスは傷ついた腕を押さえながらデユラハの元に近付いた。

デユラハは息を切らしながら迫ってくるラクスを見て笑う。

「はあ・・・はあ・・・ほん、とうに強くなった・・・ものだ・・・」

「師匠・・・何故、貴方は・・・」

「死んだ身の俺が現れたか、か・・・？」

ラクスの言葉を代弁する様にデユラハは言う、ラクスは頷いた。

「・・・まあ、あれだ・・・お前、達に・・・もう一度会いたかった・・・から、だな・・・暗殺の師として・・・家族として・・・父親として・・・」

デユラハの言葉にラクスは涙を流した。

孤児だった自分を拾い師弟として、家族として、迎え入れてくれた唯一の父親が今、死にそうになっている。

「・・・親父」

「・・・やっと・・・言ってくれたな・・・まあ、お義父さんはノーコ
ンだが・・・親父は良い響きだ・・・」

デユラハは穏やかに微笑むと、ラクスは涙を堪えきれず流した。

遠くにいるベルカも涙を流して泣いてる。

「全く・・・泣くなよ・・・俺は、お前達が忘れない限り死ぬ事はない・・・
だから、泣くな・・・」

「無理だ、親父・・・！俺は・・・俺は・・・！」

「・・・ラクス。俺が死ぬ前によく聞け」

デユラハは真剣な面持ちでラクスにそう言うと、ラクスもデユラハの言葉を聞く為に耳を傾ける。

「良いか、よく聞け・・・お前は这个世界ではイレギュラーだ・・・」
「イレギュラー？何の事なんだ・・・」

「・・・この世界に元から存在しない、してはならない存在だ・・・ラ
クス・・・お前はこれまでに多くの道を辿り、やり直している・・・
ある時は白夜・・・またある時は暗夜・・・ある時は、そこにいるカ
ムイに刃を向けた道・・・拳げ句の果てには・・・ゴホッ！」

デユラハは何かを言い掛けて時、血を吹き出した。

ラクスは慌ててデユラハを介抱しようとするも、止められる。

「ラクス・・・今のお前の道は・・・初めての道であり、最後の道だ・・・この道を進み終えた後、お前は・・・」

ラクスにのみ聞こえる様に驚きの真実を伝えるデユラハは息を切らしながら口を動かし続け、ラクスは聞き取る為にデユラハの口に耳を傾ける。

そして、ラクスはデユラハの言葉を聞いて目を見開いたり

「それはどう言う事なんだ・・・！」

「・・・ラクス。すまない・・・それ以上は・・・わか、らない・・・ラクス・・・べ、るか・・・と・・・レーラを・・・たの、ん・・・だぞ・・・」

デユラハはそう言って力なく喋る事を止めると、デユラハは泡と なって消えてしまった。

取り残されたラクスは未だに動けずにいると、ベルカがやって来た。

「・・・なんて言ってたの？」

「・・・ベルカとレーラを頼む。それだけだよ」

ラクスはデユラハから聞き取った真実を伝えず、それだけを言うとき空しく空を見つめた。

腹黒の軍師の子

くとある秘境く

ラクスは今、ある人物と共に秘境を訪れていた。

その人物は皆さんご存知の嫌われ役の軍師、マクベスその人だった。

「全く・・・揃いも揃って私を秘境に連れてくる奴があるか？」

「しようがないでしょうが。私の息子が貴方やカムイ殿以外に全く言う事を聞かないんですから・・・」

ラクスとマクベスが秘境へ訪れた理由、それはマクベスの息子の様子を見にきたのだ。

マクベスの息子は絶賛反抗期真っ只中の為、マクベスの言う事は聞かない。

流石に上の人間の言う事は聞くも、カムイやラクス以外に心を許していないかった。

「だからって、私は嫌なんだよ・・・だって」

「父さん！早く！」

「・・・貴方の娘が無理矢理着いて来るからですか？」

ラクスは溜め息を吐きながら頷く。

レーラは事ある毎にラクスが秘境へ様子見に着いて行く際に絶対に着いてくるのだ。

例えラクスが拒絶してもありとあらゆる手段を使っていつの間にか着いてくるのだ。

今回、レーラの使った策は母であるベルカを通して頼み込み、ベルカに弱いラクスは断り切れずに了承したのだ。

「・・・私はあの時、この世界で最強の存在は嫁だと思ったよ・・・」

「・・・それは同意ですね。最も私は意味深げの方で襲われて強制的に結婚しただけなんですけどね」

マクベスは怨めしそうにラクスにそう言うと、ラクスは項垂れながらマクベスに言う。

「まさか親衛隊のメイドの一人にあそこまでの行動力があるとは思わ

なかつたんだよ……」

マクベス結婚の理由。

それは、親衛隊の衛生兵として行動するメイドの一人が酔った勢いでマクベスの部屋へ乱入し、そのまま意味深げの方で襲ったのだ。

その後、朝に正気を取り戻して泣きながらマクベスに「責任を取れ！」と言いなながら騒ぎを聞き付けたラクスが止めるまで殴りまくったのだ。

酔って、やつちやつて、騒ぎを起こしてだけならマクベスは結婚はしないだろうと思うかもしれない。

だが、流石のマクベスでも結婚しなければならぬ案件が起きてしまったのだ。

あの子の出来事から3ヶ月、メイドが体調を崩したり酸っぱい物を食べたがったりと、妙な行動をする様になり、子持ちの経験済みの女性人達はそれをすぐに察したりする。

簡単には言えば……デキ婚である。

「あの時……貴方がもう少し部隊管理してればデキ婚なんて一族の恥みたいな事をしなかつたんですがね……」

「諦める……他の女性陣もベルカも強すぎる……所詮、男は嫁に勝てないし、何よりわざわざ伴侶を探す必要もなくなったから良いじゃないのか?」

「嫁に尻に敷かれてもか?嫁が不機嫌な度にぶん殴られてもか?嫁に何かお疲れ様と言われて頬にキスされてもか?」

「おい、最後のは良いじゃないか全く……」

ラクスはマクベスに呆れつつも案外上手くやれてるなど考えつつ、仲間内の結婚を考えていた。

「……結構、結婚した者が多くなつたな」

今現在、仲間間での結婚はこうなっている。

カムイ×ジョーカー

アクア×スズカゼ

アサマ×エルフィ

ルーナ×ツバキ

サイゾウ×フェリシア

カザハナ×サイラス

リヨウマ×カミラ

マークス×ヒノカ

タクミ×エリーゼ

レオン×サクラ

等と王族組を含めた者達が一気に国際結婚をしてしまったのはラクスも驚愕物であった。

「……これ、もう国合併してもやっていけるだろ……」

「……言ってはならないのですよ……言っては……言ったら最後、仕事の間違いなく増えますよ……」

二人は国際結婚で起きる惨事？を恐れつつもマクベスの息子がいる屋敷へと到着した。

「マクラスー！いるならば返事なさい！」

マクベスはそう大声で言うと、屋敷から面倒くさそうにする声が響く。

「僕は今、留守にしてます。御用の方は後十年後に御越しく下さい」

その返事を聞いたマクベスは相当頭に来てしまったのか屋敷に向かって怒鳴り付ける。

「ふざけないで出てきなさい！不本意ながらラクスもいるんですよ！次いでにレーラも！」

「……本当に？なら、行くよ」

そう返事が帰ると、一分もしない内に屋敷の扉が開いてマーシナリーの鎧でマクベスの髪型を整えたような髪型、血の気良い顔をしたマクベスとは逆の格好をした青年が出てきた。

「……お久しぶりですラクス卿、レーラ。次いでに父上」

「何で私が次いでなんですか！この二人の方が次いでじゃないですか！」

マクベスの激しいツツコミにマクラスは首を傾げながら言う。

「いや、父上は滅多に此処に来ないし嫌いだし……ラクス卿は母さんから耳にタコが出来る程に二人に尊い誠心誠意仕えろと言われるのと、レーラは同じ軍略を学ぶの同門ですし……」

マクラス。

マクベスと親衛隊の衛生兵メイドのソーラとの間に出来た一人息子。

父であるマクベスから跡取りとして軍略を学び、レーラとは同門だ。

二人でマクベスから軍略を学び、磨きを掛けている。

「いやいや、立場的には私は同格になりますから！仕えてるのはあいつだけだから！」

「もうすぐ格下に左遷させられると、母さんに言われてます」

「あいつ……そんなデマを……」

マクベスは額に手を置きながら息子でありマクラスのやる気のない毒舌的な言葉に頭を悩ませる。

「……確かに左遷させられるだろうな……事があれだったしな……」

「ラクス、もうあれを引っ張り出さないでください。謝りますから……本当に謝りますから……」

マクベスは前にラクスの家族とも言える孤児院の皆を人質にしてラクス暗殺を図った経緯があった。

今は国の警備に戻した半数程の兵士達の護衛の元で孤児院に戻っている。

「……もし、左遷先が私の元だったら過労死させてやる……」

「……そうだったら他の仕事を探します」

ラクスはマクベスにまだ恨みがあるとも言える言葉を吐くと、マクベスは殺される前に辞めると豪語した。

そんな中でレーラは微笑みながらマクラスの元に来る。

「久しぶりですマクラス。元気にしてましたか？」

「今日が来るまで退屈だった。来るのは仕事から抜け出して会いに来る母さんと希にしか来ない父さん位……ラクス卿から剣の稽古を受けたいのにさ……」

「貴方は剣より魔法の方が才能があるでしょ？」

「嫌なんだよ。あんな露出高い服装が・・・下手したら変態一直線だよ。男が着たら特に」

マクラスはそう言っつて拒絶すると、ラクスの方へ振り向く。

ラクスはマクラスの目を見て剣を志す本気さを見せ付けられ、ラクスは溜め息を吐いた。

「・・・本当なら才能にあつた戦いが良いんだがな・・・まあ、剣の稽古ぐらい着けてやろう」

「ラクス」

「分かっているさ。別に剣だけでなく魔法も扱える兵種もある」

「・・・ダークナイトですか？」

「ああ、ダークナイトは剣も魔法も扱える・・・それに、ご要望通り、服装はダークマージミみたいな服装じゃないしな」

ラクスはそう言っつてマクラスに剣の稽古を着けるべく広場の方へ向かっていく。

ラクス達が広場へとやっつて来た時、ラクスは向こうに数人のけはいを感じ取った。

何れも殺気を宿した者達ばかりで、友好的な者だと思えなかった。

「・・・マクベス。気付いているか？」

「気付きますよ。これだけ殺気を出してれば」

二人は殺気を出している連中に気付き、マクラスとレーラはまだ気付いていない。

「ふむ・・・二人が気付く前に消すか・・・どうだ？」

「そうですね・・・消しておいた方が良いでしょう。大方、私へと恨みでしようしね」

マクベスは暗夜の軍師。

国の方針や策を決情な手段を使っつて決める軍師としてマクベスは

名を有名にしていた。

その為、恨みを持ち者が多く、ラクスの元に暗殺の依頼が来てしまふ程だった。

暗殺依頼の件は受けず、依頼者をラクスは殺している。

「全く……面倒な事です」

「お前が恨られるからだろうが……たく……」

ラクスはそう言って歩き出す。

「奴等は私一人で充分……お前は二人を守れ」

「おやおや？ 自慢の娘をこの私に任せると？」

「……今は、仲間だろ？」

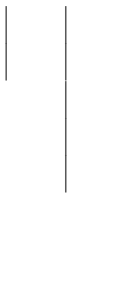
ラクスはそれだけを言うと言いつた。

その姿をマクラスとレーラは気付いた。

「父さん。何処に行くの？」

「道具を取りに行くだけだ。別に一人で済む事だ。そこで待ってろ」

ラクスはそれだけを言うと言いつた。



暫く三人は待っていると、ラクスが戻ってきた。

それを見たレーラは安心した様な顔で走ってきた。

「父さん……良かった。遅かったんで何かあったかとおもいました」

「別に遅かっただけじゃないか……」

ラクスはそう言いつてレーラの頭を撫でると、微笑む。

そんな中、マクラスは怪しむ様な顔でラクスを見ていた。

「……血の臭いがする」

マクラスがそう呟くと、ラクスは無表情で冷たい瞳をしながらマクラスを見る。

マクラスはそれに怯まずに続ける。

「……まさか、人を殺す程のトラブルでもあったのですか？」

「……さあな。それより、剣の稽古だ。準備は出来てるな？」

「出来てますよ。・・・ラクス卿。今回、お願いがあるのですが・・・」
「何だ？レーラを嫁に欲しいとか言ったらぶつ殺すぞ？」

「と、父さん！／＼／＼」

ラクスの言葉に顔を赤く染めて咎めるレーラ。

普通ならなごむ様な物だが、異様な雰囲気の流れている。

「・・・もし、剣で貴方に一本でも取れたら・・・僕もカムイ様達に同行させてくださいませんか？」

「マクラス・・・！」

「それはマクベスに言うべきでは？」

「貴方は軍の副官の様な人です。父上は母上にお問い合わせして通せますがやはり、カムイ様やラクス卿の許可が無ければ入れないと思いますので・・・」

マクラスの言葉にラクスは暫く無言でいたが、不意に微笑むと訓練用の青銅の剣を抜いた。

「・・・面白い。なら、全力で掛かってこい。一本を取れるならな？」

「言われなくとも！」

そう言つてマクラスはラクスに斬り掛かる。

マクラスの攻撃にラクスは軽く受け止めると、マクラスの腹に拳を思い切り叩き付ける。

「ぐほあッ!？」

マクラスは腹を押さえて体を屈ますと、ラクスは青銅の剣を肩に掛けて見下ろす様に見える。

その見方はまるで弱者を見下す様な冷たい目で、誰もが恐れる暗夜王の懐刀としてのラクスだった。

「あまいぞ・・・その程度の攻撃で私から一本を取ろうとしたのか？」

「・・・うおおー！」

マクラスは立ち上がつてラクスに攻撃するが、ラクスは何度も何度も攻撃を防ぎ、マクラスを殴る。

それを遠くから見るマクベスは平気そうにしており、レーラは心配そうにしている。

「い、良いんですか？訓練とはいえ、これはやり過ぎでは？」

「良いんですよ。マクラスには丁度良い薬・・・外の世界ではマクラスや私より強い者が山程いる。一人では到底勝てない様な者もいるとラクスは教えたいんでしようね・・・」

「え？これは訓練・・・一人で挑む物では？」

「誰が一人でと言ったのですか？私は兎も角、貴方ならとラクスは許して参戦させると思いますよ？・・・ラクスは怪物です。ラクスの戦いは本気の殺し合いだろうと訓練だろうと手加減はしません。むしろ、常に勝つ為に叩き潰す算段しかないでしょうね」

マクベスの言葉にレーラは聞いた後、マクラスとラクスの戦いを見る。

「はあ・・・はあ・・・」

「どうした？降参するなら私は終わりにして帰るぞ？」

「・・・まだですよ。まだ、終わりません！」

「・・・全く。素直に負けを認めていれば辛くなかっただろうにな・・・なら、終わりにしてやる」

ラクスはそう言つてマクラスとの決着を着ける為に青銅の剣を振るつた。

尋常ではない速さにマクラスは守りが間に合わない。

「(くっ・・・まだ、未熟だったと言う事でしたか・・・)」

マクラスは静かにラクスの攻撃が来るのを待っていた時、激しい金属音が響いた。

マクラスが目を開けると、そこには青銅の剣を持ったレーラがいた。

「・・・何の真似だレーラ？」

「・・・私も、久し振りに父さんに稽古を着けて欲しくなりました。マクラスと一緒に」

レーラの言葉にラクスは少し呆れた様な顔をして青銅の剣を肩に掛けた。

「レーラ・・・！これは僕とラクス卿の戦い・・・貴方が出てきても・・・！」

「父さんに一人で挑むのは無謀・・・と、マクベスさんが言っていました。」

マクベスさんの受け取りですが、一人だけで挑めとは言ってませんでしたからね」

レーラの言葉にラクスは聞くと、静かに青銅の剣を納めた。

「・・・受け取りでも、レーラだけが正解か。戦いの中で、強者と出くわす事は多いです。故にそんな奴に未熟な状態で一人で挑むのは無謀でしかない。近くにいないなら二人でも三人でも組んで戦い、集団でも敵わない、味方がいないなら逃げる・・・これも一つの戦い方だ」
ラクスはそう言っつてマクラスを引つ張り上げた。

「良いか？お前は意地になつて一人で戦おうとした。お前でも私が強いと分かつていてだ。一人で戦う事は勇ましくカッコいいかもしれないが・・・実力差がありすぎる相手には、失格の戦い方だ」

ラクスがそう言っつと、マクラスは顔をうつ向かせて落ち込む。
ラクスに失格と言われた事が余程ショックだったようだ。

「・・・だが、剣の腕は上がっている。中々、面白い。・・・このまま腐らせてしまうよりも、連れていっつて鍛えてしまった方が良いかもしれないな・・・」

「ッ!?それじゃあ!」

「・・・連れて行っつてやる。だが、一樣両親に話しを通してからだぞ?」
ラクスはそれだけを言っつと、屋敷の方へ歩き始めた。

そんなラクスの背中をマクラスは見つめていた。

「・・・やっぱり、カッコいい・・・」

「本当に父さんの事が好きなんですな」

「昔からの憧れだったんだ。剣を取る切っ掛けでもあり、国の柱でもあるラクス卿に・・・」

マクラスは目をキラキラとさせてそう言っつと、レーラはマクラスのその姿に少し顔を赤く染めた。

「・・・ふふ、父さんに憧れる・・・か。なら、私はマクベスさんに憧れようかな」

「いや、止めとけ。陰湿さが移る」

「移りません!さあ、早く帰っつて軍略を頭に叩き込みますよ!」

マクベスがそう言っつて早足で帰ると、マクラスは溜め息をつきなが

ら着いていく。

レーラはマクラスのその背中を見て、また頬を染めつつ歩きだした

狂気の影

ラクスはマクラスを新たに陣営に加え終えた後、マイキャツスルに戻り休養を取ろう自身の部屋へ向かっていた。

「・・・はあ」

ラクスは疲れから溜め息をついた時、体が妙に寒気がしたのを感じ取った。

ラクスは風邪かと考えていた時、ラクスの元に声が響いた。

《・・・殺せ》

「な、何だ？誰なんだ・・・!?」

《殺せ・・・全て殺せ・・・全ての者を殺してしまえ・・・!》

「止めろ・・・!これ以上言うな・・・!」

ラクスは耳を抑えて声を聞かない様にしたが、頭に直接響くかの様に声が聞こえる。

《殺せ!!!》

「止めろ!!!」

謎の声とラクスの叫びが同時に発した時、声は止まりラクスは荒い息を立てて壁にもたれる。

「はあ・・・はあ・・・何だったんだ・・・」

「ラクス？」

ラクスは声を掛けられた方を見ると、そこにはベルカが心配そうに立っていた。

「・・・何でもない」

「嘘。貴方が取り乱して叫ぶ所を見たわ」

ベルカの追求にラクスは項垂れるがそれでもなお、抗う様に言い訳する。

「本当に、何もない・・・ただ、少し驚いて叫んだだけだ・・・何もないんだ・・・」

「ラクス・・・」

「心配するな。本当に何もないんだ・・・心配する必要もないし、何より驚いて叫んだだけだしな・・・」

ラクスはそう言って部屋の方へ歩いて言ってしまった。

ラクスは部屋へ戻ると鎧を脱ぎ、ベッドに寝転がった。

ベッドは結婚してからベルカと共同で使っており、夫婦二人で寝ている。

だが今はベルカは他に仕事があり遅くなる。

ラクスはベッドに寝転がりながら先程の声について考える。

「・・・何だったんだ・・・あの声は・・・殺せ、か・・・」

ラクスは声の言っていた殺せの意味を考えるも分からず、そのまま眠ってしまった。

ラクスが眠りから目を覚ますと、そこは暗く古い屋敷の部屋のような場所だった。

「此処は・・・何処だ・・・？」

ラクスは辺りを見渡していると、向こうから声が響いた。

「ようこそ、俺」

その声の方へ振り向くと、そこにはラクスその者がいた。

椅子に座り不気味に笑うその姿にラクスはたじろいでいると、もう一人のラクスは言う。

「ククク・・・間抜けな顔をするなよ。俺はお前なんだから・・・」

「俺だど？」

「そうさ。俺はラクス、もう一人のお前で・・・お前とベルカには狂気と呼ばれているな」

もう一人のラクスはそう言うのとラクスはそれを聞いて剣を抜こうとした・・・だが、ラクスの手には何も取る物は無かった。

「無駄だ。この空間は俺の住みか・・・言わば、俺の支配下にある。武

器を持たせないぐらいいけない」

「・・・どうするつもりだ？」

ラクスは警戒しつつそう問うと、狂気は不気味に笑って答える。

「俺の望みはただ一つ・・・人間の全滅だ」

「人間全滅だ？・・・ふざけるな」

「ふざけてないさ・・・あ、でもベルカは残したいな・・・良い女だし・・・それに、レーラと三人で暮らすのも悪くない」

狂気は不気味に笑いながらラクスにそう言うのと、ラクスは不愉快極まりないとばかりに顔を歪める。

人の伴侶や娘を狂気はまるでただ玩具を求めている様にしか聞こえないのだ。

「ベルカ達に危害は加えさせはしないぞ・・・！」

「ほお？今のお前に俺を止める力はあるのかな？」

「止めてやるさ・・・！」

ラクスはそう言つて身構えると、狂気は身構えるラクスを嘲笑う様に笑い続ける。

「別に戦いはしないぞ俺は？だがな、起きたら起きたで・・・悪夢しかないぞ？」

「・・・どう言う事だ？」

「お前はもうすぐ・・・自身の仲間達に見放される。これは運命だ。起きたらそれは始まる」

「見放される？彼奴らがそんな事はしない。何故、そう言うんだ？」

ラクスはそう言いつつも嫌な予感を覚えた。

ラクスとはとてもない不安感に襲われつつも狂気に聞くと、狂気は答える。

「簡単な事だ。もう俺が起きて剣を手に暴れまわってるからさ」

「ッ!？」

ラクスはそれを聞いて驚愕した時、目を覚ました。

ラクスは辺りを見渡すと部屋ではなく外におり、血の付いた剣を片手に立っていた。

真を求めて……

ラクスは動揺していた。

何故、寝ていた筈の自分が外にいるのか？

何故、血の付いた剣を片手に立ち尽くしているのか？

何故、目の前に片腕を押さえて出血を防ぐアクアがいるのか？

答えは簡単だった。

狂気がアクアを襲った……それが真実であり、最悪な状況だった。

アクアは出血しているか片腕を抑えてを手に対峙している。

今は、二人だけの空間の中でアクアの口が開いた。

「……何故……何故、裏切りを……！」

「(裏切りだと……!?)」

ラクスはアクアの言っている意味は分からない筈なのに意味が分かった……いや、嫌でも理解してしまった。

アクアは狂気からの攻撃を受けてアクアが裏切ったと感じたのだろうか、殺気だつて睨んでいる。

ラクスは咄嗟に否定しようとしたが、その否定の言葉が出る事はなかった。

「(声が出ないだと……!)」

ラクスは声が出ない事に戸惑っていると、狂気の声が響く。

《ああ……良い忘れてたが今がお前の時だけは声を出せない様にしてやった。流石にあれこれと言いふらされてはたまらないからならな》

「(貴様……何処まで腐ってやがる!)」

ラクスは怒りを露にして狂気にそう心の中で叫ぶが、もう何も反つてこなかった。

ラクスは声が出せないままアクアの誤解を解けずにいると、向こうからカムイが夜刀神を手に走ってきた。

「アクアさんー！」

カムイはそう叫びながらやって来ると夜刀神を構えてラクスと対峙する。

アクアは腕を傷つけられ、ラクスは血塗れの剣を持っている……つまり、嫌でもカムイはラクスがアクアを襲ったとしか見えない。

「……ラクスさん。何故、アクアさんを襲ったのですか!」

「(答えたいが、答え様がない……くそ……声さえ出れば……!)」
ラクスは悪態を突くと、走った。

今、此処で事を起こしても更に誤解を招きさらに仲間達を混乱させてしまい、誤解を解こうにも声が出せないのでは話にならない。

つまり、ラクスが今取るべき行動はマイキャツスルから逃走するしかない。

「待ってください!」

カムイは追い掛けるつもりなのか大声でラクスにそう叫ぶも、追つて来る気配はなかった。

ラクスは振り向いて確認すると、カムイは態勢を崩したアクアを介抱している。

「……すまない」

ラクスは必死に走り、自分のうまに股がるとすぐさま走った。
幸いにも目撃されず更に追っ手も無く逃走に成功したのだった。

ラクスは暫く馬を走らせた後、追っ手はいないと判断して馬から降りると岩に座った。

「(……これから、どうするれば……せめて、ベルカとレーラに一目会いたかった……)」

ラクスは自分の家族の事を考えると無性に悲しくなった。

逃走した今、もはや裏切り者として扱われているとラクスは考え、もし会う様な事があれば敵として対峙するはめになる。

ラクスはそれだけは避けたかった。

もう、家族を失う様な事は御免だからなのだ。

《ククク……何だ?尻尾巻いて逃げ出したのかよ?》

「(また貴様か!貴様のせい……)」

《家族と決別しなきゃいけないようになった・・・からか？》

狂気は悪びれずにそう言うと、ラクスは不愉快な思いでいっぱいになった。

《まあ、もう過ぎた事だ。次の段階に入ろう・・・お前はもう仲間の元には戻れない・・・これは理解してるだろ？》

「(貴様のせいだからな・・・)」

《もう引つ張るなたく・・・さて、本題だ。お前にはこれからこの透魔王国にある遺跡を巡って貰う。何故だが分かるか？》

狂気の言葉にラクスは意味が分からないと言う様に首を横に振ると、狂気は答える。

《お前・・・本当の出生を知りたくないか？》

「(本当の・・・出生・・・?)」

《そう、出生だ。お前は本当は暗夜で生まれていない・・・それだけは言える。》

「(馬鹿な・・・私は間違いなく暗夜の出身だ。そうでないと・・・)」
《暗夜の地下街にいる理由に検討がつかなくなるからか？確かにそうなるが・・・よく思い出せよ俺。俺達は・・・イレギュラーだぞ？本当は存在してはならない者・・・俺達は何故、イレギュラーとされたのか知らなくてはならない・・・いや、知る権利がある！だから、透魔の遺跡を巡って確かめる！》

狂気の言葉にラクスは信用が出来ないと感じるも、狂気の言葉に興味を抱いた。

確かに幼少期はいつの間にか暗夜の地下街で貧困生活をしていた。

家族も無く、ただ一人・・・ただ、一人でだ。

幼少のラクスが治安の悪い地下街で一人で生きていくのは酷だ、それもかなりだ。

この時、この歳になるまでラクスは誰が生みの親なのか考えた事すら考えていなかった。

だから、ラクスも知りたくなかった。

何故、狂気は透魔の遺跡を巡ぐれと言うのかラクスには理解出来ないがそこにヒントがあるなら調べるまでと考える。

「……良いだろう調べてやる。だが、アクア様の襲撃の件は忘れんぞ」

《おお、怖い怖い……じゃあ、行くとするか。さあ、進め。今、向いている方向にまっすぐだ》

ラクスは狂気の言動に警戒しつつも、導かれるままに目的地へと進む。

透魔の遺跡

ラクスは狂気に導かれる様に馬を引いて歩き続けると、目の前に巨大な遺跡を見つけ出した。

その遺跡は長い月日が流れているのか、かなり荒んでいる。

「(・・・此処か?)」

《ああ、そこだよ。確か中にヒント的な何かがあった筈だ》

「(・・・ヒント、か。まあ、中に入れば分かる事だが・・・お前の策略で罠とかは無いだろうな?)」

《おいおい、俺を信じろよ俺》

信じろと言われて信じられる訳がないラクスだが、遺跡の中にはいるしかなく、ラクスは遺跡の中へと中はボロボロで埃が舞っていた。

ラクスはそんな事お構い無しに進む。

「(・・・この透魔の遺跡に何があるんだ?)」

《此処はちよつとした実験施設みたいな物さ。此処では作りの実験が繰り返された・・・透魔王国の闇が集まる場所だ》

狂気の言葉にラクスは何処にでもそんな場所がある物だと考えた。

暗夜にもノスフェラトウ等の怪物を作る様な事もあれば、白夜にも平和を保つ為とはいえ、誘拐や暗殺を行う。

国は違えど、国には必ず何かしらの闇を抱えているとラクスは思っている。

「(そんな物に私が何の関係が・・・)」

ラクスは奥に進み切ると、そこには膨大な古い資料残されていた。

恐らく透魔がこうなってしまう前の物で、丸投げで放置されている。

「(これは・・・)」

ラクスは放置されていた資料の一部を拾い上げると、古い文字なのか透魔特有の言葉なのか分からない暗夜でも白夜でもない言葉が書かれていた。

だが、ラクスはその文字が読めた。

ラクスを見た事もない文字を読めて動揺を感じたが、それ以上に動

揺した内容が資料に書かれていた。

「(人間、兵器・・・!?)」

資料の一部に書かれた人間兵器と言う単語にラクスは激しく動揺し、頭の痛みを感じた。

ラクスは頭の痛みで体勢を崩し、息を荒げた。

暫くその状態が続いたが、ラクスは徐々に落ち着きを取り戻した。

「・・・思い出した・・・いや、思い出してしまった・・・」

ラクスは資料を再び見た時、狂気の声が響く。

《やっと思いついたか・・・なあ、俺?》

「・・・思い出してしまったじゃないか・・・分かなよ。私が・・・透魔竜ハイドラ様の守護者だと言う事を・・・」

ラクスはそう心の声で言うと、笑った。

その笑顔は狂気に満ち、他に人がいれば寒気を感じる程だ。

《楽しかったかよ?仲間ごっこは?》

「(それなりに楽しめた・・・退屈な日々、退屈な戦い、退屈な事でいっぱいだった私にとってはない)」

ラクスはそう思いながら更に笑みを深めると、狂気は愉快そうにする。

《ククク・・・さて、もうお前は元のお前に戻った。声を戻すぞ》

狂気はそう言うと、ラクスは喉に違和感を感じた。

ラクスは試しに発声した後に喉の調子を確かめた。

「はあ・・・やはり声に出して喋った方が落ち着くな」

《そうか?》

「喋れないのは不憫だ。それで?次はなにをする?」

《・・・お前の妻を捕まえに行こうか》

狂気の言葉にラクスは無表情になるが、ラクスはすぐに狂気的な笑顔になる。

「捕まえに行くんじゃないで、迎えに行くの間違いだろ?」

《抵抗されるに決まってるだろ?捕まえに行くがあつてる》

「もう、どっちでも良い・・・さて、うちの嫁を・・・」

” 迎えに、行こうか・・・；”
ラクスはそう言って、歩み始めた。

闇の司祭

ラクスの裏切り。

その噂は仲間達の耳に入った。

仲間達は怒りや不安、疑惑を持ち始め暗く何処かぎこちない雰囲気になった。

アクアは負傷はしたが大した傷ではなかった為、杖で治療をすると何時も通りに動ける様になった。

そんな中での旅にカムイは一つだけ気になる事があった。

それはあの時、何故ラクスが自身を攻撃しなかったのかと言う物で、カムイはラクス程の腕の頭脳なら裏切る際にカムイを襲い殺せば軍が崩壊する事を分かっていた筈なのだ。

だが、ラクスは戦わずに逃げた。

カムイはその事を考えつつ歩いていると、遠くに古びた遺跡の様な場所を見つけた。

「アクアさん。あれは何ですか？」

カムイの指差す方向にある遺跡をアクアは見ると、アクアは険しい顔で考え込む。

「あれは・・・分からないわ。あの場所だけは近づく事を禁じられてたから・・・」

「禁じられた？」

「ええ・・・あの場所は何かしらの実験施設みたいだけど、詳しくは王族ですら分からなかった。ただ、関わっていたのは透魔竜ハイドラとハイドラに仕える司祭だけよ」

「ハイドラ・・・！」

カムイはこの世界の真の敵の名前に反応する。

透魔竜ハイドラ。

この世界の混乱の元凶であり、カムイの敵である透魔軍を配下にする存在だ。

「どうする？禁じられていたとはいえ、今なら入る事は出来る筈だけど？」

アクアは遺跡に立ち入るかカムイに聞くと、カムイは頷く。

「・・・行つて見ましよう。ハイドラがあそこで何を研究していたのかを確かめてみましよう」

カムイはそう言うのと遺跡へと歩み始める。

そこに、何が待ち受けているのか知らないままに・・・。

カムイは遺跡の入り口の前に来ると、遺跡の入り口は不気味に口を開いていた。

カムイは遺跡の不気味な雰囲気飲み込まれそうになるも意を決する。

「・・・行きましよう」

カムイはそう言うつて遺跡に踏み入ろうとしたその時。

「ククク・・・」

何処からともなく不気味な笑い声が響き渡り、カムイは戸惑いを見せた。

「誰ですか!?!」

カムイは夜刀神を引き抜き警戒すると、心地よい金属音と共に遺跡の奥から一人の人物が現れた。

それは、カムイがよく知る人物であり、裏切りの容疑者のされた者ラクス本人だった。

「お久し振りです・・・カムイ様」

「ラクスさん・・・!?!」

まさかの再開にカムイ達は驚いていると愉快そうにラクスは笑う。

「驚きましたかな私が此処にいる事を? まあ、そんなのどうでも良いですよね・・・」

ラクスはそう言うつてカムイの前に歩み出る。

カムイは明らかに雰囲気違うラクスに警戒感を募らせていると、後ろから誰かが走ってくる。

「ラクス!」

それは、ラクスの妻であるベルカだった。

ラクスはベルカだと分かると不気味な雰囲気から物腰の柔らかい雰囲気へと変えた。

「ベルカ・・・久しぶりだな。元気にしてたか？」

ラクスは優しげにそう言うがベルカは不安な表情を崩さない。

ベルカはラクスの抱える闇を知るからこそなのかラクスの正体を見破れた。

今のラクスは本人であって本人ではない存在。

ラクスの中身が入れ替わったかの様な雰囲気にはベルカは絶望した。

「・・・まさか、貴方は」

「何だ？少し見ない内に自分の夫の顔を忘れてしまったのか？」

ラクスはベルカにゆつくりと近づこうとした時、前にカミラとルーナそしてレーラが立ちはだかった。

「・・・何ですか三人とも？」

「・・・貴方、ラクスじゃないわね？」

ラクスはカミラの言葉を聞いて微笑みを少し崩した。

「何の事ですか？」

「私の感だけど・・・貴方は元から何かしらの悩みを抱えてたんじやないかしら？。・・・それに、ラクスはもつと堅物よ。そこまで軽い性格ではなかったわ」

カミラはそう言うと、ルーナも続く様に言う。

「ええ・・・カミラ様の言う通りよ。此処まで軽い性格ではなかった・・・元の状態なら警戒させる様な事はしないで何時までも引っ込んでそうならいネガティブな性格だもの」

ルーナがそう言うと、レーラも続く。

「明らかに何時もの父さんとは違う・・・カミラ様の言う様に本当に中身が入れ替わった様に性格が違う・・・貴方は本当に、父さんなのでですか？」

レーラはそうラク스에問うように言うと、ラクスは黙ったまま三人を見つめる。

だが、すぐに不気味な微笑みを見せた。

「私は私だよ。少々、記憶を失ってただけだ……これが本当の……俺だ」

ラクスはそう言うとは何処からか兜を取り出して被ると、剣を抜いた。

カムイ達はラクスが戦闘体制に入った事を感じると、身構えた。

一新即発。

その言葉が似合う程に互いに睨み合っていると、何処からか声が響いた。

《止めておけラクス。今は戦っている暇はないぞ?》

その声はラクス以外にもカムイ達にも聞こえたのか激しい動揺が広がった。

それを気にしないと云わんばかりに動揺が広がるカムイ達の前に黒い渦の様な物が現れ、そこから羊の頭の骨の様な黒い仮面を着け、黒い法衣を着た何者かが現れた。

「何者だ!」

マークスはそう言つてジークフリートを構えると他の仲間も続いて武器を構えた。

「待て待て、慌てるんじゃない。俺はこいつを迎えに来ただけですよ」
不気味な雰囲気を出しつつカムイ達を制する様に手を軽く降つた後に優雅にお辞儀する。

「初めまして。私の名前はマフーと申します……我が主、ハイドラ様に仕える司祭です」

マフーと名乗った司祭にカムイ達はいきなりの敵勢力出現に驚く。

「ハイドラの司祭がラクスさんに何の様なのですか!」

「ラクスを迎えに来たと言っているじゃないですか?。……まあ、良いです。では、ラクス。行くでしょうか」

「待て、ベルカがまだ彼方にいる。彼女を置いていくのは嫌だぞ?」

ラクスの言葉にマフーは溜め息をついた。

「兵器が人間の女に執着するとはな……まあ、こんな結果も面白い。カムイ殿……そこにいる女を……渡す訳ないですよね?」

「当たり前です!ベルカさんを渡したりしません!それに、ラクスさ

んに何をしたのかしりませんがラクスさんも返して貰います！」

カムイはそう言うのと夜刀神を構え、マフーと対峙した。

マフーはカムイの行動にまた溜め息をつくると黒い魔導書を取り出した。

すると、魔導書を手にしたマフーの回りに不気味で威圧的なオーラが発生し、カムイ達を怯ませる。

「・・・良いでしょう。特別に相手になってあげますよ。ラクス、あの女が欲しければ全力で奴等を叩きなさい。カムイ殿以外なら生死は問いません。カムイ殿は中々の実験材料になりそうですから・・・」

「ふん、言われなくてもやってやるさ」
ラクスとマフー。

この二人の強敵を相手にカムイ達の戦いが始まった。

守護者

カムイ達はラクスとマムーの相手にした戦闘を開始した。

先陣を切ってカムイは夜刀神を片手にマムーに向かって走り、マムーは何もせずただ立っているだけだった。

「はあー！」

カムイはマムーに夜刀神を振るい誰もがマムーはこの一撃を受けたと考えた。

だが、夜刀神はまるで見えない壁に当たった様な感触と共に止められる。

「なッ!?」

「・・・その程度か」

マムーは右手をカムイに向けた時、カムイは大きく吹き飛ばされた。

カムイはリヨウマに受け止められると、マムーを見る。

マムーの回りには何もなく、刃が止められる筈がなかった。

「何で・・・」

「何故、攻撃が通じなかったのか？御答えしましょう。私は多くの研究をしてまいりました。魔法や魔力、兵器等と分野は様々でした。故に多くの研究をしてきた私にとって・・・」

マムーは左手に魔導書を持って右手をカムイ達に向ける。

「神器だろうと攻撃を弾き返す術くらい完成させられます」

マムーはそう言った瞬間、マムーの魔法が放たれた。

マムーの魔法は黒く不気味な顔の様な魔球で、それがカムイ達に一齐に向かっていく。

「ッ!?全員、避けるんだ!!!」

魔法に長けたレオンがいち早くそう指示すると全員、マムーの魔法を避けた。

すると、被弾した草地が瞬く間に枯れ果ててしまったのだ。

「ほお、避けたか。我が暗黒魔法を」

「暗黒、魔法・・・」

「闇を呼び覚まし、我が力とした私だけの魔法です。この魔法がある限り・・・私は永遠に負ける事はない」

「マムーは愛しそうに魔導書を撫でてしていると、ラクスが退屈そうに欠伸している。」

「おいおい、あんた一人で潰すつもりか？」

「だったら手伝え。正直に言えば・・・私、一人でも勝てますが、私一人だとへ貴方の妻も娘も死にますよ？」

「マムーの言葉にラクスは溜め息をつく、ゆっくりと歩いて行く。」

「ラクスは鋭い殺気をだしながらカムイ達に近づく。」

「悪く思ふなよ。これもハイドラ様やベルカの為だ・・・消え失せろ」
「ラクスはそう言つて素早い身のこなしでカムイに迫ると、剣を振るつた。」

カムイはラクスの剣を防ぐも、ラクスは防がれると同時にカムイの腹に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「ぐッ!？」

カムイは吹き飛ばされ倒れると、ラクスは隙を見逃さずに素早い動きでカムイに迫り更に痛め付けようとした。

「カムイー」

そこにヒノカが現れ、薙刀でラクスの攻撃を防ぐ。

「ラクスは今度はヒノカに斬りつけようとする、マークスが飛び出してきて攻撃を防ぐ。」

「くッー」

マークスはラクスの重い一撃に怯むと、ラクスに蹴飛ばされた。

「幸いマークスは馬上から落ちずに体勢を建て直す事ができ、身構える。」

「流石は暗夜一の騎士だ。昔、剣を交えた時とは違う」

「・・・まだ覚えていたのか？父上の気紛れで剣を交えた事を」

「マークスは苦笑いしつつラクスにそう言うと、ラクスは懐かしそうに笑う。」

「覚えていますよ・・・ちよつとした大会に出され遠慮なく貴方を倒した。騎士として手加減は相手への侮辱。故に手加減はせずに剣を交

えました」

「あの時、私自身の力不足を感じた……だが、今は違う。仲間、そして愛する者や家族いる限り私は誰にも負けん！」

マークスはそう言ってジークフリートを振るうと、ラクスは剣で防ごうとした。

しかし、神器であるジークフリートに普通の剣では歯が立たず、ラクスの剣はへし折れた。

「ちッー！」

ラクスは素早く身を引くと武器を無くした状態でマークスと対峙する。

「もはや武器はあるまい……どうするつもりだ？」

「武器が無いからと言って、戦う事はあきらめたりしない。例えば、この身が滅びようともな」

ラクスはマークスにそう言っただけの時、突然地面が光だした。

カムイ達は何が起きているのか理解できなかった。

「何ですかこれは！」

「分からないわ……！カムイ、気を付けて……！」

アクアはそう警告すると、同時に周りの全てを照らし尽くし飲み飲んだ。

過去

光に包まれたカムイ達が目を開いた時、そこはマフーとラクスの二人を相手にしていた古びた遺跡ではなく、綺麗に仕上がっているしつかりとした作りの神殿があつた。

「こ、此処は・・・？」

「父さんは？それに遺跡が新しくなってる・・・？」

「どうなっているんだ・・・!？」

カムイ達は混乱しているとカムイは後ろから足音が聞こえてり替えるとそこにはマフーが歩いてきた。

「マフー!？」

カムイ達は一齐に身構えた時、マフーは何も見えていないかの様にカムイの所まで来ると、マフーは透き通る様にカムイを抜けて行った。

「え・・・？」

カムイは困惑していると遺跡があつた場所にある神殿から一人の少年が現れた。

「お帰りなさいませ。マフー様」

「うむ・・・ご苦労様。試作品00。何事も無かつたか？」

「はい。問題ありません」

マフーはそれを聞くと神殿の中に入って行き、試作品00と呼ばれた少年も中に入る。

カムイ達はその光景に戸惑っていると、マクベスが話す。

「成る程・・・まだ仮説ですがもしかしたら此処は過去の世界やもしれませんな」

「過去、ですか・・・？」

「はい。遺跡が新しくなり、マフーが此処で研究を行う・・・仮説であっても信憑性のある仮説です」

マクベスの言葉にカムイは確かに筋の通る話だと考えた。

「カムイ。もし、そうなら・・・ラクスがどうして敵対してしまったのか探れるかもしれないわ。彼らには私達の事は見えていないのは事

実・・・確かめるなら今しかないわ」
アクアの提案にカムイは頷くと神殿の中へと足を踏み入れる。

カムイ達が神殿の中へやって来るとマフーが試作品00を側に置いて一人、机に向かっていた。

カムイが側によろうとした時、マフーが突然立ち上がる。

「くそ！何故・・・何故目覚めん！研究の為に自ら不老不死になり、産み出した完璧な理論を駆使しても目覚めんとは・・・！」

マフーは癩癩を覚えながらそう叫び散らしていると、試作品00が話す。

「落ち着いてください。血圧が上がりますよ？」

「不老不死の私が一々、血圧を気にするか馬鹿者！」

マフーの怒鳴り声が響くも試作品00は無表情のまま微動だにしない。

カムイは二人の会話を聞くより、マフーの衝撃の秘密の方がインパクトがあった。

それは不老不死。

老いる事も死ぬ事もない人が誰にも願う願望の一つ。

マフーはその不老不死であり、カムイにとっては倒すべき相手の一人が不老不死とは夢にも思わなかった。

「マフーが不老不死・・・」

「厄介な事だわ。相手が不老不死なら攻撃が通っても倒すのは不可能・・・対抗策がない限りマフーとの戦いは無謀ね・・・」

アクアがそう言い終わった時、マフーは移動を始めた。

カムイ達も着いて行くと一つの大きな部屋へと辿り着き、中心に大きなガラスの入れ物があった。

その中に少年らしき物が入っており、ベルカはそれを見て目を見開いた。

「ら、ラクス・・・!？」

「何ですって!？」

「ベルカ。それは本当なの・・・?」

カミラがそう聞くとベルカは頷いて答える。

「・・・あの中にいるラクスは私のよく知る少年時代の姿。何で・・・」
ベルカは悲痛な顔をしてラクスを見ていた時、マフーはラクスの入っているガラスの入れ物を愛しそうに撫でる。

「もうすぐ完成だと言うのに・・・お前は何て寝坊助な兵器なんだ・・・
なあ、人工兵ラクス?」

「人工兵?」

「それが、父さんが兵器と呼ばれた理由なのですか?」

人工兵と聞き慣れない言葉にカムイ達は困惑しているとマフーは資料を近くにあつた土台に置いて部屋から立ち去って行く。

カムイは近づいて資料を目にするとそこにはこう書かれていた。

く人工兵 量産計画く

透魔王国の異変に伴い兵士不足を補うべく、人工的な人間を作り兵士とする。

その第一段階として試作品00を作るも戦闘能力は乏しく、司祭マフーの秘書として遣わされる。

研究は失敗続きであったが、もうすぐ完成に至ろうとされている。

その完成形態が”人工兵 ラクス”。

格段に戦闘能力と身体能力を上げた事で最強とも呼べるが、未だに目覚めず。

以上の事が書かれていた。

カムイはそれを読んで透魔王国がどれ程のタブーを犯していたのか、どれ程の闇を抱えていたのかと思ひ知った。

他の仲間も計画書を読んで顔を歪ませる。

「なんと言う事を・・・!人の命を何だと思っているのだ・・・!」

「兵士にする為だけに産み出される人工の人間・・・反吐が出るな」

マークスとリョウマがそう吐き捨てると、アクアも計画書を読んで顔を歪ませた。

「この国が此処まで・・・！何でこんな・・・！」

「アクアさん・・・」

真実を重く受けとるアクアにカムイは心配する。

そして、カムイはガラスの入れ物の中にいるラクスを見てどうにかしたいと考えていたその時、ガラスの入れ物が突然割れ始め、中に入っていた水らしき物が出てくる。

「何ですか・・・！」

カムイは割れていくガラスの入れ物を見ると、扉が勢いよく開かれてマフーが入ってきた。

「こ、これは・・・！まさか、目覚めか！」

マフーはそう言うのと歓喜しながら近づいていく。

「・・・く、くく・・・ククク・・・あっはっはっはっはっはっ！遂に目覚めだ!!!最強の兵器が!!!あっはっはっはっはっはっ!!!」

マフーは高らかに笑っていると、ガラスの入れ物は完全に割れ砕け、中にいたラクスが出てくるのをカムイ達はただ黙って見ている事しか出来なかった。

謎は繋がる

マフーが高笑いする中、遂に入れ物は完全に割れて中からラクスが流れ出る様に出てきた。

出てきたラクスは起き上がると回りをキョロキョロとし始めるとマフーは興奮を隠しきれない様子でラクスに近づく。

「やっと・・・目覚めましたね?」

マフーはそう言いながらラクスの前に立つとラクスは不思議そうにマフーを見つめる。

「ふむ・・・言語はやはり早いですが・・・ラクス、よく聞きなさい。私はマフー。この研究所の長にして何時しかは透魔王国・・・いや、世界の王となる存在だ。貴様には私の右腕と操り人形にしてやる予定のハイドラの守護者をして貰う・・・来なさい。さっそく、貴様に戦いの術を教える」

マフーはそう言うときさつきと出ていってしまい、ラクスも寄り付きながらもマフーを追いかけて行く。

「あの人はそんな野望を持っていたなんて・・・。それよりも、ハイドラが操り人形・・・」

カムイはもう着いて行けないとばかりの表情をしていると、アクアが答える。

「もしかしたら・・・この事態は予想以上に最悪な事態かもしれないわ・・・」

「だったらよ。その最悪な事態があるんならどうしてラクスは暗夜にいたんだよ? 彼奴は幼少は地下街の貧民だったんだろ?」

ヒナタがそう聞くとカムイ達は確かにと頭を唸らせた。

ラクスはマフーに今は忠実に従っている・・・なのに何故、暗夜にいて、騎士となり、ベルカの夫として、仲間としていたのか。

まるで分からないのだ。

「・・・はー皆さん、また地面が!」

カムイがそう叫んだ瞬間、光が包み込む。

カムイ達が次に目を開けた時、そこは燃え盛る城の様な場所だった。

「此処は・・・？」

カムイが困惑しつつそう呟くと、アクアが動揺した様な声で言う。

「まさか・・・そんな!? 此処は透魔王城・・・！」

「此処が透魔王城なのですか・・・!?」

「ええ・・・でも、此処も恐らくは過去。今はハイドラが透魔兵を率いて攻め込んでいる状況かしら・・・」

アクアがそう言った時、数人の透明な兵士が小柄な少年に率いられる様に走ってくる。

ベルカは少年の姿を見て、動揺を覚えた声で言う。

「ラクス・・・!?」

少年ラクスは軽装の鎧に身を包み、髪も鎧も顔すらも血染めにしており、誰がどう見ても殺しをしているとしか見えなかった。

カムイ達はラクスを見ていた時、ラクスは横にあつた大きな扉を開け放つて中に入った。

カムイ達も続いて行くとそこは玉座の間で、玉座の回りには生きている透魔兵数人と玉座に座る王らしき男が座っていた。

「やっと見つけたよ・・・透魔王。大人しくその首を渡してくれませんか？」

「・・・貴様の様な小わっぱに私の首は渡さん。欲しければ力付くで取れば良からう」

「・・・そうえば、貴方の妻のシエンメイと弟君の妻であるミコトは何処へ隠しましたか？彼らも殺して傀儡にしたいとハイドラ様が仰せつかっております」

「私が身内を引き渡す様な事をすると思つていいのか？なら、私は二人の行方を喋るつもりはないと言わせて貰う！貴様達の様な者にこれ以上、この国を荒らさせはせん！」

透魔王はそう言つて腰の剣を引き抜いた。

その剣は神聖な雰囲気醸し出していた。

「透魔剣ティソナですか・・・またとんでもない剣を取り出してきてくれた物です」

「透魔に伝わるこの神器の剣・・・貴様は越えられるか？」

「越えてやりますよ。越えられなければ兵器として役割が果たせません」

ラクスはそう言うのと血塗れの剣を構えると、一気に突っ込んだ。

突っ込んでくるラクスを止めようと兵士は応戦するが、ラクスの素早い動きで瞬く間に斬り捨てられると、透魔王へ斬り掛かる。

透魔王はティソナでラクスの攻撃を防ぐも、ラクスは連続で攻撃を加え、透魔王が劣性に立たされる。

「ふん、神器を使いこなせていないではありませんか。この勝負・・・見えましたね」

「ぬかせ!!!」

透魔王はそう言うてティソナを振るうと、ラクスは簡単に弾き、透瞬く間にの首を切り裂いた。

透魔王の首は宙を飛び、地面に転がり落ちるとラクスは戦いが完全に終わったと理解した。

「まさか、ラクス・・・!」

カムイはラクスの透魔王殺害を信じられずにいると、そこに試作品00が入ってきた。

「仕留めましたか？」

「終わりました。後はハイドラ様やマフー様に報告をすれば完了です」

「そうですか・・・なら」

試作品00はそう言うのと、ラクスの腹に何かを押し当てると、ラク스에電流が走った。

ラクスは堪らず倒れると、試作品00はラク스에呟く様に話す。

「もうこれ以上の犠牲は出す訳にはいきません・・・私は望まない生を受け、望まない殺戮を強いられる。私はどうなっても構いません、が・・・せめて、貴方には全うに生きて欲しい。同じ苦しみを知る貴

方に・・・自己満足ですが、貴方の記憶を消して、透魔から脱出させます。もし・・・記憶が戻ったら・・・必ず」

”誓い通りマフーを倒してください”

試作品00はそう言うと言った杖を振りかざした。

「ま、待って・・・」

何かを言いかけたラクスは魔方陣の中に消えてしまい、残された試作品00はこう呟いた。

「・・・さよなら、僕の優しい友達。信じてるから」

試作品00がそう呟き終えた瞬間、試作品00は黒い闇に包まれ消えさった。

そこに魔道書を手にしたマフーが現れた。

「裏切り者め・・・！最強の手駒を私から奪うとは・・・！この、くそがああああああああ!!!」

マフーは悔しそうにそう叫び、回りを吹き飛ばしていく。

その光景が終わると次の場所へとやって来た。

転移したラクスが目を覚ました場所は暗夜の地下街の隅で、ラクスは起き上がると頭を押さえる。

「・・・俺は、何をしていたんだ？思い出せない・・・何なんだ？」

ラクスは困惑しているとそこへ一人の女性がやって来た。

「あら、何してるのかしら坊や？そんな物騒な姿をして？」

「・・・あんた、誰？」

ラクスの言葉に女性が少し不機嫌な顔をする。

「人に名前を聞く時は自分から名にならないといけないのに・・・まあ、良いわ。私はエリザ。褒められた事じゃないけど娼婦をしているわ。坊やは？」

「・・・ラクス」

ラクスは自身の覚えていると思える名前を出すと、エリザは名前を聞いて微笑む。

「良い名前ね。ねえ、身寄りが無いなら私と来ない？もう、娼婦なんて懲り懲りだわ。普通の生活をする為には一緒に働いてくれる子が欲しいのよ。勿論、私が親として貴方を預かるし、貴方も行き先もない

からお互い利害はあるわ」

エリザはそう言うラクスも身寄りが無い事を自覚していた為、頷くとエリザは嬉しそうに笑う。

「なら、交渉成立ねーさあ、さっさと陰気臭い娼婦街を抜け出すわよ。着いてらっしゃい」

エリザの言葉にラクスは同調する様に着いていった。

そこでまた光に包まれてカムイ達は次に来たのは広い平原の広がる場所だった。

「・・・此処は？」

「此処は世界の狭間だよ」

カムイがそう呟いた時、目の前に一人の青年が現れたり

その青年は透魔城で死んだと思われた試作品00だった。

狂気の中へ……

広い草原広がる中、カムイ達と過去に死んだ筈の試作品00と対峙していた。

過去の存在とはいえ、試作品00はマフーの部下である為、油断出来ずにいると試作品00は話す。

「そこまで警戒しなくても何もしません。むしろ、そんなに警戒しないで下さい」

試作品00はオドオドしながらそう言うと、咳払いして挨拶する。

「もうお分かりかも知れませんが僕は試作品00。貴方達に僕の友人の過去を見せた張本人です」

試作品00の流暢な挨拶に危険は無いとカムイ達は判断すると少し警戒を解く。

試作品00は話を続ける。

「さて……何故、僕がラクスの過去を見せたか分かりますか？」

「……いいえ」

カムイは答えると試作品00は話す。

「簡単な事です。彼の真実を知っておいて欲しかった事と、貴方方が戦う事になるマフーがどの様な存在なのかを知らせる為だったので。僕はマフーの試作品の人工兵……出来損ないです。それ故にマフーからの警戒もなく此処までこれました」

「何故知らせようとしたのですか？最後にはマフーに殺されていた筈です」

「確かに死にました。ですが、僕は特殊な方法で魂を残してこの時が来るのを待っていたのです。暗黒の司祭マフーを倒してくれる人、ラクスを狂気から解放してくれる人が来るのを」

試作品00はそう言いながら手を振りかざすと回りの風景が変わった。

広い草原から古びた屋敷一室の様な所でそこではラクスが無数の鎖に縛られていた。

ラクスは気力を失ったかの様に動かず、ただ動かない。

「ラクス!?!」

ベルカが叫んでラクスに触れようとするも、透き通って触れる事が出来なかった。

「無理だよ。今見せてるのは幻・・・場所を移動している訳じゃないんだ。それに、そこにいるラクスは彼の善意。狂気と自身の奥底の記憶に負けて縛られてしまったんだ」

「どうすれば彼の所にいけるの!教えて!」

ベルカは必死に試作品00に問うと、試作品00は答える。

「二つだけ、方法がある。ラクスの心の中に入るんだ。だけど危険だよ? なんとたつてラクスの狂気が君達が来るのを待ち構えているんだから」

「狂気が・・・!」

ベルカは狂気と聞いて少し身を震わす。

カムイ達は狂気が何なのか分からないでいると、それを察した試作品00が答える。

「ラクスの狂気・・・それは、彼の悪意。マフーが植え付けた拒絶すべき存在です。この狂気によって、ラクスは苦しめられ続けてきました。狂気が一度現れれば・・・貴殿方の仲間すら傷つける程に理性を失う」

カムイは説明の中に思い当たる事があった。

それはラクスがまるで理性を無くしたかの様にアクアを襲った事だった。

カムイが見たラクスは狂気だと分かった。

「それでも構わない。私一人でも・・・」

ベルカは狂気が潜むと警告されてもなお、ラクスの元へ行こうとする。

そのベルカの隣にレーラが立った。

「私も行くわ。母さんだけ行かせない・・・父さんに今まで母さんを泣かせた事を問い詰めなきや!」

「レーラ・・・」

「なら、私達も行くこうかしら?」

そこにレーラに続いてカミラとルーナが立った。

「カミラ様……！」

「私も貴方を泣かせた旦那さんを問い詰めたいのよ。そうじゃないと彼、立ち直らないでしょ？」

「私だって同じよ。大切な仲間が死地に行こうって言うなら私だって行く覚悟はあるわ！」

二人の言葉にカムイ達も続いて立っていく。

その姿を見た試作品00はカムイ達に向けて微笑む。

「……貴殿方ならラクスを助けられるかもしれないね……では、準備は出来てますか？」

「はい……！」

試作品00の問いに答えたカムイは力強く頷く。

試作品00は両腕を大きく開いて魔方阵を展開した。

魔方阵を展開した後、試作品00は一つの錆び付いた古い剣をカムイに渡した。

「もし、彼が立ち直れたら……この剣を渡してください。きっと、彼の守りとなり、力となってくれる筈です」

「分かりました。では、行つてきます」

カムイ達は魔方阵の中へと入ると、消えていった。

その姿を見送った試作品00の体は徐々に薄れていき、消えかけていた。

「力を使いすぎましたか……けれど、本望……ですね……ラクス……良い、仲間を手に入れましたね……」

試作品00はそう言うのと完全に消えてしまった。

ジョーカーがそう答えると、狂気はレーラと向き合う形でいた。

「父さん……」

「ほお……お前は俺を狂気ではなく、父と呼ぶのか？ベルカすら拒絶したのに……」

「貴方は父さんの心の一部です。父さんである事は変わる事はありません」

レーラの言葉に狂気は暫く無言でいたが、指を鳴らすと椅子が出てきた。

狂気は兜を取るとラクスと同じ顔で微笑んでいる。

「立ち話は疲れる。座れ」

ラクスはそう微笑みながら言うと、レーラは警戒しつつも座った。

「……何故、父さんの人格を乗っ取ろうとしているのですか？貴方は表に出てきてはいけない存在の筈です。何故？」

「簡単な事だ。俺が奴自身が弱り始めたと感じたからだ。彼奴はメンタルが極端に弱いだろう？だから俺が交代する時が来たって訳だ。弱り果てた人格を休ませる……それがどれだけ拒絶されようともな」

「そこまで急速に弱り果てる物なのですか？」

「まあ、俺が半分嵌めた様な物だが、自分の秘密を知って塞ぎ混んだよ。自分自身が完全な人間ではなかった……それだけでも大きなダメージになるし、何より義理とは言え父殺しを行い、主君殺しを行い、更に裏切りの汚名の三パレードだ。弱らない方がおかしい」

狂気はそう言って微笑む。

「レーラ。結局の所、奴を解放するつもりか？奴は人間ではなく……化け物だぞ？」

「はい。父さんは大切な家族です……例え化け物だとしても、その血を持つ私だって同じ事。父さんだけの悩みにしたりしません」

レーラの真っ直ぐとした言葉に狂気は溜め息をつくど、左の壁に扉を出した。

「なら、お前とカムイ達を試してやろう……奴の今までの殺しの数々を見せてやる。奴の殺戮にはお前達の親族も含まれている。心して行ってこい」

狂気はそう言って煙の様に消え去った。

残されたカムイ達は左の扉の前に近づく。

「どうするの？カムイ姉さん」

レオンの問いにカムイは無言のままノブを手にした、

レオンはそれを見て溜め息をついた。

「分かったよ。行こう・・・何があるのか分からないけどね」

レオンがそう言い終わると、カムイはノブを回すと扉を開けた。

ラクスの血道

カムイ達が扉を抜けた場所はそこは暗夜王城の中だった。

「え……？ 此処は暗夜王城……」

カムイは戸惑っていると向こうから激しい金属音が響いていた。

カムイ達はその音に導かれる様にそこへ行くと、そこは玉座の間で、ラクスがカムイと戦っていた。

「な、何故私とラクスさんが戦っているのですか!？」

「簡単な事だ」

カムイは振り向くとそこにはラクスの姿をした狂気が立っていた。

「今見ているのは平行世界でのラクスだ。言っても、ラクス自身は同じ存在だがな……」

狂気はそう言った時、ラクスとカムイの戦いの決着が着いた。

ラクスはトドメを刺そうとするも、逆にカムイに夜刀神で貫かれた。

ラクスは力無く倒れ、カムイはラクスの元に駆け寄って叫ぶがラクスは命を落とした。

それを見たカムイ達は動揺を露にしていると、狂気は言う。

「奴は平行世界を渡っては繰り返し戦い続けている。こんな風に敵対して戦死したり、仲間として立ち向かったり、あるいは仲間にならず暗夜に謀反を働く様な事もあった」

「あのラクスが謀反だと……!」

マークスはそう言うのと狂気は笑う。

「まあ、その反応が正しい。外側の方から見ればラクスは真面目でガロンに対して忠誠心が厚かった……だが、内側ではガロンに対してとてつもない不安と不信感を抱いていたんだよ。その結果がこれだ」
狂気はそう言うとう場所は変わり今度は白夜王城の城下に出た。

そこでは暗夜軍の兵士と思われる大軍が同じ暗夜軍を襲っていたのだ。

「これは……! 何故、暗夜軍が白夜に……それも同じ暗夜軍を襲って……」

「これは暗夜にカムイが着いた結果だ。貴方の戦術で白夜軍を押しつけていき、遂には白夜王城をラクスが陥落させた」

「ラクスさんが・・・」

「だが、それはラクスの罠でガロン一党を大軍の利を活かせない白夜王城に誘い込み、クーデターを起こす為のね」

狂気はそう言っていると、ラクスは外のガロン側の暗夜軍を蹴散らすと遂に白夜王城へと足を踏み入れていく。

「奴は今見せた世界以外にも血を流し続けた。主を、友を、家族を、そして愛する者まで手に掛け血の道を作り続けた。お前達がやろうとしているのは奴を苦しみの中の血道にまた引き摺り込む行為だ。それでも・・・奴に会って連れ戻すか？」

狂気はそう言つてカムイ達に問う。

カムイ達の仲間として、ベルカの夫として、レーラの父として平然と立ち続けたラクスの今まで受けてきた苦しみを知り、カムイは戸惑った。

ラクスを連れ戻せばラクスはまた繰り返す事になるかもしれない・・・そんな考えがカムイの中を過った時、レーラが前に出た。

「連れ戻します・・・」

「レーラさん!？」

「分かってます。ですが、必ず繰り返すとは限りません。何故なら狂気が見せた父さんの繰り返しの中でのこの透魔にいる世界だけは何も出てこなかった。しかも、この世界で私達は真実を聞きました。もしかしたら・・・今回のこの世界は初めてのみちではないですか？」

レーラの指摘にカムイ達は納得した。

確かに白夜や暗夜での未来しか写っていないなかった。

透魔だけが写っておらず、ましてや真実が語られている・・・それだけでもあり得る話だ。

狂気は目を見開いてレーラを見てから答える。

「あの一瞬をよく確認したな・・・確かに透魔だけは行かなかった。カムイがその道に行く所か黒幕にすら辿り着いていなかったせいだな」
「私が？」

「簡単には言えば、カムイ。お前の考え方次第で未来は変わってしま
う。下手したら・・・お前は兄妹を殺す事だっであつた」

狂気の言葉にカムイはゾツとすると、狂気は続ける。

「カムイの道はラクスの道、ラクスはカムイの決定次第で運命が変
わっていったんだ。まあ、結局此処まで来たんだがな」

狂気はそう言つて両開きの扉を出した。

「・・・行けよ。お前が連れ戻しますと望むなら・・・この先にいるあ
いつの鎖を取り外してやれ」

「・・・父さん」

「馬鹿か。お前の父さんはあつちだろ?・・・これだけは言うぞレー
ラ。・・・幸せにな」

狂気はそう言つて黒い煙と共に姿を消してしまった。

何故、狂気はレーラの前で父親としての優しさを出し、ラクスへの
道を出したのかカムイ達には分からなかった。

「・・・開けますよ」

レーラはそう言つて両開きの扉を開けた。

カムイ達は中へ入るとそこには鎖が多く巻き付けられ弱りきつた
ラクスが目の前にいた。

影を断つ

レーラは自分の父ラクスを確認するとラクスの元に歩みよろうとする。

「来たか愚か者共……」

レーラはそれを聞いた瞬間、鋭い殺気を感じとり素早く後ろに飛ぶとレーラのいた場所には黒い影が剣突き立てていた。

「ふん、外したか……」

「……貴方は誰？」

「私は私だ。名前など無いただの兵器だ」

レーラはそれを聞いて試作品00に見せられた光景と言葉を思い出した。

マフーの産み出した兵器、そして植え付けられた狂気……その意味がレーラの頭の中で繋がった。

「貴方が……狂気の根元ですか」

「そうだ。私はラクスであり、狂気であり、そしてこの世を憎む血に濡れし者だ。我が娘よ」

「貴方に娘と呼ばれる筋合いはないわ！」

レーラは剣を抜くと影に向ける。

カムイ達もそれぞれの獲物の取ると、影は鼻で笑う。

「私に挑むか？やれやれ……二人のラクスに邪魔をされたと思えば次はこれか……」

影はそう言うとう手を翳した。

すると、数人の兵士の様な影が姿を現し、カムイ達に武器を向けた。

「貴様らは……此処で死ぬが良い」

「私達は負けません！父さんを返して貰います！」

レーラはそう叫ぶと影の兵士達に向かって行く。

影の兵士達も一斉にカムイ達に向かって行き、乱戦になった。

レーラは剣で影の兵士達を次々と尻ぎ払って進む中、後ろから影の兵士がレーラを襲う。

だが、レーラを襲った影の兵士はベルカの手斧によって倒れた。

「母さん！」

「レーラ、無茶をしないで。ラクスを取り戻したいのは貴方だけじゃないわ。私も取り返したい……仲間達もう思ってる。貴方は一人じゃないのよ」

「……すみません。私とした事が頭に血が上ってました。もう、無茶はしません」

レーラはそう言うのと剣を構え、影の兵士を倒して行く。

レーラは奥に進むもうとして行くが、影の兵士が次々と立ちはだかり中々進めずにいた。

「レーラ！」

立ち往生していたレーラの元に無二の親友であるゾフィーとマトイが駆け付けて来た。

「ゾフィーさん！マトイさん！」

「此処は私達に任せて先に進んで！」

「ラクスさんは貴方を待っています……早く行ってください」

ゾフィーとマトイはそう言うのと武器を構え、影の兵士を倒して道を開いた。

レーラは開けられた道を見逃さずに突破すると、そこには影が剣を手に待ち構えていた。

「ほお、此処まで来たか」

「……父さんを返して貰います。そこを退いて下さい」

「嫌だと言ったら？」

影の言葉を聞いてレーラは剣を向け、決意のある瞳で影言う。

「力強くでも押し通ります」

「……ふん、良いだろう。相手になってやる。……来い、我が娘よ」

影はそう言って剣を構えた。

【イメージBGM 漆黒の騎士戦】

レーラは先手必勝とはかりに影に攻撃すると、影は簡単に攻撃を防ぎレーラの腹を左手で殴った。

レーラは唾を吐き出して怯むと、影はすかさずレーラを掴むと前に投げつけ、壁に当てた。

レーラは苦しみのあまり咳き込んでいると、影が剣を振り下ろす直前であつたのに気付कि、横に飛んで避けた。

「ほお、すぐに死ぬと思つたのだから」

「くっ……」

レーラは立ち上がると剣を構え、影に斬り掛かる。

影はレーラの攻撃を次々と防いでいき、明らかに実力差がありすぎるのは明らかだつた。

「どうした？その程度なら失望したぞ……私の血を引いているお前なら簡単に越えてくるとおもつていたんだがな……」

「……うるさい。私は貴方に必ず勝ちます……父さんを取り返して見せます……」

レーラはそう言うラクスと同じ位の強い殺気を出し、影に対峙する。

「ほお……そこは私似か……」

影はそう言つて剣を構えた時、向こうからカムイが走つてきた。

「レーラさん！これをラクスさんに！」

カムイはそう言つて試作品00が渡した錆びた剣を投げた。

レーラはそれを見ると飛んできた錆びた剣を手にした時、錆びた剣が突然、光だした。

「な、何ですか!？」

「……まさか、それは！」

影の動揺する声が聞こえた瞬間、錆びた剣は錆が取れていき、錆びた剣は白銀の輝きを持つ剣となつた。

「透魔剣ティソナ……!」

影がそう言うと、レーラはティソナを見る。

「これが……ティソナ……」

レーラはティソナを握っていると力がみなぎつて来る感覚を覚えていると、影が斬り掛かつてきた。

レーラは影の攻撃を防ぐと影を斬りつけ、トドメに胸を突き刺した。

「ば……かな……!ティソナが……お前をみと、めるなど……」

！」

影はそう言つて消えていき、影の兵士達も消え去った。

レーラはそれを確認した後、ラクスの元に向かつて歩き、前に立つた。

「父さん・・・迎えに来ましたよ」

レーラは屈んでそう微笑みながら言うと、ラクスはレーラの方を見た。

「レーラ・・・まさか、これは幻か？それともあの世への迎えか？」

「いいえ。幻でも況してやあの世からの迎えでもありません・・・父さん。一緒に帰りましょう。仲間や母さん達が待っています」

レーラはそう言うと、ラクスは首を横に振る。

「駄目だ・・・私は罪を犯し過ぎた。償わなければならない・・・」

「もう、罪を償わなくても良いです。お願いです・・・一緒に帰りましょう・・・父さん」

レーラはそう言つて涙を流した。

ラクスはレーラの涙を見て、戸惑っていると向こうからベルカがやって来る。

「ラクス・・・」

「ベルカ・・・」

「ラクス。もう、良いでしょ？これ以上・・・私達を泣かせる様な事はしないで・・・お願い・・・」

ベルカがそう言うのと仲間達も次々とやって来た。

ラクスは仲間達の姿を見て、うつ向いた時、縛っていた鎖が突如、外れていきラクスを解放した。

「・・・私も帰りたい。もう、お前達から離れたくはない・・・」

「父さん・・・父さん！」

レーラはそう叫んでラクスの胸元に飛び込むと、泣き叫んだ。

ベルカも泣いており、ラクスは二人を愛しく思った。

一通り、再開を喜んだ後、カムイ達は元の世界へと戻るとそこにはマフーはおらず、ただ荒れた遺跡前の戦場だった。

ラクスは再び仲間として戦う事を決意し、カムイに進言する。

「カムイ様。マフーはご存じだと思いますが普通の手段では倒せません。奴は不老不死ではありませんが・・・唯一の弱点があります」

「唯一の弱点？」

「はい・・・それはレーラの剣となったティソナです」

ラクスはそう言うと、レーラは疑問を浮かべて鞆に納められているティソナを見た。

「父さん。この剣は父さんの物では？」

「いや、ティソナはお前を主と認めた。私の物ではない・・・もう、お前の物だ」

ラクスはそう言うと再びカムイ方を見る。

「透魔剣ティソナは同じ神器である夜刀神と同じ様に新たに力を得れば強い剣となります。その力の得る方法は星竜の力が必要になって来るでしょう」

「星竜とは・・・リリスさんですか？」

カムイがそう聞くとラクスは首を横に振る。

「いや、星竜は他にいる・・・その竜の名は星竜モロー。モローが力を貸してくれなければマフーを打ち倒す事は出来ないだろう」

「星竜モロー・・・でも、何処にいるのですか？」

「星竜モローは星界の神殿にいる・・・そう記憶があるが」

ラクスは疑問を浮かべる様に表情を歪めた後、カムイに言う。

「何故、自分にこの記憶があるのか分からない。情報元が不明なんだ」

「つまり、信頼できるか分からないと言う事か？」

ギウンターがそう聞くとラクスは頷く。

「どちらにしろ行くかはカムイ様が決めてくれ。私は、もうこれ以上の危険をカムイ様達に押し付けたくない」

ラクスはそう言うとカムイは微笑んで答えた。

「行きましよう。ラクスさんは私達の仲間です。貴方の言葉なら私たちは信用できます」

カムイはそう言ったのけると他の仲間達も賛同する。

「・・・ありがとう。星竜の神殿はリリスの力が無ければ行けない。先ずはリリスの元に向かおう」

ラクスはそう言うとかムイ達はさっそく星界にあるマイキャツスルに行き、リリスの元に向かうのだった。

日常番外編：レーラの想い人

マイキャツスル。

そこでは裏切りの疑いを掛けられた事件以来、不在だったラクスが帰ってきた時だった。

ラクスは仲間の為に不備が無いように見回っていると、レーラがうきうきとした様子で歩いて行く姿を目撃した。

「レーラ?」

ラクスはレーラを着けて行くと、そこにはマクベスの息子マクラスがおり、レーラはマクラスの元に行くと言いつつ楽しげに会話を始めた。

マクラスはレーラの会話を素っ気なく返しているが、何処か楽しそうにしている事から溺愛父の感性がラクスの心の底から沸き出してきた。

「あの野郎・・・散々目に掛けてやったのに家の娘に手を出すとは・・・！」

ラクスは近くの店の物陰に隠れながら店の壁を掴んでいるとヒビが入った。

ラクスは誰が見ても分かる程の殺気を出し、マクラスを睨み付ける。

マクラスはその殺気に気付き、殺気のする方向を見るとラクスが般若の形相でマクラスを睨み、マクラスを震え上がらせ、レーラに至っては全く気が付いていない。

「どうしましたマクラス?」

「え、いや・・・」

マクラスはレーラにラクスの事を伝えようとした時、ラクスが口パクでマクラスに伝えてきた。

”喋ったらぶつ殺すと”

マクラスはそれを見て、顔を青ざめるとレーラは心配そうに見つめる。

「本当に大丈夫ですか？顔が真っ青になってますよ？」

「いや・・・大丈夫だ・・・」

マクラスはレーラに目を反らしてそう言うと、レーラも流石に何かおかしいと気付き、マクラスが見ていた方に振り替えるとそこには誰もいなかった。

マイキャツスルにあるラクス達一家が住む部屋でベルカが夕飯の支度をしようとしていた時、部屋の扉が勢いよく開かれてラクスが入ってきた。

「大変だベルカ！レーラに・・・レーラに想い人が出来てた！」

「・・・え？」

ベルカは困惑していると、ラクスはベルカに抱き付いて泣き始めた。

「くそ……散々目に掛けてやったのにマクラスの奴がレーラに手を出していたんだよ！絶対ぶっ殺してやる！」

ラクスの言動にベルカは呆れつつも娘に想い人が出来た事のショックを受けていラク스에伝える。

「何言ってるのよ。あの子は元からマクラスの事が好きなのよ……」

「何?!何時だ……何時なんだ!」

「……確か、あの子達が出会って間もない時に貴方がいなくなってレーラが落ち込んでいるのをマクラスが慰めたりしてたわ。もしかしたら、それが切っ掛けかもしれないわ」

ラクスはそれを聞いて項垂れた。

自分の不徳でそうなったなら文句など言える訳がない……が、やはり愛娘に想い人が出来ているのはラクスにとってはとても嫌な物だった。

「ベルカ……」

「はあ……泣かないで。あの子も何時までも子供じゃないの。現実を受け止めなさい」

ベルカにそう咎められ、ラクスは余計に悲しくなった。

レールaside

私はとても気分が良いです。

何故ならマクラスさんと今日、沢山話をしたのです。

きです好きです好きです。

本当に、大好きです……。

絶対に逃がしませんよ……マクラスさん……。

side終了

その頃。

「ヘックシユン！……風邪か？何だか寒気が走っただけ……」

マクラスは嫌な予感に当てられていた。

星竜の神殿

カムイ達は準備を終え、リリスの神殿に来るとリリスは全てを知っていたかの様に待っていた。

まるで全てを見ていたと言わんばかりにカムイに問う。

「・・・その表情からすると、全てをお知りになられたのですね」

「はい・・・」

カムイは答えるとリリスは何も言わず、地面に光の渦を召喚し、カムイ達の方へ向いた。

「此処から先は私にも行けませんし、後戻りも出来ません。本当によろしいですか？」

「構いません。真の敵を・・・マフーを倒す為なら」

「・・・分かりました。では、この渦の中にお入りください。此処から星竜の神殿に行けますが、星竜の神殿には試練が待ち構えています。下手すると命に掛かる様な・・・命を落とさず、無事に戻ってきてください」

リリスはそれだけを言うと、カムイ達は渦の中に入って行く。

カムイ達が目を開くとそこは、草木や水が流れる綺麗な建物の中だった。

カムイ達は回りをみていると、ラクスは説明する。

「此処が星竜の神殿だ」

「此処が・・・星竜の神殿」

カムイはそう呟くと、ラクスは前を見て身構えた。

「気を付けろ。前を見てくれ、既に試練は始まっている様だ・・・」

カムイは前を見ると、遠くから武装した兵士達がカムイ達にゆっくりと近づいて来る。

ラクスは剣を抜くと、カムイ達も得物を手に戦闘体制に入る。

兵士達はある程度近づくと、一斉に武器を構えて突進を仕掛けてき

た。

カムイ達も応戦し、激しい乱戦に突入する。

「はあー！」

カムイ達が戦う中、ラクスはいつも以上の剣技で兵士を尻ぎ払い突き進む。

そんなラクスに仲間達は啞然とする。

「ラクスって、あんなに力を出してだっけ？」

カザハナが戦いながらそう言えと、リヨウマも戦いながら喋る。

「いや、ラクスはあそこまで力を出していなかった。もしかしたら、あの時の影響で強くなったかまたは今まで加減していたとしか思えん」「力を付けたなら兎も角、加減をしていたのなら・・・かなり恐ろしいものです」

リヨウマの言葉にアサマはそう言っていると、傷ついた仲間を回復したりしてサポートする。

ラクスは剣を振り、進むと敵の大將らしき兵士を見つけた。

「貴様を倒せば、モローの元に行けるのか？」

ラクスの問いに兵士は答える様に武器を構えると、ラクスも剣を構えた。

「そうか・・・なら、押し通る！」

ラクスはそう言つて兵士に向かって行くと、兵士もラクスに向かっていく。

兵士はラクスに斬り掛かるも、ラクスは防ぎ反撃を受けて態勢を崩し、ラクスにトドメを刺された。

ラクスは敵の大將を倒すと、今までいた敵がいなくなり、辺りは静けさが漂う。

ラクスはモローがいるとされる扉の前に立っているとカムイ達もやって来る。

「この先に星竜モローがいるのですか？」

「・・・そこまでは分からない。ですが、行くし進むしかないです」ラクスはそう言っていると扉に手を掛けて開け放つ。

カムイ達は奥に入ると、奥には玉座の様な白い椅子に座る老人が出

迎える。

「ようやく来たか・・・待ちわびたぞ。司祭の影よ・・・それと、選ばれし英雄達よ」

老人はそう言うと、ラクスは一つの単語に疑問に思った。

「司祭の影・・・？何だそれは？」

「お前の事だラクスよ・・・お前は闇に堕ちた司祭マフーの産み出した影。いや、息子とでも呼べば分かりやすいか」

老人の言葉にラクスは不快になる。

マフーによつて狂気を植え付けられ、殺し回り、世界を何度も繰り返した事を忘れられず、マフーの事をラクスは憎んでいた。

「奴は俺の親ではない・・・！」

「だが、お前は奴の一部から産まれた。一人の人間から人間を作る禁句をな・・・」

老人は言葉にラクスは苛立ちを覚えるも、ラクスの状態に気付いたカムイが間に入る様に老人に問う。

「あの、話の間に入るようですよ。貴方は星竜モロー様ですか？」

「そうだ。わしがモローだ・・・お主達が来た理由は分かっている。奴を・・・マフーを討ち果たす為の力を欲しているのだな？」

「はい。マフーは不老不死で、通常の攻撃では歯が立ちませんでした・・・マフーがこの戦いの元凶と言うのなら戦いは避けられないと私達は思い、此処にマフーを倒す術を求めに来ました」

カムイの言葉にモローは微笑みを浮かべる。

「やはりか。確かにマフーは多くの禁句を犯し、不老不死にもなった大罪人だ。奴を野放しにはできん・・・お前達にマフーを討つ力として、星々の光の力を与える。各、かみ器を前に掲げてくれ」

モローの言葉にカムイ、リヨウマ、マークス、レオン、レーラは其々の神討つを掲げた。

モローはそれを見て困惑し、ラクスの方を見る。

「何をしておるラクス？お主のディアブロスも掲げんか」

「ディアブロスを・・・？だが、これは神器ではなく宝剣。それに、此

処まで折れていては……」

ラクスは折れたディアブロスをモローに見せると、モローは笑った。

「心配はいらん。さあ、ディアブロスを掲げよ」

ラクスは困惑しつつもディアブロスを掲げるとモローは目を瞑り、両手を大きく掲げた。

「大いなる空に広がる星々よ。その光をこの世界に蔓延る闇から解放する為に光を分けたまえ……闇を討つ力を彼らの神器に宿したまえ……」

モローはそう祈ると六人の武器が光輝き、力がみなぎってきた。

ラクスのディアブロスに至っては刃が元の姿に戻っている。

「ディアブロスが……!」

「その宝剣の正体……それは、透魔王家に伝わるもう一つの神器。神剣ディアブロスだ」

「神剣……ディアブロス……」

ラクスはディアブロスをしっかりと持つと力が格段に上がった気がした。

カムイ達も力を得た事に驚いている。

「これで、マフーの不老不死や闇の魔法にも対抗出来よう……後はお前達次第だ」

「ありがとうございます。モロー様」

カムイは礼を言うと、モローは微笑みながら片手を上げる。

「さあ、行くが良い……残念だが星界には戻せん。力を使い過ぎてしまった……だが、お前達を透魔王城の前に飛ばせる。そこから戦いの時だ」

「はー!」

カムイはそう返事をする、仲間達と共に消えた。

「……必ず勝ってくれ。あやつの為にもな」

モローはそう言うと、ゆっくりと目を閉じて眠りについた様に静かに座る。

最初の戦い

カムイ達はマフーがいるとされる透魔王城に入ると、中は薄暗くやすれきつた後がしつかりと残っていた。

カムイ達は城内を歩き、玉座の間を目指して歩くが何回も曲がり角を曲がる等と複雑な城内に悪戦苦闘していた。

「まるで迷路みたいですよ．．．下手に歩くと迷ってしまいます」

「この城は特殊だからな。攻めていた際にも色々と苦労させられたものだ．．．まるで迷路の様に入り組み、入り込んだ者を迷わす迷宮だ」

「そんなに入り組んだ城なのですか？」

「はい．．．マフーとハイドラがこの城を制圧して支配下に置いてあるのなら．．．用心しなければ此方の命に関わるでしょう」

ラクスがそう言うと、カムイは気を引き閉める。

カムイ達が先を進んでいると、目異様な雰囲気立ち込め、目の前に水の波紋の様な揺らぎが巻き起こった。

「．．．来るぞ」

ラクスがそう言ってディアブロスを抜くと、仲間達も武器を構える。

暫くして、揺らぐ波紋から人が現れ、短い水色の髪で何処かアクアと似たような雰囲気を出す女が現れた。

「あら、もう此処まで来たのね？」

「お母様．．．！」

アクアがそう言うとラクスは驚いき、シエンメイを見る。

「シエンメイ、様か？」

「知っているのラクス？」

「それはそうよ。暗夜王国でまだ騎士として認められたばかりの貴方にいつも助けられてきたのも。互いに仲が良くなってしまったのよ」

シエンメイはそう言って懐かしむ様に笑うと、ラクスは惑わされなうと言わんばかりにディアブロスを構える。

「それは昔の話．．．今は敵として見えている以上、情を動かそうとしても無駄ですよ」

「それもそうよね・・・貴方も伊達に側近をやつてる訳ではないでしょうね・・・では、始めましょうか。この城内での最初の戦いを」
シエンメイはそう言うと言に手にする魔導書を開き、攻撃の態勢に入った。

カムイ達が身構えると、シエンメイは魔法で攻撃を仕掛けてきた。シエンメイの魔法を咄嗟にラクスが防ぐと、シエンメイの前に立ち塞がり、カムイ達に叫ぶ。

「先に行け！後から追い付く！」

「でも！」

「この戦い、長引けば増援が来る危険がある・・・下手に全員で戦って囲まれるよりマシだ」

ラクスはそう言うのと、シエンメイにディアブ羅斯を振るうとシエンメイは防ぎ、ラクスに攻撃をするがラクスは避けてまたシエンメイに攻撃する。

「ラクスさん！」

「カムイ。此処は彼を信じて先に進みましょう。彼の言う通り、相手がお母様だけとは限らない・・・下手をしたら、ハイドラの手で蘇った身内を更に相手にする事になるかもしれないわ」

アクアは辛そうな表情でそう言うのと、カムイはアクアの言葉に頷くしかなかった。

「ラクスさん、必ず・・・追い付いてください」

「分かっている・・・私を、俺を誰だと思ってるのですか？俺は・・・暗夜の懐刀、ラクスだ。負ける通りはない」

ラクスは素でそう返すと、再びシエンメイに向かって行った。その姿をベルカは見て驚くしかなかった。

「(彼が素の言葉を使うなんて・・・貴方は本当に私の知っているラクスなの?)」

臣下になってから敬語で喋っていたラクスが急に素になった事にベルカの中に不安を感じた。

どんな状況だろうと、酒で溺れたりしない限りは素の姿を見せたりせず、本当にラクスなのかと疑ってしまったのだ。

「ベルカさん！」

「ッ!?!。すぐに行くわ」

ベルカはカムイの叫びに促されて不安の中、走って奥に行ってしまった。

激闘

カムイ達を先に行かせたラクスはシエンメイに斬り掛かった。

シエンメイはラクスのディアブロスを避けると、魔法攻撃を行い、ラク스에襲い掛かる。

ラクスはディアブロスで防いだり、避けたりしつつシエンメイに接近すると、ディアブロスを振るい、シエンメイは魔力を帯びた手で受け止めると、ラクスを投げ飛ばした。

「ぐッ・・・！」

「あら、随分と鈍った物ね？ 貴方の剣はもっと、人を殺す事に特化していたわよ」

「ちッ・・・！」

ラクスはシエンメイの指摘に苛立ちながらシエンメイに斬り掛かる。

ラクスとシエンメイの戦いは激しさを増して行き、魔法の力とディアブロスの力は戦場を大きく破壊していく。

「ふふ、本当に鈍った物ね・・・何時もの貴方なら私なんて軽く斬り捨ててしまう程に強いのに、どうしてかしら？」

「さあな・・・だが、俺は俺、私は私の戦いをするだけの事。人を斬り捨てるだけの俺はもういない、訳ではないが・・・今、此処にいるのは仲間を守る為にこの剣を振るう一人で二人の男だけと言っておう」

ラクスはディアブロスを構えてシエンメイと向かえ合うと、シエンメイはラクスの尋常ではない力を感じ、怯んだ。

「・・・行くぞ、シエンメイ！」

「ッ!?!」

シエンメイはラクスの鋭い殺気を感じた瞬間、ラクスが既に目の前におり、ディアブロスを振るっていた。

シエンメイはそれを避けた瞬間、腹の辺りに痛みを感じて見てみると、腹に暗器が刺さっていた。

「これは・・・!?!」

「久しぶりに使ったな・・・これは俺が暗殺者としての愛用の暗器だ。お気に召してくれましたかな？」

「・・・随分と卑怯な戦いね。騎士が剣や槍以外の得物を使うなんて」「俺は貧民出身。元より騎士としてのプライドは・・・皆無。あるのはただ、人を殺すセンスだけだ」

ラクスはディアブロスと暗器を構えてシエンメイに対峙し、シエンメイは痛む傷に耐えながらまた来るであろう不意討ちに備えていた時、今度は洗練された剣術がシエンメイを襲った。

シエンメイは避けると、また暗器による攻撃があつたがそれをシエンメイは防いだ。

だが、それはラクスのフェイントでシエンメイにディアブロスによる一撃を叩き込んだ。

「ぐッ!」

シエンメイは何か防いで距離を取ると、魔法をラクスに向けて連続で放った。

ラクスは連続で放たれた魔法を見て、素早い動きで魔法を避けると暗器を三本投げつけてシエンメイに当てた。

シエンメイは魔導書を痛みのみあまり落とすと、倒れ込んでしまい、ラクスがその気を逃さずにシエンメイの魔導書を持つ腕をディアブロスで突き刺して使い物に出来なくした。

「これで、もう魔法は使えまい。貴方の、お前の敗けだ」

「・・・そうね」

シエンメイはもう諦めたとばかりにそう言うと、ラクスはディアブロスを抜いてシエンメイの首に刃を当てた。

「・・・何か、言い残す事は？」

「じゃあ、冥土の土産に一つだけ聞かせて。貴方、人格を二つも持つてるけど、どっちが本命なの？」

「そうだな・・・今、話している私が本命だ。俺と名乗るのは私の影、本来なら表には出せないからな」

「そう・・・久々に楽しかったわよ、二人のラクス。娘の事を・・・頼むわよ」

シエンメイはそう言つて消えて行くと、ラクスはディアブロスと暗器を納め、カムイ達を追つて行つた。

償い

ラクスはシエンメイを下し、カムイ達の元に急いで走って移動していた。

道中、何度も戦いになったがラクスは構わず凧ぎ払い、突き進み続けると、広い広間へと出た。

「此処は・・・まるで闘技場だな」

ラクスはそう呟くと辺りを見渡しながら移動をしていた時、前から斬撃が襲い掛かってきた。

ラクスは咄嗟に避けて斬撃の飛んできた方を見ると、そこにいたのは。

「あ、貴方様は・・・！」

「久しぶりだな・・・ラクス」

そこにいたのはかつて、ラクスの考えを変え、終わり無き後悔と懺悔の連鎖を作った原因でもあるスメラギ本人がそこにいた。

「まさか、貴方様まで・・・」

「我は透魔竜ハイドラ様の眷属として蘇った・・・ラクス。あの時、我をガロンと共に不意を突いてで討ち取りおったが・・・お前自身の力はどれ程の物かを見せて貰おうか」

スメラギはそう言って二本の刀を構えてラクスと対峙した。

ラクスはディアブロスを抜くと、スメラギと同じく対峙する。

「・・・私は、あの時の事に不意目がある。だが、スメラギ殿がハイドラに屈したのなら容赦はしない！」

「その意気だ！行くぞラクス!!!」

スメラギはそう言って二本の刀を巧みに操りラクスに斬り掛かる。

ラクスはスメラギの激しい剣技に押されるが、負けじとディアブロスを振るって対抗する。

剣の達人同士の戦いは激しく、一步も退かない戦いにスメラギは笑っていた。

「強くなったものだな！イズモ公国であったあの時のガラの悪い若造とは思えんわ！」

「ガラが悪いとは失敬な！これでも血を滲ませる程に努力してきたんですよ！大切な者を守る為に！」

ラクスはそう言ってディアブロスを振るい、スメラギは二本の刀でディアブロスを受け止めると、鏑迫り合いとなった。

「確かにお前は強くなった！だが、迷いがあるな！」

「迷い？」

「そうだ。貴様は我と戦う事を心の何処かで躊躇している。あの時の事をまだ悔やんでいるのか？」

スメラギの指摘にラクスは何も言い返せなかった。

ラクスの心の奥底にはスメラギを殺した不意目が今でも残っており、またカムイとリヨウマ達から父を奪う様な行為をして良いのかと迷っていた。

「私は……」

ラクスは迷う素振りを見せた時、鏑迫り合いはスメラギによって終わり、ラクスはスメラギに頬を殴られて吹き飛ばされた。

「迷うなラクス！貴様は何の為にその不意目を持ちながらもカムイ達と共に戦う！守る為に戦っているのだろう……迷う事なく我を斬り、仲間を守り通して見せよ！」

スメラギの激にラクスは迷いが消え去った。

仲間、家族を守る為にスメラギを倒す……ラクスはフラフラとしながらも立ち上がり、ディアブロスを構えた時、向こうから足音が鳴り響いた。

「ラクスさん！」

「カムイ様……」

やって来たのはカムイと仲間達で、カムイ達は加勢しようとした時、スメラギの怒号が響く。

「ラクスに助太刀は無用！これは我とラクスの戦い……なんぴたりとも邪魔はさせん！」

「カムイ様。私からもお願いします……過去と決着を着けたいんです」

ラクスの願いにカムイは迷うが、カムイの肩をリヨウマが静かに置いた。

「・・・やらせてやってくれ。ラクスとの戦いが父上の願いなら叶えてやりたい」

「・・・分かりました。ラクスさん、気を付けて下さい」

カムイの了承を得たラクスは再びスメラギとの戦いを始めた。

一進一退の攻防が続き、互いの技をぶつけ合う中、遂に決着が着く一撃をラクスが放った。

スメラギの刀をあしらい、胸にディアブロスを突き立てられたスメラギはゆっくりと倒れ付した。

「・・・本当に、強くなりおつて」

「スメラギ殿・・・！」

ラクスはスメラギは抱き抱えた後、カムイとリョウマ達がスメラギの元へと走ってきた。

「父上・・・！」

「リョウマ。大きくなった物だ・・・タクミも、ヒノカも、サクラも、

カムイも・・・全員、大きくなったな・・・」

「お父様・・・私は・・・！」

「カムイ。後悔はするな・・・この戦いで倒れ、再び死ぬ事に悔いはない・・・お前達の成長を見ただけでも、幸せだ・・・」

スメラギの言葉にカムイ達は涙を流し、悲しむ。

「ラクス・・・」

「はい・・・」

「もう、後ろを見るな・・・お前には道を照らす仲間を得た・・・何も恐れず、悔やむ事はもう・・・しなくなも良い・・・」

スメラギはそう言った後、息を引き取り、泡となって消えた。

カムイ達はスメラギの死に暫く悲しんでいたが、カムイは立ち上がった。

「・・・行きましょう。もう、二度とこんな悲しい戦いをしない為に」カムイがそう言い終わると、仲間達は全員頷いた。

カムイは少し先に進んだ場所にある大きな両開きの扉の前に着いた。

「此処に、ハイドラとマフーが・・・」

「覚悟は出来ていますか？」

ラクスの問いにカムイは頷くと、ラクスは先行して扉を開け放ち、ハイドラとマフーのいる玉座へと足を踏み入れた。

「来たぞ、マフー……！」

「ようやく来たか、ラクス」

そこにいたのは玉座に座るマフーが待ち受けていた。

遂にカムイ達は、ハイドラとマフーとの決戦に入ったのだった。

暗黒司祭の双竜

透魔王城の玉座の間に入ったカムイ達はマフーと対峙した。

マフーは玉座に座りながら不適に笑い、カムイ達を見ている。

「マフー……！」

「ククク……ラクス。そして、星の光を手にした愚か者共……よく来たな」

「マフー。今日こそ、貴様を葬ってやる！カムイ様とマークス様達とリヨウマ様達、そして仲間達や子供達の未来の為に！」

ラクスはディアブロスを抜いてマフーと対峙し、カムイ達も武器を構えた。

「やはり挑むのか……一様聞いておこう。ラクス、我が元に戻る事はもう、ないのだな？」

「当たり前だ！貴様の行った行為で何れだけの悲しみが作られたか分かっているのか！」

「……ふん、そんな小さな犠牲にそこまで感情を出すとは」

「小さな犠牲？貴方はそんな風に考えていたのですか！」

マフーの言葉にカムイは激昂すると、仲間達も怒りを露にする。

「我が目的の為に手段は選ばん。世界を我が手にする為にはな」

マフーはそう言つて腕を上げると、マフーの後ろにある仮面の更に奥底から大きな二体の細長い竜が現れた。

黒の邪悪な雰囲気を出す竜と白の何処か神聖な雰囲気を出す竜の姿にカムイ達はたじろぐ。

「さあ、ギムレー！ナーガ！奴等を喰らえ!!!」

「畏まりました、マフー様」

ギムレーとナーガはマフーの命令を受けてカムイ達に襲い掛かってきた。

巨大な体格とブレスに牙等と、竜独特の武器でカムイ達に襲い掛かる中、カムイ達は冷静に対処していく。

「デカイ蛇を二匹用意して何になる！」

ラクスはそう言つてディアブロスでギムレーを斬り、ギムレーが怯

む。

だが、ギムレーはすぐに体勢立て直し、ラクスを襲う。

その頃、レイラは二体の竜との激戦の中、ナーガがあまり積極的に襲っていない事に気づいた。

レイラはナーガを観察してみると、ナーガは酷く怯えた様な雰囲気を出しており、とても凶暴そうには見えなかった。

「まさか……」

レイラはナーガを見ていた時、ナーガがいつの間にかラクスに斬りつけられて倒れた。

「……トドメだ。悪く思うなよ」

ラクスはそう言ってディアブロスを振り上げてナーガを殺そうとした。

「待って下さい父さん！」

そう言ってディアブロスを振るおうとしたラクスの前に立ったレイラにラクスは驚いてディアブロスを振るのを止めた。

「レイラ！敵を庇うなど何をしている！」

「この子、酷く怯えています。本当は戦いたくない、そう感じて止めただけです」

「こいつは奴の作り出した産物だぞ！生かす訳にはいかない！」

「無益な殺生は不要です！戦う事がないなら越した事はありません。ほら、戦いを望まないなら早く逃げて」

レイラの促しでナーガは逃げ出して行った。

それを見たマフーは驚きのあまり玉座から立ち上がった。

「俺の命令を無視して逃げただと……!?ラクス、貴様は予想外にも程がある娘を得た様だな……！」

「……こいつは良くも悪くも自慢の娘なんぞな。今みたいに情が深すぎるが、それがこいつの良い所だ」

ラクスは笑いながらレイラの頭数に撫でると、マフーはイライラしているのか拳を握りしめて残ったギムレーに命令を下した。

「ギムレー！皆殺しだ！」

マフーの命令を受けたギムレーは攻撃を……行わなかった。

寧ろ、ギムレーまで逃げてしまい、先程まで激戦だった玉座の間に静けさが広がる。

「さて・・・もう手駒はいない様だが？」

「・・・クソが。あの、馬鹿竜共め！俺を裏切って逃げたな!!!」

マフーは怒りのあまり、魔力が大量に溢れだし、地鳴りを起こした。

「クソがクソがクソがクソがクソゲがあ!!! 貴様ら、絶対に皆殺しだ!!!
ハイドラ！お前の真の姿を示し、皆殺しにしろ!!!」

マフーの叫び声が響いた時、地鳴りは更に大きくなり、王城が崩れ去った。

透魔竜ハイドラ&暗黒司祭マフー　　〈前編〉

ラクスは目を覚ますと王城は跡形も無く、辺りは崩れた城の跡だった。

「カムイ様！ベルカ！レイラ！」

ラクスは辺りを見渡してカムイ達を探すと、カムイ達はラクスとは少し離れた場所で気を失っていた。

「おい、しつかりしろ！」

「ラクスさん・・・？」

「気がついたか。私は他の者を起こして来る。戦闘の用意をするんだ」

ラクスはそう言つて他の仲間を起こしていき、戦闘の用意をする様に伝えていく。

ラクスは最後にベルカとレイラの元に来ると、起こす。

「ベルカ、レイラ。起きてくれ」

「・・・ラクス？」

「痛たた・・・父さん？」

二人は起きるとラクスは安堵した後、起き上がらせる。

「起きたばかりで悪いが戦闘体勢に入ってくれ。すぐにだ」

ラクスがそう言つた瞬間、再び地鳴りが起こり崖となっている場所から巨大目の付いた球体を加えた竜が現れた。

「な、何だ・・・この威圧感は・・・！」

「嘘・・・ありえない・・・」

「こんなの・・・こんなの勝てるわけない・・・」

ハイドラの予想外の威圧感にラクス達は怯みあがった。

圧倒的存在感を出すハイドラの前にマフーが降り立ち、ハイドラに向かつて叫んだ。

「ハイドラ！奴等に圧倒的な力を見せつけよ！今回ばかりは本気で怒ったぞ・・・後少しと言う所で手駒を二匹失った・・・必ず殺してやるぞ・・・！」

マフーはそう言うと言つて魔力が溢れだし、王城で見た魔力量は比毛を取

らなかった。

「ハイドラだけでも限界なのに、マフーまで来るか……」

「父さん、こんなの無理よ……」

「ラクス……」

弱気になっているレイラとベルカにラクスは何も言えずにいた時、ハイドラとマフーの前に立つ者がいた。

「カムイ様……!」

それはカムイ本人で、カムイは強い意思を瞳に宿して立ちはだかつていた。

「折れたりしません! 例え貴方が何れだけの力であろうと、人の悲しみや苦しみ、痛みを嘲り笑う人に世界を渡しませんしませぬ!!!」

カムイがそう言った瞬間、リヨウマとタクミとマークスとレオン、そしてラクスとレイラの神器が輝き出した。

「何だ……」

「とても、暖かい……」

ラクス達は光の暖かさで不安を忘れかけた瞬間、カムイの夜刀神が輝き、形を変えた。

「これは……」

カムイは新たな夜刀神を掲げて見ると、その刀身は輝き、どんな闇すらも打ち払いそうな程に輝き暖かった。

「これは、夜刀神……始夜」

「始まりの夜……と、言う意味ですね」

「邪悪な闇を払い、穏やかで平穏な夜を迎えられる平和を取り戻す。その意味が私の頭に入って来ます」

カムイは夜刀神を構えると、マフーは怒りと夜刀神に恐れを抱いた。

「おのれ……ハイドラー! やるんぞ!」

マフーの掛け声でハイドラは雄叫びを挙げつつ襲い掛かってきた。

「ラクス。行きましょ……決着を着ける為に」

「……そうだな。行こう、これ以上、好きにさせる訳にはいかんからな」

カムイの勇気のある行動で仲間達は再び戦う決意を抱き、ハイドラとマフーに向かって行った。

透魔竜ハイドラ&暗黒司祭マフー 〔後編〕

夜刀神の新たな姿と力を得たカムイは仲間達と共に透魔竜ハイドラと暗黒司祭マフーに戦いを挑んだ。

「愚か者共め、暗黒の闇に包まれて死ぬが良い！」

マフーはそう叫んで手に持つ魔導書を開くと、闇の魔法をカムイ達に放った。

カムイ達は咄嗟に避けると、マフーやハイドラへ切り込んでいく。

「マフー!!!」

ラクスは真っ先にマフーに攻撃し、ディアブロスを振るう。

マフーは魔法で防ぎするも、ラクスの攻撃の手は止まらない。

「くそ、しつこい奴だ！」

「貴様だけは許さん・・・お前だけは生かす訳にはいかないだよ」

ラクスはそう言ってマフーを更に攻撃するも、マフーはラクスの攻撃を弾き返し、魔法を当てようとしていた。

「父さん！」

マフーが魔法攻撃を行う前にレイラがティソナを手に駆け、マフーを攻撃するもマフーは攻撃を避けた。

「ちッ!この小娘が！」

「確かに貴方から見れば小娘でしょう。ですが、私は自分の剣の腕は・・・誰にも負けませんよ?」

レイラはティソナを構えながらそう言うと、ラクスはディアブロスを向ける。

「早く掛かってこい。私達二人、親子で相手してやるよ」

「舐めるなあー！」

マフーは魔法を唱えてラクスとレイラに襲い掛かろうとした時、マフーの後ろを空から接近し、斬りつけた者がいた。

「ぐッ・・・貴様は・・・!」

「ベルカー！」

「ラクス、レイラ。時間は作ったわ・・・早くやりなさい」

ベルカの言葉を聞いた二人はディアブロスとティソナを同時に振

り上げ、そして。

マフーを同時に切り裂いた。

「ぐわあああああああああッ!!!」

マフーは甲高い叫び声を挙げて倒れるを見てラクスは構えを解いた。

「やったか・・・?」

ラクスはマフーを見てやったかのか判断が着かない時、向こうからも大きな雄叫びが響き、巨大な姿をしていたハイドラが倒れ泡となつて消えていた。

「ハイドラが・・・倒された」

「父さん!やったのですね!」

「そうみたいだな・・・ッ!」

ラクスはマフーの方を見ると、マフーは攻撃を諸に受けていた筈なのに起き上がった来たのだ。

傷はみるみると癒えていき、完全に塞がれた。

「くそ・・・これで終わったと思うなよ・・・まだ、終わりは・・・!」
マフーがそう言った瞬間、無数の鎖が現れマフーを締め付け始めた。

「な、何だ!?!」

マフーは抗うが鎖は更に締め付けていき、マフーを捕らえる。

「どうなっている！くそツ！離せ！やめろおおおおおおおツ
!!!」

マフーは鎖に引き摺られていき、マフーの魔導書に飲み込まれる様に引き摺られてマフーの体は跡形もなく魔導書に飲れた。

「何だっただんだ・・・？」

「分かりません・・・」

二人は啞然としながらも、ラクスは魔導書を手に取り見てみると、魔導書は禍々しい雰囲気を出しており、ラクスは顔をしかめた。

「とにかく、終わった・・・何もかも・・・何故、まさかはこの様な呆気の無い終わり方をしたのは知らんが・・・もう二度とこの魔導書を触れられる様な事が無いようにしておかなければな」

ラクスはそう言つてマフーの魔導書をしまうと、レイラがラクスに問う。

「戦いは終わりました・・・これからの事はどうしますか？」

「分からん・・・だが、ベルカとお前が居てくれれば私はそれで満足だと言つておこう」

ラクスの言葉にベルカとレイラは微笑むと、向こうからカムイが手を振つてラクス達を呼んでいた。

「さて、我らのリーダーが呼んでいる。行こうか」

ラクスはそう言つてカムイ達の元に向かう。

戦いは終わり、多くの悲劇が繰り返された世界にやっと、時間の針が戻る事なく進み始める事となった。

受け継がれし血

透魔王国での戦いを終えたカムイは、ハイドラやマフーが無き今の王無き透魔王国の新しい透魔王として即位した。

血筋的にも正統性のあるカムイなら透魔王国を正しく導き、暗夜と白夜の架け橋となるとマークス達とリヨウマ達で話し合った結果だ。

暗夜王国はガロン亡き今、マークスが統治者として暗夜王となった。

最初、暗夜の民は不安に駆られていたがマークスが統治者として相応しい成果を挙げていった事で不安は徐々に解消され、貧富の差も徐々に縮まっている。

白夜王国は戦争による傷を癒し、復興を目指して透魔と暗夜の二国と交友し、支援を受けつつ国の復興へと努力し、新たな白夜王となったりヨウマはスメラギやミコトの名に恥じない統治者となった。

この三国は互いに手を取り合い、助け合う関係に人々は三国時代と呼び、新たな平穩の時代に喜んだ。

三国時代と呼ばれる時代となった中、ラクスは国があんてしてから腹心の座から退こうとするも、マークスやレオンに止められて原役を続行している。

「全く・・・マークス様達には困った物だ。人手がないからと私を留めるとは」

「当たり前でしょ父さん。父さん程、仕事の出来る人はそうそういないわ」

「とは言え・・・子育ての真っ最中のお前にまで仕事を回されるのはな」
レイラは透魔王国の戦い以降、好意を寄せていたマクラスからプロポーズを受け、結婚している。

プロポーズとは言っても半分はレイラが強引に迫った物だが、マクラスとレイラの間の子が産まれている。

「出産の時・・・どんな思いをして母さんが産んでくれたのか分かった気がするわ」

「あの時、ベルカが痛みで声を挙げてた時は本当に気が気でなかった

ものだ……」

「……この平穏な世の中。いつまでも続いて欲しいです。ずっと……争う事がない程に……」

「それは無理だ……人はいつかまた武器を取り、争い殺す。この世は常に戦乱の時代と平和の時代が交互に繰り返され、人間はその度に学ぶ……とても残酷な物だが時として戦乱も必要だと言う事だ……人の愚かさを見据える為の鏡として」

ラクスの言葉にレイラは苦笑いしつつ仕事をを行う。

「それでも、人が争う様な事はさせません。例え、戦乱の時代が必ず来るとしても……その時代が先伸ばしになる様にしてみせます」

レイラの言葉にラクスは微笑む。

「相変わらず、優しいな……」

「父さんの子ですから」

二人はまた笑った後、仕事を再開する。

これから来る、平和の為に……

嵐で辺りが暗く強風と雨に曝される城に、蝋燭の火のみで本を読んでいる少女がいた。

少女は本を読み終えると、本を閉じた。

「争う事がない様に……か。それは、無理でしょね」

少女はそう言つて本を本棚に戻すと、溜め息をついた。

「私は、ご先祖様に顔向け出来ません……私はその願いを、思いを現実させる程の力は……」

少女は拳を握りしめた時、扉がノックされ兵士が入って来た。

「メリア様。エメリナ様がお呼びです。軍縮に関するの相談だと」

「……分かったわ。エメリナ様にすぐに行くと言えて」

メリアの命令を受けた兵士は立ち去ると、メリアはまた溜め息をついた。

「やるしかないわね……例え、力及ばなくてもせめてラクスお爺様の

名に恥じる事が無いようにしないかね」

メリアはそう呟くとエメリナの元に向かった。

ラクスのいた時代が神話とされる程の月日が流れた時代の中、ラクスの血を引く者がまた物語の針を動かす時が近づいているとは知らず……。

外伝 白夜ifルート編 光に導かれ

夕日の照らされる白夜平原にて、暗夜王国と白夜王国による戦争が始まっていた。

両者は互いに力を振るい合い、一步も引かない戦いを行う。

そんな中、暗夜の王女であり白夜の王女でもあるカムイは両国の兄妹達に戻ってきて欲しいと懇願されていた。

カムイは迷った結果、白夜に着く事にし、暗夜の兄妹達と対峙し、白夜の兄妹と共に戦闘を開始した。

乱戦の中にはガロンの騎士でもあるラクスの姿もあり、カムイはラクスと対峙する。

「ラクスさん……」

「残念だカムイ様……まさか貴方が裏切るとはな……」

「私は、暗夜王ガロンのやり方が正しいとは思えません……だから、私は白夜に着いたままでです」

「確かにやり方は間違っている……だが、そうでもしないと暗夜の民が飢え死にするだけの事。侵略無くして暗夜の飢えは防げない」

ラクスはそう答えるとカムイは押し黙るも、負けじとラクスに言う。

「だからと言って血を流さなくても良いじゃありませんか……互いに仲が悪いのは知っています。ですが、争いを避けて通る事は出来た筈です！」

「ああ、出来るさ。だが、そんな簡単な事が今の暗夜には出来ないから暗夜は侵略に走る。飢え死にから避けて通る為に……肥えた土地、光ある土地を少しでも得ようとする」

「なら私はそれを正して見せます。簡単な事ではありません……ですが、変えようと思わなければ変える事などできませんから」

カムイの言葉にラクスは埒が明かないと考え、ディアブロスを振るおうとした時、カムイの言葉でそれが止まる。

「だからラクスさん。私と、一緒に白夜に行きませんか？」

ラクスはその言葉に動揺するも、カムイを小馬鹿にする様に鼻で笑う。

「私が白夜に……？ふざけるのも大概にしろ。私はお前の父の仇だぞ」
ラクスはそう言うと、カムイは夜刀神を降ろすとラクスに語り掛ける様に言う。

「私は……思い出したのです。貴方は父の仇です。しかし、それと同時に命の恩人でもある事を」

「ッ!？」

「貴方はお父様を殺した後、ガロンが私を殺そうとしてくるのを見て庇ってくれた事、お父様を失った悲しみを抱えていた私を励ましてくれた事も……私は、思い出しました」

カムイはそう言ってゆっくりと近づき、ラクスに手を差し出した。
ラクスはそれを見て困惑していると、カムイは真剣な瞳でラクスに告げた。

「ラクスさん。私と一緒に来てください。私はまだ無力と言えますが、必ず貴方を後悔させない程の器になります。貴方の強さと知恵を、私に貸してください」

カムイがそう言うと、ラクスは迷ってしまう。

ガロンには恩があるが、国の方針に不満を感じているのは嘘ではない。

カムイは暗夜を裏切って白夜に着こうとしているが、元々は白夜の王女であるカムイを裏切り者と言つてもしようがないと気付いた。

ラクスは迷いに迷った結果、遂に結論を出した。

「……分かった。貴方様に着いて行こう」

「本当ですか！」

カムイはラクスが白夜側に着くと聞いたが、ラクスはディアブロスをカムイに向けて言い放った。

「だが、もしカムイ様の行いが暗夜の民、そしてマークス様達の為にならないければ……私は貴方の首を貰い受ける。それでよろしいなら着いて行こう」

ラクスの条件にカムイは少し動揺しつつも、領くとラクスはディアブロスを肩に背負って暗夜軍の陣を見る。

「では、決まりです。さっそく敵を追い散らしに行きます」

ラクスはそう言って暗夜軍に向かって突っ込んだ。

その頃、マークスはリヨウマとの激しい一騎討ちを繰り広げていた時、暗夜兵が慌ててマークスの元に伝令としてやって来た。

「マークス様、一大事です！ラクス卿が寝返り、我が暗夜軍を攻撃しております！」

「何だと!？」

マークスはそれを聞いてラクスの寝返りに驚愕していた。

まさか自身の父であるガロンの右腕的働きをするラクスが白夜に寝返ったと夢にも思わなかった。

戦っていたリヨウマも戦う手を止めて驚く程、ラクスの寝返りは予想外で、場は混乱の渦に陥っている。

「くッ……一体、どの様な手段でラクスを……！」

「敵の王族カムイの説得によると、寝返りを宣言したラクス卿の近くで聞いていた兵士が目撃しておりました！」

マークスはそれを聞いてまた驚愕すると、戦いが不利になった事を悟った。

ラクスは暗夜軍副官として従軍し、マークスは一騎討ちをしている為に指揮をラクスに任せていた。

その為、ラクスの寝返りで指揮系統を失った暗夜軍は大混乱となり、更に白夜軍とラクスの猛攻で次々と討たれていく。

「致し方ない……全軍撤退！リヨウマ殿、この一騎討ちは預けるぞ」マークスはそう言った後、馬を走らせて撤退していく。

暗夜軍は続々と撤退していき、リヨウマも追撃は行う事なく、白夜平原での戦いはラクスの寝返りで白夜軍の勝利となった。